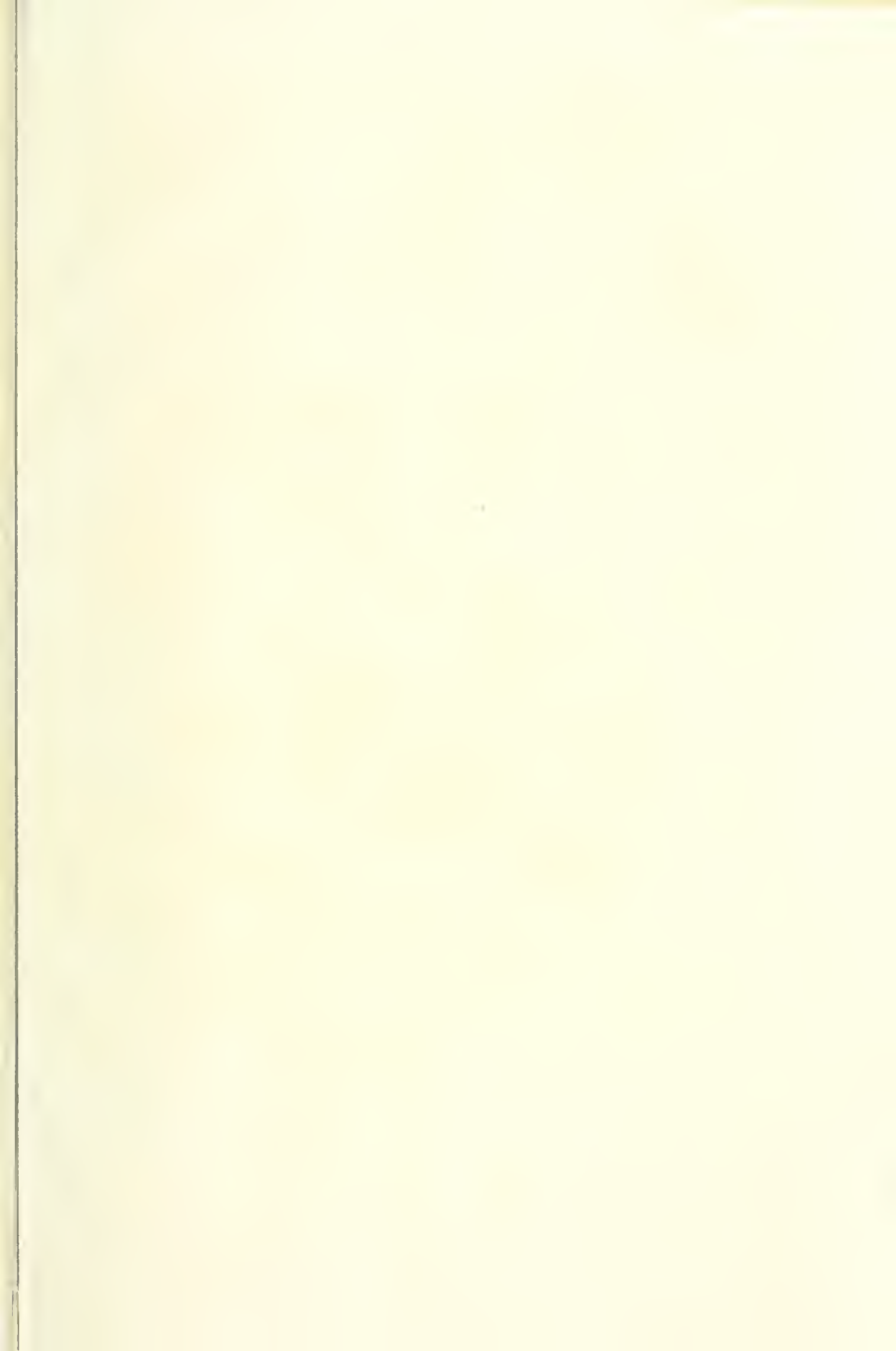
水上瀧太郎全集

九巻

大正十年四月五日
故岡田三郎助氏撮影
同氏アトリエにて

「貝殻追放」最初の原稿
（故南部修太郎氏藏）

貝殻追放

一

はしがき

古代希臘アゼンスに於ては、人民の快とせざるものある時、其の罪の有無を審判することなく、公衆の投票によりて、五年間若くは十年間國外に追放したりといふ。牡蠣殼に文字を記して投票したる習慣より貝殼追放の名は生れしとか。

今日人は此の單純野蠻なる審判を吾等には無關係なる遠き代のをかしき物語として無關心に語り傳ふれども、熟々惟みるに現在吾々の營める社會に於ても、一切の事總て貝殼の投票によりて決せらるるにはあらざ

るか　厚顔無智なる彌次馬が、その數を賴みて貝殼をなげうつは、敢てアゼンスの昔に限らず、到る處に行はると雖、殊に今日の日本に於てその甚しきを思はざるを得ず　その橫暴に苦しみつつ、手を束ねて追放を待つは、潔きには似たれどもわが生身の堪ふるところにあらず、果して多數者と意嚮を同じくするや否やはしらずといへども、如かず進んで吾も亦わが一票を投ぜんには。（大正六年冬）

目次

新聞記者を憎むの記

大正五年秋十月。

八月の中旬に英京倫敦を出た吾々の船は、南亞弗利加の喜望峯を廻り、印度洋を越えて、二ヶ月の愉快な航海の終りに、日本晴といふ言葉が最も適確にその色彩と心持とを云ひ現す眞青な空を仰いで、靜な海を船そのものも嬉しさうに進んで行く。左舷には近々と故郷の山々が懐を開いて迎へてゐる。自分は曉から甲板に出て、生れた國の日光を浴びながら、足掛け五年の間海外留學の爲に遠ざかつた父母の家を明瞭に想ひ浮べて欣喜した。

勿論自分は後にして來た亞米利加、英吉利、佛蘭西に樂しく過した春秋を回顧して、恐らくは二度とは行かれないそれらの國に、強い悔恨と執着を殘したことは事實であつた。けれども、過ぎ去つた日よりも來るべき日は、より強く自分の心を捕へてゐた。常に晴れわたる五月の青空の

心を持ち、唇を嚙む事を知らずに、溫い人の情愛に取圍まれて暮す世界を描いてゐた。而してその光明と希望に滿ちた世界を、形に現したのが目前の朝日の中に聳ゆる故國の山河であると思つた。

　船はもう神戸に近く、陸上の人家も人も近々と目に迫つて來た。昨夜受取つた無線電信によると、九州から遙々姉が出迎ひに來てくれる筈である。東京では父も母も弟も妹も、九十に近い祖母も待暮してゐるに違ひない。その人々にも今夜の夜行に乘れば明日の朝は逢へるのである。日本人には珍しい、狡猾卑劣な表情を持つてゐない公明正大な父の顏、憎惡輕侮の表情を知らない溫情の象徴のやうな母の顏が、瞭然と目の前に並んで浮んだ。常に何等か自分の心を打込む對象が無くては生きてゐる甲斐が無いと思ふ自分にとつて、自分程立派な兩親を持つ者は世界に無いと思ふ信念に心のときめく時程純良な歡喜は無い。その父母の家に明日から安らかに眠る事が出來るのだ。幾度も／＼甲板を往來して足も心も踊るやうに思はれた。

　午前九時、船は遂に神戸港內に最後の碇を下した。船の廻りに集つて來る小蒸汽船の上に姉と姉の夫と、吾々の家の知己某氏夫妻が乘つてゐて遠くから手巾を振りながらやつて來た。約三年間音信不通になつてゐた梶原可吉氏も來てくれた。久々ぶりの挨拶を濟してから、此の二月の間、

寒い夜、暑い夜を過して來た狹い船室にみんなを導いて、心置き無い話をし始めた。

其處へ給仕が、二枚の名刺を持つて面會人のある事を告げに來た。大阪朝日新聞と大阪毎日新聞の記者である。勿論自分は面會を斷るつもりだつた。折角親しい人々と積る話をしてゐるところへ、見も知らぬ他人の、殊に新聞記者が割込んで、材料取りの目的で、歐洲の近狀如何などといふ取とめも無い大きな質問をされては堪らないと思つた。然し自分が給仕に斷るやうに賴まうと思つた時は、既に二人の新聞記者が船室の戸口から無遠慮に室内を覗き込んでゐた。二人とも膝の拔けた紺の背廣を着て、一言一行極端に粗野な紳士であつた。勿論吾々の樂しき談笑は、此の二人の侵入者の爲に中斷されてしまつた。彼等は是非話を承り度いと、殆ど乞食の如く自分の前後に立ふさがる。

豫て神戸横濱の埠頭には此種の人々がゐて、所謂新歸朝者を惱ますとは聞いてゐたが、それは知名の人に限られた迷惑で、自分の如きは大丈夫そんなわづらひはないと思つてゐたので、同船の客の中に南洋視察に行つた官立の大學の敎授のゐる事を告げて逃げようとした。けれども彼等は承知しない。五分でも十分でもいゝから自分の話を聞き度いと言ひ張る。話は無い、話し度い事なんか何にも無いと云ふと、そんなら寫眞丈撮させてくれと云ひ出した。

これは一層自分には意外な請求だつた。誰人も名さへ知らない一書生の寫眞を新聞に揭げて如何するのだらう、冗談では無いと思つて斷つた。すると傍の姉夫婦が口を出して、寫眞を撮して貰ふかはりに談話の方は許して頂いては如何だと口を入れた。自分も之に同意した。談話より時間の短い丈でも寫眞の方が樂だし、且は此の粗野なる二紳士を一刻も早く退散させ度いと願つたからである。其處で自分は甲板に出た。梶原氏が附添になつて來てくれた。

ちやんと用意して待つてゐた各新聞社の寫眞係りか、籐椅子を据ゑ、いかにも美術的の趣向たといふやうに浮袋を側に立てかけて、扨て自分を腰かけさせた。

馬鹿々々しい事だと思つた時は、もう寫眞は撮つてゐた。それでおしまひだと思つて立上らうとすると、新聞記者は最初の約束を無視して、是非とも話をしてくれと迫つて來た。約束が違ふではないかと詰つても、平氣で、値うちの無いお低頭を安賣りするばかりである。しまひには一分でも二分でもいゝと、緣日商人のやうな事を云ひ出した。それでは五分丈約束するから、その五分間に質問してくれと云つて、自分はかくしから時計を出して掌に置いた。

二人の中のどつちが朝日の記者で、どつちが毎日の記者だつたか忘れてしまつた。後日の爲に名刺丈は取つて置いたから机の抽出でも探せば姓名は判明するが、それは他日に讓らう。兎に角

此の二人は、他人の一身上に重大な關係を惹起すやうな記事を捏造する憎むべき新聞記者であつた。

五分は瞬間に過ぎた。時計の針が五分廻る間に自分が質問された質問と、答へた返答は左の如きものであつた。

第一の問。貴下は外國では何を勉強して來ました。經濟ですか。

第一の答。私は雜學問をして來たので、何といふ一科の専門はありません。但し學校では經濟科の講義を聽講しました。

第二の問。文學の方はやりませんでしたか。

第二の答。私は學問として文學を修めた事は、日本にゐた時も外國にゐた時も、全くありません。

第三の問。今後職業を擇ぶに就ては保險事業をお擇びですか、又は慶應義塾の文科で教鞭をおとりになりますか。

第三の答。私の父は保險會社に勤めてゐますが、それも家業といふのではなく株式會社の事ですから息子も必ずその仕事をするといふ事はありません。慶應義塾になんか行つたつて教へ

る學問がありません。

第四の問。貴下の就職問題に就ての御尊父の御意見は。

第四の答。父は私の選擇に任せるでせう。

第五の問。外國の文藝上の新運動について何か話して下さい。

第五の答。別に新運動なんてものは無いでせう。日本の方がその點では新しいでせう。

恰も五分たつたので自分は最後の一句を冗談にして立上らうとした。するとたつたもう一つ質問し度いと云つて引止められた。

第六の問。今後も創作を發表しますか。

第六の答。氣が向けばするでせうが、兎に角自分なんか駄目です。以前書いたものなんか考へても冷汗です。

傍から梶原氏が、あれは旣に作者自身が葬つたものであると、自分の小說集「心づくし」の序文を引いて說明してくれた。

右の如く簡短な質問に對する簡短な返答で苦痛の五分が過ぎた時、自分は後には何も氣がかりな事の殘つてゐない爽快な心持で姉や知人の群に歸つた。梶原氏は、自分の新聞記者に對する應

對が意外に練れてゐると云つて稱讃し、これを海外留學の賜とする口吻をもらした。君はなかなかうまいなあ、と云つて彼は自分の肩を叩き、自分も、うまいだらう、と云つて笑つた。

船の人々に別れを告げ、上陸してからは先づ湯にでも入つて、ゆつくり食事でもしたらよからうといふ人々の意見に任せて、神戸の町の山手の或料理屋につれて行かれた。姉夫婦は今夜大阪まで、梶原氏は京都まで同行しようと云つてくれた。

事毎に新鮮な印象を受ける久々の故郷は、自分を若々しくした。姉は自分をつくづく見て、何時迄たつても小僧々々してゐると云つて笑つた。

樂しい食事の後で、自分は姉夫婦と話しながら夕方迄その家に寢轉んでゐた。新聞記者の事なんか全然忘れてゐた。

三宮驛から、夕暮汽車に乗る時に、何氣なく大阪毎日新聞の夕刊を買つた。その二面に麗々と自分の寫眞が出てゐて「文學か保險か」と大きな標題の横に「三田派の青年文士水上瀧太郎氏歸る」と小標題を振つて、十七字詰三十八行の記事が出てゐた。その中に書いてある事は自分が想像もしなかつた意外千萬なもので、殊に自分を驚かしたのは文中所謂青年文士の談話として、自分が廢嫡されるかどうかといふ問題を自論じてゐる事であつた。

今此處にその長々しい出たらめの新聞記事を揭げて、一々指摘してもいゝけれど、第一の問題たる廢嫡云々が、自分の如き我家の四男に生れたものにとつて、如何して起るかと反問する丈でも充分その記事の根據の無い事を證明する事が出來ると思ふ。自分には尙二人の兄が現存して居る。その中の一人は既に分家して一家の主人になつてゐるけれど、當然我家を相續すべき長兄を差措いて、どうして自分が廢嫡される資格があらう。自分はこれを廢嫡される權利と云はう。この廢嫡される權利を獲得するには、先づ我家の嫡男なる長兄が廢嫡されてゐなければならない。あまりの事のをかしさに自分は抱腹して、その新聞を梶原氏及び姉夫婦に見せた。

何處からどういふ關係で、自分に廢嫡問題なるものを結び付けたかは、その時はあまりの馬鹿々々しさに存外氣にもかけなかつた。自分はたゞその記事の、今朝甲板上の五分間に取交した問答に比べて、あまり手際のいゝ嘘であるのを憤つた。しかし故意と機嫌よく、些末な記事の誤りのみを人々に指摘して笑つた。

第一にをかしかつたのは「氏は黑い頭髮を中央から劃然と左右に分け紺セルの背廣服を着けたり」と書いてゐるが、自分は曾て頭髮を中央から分けた事は一度もない。その日も中央から分けてゐなかつた事は、該記事の前に揭げた寫眞でもわかるのであつた。「劃然と分け」といふのも事

實相違で、自分は人々に自分の頭を指さし示して笑つた。日本風の油でかためて櫛の目を劃然と入れた分け方を嫌つて、自分は油無しのばさばさの髮を、故意と女持の大きな櫛で分けてゐる。「紺セルの背廣服を着けたり」とあるが、自分はその日黑羅紗の服を着てゐた。

記者は先づ自分と父との間に職業問題に就き「意志の疎隔を生じ居れりとの風說」を糺したと云つてゐるが、彼は自分にむかつて、そんな質問をした事は無い。自分は父の寵兒ではあつても父との間に意志の疎隔などを生じてはゐなかつた。しかし狡猾なる記者は、その失禮な質問に對して、自分が平氣で返答をしてゐるやうに揑造した。「併し私の趣味が既に文學にあるとすれば保險業者として私が父の如く成功するや否やは疑問です」と洒々として新歸朝の靑年文士は述べてゐる。

幸か不幸か自分は其の後某保險會社の一使用人として月給生活をする事になつた。自分と雖も會社に於て、出世をするのはしないよりも結構である。それが「成功するや否やは疑問です」などゝふてくされた事を云つてゐると思はれのは、第一出世の妨げであり、同僚諸氏に對しても甚だ心苦しい次第である。

次に上述の廢嫡問題が出て、その廢嫡を事實にしようと運動してゐるのは「三田文學」の連中で、

青年文士はその運動者に對して「私はその好意を感謝するものです」と云つてゐるのである。
想ふに此の記事の筆者は極めて想像の豐富な人であらうと思ふ。第一文章がうまい上に、知らない人が讀むと如何にも眞實らしく思はれる程無理が無く運んでゐて、此種の記事にばつきものの誇張を避けたところなどは、嘘詐の記事では黑人に違ひない。
殊に最後へ持つて來て「『父の業を繼いで保險業者になるか友人の盡力によつて文學者になるかそれは歸京の上でなければ分らず未だ未だ若い身空ですからね、一向決心がつきません、ハハハハハ』と語り終つて微笑せり」といふ一文で結んだところは、全然自分の會話の調子とは別であるが、知らない人には面目躍如たりだらうと思はれる。若しこれが他人の身の上に起つた事だつたら、自分も此の記事を信じたに違ひない。自分は此の如き達者な記者を有する大阪毎日新聞の商賣繁昌を疑はない。
自分はいかにもをかしな話だといふやうにわざと平氣な顏をして人々にその記事を見せたが、梶原氏も姉夫婦も、ひどく眞面目な顏をして自分を見つめてゐるのであつた。
汽車が大阪へ着くと姉夫婦は其處で下りて、自分は梶原氏と二人で殘つた。さうして京都迄の小一時間に所謂水上瀧太郎廢嫡問題なるものの由來を同氏によつて傳へられた。

此の無責任極まる記事は始め東京朝日新聞に出たのださうだ。憎む可き朝日新聞記者の一人は、我家を訪ひ、父に面會を求めて、その談話と共に、無理に借りて行つた自分の寫眞とを並べ掲げて世人の好奇心を迎へたのださうだ。

自分はその朝日の記事を知らない。しかし元來自分が廢嫡の權利を持つてゐない限り問題となる可き事柄で無いから、我が父の談話といふのも勿論恥を知らぬ記者の捏造したものに違ひない。けれども、その記事を讀む人間の數を思ふ時、自分は平然としてゐられなかつた。

殊に自分を怒らしたのは、その朝日新聞の下等なる記者が、老年病後の父に對して臆面も無く面會を求め、人の親の心を痛める事を構へて、之をうら問うたといふ一事である。自分の歸朝期日の豫定より早くなつたのも、父の健康が兎角勝れず、近くは他家の祝宴に招かれた席上昏倒したといふ憂ふ可き事の爲であつた。物質的に酬はれる事の極めて薄かつたにも拘らず、日本の實業家には類の無い、責任感の強い父が一生を捧げた事業から退隱した時、最も父を慰めるものは吾々子等の成長であるに違ひない。その子等の一人の、長らく膝下にゐなかつた者が、幾年ぶりで歸つて來るといふ矢先に、不祥なる噂を捏造吹聽され、天下に之を流布すべき新聞紙の記事に迄されたといふ事は、親として心痛き事であると同時に、世の親に對して、如何にも無禮暴虐で

ある。彼をおもひ之をおもふ時、自分は心底から激怒した。

京都で梶原氏に別れると直ぐに手帖を取出して、先づ大阪毎日新聞に宛て、夕刊記載の記事の捏造である事、その記事を取消すべき事、その捏造を敢てしたる記者を罰すべき事を書送るつもりで草案を書き始めた。先づ目に觸れたものから、溯つて朝日の記事一讀の後は、それにも一文を草して送り詰らうと思つたのである。

自分が久しぶりで歸つた故郷の第一日は、かくて不愉快なものになり了つた。新聞社へ送る難詰文を書き終り、手帳をとぢて寢臺に入つても、安らかに眠る事は出來なかつた。

翌朝、愈々東京へ近づいて行く事を痛切に思はせる舊知の景色が、窓近く日光に輝いてゐるのを見た時、自分は再び爽かな心地で父母の家にかへりゆく身を限り無く喜んだ。口漱ぎ、顏を洗ひ、髯を剃つて、一層晴々した心持になつて食堂に入つて行つた。

何處にも空いた食卓は無く、食卓があれば必ず知らない人がゐた。つかつかと進んだのが立停つて見渡して、駄目だと思つて引返さうとすると、一隅の卓にゐた若い紳士が自分を呼び止めて、その卓に差向ひではどうだと云つてくれた。自分は喜んで會釋して席に着いた。

給仕に食品の注文をして、手持無沙汰でゐると、既に最後の珈琲迄濟んだその紳士は、いきな

り自分に向つて話しかけた。貴方は今朝の新聞に出てゐる方ではありませんかと、訊ねるのである。自分は驚いて彼の顏を見た。紳士は、かくしから一葉の新聞を出して自分に見せた。大阪朝日新聞である。

「文壇は日本の方が」といふ變な題が大きな活字で組んであつて、傍に――ズット新らしい――と註が入つてゐる。此の題を見て自分は肌に粟を生じた。世の中に洒落の解らない人間程怖しいものは無いと云つた人があるが、此の記事の筆者の如き最も洒落の解らぬ人間であらう。自分は記者兩人の愚問を避ける爲に、文藝上の新運動如何の問に對して新しいのは日本だと答へたが、その時の自分の語氣から、唯それが其場限りの冗談に等しいものだつた事は、誰にもわかる筈であつた。馬鹿に會つてはかなはないと思つた。

けれども更に考へてみると、此の記者も亦記事捏造の手腕に於ては、大阪毎日の記者に勝るとも劣らない黑人藝(くろうと)である。或は自分の言葉は、勿論まともに取る可きものとは思はなかつたが、一寸標題として人目を引き易い爲、わざとそのまゝ載せたのかもしれない。怖ろしいのは、洒落の解らない奴よりも、責任感の無い奴が一層だと思はざるを得なかつた。

此の記事によると、初めて自分の廢嫡問題なるものを捏造掲載した時の標題は「廢嫡されても

文學を」といふのであつた。淺薄な流行唄の文句のやうなこんな標題で、ありもしない惡名を書き立てられたのかと思ふと、自分の心は暗くなつた。

あまりにくだくだしい揑造指摘は自分ながら馬鹿々々しいから止めるが、日本新聞界の兩大關と自稱する毎日朝日の記者が、一人の口から出た事を、全然違つて聽取つた事實を、此の二つの記事を對照して見る人はあやしまなければならない筈だ。二人とも全然自分勝手な腹案を當初から持つてゐて、記事の大部分は、自分に面會する前に原稿として出來上つてゐたのだらうと思ふ。たゞ彼等が一致した事は、自分の黑い衣服を紺背廣だと誤り記してゐる一事ばかりであつた。毎日記者は「ハハハハハと語り終つて微笑せり」と結んだが、朝日記者は「苦し氣に語つて人々と共に上陸した」と記してゐる。人を馬鹿にした話である。二人揃つてやつて來て、二人で質問しながら、お互によくも平氣で白々しい出たらめを書いてゐられるものである。馬鹿、馬鹿、馬鹿ッ。自分は思はず叫ばうとして、目の前の紳士の存在を思つて、苦笑した。

どうも新聞記者といふものは噓を書くのが職業ですから困ります、と云ひながら、その新聞を持主に返へした。それでも貴方のお話を伺つて書いたのでせう、と若い紳士はいかにも好奇心に光る目で自分を見ながらきき出した。自分は不愉快な氣持で食事も咽喉を通らなくなつたが、箇

短に神戸港内の船中で二人の記者に迫られて四五の問答を繰返したのが、こんな長い捏造記事になつたのだと説明した。さうして肉刀(ナイフ)をとり、肉叉(フオク)をとつて話を逃れようとした。すると相手は給仕を呼んで、菓物とキユラソオを命じ、巻煙草に火をつけて落ついて話し出した。食後のいい話材を得た滿足に、紫の煙は鼻の孔からゆるやかに二筋上つた。

自分が如何に説明しても、彼は矢張り新聞の記事を信じるらしく、少くとも廢嫡問題の將來に最も興味を持つ心持をかくしてもかくし切れないのであつた。兎に角才能のある方がそれを捨てるといふのは惜しい事ですから、などと一人合點で餘計な事をいふのである。自分は苦笑しながら食事を終つた。

東京に着いて、母や弟妹や、親類友だちに久々で逢ふ時、自分はもう悄氣(しよげ)てゐた。誰しも自分を異常なる出來事の主人公と見做してゐるらしく思はれてしかたがなくなつた。あれ程心を躍らして待つた父母との對面にも、自分は合はせる顏が無いやうに思はれた。自分が東京に着く前に既に關西電話で傳へられた、毎日朝日と同じやうな記事が都下の多くの新聞に出てゐた。

その日から我家の電話は新聞社からの電話で忙しく鳴つた。玄關に名刺を出すごろつきに等しい新聞記者を一人々々なぐり倒し度くいきまく自分と、それらの者の後日の復讐を恐れる家人と

の心は共に平靜を失つてしまつた。老年の父母が、自分が憤りの餘り、更に一層彼等から意地の惡い手段を以て苦しめられる事を氣づかふのを見てゐると、遂々自分の方が弱くなつてしまつた。新聞社へ宛て書いた難詰文も破いて捨てなければならなかつた。

あまりに多數のごろつきの玄關に來るのを歎く母の乞を容れて、中の一新聞を擇んで面談し、事實を語る事を承知して、折柄電話で會見を申込んで來たタイムス社の記者と稱する者に丈逢ふ事に決めた。

二人のタイムス記者と稱する者が大きな風呂敷包を持つてやつて來た。自分は勿論ヂヤパン・タイムスと信じてゐたので、そのつもりで話をしてゐた。彼等は巧妙に調子を合はせてゐる。自分は教はりはしなかつたが、慶應義塾の高橋先生は今でもタイムスに筆を執つて居られるか、といふ問にも、然りと返事をしたのである。さうして約卅分は過ぎた。すると二人の中の一人は俄に話をそらして、實は今日は別にお願ひがあると云ひながら、その持參の風呂敷を解いて「和漢名畫集」といふものを取出し、それを買つてくれと云ひ出した。創立後幾年目とかの紀念出版たといふのである。自分は勿論斷つたが、それならお宅へお買上を願ふから取次いでくれといふので、爲方なく奧へ持つて行つた。母は買つてやつて早く歸した方が無事だと云ふのである。馬鹿

々々しい、こんな下らない物をとは思つたが、母の心配してゐる様子を見ると心弱くなつた。とう／＼自分はなけなしの小遣から「和漢名畫集」上下二冊金四拾圓也を支拂はされた。

ところが後日聞くところによると、このタイムス社は、ヂャパン・タイムス社ではなく、日比谷邊りに巣をくつてゐる人困らせの代物であつた。自分は自分の人の好さをつくづくなさけなく思ふと同時に、かゝる種類の人間の跋扈する世の中を憎んだ。

新聞雜誌の噂話に廢嫡問題の出る事は尙しきりに續いた。これよりさき大正二年の春にも、憎むべき都新聞は三日にわたつて「父と子」なる題下に、驚くべき揑造記事を掲げた事があつた。その記事の記者は自分が曾て書いた小說を、すべて作者の過去半生に結びつけて、ありもしない戀愛談迄揑造した。厚顏にしてぼんくらなる記者は、その記事の最後に、「彼は今英國のケムブリッヂにゐる」と書いて、御叮嚀にも劍橋大學の寫眞を掲げた。當時自分は北米合衆國マサチュセッツ州のケムブリッヂといふ町にゐたのである。

その都新聞の切拔を友だちの一人が送つてくれた時、自分は隨分怒つた。しかし考へてみると、あと形も無い戀愛談も、あと形もない廢嫡問題よりは、少くとも愛嬌がある丈ましであつた。自分は自分が如何に此の下等愚劣なる賤民、卽ち新聞記者の爲に、其後も屢々不快な思ひをさせら

れたかを述べる前に、ついでに出たらめの愛嬌話を添へて僅かに苦笑しようと思ふ。

大正五年十月二十七日發行の保險銀行時報といふ新聞には、二つの異なる記事として自分の事を材料とした揑造記事が出てゐる。記者はさも消息通らしい筆つきで書いてゐるのが寧ろ氣の毒な程愛嬌であるけれども、書かれた者にとつては、矢張り憎む可き記事であつた。

第一は「保險ロマンス」といふ題下に「此父にして此子」といふ標題で、例の廢嫡云々が噂に上つてゐる。その記事によると或人が例の廢嫡問題を、我父に質問したといふのである。如何に父の齡は傾いたと雖も自分の四男を嫡男だと思ひ違へるわけが無い。然るに此の記事によると、父も亦その問題を事實起り得るものとして返答をしてゐるのである。記事の揑造である事は敢て論ずる迄もあるまい。

もう一つは「閑話茶談」といふ題で、身に覺えの無い艶種である。「三田派の新しい文士に水上瀧太郎といふのがある。それにカフヱ・プランタンの（春の女）と（秋の女）が競爭でラヴしてゐたことなどは文壇では夙に誰も知りつくしてゐたが一般の世間はまだ餘り知つてゐない」といふ冒頭で、同じく廢嫡問題に言及し、最後に「それにつけても餘計なことだが、彼の派手な華やかな明るい感じを持つた（春の女）と淋しい靜かなおとなしい（秋の女）は君の歸朝したことを知つてゐ

るかどうか今は誰もその姿を見た者もない」と結んだ。

自分はカフェ・プランタンといふ家に足を踏入れたのは前後三回きりである。一體に日本のカフェに集る客の樣子が、自分のやうな性分の者には癪に障つて堪らず、殊に一頃半熟の文學者に限つてカフェ邊りで、しだらなく醉拂ふのを得意とした時代があつたが、そんなこんなで自分はカフェを好まない。プランタンといふ變な家もその開業當時友人に誘はれて、一緒に食事をした三回の記憶以外に何も無い。第一(春の女)(秋の女)などといふ女は當時はゐなかつた。これも亦自分は惚れられる權利を持つてゐないので、記事の揑造なる事は疑ひも無い。

驚く可き事は、初め憎むべき東京朝日新聞の記者の揑造した一記事が、それからそれと傳へられて、眞の水上瀧太郎の他に、もう一人他の水上瀧太郎が人々の腦裡に實在性を持つて生れた事である。此の水上瀧太郎は某家の嫡男で、その父と父の業を繼ぐか繼がないかといふ問題から不和を生じ、廢嫡になるかならないかといふ瀨戶際迄持つて來られた。勿論物語の主人公だから世にも稀なる才人である。新聞記者の語をかりて云へば天才といふものなのである。

ところが眞の水上瀧太郎は新聞記者の傳へた都合のいゝ戲曲的場景の中に住んではゐなかつた。彼は天才でもなんでもない。彼はもつたいない程その父にその母に愛されて成人した。彼が小說

戯曲を書いて發表したのは事實である。しかも曾て文筆を持つて生活しようと考へた事は一度もなかつた。彼の持つて生れた性分として、彼は身の圍に事無き事を愛し、平凡平調なる月給取の生活を子供の時から希望してゐた。勿論自分自身充分の富を所有してゐたら月給取にもなり度なかつたらう、恐らくは懐手して安逸を貪つたに違ひない。彼は落第したり、優等生になつたり出たらめな成績で終始しながら學校を卒業し、海外へ留學した。父が保險會社の社員だつたといふ事は彼の學ばんとする學問には何の影響をも持つてゐなかつた。父とも約束して、彼は經濟原論と社會學を學ぶつもりで洋行した。しかし學校の學問は面白くなかつた。學者となるべく彼はあまりに人生に情熱を持ち過ぎてゐた。時にふと氣まぐれに保險の本を買集めたり、圖書館へ通つて研究する事もあつた。しかしそれが彼の留學の目的ではなかつた。足かけ五年の年月の歐米滯在中彼が學んだ事は何であるかといふと、それは人間を愛する事と人間を憎む事である。最もはげしい愛憎のうちに現るゝ人間性を熱愛する意志と感情の育成に他ならない。彼は不幸にして他人を愛する事が出來なかつた。そのかはりにその父母兄弟姉妹を、自分自身よりももつと愛する嬉しい心をいだいて歸朝した。それだけの人間である。

自分は自分を第三者と見て、上述の如き記述をした。しかしその眞の自分を知つてゐる者は自

分以外には數人の友人の外に誰もない事實を思ふと、流石に寒い心に堪へ難くなる。一度東京朝日新聞の奸譎邪惡憎む可き記者の爲に誤り傳へられてから、自分の目の前に開かれる世界は暗くなつた。或學者は人間の愛を說いて、愛とは理解に他ならないといふ。それを愛の一部だとしか考へない自分も、無理解の世界、誤解の世界には生きてゐられない。見る人逢ふ人のすべてが、新聞によつて與へられた先入觀念で自分を見る世界が、自分にとつてどんなものであるか、恐らくは人をおとしいれる事を職とする憎む可き程淺薄低級なる新聞記者には理解出來まい。

自分を知らない人で、朝日その他の新聞の揑造記事を見た人は、殆どすべて彼の記事を眞實を語るものと思つたに違ひない。友だちの中にも、知己の中にも、彼の記事を信じた人がある。自分は屢々初見の人に紹介される時「例の廢嫡問題の」といふ聞くも忌はしい言葉を自分の姓名の上に附加された。打消しても打消しても、人は先人の誤解を忘れなかつた、甚しいのになると、自分に兄のある事を熟知してゐながら、尙且廢嫡問題が自分の身に起らんとしてゐるのだと考へる粗忽な人も多かつた。否その粗忽な人ばかりだと云つてもいい程、人々は憎む可き記者の揑造の世界に引入れられてしまつた。たとへその記事を全部は信じなかつた人も、多少の疑念をいだいて自分を見るやうになつた。自分を見る世界の目はすべて比良目の目になつてしまつた。

幸にして自分は衣食に事缺かぬ有難い身の上であつたし、幸にして奉公口もあつたから、その點は無事であつたが、若しまかり間違つたら、此の如き記事によつて人は衣食の道をさへ求め難きに至る事は、想像出來ない事ではない。

幸にして自分は獨身生活を喜んでゐるから、その點は心配はなかつたが、假りに自分が配偶を探し求めてゐるとしたら、恐らくは廢嫡問題の爲に、世の中の娘持つ程の親は、二の足を踏んだに違ひない。

要するに自分は、世間の目から廢嫡問題の主人公としての他、偏見無しには見られなくなつてしまつたのだ。多數の人間の集會の席に行くと、あちらからもこちらからも、心無き人々の好奇心に輝く目ざしが自分の一身にそゝがれ、中には公然指さして私語する無禮な人間さへある。

如何に寛容な心を持ちたいと希ふ自分も、かかる世の中に身を置いては、どうしても神經の苛立つ事を止めかねた。どいつも此奴も癪に障ると思はないではゐられなくなる。さうして自分は一日と雖も、新聞記者を憎む事を忘れる事が出來なくなつた。

自分は決して新聞記者を、社會の木鐸だなどとは考へてゐないが、彼等が此の人間の形造る社會の出來事の報告者であるといふ職分を尊いものだと思ふのである。然るに憎む可き賤民は事實

の報告を第二にして、最も挑發的な記事の揑造にのみ腐心してゐる。さうして新聞記者といふものに對して適當なる原因の無い恐怖をいだいてゐる世間の人々は、彼等に對して正當の主張をする事をさへ憚つてゐて、相手が新聞記者だから泣寢入のほかはないと、二言目には云ふのである。それをいゝ事にして強もてにもててゐる下劣なるごろつきを自分は徹頭徹尾憎み度い。同時にこれらの下劣なるごろつきの日常爲しつゝある惡行を、寧ろ奬勵してゐる新聞社主の如きも、人間社會に對する無責任の點から考へれば、等しく下劣なる賤民である。自分は單に自分自身迷惑した場合を擧げて世に訴へようとするのではない。それよりも一般の社會に惡を憎み、これに制裁を加へる事を要求鼓吹し度いのだ。

根も葉も無い揑造記事の爲に、幾多の家庭の平和を害し、幾多の人の社會生活を不愉快にし、幾多の人の種々の幸福を奪ふ彼等の行爲を世間は何故に許して置くのか。

繰返して云ふ。自分は新聞記者を心底から憎む。馬鹿馬鹿馬鹿ッ。その面上に唾して踏み躙つてやる心持で、この一文を草したのである。(大正六年十二月十七日)

――「三田文學」大正七年一月號

「文明一周年の辭」を讀みて

大正元年の秋海外の旅に出しより余の永井荷風先生に見えざる事既に久しく、昨年十月歸朝以來常にお目にかかり度くおもひながら、機を得ずして遂に今日に及びたりしが、この度「文明一周年の辭」を讀みて更に痛切に余の先生に見えざる事久しきをおもへり。

「三田の文人中近く海外より歸來せしもの文明を一覽して甚しく余が藝術家としての態度の不眞面目なるを攻撃したりと聞く」といふ一事より出發して先生の「文明一周年の辭」は起草せられしものなりとぞ。

三田の文人中近く海外より歸來せしものとは余の事なりと聞く。果して然らば余の迷惑之に過ぎず、捏造は新聞記者の仕事なりと思ひゐたるに、慮らざりき永井先生によりてかかる記事の捏造せられんとは。

余は曾て永井先生の藝術家としての態度を不眞面目なりと思ひたる事なければ從つて甚しく攻擊したる事あるべき理無し。先生は「攻擊するもの憚る處なく大に攻擊して可なり。吾人僅に破顏一笑せんのみ。」と云はるれど、曾て新聞記者の揑造記事に對しては破顏一笑したる余も、この度の揑造を基礎とする一文は、日頃我が尊敬する永井先生の草せられしものなるを以て如何に努力するも破顏一笑する事能はず、眞面目に申開きに及ばざれば心濟まず、無實の罪を負ひて默してあらんは余の堪へ得ざるところなり。

余が永井先生の御作を愛讀する事年を越えて變らず、「文明」創刊以來月の初は特に待たるる心地して、矢筈草、けふこのごろ、文反古、雨聲會の記、色なき花、支那人、腕くらべ等何れも三讀三誦し、人にむかつてこれを推稱したる事あれども不眞面目なる作品なりとて攻擊したる覺えなし。

頃日先生の所謂三田の文人、雜誌編輯の用件にて集りし席上、井川久米兩氏の間に「永井荷風論」あり、兩氏見解を異にして論爭せられし時、座に在りし余さし出口して「永井先生は自身に不眞面目がる興味をよろこべど遂に不眞面目になり得ざる事文明載する所の文章之を證して餘あり」と云へり。これ余の僞らざる感想にして、先生に此の特徵あるが爲、好んで戲文と呼ばるる

文章のかへつて沈痛悲壯の調を帶べる事具眼の士の到底否み難き事實ならずや。世上先生の態度を不眞面目なりと攻擊する者はもとより多からん、然れども余は自左迄に藝術批判の眼識低き者とは思はず、人の呼んで先生を不眞面目なりとなす時、先生の眞面目を叫んで誇らんとするものなり。然るを先生余を目して先生の態度の不眞面目なるを甚しく攻擊するものとなす、馬鹿々々しとて思ひ捨てんにはあまりに口惜く此の一文を草するに至りぬ。

乍併余が「文明」を愛讀するは一に永井先生の文章あるが爲にして、忌憚なく云へば他の諸氏の文章の多くは余の最も好まざるところのものなり。或はこれらをさして不眞面目と呼ぶ事余も亦敢て辭せざるやもしれず、先生の御說の如く「人は時として不眞面目ならん事を欲して止まず、人相寄つて談ずるや必しも口角沫を飛ばすを要せず、同志相逢うて唯笑談時の移るを忘るる事あるも亦妨げなき事」を、寧ろ當然の事として認容する余も、これらの文章を讀みては祭日の農夫の如く戲れ笑ふゲエテを想起する事思ひも及ばず、我が愛讀の「文明」の爲常に遺憾とする事を正直に記して筆を止む。(大正六年三月十日)

——「文明」大正六年四月號

「幻の繪馬」の作者

「幻の繪馬」讀後の感想是非とも申述度存居候ひし處、先頃來健康勝れず臥床勝にて到底期日迄に書上げ候事覺束なく被存候まゝ、乍殘念今回は御斷り申上候。事情右の如くに候間不惡思召被下度候。

今日小說の作家その數極めて多しと雖古典として作品の千歲に殘るべき人は僅かに二三人にとどまる事と存候が、泉鏡花先生の御作のみは何時の世に至りても紫式部淸少納言近松西鶴等の作品と共に不朽なるべき事些も疑ひ無之候。

乍併先生の御作の尊きはその豐富なる想像によりて編まれたる變化極まり無き物語の筋にはあらず、その色彩に富む繪畫的文章の妙にもあらず、實に先生の描き出す作中の人々の持つ人間至純の感情に他ならず候。換言すれば先生御自身の純粹なる感情の故に御座候。

傳へ聞くところによれば故夏目漱石先生は現代作家中の第一人者として泉先生を擧げたる由。天才は天才によりてのみ眞に理解せらるといふ誰やらの言葉も思ひ出られ候。世の文學愛好者は黨同伐異を事とし、又は鈍感にして天才を理解し得ざる群小批評家の言に迷はさるる事無く、偏見を捨てて此の大作家の作品を三讀すべきものと存候。先生の如き偉大なる藝術家と同時代に呼吸する事を思ふのみにても吾等生甲斐ある心地致候。

今年正月の「早稻田文學」に西宮藤朝なる人「泉鏡花論」を發表し、此作者の過去に於て同情ある理解ある批評家を有せざりし事を繰返し遺憾としたるが、扨て御當人は如何といふに之亦全く無理解にて、「辰巳巷談」の梗概を述べお君がいい人鼎を沖津に寢取られたりとなせるが如き言語道斷の誤あり、研究の不備か生來のぼんくらか、人をして惡批評家の横行を憎ましむるもの有之候ひき。

「幻の繪馬」讀後の感想認め兼候お斷りを述ぶるつもりにて床上筆を執りつゝ少々氣焔をあげ申候。發熱せざれば幸甚に御座候。(大正六年三月十五日夜)

——「中央文學」大正六年五月號

永井荷風先生の印象

政治家、實業家、役人、軍人、教育家、いろいろちがつた職業に從事してゐる第一流と呼ばれる人間に逢つても、頭の下る人は皆無に候處、兎角はきちがへた人間の多い小說の作家の中に、永井先生をみる事は欣喜至極に御座候。小生は先生の前に出る時自ら頭が下り申候。(大正七年一月七日)

――「新潮」大正七年二月號

「八千代集」を讀む

岡田夫人から「八千代集」を頂いた。

ひと昔前の事、自分がまだ中學の時代に、如何いふ心持で讀んだのか忘れてしまつたが、小山内薫氏の「夢見草」と、小山内八千代さんの「門の草」といふ文集を、常に机の上に置く十數册の詩歌集と一緒に並べて持つてゐた。ヲサナイと呼ぶ事を知らずにコヤマウチだと思つてゐた。小山内氏兄妹が、泉鏡花先生の作品の愛讀者であり且研究者だといふ事を、ある雜誌で承知して、その爲に買つた二册だつたかと思ふ。本の裝幀が美しかつたのと、若い兄妹が揃つて文筆に親しんでゐるといふ事が、當時の自分には羨しくも懷しくも思はれたのである。當今思ひつき專門の雜誌が、有島兄弟號谷崎兄弟號長田兄弟號を出し、物好きな世間がそれに釣られる心持を、自分は自分自身持つてゐる事を拒め無い。

「夢見草」は今も自分の本箱の中にあるが、「門の草」は何時かしら古本屋にでも賣拂つたのであらう、自分の手もとには無くなつた。

いろ／＼の美しい文章が集めてあつたが、それがどんなものだつたか今では全く覺えてゐない。夜寒の門の外で小犬の啼いてゐる景色が、その文集の何處かにあつたやうに思ふがあてにはならない。女の子が集つて、おはじきをしてゐる景色も、おぼろげながら記憶してゐるが、それとてもそれつきりで、後も前もまるで忘れてしまつた。たゞ自分が幼い憧憬をもつて「門の草」を讀んだといふ、自分自身を回顧して懷しむ心地ばかりが忘れられないのである。

その後「新緑」といふ新派の俳優の話も、誰は誰をモデルにしたのだといふやうな極めて安直な興味から自分を誘つたが、僅かに前篇を讀んだだけで止めてしまつた。後年久保田万太郎氏がしきりに此の小說を推稱するのを聞いたが、それは役者好きの久保田氏の事だから、役者の生活を描いた小說をほめるのか、でなければ久保田氏は岡田夫人が贔負なのでほめるのだと、たかをくゝつて讀まなかつた。雜誌や新聞に出た夫人の作品は隨分澤山讀んだ筈だけれど、あんまり感心しなかつたと見えて、殆どひとつとして記憶に殘つてゐるものも無い。

それなのに今度「八千代集」を讀んで、かなり面白く思ひ、集中の多くの作品は大概二度三度繰

返した。夫人からその集を頂いた時、自分は發熱して病牀にあつた。なぐさまぬ心が大層なぐさめられた。本を頂いた禮狀にかへて、自分は主として自分の好惡から出た、讀後の感想を、聊か引延して玆に記し度いと思ふ。

序にかへた「鳥のなげき」といふ詩——詩と呼ぶ外に何か適當で、且もう少し安つぽい輕蔑した言葉があれば、喜んでいひかへる——を先づ讀んで不愉快な氣持がした。自分の推察が間違つてゐたら謝る他は無いが、想ふに此の詩によつて、作者は自分の境遇を、暗にうたひ嘆いたのであらう。序にかへてと斷つてゐるのをみても、少くとも作者の一時代の心狀を現したものと見て差支へ無いやうに思ふ。無理解の周圍の中に生活する事は、吾々にとつて最も悲しい事であるが、「鳥のなげき」の浮ついた氣障ないひあらはしは、その悲しみを賣物にしてゐるやうな推察を起させる。その點に於て自分は、此の「鳥のなげき」にかへて、どんな序文でもいゝから別のものであつてくれゝばよかつたと思ふ。

「八千代集」中、自分が一番面白いと思つたのは、卷頭の「紅雀」である。玆に面白いといふのは、それが藝術品として勝れてゐるといふ意味では無い。自分をして種々の事を考へさせた點を指すのである。若しも一の作品に覘ひどころといふものがあれば——內容といふ廣い意味の言葉を用

ゐるよりも、稍々狹義で且聊か不純な意味を持つ覘ひどころといふ言葉を特に用ゐる――此の作品は、その覘ひどころに於て極めて勝れたものであると同時に、それを一篇の藝術品として形造る形式に於ては、最も拙劣であつた。

一人の青年は、死なばもろともにと誓つた從妹に死に遲れ、死なう死なうと思ひながら生きながらへてゐるうちに、何時しか他の女に戀してしまふ。けれども死んだ從妹との誓に對する良心の惱みから、今戀ふる女にはその戀をなか〳〵うちあけかねたが、遂にそれをうちあけると、女も亦女自身、或他の人に對してうちあけぬ戀を胸に祕めてゐる事をうちあける。傍に第三者の態度でゐた主人と呼ばれる青年は、此の二人の告白を聞いてみると、自分の友の青年が戀しあつて、死ぬ時も共にと誓つた從妹といふのは、曾て自分に戀してゐた女であり、今又その惱ましき同じ人が戀してゐるといふ女は、自分自身戀しく思つてゐると同時に、初めて聞いた女の告白によれば女も亦自分を戀してゐるのであつた。

「紅雀」の中の二人の男と二人の女――一人は死んでしまつたが――の戀愛關係を最も簡短に紹介すれば右の如きものであるが、これ丈でも此の作が、如何によき戲曲の素材であるかを、人々は直に想像する事が出來るであらう。岡田夫人が此の一篇を小說の形式によらず、戲曲の形式で

描いたなら、必ず勝れたものが出來たらうと思ふ。その理由は、平面的の描寫で現すよりも、もつと緊縮した立體的の舞臺藝術が、この材料には當然適合する性質のものだといふ一言に盡きてゐる。換言すれば人と人との關係が、長い時間を經過して發展して來るのとは反對に、瞬間的に披瀝されるところが、それを畫面では表現し惡いものにしてゐるといふのである。

一體に、吾々日本人は、舞臺に繪畫を展開する技倆には勝れてゐるが、戲曲らしい戲曲を組立てる事は、今日の所謂新しい戲曲家に於ても最も不得意とするところである。或は、本來戲曲らしい戲曲を構成する能力か無いばかりで無く、戲曲らしい戲曲の材料を摑む能力さへ無いと云ふ方が適當かもしれない。

それなのに此の一篇は、稀に見る戲曲的なもので、自分が「八千代集」中一番興味を覺えたのも、全然この特質の爲である。正直なところ、自分は近頃戲曲を書く人の中で、これ丈戲曲的な人間關係を、時間と場所の適確なる一致に於て描き出した人を外には知らない。兎角女といふと馬鹿にしたくなる傾向を持つ自分も、この作を讀んだ時は、これは馬鹿には出來ないと思つた。けれども不幸にして岡田夫人は、此の戲曲的の場面を把握しながら、心なくも小說の形式で書いた上に、その小說も新派の芝居好み、活人畫の背景好みの、有平糖の綺麗さで飾り立てた極めて感傷

的なものにしてしまつた。作者の持つてゐる惡趣味が、鮮明に出てしまつたのだらうか。

時は春「うす紫にうち煙つた朧月夜」で「風も無いのに眞白に咲き滿ちた櫻の梢からは、音も無く花片が、ひらひらひら――ひらひらとしつきりなしに」散りかゝるといふやうな婦人向の、極めて通俗に美しいと呼ばるべき景色である。人物も亦不幸にして、安本龜八作の好い男二人と、その二人と肩を並べても見劣りのしない丈の高い、「うるみを持つた大きな眼が、物云はぬ先に云ひしれぬ氣高い情を語る」婦人である。

自分には、この二青年が、どう考へても、その脫線した服裝、その輕薄な言葉つき、その淺薄な論理から推して、新派の芝居の色男以上には踏めない。新派の芝居の色男といふのは、言葉を換へて云へば、自分ではいゝ男のつもりで、その實氣障で間抜けな男の事なのである。しかもその青年の服裝其他を、作者は十分の好意を以て描いた調子が歷然と見えるのは遺憾である。

二人とも「銀鼠色のルパシュカ」「紺のビロオドの洋袴」といふ、想像する丈でも失笑を禁じ得ないみなりをしてゐる。巴里の一隅に巢をくつてゐる露西亞猶太人や、バルカン半島邊から出て來た下手な畫學生などの中に、たま〳〵つぎだらけのルパシュカを着たのや、古び汚れたビロオドの洋袴を穿いたのなどを見ると漫畫のやうな趣致を感じるが、小ざつぱりしたルパシュカに、新

調のビロオドの洋袴で、いゝ男の坊ちやん畫工が、とりすましてゐる様子は、天長節の夜會に出る洋裝の日本婦人、赤十字社の大會に集る片田舍の村長のフロック・コオトよりも、もつと悲慘な可笑しさを覺える。もつとも、銀座邊をいゝ氣になつて、そんな風をして歩いてゐる所謂藝術家も時々は見受けるから、或はそれも別段をかしがられもしないで通用してゐるのかもしれないが、何にしても作者の爲に、又この小説を安價にした結果の爲に、自分は此の二青年の服裝を忌々しく思はないではゐられない。

會て歐羅巴の都で、ビロオドの服を着て得意がつた日本の藝術家が、或商店に買物に行つて、乞食と間違へられた噂を聞いた。又或日本の藝術家はルパシュカを着て巴里の町を歩かうとしたので、その友人達が言葉を盡して反對し、やうやく思ひ止らせたといふ話があつた。面白い挿話として茲に記す。

其の上に又「紅雀」の人々は自稱して江戸ッ子がる、よくある一派の所謂藝術家である。主人の青年の口をかりて出る樂天的な江戸がりに耳を傾けると、世に謂ふ所の江戸ッ子の最も惡い方面ばかりを、最もいゝ性質として、作者は描いてゐるかのやうに推察され、又しても殘念に思ふのである。一體、世間普通に適用する江戸ッ子といふものゝ觀念には、かういふ冷汗の出るやうな

のが勢力を持つてゐるのだらうし、實際東京の人間には、多少いやな浮調子(うはつてうし)なところもある事は否めないが、自分のやうに極端に東京の人間の好きなものにとつては、かゝる種類の人間を江戸ッ子と呼ばれるのは苦痛である。正直のところ自分は、はきちがひの江戸ッ子がりの横行の爲か、近頃は江戸ッ子といふ言葉をきくと、前後の判斷も無く、直に侮蔑の念を抱くやうにさへされてしまつた。

自分は「紅雀」が、立派な戯曲を構成すべき素質を備へながら、あまり出來榮の勝れない小説となつてしまつた事を殘念に思へば思ふ丈、その小説としての價値を殊に安價にした作者の惡趣味を罵倒し度い。この自分が、甚だ強く感じた感歎と殘念とは、覘ひどころに於て秀抜で、小道具と背景、その他の外面的要件に於て劣惡な「紅雀」の持つ不思議に混亂した興味に誘はれて、二度も三度も繰返して讀ませた。

「夢子」といふ小説は、その主人公夢子の數奇な運命が、異國趣味に似た面白さを持つてゐる。殆ど神祕の國の城の中を覗くやうな冒頭の生ひ立ちの記の數頁と、その城の姫の寵愛を一身に集めた身が、父の死の爲に雨露をしのぐ處さへ無くなつて、西の都を去る邊の、豐富な挿話を持つ半生の物語は、全く外國の物語に空想をそゝられて、未知の鄕土を憧憬する幼時の心持に自分を

誘惑した。殊に前半の簡明でしかも行屆いた文章は、大ざつぱな心持で虚喝恫愒を事とする當時流行の作家などの到底及ばない正當な文章である。その上に、兎角綺麗事になりたがる嫌ひのある此作者としては、きび／＼と力に充ちてゐる事も感歎に値する。けれどもそれは物語に特有の面白さである。描かれた事そのものが、直ちに實在性を帶びて吾々に迫るのではなくて、その物語が引起す吾々の心持に、より多く賴るべき性質の興味である。從て主人公が、流轉の身を東京に落着けた時から始まる昨日に變る生活を描いた處になつて、作者が物語の筆を捨て、寫實的描寫を專一に爲始めると、全く異國趣味は消えてしまつて、殆ど別の小說を讀むやうな氣になつて來た。同時に作者は、夢子その人の心持にも、回顧的に書いた前半とは違つて、細かい洞察と溫い同情を缺いてゐる。さうして此の破綻が一篇の小說を前半と後半と別々の物にしてしまつて、一貫して變らない興味を失ふ原因になつた。

立入つた話ではあるが、技巧の問題として希望すれば、夫人は此の小說を全く會話拔きで描くべき位置にあつたのだと思ふ。それが夫人の力量に最適の形式だつたやうに考へられる。さうでなければ、種々の境遇の變化の中に現れる主人公の性格を強調した心理描寫の筆を揮ふべきであつたと思ふが、浮雲の如く去來する心持は描けても、より深く根ざす心理の描寫は夫人の最も不

得手とするところであるから、これは無理な注文として差控へるのが至當であらう。

話は變るが自分には、夢子の意地張りなところを作者が非常に買つてゐるのが面白かつた。

「餘計者」も亦冒頭の朝子といふ女主人公が、その親、兄、姉にさへ餘計者にされたつきの惡い子だつた生ひ立ちを描いたところが勝れていゝ。讀み出した時、これは立派な小說に違ひ無いと思つた。けれども「夢子」の場合と同じく、現在を描いたところになると、全く調子が狂つて、何の爲にあんな堂々たる生ひ立ちの記が必要だつたのかわからなくなつた。女が夫の家を出る動機とか、その夫との關係、その家の狀態、殊に朝子その人のなぐさまぬ心狀が、一切不明瞭である。若し朝子がその幼時の如く餘計者であるならば、その餘計者である事と、家を出てからの行爲との間に原因結果の關係が無ければ、折角立派な生ひ立ちの記も無用の贅物に過ぎない。

例によつて臆測を逞しくすると、作者は事實の興味に乘せられて、それ程でも無い事を一大事として取扱つたのではあるまいか。少くとも自分には、內には激しい苦悶不滿に惱み、外には不愉快な境遇の壓迫に苦しんでゐる男女とは思はれなかつた。殊に翼といふ男は、作者が好意を以て描かうとした人間とは全然別種の人間としか考へられない。玆に作者が描かうとした人間とは卽ち朝子の信じる翼だと云つても差支へあるまい。朝子は翼をトルストイの小說「復活」の主人公

ネフリユドフに比べてゐる。「あのネフリユドフの眞似の出來るのは巽一人だと思つた。巽ならシベリヤまで行く位何でもなく思ふであらう。」と云つてゐる。けれども吾々が此の小説に描かれた丈で見ると、巽は「戀にやぶれ、商法に破れ、遂にみづから掛けたわなにみづから掛つて苦しんでゐながら、それをも強ひて拔けようとはしないで、苦しめる丈苦しまうといふやうな男」と呼ばれる際(きは)の悲壯な男ではない。彼は戀に破れたかもしれない。しかしそれは幾多の浮氣な男がしくじつた戀と何處に相違があるのか。「ふとしたことから關係した女」と夫婦になることにも、何んの悔恨も伴はない男としか考へられない男の戀の失敗は、やがて彼が座興として人々にほこり得る程度のものに過ぎない。彼は「苦しめる丈苦しまう」としてゐるのではない。「なりゆきに任して進んでゆくより外に道はない。」といふ、持つて生れた極めて樂天的な考へから、懷疑的な反省的な人間ならば苦痛とする事さへ苦痛でなく過して行ける人間なのだ。ネフリユドフには良心の苛責があり、道德的倫理的思索反省が常にあつた。彼がシベリヤ迄もゆかなければならなかつたのはその爲である。巽には道德感(モオラル・センス)は無いのだ。彼がなりゆきに任して、呑氣な顏をしてゐられるのはその爲である。ネフリユドフが、どんな苦しみをも苦しまうとした心には、彼の道德的意力の伴つてゐる事を忘れてはならない。巽がどんな事も苦にならないのは、彼には何らの道

念がなかつたからである。

自分は、トルストイのネフリュドフに、かゝる男を比較されたのを見て、失笑を禁じる事が出來なかつた。さうして作者が此の小説に失敗したのは、つまらぬ男女の氣まぐれを、さも悲劇らしく買ひかぶつた結果だと推論した。

ちひさな事を大げさに考へる事、あんまりしつつこい物にも倦きたからお茶漬にしようといふやうな輕い事を、せつぱつまつた事のやうに考へる內容の不充實が、此の比較的に長い、當然複雜な背景を要求する小說を、平淡無味なものにしてしまつた。

たゞ面白いと思ふのは、意地張りの我儘者に對する作者の同情が、露骨に出てゐるところである。甚だ失禮な申狀だが、想ふに岡田夫人は意地張りの我儘者であらう。さうしてその爲に餘計者にされる不滿と哀愁を、時に沁々感じる人であらう。その哀愁の伴ふ時、夫人は「餘計者」の冒頭數頁が持つやうな緊張した描寫を可能にし、その憤懣のみが堪へ難く荒ぶ時、やけになる心地を夫人は切實に感じる人であらう。かゝる時、夫人は此の小說の朝子の心を經驗するのではないだらうか。

やけといへば、一體に夫人の作品には、何處かに捨鉢を喜ぶ傾向が顯はれる。それは捨鉢を主

張したものでもなく、捨鉢に同情してゐるのでも無い。殆ど無意識に作品の基調を成してゐるのである。それ丈動かし難いものに思はれる。若し此の捨鉢が一層強く深く、色彩を鮮明にして來る日があつたら、夫人の作品には更に遙に純一性を増すに違ひ無い。

「餘計者」の朝子が家出に至る迄の心狀は、正面からも、又は背景としても、殆ど描かれずに終つてしまつたが、要するに一切の事になぐさまぬ心がその原因をなしてゐるのであらう。そのなぐさまぬ心、その爲に世を捨鉢の氣まぐれともなる心持は、「青い帽子」及び「假裝」の中に共に現れる二人の女にも見出される。この二人の女は不愉快な新聞語を以て呼べば、所謂新しい女であらう。自分のやうな、女性に對しては、自分自身の主我的な要求から、寧ろ古めかしい優しさを強要する傾向の者には、反感を持たないではゐられない種類の女である。勿論茲に新しい女とは、新聞記者の理解する丈の意味に於ての新しい女で、決してよき意味に於ける進步した女を意味するのでは無い。殊にこの二人、即ちかし子とつね子とは、決してその思想に於て新しい女ではなく、ただ單に行爲の上に、慣習を破壞したあばずれが現れてゐる際(きは)の女なのである。兎に角今此の小說の中では、二人は何か心も躍るやうな刺戟に憧れ惱んでゐる事は確かである。「青い帽子」に於ては、夫人の得意とする細緻な觀察をほしいまゝにした端艇(ボウト)競爭の場景の中に明確に描かれ

てゐる。うまいと思つた。しかも自分の我儘は、この二人の女の態度の小憎らしさから、この作品を好む事が出來なかつた。作者が彼等の態度を是認してゐるところが、自分を不快にしたのかもしれない。「假裝」の方は散文詩のやうな感觸を持つ小品で、主としてその作品を貫くかし子の、やるせないやうな心持には自分は同感する事が出來た。或時の人の心の動搖をとらへたものとして、極めて氣の利いた作品であるが、あまりに形式を氣にしたわざとらしさがいやだ。

右の二篇の中のつね子といふ女は、作者がより多く同情してゐるかし子よりも、爲す事する事が付燒刄で堪らなく「いやな奴」である。しかしその「いやな奴」よりも、明かに「いやな奴」として描かれたのは「灯」の夏子である。しかも自分には此の「いやな奴」の方が、つね子といふ「いやな奴」よりは、まだしもましに思はれる。それは作者がつね子に對してはその行爲に反感を持たず、寧ろそれを肯定しながら、夏子の態度は一々否定してゐるのが、かへつて吾々をして前者に反感を抱かせるのではないだらうか。つまらない事のやうだけれど、描寫論の一端として、心得べき事に思はれる。

作者が明白に「いやな奴」として取扱つてゐる夏子に對して、作者が明白に贔負にしてゐる千の助は、複雑な陰影の多い半生を背景にした人らしく所々に説明されてゐながら、結局その心持は

極めて淡くしか推察されない。勿論作品の性質が寫生風のものであるから、それに對して廣い背景を要求するのは無理かもしれないが、一體に夫人の作品には、背景の淺い恨みがあるので、ついでを借りて云ひ度いのである。そのかはり、此の夏の夕の一挿話は、平淡に描かれてゐる丈明るい色彩で、男も女も當代の浮世繪のやうに生々とした刺戟性を持つて印象を殘すのである。好きではないけれど、この點に於てうまい作品には違ひない。

うまいといふ方から行くと「雨」「お伊勢」「駒鳥」などは議論無しに推稱さるべき作品である。かういふ作品にあらはれる夫人の特質は、觀察描寫共に細緻な事である。規模の大きい或事件の進展を描いた他の小說には、夫人の最も不得意らしい心理描寫性格描寫の極めて粗雜な事が、明確に觀取されるのに、これらの短篇中の短篇にはさういふ要素を比較的に必要としない爲に、無瑕の寶玉の光を帶びてゐる。夫人は人の心の深い動搖、變化、展開を描く事には拙劣だが、或一瞬時の心の浮動は、極めて親切叮嚀に同情深く描き出す。自分が推稱する作品中の「お伊勢」「駒鳥」などは正にこの好適例である。

「雨」に至つては「八千代集」中最も短いものではあるが、同時に最も完全な短篇として第一に推讃し度い。夫人の寫生家としての冴えた手腕が、他の作品では兎もすると、押へても押へ切れな

い夫人特有の片意地や、あて氣や、山氣に邪魔されて、本來の光を現さないのが、此處では立派な作品を成し、しかも藝術家に有勝(ありがち)の芝居氣のまじらない純粹の人の愛が、一字一句に籠つてゐて、幾度繰返して讀んで見ても、自分は歡喜に伴ふ涙ぐましい程の心地を覺えるのである。ふと乘合せた電車の中の姉弟(きやうだい)の、その境遇性格、全生涯迄も、僅に數頁の文字の中に暗示されてゐるばかりで無く、もつと廣い人間社會が、その背後に横たはる事さへ歷然と示されてゐるのである。集中最も完全な作品であると同時に、波瀾に富んだ長篇よりも、遙に深みのある作品である。靜止せる場合を描いて、尙且動いて止まない人生の一角をまざ／＼と見せた逸品である。紅葉時代の文脈を引いた誇張の無い氣持のいゝ夫人の文體は、此作に於て、初めてしつくりあてはまつたやうな氣がした。自己を語るには、思想を適確に把握し得ない恨みがあり、自己を描くには、あまりに筆の弱過ぎる嫌ひのある夫人は、要するにその持前の細かい觀察に、女性特有の溫い同情の伴つた時、寫生家――寫實主義者といふ文字の與へる概念と異なると同時に、ホトヽギスの所謂寫生文を書く人とも違ふ意味で――としての本來の技能が最も自然に發露して、かゝる逸品を創作し得るのではないだらうか。敢て夫人が今後の筆硯の爲に、自分は押切つた事を云ひ添へるのである。

「雨」と並べて、自分が最も愛讀したのは「うつぎ」である。一體に他の作品の多くに見えるあまり感心しない趣味と、かなり力強く働いてゐる芝居氣から、此作品は全然免れて、極めて自然なのが、自分をして幾度も繰返して讀ませた所以である。

元來どの作家でも、追憶回想の作品には、不知不識詠嘆的になり勝であるが、意力の強い夫人は、全然この弱點を見せずに、飽迄客觀的な態度を持し、しかも面白い挿話のひとつひとつを繪卷物のやうに展開した。殊に一人稱の敍述に似もやらず、作中の人のすべてが、何れも截然とした特色を持つ個々の性格として躍動してゐるのは敬服に値する。さうしてその個々の人々の一生及び相互の關係迄吾々は頭を痛める事なく覗ふ事が出來る。こゝにも亦夫人の寫生家としての特質と、その柔かい色彩と、その靜に寂しい韻律を持つ極めて上品な夫人の文章を推稱し度い。

凡そ多くの作家にとつて、最も懷しい作品は、その構想表現に工風を凝らした作品ではなく、極めて自然に自分の心胸に泉の如く湧き上る感情を、そのまゝ筆にした作品であらう。其處には屢々心ある作家が、自ら冷汗を覺える小細工、脅迫、虛僞が無い。恐らくは夫人が自己の作品中最も自らなつかしとするものは「うつぎ」以外にあるまいと思ふ。

「うつぎ」に比べると、同じやうな味ひを多分に持ちながら、比較的に劣るのは「指輪」である。

これは事實の面白さを羅列する忙しさに、作者の理解同情が、物語らるゝ事象の中に、滲透し切れなかつた結果であらう。しかしそれも「うつぎ」に比べての事で、他の作品の中では、矢張り自分の好む物のひとつに數へて憚らない。

自分が最もつまらない、馬鹿々々しい作品だと思つたのは「横町の光氏」である。低級子女が見て光氏とする横町の若い人を、夫人も亦同じ程度に肯定してゐるのが馬鹿々々しい。且その男の口吻の氣障な事は、當然カリカチュアとして現さるべきであつたと思ふ。こゝに又不幸にして夫人の惡趣味の流露を見た。

「堂島裏」も「横町の光氏」に見る同じいやみを感じるけれど、この方は作品としての纏りのいゝ事が、彼に比して遙に勝つてゐる。

「鷹の夢」は久保田万太郎氏が、岡田夫人の噂が出ると、必ず「新綠」と共に引張り出して、誇大に感服して見せる作品であるが、それはたま〳〵久保田万太郎氏の淡い趣致を喜ぶ獨特の好みを表白したものとして、久保田氏を評する時により多く面白い證明のよすがとなる可き話で、作品としては可も無く不可も無い、極めて平凡なものだと思ふ。

自分は最後に、上來述べて來たところを綜合して、夫人の作品の特質傾向及び夫人の作品の弱

點短所を簡略に抽出し度いと思つてゐたか、それはこゝ迄の長々しい批評の中に斷片的ながら云ひ盡されて居るやうに考へられるのでやめる事にした。

或文壇の老大家が曾て人に語つて「俺は女の書いた物は何でも面白い。女の書いた物だと思ふと惡口は云へない。」と云つたといふ巷の噂を聞いた事がある。けれども明治大正にかけて、吾々の時代が生んだ女流作家中、歌人與謝野晶子氏と小說家樋口一葉女史以外に、無條件に推讃し得る人が何處にあるか。殆どすべての女流作家は、單に女だといふ先天性の爲に、文壇の色どりとして介在してゐるに過ぎない。たま／＼野上彌生、中條百合子二氏の如き、かなりいゝ素質を持つてゐるらしい人が現れても、自制心の缺乏から、中途にして邪路に踏入つてしまふ時、同じくよき素質を持ちながら、多年創作の筆を續けながら、尙且自己の特質を自覺しないらしい岡田夫人を惜しいと思ふ。

あまり度々引合ひに出して濟まないが、久保田万太郎氏の如きは、今日迄の岡田夫人の作品を見ても、夫人は現代女流作家中唯一の勝れた作家だと云つてゐるが、自分は左程に思はない。しかし夫人が今後ほんとに自己の持つてゐるいゝ物を見出し、しつかりとそれを把握した時、必ず勝れたる作品を發表されるに違ひないと、確く信じて疑はない。

乍末岡田夫人の「八千代集」を贈つて下さつた厚情を感謝し、併せて夫人の健康を祈りつゝ筆をおく。（大正七年四月二日）

——「三田文學」大正七年五月號

愚者の鼻息

人をつかまへて親切めかして忠告するのは、人をつかまへて無責任に罵倒するのと同じ位いい氣持なものである。

これは自分の座右の銘では無い。大正七年二月深川區猿江町吉村忠雄と封筒には署名し、半紙七枚に鐵筆で細かく書いた「水上瀧太郎君に與ふ」といふ文章に次郎生と名告つた人から難詰狀を受取つた時に、ふと自分の腦裡に浮んだ安價なる詭辯である。

吉村忠雄氏事次郎生、若しくは次郎生事吉村忠雄氏、或はもつと正確にいへば吉村忠雄及び次郎生事某氏は、

瀧太郎君足下

余は君とは昵近の間柄のものである。否獨り君のみとは言はず君の一族同胞には格別なる近

親の者である――君の生立や兩親や乃至は平常生活から家庭に於ける起居皆一々手に取る如く知り拔いて居るものゝ一人である。

ではあるが君が文學に趣味を持つて居る、文才に長けて居るといふ事を他人から聞き傳へたり紙上で見たりしたのは比較的後の事に屬するのである。

それは何故かといふに君が筆を執る際は必ず姓名共に別名を用ひて居ること、も一つは余が餘りに君とは近親であるから平常君が文學書など繙いて居るのを知つて居ても、所謂文士仲間に左や右う言はれる程では勿論ないし、猶又何に彼の子供が――といふ觀念が先入主となつて居た事とが、余の君の文才を知ることの後れた主たる原因であると申したい。

と書出して、扨てその人は自分が「所謂文士の仲間入りをして居る」事を知り、彼の子供が何んな事を書くだらうとか、どんな文藝上の手腕をもつて居るだらうとか、或は題材は何んなものを捉へるだらうとか、それはそれは余の君に對する期待は蓋し豫想外に大きなものであつたのである。

と稱してゐる。而して御苦勞樣にも「多忙な身ではあるが、三田文學に出た作品は一つ殘らず讀み」、先頃大阪每日及び東京日日新聞に連載された「先生」といふ小品も每日缺かさず讀んだの

ださうである。けれども、

余の期待の餘りに大を過ぎた爲であつたか、或は又余の文學に對する眼識が偏狹であるかは知らぬが、左程までに大なりし余の期待は君の作品を漁り行くに從つて次第々々に薄れて、果ては大なる失望と化し去つたのである。特に「先生」の一篇を見てからは更に共感を深くした次第である。

と殘念がつてゐる。

以上が吉村忠雄氏又は次郎生の「水上瀧太郎君に與ふ」のはしがきで、自分及び自分の家をよく知つてゐて、水上瀧太郎を「なんの彼の子供が」と思つてゐると稱する大人は、次の如き詰問と慢罵に移つて行つた。

瀧太郎君足下

余は勿論君とは生活狀態も違ふし、文藝に就いて彼是れ議論を戰はす程の素養を持つては居らぬ。

が少し君に尋ねて見度いと思ふ事がある。それは外ではない、文藝の價値といふ事である。それも總括的に文藝其物に就てでなく新聞紙の如きあらゆる階級に——階級といつても上下

卑賤を指すのではない、主として文藝を解する解せないを標準としてである——に接する機關に公表する場合のものをいふのである。余は斯うした場合の價値は其作品卽ち小說なり隨筆なりが一般讀者の感興を惹くことの多少と、勸善懲惡的な誘導力の多少とに由り決するものと思考するものである。そして此點が文藝雜誌などにて發表する場合と違ふ事と思ふのである。君は之に關し如何樣な意見を持て居らるゝか御高見を伺ひ度い。余は後者に於ては其讀者が前者の夫とは違ふし、又後者其物の天職も前者とは違ふ。同じ「先生」でも後者にはあれでも宜いか知れぬが前者には不向なものと思ふ。單に不向な許りでなく第一物になつちや居ない。余は彼れを讀んで何等の感興を催さなかつた。

これは吉村忠雄氏又は次郞生の文藝觀で、如何に大人といふものは頭腦の惡いものであるかを證明してゐる。最初に「彼是議論を戰はす程の素養も持つては居らぬ」と公言してはゐるものゝ、續いて自己の文藝觀を說いて相手方の意見を伺ひ度いと云つてゐるのは、卽ち「彼是議論を戰はし」度いのであつて「素養も持つて居らぬ」といふのは單に自らを低くし得たりとする習慣的禮儀に過ぎないので、實は存外自分の功利的文藝觀に滿足してゐるのである。かうして自分の立場を明かにして置いて、吉村忠雄氏又は次郞生は「先生」の一篇に對して批評を下した。

恐らく余ばかりでなくああいふ書きなぐり物では天下の人皆さうであらう。先生は天下の人の認めて、以て偉人とする偉人である。さういふ人の平素の洒落な處を寫さう偉なる言行を寫さうとするならば、もつと讀者の興味をそそり深刻なる印象を頭に殘す樣なものでなけらねばなるまいと思ふ。彼の作は此點に於て先づ全然失敗して居るものではなからうか、卽ち題材としての平素の言行の取り方が當を得て居ない。迅きこと風の如きものの後には動かざること巖の如きものを、靜なること林の如きものの後には波瀾幾千丈といつた風のものを配するとか、坦々でなく紆餘曲折端睨すべからざる中に偉人の俤を偲ぶといふ風にするのが眞に是れ偉人を偉人として遇し、讀者の興味を彌が上にも湧き立たせ、且つは後世の人々をして其俤を偲ばしむる眞の方法ではあるまいか、文筆の炳乎日月の如く後世を照らすとは實に此事を言つたものではなからうか。或は足下は言はん、先生は然る波瀾に富んだ性行の人ではなく、世に平凡なる偉人と言はれし通り頗る常識の發達せる平凡なる人であつたと。併し足下よ言ふ勿れ、當時は吾國開闢以來の思想の動搖轉換期にして實に先生は其の先唱者にして又中心點なりしなり。其の言行や奇拔にして當時の人にしては奇想天外より落つるといふ樣なことばかりされた人である。

君の「先生」に對して詳密なる批評を下すといふことは又他日に譲るとしよう。玆では單に何等讀者に感興を起させない作は價値に乏しいものである、そして君の「先生」は正しく斯る種類のものであると云ふに止めて置き度い。

此の一節は吉村忠雄氏又は次郎生が、最もいい氣持で書いたものらしく、陳腐な形容詞を澤山持ち出して、見當違ひの議論を吹掛けてゐるところは、近代の文章特に「先生」の鼓吹したやうな進んだ文章に馴れた若い者には、到底吹出さないでは讀めない程愛嬌に富んでゐる。自分は非常なる興味を以て讀んだ。若しも低級なる興味でも敢へて構はず、讀む者を面白がらせるのが文章の第一義だと吉村忠雄氏又は次郎生が考へてゐるならば、期せずして人を失笑せしめし氏の文章なども「炳乎日月の如く後世を照らす」種類のものかもしれない。

次に吉村忠雄氏又は次郎生は、自分に忠告して左の如く述べてゐる。故意か粗忽か今度は、

瀧太郎足下

と君の一字が無くなつてしまつた。

夫れから次にも一つ御尋ねしたいのは君が文章に親んで居られるのはあれは好きからに、弄んで居られるのか、或は本職的に沒頭されて居るのか、余は何れでも宜しいのであるが、右

とか左とかそれに依つて些か注文があるのである。

強ち君に對して興味を棄てよと云ふのではないが、内々に好きからに筆を執つて樂んで居るといふのならば餘り駄作は公表せぬが宜ではないか、些か自ら文筆に得意なといふので鼻にかけるのは宜ろしくない。時々の創作物を可然先生なり先輩なりに添削して貰つて樂んで居ればよい譯である。何も公表して見せびらかす必要はあるまい。それから本職として居るといふならば誠に情けないことだと思ふ。先きにも一寸述べた通り世間で左や右う云ふからどんなかと思つて居たらまだあんなものを書いて居る！五年も七年も其途に親んで居て夫れでまた彼れ位のものだとすれば一層の事止した方が宜しからう。それよりも君が專門に修めたものでも確乎とやつたが何れ位國家を益するか知れやせぬ。二兎を追へば一兎をも得ずで兩方とも半噛りになつてしまふ。

君が先年笈を海外に負ひたるも何の爲であつたか、徒らに「汽車の旅」を書く爲ではなかつたらう。必ずや其修め得た處のものを以て大に活動せんが爲であつたらう。今や國事は日々に多端で三文文士の御託を聞くよりも一人でも多くの實際家を必要として居る。思想界の如きは少數の天才肌の人に任して置けば宜しい。趣味を持つて居るとか多少の文才があるとか云

つて、レベル若くはレベルより稍々上へ出た位の者が吾も吾もとウヨウヨ集まる必要はない。思想界の明星となつて國民を左右するのも宜いが、目下の急務はハンマアを能く使ふ人を國家はより多く要望して居る。思想界の中でも君のは小説や隨筆の樣なもので目下大して缺乏して居るものでもない。

論旨は益々亂暴になつて、攻撃されて居る筈の自分は寧ろ喜劇を見てゐるやうな笑ひを止める事が出來ないのである。

瀧太郎君足下

第三に君に尋ねたいのは君の文藝名である。多くの所謂文士と稱するものは大概皆名前だけ雅號樣のものを用ひて居るのに君は姓までも變へて居る。彼れは何故本姓ではいけないのか、あれは法律で名前たけにしろと定めてある譯でなく各自が勝手に假の名を用ひるので、夫れも是非とも用ひなければならないといふ規定がある譯ぢやなし、であるから余は姓迄も改めて居るのだと言へば夫れまでだが、男子が筆を取つて天下に見へるのならば須らく堂々とやるべしだ。それが慣習とか或はさうするに至る歷史とか故事とかがあるといふならば名前たけ雅號を用ひて、姓は本姓にして置けばよいではないか、何うだらう此事は？

吉村忠雄又は次郎生と稱する「堂々たる男子」で、しかも匿名を用ゐてゐる人は、「先生」が新聞に出てゐる中に此の一文を寄せて掲載を中止させようと思つた程だと云つてゐる。さうして他人の雅號を用ゐる事を云云しながら、

余は今此書を匿名でもつて君に呈上するが、之は暫時許して呉れ玉へ、其中には屹度判る時が來るから、君も此書を手にしたからには何人が寄越したかと屹度疑念を抱くことだらう、何人であるか當てて見るのも一面面白いことだらうと思ふ。

といい氣なよたを飛ばした擧句に、

以上の間に對して日々紙上なり三田文學なりへ御答をして下さつたらば、余の頗る幸甚とするところである。（二月十八日夜）

と最後を結んだ。

吉村忠雄又は次郎生は、自己の匿名を辯護して、「何人であるか當てて見るのも面白いだらう」と云つてゐるが、自分には自分の「近親者」の中にこんな馬鹿々々しい人間を發見する事は出來ない。この「堂々たる男子」は深川區猿江町と封筒には書いて居るけれど、郵便局の消印は三田局で、大正七年二月十九日午前十時と十一時の間に受付けたものである。自分には深川猿江町に住む親

類も友人も無いから、これも亦「堂々たる男子」の卑怯なる詐術に過ぎないのであらう。

何れにしても自分には誰人の手に成つた一文であるか見當がつかない。文中見るところの目障りな田舍訛、例之「なけらねばならぬ」「好きからに筆を執つて」など云ふのを見ると、頭腦ばかりでなく起居動作も粗野な人間なのだらうと思ふけれど、そんな粗野な人間を「近親者」の中に見出す事は出來ない。或は吉村忠雄氏又は次郎生は住所を詐り、姓名をかくすのと同一筆法で「近親者」だなどと噓をついてゐるのかとさへ疑はれる位、誰人の所業か推測さへも不可能である。兎に角自分は自分の近親者の中に、かういふ沒分曉漢の居ない事を希望する。

吉村忠雄氏又は次郎生は「あの子供が」と輕蔑した語調で繰返してゐるが、子供は常に大人よりも悧巧である。自分は自分よりも年長の者よりも年少の者に對する時の方が怖ろしい。若き時代は常に一種の脅迫的壓倒力を以て自分の後に迫つて來る。子供を馬鹿にする者は自分の耄碌に氣の附かない人間に違ひない。

詰問者は明かに「先生」に對して義憤を發してゐる。不幸にして自分は彼の一篇に對して自らその出來榮の勝れてゐないのを恥ぢてゐる。從つて彼の作品が「物になつちや居ない」と云はれても爲方が無いと覺悟してゐるが、しかし吉村忠雄氏又は次郎生の言ふやうな見當違ひの攻撃に對し

ては、甘んじて首肯する事は出來無い。

第一に吉村忠雄氏又は次郎生は、文藝の價値は「一般讀者の感興を惹くことの多少と勸善懲惡的な誘導力の多少とに由りて決する」ものだと云つてゐる。尤もその前に、それは「新聞紙の如き上下卑賤あらゆる階級」を通じて讀まれるものに公表する場合と斷り、更に上下卑賤とは文藝を解すると否とを標準として決する區別だと説明してゐるが、全體の論旨から推測して、此の制限は餘り重要な意味は無く、難者は勸善懲惡の規矩によつて藝術の作品の價値を定めようとしてゐるものと見做しても差支へないらしい。貴重なる紙面を費して、今更教訓的(ディダクティック)な藝術の作品は價値の高いものでない事を茲に説明する勞は避ける事にするか、吉村忠雄氏又は次郎生の論理から云へば、浪花節は他のあらゆる音曲よりも價値のあるもの、曾我廼家の仁輪加(にはか)は歌舞伎劇よりも尊いと云はなければならない。更に他の方面に例をとれば、愚夫愚婦の大衆に信奉される天理教のお婆さんは並ぶものなき偉人であらう。熟々(つくづく)考へる迄も無く吉村忠雄氏又は次郎生の如きは「上下卑賤の階級」の最も卑賤なる部類に屬する人に違ひない。

曾て乃木大將が腹を切つて死んだ頃、渡邊霞亭といふ小説家がその逸事を集めて小説體で書いた事があつた。勿論「一般讀者の感興を惹くこと」を專一としたもので、忠君愛國の結晶、勤儉尚

武の模範として、主人公なる將軍を神の座に押直さうと努めたものであつた。その一節に、將軍の質素を物語るところがあつた。兵營から時たま歸つて來る夫を慰める爲に、夫人は夫の好物の豆腐はもとより、心づくしの料理を膳にのぼせてすすめたが、將軍は數々の料理の並んだのを見て反つて不機嫌になり、豆腐以外には一切箸をつけなかつた。食事が濟むと夫人に向つて、久々の我家でうまい食事をした喜びを述べた後で、「若し豆腐だけで、他のおかずがなかつたらもつとうまかつたらう」と將軍は云つたといふのである。此の話を讀んだ時に、自分は將軍の芝居氣の多かつた事には反感を持つて居たけれど、兎に角珍しい悲劇的性格の人として崇敬もしてゐたのが、意外に安つぽいけちな人間に思はれて來て不愉快だつた。敎訓的の作品といふものは、屢々かういふ弊害に傾き易い事を知つて貰ひ度い。學校で敎へる二宮金次郎や近江聖人を道具に使ふ修身よりも、狐や烏が物を云ふお伽噺が如何に深く子供の純美なる心に觸れるか。無理押しつけに押しつけて飲み込ませようとする修身が、殆んど敎育的効果を持つてゐない事は、實際敎育の任に當る人の常に嘆じてゐるところである。

「先生」が「物になつちや居ない」といふ批評は自分の甘受するところである。けれども吉村忠雄氏又は次郎生は、彼の作品が如何いふ性質のものであるかを全然了解してゐない。如何に「文藝

を解せざる卑賤の階級」の一人にしても、あまりに自負し過ぎた賤民である。作品の傾向を了解しないのは爲方が無いとしても、賤民の癖に斯くあれと指導してゐるその指導が、全く作者としての自分の常に避け度いと思ふところを目標としてゐるのだから、その標準から「物になつちや居ない」と罵られるのは寧ろ名譽だといつてもいい。

吉村忠雄氏又は次郎生は「迅き事風の如きものの後には動かざること巖の如きものを、静なること林の如きものの後には波瀾幾千丈といつた風のものを配するとか、坦々でなく紆餘曲折端睨すべからざる中に偉人の俤を偲ぶといふ風にするのが眞に是れ偉人を偉人として遇し、讀者の興味を彌が上にも湧き立たせ且は後世の人々をして其俤を偲ばしむる眞の方法」だと說いてゐるが、その單純淺薄な英雄化、戲曲化を避けるのが、眞に偉人を偉人として偲ばせるものだと自分は考へる。古來我國の歷史も戲曲も物語も、その中に現れる人物を、極端なる英雄豪傑聖人善人と、極端なる弱蟲卑怯者佞人惡人の二派に分ける慣習があるので、その折角の偉人豪傑、又は反對の惡人極道も、人形芝居の人形よりも更に遙に人間らしさを缺いたものになり下つてしまふ。吉村忠雄氏又は次郎生が要求する處も、即ち此の人間らしからぬ人間として「先生」を描けといふに外ならない。

自分は「先生」が上野の山の砲聲を聞きながら西洋の經濟書を講義したといふ逸事や、伯爵に敍すると云ふのを拒んだといふ話などよりも、あれ程一から十迄警世の事に一身を任ねた人も家庭に於ては極端に子供を甘やかしたといふ話を聞いた時に、かへつて「先生」の人となりを懷しく思つた。自分は「先生」を曲解して、人形や土偶にはし度くない。「先生」を偉大なりと思ふ丈「先生」を人間扱ひし度いのである。

お氣の毒ながら吉村忠雄氏又は次郎生は、單に文藝を解せざる「卑賤民」であるばかりでなく、全然文字を解さないのではないかとさへ疑はれる。それは「足下は言はん、先生は然る波瀾に富んだ性行の人ではなく世に平凡なる偉人と言はれし通り頗る常識の發達せる平凡なる人であつた」といふ聞き捨てならぬ一節である。自分の「先生」の何處に「先生」を平凡人だと書いてあるか。自分は吉村忠雄氏又は次郎生の考へる如く、常識の發達した人は卽ち平凡人だなど丶いふ亂暴な考へは持つて居ない。又偉大なる人は必ず奇行に富むものだなど丶いふ間違つた考へも持つて居ない。「當時の人にしては奇想天外より落つるといふ樣なことばかりされた人である」とさもほこりかに詰問者は書立ててゐるが、「先生」の偉らかつたのは、最も吾々の生活を時勢の進歩に伴はせつつ合理的に導いた事にあるのであつて、滿洲浪人や衆議院々外團のやうな奇行を賣物にする

徒輩と同列に見られては堪らない。乃木將軍は腹を切つたから偉いのではない。西郷隆盛は犬を引張つて立つて居るから偉いのではない。我が「先生」は腹ごなしに米をついたから偉いのではないのである。

これで「先生」に對する答辯は濟んだから、ついでに斷つて置くが、「先生」は新作ではなくて大正一年か二年頃に、小說らしからぬ小說を書き度いといふ欲求の起り始めた時代のものである。特に末尾にその稿了の日附を記して置いたのだが、古い原稿を掲げる事は新聞社の喜ばぬところだつたと見えて、作者には無斷で削つてしまつた。

次に質問されたのは「好きからに文筆を弄んでゐるのか或は本職的に沒頭してゐるのか」といふ頭腦（あたま）の古い連中のおきまり文句である。換言すれば道樂か本氣かといふのであらうが、自分の創作慾は〔十七字略〕政治家と稱される人間が憲政を弄ぶのとは、些か趣を異にして居る。自分は文筆で衣食はしてゐないが、それが本氣でない證據にはならない。銀行員が銀行の仕事ばかりしてゐたからといつて、必ずしもその人が本氣だとは限らない。要はその意志にあるので、外觀の差別は問題の外である。自分が勸善懲惡を專一にしたり、「卑賤階級」を顧客として創作をするのなら、それは本氣でないと云はれても爲方が無い。吉村忠雄氏又は次郎生の如き、お粗末た程簡短な人

間には、手取早い職業別によつて、人を見る以上に人間性を見る丈の能力は無いに違ひない。

更に粗雜なる頭腦の持主は、自分が數年間海外に留學したのは小說「汽車の旅」を書く爲ではなく、「必ずや其修め得た處のものを以て大いに活動せんが爲であつたらう」と難じてゐるが、自分は「汽車の旅」を書く爲めに洋行したのだと答へても構はない。少くともあの一篇は自分が外國から歸つてから書いたものであるから、自分が何かしら海外で學んだものがあれば、それはあの中に含まれてゐる筈である。正直のところ自分は「先生」には自信が無いが、「汽車の旅」の方は多少自分の作品としては、いいものだと信じてゐる。學校で無理に教へる學問などよりも遙に尊いものが、あの小篇の中に潛んでゐる事を思ふと、自分は海外留學の徒事でなかつた事を滿足に思ふのである。

吉村忠雄氏又は次郎生は、さも知つたふりをして「君が專門に修めたものでも確乎りとやつたがいゝ」などゝ云つてゐるが、自分は此の人々が考へてゐるやうな意味で專門などは何もない。自分は一科の學問をする爲に外國へ行つたのでは無い。自分は自分を最もいい人間にする爲の教養を深めようとは思つてゐたが、本來自分の性質から云つても、罐詰の學問などは修め度くなかつた。「近親者」と名告りながら、その位の事も知らないのは、愈々「近親者」でない證據かと思ふ

と、自分にとつては限り無き喜びである。

吉村忠雄氏又は次郎生は「卑賤階級」の人間に特有な「今や國事は日日に多端で三文文士の御託を聞くよりも一人でも多くの實際家を必要としてゐる」と、よく實業家と稱される人間の中の、金力と頭腦の力の不平均なものが、恥し（はづか）氣も無く繰返す言葉を口にして自分の教養の無い事を正直に曝（さら）け出した。目前の好景氣に浮調子となつた成金は、如何に頭腦の無い「實際家」の集團によつて國民が衰頽（デジエネレエト）するかを知らないのである。今「國事日日に多端」なる時に最も必要なのは、ハンマアばかり握つてゐて頭腦の空虚な人間が不必要だと思つて居る人間そのものである。原始時代の人間は食物丈で生きて居たかもしれないが、文明の世の中に於ては人は思想なくしては生甲斐が無いのである。

匿名好きの吉村忠雄氏又は次郎生は、水上瀧太郎の匿名を何故か威たけだかに詰問してゐる。見聞の狹い「卑賤民」は雅號は單に下の名前丈を變へるものだと考へてゐるが、東西古今を問はず、幾多の文人墨客の中には全姓名に變名を換へ用ゐた例がいくらもある。ピエル・ロティ、ジョオジ・サンドなどいふのも筆技（ノンドプリュム）名である。江戸時代の戲作者の殆んどすべてが本名を用ゐてゐない事は、勸善懲惡主義の匿名好きの吉村忠雄氏又は次郎生も先刻承知の事であらう。近くは春之

舍おぼろ、嵯峨之舍おむろ、二葉亭四迷の如き、更に新しいところで太田正雄氏の如きは木下杢太郎、きしのあかしや、地下一尺生、その他めまぐるしい程の變名を用ゐてゐる。自分が自分の崇敬する明治大正の一大藝術家泉鏡花先生の作中の人物の姓名を無斷借用して水上瀧太郎と稱へたのは、別段深い意味はない。子供の時分から物を書く時には、親のつけた名前よりも自分自身で考へた名がつけ度かつたので、さうした迄の事である。しきりに「近親者」だ「近親者」だとしつつこく云ひながら、ちつとも本當の自分を知らないところを見ると、吉村忠雄氏又は次郎生は人違ひをしてゐるのではないかとも疑はれる。斷つて置くが自分の本名は阿部章藏である。

　吉村忠雄氏又は次郎生の愚にもつかない質問に長々と答へながら、自分は自分の正直過ぎるのが馬鹿々々しくなつたが、考へて見ると吉村忠雄氏又は次郎生の如き「卑賤民」は數に於て恐るべき勢力を持つてゐるのであるから、自分が本氣で努力してゐる藝術の爲にも、勞をいとはず返答しなければならないやうにも思はれる。讀者恐らくは、馬鹿々々しい詰問に取合つてゐる自分の愚を救ひ難しとするであらうが、その自分の馬鹿正直をさして卽ち「愚者の鼻息」と題したのである。（大正七年六月十八日）

――「三田文學」大正七年七月號

「その春の頃」の序

自分の第二小説集「その春の頃」は、大正元年の秋自分が渡米した後で、第一集「處女作」に續いて突然出版の運びになつた。第二集の爲めにと思つて書いた序文は間に合はなかつたので、その儘机の抽出にしまはれてしまつた。此頃、夥しい書きかけの原稿の整理をしてゐると、その序文が皺くちやになつて出て來た。讀みかへして見ると或時代の自分の心持が蘇生して來て、裂いて捨てるのは殘り惜しく思はれるので、淸書して世に出す事にした。もとより今の自分から考へると、削り度い箇所も多いのであるが、全體に漲る若々しい詠嘆的なところがわれながら懷しいので、わざと一字の增減もしない事にきめてしまつた。（大正七年六月十八日）

わが父母人にすぐれて行ひ正しくおはせば、我が家は世に勝れて良き家なる事をわれ曾て些か

も疑ひし事なし。

わが家は富み、わが父母限り無くわれをいつくしみ給へば、われ未だ曾て食ふべき物、住むべき家、着るべき衣服の乏しさを思ひし事なし。

されど何故か予は物心覺えし日より、わが我儘なる心に常に何をか求め憧れつつ遣瀬なき念ひ束の間も忘るることなく、曉は曉の、夕暮は夕暮の悲しさに堪へず、此の念ひ消えぬ苦しさに惱みては、遂に安價なる冷笑と卑怯なる皮肉のかげに、ふてくされたる安住を見出さんとするに至りしが、しかも我が心はなほ其處に安らかに眠る事能はざりき。

わが心、何を求め何に憧るるや、われ自らもわき難きを、われ自らにあらぬ人の父母なりとていかで知り得ん。我が父母はただ只管に限り無くわれを愛でいつくしみ給ひき。

われ常にこれを想ふ毎に、父母の慈愛の深ければ深き程、解き難き心の苦しさに頭痛みて堪へ難き心地す。

われは我が父を父とし母を母として生れし事を何人に對しても憚る事なく誇らんとす。

我が父はわれ等はらからに對して曾て一度も怒り罵りし事なく、すべてをわれ等が思ひのまま

に任されたれば、われ等父をおそるる心を知らで過ぎにき。これわが殊にありがたく思へるところなり。

わがはらからは皆賢く皆おとなしかりしにわれ一人父母の良き教にそむく事多かりしが、しかも我が父はわが罪を一度も責め給ひし事なし。われはわが無邪氣にしていたづらなりし少年の日に、癇のたかぶりては父母にさへ屡々拳を振り上げて立ちむかひし事を、深き悔恨と共に忘るる事能はず。さる折にもわが父は靜かに我が亂暴を看守りて居給ひしのみ、彼の世の中の父親がその子の惡行を矯めんとてうち打擲するが如き事は、予の曾て我が家に見たる事なきところなり。

我が母の誰人に對しても優しくおもひやり深き事は、我が母を知る人の誰しもいなまぬところなる事をわれ亦信じて疑はず。

おもひやり深き母は自らの事と他人の事とのわかちなく、世の事人の身の上の事に就きて、共に喜び共に憂ひ共になげき共に悲しみ給ひき。われは我が母の涙を見たる事あれども怒れる聲を聞きし事無し。

幼き日我が最も嬉しかりしは、今は世になき母方の祖母なる人、又は我が母人よりさまざまの

昔話、物語のたぐひつぎつぎにせがみては、飽く事なく聞く時の心なりき。桃太郎かちかち山は誰も皆知れる話なれば誰人より聴き覺えしかを知らざれども、松山鏡落窪物語鉢かづき姫などは、我が祖母我が母の懐に眠りつつ幾度となく語られしものなれば、そのかみの若かりし母の聲さへまざまざと耳に殘りて、其の折物語の悲しさに涙流せし心地の今もわびしく思ひ出でられては返らぬ日のいとせめて戀ひしきもはかなし。

その祖母なる人はものの記憶よかりし人にて「八犬傳」など芳柳閣の邊迄暗誦んじ居て、求むれば何時も高らかに誦して聞かせ給ひぬ。「平家物語」の幾章も亦かくしてわれは聞き覺えしなり。

父は若きより讀書を好み詩をよくしたりと聞けど、和歌の上手なりしその祖母及び今も變らず月雪花の折にふれては詠み出づる母を見眞似て、われは假名文字の書多く好みて讀みしが、初めて三十一字の歌つくりならひしも十二三の頃にかありけん。いかなる歌を詠み出でしか今記憶に殘るもののなきは恨みなり。

「少年世界」は恰も我が小學へ通ひ初めし頃世に出でたれば、我が頭にいちはやく彫られしは小波山人の懐しき名にほかならず。その頃の人の心はいかばかり長閑けかりけん、いかにして家庭

を圓滿にすべきか、如何にして貯金をなすべきかを究むる事など未だ世の人の心に多く觸れざりしなるべし。家内の者集へる茶話の折など玄齋居士が「小說家」の筆廼舍なまりと蓮牡丹菊にたとへられし三美人が明日の心にかかれるまま人々の口にのぼりて、なかには眉ひそめて物語の中の人の身の上を氣づかへるもありしなり。ちぬの浦浪六涙香小史が小說飜譯のたぐひも、屢々人々の手より手に渡りて讀まれたりし事を忘れず。

やがて少年の日の若き心の喜びに、古き新しきのわかち無くさまざまの書讀み初めしより、何れは勝れたる人々の作の嬉しかりしが多かりし中にも、今は世になき人にては尾崎紅葉先生、齋藤綠雨先生、樋口一葉女史、稍々遲れては國木田獨步先生の御作など殘りなく求め讀みしが、思ふにわれはただにその人々の作品の嬉しかりしのみならず、その人となりの更に一層なつかしかりしを否む事能はざるべし。殊に尾崎紅葉先生は二人となき勝れたる人格の所有者なりしならんと想ふだに心震ふばかりなり。

今もなほしきりに筆執る人々につきては何となく憚からるる心強ければ、ただひそかに崇敬と感謝の念を捧ぐるに止めんと思へど、たゞ泉鏡花先生の御作に對する憧憬の、殆んど我が半生を切放して考ふる事能はざる程に思はるるまま、默してあらん事堪へ難き心地すれば些かは茲に記

して自ら慰まんと思ふなり。

泉鏡花先生は我が死ぬ日迄恐らくは變る事なく予に取りて懐しくありがたき御方ならん。初めて先生の御作の我が心に沁みて消えぬ思ひ出となりしは、其の頃「文藝倶樂部」に連載せられし「誓之巻」なりき。その巻を開く手も打震へつつ涙流して幾度は繰返しけん。遂には彼處此處暗んじたりしが、其後先生の御作にして我が目に觸れしもの一として讀み落したるものもなく、古きをもあさり求めしかば、我が友の一人はたはむれに我が先生の御作納め居る本箱を指して「鏡花文庫」と呼びたり。

いづれ劣りはなきが中にも「照葉狂言」は予の最も好みたるものにして、又今も變らず好めるものなる事ついでなれば記しつ。われ世の中の如何に尊き人賢き人にも逢ひ見度き願ひなけれど、先生にばかりは一度御目にかかり、先生の御作によりてこの年月いかばかり心なぐさみしかを聞えあぐる機會のあらば嬉しからんと十年に過ぎて思ひて變らず、未だ中學に通ひし頃なりしが「泉鏡花先生の御作に就きて」なる一文を草せんとて筆執りし事ありしも、遂に我がよくなし得ざる事なるを思ひて止みぬ。その後屢々同じ願ひの予を驅りし事あれども、われはわが不才を知れ

ば幾度も執りし筆を皆折りて捨てしのみ。

我が處女作は明治四十四年三月相州湯河原の山懐(やまふところ)の流に近き宿の古く汚れたる机の上に成りぬ。その後數ふれば早く既に十數篇の小說戲曲を發表したるが、何れも筆執りてありし間の心に似ず印刷成りてこれを手にする時、餘りの拙なさになさけなくなるをおきまりとしたり。

さればそれらの作品を一冊にまとめて世に出す時些かふてくされたる氣持なきを得ずして、心の底に湧き起る不滿と失望をやけと冷笑を以てなぐさめんと努むるに忙しかりき。かかる事云ふを人のとがむるあらば、われ又更に冷笑を以て自らをなぐさめん。

わが最も心苦しきは文藝の作品と新聞の三面記事との相違を知らざる人にわが作の讀まるる事なり。曾て或る愚なる新聞記者はわが作品の二三をつなぎ合せて我が半生の詐(いつは)りなき告白なりと思ひ、それによりて出たらめなる一文を草し麗々しくも三日に亙りて之を紙上に連載したり。

かかる事何故に心苦しきや敢て言ふの要なき事なれど、玆にわが作品に就きて少しく自註を加へんと欲す。

生れしは麻布の高臺なりしが、幼くして我が家芝にうつりたれば、其邊に住みし人など多く我が記憶に殘るものなきはもとよりなれど、或日或時わが目に映じたる街の様の不思議にも明かに思ひ浮べ得るまゝ、處女作「山の手の子」の舞臺を其處にとりたるなり。唐物屋の頭禿げし亭主の顏今も忘れず、繪草紙賣る店に屢々通ひしも事實なれど、その他の人はお鶴はもとより煙草屋の姉弟も皆我がほしいまゝに描き出せる架空の人物に過ぎざるなり。

「ぼたん」の中の人々は今も世にある人にして、彼の一篇のみはまさしく我が幼き日及び我が見たる人の身の上を筆に上せたるものなるが、我が性質として後に至りよしなき事をしたりと思ふ心強く予を責むるものありき。此の一事を以て予は彼の作品を嫌ふ。

「うすごほり」に就きても亦些かはかかる念ひあれど、お澄さんは彼の小説に書きし如き身の上の人にあらざりし事を記さん。

「その春の頃」は我が作中就中拙きものなるが、彼の作は我が親しき友の身の上にありし事をその友の口より聞きし時話に醉ひて直に筆執りしものなれども、もとより描きたる話の筋道はわが脚色に過ぎず。初めその友の若くして頗る無邪氣なる道德家なりし事にわが同情は催されしが、稿成りし時予に殘りしものはなすべからざる事を爲したる事を悔ゆる念のみなりき。

予は自らも餘りに我儘にして人づき惡き事を知れど、不思議にもわが我儘を許して長く變らぬ僅少の親しき友を有せる事を思ふ毎に限り無く嬉しき心地して胸の躍るを覺ゆ。「ものの哀れ」の松波冬樹はわが中學時代の無二の親友なりき。彼は彼の作中に描きし如く壹岐の島に生れたる少年にして、頗る氣性烈しく狷介の性は他の多くの少年の寧ろ憎むところなりしが、予にとりては又なく親しき友なりしかば、恰も物の哀れを知る頃のわれ等は共に好める詩歌を誦するにも感極まりて屢々泣きぬ。

その後彼は二度目の落第に氣を腐らし朝鮮京城に在りし姉なる人を賴りて行きしが、韓の風は寒かりけん、間も無く肺を病みて吐血し、日本に送り還されて暫時諸處の病院に在りし後明治三十九年十二月二十一日彼の最も嫌ひなりし大阪の地に死にぬ。

「賢さん」の一篇は亡き友田中憲氏と予との交友をありのままに記せり。予は何故か此の一篇を小說と呼ばるる事を忌々しく思ふ心止め難し。恐らくは小說なる二文字が嬉しからぬ聯想を予に與ふればならん。

われ等この人と親しかりし者は皆憲ちやんと呼び馴れたり。憲ちやんは色白く脣紅き美少年にして、予は曾てこの友の如く無邪氣に尊き子供心を長く失はざりし人を見たる事なく世にもめで

たき人に思ひしが、明治四十五年の春慶應義塾理財科を卒業するに先だちて俄に病みてみまかりぬ。生前好んで尺八を弄びたるが、憲ちやん死去の事を聞きしその夜、我が家の裏手の竹藪をへだて、折柄寒き月明りに震へつつ、絶えせず消えずいとかすかに思ひも掛けぬ尺八の音の流るるを聞きて、われは我が心を失はんとしたり。

「途すがら」は五六年前九州に在る姉の許に赴きし時、人に誘はれて炭坑を見に行きし日の日記をもととして作りし純然たる小説なり。折しもその炭坑に火災ありて坑夫あまた地底に焼死したりし惨害の後なりしかば、臆病なる予の心は異常の恐怖に襲はれたりしは事實なれども、何ぞ予に尋ね行くべき美知代のあらんや、すべてはわが作りし物語のみ。その父の命によりて庭前に愛誦の書一切を焼き捨てたる少年俊雄をわれ自らなりと思ひし人ありしが誤れる事甚だし。さきにも云へる如くすべてに寛容なる我が父はわが文學を好む事にも何の干渉を加ふる事なく、我が筆執りて無益にも拙き小説書く事を知れど未だ嘗て予をとがめし事無し、なんぞ予をして我が愛誦の書を焼かしむるが如き愚かしき事をし給はんや。

「ものの哀れ」の父と子の關係も亦わが空想の構へしものなる事を爲念（ねんのため）附記す。

「心づくし」には多くの事實と多くの空想とをまじへたり。これを明かに云へば前半に描きし事

は大方據り處あれど後半殊に結末の數十行は單に都合よき結末を求めて我が綴りしものに過ぎず、予には彼の作中に見るが如き叔父も無く又曾て父母を憚りて我が筆を折らんとしたる事も無し。

「沈丁花」は三人の娘をかりて最も變化なき筈なる山の手の家の、なほかつ時勢の推移に連れて移り行く有樣を主として描かんとしたるが、力足らずして意にたがへるものとなり終れり。彼の作こそは悉くわが空想の產みし所にして、描きたる人々の性格餘りに變化無しとの評ありし時われ自(みづから)も亦頷きたり。

「噂」及び「夢がたり評議員會」はまことに噂と夢がたりに過ぎず、敢て說明を要せざるべし。

「友だち」及び「世の中」は近く予の試みし作なるが、何れは又後に至りて自ら堪へ難き迄厭はしくなるものなるべし。

「嵐」は一昨々年の夏鎌倉に在りし時、一夜俄に風荒れてすさまじく浪の高まりしが、海近き我が友の家の如きは深夜枕に浪をかぶりし程なりしかば、常より寢つき惡しき予の雨戶を搖る風の音、遠く砂濱を打つ濤聲(なみ)の騷がしさに、曉風の靜まる迄一睡もなし能はざりし其の夜わが腦裡に成りし一幕物なり。別段我が家の海嘯(つなみ)に襲はれし事あるにもあらず、その折家に在りしは予一人なれば登場の人物皆わが構へしところにして所謂もでるを有せざるなり。

「いたづら」に就きてはそのかみの事の思ひ出でられて懐しき心地す。わが幼かりし頃は未だ人々耶蘇教に對して故もなき偏見を抱きてありし時代なれば、予等幼き者はなほ不可思議なる邪宗なりと自ら思ひ居りしも無理ならず、その會堂に石つぶてする事は勇しき嬉しきいたづらなりき。

或時近き家の子等と我が家近き蛇坂の上にたてる普連土女學校の寄宿舍の窓に予も誘はれてつぶてしに行きしが、我が家の隣なる寺の子の逃げ遲れて女教師らしき人に捕へられしを殘し、あわてふためきて走り歸りし予等皆其の子の身の上の氣づかはれて、或は生血を吸はるるにはあらずやと思ひ、或は十字架にかけらるるにはあらざるかとさへ疑はれて、誰一人聲高に物言ふ者も無く何れも息をころして安否を氣づかひしが、夕暮方その子のつつがなくかへされて來たりし時、予等皆怖ろしき危難を逃れたる心地してちひさき胸を撫で下したり。

今は懐かしき日の事にて彼の一篇はそれより想ひ浮びしものなり。

予にとりて文學はただ慰みなり。曾て文學は男子一生の事業となすに足るや否やといふ題を掲げて諸家の說を求めし雜誌ありしが、予は事業なる文字の故も無く厭はしき心地して、かかる問に眞顔にて答ふる人の心持わが思ひも及ばざる勇しきものなる事を知りて寂しかりき。

われ常に思へり、われにして若し世の多くの人の如く勳章を得てなぐさまば、われにしてその人々の如く文學事業に一身を捧ぐる事を得ばいかばかり幸ならんと。文學は遂にわが賴り無きなぐさみなり。(大正二年春)

――「三田文學」大正七年八月號

「心づくし」の序

此の集收むるところの作品の過半は今日までに發表したる余の作品中最も厭ふべく忌むべきものと自(みづから)おもへるところのものにしていづれは昨日の事の悔まれぬはなきが中にもかゝる作品を出(いだ)せし事は就中余の不快とするところなり。今改めて之を市に出すは若輩にして心動き易き自をして再びはかゝる悔なからしめんが爲め自を責むる訓戒の一助となさんとするに過ぎず。淺薄なる皮肉に安價なる慰安を求めてしかも自を宜しと思へりし昨日の己れを鞭たん事は余をして苦痛と歡喜とを相まじへたる一種の快感を味はしむ。

乍末余は再びかゝる低級なる作品を出す事なきを確く信じて疑はざる事を附記す。（大正四年二月四日）

「海上日記」の序

大正元年の秋北米合衆國に渡り同三年の初夏の頃迄東部マサチユセツ州ケムブリツヂの學校町の下宿の二階に一年あまりを送つた間に書いたものを集めて一冊とした。

その頃自分はそれ迄に書いた自分の作品の誇張と衒氣に冷汗を覺えると同時に世上行はるる小說戲曲評論の類の小悧巧と惆悵に厭氣がさし先づ努めて自分の持つてゐる慣習的の技巧を振捨てようと考へた。所謂小說らしい小說やお芝居らしい戲曲と絕緣する爲めの消極的手段として日記を記す心持で書いて見ようと思つた。この集に收めた四篇は手習艸紙のつもりで書いた夥しい原稿の中の一部である。「船中」と「同窓」は中途で厭になつて止めたのを後に加筆稿了し「楡の樹蔭」はその頃の日記の中から拾ひ集めた彼地の夏の小景を敍したものでこれだけは新しく書いたと云ふ方が適當かもしれない。いづれにしても作品の內容を成す素材は自分の想像の所產であるから

これを自分の日記と呼ぶ事は出來ないが創作の態度に至つては旅客が旅舍の一室にその日その日の見聞を手帳に記すのとかはらなかつた。平調枯淡に過ぐるの譏は作者が甘んじて受くるところである。この度一册に纏めて出版する事になつたので二度三度繰返して讀んだが不相變自分を滿足させなかつた。こんなものを本にするのは羞しくもあるが同時に又これらの作品を書いた當時の自分自身を懷しむよすがとして流石に捨て難くも思はれる。冬は雪に埋もれ夏は汗に堪へ難き楡の樹蔭の貧しき下宿の西向の窓に机を据ゑて學業の餘暇に筆を執つた自分の姿が彷彿として浮んで來る。この集を世に出す事になつたのも主として自分自身を限りなく戀しく思ふ心持に基くのである。(大正六年の秋)

――「三田文學」大正六年十一月號

購書美談

吾々の時代の多過ぎる程多數の作家の中で、古典として尊重せらるべき作品を後世に殘す人が幾人あるかを想ふ度に、自分は自分自身をも含ませてなさけ無い心持になるのを禁じる事が出來無い。

十數年前、文藝上の新しい主義が海外から移入された頃、その主義宣傳の運動に携はつた者は、政黨政派の爭のやうに黨同伐異を事としたが、年月がたつて彌次馬に特有の興奮狀態から覺醒した時、初めて彼等は自分達の値うちを意識し、或は意識させられた。或者は生れ故鄕の土臭い田舍に歸り、或者は偉大なる都市の包容力を幸にして何處かに影を潛めてしまつた。近く更に新しい主義を提唱した一派は、投書家相手の雜誌に擔がれて、精神に異狀を呈した者の屢々經驗する喜悅の極、足は地上を離れて天へも昇るやうな有頂天の心狀に陷り、自分達丈は疑も無く生れな

がら恵まれた者であり、止る處を知らぬ力の進展を自己の內に認めるものだと世の中を憚らず公言したが、遠き將來はいざしらず、少くとも今日に於ては嘲笑の中に葬むられんとする狀態である。

さういふ中にあつて、その主義傾向の如何を問はず、ほんとに僅少の作家ばかりが永久性を持つて居るのであるが、些かの疑も無く第一に指を屈すべきは泉鏡花先生である。

救ふ可らざる沒分曉漢は別として、多少なりとも文藝の作品に親しみを持つ人は、その主義や趣味の相違から慊らず思ふ點はあるに違ひ無いが、何れにしても泉先生の作品が古典として殘ることを疑ふ者はあるまいと思ふ。かう云ふ自分自身さへ先生の作品に慊らぬ節が無いとは云へない。例之世間の誰も彼も口を揃へて讚美し、全體としての作品には感心しない人さへこればかりは激稱する絢爛を極めた先生の文章の如き、自分は稀なる名文だと思ふと同時に、時にふと天下の惡文では無いだらうかと疑ふ事がある。先生の作品の愛讀者の多くが隨喜する所謂江戶趣味も自分は眉をひそめ度い。

それならば泉先生の藝術の偉大さは何處にあるかといへば、それはもつと本質的なもので、卽ち作者の經驗する感情――泉先生の場合には主として憧憬と反抗に根ざす――を讀者に移入し、

作者の形造る感情世界に全然引入れてしまふ驚く可き魅力にある。勿論先生の作品に特有の構造、形式、色彩、音色の調整が此の使命を果す爲めに與かつて力ある事は疑ひも無いが、先生の作品が他に類例を見ない程讀者の心に影響する力を持つてゐるのは、主として先生の持つて居られる至純の感情の爲めである。

先生の作品が永久性を帶びてゐるのは、單に一時代の思潮流行と隔絶して居るからだと消極的に論じるのは誤りで、それはその作品の内に含まれて居る至純の感情が、永遠に人の心の底に潛んで居る事實に歸す可きである。何れにしても先生の作品の稀有なる魅力は、内面的にも外面的にも、讀者に與へる感化力は偉大である。自分は倦怠と憂鬱に世の中も人間も厭はしくばかり思はれた頃、先生の作品によつて眠つてゐる感情を喚醒(よびさ)まされ、生甲斐のある世界を見出した一人である。同時に自分は、作品に現れてゐる先生の惡い趣味——例之月並な惡ふざけ、安價な芝居がかり、感服出來兼る江戸がり——などの感化を受ける人間がさぞ多い事だらうと心配になる。殷鑑遠からず所謂鏡花會の人々の中などには鼻持ちもならぬ氣障(きざ)な代物(しろもの)が多いさうである。

泉先生の作品の愛讀者には先生の作品の全部を集めて所藏しなければ承知しない人の多いのも、先生の作品の魅力の異常なる事を示すものである。或人々にとつては、その作品に對する欽慕は

屢々戀に等しい。自分の如きも其の一人である。

「外科室」「夜行巡査」の昔から最近に到る迄の夥しい小說戲曲小品隨筆を、單行本雜誌新聞等に初めて現れた形式でひとつも殘らず取揃へる事は殆ど不可能に思はれる。明治三十四五年頃から心掛けて、今日に到つて到底駄目だと思つた。

自分が泉先生の作品を愛讀し始めたのはそれよりもずつと前であるが、丁度中學の二年時分から學校へ通ふ往復に、三田通の書店福島屋の店頭に一日も缺かさず新刊の出るのを待暮して通つた。けれども自分がまだお伽噺を讀んで居た時代に出た單行本又は雜誌に揭載されたものを手に入れるのは、非常なる根氣と時間とを要する爲事であつた。

「新小說」「文藝俱樂部」「新著月刊」「小天地」といふやうな一流の文藝雜誌に揭載されたものは大凡手に入つたつもりでゐた。ところが、日露戰爭時分の事だと思ふ。博文館から發行される「葉書文學」といふ雜誌に、岡田八千代夫人の談話筆記だつたと記憶するが、その愛讀書について述べてある中に、泉先生の作品殊に「笈摺草紙」が激稱してあつた。それを見て自分は初めて先生に「笈摺草紙」といふ作品のある事を知り、今日迄のやうな不秩序な古本探しでは、まだまだ見落しが澤山あるに違ひ無いと思つた。

其處で自分は上野の圖書館に通つて、あらゆる文藝雜誌を借覽して「泉鏡花先生著作目錄」といふものを作つた。それを懷にして手近の三田通りから始めて、本鄕神田の古本屋を閑さへあれば漁り步いた。夜は緣日の夜店のかんてらの油煙にむせながら、蓆の上の古雜誌を端から端迄順々に探し求めた。

冬の寒い夜の事であつた。神田の夜店を漁りに行つて、有斐閣の前あたりだつたと覺えてゐるが、蓆の上に積重ねてある雜誌の間に、手垢で汚れた「笈摺草紙」の出て居る「文藝倶樂部」を見出した。喜びに震へる手に取上げて、値段をきくと拾貳錢だといふ。當時「文藝倶樂部」の古本に對してそれは法外の値段だつた。けれども自分が久しく探し求めて居た「笈摺草紙」に對してはちつとも高いとも思はなかつた。

その上自分は金錢について細かく云々する事を卑しむやうな教育を我家で受けて居たので、どんな物でも値切るのを恥ぢる習癖を持つて居た。直ぐに言ひ値で買はうとした。

ところが丁度自分と同じやうに其處にしやがんで、先刻から古雜誌を引繰返して居た一人の男があつた。商家の若僧らしかつたが、古本屋のおやぢが自分にむかつて十二錢だと答へた時、

「十二錢？　馬鹿にしてやがら、こんな古雜誌。」

と横合から如何にも人を馬鹿にするなといふ語氣で云つて、目深くかぶつた鳥打帽子の下に暗い顏をふり向けて同意を求める目付をした。自分は思はず知らず財布にかけた手を放した。

勿論その若僧は彼自身も買手であるといふ共同の利益の爲に自ら義憤を發したのであらう。けれども自分に取つては彼の一言は手痛く胸に響いた。「笈摺草紙」の十二錢は自分の主觀的價格からみればおい夫と支拂つて差支へないけれども、客觀的價格からみれば成程人を馬鹿にした者に違ひない。見榮坊の東京の人間の弱味が自分をして前後の分別も無くなさしてしまつた。人前で他人に馬鹿にされる事は何よりも我慢が出來ない。どうしても値切らなければ恥辱だと思つたのである。

自分はそれを八錢に値切つたのか六錢に値切つたのか四錢に値切つたのか忘れてしまつたが、兎に角値切つたのである。いかにも古本は買馴れてゐるやうな顏付をしたのだつたらうと思ふ。

茶色の釜形の帽子の中に目も鼻もかくれてゐて、色の褪めた毛糸の襟巻に顎を埋めながら身動きもしないで煙草を飲んでゐた古本屋のおやぢは、烟管をはたくのも不性つたらしい奴であつたが、

「まかりません。」

と不機嫌な取付場の無い返事をして、又烟管をくはへた。

未練らしく押問答をした後で、おやぢの傲岸な態度は一層自分の立場をやりきれなくしてしまつた。今更それを買ふ事は出來なくなつてしまつたが、此の一冊を手に入れなければ永久に「笈摺草紙」は手に入らないやうに思はれた。それでも自分の見榮を張り度いけちな根性は、自分をしてさもそんなものは入るものかといふやうな態度を執らせてしまつた。

立上つて勢ひよく歩き出したが、どうしても思ひ切れなかつた。ふりかへつて見ると、おやぢは何處を風が吹くといつた風をして煙を吹いてゐるのであつた。

癪に障つて堪らないので、往來の石つころを蹴飛ばした勢ひで、一町ばかり次の町筋の角迄來たが、右に行かうか左に行かうかと考へた時、どうしてももう一度後に引返して恥を忍んでも「笈摺草紙」を買はなければならないと思ふ心持が強く起つた。暫時躊躇した後で、自分は思ひ切つて後に引返した。

古本屋のおやぢは依然として身動きもしないで煙草をふかして居たが、たつた五分か十分とはたたない間に「笈摺草紙」はもう賣れてしまつた。

自分は涙の出る程なさけない心持で、古本屋のおやぢと先刻の若僧を憎んだ。なんだかしらな

いが、彼の若僧が故意にけちをつけて、自分の買はうとする心持を碎き、その後でまんまとせしめてしまつたやうに思はれて爲方が無かつた。けれどもそれは恐らくは自分のひがみであらう。あんな奴がそれ程に「笈摺草紙」に焦れてゐるとは想像出來ないから。未練らしく莚の上の古雜誌を、もしやと思つて幾度も探してゐる自分を、古本屋のおやぢはさげすむやうに見た。

自分は其後泉先生及び永井荷風先生の作品の出てゐる古雜誌は一切云ひ値で買ふ事にしたが、他日、「笈摺草紙」を手に入れてから十年以上もたつてゐる今日に到つて、未だ彼の神田の夜店の古本屋のおやぢの姿を、憎惡の念を抱かずに思ひ出す事は出來ないのである。

或時或席で右の「笈摺草紙」を買ひそこなつた話をした。すると其處にゐた友人梶原可吉君は、その話に誘はれて、彼の購書苦心談を彼一流の高調子で始めた。その中で泉先生の「日本橋」についての一節を、自分は此處に傳へようと思ふ。

梶原君は常に若々しい心を失はない熱情家で、且社會改良に熱心な理想家である。當然の歸結としてその愛好する藝術は或種の傾向の著しいものに限られてゐる。泉鏡花先生の作品に現れてゐる道德——ありふれた世間の血の氣の無い道德ではなく、先生の熱情に育くまれた道德——は

彼が隨喜し、先生の主張される義理人情の世界、戀愛至上主義は卽ち彼が淚を流して渴仰すると
ころである。

大正三年の秋彼は滿洲大連で、面白くも無い殖民地の人間に圍まれて、面白くも無い月給取の
生活を送つてゐた。一日の勞務が終ると、寄食してゐる叔父の家に歸り、入浴して晚餐の卓にむ
かふのであるが、恰も殖民地に特有なもののやうに思はれる苛々した心狀を免れる事は出來なか
つた。彼は夕暮を待つ蝙蝠のやうに、日が沈むと家を出て散步するのが癖になつた。

夕暮の早い大連の町には初秋の霧のかかる頃であつた。大通のアカシヤの並樹の下を、彼は街
燈の灯に照らされながら町の方へ步くのがおきまりだつた。

目的の無い散步ではあつたが、每日々々同じ道を步くうちに彼が必ず立寄る處が出來た。それ
は或る町角の本屋である。

元來好き嫌ひの色彩の鮮明な梶原君は、いつたん惚れたとなると、その惚れた相手方を最上級
に祭り上げなければ承知しない人間である。さうして彼には學校時代からお馴染の三田通りの福
島屋といふ惚れ込んだ本屋があつて、東京に居る時は勿論、神戶にゐても大連にゐても、遙々注
文して其の店から送つて貰ふ事になつてゐたから、大連の町角の本屋では別段買物をするのでは

なかつた。ただ女の人が呉服屋の窓の前に立てば日の色が變るやうに、彼は本屋の前に立つて胸の躍るのを覺える種類の人間だつたのである。

或晩彼は其の町角の本屋の店に入つて新刊の本を一巡見て居た時、泉鏡花先生の新作「日本橋」を他のがらくた本の間に見出した。彼は迂濶にも「日本橋」の出版の豫告を知らなかつたので、菊判帙入の美本を手に取上げる迄は、それが眞實に泉先生の新作であるかどうかを疑つた。其晩直ぐに福島屋に注文狀を出したのは勿論である。

今日は來るか明日は屆くかと、毎日「日本橋」を待暮したが、一週間たつても十日たつても屆かない。由來福島屋は上品なおかみさんと大樣な若旦那の經營する氣持のいい店であるが、勘定を取りに來ないのと、記帳落の多いのと、注文の品をなかなか持つて來ないので聞えてゐる。「日本橋」の發送も勿論惡氣は無いが等閑にされてゐたのに違ひ無い。

その間に梶原君の町角の本屋に通ふ事は一日も止まなかつた。一刻も早く讀み度いと思ふ心がどうしても彼を落着かせなかつた。毎日毎日店頭に立ちながら、曾て買物をしない自分に向けられる小僧の視線を不愉快に思ひながら、幾度手に取上げて「日本橋」を開いて見たかわからない。

或夕方、又行くのは羞しいなと心の中では思ひながら本屋を訪れたが、その日迄は二冊並んで

ゐた「日本橋」がいつもの場所に一冊しか見えなかつた。失敗つた。誰かに買はれたなと、自分の祕藏の物を奪はれたやうな嫉妬を感じた。けれどもまだ一冊殘つてゐるのを少しばかりの慰めにして、彼は又それを手に取つて見たが、心なしか小村雪岱氏の纎細な筆で描かれた綺麗な表紙も何時の間にか手擦れ垢じみて來たやうに思はれた。

「自分の手垢で汚したのかもしれないが、その時はなんだか他人も自分のやうに『日本橋』に思ひをかけてゐるやうに思はれて爲方がなかつた。」

と此話をした時に、梶原君は附加へて説明した。

彼は毎日徒らに手に取上げては又もとの書棚にかへす「日本橋」に不思議な愛着を感じて來た。あてにならない福島屋の送本を待つてる間に、殘つた一冊も賣れてしまつたらどんなに寂しいだらうと考へた。大連みたやうな下等極まるところにも我が泉先生の作品を讀む奴がゐるのだから油斷は出來ない。どうしてもこれは自分が買つてしまはうと思つた。本は必ず福島屋ときめてはゐるのだが、そんな事は云つてゐられない位殘りの一冊は彼の心を離れたくなつてゐた。

さうだ買はうと決心した時、梶原君は懷中殆んど無一文だつたなさけない事實を思ひ出した。

「どうしてあれ程貧乏だつたのか、兎に角五十錢もなかつた。」

と羞しがりの梶原君は、今でも顔を赤くして云ふのである。

幾度見直しても定價金一圓二十錢といふ奥附は變らなかつた。此時程無駄づかひを悔いた事はなかつた。勿論乏しい月給ではあるが、貰つた其日に殆どすべて飛んでしまつた事を思ふと殘念で堪らなかつた。それからそれと自分の平生の生活から、大連なんかに來てゐる身の上迄考へながら、アカシヤの並木の下を彼は悄然として叔父の家に歸つた。

福島屋に宛ては早速催促狀を出したが、町角の本屋へ通ふ事は矢張り止められなかつた。晝の間會社の事務室の机にむかつても、誰かが「日本橋」の殘りの一册を自分から奪つて行く不安が胸中を往來した。どうせ遲くとも福島屋から送つて來るには違ひないと考へても、いつたん執心を掛けた町角の本屋の「日本橋」を、自分の讀まないうちに先きに誰かに讀まれてしまふ事が面白くなかつた。

福島屋からの送本は何時來るだらう。一圓二十錢の金が欲しい、月給日が早く來てくれればいいといふ事を繰返し繰返し考へながら、毎日彼は町角の本屋に通つた。その道筋の川にかかつてゐる橋の名の日本橋といふのさへ自分を嘲笑する爲めに名づけられたもののやうに思はれた。

本屋の店頭に立つて、まだ殘りの一册が無事に書棚の上のがらくた本の間に積まれてゐるのを

見て一先づ安心して家に引返へすのも、二週間過ぎ三週間過ぎ、たうとう一月近くたつた或日、彼は漸く福島屋から送つて來た「日本橋」を受取つたが、それと同時に待焦れてゐた月給日も到來した。

幾枚かの札の入つてゐる一封を受取ると、梶原君は直ぐに町角の本屋に驅けつけて、此の幾日の間毎日毎日寂しい懐をなげきながら眺めてゐた「日本橋」を手に入れた。福島屋からの一冊は現に手に持つてゐるのだけれど、あれ程迄に自分が思ひを寄せた一冊を、何處の誰だかわかりもしない他人の手に委ねる事は情に於て忍びなかつたのださうである。

「その時の嬉しさつたらなかつた。」

と梶原君は目も鼻もなくなした嬉しさうな顏をして話を結んだ。

「笈摺草紙」を手に入れそこなつた自分の失敗談を冒頭にふつて、梶原君が「日本橋」を手に入れた一事を購書美談として世の人に傳へようと思ふ。（大正七年七月七日）

「三田文學」大正七年八月號

向不見の強味

たださへ夏は氣短になり勝なのに全身麻醉をかけられて、外科手術をした後の不愉快な心持は、病院を出てから一週間にもなるのに、未だに執念深く殘つて居る。

甚だ汚ならしい話だが、疾患は痔瘻なので、病院へ通ふのに、乘物に腰掛けて搖られるのが苦痛で、何時も電車の釣革につかまつて立つて居るのであるから、芝の端から築地迄小一時間もかかる道中は、たとへ囘復期にありとはいへ、衰弱した身體には隨分堪(こた)へるのである。病院で患部を洗はれ、火照(ほて)る程沁みる藥を忌々しく思ひながら、又同じ道を立ちづめの電車で家に歸ると、全く疲れ切つて何をする氣力もなくなつてしまふ。本を讀む事も、新聞を讀む事も大儀で、今でもクロロホルムのさめ切らないやうな氣持で仰臥(うつぶ)してゐるばかりで、苛立たしい心持を恥ぢながら、それを免れる事が出來ないのである。

ところへ兄が見舞に來てくれて、いろんな話の末に、歌舞伎座の「沈鐘」を見に行かうと思ふが身體に故障が起らなければ一緒に行かないかと誘つてくれた。自分も「沈鐘」は見度いと思つてゐたので喜んで同意したが、その實、心の中ではこの芝居を兄には見せ度くないと思ふ心持が強かつた。

自分は世に所謂新しい芝居を好んで見度がる一人であるが、それを嚴格に批判的に見る事はあまりに殘酷な氣がして堪へられない。殊に日本の俳優が泰西の名戲曲を演じる場合の如きは、その原作に對する尊敬と、出演者の努力を買ふ同情と、時には原作の偉大さと所演の貧弱さの餘りに極端な對比が惹起する憐愍から、やうやく一人立ちしてヨチヨチ歩く赤坊を見る親の心持で、いたはりいたはり見てゐる態度を取るのである。恐らくこれは自分一人でなく、世の劇評家諸氏といへども、歌舞伎劇に對するやうに、容赦なくうまいまづいを論ふのでなく、割引に割引をして見るのに違ひない。近頃流行の感激したがる一派といへども、子供の習字を極上々とほめはやす手なのだらうと推察される。ところが吾々と違つて新しい戲曲の發達に特別の關係の無い人、換言すれば所謂文壇の人でない人には、下手な芝居は單純に下手な芝居で、遠慮會釋もなければ強ひておだてたりほめたりする心持も起らない。坪内士行、東儀鐵笛、上山草人、松井須磨子よ

りも、市村羽左衛門、尾上菊五郎、河合武雄、喜多村綠郎の方が一見して比べものにならない程うまいと思はれるのは當然である。此點に於て、新しい戯曲の上演に同情を持つ自分は、すぐれて感覺の鋭い、藝術に對する理解力の深い、且つ新しい芝居をさへ割引しないで見るに違ひない兄に對して、自分の掌中の物をかばふ心地から、自分自身も文藝の事に携はる身の、一種職業的恐怖ともいふべき不思議な感情を抱いたのである。

最近に外國から歸つて來た兄は、長い間海外に生活した者の誰もが感じるやうに、まだ以前の生れ故郷の生活にしつくりあてはまらない心持から、何かしら新しい刺戟に興味を見出し度がつてゐるらしかつた。彼地に居る間に芝居を見て廻るのを爲事にして居た事實と、曾て本で讀んだ「沈鐘」の面白さを、そのまま舞臺の上に期待して居るらしい樣子が自分をして一層不安を抱かせたのである。

如何かしてうまく演つてくれればいい、新しい役者の新しい芝居も決して愚劣なものではないと思ひ知らせてくれればいいと、自分は他人事でない氣で心配した。

その日は朝のうちに病院に行つて、診察の濟んだのが正午近かつた。病院の近所で認めた食事の終つたのが一時で、それから家に歸つて又出直す時間は十分あるけれども、電車に乘つて立ち

づめの不愉快を考へると歸宅する氣はなくなつた。しかし四時開場の時間迄をどうして暮さうかと暫時考へ惱んだ末、先頃入院してゐた間に度々見舞に來てくれた知人の家に行つて、お茶でも頂戴しながら遠慮なく横倒しにならして貰ふ事に決めた。

主人は留守だつたが、心置きない間柄なので、勸められるままに上つて、不自由な身體を氣隨に横にさせて貰ひながら主婦と話し込んで居たが、後から他にお客が來たので、主婦はその日の新聞を自分の目の前に揃へてくれて、そのまま座敷の方に行つてしまつた。

「やまと」新聞に連載されてゐる泉鏡花先生の「芍薬の歌」に感服した後で、「時事新報」の文藝欄に本間久雄氏の「新秋文壇の收穫」=技巧派と無技巧派の對比=といふ創作月評中に「新小說」九月號所載、拙作「新嘉坡の一夜」に對する批評のあるのを見出した。

由來雜誌新聞を精讀しない自分は、雜誌新聞の編輯者の爲めに最も調法な人の一人らしい本間氏の筆に成る文章——評論批評紹介飜譯等——を餘り拜見した事が無く、たまに拜見したのがあつても、全く拜見しなかつたと同じやうに、まるつきり忘れてしまつたのである。何れにしても同氏が現文壇の批評家として名のある人である事と、且つ非道い誤譯をする人だといふ以外には殆ど何も知る處が無かつた。

非道い誤譯者だといふ事は、飜譯物の嫌ひな自分の發見ではなく、友達の一人に物好きがあつて、誤譯指摘の興味に沒頭してゐて、本間氏の飜譯は頗る蕪雜拙劣である上に間違ひだらけだといふ事を、御叮嚀にも原書と對照して、いやといふ程並べ立ててきかされた事があるのである。その時自分は、どうせ外國語を日本語に譯すのだから、ちつとは間違ひもあるだらうと、自分だつて飜譯をすれば間違ひだらけに違ひないと思ふ心持から、本間氏に同情したが、同時に、そんな不自由な語學の力で飜譯なんかしなければいいのにと考へたのは事實である。

扨て「時事新報」に出てゐる本間氏の批評は前々から續いてゐるもので、その日のは第六回目であつた。第一回から讀んでゐない自分には「技巧派と無技巧派の對比」といふ標題の意味がよく解らなかつたが、恐らくは此批評の序論として新秋文壇なるものに於て、多少なりとも努力した作家を分つて、技巧派と無技巧派の二派とし、之を今日の文壇の二潮流と見て批評してゐるのであらうと思ふ。しかし自分が技巧派なのか無技巧派なのかは、凡そ器用と無器用はあつても無技巧と呼ぶ可き作家の存在を知らない自分には想像がつかなかつた。

本間氏は「新嘉坡の一夜」の梗概を記して「永らく英佛に遊んでゐた男が、日本への歸途、新嘉坡に立ちより色街に痛飲して、滯歐中の女難の追懷に耽るといふ一夜を描いたものである」と云

つてゐるが、これを讀んだ自分は餘りの意外に喫驚した。これは頭腦が惡いなと思つた。
頭腦のいい作家、頭腦の惡い作家と云ふのは近頃の文壇の流行語ださうで、頭腦のいい派、頭腦の惡い派と對比すると、それが技巧派無技巧派と同意味なのではないかとも思はれる。頭腦の惡い派に云はせると、頭腦のいい方は兎角靈魂の存在を忘れ勝でいけないのださうである。どんな靈魂を持つてゐるのかしらないが、本間氏は明かに頭腦の惡い派の重鎭なのであらうと、その時の自分の苛々した心持は、人の惡い愚劣な皮肉を弄んだ。
別段勝れていい頭腦の所有者でなくても、誰が讀んでもわかる事だと思ふが、「新嘉坡の一夜」は滯歐中の女難の追懷に耽る事を主として描いた作品では無い。その形式から見れば、新嘉坡の一夜そのものを描いた作品である。詳しく言へば上月と呼ぶ旅客が其地の娼家で、想ひも掛けない女と、想ひも掛けない一夜を過した事を描き、主人公上月が、時につけ折にふれて、彼が荷へる運命の怖ろしさを次第に思ひ知つてゆく事を暗に示してゐる作品である。滯歐中の追懷は、彼の心に潛んで、その一生を暗くする女難の怖れを說明し、主人公をして單に紀行文の筆者、又は寫生的に描いた文章の主要人物よりも一歩進んだものとして浮ばせ度い爲めの背景なのである。
但し作者は近頃の文壇の流行に背馳して誇大な發想や、活動寫眞的小細工にみちた脚色を厭ふ

傾向から、無理にも主觀的に說明的に流れるのを避け、強ひて平調な、殆ど紀行文に近い形式を擇んだ。その爲めには、「第一毒茶を勸めたといふのは眞實だらうか噓だらうか」と上月は疑つたが、結局わからなかつたままにして、作者は此の一大事にさへ說明を加へずに稿を終つた。それを知つてゐるのは女一人で、上月の心には、それが眞實か噓かを思ひ迷ふ暗い疑念さへ殘ればいいのだと思つたのである。お芝居になり度くない爲めの用意に外ならない。

若しも此の平調を心掛けた結果の作品が、單に平調である丈で、暗示に富んでゐないと云つて責めるのならば、作者は此點に於て我が力及ばずと自分自身嘆いて居るのであるから、謹んで評者の眼識の高いのに服したであらう。不幸にして本間氏は作品の骨子をさへ正しくは捉へてくれなかつた。しかも自分では滿足した態度で洒々として批評の筆を進めてゐる。

本間氏は、上月が支那苦力を見て「人類に對する親しい感情を起させるやうな人間には見えない」と感じたのをつかまへて「此作者は恐らく美醜の感覺の強い人であらう。しかしそれは決して常識の範圍を出でない。此作者には大部分、外形が美醜判斷の標準となつてゐる。作者の西洋崇拜もそこから來てゐる。作者の貴族趣味もそこから來てゐる」と斷じ、更に進んで、西洋崇拜貴族趣味もいいけれど、それは「その人の熱度乃至信念を裏づけたものでなければならない」といつ

て、最後に「此の作者のやうに美醜判斷の標準を、對象の『外形』に置いてなされたものである時、私はそれらを排斥する。さういふ外形的美醜判斷を捨てて今少し事象の內部に透入することが必要ではないか。今少し『人類に對する親しい感情』を胸に抱いて一切の事象に對することが必要ではないか。私はこのことについて特にこの作者の反省を望む」と結んだ。

　自分は批評の怖ろしさ、批評家といふものの怖ろしさを痛感した。若しも自分が「新嘉坡の一夜」の作者でなく、且つその作品を讀んだ事が無くて、此の批評を見たらば、恐らく自分は本間氏のもつともらしい書振りから判斷して、その批評の正確さを疑はなかつたであらう。僞物を憎む自分の性質は、かかる際どうしても本間氏に對して好感を持つ事が出來なかつた。

　自分は明かに「美醜の感覺」の銳い人間に違ひ無い。且つ健全な二個の目を所有してゐる限り、その銳い感覺は目に觸れる對象の外形の美醜を強く感じる事は當然である。「新嘉坡の一夜」の主人公上月は、長い間の航海に、青空と青海に圍まれて塵埃を浴びず、帆綱に鳴る潮風と船側を打つ波の音を聽く丈で、濁つた雜音には遠ざかつてゐた。親しい交りを續けて來た同船の客に置いて行かれて、孤獨の哀感に惱んでゐる時に、先づ耳を襲ふわめき聲、石炭の山の崩れる音に平靜を奪はれ、先づ目に觸れるむさくるしい苦力の群を見て、直ちに苛立たしい心から、それを嫌惡

する念の起るのは當然である。若しその苦力の悲惨なる存在の原因を考へなければならないといふならば、作者は評者の「感覺の鈍さ」を輕蔑するより外に爲方が無い。「新嘉坡の一夜」は、社會問題を取扱つた論文では無い。「新嘉坡の一夜」は支那苦力の存在を問題として論じる傾向小説でもない。若し強ひて近時流行の人道がる傾向におもねつて、長々と苦力の狀態を嘆き悲しむならば、それこそ「藝術的色調」の稀薄なものになるであらう。何れにしても本間氏の如く自分自身の感覺を通して感じる事の無いらしい人、自分自身の頭腦で考へる事の無いらしい人、換言すれば、無闇に他人の書いた本と、その時々の雜誌新聞がつくる流行を頼りにして生きてゐる傾向の人が考へてゐるやうに、生きた人間は單純なものではない。自然主義の流行する時は、人間を獸(けだもの)扱ひにしなくては淺薄だと考へ、人道主義の力說される時は、一切のものに對して無責任無反省に目をつぶつて愛を感じなければならないのだと、座右の銘にして忘れない種類の人間程馬鹿々々しいものはない。或作品に「人類に對する親しい感情」が滲み出して居るかどうかといふ事は、その作品の中に憎惡怨恨の言葉のありなしに關係はしないのである。生きた此の世の中では、相手の横面を張飛す事さへ「人類に對する親しい感情」を伴つて起る事もある。愛だ愛だと下宿の二階で叫んでゐるのは、それは單に根底の無い覺悟に過ぎない。自分の平調枯淡な作品の場合に引合ひ

に出しては相濟まない氣がするけれど、日本ではお手輕な愛のかたまりのやうに誤解されてしまつた大トルストイの作品中に、いかに憎惡の念の熾烈に現れてゐるかは頭腦の惡い派にはわからないのであらうか。

評者は又作者を目して「西洋崇拜であり、貴族趣味」だと呼んでゐるが、「新嘉坡の一夜」の何處から推斷して作者を西洋崇拜の貴族趣味だといふのであるか。自分は殘念ながら今日の日本人が歐米人に勝つてゐるものと自惚れて安んじてはゐられないが、さりとて外の今日の日本人、殊に文壇の人々に比べては、あまりに西洋崇拜の度の低過ぎる一人だとさへ考へてゐる。自分などから見ると、本間氏その他同傾向の人々、もつと明晰に云へばヂヤアナリズム信奉者程盲目的の西洋崇拜者は無いやうに思はれる。取捨選擇も無く西洋人の所說を紹介し、西洋人の作品を誤譯する事など、自分などには、思ひも及ばない事である。新嘉坡の町を步いてゐる上月が、汚ない町を過ぎた後で、大きな旅館の前に立つて、憧憬の念を抱きながら西洋を想ふのは、別れて來た土地に對する愛着から自然と起る感情以外の何ものでもない。さういふあたりまへの溫情さへ感じ得ない程の木像的思索家に「人類に對する親しい感情」がほんとに起るとは想像されない。彼等は先づ西洋の本を捨てて――彼等自身の言葉を借りていへば――街に出づる必要がある。

今日の文明の形成者として、東洋人よりも西洋人の方が偉かつた事は疑ひが無い。しかしそれは單に「外形の美醜の判斷」がもたらした結果では無い。その文明を生み出した彼等を尊敬するのである。甚だ面白くない例だが、之を文壇に見ても、本間氏の如き見當違ひの批評家さへ、大きな顏をしてゐられる我文壇の貧弱さは、いかに最負目に見ても崇拜の對象にはなり兼るのである。貴族趣味についても自分は「新嘉坡の一夜」の何處から推斷された非難なのか飲み込めない。あの作品の何處に貴族趣味が說いてあるか。しかし若し貴族趣味といふものが、平俗凡庸卑劣淺薄を憎み、よりよき人の世を憧憬する事を指すのならば、自分は確かに貴族趣味だ。「人類に對する親しい感情」を多分に持ち、且人類の醜惡なる事實の力強さに壓迫を感じて悩む自分は、どうかしてよりよき人の世の出現を希望すると同時に、醜惡なる人間の影を潛める事を熱望してゐる。小說の月評にさへ、流行の民衆がる機會を捉へんとする人間の心の「內部に透入して」、自分はその醜惡を憎むので、その人間の面つきのまづい爲めに嫌惡するのではない。

自分の貴族趣味は、頭腦の惡い人間よりもより多く無反省な人間を憎み、良心を所有しない人間を唾棄する。換言すれば、わけもわからない癖にわかつた顏をし、もつともらしい風をして出たらめを云ふ人間を嫌ふのである。さういふ人間の集團が存在する限り、人類の幸福は阻まれる

からである。
自分は長火鉢の側に不自由な身體を横にしたまゝ、珍しく眞面目に腹が立つて、暫時の間、喧嘩をしたい心持に苦しんだが、頭の上の柱に掛かつてゐる時計が三時をうつたので驚いて起きかへつた。さうして冷くなつた茶を飲んだ時は、自分の弱點だと平生から思ふのだが、又しても、憤慨したつて自分なんかの力では多數者にはかなはないといふ若隱居根性が起きて來て、苦い笑が浮んで來た。
冷靜になつた自分は續いて本間氏の芥川龍之介氏の小說「奉教人の死」に對する批評を讀んだ。さうしてあの小說を「此作は作者が長崎耶蘇會出版の『れげんだ・おれあ』と題する書の中の傳說に文飾を施したものに過ぎないと云つてゐるのによつても解る通り、全體としてやはり在來の童話の味はひである、傳說の味はひである」と云ひ「童話以上、傳說以上――作者獨自の解釋なり、創意なりを加へたものを求めたい」とあるのを見ると氣の毒になつて、「人類に對する憐愍」をさへ本間氏に對して感じたのである。
自分は芥川氏の作品を餘り好まないが、しかしそのづばぬけた「技倆」の冴えには敬服してゐる。「奉教人の死」も亦勝れたる作品であると思つた。けれどもあの作品には、本間氏がいふやうな

童話の味はひなどは皆無である。傳說の味はひさへ稀薄である。多分にある味はひは、傳說らしい材料を、近代的小說の悧巧な企畫（プロット）に活かさうとする工風と、更にその工風をいかにして覆ひかくさんとしたかを示す、智的惡戲の興味である。其處が自分の芥川氏に對する不滿の點で、殊に「奉教人の死」第二節「予が所藏に關する、長崎耶蘇會出版の一書、題して『れげんだ・おれあ』といふ」以下の、此の物語の典據調べなどは最も惡いいたづらだと思ふ。「れげんだ・おれあ」といふ本の名はあるのかもしれないが、「奉教人の死」は少くとも芥川氏の創作であらう。若し萬一創作でなかつたにしても、「作者獨自の解釋と創意」はありあまる程あるのであつて、それに對して、作者の解釋と創意を求める批評家の存在する事は、やがて才人芥川氏のいたづらつ子らしい傾向を、いやが上にも助長するものに外ならない。芥川氏の惡戲の興味の爲めに本間氏の如き批評家の存在は祝すべきであるが、同時に芥川氏の如きいい「技倆（うで）」の作家の爲めに、そんな惡戲の滿足を喜ばせて置くのは面白くない。

　自分は二人とも見た事は無いのだけれど、芥川氏の人の惡い微笑を浮べた顏と、本間氏の眞面目がつてゐる顏を想ひ浮べて吹出し度くなつた。

「どうも失禮致しました。」

と襖をあけて主婦が出て來たので、自分は何氣ない顏をして新聞をたたんだ。
「隨分御退屈でしたでせう。」
「いいえ、新聞を拜見してゐました。」
「さうさう、主人がさう云つてましたよ、今朝の新聞に貴方のお書きになつたものの批評が出て居ますつてね。」
「エエ、今それを讀んでゐたんです。」
「いかがです、評判はいいんですか。」
「イイエ、不相變叱られてゐるんです。」
「なんですか主人は自分の事かなんぞのやうにぷんぷん云つてましたよ。こんな批評を書いてゐても原稿料が取れるんだから文學者は樂だねなんて。」
「だつて私の小說にさへ原稿料を拂ふんですもの。」
自分は主婦の氣持のいい顏付と、齒切のいい言葉を聞いて、輕い氣分になつて笑つた。
「どうも難有うございました。時間ですから芝居の方に行きませう。」
「面白いんですかしら。評判はいいやうですね。」

「評判て新聞のでせう、あてになるもんですか。」

自分は今の本間氏の批評から人を信用しない心持になつてゐたので、憎まれ口をききながら立上つた。

歌舞伎座に行くと、兄や嫂はもう來てゐて、自分が患部を氣にして妙な格好で横坐りに坐ると、直ぐに幕が開いた。

まるまると肥つた松井須磨子の山姫が金髮をくしけづりながら、目の前の蜂にいけぞんざいな口をきいて居る。誰だつたか忘れたが、松井須磨子の豐滿な肉體の極めて肉感的な事を讃美した文筆の士があつた。たしかに近代的好色男（すきもの）の心をそそる肉體であらう。太い首から、山國產らしい肩の形、づんぐりした胴、豐かにまあるいお尻などは、病的な浮世繪や草艸紙の美人の弱々しさを嫌ふ現代の油繪畫家も喜ぶ姿態かもしれない。不幸にしてその姫が山姫ラウテンデラインといふよりも場末の酒場舞踏場（カバレ）に出る踊子か、日本でいへば酌婦のやうに思はれたのである。困つた事には足に坐り癖がついてゐて、うす衣（きぬ）ばかりの曲線の際立つ姿で腰かけてゐると、自然と內

輪に曲つてゐて怖ろしく醜くかつた。しかも山姫の無邪氣さを見せる爲めか、子供のやうにばたつかせる足の位置が、揃へて前に投げ出せばいゝのに、兩方に開いてゐるので、愈々酌婦めいた淫猥な格好になつた。

自分は新しい戯曲の爲めに冷汗を覺えてゐると、

「これは非道い。」

と兄は低い聲でつぶやいた。教養のある紳士が、何かの機會で、婦人の見るべからざる姿態を見せられた時につぶやくやうな、困つて赤面したやうな兄の様子を見て、自分は腋の下の汗を拭いた。

口のきき方も山姫の無邪氣さには遠く、蓮葉娘が甘やかしはうだいの母親の前でだだをこねてゐるやうであつた。

やがて歌をうたつた。小學校の生徒が「螢の光、窓の雪」と歌ふやうに、極めて單純にうたつた。やがて踊つた。忘年會でかつぽれを踊る會社員よりも危ない足どりだつた。

自分は兄と顔を見合せて苦笑した。

言ふ勿れ、又しても外形の美醜によつて判斷するものと。自分が此の時の不愉快は、屢々泰西

の戯曲を演じる松井須磨子は、何故にもつと歐米人の姿態——身ぶり、手ぶり、足ぶりを研究しないか、カチユウシヤの歌をうたひ、さすらひの歌をうたひ、更に山姫の歌をうたふ松井須磨子は、何故にほんたうに聲の出るやうに正式の聲樂の練習をつまないのか。何故に西洋舞踏の初歩位はもう少し正確に學ばないのか。餘りに無反省なその心事を不愉快に思つたのである。

人々は山姫のくるくる廻りながら踊るのを見て、その足のぶざまに太いのを指さして笑つたが、その足のぶざまに太いのは許せるけれども、その踊りの餘り極端なる拙劣さは許されない。少くとも足の形をよくする事は不可能に近いが、舞踏は勉強次第で或點迄の進歩は期し得るのである。

森の精ワルドシユラアトの無邪氣らしくいい氣なのは左程でもなかつたが、池の精ニツケルマンのお神樂の素盞嗚尊のやうな風をして、その癖妙に村の色男らしい塗りつぶした顏で、ものを言はない時でも年中變てこに口を開いてゐる氣取つた、いゝ氣持さうなのは、見るに堪へなかつた。

鑄鐘(いもつし)師ハインリツヒは新派の色男のせりふ廻しで悲劇がり、牧師、教師、散髪屋は曾我迺家の身ぶりでふざけた。

その「外形」の醜さは明白であるが、此の人々に「沈鐘」が了解されてゐるとは、如何に新劇最負

の自分にも思ひも及ばない事であつた。あらゆる點に於て不勉強である。無責任無反省で、且つ自慢さうに演じてゐるのが氣に喰はなかつた。

「自由劇場」の役者達は、雜誌新聞に衆をたのんで筆陣を張る頭腦の惡い派に云はせると、「藝術座」などの役者達に比べて本來理解力の少ないものと看做され勝であつたが、頭腦のいい惡いといふ事は學校に通つた年限の長い短いで決まるわけではない。小學校もろくに出ないやうな「自由劇場」の役者は遙に勝れたる理解力を示した。加之あの役者達は、手馴れない泰西の戲曲を演じる事に對して異常な覺悟を持つてゐた。少くともその戲曲を尊敬し、且つ忠實に演じようとする努力から固くなり過ぎた程敬虔であつた。

一頃「有樂座」でやつてゐた「土曜劇場」の下手な連中さへ、自分には「藝術座」よりも立派なものだつたやうに考へられる。額に汗を流し流し、聲をふりしぼつてゐた彼の一派は、屢々面白いものを見せてくれた。要之それは「外形」の美醜によつてわかつべき優劣ではなくて、精神的の美醜によつて定まる優劣である。無責任にいい氣な役者は、眞摯な役者にはかなはないのだ。

自分は役者達の態度に不滿を感じると同時に、その指導者に對しても不滿だつた。

自分は松井須磨子を所謂新しい女優の中では、他の者に比べて段違ひにうまいと思つてゐて、

指導さへよかつたら、もつといい芝居をして見せてくれる人だと信じてゐる。けれども須磨子の柄から云つても、藝風から云つても、決して「沈鐘」を演ずべきではなく、もつと寫實的な戯曲に向く人であると斷言してもいい。何故わざわざ柄に無い「沈鐘」を選んで「藝術座の女皇」に演じさせようとしたのか。或人々は島村抱月氏が妻子を捨てて須磨子とくつついた事實から「沈鐘」を選んだのだと噂するが、そんな評判は信じたく無い。恐らくは「藝術座」の連中の向不見の結果なのであらう。

けれども開場以來一週間に近いその日さへ、入りは八分迄あつた。「自由劇場」も「土曜劇場」も、その他の劇團の多くも息をひそめてしまつたのに、兎にも角にも「藝術座」は、ひとり帝都の太劇場で客を呼んでゐるのは、原因が無くてはならない。

自分などが餘りに無責任、無教練なうたひぶりに冷汗を覺えてゐる隣の棧敷では、新橋邊の生意氣さうな若い藝者を引連れてゐる成金らしい五十男が、

「須磨子の聲はええなあ。」

と感に堪へてゐるのだから、或は正直に感服して見てゐる多數があるのかもしれないけれど、或それよりもその人々を感服させる何か特別の原因があるのに違ひない。

「よくこんな芝居でも見に來る人があるね。河合のためかしら。」
兄はいぶかしさうに場内を見廻したが、自分は答へる事が出來なかつた。
二幕目、三幕目、四幕目、さうして最後の幕が濟んだ時に、自分は此の見てゐても恥しい戲曲の終りを喜ぶ安心と共に「藝術座」の強味を認め得た。それは向不見の強味である。自分が罵倒したくて堪らない無責任そのものの強味である。さうだ。藝術的良心の無い強味だ。無鐵砲の強味だ。
勿論それは眞の強味ではない。しかし少くとも、ともすれば現在を支配しようとする強味である。藝術的良心の強い者が、ああでも無い、かうでも無いと思ひ惱み、手も足も出なくなり勝な時に、何等顧慮する事なく、馬車馬の勢を以て驅け出すのだ。實に此の無反省の強味は、現代の政治にも、事業界にも、文壇にも、歷々として現れてゐる。怖ろしいと思つた時、自分は本間久雄氏の存在を想ひ起した。
「いかがでございます、只今のは。」
お茶を持つて來た出方は、愛想のいい顏をつき出してきいた。
「あんまり感心しなかつたよ。」

「なんですか手前どもには、からつきしわからねえんですが、兎に角歌舞伎座のものぢやございませんや。」

と一人で眉をあげて罵倒したが、

「まづ山の手のものでございませうなあ。」

と云ひ得て嬉しいと云つた顏付で立ち去つた。

自分はふだんならば、こんな月並な江戸がりは嫌ひなんだが、その時は味方を得たやうな氣がして一緒に痛快がつた。それは確かに弱者の聲であらう。吠えられて逃げてゆく犬の悲しい叫びであらう。後から群つて追ひ迫る野良犬の一匹々々別々ならば怖ろしくもないのだが、密集してゐる力の塊にはなみなみのものではかなはない。素早く横町に姿をかくす育のいい犬の聲にちがひない。

さうだ。文壇も劇壇も、たとへ根柢の無い勢力ではあらうけれど、ほしいままに跋扈してゐるのは向不見の強味を持つ徒輩（ともがら）である。一人々々數へると、田圃の稻子（いなご）に過ぎないけれど、密集して來る時の力は怖ろしい。しかし自分は吠えながら逃げる犬を學ぶのはよさう。嚙み殺される迄鬪つてみよう。構ふもんか、こつちも少しは向不見でやつつけろ、と思つた時、自分は旣に大な

る群集の前に石つぶてを浴びてゐる心持がして額に血の上るのを感じた。（大正七年九月廿四日）

――「三田文學」大正七年十月號・十一月號

先生の忠告

或日曜の朝の事であつた。寝坊をした床の中でぼんやりして、起きようか寝てゐようか迷ひながら、枕頭(まくらもと)の火鉢の上の鐵瓶の口から、さかんに立昇る湯氣を見てゐるところに、こまつちやくれの下宿の小婢(ちび)が、來客のある事を告げに來た。その取次いだ名前が昔の學校友達のそれと同一だつたので、自分は一緒に惡戯(いたづら)つ子だつた中學時代の友達の、今川燒のやうにまあるく平べつたくて、しかもぶよぶよしてゐた顔中を想ひ出しながら、狼狽(あわ)てて飛起きて洗面場に馳けて行つた。

身じまひをして、玄關に出て見ると、其處にはまだ十八九の見馴れない少年が一人ゐるばかりだつた。側に立つてゐる小婢に、

「お客は。」

と訊(き)くと、

「そのお方です。」

と指差した。

「先生ですか。」

少年は意外だつたといふ表情を包まずに、此方を見上げてから帽子を取つて頭をさげた。

「お上んなさい。」

先生と呼びかけられた自分を、けげんさうに見守つてゐる小婢の目を避けるやうに、心中少し狼狽しながら、さつさと先に立つて自分の室に少年を導いた。先生と呼ばれた丈で、何の爲めに此の少年が自分を訪問したか、彼が如何なる種類の人間であるかが直感された。自分は寧ろ不機嫌で、相手の態度を見守つた。

少年は一見不良少年らしい沈着さで、初對面の年長者の前で、惡びれもしずに煙草をふかしたが、紺がすりの着物に紺がすりの羽織で、海老茶の毛糸で編んだ羽織の紐が如何にも子供らしかつた。

「私を訊ねて來たのは如何いふ御用です。」

と自分の方から切出した。

「實は朝日新聞の〇〇さんが、先生に紹介してやらうと云うて下さつたので……」

「〇〇さん？」

自分はいくら考へてもそんな人は知らなかつた。

少年の云ふところに據ると、〇〇といふのは大阪朝日新聞の社會部の記者であるが、少年が文學に熱中して、文學談ばかり持ちかけるので、それでは此頃大阪に來てゐる水上に紹介してやらうと云つて、下宿の所在迄教へて吳れたのださうだ。どうしても自分にはそんな知己は無いので、腑に落ちない話だつたが、例の新聞記者一流の出たらめをやつたんだなと思つて苦笑するより他に爲方が無かつた。

時に甚だしく口の重い事のある自分に對して、訪問者もはか〴〵しく口をきかず、次第に手持無沙汰らしく見えて來るので、無理に何か話材をこしらへても、相手は兎角簡短な應答をするばかりで、且つ最初は不良少年かと思つた程無遠慮な態度に似ず、返事をする時は羞しさうにさへ見えるのであつた。

彼はその頃甲種商業學校の五年生で、目の前に卒業試驗を控へてゐた。

「學校はいやでいやで適(かな)はん。」

と駄々子の物言ひをして、文學以外の學課に興味が無く、卒業出來るかどうかもわからないといふ意味の事を云つた。

父親は死んでしまつたけれど、その父が生前殘した事業があつて、母親は學校を卒業すると同時に其處で働かせるつもりでゐる。彼は學校なんか今日からでもやめて、小説の作家になり度いのであつた。

「學校なんぞは役に立ちませんなァ。」

と少年は少し雄辯になつて、自分の同感を求めた。

聽いてゐるうちに自分の目の前には、その少年の年頃の自分自身の姿が浮んで來た。學課は怠けて運動場を馳廻り、文學書以外には殆ど何も本は讀まず、一ケ月の缺席數は出席數よりも遙に多く、落第に落第の續いた時代である。自分には苦も無く目前の少年の心持になり切る事が出來た。けれども自分は夙の昔臆病な大人になつてゐるので、相手の一本調子にうつかり相槌は打てないぞと、腹の中で、油斷のない狡猾な注意を忘れなかつた。

「けれどもね、矢張り學校は續けてやつた方がよござんすよ。」

自分は學校では別段小説家に特に必要な智識を與へては呉れないにしても、學問の根柢がある

と此の世の中を知る上に深味を增すに違ひ無いなどゝ、もつともらしい顏付をして云つた。

少年は「金色夜叉」を幾度も幾度も愛讀した事を話し、「蒲團」に感心した話をし、谷崎潤一郎氏の作品を好む事を話し、曾て友人と小遣を出しあつて雜誌を發行し、創作を發表した事を話した。その癖時々思ひ切つて愚劣な質問をして先生を困らせた。

「一體新聞小說家になる方がいいでせうか。」

などと眞顏で訊きもした。

「それで滿足してゐられればね。」

少し中腹で返事をしても、彼には通じないところがあつた。

話をしてゐる中に、最初不良少年かと思つた程無遠慮に見えたのも、口のきき方のぞんざいなのも、要するに彼がぼんぼんだからだと解つて來た。女の姉妹はあるが男は一人きりだといふ彼は、父母の懷に甘つたれて育つたに違ひない。さう思つた時、自分は我儘らしい少年の態度を是認した。

元來未見の人に逢ふのを好まない自分は、たまたま知らない人に面會を求められるのを、何よりも迷惑な出來事の一に數へてゐる。

紹介も無しに突然人を訪れるのは新聞記者か雜誌記者に多いが、行儀が惡く、人擦れてゐて、且つ他人の迷惑には頓着しない點に於て、世に所謂文學書生も新聞記者に劣らない物である。

自分は平素貴下の作品を愛讀してゐるものであるが、一度親しく謦咳に接して御高見を拜聽し度いといふやうな申出は、難有迷惑な次第には違ひ無いが、たとへ斷るにしても叮嚀に斷るべき筋合であらう。手酷しいのになると、自分は「文章世界」の投書家で、田山花袋氏選の懸賞募集文に幾回か當選した前途有望の青年であるが、物質的窮乏に壓迫されて、自由に才能を延ばす事が出來ないから、どうか先生と同居させて下さいなどと、一時間も二時間も坐り込んでゐて動かないのがある。さういふ連中に比べて、此の少年の邪氣の無い態度は自分をして餘り苛々させなかつた。

長い間兎角途絕え勝ではあつたが、何とまとまつた事も無く、いろんな話をした後で、

「どうか此の次には私の書いた小說を持つて來ますから直して下さい。」

と云つて少年は歸つて行つた。

それ以來自分を先生々々と呼ぶ少年は度々訪れて來るやうになつた。

幾篇かの小說の原稿を持つて來て見せもした。極端に幼稚拙劣な字で書いた假名づかひも文法

も滅茶々(めちゃ)の文章で綴つた小說で、隨分讀みにくいものであつたが、多分飜譯物で覺え込んだらしい直譯體に近い形容や句切りが、全く類の無い文體を形成して、嚙みしめてゐると存外味が出て來るのであつた。題材はぼんぼんに似合はず苦勞人の見た世の中らしく、かなり深刻に觀察して、一種重苦しい氣分を起させるやうなものが多かつた。谷崎潤一郎氏の華々しい小說を愛讀すると云ひながら、彼自身の作風はどつちかと云へば自然派の物に近かつた。その文章の亂雜な通り、一篇の結構も緊縮を缺いてだらだらしてゐるが、その癖妙に力の籠つたところがあつて、割合に大まかな味はひを持つて居るのであつた。自分はそれらの小說を讀んで上手(うま)いとも下手(まづ)いとも決める事が出來なかつた。

「是非批評して下さい。」

と膝を進ませる相手に對して、

「面白いには面白いけれど、隨分文字や假名づかひは亂暴だね。」

などと當らず觸らずの事を云ふより他に爲方がなかつた。

「字なんかどないだつて構やせん。」

少年は自信のある口をきいて、飽迄も字づかひなどは念頭に浮べず、間違ひだらけの儘で押し

通した。
書上げると直ぐに持つて來て見せる小說を讀んでゐるうちに、自分は面白い發見をした。それは彼の作品の何れにも必ず或るエロテイツクな場面の出て來る事である。學校教員の生活を描いても、會社員の生活を描いても、何かしら性慾の壓迫から起る事件を結び付けなくては承知しなかつた。「浦團」を愛讀し、谷崎氏の作品を愛好する理由が、初めて自分にも解つた氣がした。
氣が附いて見ると、彼は曾て一度も、エロテイツクの場面を持たない小說をほめた事が無い。少くとも所謂無戀愛小說は讀む氣にもならないらしい。「海上日記」以來まるつきり戀愛小說に緣の遠くなつた自分の如きは、面とむかつて攻擊された。
「先生の物は昔の方がよろしいな。」
とも云ひ、
「何かもつと濃厚な物を書いたらどうですか。」
とも云つた。
少し邪推してみると、彼は屢々中學の文藝愛好家にみる如く、所謂文士の生活を、遊蕩と必然の關係のあるものとして憧憬してゐる傾向があつた。その文士の集つてゐる東京では、年が年中

寄合ひがあつて、賑かな生活をして居るものと推測してゐるらしかつた。恰も大阪の不良少年が、あの大阪式の言語道斷に俗惡な酒場（バア）で、毎晩々々給仕女を張つてゐるやうな生活をさへ、彼は藝術家の特權か何かと考へてゐるらしかつた。わざわざ變な服裝をするのも藝術家の一資格かと思ひ違へてゐるらしかつた。

從つて、物堅い家に育つた若者の服裝をして、酒場に入浸るよりも下宿に閉ぢ籠つて居る日の方が多いかくいふ先生の如きは、最初彼にとつて幻滅の感を抱かせたに違ひない。

自分は又しても大人の臆病心に襲はれて、機會さへあれば眞面目な顏付をして訓戒めいた事を口にした。若し彼の推測するやうに、文士といふものが酒と女にばかりかかりあつてゐたら、時間と精力を消耗して創作なんか出來なくなるに違ひ無い。第一流の作家の現在營んでゐる生活は極めて眞面目なもので、たとへその作品には遊蕩の巷を描いてばかり居る人も、必ずしもぬらくら遊んでゐるものではない。偉い作家に限つて到底想像もつかない程勉強家であるなどと繰返して云つた。さういふ時に、自分は一種くすぐつたい心持と、冷汗を覺えながらも、此の少年の素行に間違ひの起らない事ばかりを、主として自分自身を守る利己的な心持から念じてゐた。萬一彼が文藝卽遊蕩ともいふべき興味から身を持ち崩されては、その母親や何かに對しても先生と呼

ばれる立場として、申譯が無いと思ふいい子になりすまし度い心からであつた。
自分は最初から此の少年に先生々々と呼ばれる事を迷惑に感じてゐたが、次第にその迷惑の度を高めて、一種の輕い不安が絶えず少年の出現と共に自分を襲ふやうになつて來た。
たつた一人で散歩するのを好む自分は、馴れない大阪の市中を地圖を懷にして歩き廻つてゐたが、さうと知ると少年は、
「先生私が何處かに御案內しませうか。」
と云ふのであつた。
何處かに御案內するいふ言葉の意味を、自分は明瞭につかむ事が出來ないで、彼の心事を疑つたが、餘り勸めるので、
「それでは何處にでも連れて行つて呉れ給へ。」
と同意する事になつた。
「サア何處というて私もよくは知りませんけれど、平生私達の行く處でよろしいですか。」
と幾度も念を押した上で、彼は道頓堀の北河岸の西洋料理屋兼カフヱに自分を連れて行つた。
平生自分が、大阪特有の安音樂の絶間なく奏されてゐる酒場(バア)を、口を極めて罵倒してゐるので、

「此處は靜でよろしい。」

と案内者が自慢する通り、少し陰氣に思はれる程ひつそりした家だつた。

「今晩は、お久しうおまんな。」

とお白粉(しろい)を塗つた給仕の女は少年を見て挨拶した。

「近頃は××は來ないか。」

「つい昨日も見えてでした。」

「△△は。」

彼は一緒に此の家に集る友達の名前を云つて訊いた。

餘り上等で無い料理を喰べながら、何か酒を飲むかと云ふと、

「強い酒でなければ醉はんからつまらん。」

と答へて、先生は麥酒(ビール)を飲んでゐるのに、彼はアプサンを命じた。赤木桁平氏ではないけれども、此の少年を前にして自分は遊蕩文學撲滅論をしないでは安心してゐられない心持に惱まされた。

「勉強したまへ、勉強したまへ。」

自分は彼の顏を見る度に、眞面目に學校に通つて、眞面目に勉強するのが小說家となるにしても、第一である事を說いた。丁度昔、自分が此の少年の年頃に人々に云ひ聞かされた通りに。
春になつて、少年は無事に商業學校を卒業し、自分も大に安心した筈だつたが更に又新しい心配が何時の間にか頭を持上げて來てゐた。
「先生、私はどうしても續けて學校に通つて勉強せんとあかんと思ひます。」
彼は眞劍になつてゐた。
「そりやァ學校は續ける方がいいさ。」
自分は、あれ程學校を厭だ厭だと云つてゐた彼が、急に勉強心の出たのを不思議がりもせず、怠けて落第でもされては大變だと、ひどくびく〳〵してゐた後であるから、勉強し度いといふのに安心して一も二もなく贊成した。
「けれどもお母さんが許さんから。」
少年は殘念さうな口吻で云つた。その殘念さうな口吻に氣が附くと、こいつはしまつたと、自分はとつさに思つたのである。
母親は息子の卒業と同時に、直ぐにも亡き夫の殘した爲事に就かせようとし、親類も勿論同じ

考へで、殊に少年が文士たらんとする志望を抱いてゐる事は、働くといふ事には必ず金錢の利得の伴ふもの、と思つてゐる人々の不安心の種であつた。

「金儲け金儲けばかり云うて、金なんぞ一文もいらんわ。」

ぼんぼんはぼんぼんらしい事を云つて、身内の大人達を罵つた。

「しかし文學では喰つて行かれませんよ。」

自分は又しても大事取りの大人の臆病風に誘はれて、少年の燃えさかる火の手を消さうとした。

「喰はれんかて構はん。」

ぼんぼんは愈々ぼんぼんになつて語氣も烈しく云ひ放つた。

その日以來先生は益々不安を感じ出した。中途で廢してもいゝと云つて學校通ひを嫌つた時は、學校の難有味を說いて勉強するやうに忠告したが、忽ち彼が熱烈に學校生活を續け度いと夢中になつて來たのを見て、今度は學校も大したものではない、衣食足りてこそ藝術の製作も完全なものが出來るが、喰ふために書く事になれば文學勞働程悲慘なものは無く、作品も必ず儲け爲事の目的と墮落するに違ひ無い、殷鑑遠からず誰も彼も、其處にも此處にも濫作家がゐるではないか、それよりも一層方面違ひの事で衣食して、且つ藝術の製作に努力した方がましであらうと、もつ

ともらしく勸め始めた。それには幸ひ先生自身が、會社員としての俸給で衣食し、同時に文學的創作に勉勵してゐる實例なので、繰返し繰返し納得させようと努めた。けれども實はうつかりした事を云つて、少年がその一家の者の意見に對抗して自己の希望を貫徹しようと夢中にでもなつた場合には、飛んだとばつちりを喰つて、その一家の人々と何等か面倒な交渉を惹き起しはしないか、それが第一に避け度かつたのだ。

「會社になんか行く位なら生きてる甲斐が無いわ。」

少年は甘やかされて育つた者に限る我儘な調子でつぶやいた。

けれども次に訪れて來た時は、彼は既にその亡父の爲事であつた或會社の社員にされてゐた。

自分はそれを聞くと安心して云つた。

「お目出度う。勤人の生活も存外嫌では無いでせう。」

「イヤもう土臺つまりません。」

彼は言下に先生のちやらつぽこを拒けてしまつた。

會社で一緒に爲事をしてゐる大人の愚劣さを、少年は公事を憤る人の口ぶりで滅茶苦茶に嘲笑した。「俸給の上つた話、諸會社の賞與の話、物の値段の話、たまに話題が變つたと思ふと、それ

は猥談に極まつてゐるといふのである。

先生も亦かゝる周圍の中に暮してゐるのであるが、しかも擦れつからしの態度をとつて、人々を心中馬鹿にしながら尙且つ平氣で交際つて行くのであつた。殊に先生は曾て少年の日に於ては目前の少年と同じく、藝術家の生活といふものを一種特別の高尙なものだと思ひ違へて憬れた事もあつたが、つかず離れずの態度ではあるが何時かしら其の仲間に入つて見ると、尊敬の的だつた藝術家といふものも、意外にも下劣卑賤な人間が多く、中には幇間にも劣る連中を發見して忽ち愛想をつかしたのであつた。

「君が結構なものだと思つてゐる文士だつて、君が愚劣がる會社員と同じものですよ。」

自分は例によつて少年の浪漫主義に水をさした。

けれどもこれが必ずしも先生の臆病とばかりは云はれないのである。先生はほんとに自分の見聞の範圍内に於て、ほとほと文士といふものに愛想を盡かしてゐるのであつた。投書雜誌と交互になれ合つて、田舍の投書家に媚びる事を專門にする賣名專門の徒、黨同伐異を事とし、わけもわかりもしない癖に白痴脅しの知つたかぶりで、一押二押三押で押の強味で横行してゐる輩、役人役者芝居者を取卷いて飲んでゐる連中、嫉妬深くて奸譎で、得手勝手で愚痴つぽく、數へれば

數へる程面白くない卑賤民の仲間のかくいふ先生もその一人に過ぎないのであつた。

「文士なんて下等な人間が多ござんすぜ。」

と云ふ時は他人を罵倒すると同時に、そんな人間と交際を持つ自分自身をも嘲笑する意氣込みが、不知不識にあらはれてゐるのであつた。

何れにしても先生は、自分を先生々々と呼ぶ少年の前途を危ぶむとともに、その危なつかしい前途にかゝりあつては堪らないと思ふ念に悩まされる事が多かつた。

或時少年は、先生が先生と呼ばれないで濟むかはりに、終日貸金の利息を勘定したり、諸拂の傳票に盲目判を押したりする會社員の生活をしてゐる事務室へ電話を掛けて來て、相談事がある から今夜行きますと云つて來た。こいつは困つたと思つてゐると、果して困つた問題を持つて來た。

彼は度々繰返して愚痴を云つてゐた會社づとめの單調無味に堪へられなくなつて、如何しても學校に入る決心をしたが、それには何處の學校がいいだらうと云ふのである。

「お母さんも同意したのですか。」

「私がそれ程熱心なら爲方が無いから大阪の家をたたんで、私の卒業する迄東京に住むと云うて

なはります。」

我儘者は凱歌を奏する態度で答へた。

彼は文學書生の常例にもれず、早稻田大學の文科に入學し度いと希望してゐるのであるが、彼處は風儀が惡いからいけないと身内の者に反對されたさうだ。何故彼が早稻田大學を擇んだかといふと、どんな雜誌を見ても執筆者の大多數はその學校の出身者で、數に於て到底他の學校出身の文士と比較にならない程有力であるから、將來自分が世に出るにも最も有利だらうと考へたのださうである。まことに恐るべきは頭數の勢力である。

「それでは慶應義塾がいいでせう。」

と先生は曾てその學校で落第した事などを思ひ出しながら云つた。

「あそこは金ばかりつかうてる怠け者の學校だからいかんと云うてます。」

「成程ね。」

先生は一言も無く參つてしまつて、感服する外に致し方がなかつた。

「それにあの學校からは餘り偉い文學者は出てゐませんだつしやろ。」

少年の舌は滑に動いた。

「さう云へばさうだね。」

あまりの事の激しさに、流石に先生も残念に思つたが、然りとていくら考へてみても、一流として許せるのは小説家では久保田万太郎氏、美術批評家では澤木梢氏を數へるばかりで、遥に下つたお次には先生自身位なものであるから、聲を高くして反對する勇氣は無かつた。たゞ負惜みもまぜて、平素自分の考へてゐる慶應義塾の特徴をぽつりぽつりと說いた。

「そりやア便利な人間はあの學校からは出ないかもしれないが、そのかはり比較的素直な心持を持つてゐるところがいいと思ふ。」

と云ふのがその要旨であつた。

少年は餘り感心もしない顏をして聞いて歸つたが、數日後に又やつて來た時は、前とは全く調子が變つて、愈々慶應義塾に入り度いから、甲種商業學校出の者でも入學出來るかどうかを確めて吳れと云つて來た。

先生は又してもこれはしまつたと思ひながら、兎に角その學校に教鞭をとつてゐる友人にきいて見ようと約束した。

考へてみると此前の時、少し慶應義塾をほめ過ぎたやうに思はれて後悔した。あれは少年が自

分の母校を罵つたので、人情として些かせき込み過ぎたのと、もう一つは彼れが慶應に入るまいと思つて安心してゐたので、うつかり提灯を持つてしまつたのである。萬一彼が入學して、金ばかりつかふ怠け者になられては、先生の立場として厄介だと考へると、どうしても甲種商業學校出身者には入學の資格を與へない方が合理的であるやうに思はれて來た。

一週間後、友人から商業學校出では入學出來ないと回答して來た時は、先生は大なる災厄を免れた氣持がして、平生の無精に似ず自ら少年の許へ電話を掛けてその旨を通じて、さうして始めて安心した。

それから後しばらく、自分は會社の用事で地方へ旅行して歸つて來てからも、少年には成るべく會ひ度くないと思ひながら何時の間にか夏を迎へたのである。暑い暑い大阪の貧乏下宿の二階で汗を流して暮してゐると、豫て惱み勝だつた持病が堪へ難い容體になつて來た。それに船や車で旅をして來た事も、平素たしなむ酒の應報（むくい）もあつたのであらう、しまひには會社で机にむかつてゐるのが苦しくなつて來た程、病氣は加速度で進行した。たうとう我慢し切れなくなつて休暇を貰つて數日中に東京へ歸り、入院して治療を受けようと考へてゐた。

ところへ、日曜の朝であつたが、室中の疊にさし込む強烈な夏の日光に、頭の先から足の尖（さき）迄

汗を流して、いとど病氣の身をもてあましてゐると、突然少年がやつて來た。しかも彼は一人でなく、年配の婦人を伴つて來た。
「お母さんをつれて來ました。」
と挨拶する迄も無く、一見して親子とわかる目鼻立の母親に面して、先生は愈々豫感してゐた迷惑な舞臺に身を置く事になつたのを感じた。
雙方とも汗を拭き拭き挨拶を濟ますと、目の前の息子の先生の、意外にも若僧なのに驚いたと同時に安心したらしい母親は、そろそろ用件を語り出した。
元來會社の爲事に熱心だつた父親の子に似ず、息子は商賣が嫌ひで學校時代には學校から歸つと來ると、只今では會社から歸つて來ると、二階の自室に閉ぢ籠つて机に向つて本を讀むか書き物をしてゐる。
「こんな者に何が書けますものかとは存じますけれど。」
と親らしい前置きをして、一體その息子の書く物によつて判斷すれば、將來文士として名を成す事が出來るか如何か先生の御意見を伺ひ度いといふのである。
「それは勉強次第でせう。」

と先生は暑氣と病氣と、且は又迷惑な自分の地位に惱みながら責任のがれ專一に答へた。

「せめて新聞にでも出るやうな有名な人にでもなります事なら、當人の好きな事でもあり、爲方が無いとあきらめて、學校に通はせてもいいと思ひますが。」

しつかりした口のきき方をする母親は、次第によつては曾て自分も其處で教育を受けた事のある東京に息子と共に家を構へて、その成業を待つてもいいといふのであつた。

先生は事の餘りに大がかりなのに吃驚したと同時に、愈々自分の責任の重い事と迷惑の大きい事を痛感した。

「默つて會社に勤めて居りますれば、末始終は間違ひ無く相當な地位に上る事も出來ますのですが文學と申せば先づ風流な事でございますから。」

第一學校に通はせるにしても月々多額の出費だし、將來存外成功したにしても、なかなかお金にはなるまいといふのが、親として最も危ぶむ理由に外ならなかつた。

「お母さんは又金々ばかり云うて、金なんかいくらあつたかてあかん。」

息子は苛々した調子で、默つてゐる先生の態度を賴母しくなく思つたらしく、傍から橫槍を入れた。

「けれども文學者だつて喰べなくては生きて行かれませんから、それは御心配になるのがもつともです。」

と先生は母親に向つて調子を合せた。

「ごらんなさい、貴方様もさうおつしやるではないか。」

母親は勢に乗つて息子の不平を抑へつけてから、或る知人の子は東京帝國大學の哲學科を出て年三十にして未だ親の脛を嚙つてゐる事、或る知人の息子は慶應義塾に通つてゐて月々莫大な金を費消してゐる事、それからそれと實例を擧げて、學問殊に文學の儲けの少い事、大概はマイナスになる事、及び東京へ遊學に出す事の出費と危險を雄辯に說いた。聽いてゐるうちに先生は自分自身が意見をされてゐるのではないかと疑つた程、諄諄と聞かされたのである。

「お母さんなんかに何がわかるもんか。」

息子は聞くに堪へないらしく、面を紅くして母親を叱したが、さういふ時には先生が必ず母親の味方になつて、

「それは考へてみれば學校に長く通つたつて無駄な事かもしれません。勉強しようと思へば一人でも勉強は出來るのですから。」

などと頼みにならない事を云ふのであつた。先生は實際平然として應對してゐる様子は見せながら、心中甚だ困却してゐたのである。可愛い息子の好きな事なら、好勝手にさせてやればいいのにと思ひもし、可愛いからこそ息子の將來を心配して、やきもき氣をもみもするのだと、息子にも同情し、母親にも同情した。同時に又、二言目にはお金がかかるお金がかかると云ひ、藝術の作品を金錢に計量しなくては承知しない母親の態度にも慊らず、こんな迷惑な地位に自分を陷れ、前觸れもなしに母親なぞを引張つて來た息子の世間見ずの我儘なぼんぼん面も面憎かつた。

　さはさりながら此の場合、先生が專念に祈つたのは、自分自身がかかりあひになる面倒を避ける事であつたから、その爲めには是が非でも母親側につく方が利益だと考へたのは勿論である。

「まあひとつ會社で出世して、その間に實世間の經驗を積むのも、作家となる上から見ていい事かもしれませんよ。」

　と悄氣てゐる少年に對して、實業家と稱される種類の人間の屢々口癖にいふやうなせりふ迄口の外に出した。

「ではまあ宅に歸りまして、又當人の決心も聞きました上、改めて御相談に伺ひます。」

と永い時間の對座の後、母親は坐り直して手をついた。

「貴方様もああおつしやるのだから、貴方もとつくり思案して見なさい。」

と先生の賴み甲斐無いのに氣の拔けた息子にいひきかせて、

「まことにお邪魔致しました。」

と頭を下げると、母は子を促して歸つて行つた。

先生はホツト一息ついて、額から胸から流れる汗にぐつしより濡れた單衣の氣持惡く肌に絡みついた體を崩し、親子が立際に置いて行つた大きな菓子折を目の前にして、つくづくと自分の年をとつた事を感じたのである。(大正七年十二月十三日)

——「三田文學」大正八年一月號

本年發表せる創作に就いて

——「新潮」の質問に答ふ——

大正七年一月　新聞記者を憎むの記　三田文學
一月　先生、　大阪毎日新聞
二月　汽車の旅　三田文學
三月　ベルファストの一日　三田文學
五月　「八千代集」を讀む　三田文學
六月　汽車の旅　三田文學
七月　愚者の鼻息　三田文學
八月　「その春の頃」の序　三田文學

八月　購書美談　　　　三田文學
八月　日曜　　　　　　大阪毎日新聞
九月　火事　　　　　　三田文學
九月　新嘉坡の一夜　　新小說
十月　向不見の強味　　三田文學
十一月　向不見の強味（續）　三田文學

特に述ぶ可き感想無之候　　以上

――「新潮」大正七年十二月號

「末枯」の作者

久保田万太郎君と自分とのおつきあひも既に十年になつた。久保田君が「朝顔」を書き、自分が「山の手の子」を書いた頃から知己(ちかづき)になつたのだ。

あれは「三田文學」創刊の年の秋だつたと思ふ。その頃三田の山の上にかたまつて居た連中が、同人雑誌を出す計畫をした。誰一人作品を發表した事の無い處女性から、「三田文學」といふやうな立派な雜誌を舞臺にする事は思ひもよらなかつたので、先づ手習に同人雜誌を出さうといふのが主意だつた。自分も好奇心に驅られて相談會に出席した。場所は田町の鹽湯の二階だつたと記憶して居るが、どんな家だつたか、はつきり目に浮べることは出來なくなつた。十數人集つた仲間の半分以上は、自分の知らない顔だつた。てんでんにいろんな希望を述べあつたが、結局は資金の問題だつた。會費制度だと聞いて居た「白樺」の噂が頻に出たやうに覺えて居る。月々一人が

いくらいくらの會費を出せば維持して行かれる、いやそれでは足りない、そんなには出せない、といふやうな事を長い間言ひ合つた。雜誌さへ出せば、直ぐにも文壇の一角に勢力を張れるやうな口をきく者も、計算の事に及ぶと口をつぐまなければならなかつた。みんなが書生つぽだつたのだ。

その中でたつた一人、際立つて世馴れた口をきく人が居た。それ迄に、一度も顏を見た事の無い人だつた。金釦の制服を着て、人々の後の方にひかへめにして居るのが、まるで新入生のやうだつた。その人は一冊の雜誌を出すには、どの位費用がかかるとか、どの位の部數で、どの位賣れ殘るものだとか、會費制度ならば、どの位なければ足りないとかいふやうな事を、事細かに述べた。大ざつぱな書生ばかりの中に、たつた一人のその人は、怖ろしく頼母しい人に見えた。唯單に雜誌出版の話をした丈だつたけれど、聞いて居る自分は、此の人は世の中の事はなんでも知り盡して居る人だといふやうな氣がして、感服してしまつた。それが久保田君だつた。

「あれは誰だい。」

「久保田つてね、豫科の生徒で、俳句かなんかやる男だとさ。」

といふやうな問答を、隣席の友だちとささやきかはした事を覺えて居る。

その同人雜誌は、矢張り資金の問題で物にならなかつたが、間も無く久保田君は「朝顔」一篇を「三田文學」に掲げて、年少早く既に第一流の作家として恥しくない手腕を見せて世間を驚かした。當時の事を考へると、記憶は未だ生々しく、久保田君の金釦の制服姿も、昨日一昨日の事のやうに思はれるが、しかしながら十年の歳月は、流石にさまざまの變遷を物語るものがなければならない。

自分が、世の中を知り盡した賴母しい人に思つた、溫順な豫科の生徒も激變した。少くとも自分の見る久保田君は驚く程變つた。

中學時代も同じ三田の山の上に居ながら、年齢も學級も自分の方が上だつたので、田町の鹽湯で賴母しかつた久保田君以前は知らなかつたのだから、或は田町の鹽湯で見た時から暫時の間――もう少し押切つていへば、久保田君の第一集、「淺草」の出る頃迄の久保田君は、極めて他所行の久保田君だつたのかもしれないが、それにしても今日の久保田君には、その他所行の沈着さへ失はれ盡したやうに思はれる。

「君は變つた。ほんとに變つた。」

といふと、

「さうかしら、自分ではちつとも變らないつもりなんだけれど。」

と久保田君はその癖で――隨分小汚ない癖だが――長く延ばした髮の毛を撫であげ撫であげ、いぶかしさうに云ひながら、その實變つた事を承認し、且變つた事をほこりとする色さへ浮べるのである。自分はそれを見ると屢々腹が立つて來る。

第一久保田君には賴母しいところがなくなつた。怖ろしく出たらめで、あてにならない。安受合で、ちやらつぽこだ。世の中を知り盡したやうなおちつきがなくなつて、何もわけのわからない半可通らしく見えて來た。人の後にひかへめ勝だつたのが、出ないでもいい處にまで無闇に乘出して馳廻つて居る。焦躁、性急、浮調子になり切つてしまつた。

その以前同人が寄集ると、

「久保田つて人はおとなしい人だね。あれは叔父さん見たいな氣がするよ。」

「ほんとにああいふのが居てくれると賴母しい。」

などと云ひあつた事もあつたが、その自分さへ近頃の久保田君の出たらめには幾度となく迷はされて、何が何だかわからなくなつて、癇癪を起した事も數へ切れなくなつた。

かういふ變化が何に原因するものかを自分は知らない。恐らくは小說家の常として、久保田君

は之を戀愛にでも歸するかもしれない。しかしつくづく考へてみると、矢張り本來の性質の一面が、他の一面を壓服して特別の發達を遂げたものと見るのが至當かもしれない。

「文壇電話」といふ綽名をつけた人がある。彼方此方と喋り歩いて、忽ち噂を廣げるといふ意味なのださうだ。時には本屋の番頭らしい事がある。時には役者の男衆らしい事もある。それ程變てこに顏が廣くなつてしまつた。

いたづらに狼狽しく散漫な日常生活は、到底久保田君をして充分に創作の才能を發揮させなくなつた。大正五年の秋、自分が外國から歸つて來た時、久々で逢つた久保田君は、恰も永井荷風先生が編輯主任をおやめになつた後の、つぶれかかつた「三田文學」を、如何にでもして續けて行かう、それにはお互に毎月必ず寄稿する事にしようではないかと、熱心に話を持掛けて來た。自分も承知した。さうしてそれ以來、隨分苦しい努力をして「三田文學」に寄稿しつづけて來た。しかしながら肝心の久保田君は、殆ど纏まつた物を書いた事が無い。休み勝だ。たまに出たかと思ふと、四五頁位で以下次號である。まとまつた印象をうける事がなくなつてしまつたので、

「久保田君も駄目だねえ。」

といふ嘆息を友だちの口からも聞く事になつた。

久保田君自身も、常におちつかない心の狀態が、創作の邪魔になつて、あせつてもあせつても、何も出來ない事を嘆いて居たが、さういふ時は、日常友だちを相手に無責任な雜談をする時の癖で、誇大な言葉を用ゐ、「生活の改造」をしなければ駄目だといふやうな事を云つて、心にもなく力んで見せる。けれども、その「生活の改造」とは、要之(ようするに)女房を持つといふ事に過ぎないのである。自分では如何(どう)にもならない、女房に如何にかして貰ふ外には爲方が無いといふやうな、久保田君獨特の他力本願なのである。何事にも人を頼まず、自分一人の持つてる丈の力と努力以外には信じ兼る性質の自分は、此の「生活改造論」を聽かされると、本氣になつて反對したものだ。一人は結婚生活の幸福を夢み、女房が欲しいと云ひ、一人は結婚生活を馬鹿にして、女房なんか欲しくないと、顏を合せる度に話合つたが、その久保田君も愈々良緣を得て、優しい人を迎へられた。「戀の日」は遂に久保田君が獨身生活に別るる時の紀念となつた。

久保田君といへば、無責任な書肆や雜誌社の出たらめから、情話作家だと考へられ、單純無比な書生批評家の放言の爲めには、遊蕩文學の作者だと思はれてしまつた。現に「戀の日」の卷尾に添へてある舊著「東京夜話」の廣告には、「滅びゆく江戸の名殘を描き、華かなる東京の情調を描ける本書は、幹彥氏の西京藝術と相對して正に文壇の雙璧也」と書いてある。勿論本屋の廣告の

事だから、自分の如きものさへ「正にこれ文壇の驚異なり」位の事は書立てられるのであるが、久保田君の作品の何處に「華かなる東京の情調」があるか。無理にも情話作家にして、長田幹彦氏あたりの安直な作品と共に賣れゆきをよくしようとするものに外ならない。さうして批評的能力を缺いて居る大多數の讀書子も亦、わけもなく雷同してしまつた。強ひて拾ひ出せば、「お米と十吉」「わかる時」その他同傾向の作品が不幸にも存在して居るが、それとても嚴密な意味で情話とはいひにくい。矢張り久保田君一流の、果敢ない心持を主として描いた作品で、少くとも長田幹彦氏や近松秋江氏の、所謂艶麗な作品などと同列に置かる可きものではない。さうして此種の作品は、まとまりのいい、簡素な短篇を得意とする久保田君には似もやらず、冗長散漫で、常に失敗に終つてゐる。到底此の作者の如き執着に淡い人は、戀愛小說の作者にはなり切れないのである。

　結婚の豫告と共に贈られた「戀の日」を手にした時、その「戀の日」といふ表題が、いかにも内容にそぐはないものに思はれた。「末枯（うらがれ）」「さざめ雪」「三の切（きり）」「冬至」「影繪」「夏萩」「潮の音」「老犬」の八篇、何れも無戀愛小說である。何處にも戀の場面は無い。だがしかし、つらつら考へると、或は久保田君にとつては、文字以外の深い意味があるのかもしれない。無理にも氣を廻してみれば、

これは作者自身の戀の日に出來た創作なので、作品そのものが戀の日なのではないのかもしれない。果してさうとすれば、「戀の日」一卷は愈々久保田君の結婚を紀念するものといふべきである。けれども久保田君にとつては――同君自身の幸福なる結婚は別として――世上の戀は遂に果敢ない夢に等しい。あらゆるものが、廣大な力を以て押迫る世の中の自然の推移に押流されて行くのだと、あきらめて居る久保田君の根本思想から見て、戀愛も亦一瞬間の覺め易い夢に過ぎない。それは必ず果敢なくさめて、殘るのは涙ぐましい過去の追慕か、或は寂しいあきらめに入る外はない。久保田君の作品の二三を讀めば、敏感なる讀者は直ぐに氣が付くに違ひ無い。戀の成就といふ事は、詩人久保田万太郎君にとつては、思ひも掛けない事である。戀は破れ、さうしてその夢は白々とさめなければならない。その白々とさめた後の生活に久保田君の詩は完全に育くまれる。

詩人の常として、久保田君も亦常に夢を追ふ人である。同時に又執着に淡い、物わかりの早い東京の人の弱々しさから、その憧憬も夢想も見る間に果敢なく破れ去つてしまふ事をよく知つてゐる。結局は淡い夢の世界から、寂しいあきらめの世界へおちつく事になるのである。

もとより久保田君にとつては、現在の世の中は結構なものとは考へられない。そんなら進んで

蕪雜亂脈な社會の改造を叫ぶか、退いて一人密かに果敢ながつてゐるかといへば、久保田君は當然第二の道を歩む詩人である。泉鏡花先生のやうに、聲を張上げて威勢よく、現代の野暮と不粹を罵倒したり、永井荷風先生のやうに、徹底的に社會人事の虚僞と僞善を指摘する事は、久保田君には思ひも及ばない。同時に又、泉先生のやうに、過去の讃美に熱狂したり、永井先生のやうに、追憶回顧の文字に詠嘆を縦にする程抒情的でも無い。まして況や新しき村に、不便を忍んで移住する程の實行力も芝居氣も無い。夢は夢で、憧憬の實現に努力するのは馬鹿々々しいのである。且つ又久保田君の思想の根柢には、世の中は日に日に惡くなるばかりで、人力を以てしては如何する事も出來ないといふ觀念が根強くわだかまつて居る。世の中の惡くなつた嘆きを身の周圍に持ちながら、決して今日の世の中を呪詛しもしなければ、それに對して反抗もしない。その惡くなつた原因を考へもしなければ、その原因を取除かうともしない。何故惡くなつたのか、何故惡いのかも考へない。あき足りないにはあき足りないが、さりとて、それが熱して不平不滿になるのでもない。ただ一人密かに心底から寂しくなつてしまふのである。結局世の中は自然と惡くなつてしまつたのだ。さうして又、その惡くなる事は不可抗の力なのである。久保田君の言葉をかりて云へば「世間の惡くなる事がどうにもならなかつた」のである。此の社會を形造るもの

は人間の力だといふ信念を持たないで、世の中が人間を壓服してゐる狀態を、殆ど無條件で承認してゐるのである。

かういふ社會觀を固く持して居る結果として、久保田君の描き出す世の中は、當然亡びゆく世の面影でなければならない。明日に連續する現在の世の中ではなくて、昨日に連續する現在なのである。從而久保田君の小說戯曲の中に現れる人物は、殆ど總て、今日の文明には何物をも貢獻しない人間ばかりだ。ただ單に亡び行く世の推移と共に押流されて行く人々である。てんでんに「世の中が惡くなつた」ことをこぼしながら、しかも此の惡くなつた世の中の茶飯事に終始して一生を送る人々である。或は極端にいふならば、その人々の存在は、單に移りゆく世の雰圍氣を成すものに過ぎない。此の世の中の推移を示す仕出に過ぎない。

「末枯」の中の人物、田所町の丁字屋の若旦那と生れながら、親讓の店も深川の寮も、人手に渡さなければならなくなつた鈴むらさん——どういふわけでむらと平假名で書かなければならないのかわからないが、甚しくかうした事に依怙地な久保田君は、鈴村さんと書いたのでは、その人物を彷彿する事が出來ないのであらう——も、せん枝も、扇朝も、さては小よしも、死んだ柏枝も、さうして又老犬エスも、その他ちらちら舞臺に出て來る程の人のすべてが、何れも此の移り

ゆく世の犠牲者に外ならない。

作者は鈴むらさんについてかう書いてゐる。

このごろの鈴むらさんの、退屈な、さうして、便りない、枯野のやうな生涯がいまさらのやうにせん枝の胸に浮んだ。――蔭で、種々、何のかのと勝手なことはいつても、考へると――すこしでも以前のことが考へられると、矢張、なほ、せん枝は、暗い、泪ぐましいやうな心もちになることが爲方がなかつた。

玆に枯野のやうな生涯といはれて居るのは鈴むらさんの事だけれど、それは又鈴むらさんの事を胸に浮べてゐるせん枝の生涯にも、義理を知らない人間だといはれてゐる扇朝の生涯にも、あてはまる言葉である。否「戀の日」一卷を通じて――或は久保田君の全作品を通じて描かれて居る人々と、その周圍の光景に外ならない。自分が前に、今日の文明に直接何の交渉も無い人々だと云つたのは、卽ち彼等の生涯が枯野だからである。

此の枯野の生涯を送る人々を描く事に於て、久保田君は文壇に比類の無い作家だ。持つて生れた詩人的氣禀の爲めに、沒分曉（わからずや）の批評家は、徹頭徹尾現實には緣遠い、物語の作者だと思つてゐるが、斯くの如きは誤れる事甚しいもので、たまたま久保田君の選擇する社會の一斷面が、將來

に連續する現在でなくて、過去に連續する現在だといふ事實から、甘いお伽噺の作者と間違へられ易いのである。

實際久保田君自身は寫實主義の作家を以て任じて居る。詩人と呼ばれる事を喜びながら、それには些か不服を唱へるが、寫實主義だといはれると、更に一層喜んで、己れを知る人の爲めに相好を崩すに違ひない。甚だ氣障な申分ではあるが、久保田君の寫實主義を認めるのは、東京の人でなければ難かしいと思ふ。其の描く世界が、極めて特異の地方色を帶びて居るからで、少くとも山の手の東京の人と、下町の東京の人の區別を知るばかりでなく、同じ下町の人でも、日本橋の人と淺草の人との間には、動かす可からざる相違のある事を認める能力が無いと、久保田君の寫實を寫實だと見る事は出來ないのである。一昔前、久保田君の第一集が出た時に、之を「淺草」と題したのは籾山庭後氏だつたと記憶する。當時自分などは淺草といふ、餘り上等でない、何方かといへば場末の土地の名を、本の表題にするのは面白くないやうな氣がしたが、今になつて考へてみると、籾山氏の烱眼は夙に久保田君の作品の地方色を明確に認めて居られたものと思はれる。

「久保田君の作は、もう十年たつと誰にもわからないものになるかもしれません。」

と同じ籾山氏が言はれた事がある。自分もこれには卽座に贊成した。十年待つには及ばない、今既に久保田君の作品は、多くの人にとつて最も難解な小說なのである。

久保田君は淺草に生れ、淺草に育つた人である。その描く土地も人も總て淺草を離れない。たまたま——恰も久保田君が汽車に乘つて東京を離れる事の少い程たまには、淺草以外に材料を取る事もあるけれど、矢張り實は淺草になつてしまふ。第一その會話が、どうしても東京の眞中ではない。淺草に限る粗末なところがある。久保田君といへば、無條件で江戶つ子だと思ふ程單純な世間の人に、江戶つ子は江戶つ子に違ひないが、江戶つ子の中の淺草つ子だといふ事を敎へ度い。

淺草の詩人は、淺草を知る事が深ければ深い程、淺草以外の世界を知らない事驚くばかりである。「戀の日」の中の一篇「潮の音」の如き、本來淺草には緣遠い學生々活を描いたもので、これが久保田君程の作家の手になつたものとは受取れない程幼稚だ。新派の役者の演(や)る華族、役人、軍人のやうに氣が利かない。しかも悲慘な事には、新派の役者が、華族、役人、軍人などに充分扮し得たつもりでゐるやうに、久保田君自身は、ちつとも此の半馬(はんま)な事を知らないのである。曾て久保田君が淺草田原町に居た頃、

「何しろ町内で大學に通つてるのは私一人きりなんです。」

と云つた事があつた。家庭とその周圍の空氣が、學校といふものには全く縁遠い爲め、學校といふものを買ひかぶつてゐるのである。既に大學を卒業し、浪花節語と藝術家とをひつくるめて政策の具に供しようとする大臣と膝組で、演劇の改良をはかる久保田君の如きは、當然大學者だと思はれてゐるに違ひない。かういふ周圍の影響から、久保田君自身さへ、學校を正當に了解してゐないで、一種の理想郷のやうに考へてゐた事は、その隨筆や談話筆記の中に、屢々學校に對する少年時の憧憬が、懷しさうに物語られてゐる事實によつて推測される。「潮の音」の失敗の如きは、此の無理解に基因する事いふ迄も無い。幸にして久保田君は、此の頃世に謂ふ所の知識階級に材料を取つたためしが無い。まことに己を知るもので、萬一敢て此の冒險を行つたら、忽ち新派の役者の寫實になる事は疑も無い。

そのかはりに、故鄕淺草を背景にした場合には、久保田君程適確微妙に地方色を描き出す人は少い。「末枯」も「老犬」も「さゞめ雪」も「三の切」も、その他曾て發表した勝れた作品の殆ど全部が淺草である。落語家、宗匠、幇頭、細工物の職人、小賣商人、その女房、番頭、女中、丁稚、さうして時に旦那と呼ばれるその旦那さへ、何處かに安いところがついて廻つてゐるところ、飽迄も

淺草である。その人々の心の底迄、久保田君は靜に、しかしおもひやり深く味はひ盡して居る。かういふ條件のすべてを完全に備へ、しかも久保田君一流の寫實主義が、立派に成功したものが「戀の日」の卷頭を飾る「末枯（うらがれ）」である。

世の中はどうにもならないものだと固く思ひきめてゐる久保田君は、總て大がかりな悲劇を冷笑してしまふ傾向を持つてゐる。人間の意志の力を些かも認めないから、深刻な悲劇は噓としか考へられない。さうして此の傾向も亦、獨特の依怙地から極端に走つて、何でもかんでも大がかりなものは、一切嫌ひだといふところ迄行つてゐる。トルストイ、ドストエウスキイ、ゾラなどの長篇小說は、久保田君にとつては些かくすぐつたいに違ひ無い。日本の作家にしてみても、尾崎紅葉先生や夏目漱石先生のやうな、構への大きい作家の作品は、餘り顧みるところではない。寧ろ片々たる小篇に、屢々特異の味はひを見出す人である。言葉を換へて云へば、この世の中の家常茶飯に、極めて意味深い哀韻の詩を見出して、之を描き出す作家なのである。

鈴むらさんのところへこのごろ扇朝が始終這入りこんでゐるといふ風說を聞いて、せん枝は心配した。何とかしなければいけないと思つた。――だが何とかしたいにも、一月あまりといふもの、鈴むらさんはまるでせん枝のところへ顏をみせなかつた。

これが「末枯」の冒頭である。日の悪いせん枝は、秋の日の障子の中に靜に坐つてゐる。扇朝といふ男は義理知らずだから、ちかづけてはいけないと心配してゐるのだ。義理と人情の世界に住む東京の人は、屢々かういふ種類の心配をする。久保田君にも勿論此の傾向がある。さうしてその心配が、時にとつては――せん枝にも、久保田君にも――一種の道樂に等しい心慰である。心配のなりゆきを考へる時、希望に似た胸のときめきがあるに違ひ無い。しかし此の種の心配性は、決してその心配に拘泥して、進んで解決を求める事は無い。ぼんやりと、友だちの無い寂しさに浸りながら、あの人は如何したらうと思つてゐるばかりで、こつちから相手を探し出して心配してやる執着は無い。それは心配する事の重大と否とには拘らず、何事によらず、うるさく拘泥する事はしないのである。心の底の底には、矢張、心配したつてどうにもならないと、寂しく思ひきめてゐるのだ。

何事にも動き易く、目的も無く浮動して、ふとした事にも身の振方を變へてしまふ心弱い人間を描いて、久保田君はその寂しい心の底の底迄徹してゐる。たとへば扇朝といふ落語家の半生の物語の如き、淡々とした敍事の中に、その外面的に變化の多い幾年と共に、無智で氣短で、その癖始終果敢なく遣瀨ながつてゐる心持を、非の打ちどころの無い巧妙さで描いて居る。當今流行

の新技巧派などと呼ばれて居る作家等が、無駄に冗長なる心理解剖の遊戯に有頂天になつて、落語家でも、幇間でも、田舍藝者でも、不良少年でも、殿樣でも、何れも小說家のやうにもつともらしく、理窟つぽい心理的開展を示して、くだくだしくこだはらせなくては承知しない馬鹿々々しい素人脅しとは品が違ふ。「末枯」のうまみのわからない人間が多いならば、それこそ「世の中が悪くなつた」のである。

扇朝の身の上話の終に、作者はかう說明してゐる。

それから十年。――はじめのうちは、柳朝うつしの人情噺のたんねんなところが、評判にもなつたが、年々に後から後からと、若い、元氣のいい連中は出て來る。――いくら負けない氣でも「時代」のかはつてくることは何うにもならなかつた。

作者は、作者が常にはかながる「時代の推移」の怖ろしさに心を傷めると同時に、その犧牲者に對して同情を寄せてゐるのである。けれども、作者は此の場合にも、決して詠嘆もしなければ嘆息もしない。淡々とした「情緒的寫實主義」を亂される事なく進むのである。

前にも云つた通り、久保田君は、自分では寫實主義の作家を以て任じて居る。しかし生來の詩人的氣稟は、無差別の寫實を許さない。常にその作品が淡い愁にみたされてゐる通り、愁の陰影

の無い世想は、久保田君にとつては藝術にならないのである。鈴むらさんが、先代丁字屋傳右衛門からうけ繼いだ店を、その儘持ち堪へてときめいてゐたら、彼は久保田君の心に觸れて詩になる身の上ではなかつたであらう。せん枝の目が惡くならなかつたら、彼も亦作者の顧みるところとならなかつたかもしれない。鈴むらさんの飼つてゐる犬は、都合よく老犬だつた。これが又よく吠えつく若い犬だつたら、詩人は遂に手を出す事はしなかつたらう。

かういふ風に自分の持味の靜寂を傷つけない爲めに專心な作者は、恐らくは無意識で、自然描寫に於ても、閑靜な、色彩の暗い冬景色を選んでゐる。俳句から來た影響もあらうが、それは殊に雨か雪か曇日に限られてゐる。

「末枯」は、

ある夕がたから降り出した雨が、あくる日になつても、そのあくる日になつてもやまず、どうやらそれは暴模樣のやうにもなつた。――再び晴れた靑空をみることが出來たとき、その靑空のいろがもう水のやうに澄み盡してゐた。さうして、身にしみて冷めたい風がふいた。

といふ秋の初めから、年の暮迄の時雨の多い頃である。

「さざめ雪」は、

暗い、時雨のやうな雨が來て、漸次秋の深くなつて來る夜ごろである。

「三の切」は、

暗い便りない時雨の日がつづいて、今年もそこに十一月が來た、酉の市が來た。

初冬の宵の寂しさに、臺所の障子のかげに、細々と蟀のなく頃である。

「冬至」にはその題の示す通り、

冬至だつた。――雪にでもなるらしく、暗く、凍てついた空に、ときどき、一文獅子の太鼓の音ばかりが心細く響いた。

「老犬」にはその初めに、

十一月の末から十二月にかけて

とあつて何れも冬だ。さうして此の冬空の灰色が、世の中の推移に殘されてゆく人々の身の上をつつんで、一層靜寂を增してゐるのである。

其處に久保田君獨特の藝術境があると共に、此の傾向は屢々作品を平面的なものにしてしまふ憾がある。然るに「末枯」の一篇は、此の缺點を脫却して、描寫もすべて立體的に、現實性を確然

と把持して、渾然とした傑作を成した。ほんとのところ、自分は近頃「末枯」程の作品を見た事がなかつた。

世の中が惡くなつた―とかこちながら、浮世の一隅に、氣の利いた口はききながら、心寂しがつてゐる人々の世の中が「戀の日」一卷の中に沁々と味はれる。

甚だ散漫な自分の感想は、何時迄たつても盡きさうも無い。「末枯」のうまみを細かく味はつてゐるときりが無い。ここいらでひとつ此頃流行の一手を學んで、大ざつぱにかたづけてしまへば、「末枯」の作者久保田万太郎君は、現代稀に見る完成した藝術家で、此の完成したといふ點に於て僅かに肩を並べ得る人は、德田秋聲、正宗白鳥二氏の外には無い。仲間ぼめで危く文壇に地歩を占めて居る人間の多い現在、自分などが聲を張上げるのは誤解を招くおそれがあるが、藝術の作品の僞物とほん物の區別のわかる人々は、此の陣笠の聲の中にも眞實のある事を認めるであらう。

「戀の日」を再讀三讀して卷を閉ぢた時、自分は不思議な氣持がした。その昔賴母しがられた頃はいざしらず、此の頃の、出たらめの、安受合の、ちやらつぽこだと思つてゐた久保田君が、尙斯くの如き靜寂至純なる藝術境を把持して、完全無缺な作品を發表し得る事の不可思議に驚いた

のだ。人間が偉くなければ、立派な作品は出來ないと思つてゐる自分の信仰がぐらついた。矢張り久保田君は偉い人だつたのかと思ひ出した。幾度も幾度も、此の問題を頭腦の中で繰返して居る間に、平生藝術家久保田君を見くびり勝な、其處いらに居る人間どものぼんくらと無禮が癪に障つて來た。自分自身の目はしの利かなかつた事も亦腹立たしくなつて來た。正直のところ、自分は久保田君の藝術の力に、完全に頭を垂れて膝まづいたのである。

　最近、陸軍簡閲點呼に召集されて上京した時、忙しい中で、新婚の久保田君夫妻に逢つた。もの優しい新夫人を傍にして坐つた久保田君は、見違へるばかり身體はひきしまり、一頃の浮調子とはうつて變つて落ちついてゐた。堂々とした花婿だつた。さうして斯ういふ場合には、兎角世間の惡賢い人間がして見せる氣障と厭味を離れて、眞面目に結婚生活の幸福を說いて止まなかつた。女性を輕侮し、結婚生活を羨しいと思つてゐない自分さへ、久保田君の純眞なる喜悅の前には、おひやらかすことさへ出來なかつた。これ程喜べるものならば自分も結婚し度いと思つたが、自分の如き疑深い卑屈な根性の者には、到底それは不可能の事であらう。結局自分は、久保田君の結婚そのものよりも、久保田君が眞心から幸福を感じてゐる心持の方を羨んだ。

　或は遂に久保田君は「生活の改造」を爲遂げたのかもしれない。さうしてほんたうに久保田君の

偉さが、一時の浮薄に打勝つて光を現して來たのかもしれない。「世の中がよくなつて來た」のかもしれない。さういふ奇蹟の起る事を、自分は「末枯」の作者の爲めに祈つて止まないものである。

（大正八年八月十八日）

——「三田文學」大正八年九月號

女人崇拜

「お母さん、私は何處から生れて來たの。」

「それはね、遠くの遠くの方から鸛(こふ)の鳥が銜へて來て、家(うち)の煙突の中に落して行つたのです。」

西洋の子供も、自分達が何處から生れて來たかを訝かしがつて、執拗(しつこ)く問ひただしては母親を困らせるさうである。まことにそれは、吾々が子供心に、飽迄も知らんと欲して、しかも遂に知る事の出來なかつた謎であつた。

物心のついた時には、既に自分の目の前に、兄が二人、姉が一人あつた。柔かに暖く、縋りついて顔を埋めれば、顔中が埋まつてしまふ母の乳房を銜へたまま、何の心配も無く眠つた月日は短かかつた。喰ひついて離れまいとするのを苦い藥を塗つたり、騙したり、叱つたり、すかしたりして、母は永久にその懷しい乳房から自分を振放してしまつた。自分はその日から獸(けだもの)の乳で育

てられた。忽ちにして妹が生れた。續いて弟が生れた。又妹が生れた。妹が生れた。弟が生れた。
弟が生れた。弟が生れた。弟が生れた。
「いつたい赤坊は何處から生れるのだらう。」
幼い自分の頭腦を、此の不可思議はどんなに深く惱ましたかわからない。
「神樣が授けて下さつたのですよ。」
とお祖母樣はおつしやつた。そのお祖母樣に連れられて戶外に出ると、自分が生れた時、お祖母樣の懷に抱かれて、お宮詣に來たといふ神社の前で、
「これがお前達を授けて下さつた神樣だから、かうして拜むのですよ。」
と拍手をうつ事も教はつて、ちひさい手を合せたが、緣日の日の外は、何時も森閑としたお宮の神樣によつて生れたのだと考へるのは、淚が溢れる程寂しかつた。
「それはね、お母樣のお腹から生れて來たのです。」
と或時母自身の口から聞いたのが、ほんとの事に違ひ無いと思つた。
「婆やは木の股から生れて參りました。」
と婆やは眞面目な顏付で云つたけれど、そんな事があるものか。

「ねえお兼さん、お兼さんも木の股から生れて來たんだらう。」
「えゝえゝ、兼も木の股から生れて參りました。」
赤面(あかつら)の御飯たきも婆やに相槌を打つた。
「坊ちやま、銀も木の股から生れたんですつて。」
「坊ちやま私も木の股から生れました。」
若い女中達も一緒になつて答へた。
「噓だい。木の股から生れるなんて噓だよ。僕はお母様のお腹から生れたんだ。」
自分は無理にも母のお腹から出て來た者でありたかつた。
「オヽをかしい。坊ちやまはお母様のお腹からお生れになつたんですつて。」
女中達は聲を揃へて笑つた。けれども矢張り、木の股から生れたとは考へられなかつた。桃太郎のやうな豪傑は別として、自分達は母親のお腹から生れたのに違ひ無いと思つた。だが如何(どう)して生れたのだらう。
「僕、矢張りお母様のお腹から生れたんでせう。けれども如何して出て來られたんでせう。」
「子供を生む時は、お腹が割れて出て來るので、お醫者様や產婆が來て、叉元の通りに縫つてく

れるのです。」

母はすました顔をして答へた。

「お腹が割れるの苦しかつた？」

「えゝえゝ、子供一人生むためには、隨分苦しいおもひをするのですよ、お前の生れる時は一番苦しかつたよ。」

母はさういひながら、自分の口をふさぐためか、愛情の發作の爲めだつたのか、自分の顏を兩手で抱へて、おもひ切つて抱締めて、接吻した。

けれども不思議は解けなかつた。母と一緒にお湯に入る時、一生懸命で注意したけれど、眞白なお腹には子供の出て來た處を縫ひつけた痕なんか殘つて居なかつた。

「お醫者様が上手だから傷にはならないの。」

と母は自分の間に答へた。玆に至つて自分は全く母の言葉を信じた。さうして問題の此の解決は長年の間自分を欺き通した。たぶん、十四五の年迄自分は之を信じてゐた。

尤も、時には、うちの飼犬のお產について疑問を起した事もあつた。犬小舍の寢藁の中に疲れた肉體を横たへ、涙にうるんだ顏をしながら、縋りつく小犬に乳を飲ませてゐる親犬のお腹は、

裂けても破れてもゐなかつた。

「そりやあ犬と人間とは違ひますよ。犬は自分で傷口をなめて、なほしてしまふのです。」と母は云つた。ほんとに犬は、長い舌を出してお腹の邊をなめてゐた。

或春の日の事であつた。家の前の原つぱで、近所の子供達と遊んでゐた時、それは乾物屋の鼻垂したつたが、突然自分に質問した。

「坊ちやん。坊ちやんは如何して生れたか知つてるかい。」

「知つてるよ。お母様のお腹から生れて來たんだ。」

自分は得意になつて、母のお腹が裂けて、其處から出て來たのを、醫者や產婆が拾ひ上げ、お腹の方は叮嚀に縫直したのだと、見て來たやうに答へた。相手の鼻垂しも、同じく此の說明を承認してゐたと見えて、此の點には異議は云はなかつたが、乍併、如何にして母のお腹に宿つたかといふ根本問題を、からかひ氣味に教へて吳れた。

自分は極力反對した。少くとも我が尊敬する父母に、そんな事があるものかと確く信じてゐたのである。鼻垂しも亦熱心に自說を主張した。雙方ともに、その行爲を卑しいものと思つてゐたのだが、自分はその卑しむべき行爲の果實ではあり度くなかつたし、相手は意地惡く、自分をそ

の果實に引下げてしまはうとしたのに違ひない。しまひには非常に熱して來た。

「嘘だい。」

「ほんとですよう。」

「馬鹿ッ。」

嚇として、いきなり横面を張飛ばした。鼻垂しも負けない氣になつてむしやぶり付いて來たが、自分の方が力が強かつたので、忽ち地べたに叩きつけて泣かしてしまつた。かうして喧嘩には勝つたけれど、自分は甚しく侮辱された氣がして、何時迄も不愉快だつた。

その頃の自分たつて、はしたない大人の男が、冗談口をきくのを聞いたり、往來の板塀などの樂書を見たりして、男と女との行爲の存在する事丈は知つて居たが、それは卑しい人間のする事で、偉い人やいい人は、そんな事は決してないものたと思つてゐた。だから、我が尊敬すべき父母に對して兎や角云はれたのは、何にも增した侮辱だつた。さうしてその時の印象は、餘程深かつたと見えて、乾物屋の鼻垂しと取組んた野原の景色は、後々迄明瞭に思ひ出す事が出來た。菫はしぼみ、たんぽぽは風に飛散り、茅花は白く穗になつて、土筆の叔母さんばかり勢ひよく延びる頃の事であつた。

その後小學校へ通ふやうになると、ませた町つ子の口から、いろんな知識を授けられたが、何事に限らず自分自身が經驗したのでなくては信用しない性質の自分は、彼等の言葉を疑ふばかりだつた。少くとも、そんな事は、卑しい人間に限られた行爲だと確く信じて居た。大臣大將先生さては自分の父の如き、偉い人には無い事だと決めて居た。殊に内氣で柔しくて、淫らな事を云つてからかはれでもすると、眞赤になつてうつむいてしまふ女の人達には、そんな汚ならしい心持はない。若しそんな行爲がありとすれば、それは力の強い男の爲めに、いやいやながら服從されてしまふのに違ひ無いと思つた。

或時、たしかに夏の日の事だつたと記憶するが、家の門前で近所の子供と遊んでゐた時の事である、廣々とした空地の草の原の、うねうねと一筋長い道に埃をあげて、車力が荷馬車を曳いて來た。お隣のお寺の前の大道に出て、段々家の方に來る樣子だつたが、その時ふと、お寺の門内から女中らしい女が、風呂敷包を抱へて出て來た。まるまると肥つた、頰邊の赤い、縮毛の女だつた。不意に車力は女の道を遮切るやうに寄つて行つた。女は身體をちひさくして擦れ違はうとしたが、車力はいきなり手綱を捨てて、兩手を擴げて相手を抱きすくめた。さうしてその儘お寺の石垣に押つけてしまつた。ほんの一寸の間の格鬪の後で、男は懷の中の女を放した。髮も衣服

も亂れた女は二三間馳け出したが、車力が後から何かわめくと、口惜しさうに振返つて、胸に抱へた風呂敷包を大地の上に叩きつけた。けれども直ぐに又拾つて、泣顔をして馳出して行つた。車力は女の後姿を暫時見送つたが、無頓着に佇んで待つ馬の手綱を拾ふと、何事も無かつたやうな顔をして、自分達の立つてゐる門前を通つた。通り過ぎる時、極端に淫猥な顔付で自分達の方を見て笑ひながら舌を出した、五六間先の道端の柳の下で、溝の中に悠々と立小便をした後で日盛りの町を遠ざかつた。

自分は、憤に堪へない心持で、その車力を憎み、同時に女の身の上を氣づかつたが、子供心にも女の身は無事だつたと認めて、多少は安心した。けれども遊相手の町ッ子は、既にその格闘の數分間に、車力は目的を達したのだといふ意味の事を口にして、面白さうに笑つた。

此の時の光景は深い震撼を自分に與へた。如何しても男は下等だ。可哀さうなのは女である。世の中の女の幾人が、卑しい男の犧牲になつてゐるのだらうと、その特別の場合から、直に一般の男と女の行爲を推測して憤慨した。自分は決して、そんな下等な大人にはなるまいと心の中で誓つた。

實際女は清淨無垢なものに見えた。良家の子には、淫らな事を、女の口から聞く機會は殆ど無

かつた。たまたま下等な男どもにからかはれる女を見ても、如何にも羞しさに堪へない風情が、嘘詐(うそいつはり)や、慣習的の姿態とは見えず、心底(しんそこ)から厭がつてゐるのだと信じて居た。芝居に行くと、綺麗な女の方から男を口説く場面が多かつたが、それは慾情には關係の無い愛情なのだと思つてゐた。世に謂ふ所の神聖なる戀愛を、子供の心は完全に承認する事が出來たのであらう。今になつてみれば、馬鹿々々しい程見え透いた女の技巧さへ、懷しいものとして疑はなかつたのである。段々生意氣になるに從つて、禁斷の果(このみ)の味を想像する事も出來るやうになり、自分が如何にして、何處から生れて來たかも了解するやうになり、先生にも父親にも、其の行爲のある事を承認したが、それでも未だ、女にもそんな慾情があらうとは到底想像出來なかつた。

此の子供らしい清淨無垢の觀念と結付けて、女人を神聖なものとして崇拜する心持は、自分にとつては、長年月を費して、次第々々に幻滅の悲哀と變つた。姿美しく、心柔しく、麝香の香の沁みてゐるものだと思つてゐたのが、胴中のふくらんだ、足の太い、嫉妬深くて奸譎な、腐つた魚の腸(はらわた)の匂のするものになつてしまつた。殊にその清淨無垢だと思ひ込んでゐた女といふものが、下等だと思つてゐた男よりも、もつと助平なのには心底から驚かされ、崇拜憧憬の念の深ければ深かつた丈、激しい反動が來てしまつた。女人崇拜の甘い夢の後に、女人輕侮の忌々しい心持が、

根強くわだかまつて來たのである。

——けれども、自分の如きは、まだまだ幸福なる理想家であつた。清淨無垢なものとして崇拜したのは、子供の心に過ぎなかつた。今になつては胸が焼けて、とても喰べられない燒芋さへ、子供の時分には隨分おいしいと思つて喰べたが、こいつもそんなものなんだと考へて苦笑した。女といふものは、本來魚の腸だつたのだと、流石に殘念には思ひながらもあきらめてしまつた。僅かに昔の夢をなつかしんで、未練たらしく輕蔑しながら、平氣な面をしてつきあつてゐる。

然るに一人、自分の友達で、此の幻滅の不愉快と寂寞に堪へられないで、此の世の中に生甲斐を感じたくなつた人があつた。彼は遠い西の國から出て來た學生だつた。自分とは、僅かに一年半ばかり同じ教室に机を並べたばかりだつたが、その一年半の終りの三四ケ月の間に、かなり親しくつきあつた。彼は級中で一番よく出來た。うるさくたる程念入りな性質で、教師がもてあます程質問好きだつた。中學時代からその學校にゐた自分と豫科に新入の彼とが、どうしてちかづきになつたのかは忘れてしまつた。彼も人づきあひのいい方ではなかつたが、當時の自分は誰人とも口をきくのさへ嫌だつた程だから、先方からちかづいて來たのに違ひ無い。彼は基督教の教會に出入してゐたが、實は恰も信仰が破れて、苦しんで居た時代だつた。自分にむかつて、曾て

神を信じた事があるかと訊いた事があつた。無いと答へると、

「それは何よりも幸福ですね。信仰の破滅程苦しい事はありませんよ。」

と、眼鏡の下の目をくもらせて云つた。

冬の試驗の近づく頃の事である。その頃しきりに怠け始めてゐた彼は、突然學校に姿を見せなくなつた。一週間たち、十日たつても出て來ないので、病氣で寢てゐるのだらうと思つて、見舞狀を出してみた。するとその返事は、學校が厭になつたからやめるつもりだといふ意味のものであつた。自分は驚いて彼を訪問した。霙に近い雨の降る日で、初めて訊ねる牛込の奥の貧しい町の、その素人下宿を探し出すのは隨分難儀だつた。烟草屋の奥の四疊半に、火の氣の乏しい火鉢をはさんで向ひあつた時、彼が著しく陰鬱な顔附をしてゐるのに驚かされた。雨漏のする縁側に出してある盥に落ちる水の音は、今でも耳に殘つてゐる。

先づ、どうして學校をやめる氣になつたのかと口を切つて、いろいろ話をしてゐるうちに、相手は非道(ひど)く眞劍になつて、此の頃の心の惱みを物語つた。さうしてその惱みの原因は、意外にも、女人崇拜の夢の破滅であつた。

彼は幼くして母を失ひ、妹と共に父親の手に殘された。數年の後新しい母が出來たが、その新

しい母親には妹と同い年の女の連子があつた。繼母は優しく、美しく、彼にとつては亡き母と同じく、親しみ昵む事が出來た。鑛山に手を出して父はいつも留守勝だつたから、彼は殆ど女ばかりの間に育つた。さうして彼の目に映る女といふものは、世にも美しいものであつた。生れつき憧憬の念の強い彼は、自分の憧憬の對象を、極端に神聖なものとして考へなければ承知出來なかつた。人の卑しんで見せる慾情が、神聖なる女性の心にあり得よう筈が無いと思つたのは無理では無い。

實際彼は、その時既に中學を卒業して、しかも同級の生徒達よりも二ツ三ツ年長だつたが、自分自身は春の目覺めに惱みながらも、女性にその慾求があらうとは如何しても思はれなかつたさうである。清淨無垢な女に對して、時に卑しい心の起る事を、いかに恥ぢ、いかに惱み、いかに苦しんだかわからなかつた。

何にしても、すべて世の中の女は、姿も心も崇拜に價した。女がある爲めに、此の世の中は、僅かに最後の審判を免れてゐるのだとさへ考へられた。就中自分が愛する母、妹、並びに義妹は、比ぶべくもない清いものに思はれた。さうして彼は今日迄、女人崇拜の夢に醉ひ續けて來た。美しい繼母は年をとつたが、妹も年頃になり、義妹は殊の外美しくなつた。

然るに今年の夏休に故郷へ歸つた時、彼は到底信じられない一大事を、目前に見せつけられた。妹と義妹が、一人の男を戀してしかも義妹はお腹が大きくなつてゐたのである。相手は彼も知つてゐる、教會に出入する青年であつた。

彼の苦惱はその日から始まつた。義妹の醜穢な姿、それに對して狂氣のやうに嫉妬する妹を目の前にして、清淨無垢の女の世界に憧れた彼の夢想は、無慚に破壞されてしまつた。世の中には醜惡そのもの以外に何も存在しなくなつた。

「君はその義妹を戀してゐたのではないのですか。」

自分は、涙ぐんでうつむいた彼の言葉の切目を待つて訊いた。

「サア、それは自分でも疑つたのです。けれども如何も左樣とは考へられません。」

と彼はきつぱり答へた。明確には意識しない戀といふ事も想像したけれど、女人崇拜の夢の破滅として、自分は十分同情する事が出來た。

話の終るのを待つて、自分は自分自身も同じ意味の女人崇拜に耽つた事もあつたと話した。しかし今では、女の生ぐさい臭ひを承知してゐて、曾ては小汚ないものに思つた男よりも、もつと汚ならしいものとして見てゐられる事を話した。

「世の中はね、輕蔑し、冷笑して見てゐれば氣樂ですよ。」
自分は小悧巧らしい事を云つてなだめたが、
「しかし僕には、僅かに清淨なものと思つてゐた女性が、そんなものだとしたら、生きてゐ度いといふ欲求はなくなりました。」
と相手は沈んだ聲で答へた。
清淨無垢といふ觀念の誤謬をも說いたが、それは勿論無駄だつた。彼にとつては、彼が抱いた理想をうら切る事實が堪へられなかつたのだ。
「僕は自殺しようかとさへ考へました。」
黃昏の迫つて來た部屋の中に、沈みかへつた相手は吐息と共にかうも云つた。ほんとに死んでしまひさうな一本氣の人であつた。
自分は冷笑の方丈に立籠る事を無益にも長々としやべつたが、相手は到底とり合はなかつた。
冬の日は暮れ切つて暗い電氣のついた時、餘りに壓迫されるやうな室內の空氣に堪へられなくなつて、自分は後日を約して別れた。
それつきり彼の行方を自分は知らない。一度は故鄉へ歸つたらしいが、恐らく其處にはゐたた

まれなかつたらう。或はほんとに自殺してしまつたのかもしれない。思ひ込んだら、何事でもやり兼ない男であつた。

乍併（しかしながら）、その時から既に十餘年の歳月は過ぎた。彼も亦魚の腸の腐つた臭ひに馴れてめとり、或は親と呼ばれる身になつてゐるかもしれない。だが、どうしてもそれは自分の臆測に過ぎないやうに直覚される。彼は自分のやうな、中途半端な幸福者ではなかつたらしい。

何れにしても、自分は彼の行方を知らない。さうして此の行方を知らないといふ事によつて、此の話の餘韻を保つて置かう。（大正八年十一月十五日）

――「三田文學」大正八年十二月號

泉鏡花先生と里見弴さん

田山花袋氏は里見弴さんを評して「大正の鏡花」と呼んで居る。その他、雜誌や新聞にも「大正の鏡花」は散見した。云ひ出したのは田山氏か、別の人か、自分は知らない。無責任な雜誌や新聞の「大正の鏡花」呼ばはりには、ほめた意味の時もあり、輕く扱つた意味の時もあつたが、田山氏の場合は、明かにほめた意味では無かつた。恰も「文章世界」の投書家の小說を評して、「大正の花袋」だと云ふのと同じ程度のものであつた。

今更言ふ迄も無い事だが、泉先生は明治大正にわたつての偉大なる作家である。自分は常に斯う思ふ。若し先生が西洋に生れたとしたら、先生は世界的の作家として喧傳され、日本の飜譯家達は、先を爭つて誤譯だらけの飜譯をするに違ひない。不幸にして先生は、他國の人には讀み切れない、やゝこしい言葉の國に生れた爲め、敏感なる歐羅巴の文藝批評家に鑑賞の歡喜を與ふる

事なく、鈍感なる此の國の西洋盲拜者流から、屢々誤つた批評を受ける事になつた。
里見弴さんが勝れたる作家だといふ事も、既に喋々する必要はなくなつた。乍併里見さんの場合にも、鈍くて押の強い連中は、屢々間違つた批評を浴せかける。「大正の鏡花」の如きも勿論その一例である。

凡そ一流の達人は、その道の藝の巧拙を見誤る事が殆ど無い。泉先生が常に里見さんの作品のいいところと出來損つたところとを、痛い程明かに指摘されながら、しかも弴さんの冴えた手腕を推稱して、現代並びなきものとして居られるのは、かくれもない事實である。里見さんが泉先生に敬服し切つて居る事は、新著「慾」を獻じて居る事によつても、世の中に知れわたつて居る筈だ。

さうして此の御兩人が、親しいおつきあひをして居られる事も事實である。けれども「大正の鏡花」に至つては、泉先生も里見さんも、お互に迷惑を感じるに違ひ無い。

泉先生の藝は弴さんの所謂肚の藝である。斷つて置くが、茲に肚の藝とは、確固たる自己の世界を把持して動かない人の藝を謂ふのである。由來僞物の藝は容易に眞似する事が出來るが、肚の藝はさうはいかない。以前は、泉先生の眞似をする人間が隨分澤山あつたが、到底も眞似切れ

なくなつて、影をひそめてしまつた。里見さんの藝も肚の藝である。相手がどんな偉い人たらうが、好きな人だらうが、その人の眞似なんかしようとは思はない人間である。若し眞似をしようと思つたら、お手本よりも一枚上手(うはて)に出て、まんまと自分の肚の藝にし生(い)かしてしまふに違ひ無い。さういふひえもんを持つて生れた人だ。

かう書いて來ると、勢ひとして、御兩人の作品の相違する點を眞赤になつて論じなければならなくなりさうだが、それは餘りわかり過ぎた事で馬鹿々々しい。自分はその馬鹿々々しさを避ける爲めに、最近に拜見した御兩人の作品各一篇を選んで、その作品から受けた感激に醉ひながら、且つ作者の特點を明かにしたい。

「伯爵の釵(かんざし)」は、大正九年一月號「婦女界」に掲げられた泉先生の新作である。元來先生の作品は、部分的には冴えた客觀的描寫の手腕を見せながら、大體の構想と仕組は物語風(ナレエテイブ)である。單純に、あるが儘の世相を描寫するのではなくて、一篇の骨子を成す物語の開展に大部分の興味を置くのである。而して又、あるが儘の世相を、如實に物語る事は先生の興味の埒外であつて、あり得可からざる事を、あるが如くに物語る事が先生の獨特の世界なのである。

此のもの語の起つた土地は……

と冒頭の一句が自ら示してゐるやうに、「伯爵の釵」も亦物語である。同時に又、あり得べからざる事を、あるが如くに物語る小説なのは勿論の事だ。

一年、激しい旱魃のあつた眞夏、女優村井紫玉を主とした新劇團が、北陸の都で興行して、人氣を博した時の事である。美しい女優は人目を避けて市中の見物に出た。公園の下の宮の境内の、高い手水鉢を廻つて一人の稚兒が水を求めてゐるのを見て、紫玉は斯うして飲めば仔細は無いよといひながら、溢れる水を唇に請けて見せたが、稚兒は、手を浄める水に吻を接るのを咎めた。おもひあがつた女優は、稚兒の口巧者を生意氣がつて、その頭を掌で叩いて見返りもせずに去つた。扨て公園の岡の茶店に憩ひながら、先刻の稚兒の事が不圖胸に浮んだが、その稚兒が男だつたか女だつたか、はつきり記憶えてゐなかつた。稚兒のゐた宮は浦安神社と呼んで、女神か男神かは知らないが、水を司る神なのであつた。時にその茶店の前に、墨染の法衣も破れた僧形の門附が來て膝まづいて虫歯に惱む口中へ、禁厭として、紫玉が曾てさる伯爵に贈られた釵を挿入れてくれと嘆願する。斷り切れずいふがまゝにしたが、扨てこの後で釵には、坊主が口中の惡臭が絡りついてしまつたので、紫玉は瀧壺に投捨てた。しかもその釵は同日に同じ公園の池の鯉魚の腹から出て、女優の手に戻るのである。その夜再び逢つた門附は、先刻の禮心に、近く雨の降る

事を豫言し、それを利用して雨乞の一幕を演じ、いやが上にも名を擧げよと教へた。教へられた女優は、さまざまの事の不思議に神異を信じる心になり、芝居がゝりで雨乞をしたが、雨は降らずに嘲罵の的となつた。口惜さに身を恥ぢて、倒に池に身を投じたが、氣の付いた時は目の前に、門附の坊主がゐた。氣高い貴女を見た。貴女は浦安の宮で見た稚兒に寸分違はぬ、水を司る神であつた。坊主はかしづく下僕であつた。さうして女優が身を投げたと思つたのは池ではなくて、神意によつて車軸を流す豪雨だつた。

　間違つてゐたら、面目ないが、これが一篇の物語の筋である。何もそんなに下手な梗概を述べるには及ばないといふだらうが、自分は自分の批評の筆を進める爲めの便宜上、特に味もそつけも無い略筋を勝手に書いて見たのである。

　此の水上瀧太郎作る所の梗概を讀む人は「伯爵の釵」の荒唐無稽に驚くだらう。驚かない者は、その馬鹿々々しさにあきれるのだらう。乍併、去つて泉先生の描出した「伯爵の釵」を讀め。勝れたる感覺を持つ讀者の目の前には、此の荒唐無稽の筋書が、空氣は浮動し、日輪は東から西へ廻り、瀧は轟き、池は波立ち、鯉は躍り、雨は車軸を流す光景となつて、あり得可き神祕境を展開する。花を描いて香を想はせざるは未だ達人の藝では無い。女優の身じろぎにつれて、その身に

つけた香料は、遠慮無く讀者の鼻を衝くであらう。

これを呼んで、内容無き技巧といふものはあたらない。不幸にして泉先生は、世の中のぼんくら批評家の爲めに、無益に勝れた技巧を持つ作家だと誤り呼ばれる事が多い。自分は茲に文藝の作品の技巧の問題について論じようとしてゐるのではないが、凡そあらゆる藝術が、表現によつて初めて作品としての存在をかちうるものである以上は、内容と離れた技巧なるものの存在しない事は明白である。或作家の技巧が生きてゐるか、死んでゐるかは、如何にその内容を、適確に表現し得たか得なかつたかによつて定まるのである。東西古今偉大なる藝術家は偉大なる表現能力即ち勝れたる技巧の所有者だつた。彼等は凡人よりも強く深く感じ、凡人よりも鋭く表白する。悲みにしろ、喜びにしろ、他人のはかり知る事の出來ないところ迄味はひ盡す。その境地迄行く事の出來ない者から見れば、屢々それが嘘に見える程、彼等と衆愚の間には距離がある。

泉先生の場合に於ても、自分の如きは、あり得可からざる事をあり得可き事のやうに描く作家だと評したが、それは凡人の場合からいふ言葉であつて、實は先生自身にとつては、先生の描く世界はあり得可き世界なのだ。必ず存在する世界なのだ。一昔前、或雜誌に出た先生の談話に「黄昏の國」を論じたものがあつた。それによると、此の宇宙の間には、晝と夜との世界の外に、

未だ吾々の知らない黄昏の世界がある。時にふとその「黄昏の國」を覗いた者は、神を見、佛を見、妖怪を見る。神も佛も妖怪も、その國には常に姿を現はしてゐる。たゞ吾々の世界にいい氣になつてゐる者の目には、うかゞひ知る事が出來ない丈だといふのであつた。これは單なるお話では無い。先生は確く信じてゐる。さうして此の信仰が、先生の作品をして荒唐無稽な物語に陥らしめず、吾々の想像が描出し得る神秘境を披瀝するのである。

自分は泉先生の作風を評して物語風だといつた。乍併それは輕い意味に於てのお話とは全然違ふ。お話は口のさきでしやべる丈でも事は濟むが、先生の物語には、前提として、先生の目に映じた幻影がなくてはならない。それは實在に等しい。近頃流行るやうな、昔の英雄、美人、高僧、盗賊等の逸話に、無理に近代的問題をつけ加へた小説のやうなのは、あれは心理解剖の遊戲で、お話の部に屬す可きものだ。泉先生の場合に於ては、假令神を描いても、その神は昔話の神ではなくて、吾等と共に存在する神なのだ。

神は確に存在すると先生は信じてゐる。さうして先生の神様は、最も人間に親しく人間の如く無邪氣に人間の如く我儘に、人間の如くいたづらな神様である。「伯爵の釵」の女神もよく之を立證してゐる。此の無邪氣にいたづらな女神の前に、おもひあがつた女優が現はれたのだもの、か

らかはれ、こらしめられ、可愛がられないでは居られない。自分は女優が女神の前に現はれたのだと云つた。「伯爵の釵」の主人公は、女優ではなくて女神である。女優のしたあらゆる事が、殆どすべて見通しに女神によつて見透(みすか)されてゐる。先生の神に對する憧憬と、近代的の女性に對する輕侮はかういふ處にも覗ひ知る事が出來る。

それでも村井紫玉の如きは、平生人間を大別して好きな人間と厭な奴、善玉と惡玉に類別する惡癖のある泉先生としては、隨分いたはつてやつた方なのであらう。先にもいつた通り、その作風は物語風で、作者は始終作品の中に顏を出し、勝手氣儘に好嫌(すききらひ)から出立する鼓吹と罵倒をちやんぽんに出して憚らない先生が、元來嫌な束髮を餘り甚しく滑稽化しなかつたのは難有い。

　膚の白さも雪なれば、瞳も露の涼しい中にも、擧つて座中の明星と稱へた村井紫玉

とかき出して、

　髷も女優巻でなく、故(わざ)とつい通りの束髮で、薄化粧の淡洒(あつさり)した意氣造。形容(しな)に合はせて、煙草入も、好みで持つた氣組の婀娜(あだ)。

と先生は何時の間にか、自分の好みの女にしてしまつた。これが後に、雨乞の場になると、

　扨て、遺憾ながら、此の晴の舞臺に於て、紫玉の爲に記すべき振事は更にない。渠は學校出

の女優である。

と本音を吐き、

須臾（しばし）を待つ間を、法壇を二廻り三廻り、緋の袴して輪に歩行いた。が、此は鎮守の神巫に似て、然もなんば、と言ふ足どりで、少なからず威厳を損じた。

と冷嘲して居る。感情の強い作家は、紫玉に對して持つた好感を忘れて、平生一般新劇團の女優に對する忌々しさを、せめてもの腹いせに持出したものらしい。かういふ悪いいたづらは、先生の作品には絶えず現れて、吾々を冷々させる。其處に先生の作品に、屢々破綻を見る事は否定出來無い。

乍併、いつたん女優が靜止の狀態を離れて、動けば動く程活々として來るところは、誰が何といつても及び難い藝である。例之、艶なる女優が瀧に臨んで、白金（プラチナ）の釵を投げうつところ、其處には作者が常に好んで描く人間の意氣が爽かに動いてゐる。例之、芝居がゝりの雨乞に失敗して、恥辱に堪へられず身を沈めるところ、其處には傲（おご）れる者の一朝にしていたましく傷ついた姿が殘酷ともいふ可き程鮮かに浮び出してゐる。何故に先生は人を描いて、靜止の姿よりも活動の姿に妙を盡すかといへば、それは先生自身は意識しない事に違ひないが、驚く可き印象的描寫の力な

のである。換言すれば、好んで自分の主觀的色彩を作品に出す先生は、實は客觀描寫の極致に達して居るといふ事なのである。先生の印象的描寫は、單に色彩を強烈に描くばかりではない、音響を描き、香氣を描き、殊に動作を描いて遺憾が無い。三人の女優が池に舟を浮べて、底知らぬ水の渦巻に脅されて立騒ぐところもいゝが、就中先生の印象的筆致の代表的の手本ともいふ可きは、女神昇天の一節である。

かなぐり脫いだ法衣を投げると、素裸の坊主が、馬に、ひたと添ひ、紺碧なる巖の聳つ崖を、翡翠の階子を乘るやうに、貴女は馬上にひらりと飛ぶと、天か、地か、渺茫たる曠野の中をタタタタと蹄の音響(ひゞき)。

何といふ壯大な景色だらう。自分は此の一節を讀んで息が詰る程感嘆した。繪具も樂器も、果してこれ丈の色彩と音響を傳へる事が出來るだらうか。

これは昇天の女神を幻に見るが儘に描いたものであらうが、同時に又、天地を靜めて降る豪雨の人格化と見ても差支へない。要するに此の凄じい景色の中に、一度死を決して池に身を投じた女優が、倒れ伏して居るのである。靈氣に打たれて新なる生命に蘇生(よみが)へる事は疑も無い。かういふ解釋をする時には、先生の小說は極めて象徵的なものになつて來る。それが正しい解釋か如何(どう)

かはしばらくおき、何れにしても先生の作品の不思議な魅力は、その内容の幽幻を、白日の光よりも強く輝かしく描き出す印象描寫の冴にあるのである。此の特點を嘆稱する吾々は、何時か一度先生が、おもひ切つて現實的な事柄をありの儘に描いて見せてくれないだらうかといふ慾を抱き度くなる。

乍併先生は、恐らく承知しないだらう。何故ならば、此の一篇によつてもうかがひ知られるやうに、先生の創作の興味の大部分は、人の企て及ばない不思議を描く事、その不思議を描くのに、變幻極まり無きこんがらかつた綾を見せる事にあるからだ。浦安の宮の階の傍に立つ、紅の手綱、朱の鞍置いた、つくりものの白い神馬は、やがて後段の昇太の馬の姿である。その宮の前の御手洗に水を求めた稚兒は、旱魃を救ふ爲めの女神だつた。殊に作者が案を得た時膝を打つて喜んだらうと思ふのは、その稚兒が男だつたか女だつたか記憶が朧になつて、考へ迷ふところであらう。茶店の主人の言葉によつても、浦安の宮の神は、男神か女神かわからなかつたのだ。時に甚しく全體の作品の効果よりも、部分的の冴に夢中になつてしまふ泉先生は、此の一節に全力を盡したに違ひない。先生自身の最も好まれる、人の意表に出る興味が躍然として現れてゐる。何時もながら先生は、平坦なる途を選んで誤り無き事を心懸ける作家でなく、人の難しとすると

ころを敢て爲遂げて見せようとする冒險的技巧に終始する作家なのだ。

冒險的の技巧を喜ぶ點に於ては、里見弴さんも亦泉先生にひけをとらない。さうして此の特徴が、「大正の鏡花」の原因となつてゐるのらしい。乍併第一に、弴さんは、泉先生の如き物語を專一とする作家ではなく、或特殊の狀態に置かれた人間を、さまざまに觀察し解剖し盡したあげく、あくどい程鮮かに描出さうとする作家である。時にはそれが、單に或場景の描寫丈で終る事もある。さういふ時には、作者は場景が思ふまゝに描けて居れば滿足なのであつて、特に戯曲的な事件の發展や大團圓などは問題の外にあるのである。くどくどした說明を離れた描寫の冴は、茲に再び「大正の鏡花」の間違を引起しさうだが、眞にいきいきした描寫をなし得る僅少の作家の中に、先づ第一に並んで數へらるべきは此の御兩人である爲め、期せずして似通つた味を持つ時があるのであらう。

「彼と小娘」は、大正九年一月號「新小說」に出た里見弴さんの小說で、短い三つの場面と、更に短いはしがきから成立つてゐる。

十八九で女を識つてからも、一度も年下のものに目をくれたことはなかつた。可愛がられる、といふ、受身の享樂しか彼は識らなかつた。

その彼が二十二の夏、六つも年上の女の許に流運した時の場面が先づ目の前に浮んで來る。いかにも鮮明に、おいらん臭いにほひがむつと鼻をつく程十分描き出されて居る。驚く可き細かい描寫であると同時に、驚く可き大膽なる省略法を用ゐて居る。しかも此の人間を觀察し、人間を描き、徹頭徹尾人間に執着してゐる作者は、景色を描く場合にも、決して人間を忘れ無い。おまけにいつもの通り、おそろしく性慾的だ。殆んど挑發的だと云つてもいい位肉體の觸覺が描かれてゐる。例之、鐵の棒におつつけてゐた額、十四になる小娘のたべてやりたい頰邊、上新の皺だらけな足頸、人形屋の店さきに投げ出してあるやうな足が二本。

「よく肥つてるねえ。」

「あなたは痩せててちひさいわね。」

といふ直ぐ後に、

「おんぶしてあげませうか。」

と續けて小娘に云はせたうでには敬服した。ここのところで、

「おんぶしておくれ。」

と男に云はせては、まるつきり其場の景色が出て來なくなる。小娘の方からおんぶしようとい

ひ出したので、ダラリと足が引きずつたまゝおんぶされた男が、

「大丈夫よ、足をちぢめなさいよウ。」

「かうか。」

と股をわつて、意識して膝頭で娘の腿を締めつける段取が生きて來たのだ。名人の藝に違ひ無い。

男はその小娘を、小娘に對する特有の慾情の危機迄行きながら逃がしてしまつた。

次は郊外の貸家の場面になる。

三四年のちのこと、彼は、相變らず年上の女との關係で、暫く二人で世を忍ぶために、郊外に貸家を見つけてゐた。

此邊に出て來る十四五の、髮をお下げに編んだ娘も生きてゐる。野菜畑の間をヒョン／＼飛びながらやつて來る、安つぽくて可愛らしい姿は極めてエロテイツクだつた。夜の暗がりよりも、晝の暗がりは更に變な心をそゝるに違ひない。しかも空家の中だ。殆ど名人の書いた上品な春畫の趣きを備へてゐる。小憎らしい程うまいと思つた。

男はその小娘と、再び危機に迫りながら、又しても逃がしてしまつた。

えゝもう破れかぶれだ！

と思ひながら、自分の心を見透かされてしまつた。心持の上ではさきが上手だと感付いて、忽ち逃足になるところが素敵にうまい。かういふ細かい、皮肉な、心の變化を捕へる事は、磚さんの最も得意とするところで、屢々此の作者の作品は、始めから終迄此の心持の闘爭ばかりで持切る事さへあるのである。此の點に於て、極端に單純に、一本調子に惚れたり、恨んだりする泉先生の作中の人物とは、甚しく違つてひねくれてゐる。

突然場面は山中になつた。吉原では三郎さんと呼ばれて、いかにもその名が三郎さんでこそ、おんぶしたり小娘におびえたりしてもしつくりはまると思はれた男が、何時の間にか、草艸紙に出て來る曲者のやうな旅商人になつて現はれた。どう考へても三郎さんらしくない。肚の虁が少し下り腹になつたのだ。しくしく痛んで來たかたちだ。とはいふもの丶、切放した一場面として見る時は、これも亦冴えたうでを見せたものである。

汚れた吸取紙色をした腰巻をだし、手拭だけ新しいのを被つた、十四五の田舍娘を犯さうとする、

大名縞の薄汚れた袷を着て、木綿博多の帶に尻を高々とからげ、鼠色になつた白の股引に脚

絆、手甲、草鞋ばき、の男の立廻は、愈々景色を明瞭に描き出した。一層春畫の趣を増した。男はこの小娘を、ひつくりかへすところ迄行つたが、又してもしくじつてしまつた。片頬に幾筋も縱皺をよせて苦笑ひながら呟いた。

いゝにがてだなア……

作者は最後におちをつけて、此の色彩の鮮明な、巧緻を極めた繪本を閉ぢた。

自分は此の短篇によつて、豫而弴さんがこころざした描寫の冴は完成したものと思つた。勿論思想的に偉大な作品ではないが、そんな事は作者が覘つたところではないから構は無い。要は作家が描かうと思つた丈の事は、完全に描けてゐるのである。此の點に於て、「彼と小娘」は弴さんの傑作の一に數ふ可きものである。但し前にもほのめかして置いた通り、三郎さん一人に對する三人の小娘の、それぞれ異つた場面を見せる爲めに、特に選んだ景色の中、第三のものは餘りに脈絡が無さ過ぎてをかしい。繪本を見せるやうな書振では、三郎さんが苦み走つて來る迄の經路が示し切れない爲め、甚だ唐突の感がする事になつた。邪推すれば、作者の冒險癖が、たまたま手傷をおはせたものであらう。此の冒險好と鬪聯して、弴さんは又頗るつきのいたづらつ子だ。

一事一事に、何かしら目新しい形容をつけなくては承知出來ない。數へればきりが無いが、その中の傑作と思ふのは、吸取紙色の腰巻である。但しこれも、此の場に於て最も選ばれたる形容かといへば、實は寧ろそぐはないものだと答へ度い。旅商人も、小娘も、芳年の繪にでもありさうな景色なのに、突然舶來の色彩が滲んで來たやうで吸取紙は似合はなかつた。たゞそれはかりを切り放してみた時、いかにも弴さんが嬉しさうに微笑しながら想ひ浮べた洒落らしくて面白いのだ。

最後に注文を出して置き度いのは、此の甚しく挑發的な、色彩の豐富な繪畫を文字で描き出す手腕を揮つて、更に一層濃艶なものを書いて貰ひ度い事だ。實は、以前から時々考へてゐる事だが、弴さんの作品には、變態性慾と殘虐性の興味が甚だ強い。それは谷崎潤一郎氏のやうな意識的なものではなく、不知不識に本性をあらはしたともいふ可きものに思はれる。「彼と小娘」の如きも、大いにくすぐつたいものではないか。弴さんもつて如何となす。

終に臨んで、自分が甚だ遺憾に思ふのは、いろ／＼の事情で、最初自分が企てた批評とは全然違ふ粗末なものが出來上つてしまつた事だ。泉鏡花先生並びに里見弴さんにも紙上に於てあやまつてしまふ。そのかはりにあんまり叱らないやうにして頂きませう。（大正九年一月十五日）

――「人間」大正九年二月號

初夢

廣い廣い座敷の一隅に、大きな火鉢に噛りついて、たつた一人、自分は坐つて居た。何處からともなく生温い風が吹いて來る度に、海鼠（なまこ）と海鼠腸（このわた）の臭が鼻を衝いて來た。

突然、座敷中が暗くなつたと思ふ程、多人數が入つて來た。誰も彼も黒紋付の羽織に仙臺平の袴だ。その袴の絹裏のしゆうしゆういふのが怖ろしく耳障りだつた。

わやわやがやがや話聲がし始めたと思ふと、幾百人があつちこつちに輪になつて陣取つて、既に勝手氣儘に喋り出したのだ。どいつもこいつも實によく喋る。他人のいふ事なんか聞いて居る奴は一人も居ない。サシスセソの區別のつかない東北辯も居れば、ガギグゲゴの發音に癖のある九州辯も居る。

不圖氣が付くと、みんなの紋が珍しい紋だ。眞中にじやじや張つて、一番人數も多く、一番行

儀の悪い一團の紋はお揃ひで、稻だか麥だか判然しないが、兎に角そんな植物の組合つてゐる紋だ。向うの隅には大字を染抜いた一連がゐる。此の連中は無暗に獨逸語をつかつたり、英語をまぜたり、佛蘭西語をはさんだりして喋り立てた。折角だが發音はなつてゐなかつた。その隣には櫻の紋の一群が非道くはいからな服裝をしてかたまつてゐたが、そのはいから揃ひの中にたつた一人、千草色の破股引を穿いた百姓がまじつてゐた。しかも此の百姓は、一群の中で一番威張つて居た。此の一人丈はぬのこだから紋はない筈だと思つたが、驚いた事にはうす汚ないぶくぶくしたそのぬのこの背中に、ぜいたくな金絲の縫紋があつた。

「今日は。」

ぼんやりしてゐた耳元で呼かけられて氣が付くと、何時の間にか自分の廻りにも、かたまりが出來てゐた。

「近頃は如何です。お忙しいのによくお書きですね。」

生若い、いやに頭髮の油の光り過ぎたのが馴々しく口を利いたが、自分はそんな男は知らなかつた。その男の紋は洋筆のぶつちがひで、洋筆と洋筆との組合せ目に新の字が入れてあつた。

「珍しい御紋ですね。」

とお愛想を云つてやつたら、向うはけげんな顔をして、
「貴方のとお揃ひぢやありませんか。」
と云つた。成程、自分の紋も洋筆だつた。一體、何時、紋付の羽織なんか着たのか自分では知らなかつたが、兎に角人並に紋付だつた。うちの紋は鷹の羽で替紋は九曜星なんだが、洋筆とはをかしいなと思ひながら、袖をかへしてつくづく見ると、洋筆は洋筆だが頭髪の光る若者のとはちがつて、眞中に舊の字がくつついて居た。身近の人々を見廻しても、舊の字の洋筆は一人もゐない。みんな新だ。さうしてその新が、べちやくちや喋つてゐた。だが、なさけない事には、洋筆の紋は、ないしよ話ばかりしてゐて、落語家(はなしか)のいひさうな洒落を口にしては悦喜してゐるのだつた。
「お江戸日本橋七つだちつていふ歌があるだらう、あいつを五十三次すつかり知つてる人はゐないかしら。」
「知つてる人がゐたら敎はり度いな。藤枝娘のしをらしや、投島田、大井川へと抱き込んで、なんて感覺描寫の極致だね。今時の奴等には到底(とて)も眞似が出來ない。」
新の字の一人がその友達にかう答へた。

今時の奴等などといひながら、その男こそ若僧で、何處から見ても今時の奴だつた。
「水上さん、貴方はアナトオル・フランスと芥川龍之介とどつちがうまいと思ひます。」
矢張り自分の知らない男が質問した。
「どつちがうまいでせう。一口にいへばアナトオル・フランスは素人で、芥川さんは玄人でせう。」
と自分は返事をした。
「さうです、確にさうです。」
とその男は滿足してうなづいた。實のところ、自分はアナトオル・フランスも芥川龍之介氏も、よくは知らないのだつたが、かまふものかと思つて答へたのだ。
廣い座敷もいつぱいになつてしまつた。まだまだいろんな紋の連中がゐたが、あんまりこみ入つた紋なので、覺えてはゐられなかつた。
「來た來た來た。獸(けだもの)が來たぞ。」
「惡友ばかりぢやないか。」
そんな聲が四方から聞えて來た。みんなの視線の向く方に目をやると、何れも醉拂つた足取の

危ないのが、肩に手をかけ合つたり、おんぶしたりして入つて來た。稻の紋もゐれば、大の字もゐる。櫻の紋もゐれば、洋筆の紋もゐる。

「人道主義？　勿論それも結構です。乍然吾々は先づ人間そのものを極め、人間性に徹しなくてはならない……」

　貧弱な顏付の一人が、醉拂つた長い手を上下左右に振つて演說を始めた。

「よせよせ、下らない。こんなところで演說なんかしたつて始まらねえや。それよりも一杯飮むさんだんでもした方がましだぜ。」

　その仲間の一人が、いきなり演說してゐる男の肩をつかまへて、力づくで坐らせてしまつた。

「そんな手荒な事をされては僕の大事な女の讀者が減つてしまふぢやないか。」

　へなへなと坐らされてしまつた演說の男は、滿座の中でめそめそと泣出した。

「彼は實に純な感情を持つてゐます。此の人數の中で、只管泣くといふ心は尊い。」

　誰だか知らないが、突立上つて、泣いてゐる男をほめ出した。

「默れ三百代言。」

「引込め活辯。」

あつちからもこつちからも罵聲が湧きかへつて、立上つた男の聲は聞えなくなつた。
「どうも濟みません、遲くなりました。」
泣いてゐる男の連中の中から、小走りに出て來て挨拶した男があつた。久保田万太郎さんだ。
嬉しい事には久保田さんの紋も、自分のと同じ舊印の洋筆(ペン)だつた。
「彌さんも一緒ですよ。呼んで來ませう。」
いふかと思ふと立上つて、たつた一人のお仲間の舊印の久保田さんは、人ごみの中にまぎれて見えなくなつてしまつた。
「諸君、旣に世界は改造の黎明に際してゐるのである。此の時にあたつて今もなほ、雪月花におもひを寄せる詩人小說家が存在するとは何たる事だ。すべからく民衆の爲めに、自由の歌をうたひ、力と汗との神聖を讃美しなければならない……」
「脫線々々。」
「勞働會議と間違へるな。」
誰が演說して、誰が彌次つてゐるのか、ただ喧しい事だつた。
「それが民衆詩人であらうが、それが高踏派であらうが、何れにしても詩人は尊い。小說萬能の

現在の迷を覺まさなくてはならないのであるのである……」
「馬鹿野郞。くやしけりやあ小說を書いて見ろ。」
「詩人々々と詩人がつてるが、貴樣なんか詩人ぢやないぞ。たかだか雜文書きだ。」
「なんだと。雜文かきたあ誰の事だ。」
「なぐつちまへ。」
「問責しろ。」
「謝罪させろ。」
「失言だ。」
座敷の一隅から十數人が一度に飛出して來て、拳骨をふり廻して威張り出した。
「何故雜文かきを輕蔑するのか。雜文も亦立派な藝術である。枕の草紙は何だ。方丈記は何だ。徒然草は何だ……」
「ありやあ隨筆だぞ。貴樣達の雜文とは違ふぞ。」
「然らば雨月物語は何であるか……」
「やかましいやい。寄席藝人。」

「雑文かきに退散を命じろ。」

「同席するのもけがらはしいぞ。」

「何がなんだと。」

忽ち滿場總立になつて修羅場を演じさうになつたので、こいつは側杖を喰つちやあ堪らないと思ひながら、自分は一層火鉢に噛り付いた。

「どいたどいた。野郎共靜かにせんかい。」

怖ろしく底力のある聲で呶鳴りつけながら、立騷ぐ詩人小說家を押分けて出て來た大男があつた。あまり強さうな男なので、流石に滿場しんとしてしまつた。

「お前は誰だ。」

「出羽の海谷右衛門。」

雜文かきらしい男の問に答へて、又大男の聲は人々を威壓した。

まぎれも無い先の常陸山だ。立派な男らしい顏が、貧弱な榮養不良の文士の面に比して著しく男ましかつた。

「常陸山ア。」

と頓狂な聲で叫んだ者さへあつた。
出羽の海は、床の間の柱によつかかつて、大胡座を組んだ。一緒に來たのか、先刻から居たのか、傍には太刀山と伊勢の濱がついてゐた。
「どうだね、此頃の小說は。」
出羽の海が云ふと、
「僕のを讀んで下さい。」
「僕は最近の短篇集を貴方に送ります。」
などと若い作家がその前に集つて頭を下げてゐた。
「君達の小說は詰らない。矢張り小說は戀愛物に限る。」
と伊勢の濱は云つた。太刀山はにやりにやりと、うす氣味の惡い笑顏を見せて沈默を續けてゐた。一座は暫時ひつそりと靜まりかへつた。
その時だ。
「ええ、どうぞ御贔負に。手前は浩二で御座います。」
「何分ともに宜しく。手前は喜代之介で御座います。」

と一々挨拶しながら、人々の前で平身低頭してゐる二人の若い男を見た。
「何です、彼の男は。」
「あれは當今賣出しの小說家が、批評家や雜誌記者に連中をたのみ込んでゐるんです。」
そんな會話がささやかれた。
「四郎は如何（どう）した。四郎は。」
新印の洋筆（ペン）の紋の一人が不平らしくつぶやいたが、誰も返事をしなかつた。
「馬鹿ッ。なんだその態（ざま）は。」
「愚劣なお話を書いてゐやがつて、藝術家の會に顏を出す資格があるか。」
「來月の月評で叩きつぶすぞ。」
「默殺しろ。默殺しろ。」
「どうぞ默殺だけはかんにんして下さい。」
「なぐられても殺されてもいいから、默殺だけは許して下さい。」
挨拶をして廻つた男が嘆願してるのかと思つたら、さうではなかつた。四方八方から、お念佛のやうに、

「默殺だけはかんにんして下さい。」

といふ泣聲が、濕地に水の湧くやうに、聞えて來るのだつた。今の今迄氣焔をあげてゐたのも、立上つて演說をしてゐたのも、他人の言論の邪魔をして居たのも、忽ち眞靑になつて念佛を唱へ始めたのだ。

「默殺しろ、默殺しろ。」

「默殺だけはかんにんして下さい。」

「默殺だ、默殺だ。」

「許して下さい、許して下さい。」

默殺だと呶鳴つてゐる奴が、直ぐに後から、許して下さいの側にまじつて哀願してゐる。かと思ふと、許して下さいと哀願してゐる奴が、忽ち默殺黨になつて威たけ高に呶鳴つてゐる。

どつちが強氣で、どつちが弱氣なのかちつともわからない。

「そろそろ逃出じませうか。」

一人言をいひながら立上つた人がある。怖ろしく脊が高い。天井に頭のつかへさうな後姿が立派だつた。

「誰だい、彼奴は。」

「荷風だ。畜生逃げやがつたな。」

稲の紋の連中が、下等な言葉で、忌々しさうにそのすらりとした後姿を見送つた。

「オヤ、白鳥もゐないぢやないか。」

「先刻はゐたやうだつたがな。」

「なあにゐやあしなかつたよ。」

「影がうすいからわかりやあしない。」

一寸の間そんな口小言めいたささやきが聞えたが、再び、

「默殺しろ、默殺しろ。」

「かんにんして下さい。許して下さい。」

のお念佛にかき消されてしまつた。

「お江戸日本橋七つだち、初上り、行列そろへてあれわいさのさ……」

とうたひながら、千鳥足で飛込んで來た人がある。

「鏡花だ、鏡花だ。」

「今頃やつて來るなんて、時代錯誤な奴だな。」

見るとその千鳥足の先生は先着の誰も彼もが――たつた一人の百姓は別として――紋付袴なのに、縞の着物縞の羽織の着流しで、なまめかしい長繻袢をちらちらさせながら、正體もなく醉つてゐて、あつちに行つてはぶつかり、こつちに行つてはぶつかつてゐたが、見る間に群集の渦巻の中に巻込まれて見えなくなつてしまつた。

「默殺だ、默殺だ。」

「かんにんして下さい、かにして下さい。」

前よりも一層聲は高く、念佛は沸騰するやうに座敷中に漲つた。

「默殺だ、默殺だ。」

「かんにんして下さい、かにして下さい。」

「默殺だ、默殺だ、默殺だ。」

もう、みんなの目は血走つて、今にもつかみあひがはじまりさうになつて來たので、自分も先刻かへつて行つた脊の高い人の智恵に倣つて、こつそり逃げ出さうとして立上つた。その時だ。

「撲殺か。がつてんだ。」

「撲殺だ、撲殺だ。」

「叩き殺せ、蚊とんぼめ等。」

素晴しい聲で呶鳴りながら、常陸山と太刀山と伊勢の濱が立上つた。立上つたと思ふと、裸體だつた。何時の間に用意をしたのか、締込を固く締めて、丸太棒を振りかざして、立騒ぐ人波の中に躍り込んだ。

「フレエ、フレエ、タツヤマ。」

瀧田樗蔭の聲援が聞えたが、旣にもう殘酷な虐殺は始まつてゐた。ぶうん、ぶうんと丸太棒のうなる音と共に、自然派も人道派も享樂派も民衆派も雜文かきも容赦なく叩きつぶされた。血だらけだ。目玉が飛出して天井にくつついたのもある。首ばかり生き殘つて目を開いてゐるのもある。手のない奴、足のもぎとられた奴、人形芝居の樂屋うらのやうに凄愴な景色になつた。

「撲殺だい、撲殺だい。」

相撲のかけ聲と共に、死骸は山になつた。その死骸を踏越えて逃げようとあせる奴等は、血にすべつたり、けつまづいたりして、相撲取に踏つぶされてしまつた。見る見るうちに生きてゐる人間の數は減つてしまつた。なまぐさい臭ひが座敷いつぱいになつた。血の臭ひだと思つたが、

どうも海鼠(なまこ)と海鼠腸(このわた)の臭ひらしくもあつた。

ぶうん、ぶうんと丸太棒の切る風の音を聞く度に、今度こそは自分の番だと思つて生きた空(そら)はなかつたが、とつさの間に思ひついて、いきなり死骸の山の中に潜り込んだ。かうしてゐれば死骸だと思つて、撲り殺しはしないだらうと考へたが、冷たくなつて死んでゐる奴等の臭ひには閉口した。だが命がけの仕事だ。息を殺して死んだ眞似をしてゐた。

ぶうん、ぶうんといふ音は暫時の間續いた。

「野郎共奴、もう一疋も殘つちやゐまいな。お國の爲めだ、荒療治もしかたがないわい。」

流石に息が切れるのであらう、相撲取の聲もかすれてゐた。

「生きてる時も薄汚ねえ野郎ばかりだつたが、かうしてくたばつたところは、尚更汚ねえや。ついでに死骸もかたづけてしまはうぢやねえか。」

「よからう。裏の池に叩き込んでしまへ。」

その聲が終るか終らないうちに、丸太棒の端と端を持つて常陸山と太刀山は、死骸の山を搖りあげて、縁側の方に押して行つた。あけ放した裏庭には、大きな池があつて、水は縁先迄あふれるばかり湛へてゐた。

「よいしよこら。」

「えんやらやい。」

どぶん、どぶんと死體はひとつづつ、池の中に落ちた。死んだ眞似をしてゐた自分も、外の死骸に抱きついたまゝ、池の中に落入つた。

どぶん、どぶん――續いて死骸はほふり込まれて來たが、不思議な事には水に落ちると、忽ちぐにやぐにやに融けて、自然派も人道派も享樂派も民衆派も雜文かきも、みんな海鼠になり、海鼠腸になつてしまつた。

「御苦勞々々。これで世の中が清潔になつた。」

「畜生骨を折らせやがつた。」

「さあ、奧で座敷をかへていつぱい飲まう。」

相撲取は氣持よささうに笑つた。

「おおい、誰か來んかい。」

と一人が呶鳴ると、

「へエイ。」

一齊に女の答へる聲がした。ははあ藝者が來てるなと思つて、池の中から窗かに見てゐると現れたのは綺麗な女ではなくて、ちつとも羨しくない面つきの女文士が十數人、赤前垂でお迎へに來たのだつた。それでも相撲取は恐悦顏で、そいつらを從へて奥に引込んで行つた。

「チエッ、女つて奴は何處迄とくをしやあがるんだらう。」

と命にさし障りの無い女文士をうらやみながら、自分はこつそり這上つた。濡鼠になつて、海鼠と海鼠腸の臭ひが沁みついてしまつた氣味惡さはあつたが、兎にも角にも無事だつたのを祝しながら、元の座敷に上つて行つた。爭鬪の痕跡も殘らず、血のあとも止めてなかつた。靑々とした疊は電燈のあかりに輝き、塵も埃も落ちてゐなかつた。勿論人の影も無い。

と思つた時、かすかな鼾が聞えて來た。ぎよつとしてあたりを見廻すと、驚いた。今の騷ぎも知らなかつたのか、あの丸太棒を喰はなかつたのか、床の間のちがひ棚の下に、まんまるくなつて寢込んでゐる人がある。大膽な奴だなと少々忌々しく思ひながら、立寄つて見ると、泉鏡花先生だつた。自然派も人道派も享樂派も民衆派も雜文かきも、海鼠になり、海鼠腸になつてしまつたのに、いい氣持さうに醉拂つて、ぐうぐう寢込んでゐるのだつた。

「畜生ッ」

口惜しくなつて舌うちした。その舌うちで目が覺めた。

一富士二鷹三茄子といふが、それにも増して珍しい初夢を見たものだ。自分は茫然として寢床の中で考へてゐた。朝の光は雨戸のすき間からもさし込んで、戸外は青空の天氣らしかつた。往來でつく羽子の音が、鮮かに聞えて來た。

しかしよくよく考へてみると、夢の中の景色には一々よりどころがあるやうである。平生噓ばかり書並べてゐる小說家の初夢なんか、例の出たらめだらうと思はれては殘念だから、一々說明を附ける事にする。くどいやうだが、今度ばかりは噓ではない。

前の晚は友達と飲んだ。常にも增して飲んだ。大井にいつぱいあつた海鼠をおかはりして喰つた。好物の海鼠腸の罎も空つぽにしてしまつた。正月早々荒つぽい酒宴だつた。

正月の事だから、友達も自分も紋付で、仙臺平の袴を穿いてゐた。誰の紋がいゝ、誰の紋はぶいきだと話合ひ、袴のしゆうしゆう鳴るのは穿いてる當人が氣がひける、などといふ話も出た。一人の友達は、自分の近作「友情」を、こつちが羞しくなる程ほめた。ほめたあげくに、

「しかし僕も古いんだね。水上瀧太郎の小說なんかに感心するやうでは。」

と云つて笑つた。それに關聯して「三田文學」の話が出、つづいて世間所謂新三田派なるものの

月旦に及んだ。正直のところ、自分も一緒になつて罵倒した。此の頃評判がいゝとか聞くはんちくな六號廢止論なども出した。誰一人眞面目に書かないのに、雜誌をつづけて行くのは馬鹿々々しいと迄云つた。そんな事も夢に現れて來たらしい。夢といふものは怖ろしいもので、夢ではかへつて噓はつけない。ついでに洗つてしまへば、井汲清治氏の時事新報に書いた小說月評を拜見して、何時もながらの無邪氣な見當違ひに驚いた事があつたが、それがアナトオル・フランスと芥川龍之介氏になつて夢に出たのだ。素人と玄人といふ區別が、井汲氏らしい大ざつぱで、出來上つてゐるのが、一時吾々舊印並びにその友達間の笑の種だつたのだ。但し自分は芥川氏を素人だとは思つてゐない。

一群の連中を見て、獸が來たと叫ぶ處から以下數行は、元日の朝讀んだ「人間」の六號の影響である。「默れ三百代言」は、どう考へても菊池寬氏の事に違ひ無い。曾て或人が同氏を評して、三百代言だといつたのを聞いた時、自分は一代の名評だと思つて感服した事があつた。自分は井汲氏其他所謂新三田派の人々と意見を異にして、菊池氏は水上瀧太郎などと共に、素人派に屬すべき作家だと考へてゐる。うまいには違ひ無いが、その作風は素人である。かのくどくどしい論理的說明を、三百代言と評したのは、評しつくしたものと云つてもいい。こいつが夢になつたのだ。

但し茲に素人玄人、又は三百代言などといふのは、作品の價値に關する問題ではなくて、その作風の特徴を簡單に述べたものと見て貰ひ度い。

雜文かきの一節は、此の頃その連中が一堂に會して、氣焔をあげた時の寫眞を或新聞で見たための夢であらう。久保田氏や里見氏の名前の出たのは、平生ちかしくおつきあひしてゐる爲めで、まことにお氣の毒である。

常陸山太刀山伊勢の濱と、三人とも既に隱退してしまつた力士ばかり現れたのは、流石に舊印だと殘念ながら思ふのであるが、しかしこれとても因緣はある。昨年十二月十六日に、紅葉館で故尾崎紅葉先生のお祭があつた。その時出羽の海が出てゐたが、幹事の人に名を聞かれて、名告つた時の聲が耳に殘つてゐたのだ。太刀山の話は前の晩に友達とした。自分の大嫌ひな力士なのである。伊勢の濱は小說好きで、閑さへあれば小說を讀み、彼自身も時に筆をとり、曾て相撲雜誌に揭載した彼の作品は、自分も讀んだ事があるので、文士の集りに顏を出す事になつたのだ。

常陸山の出現から推測してみると、夢の舞臺の大廣間も紅葉館らしく思はれる。殊に見た事もない浩二喜代之介二氏が出て來るのは、同じ紅葉祭の日に、餘興に出る小僧子（こぞうつこ）の役者が、近く昔の名人の名跡（みやうせき）をつぐといふので、兄弟で頭を下げて廻つてゐた景色と、最近の「三田文學」の六號

に「最近宇野を以て姓とする文學者三人を得たり」云々とあつたのと結び付いたものに違ひ無い。役者の兄弟は首の太い、でくでく肥つた油切つた若衆だつたが、夢に出る二人は痩細つた、蓬頭の詩人だつた。「正義派と大野」といふいい處女作を書いた、三人の中で一番偉いらしい四郎氏は遂々夢の中に御出席にならなかつた。噂だけだつた。

もう一つ浩二喜代之介二氏について云つて置き度いのは、浩二氏の「戀愛合戰」と、喜代之介氏の「開運二十三夜尊」といふ物を讀まうと志した人で、讀終らないで投げたのが澤山ゐて、あれを――殊に二十三夜尊の方――すつかり讀み終る人は、餘程の辛棒人だと云つたので、是非とも讀んで辛棒人の名をほしいままにしようと思ひつめてゐたのが、夢にも見る事になつたのらしい。但しその後も努力したが、遂々自分も辛棒人にはなり切れなかつた事を白狀する。

お江戶日本橋が二度迄出て來たのは、近頃友達の一人が、あのうたを全部書いてくれたので、珍しがつてゐた爲めである。

まだまだ考證すべき點は澤山あるが、三百代言になりさうだから止めて置かう。終に臨んで此の珍しい初夢が、大正九年の文壇をまざまざと見せつけた正夢でない事を祈りつつ、海鼠になり、海鼠腸になつた諸先生の健在を祝して筆をおく。(大正九年一月二十日)

――「三田文學」大正九年二月號

此頃の事

つい此頃の事である。銀行へお使にやられた。恰も改正所得税法に促進されて、あつちでもこつちでも、増資が流行して、諸會社銀行の株金拂込が、いくつもかち合つた日であつた。拂込む人と、既に拂込んでしまつて、拂込受取證を受取らうとする人とが、眞黑になつて群つてゐた。そんな事には關係無く、僅か五分か十分で用事の濟む筈だつた自分も、その渦巻にまき込まれてまごまごして居た。

暴力を振つても、先を爭ふ事を平氣でやる人間は、後から來ても、さつさと濟まして歸つて行つたが、行儀のいい人や力の弱い人は、何時迄たつても、窓口にさへ近寄る事が出來なかつた。別段急ぐ用事でも無かつたから、自分は又明日來る事にしようと思つて、引返へさうとした時だ。その銀行の雇人であらう、行名を染めぬいた法被(はつぴ)を着たのが、混亂を見るに見兼たと見えて、人

人に列をつくらせようとした。
「皆さん、どうぞ二列にお並び下さい。その方がかへつて早く濟みますから。」
さう云ひながら、彼は窓口の人々の間に割つて入つて列をつくる事を說いたのであつた。警戒の爲めに來てゐた巡査も、この仕事を手傳ふつもりでやつて來た。
「さう押しちやあいかん。列をつくつて。」
年とつた巡査は、髯にかくれた口を大きく開いて叫んだ。
「冗談ぢやないぜ、金を拂ひに來てるんだ。デモクラシイでやつてくれ。」
群つてゐる人の後から呶鳴つた奴がある。屈強な若い者で、力づくで人々を押分けて進まうとしてゐたのだ。
「ほんとにさ、何も金を貰ひに來てるんぢやあるまいし、拂ひに來てるんだぜ。」
直に應じて贊成したのがあつた。誰の顏にも――極めて少數の女と年寄の外は――この巡査や法被の男のする事は、餘計なおせつかいだといふ色が見え、寧ろ腕づくで先を爭ふ事が、彼等の欲する自由だと考へて居る樣子だつた。それにしても、變なところでデモクラシイといふ言葉を使ふものだと自分は思つたのである。その場の光景から見ると、デモクラシイとは、暴行と混亂

を意味する事としか考へられなかつた。

それから數日後の事である。或晩會社の歸りに、京橋の或る居酒屋に寄つた事があつた。その家は、狹い店に、ちひさい卓子を置いてそれを圍んで飮む式になつて居る。自分は空席に腰掛けて盃を取つた。その場にゐた人々は、別段以前からの知合ひとも見えなかつたが、少しばかりの酒の醉にへだてが無くなつて、お互に何かしら氣焔をあげたり、笑ひ合つたりして居た。

誰かが方々の遊廓の話をして、その比較論に及んでゐた時だ。恰も自分の前に坐つて居た人がふいと自分の方を向いて、

「お恥づかしい話ですが、實は私はまだ吉原つてとこに行つた事がないんです。」

と、ほんとに恥づかしさうに云つた。

「私も知りません。」

自分はかう答へた。

「何つ、吉原を知らないつて。ヘツ、こんなところでブルヂョアの氣分を漂はされちや堪らない。」

突然一隅から、さも腹立たしさうな聲が聞えた。今迄何も云はないで、手酌で飮んで居た洋服

の人だつた。

「いいえ、さう云ふわけぢやあないんです。ただほんとに、私はまだ吉原に行つた事がないものですから。」

自分の目の前の人は、眞面目になつて辯解してゐたが、自分は不愉快になつて席を立つた。些か腹も立つたけれど、ブルヂョアといふ流行の言葉が、途方もないところで使はれるものだと思ふと、吹出し度いやうな愉快な心持もまじつてゐた。

ところが最近、又してもこれと同じ心持を經驗させられた。ほかでも無い、雜誌「新潮」三月號に出た菊池寛氏の、水上瀧太郎を誹謗する一文を讀んだ時の事である。

菊池寛氏は、過去に於て、水上瀧太郎を尊敬し、その作品を愛讀したさうだが、今にして思へば、それは迷妄だつたと云つてゐる。「社會的にも文壇的にもお坊ちやん」だと氏の罵る自分の作品などを、いかに迷妄だからといつて、尊敬愛讀したとは驚き入る。矢張り此人も、自分では苦勞人がつてゐるけれど、「社會的にも文壇的にも書生さん」なのではないだらうか。文字の上で覺え込み、小説を書く時の資料として便利な博き愛を隨處にほのめかしながら、しかも持つて生れた僻み根性から誤解ばかりして、比良目の目付をしてゐるのが即ちお坊ちやんであり、書生さん

である所以なのだ。

菊池氏の激怒と侮蔑を購ひ、且つ今日迄尊敬愛讀されたのが、忽ち嫌忌の的になつてしまつた原因をなす「初夢」は、くどいやうだが、ほんとに見た初夢である。「夜寝て夢にまで、文壇に對する反感や不平で、イライラしてゐるかと思ふと水上氏が少し氣の毒だ。」と云はれてもしかたがない。自分の作品をほめない者に對して、「恨骨髓に徹す」と稱する菊池氏の如く、年が年中いきり立つた創作家こそ、夢にも文壇的復讐を忘れさうもなく思はれるが、此の場合氏は、夢を見た者を氣の毒がる餘裕を持つて居てくれた。兎に角夢は面白かつた。自分はその翌日逢つた友達に話をし、且つ筆を取つて書留めた。それ程面白く思つたのだから、その夢に含まれて居る文壇に對する侮蔑や反感を、肯定してゐる事は勿論である。

乍併、文壇を侮蔑するといふ事を、自分は決して思ひ上つた得意な藝當だとは考へてゐない。然るに菊池氏は、文壇を白眼視し、輕蔑侮辱する事を、偉い事だと思つてゐるらしい。「生活の不安などは、夢にも見ないやうな身分だつたら、高踏的に出て、文壇を白眼視する事位は朝飯前の事だ。」と云ひ、「金さへあれば誰にだつて出來るのだ。偉くも何ともない。」と云つてゐるのが自ら本心を披瀝してゐるものなのだ。さうして此の夢に迄反感や不平で苛々してゐる氣の毒な水上

がその侮蔑の藝當をやつてゐるのは、金があるからだと決めて、あらゆる事を其處に結び付け、結局は此の頃流行の資本家横暴論に持つて行つた。さうして縁も由縁(ゆかり)もない論調で、故齋藤緑雨氏や小川未明氏をお引合に出して、前者が「喰ふや喰はずで居ながら、文壇を罵倒したり」後者が「文壇の塵にまみれながら、清節を持してゐる」のが本當に偉いのだと云つてゐる。卽ち、金があつて文壇を罵倒してはいけない、喰ふや喰はずで罵倒するのは偉いといふのだ。

更に同一論調で、「少し卑しくとも、汚くとも、親譲りの境遇や財産なんか當にしないで、自分の下らない創作によつてでも、妻子を養ひ、親兄弟の助にもなつて居る人間を、本質的に卑しいとは思はない。」と脱線した。いくら僻が強くても、餘りに人を誣(し)ふるものである。自分は、さういふ人を卑しいなどと云つた覺えは無い。そんな事をいふ本人の方が、内々卑しんでゐるのではないのか。「下らない創作」なんかする者は、その生活の貧富にかゝはらず、創作家としては偉くはないのだ。「作品は創作家に取つては、第一義的のものだ、根本的のものだ。」と說く菊池氏が、いかなれば作家批評家の價値を、金銭によつて計量するのか。現在の社會制度が惡いといふ問題を論じて居るのならそれでもいい。作品の價値の一切を金に結び付けかねない意氣込みには、閉口する外はない。此の論理の滅茶々々も僻根性(ひがみこんじやう)も、すべてが金の問題だと肯定し、或は又、この

僻根性の中にも「人間的な必然さや、弱さや、善良さ」を認めるといふのか。菊池氏からはいゝ收入でもあるらしく僻まれながら、實は安い月給と乏しい原稿料で暮してゐる自分の如きは、多大の原稿料で「妻子を育ててゐる」菊池氏の如き作家に對して、何と返事をしていいか迷はざるを得ない。しかし、今の世の中の制度に不備は認めながら、金持にも、親讓りの財産家にも、「人間的な必然さや、善良さ」を認める自分は、菊池氏の持ってゐるやうな僻根性を肯定する前に、一度は、それを憎み度い。

TOMODACHI　といふ雜誌に出て居る三島章道氏の「日記より」といふ文章の中に、友達會の人達が芝居をしようとすると、貴族の出だといふ丈で、ひどく誤解され、脅迫された事實が書いてある。その脅迫狀の多くは「勞働者」といふ名のもとに書かれたものださうだ。「デモクラシイの盛んな今日、貴族が白粉を塗り狂言沙汰をするのは言語道斷だ。」と書いた新聞もあつたさうだ。かれこれ思ひ合せると、菊池氏の論調の如きも、今日の流行として通用するものかもしれない。「デモクラシイでやつてくれ。」と叫んだ銀行の窓口の客も、「ブルヂョア氣分を漂はされては堪らない」と怒つた居酒屋の客も、菊池氏の如く、「誤つて文藝に志し」たら、同じやうな議論をする人になつたのであらう。多數者の力といふものを、暴論の裏に感じる時、自分の如き海鼠(なまこ)は、「默殺

して下さい。」と歎願する外はない。
乍末斷つて置くが、菊池氏は「初夢」の末節で、自分の親友の二三は「撲殺の厄を免かれる事になつてゐる。」と書いて、××××××氏に對し八つ當をしてゐるが、それは同氏特有の僻目で、夢の中では自分の親友も、乍遺憾撲殺されたのである。「初夢」を讀んだ多くの人は、先刻御承知の事と思ふけれど、誤讀を宣傳されては堪らないから、爲念に斷つて置く。
「まだまだ云ひ度い事は澤山あるが、三百代言になりさうだから、止めて置かう。」（大正九年三月二十九日）

――「三田文學」大正九年四月號

妾の子

毎朝學校へ通ふ時と、おひるから家(うち)へ歸る時と、町角の建具屋の店頭(みせさき)に立止つて、鉋の音を聽くのが好きだつた。すうすう――上から下に、向ふから手前に、柔かに撫でると、刄の間から薄い木の皮の波打つて湧いて來るのが堪らなく面白かつた。

「大人になつたら建具屋にならう。」

尋常科の生徒だつた自分は密かにさう考へて、自由自在に鉋を使ひながら、小僧を叱りつけてゐる親方の身の上を羨んだ。

建具屋の隣は石屋で、この家は四十七士の一人堀部安兵衞の末孫だといふ事だつたが、暗い濕つぽい土間で、曲(きよく)も無く金鎚で石を削つてゐるのが――今になつて考へて見ると、藝術的でなかつたのだらう。子供の心をよろこばせなかつた。

日あたりのいゝ店頭に、いつぱいたまつた鉋屑の中に埋まつて、鉋を使ふ職人は、極めて樂しさうに見えた。額の汗を拭きながら、粉になつて飛ぶ石のかけらの埃を浴びてゐるのよりも遙に明るい景色だつた。しかもその苦も無ささうに動く鉋の間から、めらめらと延びて、延びたと思ふと、くるくる卷いてしまふ鉋屑は、生きたもののやうに目についた。

日淸戰爭の後だつたから、勿論軍人にもなり度かつた。軍艦の寫眞を澤山蓄めて、松島艦の艦長になる日の事も胸に描いた。福島中佐にもなり度かつた。郡司大尉にもなり度かつた。白神源次郎になつて、彈丸に胸を貫かれながら、尙且喇叭を吹きながら死んでも見たかつた。さうかと思ふと月岡芳年にもなり度かつた。買集めた繪艸紙を部屋中に並べて、やがては自分も「三十六怪選」を描かうと思つた。小波山人にもなり度かつた。「少年世界」で覺えた「貧乏ゑびすのへなちよこ野郎」などといふ言葉に節をつけてうたつた。けれども、けれども、自分は矢張り、建具屋の親方に一番なり度かつた。

「坊ちやん、何が面白いんだい。毎日々々見てるぢやないか。」

建具屋の若衆も顏馴染になつてしまつた。

「これやさしいの。」

やさしければ自分もやつて見度いと思つたのだ。
「こいつかい。やさしいとも。いいかい。かうやつてすうすうと引けばわけなしだ。」
氣の輕い男で、延ばした手を眞直に引いて見せてくれたが、長々とうねつた木の皮は、香をたてて湧いて來た。
「うまいなあ。」
自分は連の友達をかへりみて同意を求めた。
毎日々々、いくら見てゐてもあきなかつた。一番おしやべりで、自分達にからかつたり鼻うたをうたつたりしてゐるのが金ちやんで、顔半分に燒どのひつつりのあるむつつりしたのが粂さんで、鼻垂しの小僧が芳公だといふ事も覺えてしまつた。

芳ちやん夜中に嫁とつて………

などゝ一緒に學校へ通ふ町ッ子ははやした。
或日も學校の歸途（かへりみち）に、五六人づれでその店頭に立止つて見てゐた。
「坊ちやん。坊ちやんとこはあすこの水上さんですか。」
金ちやんがきいたけれど、何時も戲談ばかり云ふ奴だから、何かしらからかはれるやうな氣が

して默つてゐた。
「さうでせう。さうに違ひないや。」
「さうだよ。」
餘計な事を、連の乾物屋の子が受けて返事をした。
「それにしちやあ兄さんにちつとも似てないぢやないか。」
むつつりの粂公迄飽の手を止めて、凄い顏を此方に向けた。
「そりやあお前、お妾の方のだからよ。」
仕事を休んで煙草をのんでゐた親方が、突然橫からさばいてしまつた。自分は眞赤になつて目をそらした。胸が壓されるやうないやな氣持になつた。
「へええ、お妾があるかねえ。」
「なくつてよ。あれだけの屋敷だあな。」
誰が何を云つてるのだかわからなかつた。友達に顏を見られながら、淚の出て來るのを一生懸命堪へて、悄然として家に歸つた。
「自分はお妾の子なのかしら。」

俄に悲しい疑が悩ましく念頭に絡みついた。けれども、何處にもお妾らしいものはゐなかつた。うちには、父母の外に、お祖母さんが二人ゐた。父方のと、母方のとだ。兄がゐた。姉がゐた。妹がゐた。弟がゐた。親類の婆さんで、おちぶれて寄食人になつてゐるのもゐた。用人がゐた。車夫がゐた。女中が多勢ゐた。しかしお妾はゐなかつた。

「嘘だ、嘘だ。お妾の子ぢやあない。」

と打消したが、打消し切れなかつた。いつもお祖母さん達が、兄と自分を比較していふ言葉迄、今更悪い意味に聞えて來た。

「兄さんとは違つて、此の子はまるで熊見たやうだ。」

さうだ、矢張り自分は兄とは似てゐない筈なのだ。みんなでかくして居たつて知つてるぞ。だから自分ばかり叱るんだ、と思つた。一番いたづらで亂暴だつたから叱られたのだけれど、その時はさうは思へなかつた。父の顔も、母の顔も、就中兄の存在が忌々しかつた。

夕方一人で窓に倚つて、星の輝く空を見ながら、いつ迄も、いつ迄も涙ぐんで居た。

それつきり、建具屋の仕事場には興味がなくなつて、建具屋の親方になる位なら、足利尊氏の方がましだと思つた。

當分の間、自分は妾腹の子なのかしらと疑ふ心持は、折に觸れて出て來た。若しさうとすれば、お妾は死んでしまつたのかもしれないと思つた。しかし何時迄たつても、お妾の居た形跡もないので、長い間には自然と忘れてしまつた。

やがて數年後の事である。忘れもしない暑中休暇になつて、明日から鎌倉へ行かうといふ日の事たつた。床屋に行つて、頭の上に鳴る鋏の音を聞いてゐる耳元に臭い息を吹きかけながら、

「鎌倉の別莊には、ふだんお妾がゐるんですか。」

と若い者がひそめいて訊いた。自分は吃驚して立上らうとした程だつた。

「ううん。番人がゐる丈だよ。」

それつきり不機嫌に口をつぐんでしまつたが、腹が立つよりもなさけない氣持になつた。矢張り何處かにお妾はかくしてあるのかしらと疑ひ出した。恰もその頃は、中學で落第ばかりして居たので、叱られる事が多く、うちにもゐたたまれなくなりかけて居た心持が、一層邪推を深くしたが、結局之も疑に過ぎなかつた。

「馬鹿な心配をしたものだなあ。」

後々思ひ出してをかしくなる事だつた。

父は身を守る事の極めて謹嚴な人だつた。政治家も、實業家も、軍人も成金も、いづれも妾を蓄へ、機會さへあればあらゆる階級の女性――素人でも、玄人でも――を犯さうとする物騒な世の中には、堅苦しがられる程だつた。或時、恐喝專門の雜誌が、父に惡癖があつて、家に雇ふ女に對して面白くない事があると書立てた時、果してそれがほんとだつたら數萬金を出さうと云ふ物好きさへ現れたが、誰一人此の賭の相手方に廻る者がなかつた。自分はその時、曾て妾の子ではないかと疑つた自分の邪推深い心を恥ぢた。

更に又幾年か後の事である。或酒席で、座にゐた藝者が、人々が呼ぶ自分の名前をきいて、しきりにじろじろ顏を見てゐたが、

「失禮ですが貴方は水上さんの弟さんでいらつしやるんですか。」

と訊いた。話をしてみると、兄の顏馴染だつた。

「ちよいとふうちやん、こちらね、あちらの弟さんでいらつしやるんだとさ。」

その藝者は、少し離れて坐つてゐる朋輩を呼びかけて面白さうに云つた。

「へえゝ、こちらが。」

呼びかけられた頓狂な顏付のは、お銚子を手に持つたまゝ立上つて、裾を引擦つてやつて來た。

「どうしたつてんでせう。お兄さんはあんなにおきれいなのに、貴方はこんなにお汚ない……」
少し酔拂つたのは、つくづく見入つて嘆息するやうにつぶやいた。
「そりやあ似てない筈さ。僕は妾の子なんだもの。」
自分は事もなく受けて一緒になつて笑つた。（大正九年四月二十四日）

――「三田文學」大正九年五月號

札の辻——櫻田門

三田の學生が、虎の門の生徒を、電車の乗換場所で待受けて、ねめてゐるとか、話をしかけるとか、或は雙方ともいい氣になつて、公園でいちやつくとかいふ噂が、此の頃の新聞に出て居た。ほんとか嘘か知らないが、女學館の方では、生徒に紫の着物を禁じたといふ說もある。紫は初夏の日光をうけて愈々輝き、不良少年の目につき易いから、保護色を逆に行つて、禁斷色としたのだといふ說と、エールの淺黄、ハアヴァアドの海老茶の如く、紫は三田の旗の色だからいけないのだといふ說と二つある。何れが正しいか今之を審かにしないが、掃溜の雜草よりも勢よく妙な氣になる男の生徒、女の生徒をあづかる——或はあづかつたつもりで居る先生達は、吾々が考へると馬鹿々々しいと思ふ心配もしなければならないのであらう。殊に女の方は後々の面倒が多いから、元來無神經を通則とする先生も、神經質とならざるを得ないであらう。何の商賣にしても、

女のお客を相手にするのは、氣骨ばかり折れて儲らないものである。

毎日自分の乘る電車は、札の辻から飯倉の坂を越え、虎の門を通つて櫻田門へ行く、市内で一番舊式の、殆ど解體してしまひさうに不安心な車の走る一線である。

或日、その動搖のはげしい電車の中で、自分の向側に五人の生徒が乘つて居た。藩閥だとか、學閥だとか、閨閥だとかいふ言葉を聞くと、只管之を憎むのが此の頃の常識になり切つてしまつたが、一面から考へると、近しいもの同志が寄合つて閥をつくるのも、當りまへのやうな氣もする。曾てその學校で、いたづらつ子の怠惰者だつた自分は、學校の存在を呪ひ、世の中に學校といふものがなかつたら、どんなに若者の心は樂しいだらうと考へた。殊に自分が籍を置いて居る學校は、自分を苦しめる爲めに頑張つて居るのだとしか考へられなかつた。お前はとても見込みが無いから、學校なんか止めた方がいいと、先生も云ひ、父や兄も云ふのを幸に、亞米利加にでも高飛して、百姓になつてしまはうかと思つた事もあつた。どれ程學校がいやだつたのか、乍殘念未だに時々試驗の夢を見る。出來た試驗よりも出來なかつた試驗の方が度數が多いのだから、勿論試驗場で、意地の惡い教師を憎みながら、苦しんで居る夢なのだ。カンニングをして目付かつて、しまつたと思つて目が覺めると、冷汗をかいて、胸がどきんどきん波を打つてゐる事もあ

る。卒業して十年になり、あたりまへなら學校に通ふ子供があつてもをかしくない年配になり乍ら、夢には違ひ無いが、尙且試驗に苦しむとは、甚だお恥かしい話である。そんな風で、學校の追憶は極めて苦しいが、しかも今日になつて見ると、三田の學校は、學校の中では一番いい學校だつた――學校であると現在で云ふ可きところだが、主として、自分の居た時代に重きを置いて過去にした――やうな氣がして來た。少くとも、他の學校に比べると、人間がのんびり育つ氣がする。今の世智辛い世に處するには損なのかもしれないが、損でもいい。曲りくねつた根性で、口先ばかり正義ぶつたり、人道ぶつたり、役人ぶつたり、民衆ぶつたり、豪傑ぶつたり、藝術家ぶつたりする程度の低い丈でも、いい校風だとほめて差支へ無い。一言にしていへば、獨立自尊などといふこけ脅の表看板よりも、ぶらないといふ一點がいいのである。さう考へると、自然と母校がなつかしくなつて來る。往來でゆきあふ書生の中でも、年寄が見ると剛健活潑に見えるさうだが、わざわざ瘦つぽちの肩肱を張つて、破帽弊衣を賣物にして居る全身これ色氣と芝居氣といふやうなのよりも、人前に出ても失禮でない服裝をして、不自然に威張つて步かない學生の方が、餘程上出來の人間に思はれる。卽ち電車の中で向ひ合せになつた生徒に對しても同窓の親しさを感じて見守つた。

學生達は一様に中學部の夏の制服を着て居た。しかし、果して中學部の生徒か、大學部豫科の生徒かはわからない。新米の豫科生だつたかもしれない。どれもこれも、きびきびした、血色のいい健康さうな、今やめきめきと手足の延びて行く年配だつた。運動部の選手らしい、殊に野球をやる連中らしく、しきりに最近の對抗競技の話をして居た。「頑猛」だとか、「とても」だとか、「まるで」だとか、「もろに行つた」とかいつたやうな言葉を連發して話してゐるのが、羨しい程面白さうだつた。此の頃屢々感じるやうに、自分は自分の年とつた事、非道く元氣のなくなつた事、世の中に面白い事の減つてしまつた事などを、此の學生達の爲めに又しても感じてゐた。どうかしてもう一度、こんな馬鹿々々しい事にも笑つて居られる時代に生れかへつて、新規蒔直しに世の中へ踏出し度いと思つた。恐くその學生達の身の上が羨しいと同時に、その學生達に好感を持つて居たのである。

何時の間にか、電車は坂を上つて、下りて、なほうねうねと走つて居たが、突然目の前の學生の中でも、一番よく喋り、一番よく笑つてゐたのが、俄に手を合せて何か拜み始めた。殆んど同時に、他の學生も一齊に手を合せて拜み始めた。怖しく生眞面目な顏をして伏拜んで居る。自分はおもはずしらず手の平で顏を撫でた。墨でもついて居るのぢやあないかと思つて不安心だつた

のだ。

「畜生、よせやい。」

一人の學生は、合掌した手を解くと、をかしくて堪らないらしく吹出しながら、一番先に拜み始めたのの背中をどやしつけた。學生はみんな笑ひ出した。その視線の方向がそれたので、ああ自分ではなかつたと思ふ安心は、直ちに好奇心に變つた。ふり向いて見ると、あけ放した後の窓の外の、眞青に晴れた初夏の空を壓して、古ぼけた東京女學館の煉瓦造が、無表情にがつしりとお尻を据ゑてゐたのである。ハハアあの眞四角な校堂を拜んで居たのかと氣が付いた時、どうしたものか、自分の方が赤面した。

學生は又しても拜んだが、あとは一層賑やかに笑つたり、ぶつたり、こづきあつたりしながら、銀座の方に乘つて行つた。

さて日比谷で降りた自分は非道くそはそはしてしまつた。如何(どう)して赤面したのかわからなかつたが、暫時(しばらく)たつて自ら合點した。學生達の他人を憚らないやり口が、自分の如き若年寄を、甚しく驚かし、當の學生よりも、此方(こつち)が他の乘合の見る目を怖れたのに違ひなかつた。おまけに、餘り他人事とは思へない愛校心も多少まじつてゐたであらう。

自分は此の話を方々持つて廻つた。ほんとの年寄は眉をひそめて慨嘆し、娘を持つ親は心配し、無責任な若者は手を打つて悦んだ。ところが更に驚いたのは、一族の中の、つい先頃嫁に行つて、手取早く母性の愛になつた眞新しい丸髷が、亭主を持つと俄に面の皮の厚くなる女の例に漏れず、些かも赤面する事なく、此の話を聽取つて、さて一層面の皮を厚くして、薄唇をひるがへした。

「一時間でも二時間でも、自分の好きな人の出て來るのを待つてゐて、同じ電車に乘るんですつて。△さんがさう云つてましたよ。瀧さんなんかにはあの面白みがわからないんだから氣の毒だつて。」

自分は言句も出ずに、又しても赤面した。あんまりもつともな批評に、冷汗をさへ覺えたのだ。△さんも亦我が一族の近頃學校を出た青年紳士であつた。

成程、自分にはどうも其の面白みが充分にわからないらしい。第一痛切に悲觀するのは、海老茶の袴を穿いて學校へ通ふ年配の娘を見ても、それが女だと思へなくなつて來た。子供の目には、十七八の男や女は、立派な大人に見え、四十位の男や女は、おぢいさんおばあさんに見えたが、此の頃はその逆様で、十七八の女なんかは、子供にしか見えなくなつた。あれが一人前の女だと

考へるのは、餘りに無理な事に思はれて來た。學校にゐた時分は、往來であふ海老茶の目ぼしいの位はふりかへつて見た經驗もあるのだが、今では横目を使ふ心持さへひき起されない。「叔父樣々々々」と、右左から首玉にぶらさがつて來る、兄や姉や妹の子供と同じ程度の生物としか考へられない。世の中の樂しみが減つたわけである。なさけない事だと思ふと、新しい丸髷の嘲笑に反抗する意氣地も無く、頭をかいて苦笑した。

或日、勤務先の歸りに、お馴染の居酒屋で一杯飮んで、いい氣持で夜の銀座を歩いて居ると、後の方から時ならぬ多人數の聲が聞えて來た。兵隊のかたまりが馳足で追つかけて來たやうでもあり、普通選擧の運動者が巡査に追つかけられて逃げて來たやうでもあつた。何れにしても、澤山の人間が、濁浪のやうに、柳の緑の長く垂れた美しい町に、殺氣立つた氣勢を以て押寄せて來たのだ。

「なんだ。」

「なんだ。」

口々にいぶかりながら足を止めると、店の中から馳出して來る番頭や、小僧や、看板娘もあるのであつた。

「慶應だ、慶應だ。」

さういふ聲が口から口に傳はり始めた時は、もう一團の學生は往來の人々を脅し、電車の運轉手を苛々させながら殺倒して來た。市俄古大學との野球試合に勝つたので彌次馬が狂喜し、且如何に自分達は熱誠なる彌次馬であるかを、往來の人々に印象する爲めに、はるばる牛込の奥の方からお神輿をかつぐ町内の若衆の如く、歡喜と色氣にみちみちて、聲をからして萬歳を叫んで來たのであつた。

自分も大變嬉しかつた。一緒に萬歳を叫んでも見度かつた。自分も此の彌次馬どもの同窓の先輩なんだぞといふやうな得意な氣持が、一杯きげんと手を取りあつて浮々して來た。

乍併元氣のいい彌次馬は、元氣の無い勤人なんぞは行進の邪魔に違ひなかつた。

「どいた、どいた。」

「わつしよい、わつしよい。」

容赦もなく押しのけて、塵埃を捲起しながらぐんぐん馳出して行つた。

もつとも、場所が場所なので、恰も最初からその計畫らしく見える程極めて自然に、角のカフエの中に落伍してしまふのも大分出て來た。――出て來たと思つた時は、もう既にそのカフエの

中は、熱狂した學生でいつぱいになつてしまつた。

甚だよくない癖だが、日本酒を飲んだ後の乾いた咽喉を濡らす爲めに、麥酒の飲み度くなる自分は、飲場所を占領されてしまつたので、爲方なく立去らうとした。その時、

「チヱッ、とても騷いでやがるぞ。」

と直ぐ側で云ふ聲がした。五六人の若い學生が、カフヱのおもての硝子に顏を押しつけて、内側に垂れて居る白い布と布との隙間から見える光景を、羨しさうに覗いて居るのだつた。此の間電車の中で、女學館を伏拜んで居た顏が二つ三つまじつて居た。

ほんとに羨しさうだつた。しかし到底も中には入れない程、その時は初心に見えた。女學館を拜んで居た時のやうに、背景とぴつたりはまらなかつた。カフヱの内部に對する好奇心が浮動して居た。

中學生――女學校

大學生――カフヱ

といふ進化論の材料が、生物學の圖解のやうに、明瞭に目の前に展開された。自分は胸を打つて喜んだ。學校の教師なんかは、未だにかういふ生きた學説を發見する事は出來ないだらうと思

ふと、その昔いぢめられた教師の顔を一つ一つ想ひ起しながら、ざまあみやがれと思つたのである。

その翌日、半日の勤務をしまつて、日比谷から電車に揺られて歸る途中だつた。虎の門の乗換でお客の出替があつた時、三人の海老茶袴の女生徒が乗つて來て、極めて敏捷に空席に割込んだ。今朝うちを出る時は、もう少し綺麗だつたらうと思はれる、油の浮いた顔に生焼のビイフステエキの切口のやうな血の色の滲んで居る活々したのを眞中に、どれもこれもまんまるく肥つたお嬢さんだつた。白狀すると、上述の如く、十七八の娘を見ても女だとは思へなくなつてしまつた位だから、そのお嬢さんの如きも、實は立派な女なのだらうが、自分には女とは見えなかつた。單にいたづらさうな茶目だなと思つたに過ぎなかつた。

三人は面白さうにささやきあつては笑つてゐた。笑ふ時には、お腹の中に埋めてしまふやうに顔を伏せた。懐中で笑つてゐるやうなものである。三人が三人とも同じ笑ひ方だから、或は近頃流行の笑ひ方かもしれない。さういへば昔のやうに、袂で口をかくしたり、手で口をかくしたりする笑ひ方は、久しく見た事が無い様だ。扨てこの三人は、一齊に懐の中で聲を出さずに笑つて、又一齊に元の位置迄顔をあげる時、吃度斜に右の前方に、ちらと視線を投げるのである。何がを

かしいのか、幾度も懷の中に顏を突込んで笑ふのだが、その度に六つの横目が同じ方角に向くのである。何かしら其の邊に笑の對象があるのかと思つて見廻しても、別段をかしい物もなかつたが、但し二人の三田の生徒が、とりすまして乘つてゐた。

しかし別段特別に、兩者の間に意味がある樣子ではなかつた。些か小說家の無責任な想像をたくましくすれば、たとへ懷中に顏をかくして笑つても、笑ふといふ事は人目をひく事だから、笑つた事が車內の人々に與へる印象を憚る爲めの氣兼――又は廣告の横目らしかつた。但し半分は無意識であらうが、その氣兼も廣告も、自ら若い男の學生の方に方向が定まつてしまつて、自分の如き、或はそれ以上にぢぢむさい連中は、殆ど存在の理由がなかつた程影が薄かつたのであらう。

電車はやがて赤羽を渡つて、二丁目で止まつた。男の學生は甚だ無關心にさつさと降りて行つた。電車は直ぐに動き出した。

「昨日勝つたのね。お目度う。」

女の生徒の一人は、眞中のビイフステヱキの頰邊にささやく時、少し聲が大きかつた。

「アラよくつてよ。」

からかはれた方の聲もわざとらしく高かつたが、又しても三人一齊に、お腹の中に顏を突込んで笑つた。笑ひながらふとももをつねりつこして居た。今度は視線のむけ場がなくなつたのか、その伏せた顏を持上ると、三人ともくるりと窓の方を向いて、素早くお低頭をして、素早く又懷中に顏をつつこんで笑ひ崩れた。

恰もその窓の外の、急な坂の突當りの土堤の上には、初夏の眞靑に晴れた空に聳えて、大通りの方から見上げると、何處となく足腰のしつかりしない朝鮮人の姿をした慶應の圖書館が、とりすました顏をして突立つてゐた。アアさうかと思つた時、如何したものか、自分の方が赤面した。

――「三田文學」大正九年八月號

（大正九年七月十七日）

余が愛讀の紀行文

――讀賣新聞の質問に答ふ――

紀行文は支那にいゝものがありさうに想はるれど嘗て讀みたる事なし。狹き讀書の範圍内にては誰しもいふ通り芭蕉の「奥の細道」を擧げたく、今の日本の文人の中では永井荷風先生と芥川龍之介氏最もよき紀行文家の資格を備へ居らるゝやうおもはる。（大正九年七月二十一日）

――「讀賣新聞」大正九年七月二十九日

秋聲花袋兩氏祝賀會に際し余の感想

――時事新報の質問に答ふ――

おふた方ともお目にかゝつた事は無之候へども德田さんは昔から五十位に思はれ田山さんはいつ迄たつてもはたち前後に思はれ候　（大正九年十月十二日）

――「時事新報」大正九年十月十四日

戯曲に對する壓迫と國民性

凡人間社會の一切の事は、見物の爲めに、その進歩發達、就中純化を甚しく妨げられる。多數の無理解な見物におもねる爲めに、如何に政治が下劣卑賤になつたか、此頃の此國の議會政治の有様を知るものには、今更考へる必要も無い。俗衆を目安にして出來上つた音樂繪畫小説等が、いかばかり眞の尊き藝術の本道に、殆ど防ぐ可からざる横暴を以て邪魔をしつゝあるか、心ある人には今更うら問ふ必要も無い。殊に上面(うはつら)丈は誰にでもわかり易く、且誰にも直ぐに面白がられ易い芝居に於て、此の嘆は最も甚しい。大變矛盾した言葉のやうであるが、いゝ芝居をすれば客が來ないといふのは、或點迄事實である。ほんとにいゝ芝居といふものは、さうざらには無いが、兎に角多數の見物の要求する芝居は、馬鹿々々しくて冷々(ひやひや)する種類のものである。芝居の面白くないのは興行師の罪だといふ人が多いが、それよりも第一に責任のあるのは見物である。無智無

理解の見物の意を迎へる爲めに、現在の芝居は最も心を勞してゐて、それが芝居の日常生活であり、常識である。少しでも眞面目に新しい努力に向はうとすれば、見物は一齊に背中をむけてしまふ。此の消極的の壓迫は永續的に繰返されてゐて、話材にするのもいやになる程であるが、稀には積極的の壓迫が、芝居殊に上演する戯曲に對して加へられる場合がある。玆には實際自分が見た三の戯曲に對する此種の壓迫と、その國民性に就いて些か記さうと思ふのである。

つい此頃の事である。中村吉藏氏作「井伊大老の死」を上場しようとした興行師並に役者に對して、おかみをも憚らぬ威嚇脅迫が白晝公然行はれた。

元來中村氏は、基督教の青年に共通の、甘いセンチメントを多分に持つた小說家であつたが、その海外留學を轉機として、近代歐羅巴の戯曲家の流を汲む作者となつた。所謂問題劇も書く。社會劇も書く。性格悲劇も書く。運命悲劇も書く。甚だ重寶な戯曲家になつた。その作品を見ると大ざつぱで、杜撰で、氣が利かなくて、唯單に最初作者の腦裡に浮んだ一の概念を、殆ど何の反省も無く、二幕或は五幕に、手取早く組立てたものに過ぎない。味もそつけも無い。言葉を換へて言へば、都合のいゝ筋書に過ぎなくて、生きた人生の生きた事實を、生けるが如くに描いて居ないのである。「井伊大老の死」も此の大ざつぱと杜撰の誇を免れぬものであつた。

まだ上演の噂の無かつた前に一讀した人々は、何れもその冗長と、氣の拔けたつけたりの古めかしい技巧とに驚いたに違ひ無い。その戯曲を上演しようといふ興行師が現れたには、更に驚を增したに違ひ無い。然るに意外にも、大なる運命喜劇が續いて起つて來て、嘲笑のうちに葬られんとした「井伊大老の死」を、喝采の渦卷の中に復活させた。「井伊大老の死」を救つたものは、此の戯曲の上演に抑壓を加へようとした人々である。それは井伊大老の首を斬つた水戸の浪人の子とか孫とかいふ人間だと云ふ話もあり、更に驚く可きは、ある筋の壓迫も加はつたのだといふ噂である。

今更說明する迄も無く、井伊大老は幕末の時勢の推移の犧牲者であつた。鎖國主義の島國の四方に、開港を迫る黑船の威力が、到底防ぎ難い壓迫となつて來た時、內には三百年の德川幕府を倒して、王政の古にかへらうとする氣勢が漲りあふれて來た。

今になつて考へると、全く緣遠く思はれる尊王の思想と攘夷の精神が、何の疑も無く結合して、その當時の若者の血を湧立たせた。勿論、紅毛の夷狄を四足に近いものと考へれば、尊王と攘夷とは當然結合せらる可き思想であつて、後々迄此の當時の志士に、人々が同情してゐるのも、強(あなが)ち無理とは云へないのである。井伊大老は、この二の潮流の渦卷く中にやがては吸込まれて、水

底へ沈まなければならない運命を持つて生れて來た。大老職といふ責任のある地位にゐた彼の耳には、その時の攘夷は、いたづらに威勢のいゝ、無責任なわからずやの彌次馬の聲としか聞えなかつたであらう。しかもおそれおほくも、又迷惑千萬にも、攘夷の上に尊王がくつつけられてゐるのだ。いかに開國の止むを得ざる事を說かうにも、一徹短慮の尊王の志士には、了解出來るとも思はれない。まさかに今日議會に於て、政府黨も反對黨も意識しながら相手方の答辯を封じる爲めに、殊更おそれおほい存在を楯にするやうな卑怯な根性ではなかつたらうが、當時の政府黨で、且大勢に逆行すべからざる事を知つてゐた聰明な井伊大老にとつては、隨分いやな相手だつたに違ひ無い。尊王と攘夷とが、時を異にして起つたならば、或は彼は首を失はずに、無事の解決に導く事が出來たかもしれない。米騷動の際に、突然町内の構の大きい家に石をぶつけさせるおだてやと同じく、薩摩や水戶の浪人共は、大老の目に映つたであらう。

乍併、今更何と云つても爲方が無い。井伊大老は、櫻田の雪の中で水戶の浪人どもの爲めに首を斬られてしまつた。さうして王政復古の世は來たが、もともとそれとは關係の無いのが當然だから、攘夷の聲は何時の間にか細々と、やがてあとかたも無く消えて、今日吾々が見るが如き夷狄盲拜の大御代になつた。井伊大老は蘇生していゝ筈だ。横濱の山手に銅像の立つのはあたりま

へである。反逆好の近代の戲曲家小說家が、彼を主人公に選ぶ事の遲かつたのが、寧ろ不思議な位である。依怙贔負の強い、身勝手な、お國自慢の人間の中でも、殊に依怙贔負の度の強く、身勝手の度の強く、お國自慢の度の強い、時を得顏の薩摩つぽうや、水戸つぺいが、櫻田の浪人を偉いものにする爲めに、井伊大老を奸物扱ひしたがるのは、恰も昔の芝居の作者が、勸善懲惡の主義をたてゝ、人間を善人と惡人に區別した常套手段と同じである。これを逆に行つて、薩摩つぽうの野心が破れて、彥根の殿樣の威張る世の中が續いたら、櫻田の志士は「世界の大隈」を狙ひ、「わしが國さの原」を狙ひ、「憲政の神尾崎」を狙つたごろつきとひとしなみに扱はれて、しかも文句をつけるきつかけさへ出來なかつたに違ひ無い。批判をする人の立場が、その對象の價値を左右するのである。中村吉藏氏が井伊大老を、今日の世の先驅者と見ようとも、敢て不當ではない筈だ。それを兎や角云つた爲めに、依怙贔負の身勝手の、お國自慢の根性の汚なさを曝け出した人間の愚さは勿論の事、その後押をしたのが事實とすれば、「ある筋」の人間といふ者の馬鹿々々しさも、甚しいものと云はなければならない。

運のよかつたのは興行師と作者である。興行師は、馬鹿々々しく強がつた兒戲に類する脅迫に一時へこたれたかもしれない。上演中止と決した時は、確に正直に閉口したのであらう。乍併そ

の顚末が、一度新聞に出て、忽ち脅迫者に對する反抗の氣勢が高まつたのを見た時は、外の事にはうとくとも、金儲にかけてはぬかりの無い興行師は、平氣で嘘をつき馴れた舌を出したに違ひ無い。新聞の攻擊、雜誌の攻擊、文士連の攻擊が續いて起つた。事あれかしと待つてゐた文筆の士の組合は、「井伊大老の死」の決して名作で無い事を知り、密かにその拙劣を笑つてゐたのだが、事こゝに至つては、生眞面目に演說もしなければならなかつた。恰も尊王攘夷を唱へた志士の如く勇敢に、「井伊大老の死」を擁護する事が、少し大げさだが、天下の形勢になつたのである。どう考へても、興行師は舌を出したに違ひ無い。出さなければ嘘だと思ふ程、うまいつぼにはまつたのだ。彼は短銃と匕首の凄い冷い脅迫に、引込めなければならなかつた戲曲を、辯論と文章の景氣のいゝ追及に、いやでも應でも上演しなくてはならなくなつた。短銃と匕首の連中に對しても、彼は申譯の立つ位置になつた。若し上演しなければ、擁護派の脅迫に面を向けなければならないのである。

芝居は勿論大入だつた。事ある每に安價な熱狂の血を湧かす彌次馬は、大暑の候にも拘らず滿員だつた。井伊大老に扮する俳優の妻は、初日の舞臺で、夫が水戶浪人の子孫に刺されはしないかと怖れたさうだが、いざ幕をあけて見ると、幕末の英雄は、更に大正の世の脅迫者を向うに廻

した豪傑となつて、ほしいまゝに「日本一」の聲を浴びたのである。

上演された「井伊大老の死」は、巧に手を入れて、原作の冗漫と大ざつぱを刈込んで、大分見よい物になつたが、しかも決して結構な芝居ではなかつた。しかも行がゝり上、文筆の士は之をけなす事は憚られる。調子づいた作者は、原作を改めなければならなくした外部の壓迫、卽ち事勿れを專一として、脅迫の怒をなだめる爲めのその筋の壓迫と、戲曲を刈込んだ芝居側の壓迫に對して不平を云ひ、如何に手を入れた爲めによくなつたかを忘れていゝ氣になり、これに和して例の共鳴といふのがぞくぞく名告をあげた。驚く可し、最近最も賣れ行のよかつた本は、その冗長にして大ざつぱなる「井伊大老の死」だつたさうである。

興行師も、作者も本屋も、先づ第一に脅迫者に感謝すべきである。

扨て此の「井伊大老の死」にかかはる論爭中に、斯の如く藝術の作品に對して壓迫を加へる事は、今日の世に於て眞に恥づ可き事で、西洋諸國では、そんな馬鹿々々しい事は無いと云つた人があつたが、これは例の夷狄盲拜で、甚しい間違ひである。外國に於ても、藝術に對して壓迫を加へた實例は澤山ある。たゞその態度が、國によつて自ら異なるばかりである。手近い例としては、愛蘭土國民劇團の上演したヂョン・ミリングトン・シングの戲曲「The Playboy of the Western

World」に對する壓迫は、より遙かに猛烈なものであつた。

今でもまだ愛蘭土には浪漫的の夢が多くはぐくまれてゐる。その國の海岸の貴族の家で、ウイリアム・バトラア・イエエツとグレゴリイ夫人が、初めて愛蘭土の戯曲を上演すべき、愛蘭土の劇場の創設を物語つたのは、遠い昔の事では無い。眞靑な海を目の下に見ながら、輝かしい希望を物語つた二人の出會(であひ)は、文學史上ないがしろには出來ない傳奇的の光景であつた。倫敦の營利芝居の俗惡を逃れて、至純の藝術に奉仕する國民的劇場を創立する運動は、其の日から深く根を下したのであつた。既に今日では、世界に於ける劇團の最も純粋なるものの一として誇り得るものに爲遂(しと)げてしまつた。

けれども、その成果をもたらす迄の道程は、決して樂ではなかつたのである。宗教と政治に執拗に執着し、祖國の土に嚙りついて離れない、かたくなな愛國心に燃える國民は、その狂熱的な性情から、新しい運動に對しては、屢々甚しい誤解をした。怒れば直に石を投げ、短刀を握らなければ承知しない連中である、暴行の伴ふ事は免れなかつた。

イエエツの戯曲も、グレゴリイの喜劇も、見物の無理解から起る妨害には、幾度となく苦しめられた。しかしその最も激しかつたのは、愛蘭土の生んだ誇るべき戯曲家ヂョン・ミリングトン・

シングの「Playboy」に外ならなかつた。

本質的に最も愛蘭土らしいといふ事は、シングの戯曲の特質の一である。まざまざと、愛蘭土の未開の百姓の姿を舞臺の上に見せつけられる事は、愛蘭土人にとつては堪へ難いものであつたに違ひ無い。それが激怒を買つたのだ。誰にしても、あんまり自慢にならない自分の顏を明白に描かれたり、或は他人には祕しかくし度い善くない根性を、容赦も無く白日の下にさらけ出されると、見榮にもてれかくしにも、怒らないでは居られなくなる。「Playboy」も亦餘りに愛蘭土らしかつたのである。

或秋の夕、マヨオの村の酒場に、疲れ果てた泥まみれの旅の若者が來て、親を殺して逃げて來た身の上だと物語ると、座にゐる者は忽ちに彼を英雄にしてしまつた。惡の讚美は、江戸時代の演劇にも屢々あらはれたが、それは確に吾々の心に巣喰ふ一種の感情に違ひ無い。何でも構は無い、人に出來ない事、人を驚かす事をした者に對する好奇心と驚異が、此の場合にも村人の心を捕へたのである。若者は人々の勸めるまゝに、酒場の給仕になつて、村に止まる事になつた。近所の女房や娘共はこぞつて此の親殺しを、親殺しなるが故に崇拜し、歡待する。浮氣者は惚れてしまふ。暫時(しばらく)の間、彼はいい氣持で英雄になつて居た。然るに、まんまと殺したと思ひ込んでゐ

た父親は生返つて、息子の跡を追つかけて來る。さうして此の親殺の英雄は、その親が生きてゐたといふ事實の爲めに、村人の崇拜の熱をさまさしてしまひ、ただの意氣地無しになつてしまつた。昨日に變つて、嘘つきとさへ罵られなければならなくなつた。彼は猛然として再び親を殺さうとしたが、遣り損なふ。牢屋に引張られて行かうとするのを、父親が示談にして吳れて、悄々と家に連れて歸られるのである。酒場の娘は、その胸に描いた英雄讃美の夢のさめたのを嘆く。

これがその梗概である。無智で、愚鈍で、しかも血の湧立つやうな事の起るのを待兼て居る愛蘭土の農民の心を、手痛く描出したものである。胸に堪へないわけが無い。卽ち反抗の聲が高まつた。非難の理由は、親殺しを讃美するのは愛蘭土的で無い。愛蘭土を侮辱するものだといふのであつた。

千九百七年の正月、「Playboy」が初めてダブリンで上演された時、吾々のやうな太平無事の島國に育つて、味の淡い米の飯を喰つて、秀麗なる雪月花を見て暮す者には想像もつかない程しつつこく大仕掛な妨害と、それにも增してしつつこく意地を張通した抗爭の幕が切つて落された。

その日イェエツは、講演の爲めに、蘇格蘭に行つて留守だつた。グレゴリイ、シング等は、「大成功」といふ電報をイェエツに打つた。けれども直ぐに「見物湧く事甚だし」といふ第二の電報で、

取消されなければならなかつた。

數十人の彌次馬が、忽ち騷動を引起した。床を踏鳴す者、口笛を吹く者、喇叭を吹く者もまじつた。舞臺の上の役者の聲は、一切聞えなかつた。いつたん幕が下りた。

けれども、强情我慢のグレゴリイ夫人は、再び幕をあげさせて、せりふなんか聞えようが聞えまいが構はずに進行させた。巡査が馳けつける。彌次は益々劇しくなる。最後迄妨害は續けられ、その妨害には頓着無く、役者は勝手にしやべり、勝手にしぐさをして大詰となつた。

次の日はイェェツも歸つて來た。騷擾は再び劇場の中に湧返つた。その次の日も、その又次の日も――遂に一週間の間、妨害者は每晚鳴物をかつぎ込んで騷いだ。それに對して劇場側では、グレゴリイの甥の大學生に賴んで、運動家を附人にしたが、强壯な體軀の血氣の學生の姿は、妨害者を威嚇するよりも、寧ろ喧嘩面にした。忽ち取組合が始まつた。巡査につかまつて、警察に引張られた者も澤山あつた。

妨害はそれのみでは無い。何處の國にものさばつて居る、高尙がりのわからずやのフイリスチンは、戯曲の撤退を迫り、改作を迫り、取るにも足り無い一字一句の言葉とがめ迄せつついたが、劇場側は一切之を拒けた。浪人者の子孫や、ある筋の干涉などにへこたれて、直に引込ませるや

うな根性とは違ふのだ。後年シングの名聲世界に普くなつた時、グレゴリイ夫人は當時を回想して、若しもあの當時心弱く、群集の壓迫に畏縮してしまつたならば、吾々は永遠に恥ぢなければならなかつたと云つた。彼等の大なるほこりは當然である。萬一、さういふ壓迫に屈服したらば、恐らくはアベイ・セアタアは永久に扉を閉ぢなければならなかつたかもしれない。よしんば扉を閉ぢないにしても、今日動かす可からざる勢力を敷いた愛蘭土國民劇の發達は、遂に期待する事が出來なかつたらう。人は或點迄、鬪士としての強さを持たなければならない。

乍併、勝利はそれ程手輕には獲られなかつた。愛蘭土國民劇團は、その本土ばかりでなく、遠い太西洋の彼岸に於ても、あらゆる妨害と鬪はなければならなかつた。

千九百十一年の秋、一座は初めて亞米利加に渡つた。世界に於て、文明の程度の低い國々の貧乏人が、天國として夢見てゐる亞米利加には、勿論夥しい愛蘭土の移住民が住んで居る。一座の者が、最初の興行地ボストンに着いた時、故鄉を懷しがる彼等は群つて來た。グレゴリイ家の小作人、その近所の百姓で早く故國を捨てた者、その昔グレゴリイ夫人に日曜學校で教へられた生徒、いろんな人間が、花輪を携へ、稱讚の言葉を浴せながら一座を取巻いた。

けれども一方には、曾てダブリンで遭遇したよりも、もつと猛烈な迫害者が徒黨を組んでむか

つて來た。迫害の發生地なるダブリンと氣脈を通じた組織的の妨害だつた。戯曲は、粗野、不自然、非國民的、反基督教的のものとして排斥されたのだ。日本でも、いつぞや土曜劇場の連中でやつたグレゴリイの喜劇「ハイヤシンス・ハルヴェイ」、左團次延若の演じたマアレイ作「兄弟」さへ攻撃された。けれども、亞米利加に於ては最も人氣のいゝ、知識の程度の高いボストンは、それでも比較的無事の方だつた。たまたま床を踏鳴したり、叱聲を發する者があると、大學して來てゐるハアヴアアドの學生は、歡呼喝采して一座に聲援し、妨害者の聲を葬つてしまつた。

次から次と、各地を巡業して廻る間に、あらゆる種類の妨害を避ける事が出來なかつた。わからずやの中のわからずやなる宗教家は、宗教家に特有の偏狹、宗教家に特有の世間受を心懸ける根性から、愛蘭土の戯曲の當然持つてゐる野性を、言葉を盡して攻撃した。何處の國でも早耳で、一人合點で、無責任で、鐵面皮な新聞記者は、持前の早いもの勝の出たらめで、いい加減な記事を捏造して掲載した。おそろしい事には、新聞の記事程人々の目に觸れ易いものは無く、且つ無批判の多數者に信じられ易いものは無い。俗衆が、愛蘭土國民劇團に對して、黑眼鏡をかけた事はいふ迄もあるまい。

それにも拘らず、一方には、既に愛蘭土の新興文學運動の成果を知り、その作品は學校の講堂

でも研究されて居たから、熱心に歡迎する者も多くあつた。反抗の度が強ければ強い程、歡迎の熱も高まつたであらう。グレゴリイ夫人は、各地の學校や集會に招かれて、講演をして廻つた。何事にもめげない、旺んな氣力を持つ此の老貴夫人は、機會のある毎に、隨處に自分達の使命を宣傳した。

十一月の末に、一座は紐育に乘込んだ。初日はグレゴリイの「月の出」と「噂」、マアレイの「兄弟」が出た。「兄弟」の中で、兄と弟が格闘する場合になると、"Not Irish"と叫び出した男があつた。こんな事は愛蘭土にはありはしない、若しあればグレゴリイの家庭にある丈たらう、と罵る者もあつた。

次の週には、愈々問題の「Playboy」が上演された。幕が開くと、直に妨害が始まつて、おしまひ迄根氣よく續けられた。役者の聲は全く聞えなかつた。怒鳴る者、叫ぶもの、舞臺に物を投げる者もあつた。その騷擾のうちに、一度は演じてしまつたが、グレゴリイ夫人は命じて、更にもう一度最初からやり直した。餘りの事の激しさに、流石の妨害者も沈默した。一座に同情を持つ見物は一齊に拍手喝采した。

いかに此の騷擾が激しかつたか。日本と違つて、人を拘引する事の嫌ひな亞米利加で、しかも

人々の樂しむ劇場から、十人の人間が珠數つなぎにされた。酒場の給仕が二人、酒屋が一人、勤人が二人、馬具屋が一人、教師が一人、石工が一人、植字職工が一人、電氣工が一人。彼等は悉く罰金をとられた。

おそろしいのは、マネヂャアの命を貰ひうけると言明した者があつた。ここいらは大分芝居がかりで、松竹を脅した浪人の裔と共鳴するであらう。

翌日は、グレゴリイ夫人は、ルウズベルトを劇場に引張つて來た。當時はタフトの大統領時代ではあつたが、此の人氣者の出現は人々を驚かし、彼の姿を見ると、敵も味方も、見物は一齊に歡呼の聲をあげた。ルウズベルトは、グレゴリイ夫人の手を取つて、その見物に紹介した。煙に卷かれた彼等は、此の度胸のいゝ女將軍にも、拍手喝采を浴せかけた。

「Playboy」の幕が開くと、流石に前日の如き暴行はなかつたが、殊更咳をするもの、奇聲を發する者は絶間無く、又しても巡査の手を煩はす事が多かつた。

ルウズベルトの來た事は、一座の役者達を感激させた。それは西園寺公望公に招かれた役者が、恐懼した恐懼したと、只管恐懼がつた際のものではなかつたらう。ルウズベルトが、此の一座こそは愛蘭土のほこりであると演說した時は、感に堪へず涙を流した者もあつたといふ。

一座はその年を亞米利加で送つた。新年にはフイラデルフイアで、あけても變らない「Playboy」の鬪爭を續けて居た。見物の妨害は絕間無く事件を引起した。生卵を舞臺の役者に叩きつけた男もある。拘引される。演技半に反對演說をする者もある。拘引される。繰返し繰返し、雙方の強情が意地を張通した。グレゴリイ夫人の身のめぐりには、常に亂暴な妨害者の姿がつきまとひ、これに對してグレゴリイは、ペンシルベニア大學の屈強な運動家八人を護衞として引つれてゐた。遂には「Playboy」撤退の議が持上つたが、それでもグレゴリイは斷じて承知しなかつた。法の禁ずるところとならうとも、自分自身が拘引されても、飽迄も此の傑作の上演中止はがへんじないと宣言した。保釋金を用意して幕をあけた。

事茲に至つては、最後の審判を法廷に持出す外はなかつた。妨害者側から「Playboy」は公の秩序をみだり、善良の風俗を害するものとして訴へられた。グレゴリイ夫人以下一座の者は、遂に法廷に呼出された。

市俄古に於ても同じ困難に遭遇した。其處では、「愛蘭土劇團反對同盟會」が發起されて、忽ち三百人の會員が結束した。グレゴリイ夫人の旅館の机の上には、棺と短銃の繪を描いた脅迫狀さへ舞込んだ。

自分が渡米したのは、此の年の秋だつたが、翌千九百十三年の春、愛蘭土の一座は再び亞米利加を訪れ、自分はボストンで見る事が出來た。「Playboy」は騷擾を避ける爲めに禁じられてゐるのだと、學校友達が教へて呉れた。毎日々々通つた。これは後に倫敦で見る迄、遂に亞米利加では機會がなかつたが、マアレイの「兄弟」も、その他妨害の目的となつた幾多の戯曲も、既に其時は何の問題も引起さず、無事に見事に演じられた。彼等は完全なる勝利を納めてしまつたのだ。見物の拍手に報ゆる爲めに、幕間に舞臺端へ現れたグレゴリイ夫人は、その勝利をほこる事をかくし切れないといつた様子だつた。何處からあの機智と同情とが出て來るのかと疑はれる程意地張つた顔付の老貴夫人の姿が、藝術の力そのものゝやうに、今も尚自分の目の前にありありと浮んでゐる。

西暦千九百十五年の秋、自分は英京倫敦にゐた。歐羅巴大陸の戰況は、尚未だ聯合軍に不利で、果して最後の勝利が望まれるか如何かも疑はしい時代であつた。日常生活に於ては極端に形式的で、淺薄を極めてゐながら、國家の利害關係に就ては怖しく執念深い實行力を持つ英人は、國を擧げて戰つてゐたのである。かういふ時代に、藝術が甚しく安く取扱はれる事は否み難い事であらう。

獨逸の飛行船が爆彈を投下してから、一層暗くなつた倫敦の劇界は、沈鬱な人々の心持と共に寂寞そのものの如く振はなかつた。古臭い戯曲でなければ、亞米利加から渡つて來た俗受專門の戯曲ばかりが上演され、新しい刺戟となる物は殆ど見る事が出來なかつた。怖しい殺戮の實行時代には、藝術創造の飛躍は夢にも浮ばなくなつたのであらう。霧の都の霧は愈々深く、秋は水底の如く冷やかに身に沁みて來る頃であつた。

St. James's Theatre で Sir Arthur Pinero の新作「The Big Drum」が Sir George Alexander の一座によつて上演されるといふ芝居消息は、霧の晴れた日の日光のやうに、かがやかしく心に觸れて來た。ピネロを、それ程偉大な作者だとも思はず、アレキサンダアを、それ程尊敬すべき役者だとも思はなかつたが、兎にも角にも此國一流の作者の新作を、此國一流の役者が手にかけるといふ事は、戰時に於ける日常生活の單調、藝術の世界の重苦しい沈鬱にあき果てた者にとつては、聯合軍の戰勝の號外のやうに珍しく、思ひもかけない報道だつた。

「The Big Drum」は相も變らぬ英吉利の Snob Family を背景に持つ「英吉利風の新しき戯曲」である。

他日の成功を夢見てゐる道德的理想家の記者と、どうかして名を知られ度いとあせつてゐる金

持の娘は、互に戀の萌芽を胸に感じてゐたが、或時女は男に、その地位を利用して、自分の父母を交際社界に名の聞えるやうにして呉れと頼み込む。男はその名聞好の根性を、口を極めて罵倒した。かりそめの其の爭がもとになつて、思ひもかけない別離の止むを得ないはめに陷る事になる。女は心にも無い夫を持ち、二人は完全に別れて十年たつた。男は孤獨の生活の中に、小說作家としての成功に對する野心に驅られながら、苦しい、しかし自分の力を賴む仕事をしつづけて來たが、女は心にも無い結婚の結果、不幸な日を送るうち、夫にも死別れてしまつた。地位と金力と美貌に引かれて、此のやもめを張る紳士は澤山あるが、女は既に今日迄踏んで來た道にあき果てて、新しい境涯に憧れてゐる。この戀の破滅から十年たつた現在が、戲曲の序幕である。

昔の二人は、おもひがけなく知人の家で再會する。既に作家としての成功を、眼前に迫つた事實として確信してゐる男と、交際社界の紋切型にあきあきした女の胸に、そのかみの懷しい情緖が浮んで來て、二人は容易に舊恨を忘れ、忽ち同じ感情に融和してしまつた。しかし、女が Ah, je vois que votre orgueil est plus fort que votre amour! と云ふやうに、男は戀のみをおもふ事の出來ない人間であつた。彼は完全に文名を揚げ、一般讀書社界に作品の價値を認めさせた曉に、始めて夫と呼ばれ、妻と呼ばうと約束する。彼は名聲と戀人とを、同時にかち得る日の

近い事を信じて、歡喜の中に、十年見なかつた愛人を抱いて接吻した。

英吉利の Snob の典型として描かれてゐる女の兩親並びに弟は、此の二人の結合に反對する事勿論である。其處で男は繰返す。結婚は名聲を得た上の事で、若し正に出版されんとしてゐる小説「The Big Drum」が失敗したらば、更に次の小説で成功する迄待つ事、若し又それでも失敗したら、又更に第三の小説を待つ事、換言すれば、名聲を得ないうちは結婚しないと誓ふのである。名聞好の兩親も、此處に至つて漸く納得する。

扨て本が出版されると、最初は賣行もおもはしくなかつたが、忽ち飛ぶやうに賣れ出した。版を重ね、版を重ね、版を重ね、版を重ね——版を重ねて、尚注文は止みさうもない。かゝる時、おちつき拂つてゐる英吉利の小説家も、恰も我國の新進作家が、一度その短篇を投書雜誌に掲げ得た時と等しく有頂天になつてしまつた。世間體ばかり氣にしてゐる女の兩親も、これ程の作家を婿に持つ事は喜びであつた。約束の日は近づいて、既に女の指には、婚約の指輪さへ輝いた。

けれども、その儘大詰の幕がしまつては、近代の戯曲にならない事は、さういふ點にかけて職業的に敏感なピネロでなくても、誰しも知つてゐるところである。少しく芝居の奥底のわかる人にはあんまり唐突に思はれるが、しかも一般の見物にはちつとも不思議で無い程度で、おもひも

かけない祕密が曝露される。卽ち女の弟で、姉が地位も金も無い小說家と夫婦になる事を、一家一門の恥だと思ひ込んで居る若者が、私立探偵を雇つて、幾萬の小說本の行方を突止めたのだ。誰人の目にも觸れ無い死骸に等しい本の山が、或家の地下室から發見された。それは戀に心のあせる女が、賣行のおもはしくないのを氣づかつて、出版者と謀つてした仕事だつた。戀の爲めに、愛人の爲めに、世間をも愛人その人をもあざむいたのだ。眞に世間的に認められたと思ひ込んで、有頂天になつてゐた丈強く、男は身に受けた恥辱に憤つた。一切の關係が破滅に陷つてしまつた。もう一度女の言葉をかりて云はう。C'est fini après tout !

戯曲は此處で終つてゐるのでは無い。最後に、砂上に築いた自信は無殘に踏躙られ、正に完全に自分の懷に抱いたつもりだつた愛人を失つた男は、終夜眠る事も出來ないで悶えあかしたあげく、愛の爲めに盲目になつた女の行爲を許し、併而自分の非力をも認め、みづから女の許に憐を乞ふのである。言葉を換へて云へば、理想を捨てて、手取早く單純に、男と女の關係を結ばうといふのである。けれども女は承知しなかつた。女にとつては、愛よりも名譽を重しとした男の根性も不服であり、自分自身の不純な、淺はかな根性も、顧みて悔恨の種であつた。今も尙男を愛する心はありながら、二人が一緒になる事が、藝術家としての男の存在にとつても幸福で無い事

を主張して、女は遂に永遠に去つてしまふ。以上が、ピネロの新作四幕の筋書である。
戯曲としての出來榮から見て、決して立派なものではない。おもしろみも、をかしみも、問題も、皮肉も、すべて取入れてあつて、しかも極めて常識的で、ぴりつと來ない戯曲だといふ事は、その內容から論じても、その形式から論じても、直に之を指摘し得るが、本論とは無關係だから略す事にする。兎に角、毒にも藥にもならないピネロ一流の、稍藝術批判の立場を低下して見れば、流石にうまいところもある作品で、如何なる點から考へても、道德的にも非難すべき筈のものでなかつた。
しかも St. Jamess の舞臺に上演されると、忽ちにして輿論は此の戯曲に反對した。戯曲に反對したといふよりも、戯曲の大詰に反對したといふ方が適當だ。人々は大詰の書直を要求したのである。
輿論が全く無視された時代に於ては、輿論を尊ぶ思想は貴重なものだつたに違ひ無いが、今日の如く、早くも輿論がその害毒を流し始めた時代に、尙未だ昔の如く完全に、輿論の難有さを忘れない人間のはびこつてゐるのは、をかしくもあり、又時に迷惑である。ピネロの新作に對する場合に於ても、此の迷惑な輿論が出しやばつて、しかも大きな面をして凱歌を奏した。

曰く、「The Big Drum」の結末は、二人の愛人の悲しい別れに終つてゐるが、此の大戰の最中、親を失ひ、夫を殺され、兄弟戀人を傷けられ、心は暗く悲嘆に閉されてゐる最中に、かゝる不幸な戯曲の結末を見る事は到底堪へられない。殘酷である。非人道である。觀客は口々に不滿を訴へた。戯曲の自然の發展が、自ら大詰に到達するのだといふ事を知らない俗衆は、單に最後の幕のしまる前に、抱合つて接吻する男女を見ん事を強要したのである。

乍併誰人も、水戸の浪人の子孫の如く無禮なる言行を敢てせず、「Playboy」の國土の人々の如く亂暴でもなかつた。たゞ輿論の力を以て、靜に禮儀正しく迫つたのである。劇場側に於ても亦、反對論を煽動する事も無く、勿論グレゴリイ夫人が執つた意地づくの態度にも出なかつた。張合の無い程容易に、輿論卽ち觀客の要求を滿足させる爲めに、原作者に、幸福なる大詰に書替る事を要求した。原作者も亦、自分の杜撰大ざつぱを棚にあげて大きな法螺を吹く東洋流の狡猾な豪傑ぶりも見せず、暴行脅迫にも屈しない詩人の態度にも倣はず、洒々として輿論の前に幾百千歩を讓つたのであつた。讓つたといふよりも、踵をかへしたといふべきであらう。涙を笑に變へたのである。彼は下の如く云つてゐる。自分は自分の主義と良心に反する變更をしたが、しかも全く不本意ではなかつた。現在は暗鬱なる時代である。恐らくは斯の如き場合に於ては、何よりも

先に觀客の希望に從ひ、足一度劇場を出れば、再び彼等をおしつつむ暗い心持を忘れさせる事が、戲曲家の義務であらう云々。彼は平々凡々の一社會人として、遂に藝術至上主義を說かなかつた。

兎角出しやばり度がる筈の新聞も、極めて曖昧に此の輿論を是認し、且又ピネロの態度の必しも藝術家らしからぬ事を遠廻しにほのめかしながら、しかも戰爭を楯にして、作者の態度をさへ結局は肯定した。

かくの如くして、戲曲の中の男と女とは、その大詰で、さも歡喜に堪へないらしく抱合つて接吻する事になつた。芝居が大入だつた事はいふ迄も無い。

自分は此のお目出度い結末に變更されてから見たのである。左程切迫した心持をも與へない戲曲の終が、戀の破滅だらうが無からうが、そんな事には頓着しさうもない顏付の紳士淑女が、面憎い程すまして見てゐた。戰爭の名目の下に、悲劇をさへ喜劇にかへた擧國一致を、彼等は寧ろほこるらしかつた。

自分はピネロの新作を見たといふよりも、その戲曲を書いたピネロを生んだ英吉利そのものを、まざまざと見せつけられた氣持がして、偉大なる馬鹿野郎の壓迫をさへ感じた。その無神經、そ

の厚顔、その藝術的慘虐野蠻——砂漠の如く廣大にして色彩の無いヂョンブルの國に、到底抗す可らざる一種の力のみちみちてゐる忌々しさを、なさけない程痛感した。今も尙天子は天子の位にゐながら、實權は人民が完全に掌握し、殆んど流血の慘事を見ないで、今日の民主的の世の中に漕ぎつけた英吉利である。勞働問題が喧しくなり、種々の宣傳並に實行の運動が行はれても、かのかりそめの國民大會にさへ、革命の如き騷擾を引起す日比谷附近の光景を見て吾々が想像するやうな無秩序な事も無く、しかも着々として世の中の進みに遲れない不思議にのつぺらぼうの國である。歐羅巴の戰爭にも、いつの間にか一番儲けてしまふ、甚しく底力のある國である。ピネロの戲曲の大詰を變更するが如きは、もとより誰人の感觸をも害さないに違ひ無い。無神經の強味、鈍感の偉大といふ言葉が使へるならば、自分は英吉利をさう呼ぶであらう。

地震、暴風、洪水に、家を失ふ事を年中行事と心得、新思想といへば、それに對立する思想は一切無價値だと思ひ込む國人と比較して、自分はたゞ餘りに相違の甚しいのに驚くばかりである。杜撰と大ざつぱを極めたる「井伊大老の死」の上演にさへ、匕首と短銃を持出す程の壯士芝居が、萬世一系の天子樣のお膝下で、白晝公然行はれる國に、果して偉大なる藝術が生れるであらうか。鈍感無神經は羨しくないが、敏感にしてしかも底の拔けたのは、吾人共に恥なければならない。

恥なければならない、恥なければならないと繰返して、かへりみて尻切蜻蛉を恥なければならない此の一文に、最後のピリオドを打つ事にしよう。（大正九年十月十四日）

——「三田文學」大正九年九月號・十月號・十一月號

「雪」を見る前後の感想

私はいろいろの興味を日毎に失つてゆく氣持がする。觀劇の興味の如きは殆ど失ひ盡した。劇場に入ると同時に、胸のをどる心地を感じた記憶は遠い昔のものになつた。此の數年間に見た芝居の數は十指にみた無い。たまたま連中に誘はれたり、妹などにおだてられて、おごられたりする時の外は、進んで行つた事が無い。連中の時は、芝居を見るよりも、集まつて來る友達に逢ひにゆくやうなもので、大概は廓下で話をしてゐて、且途中で歸つてしまふ。俗受專門の下らない芝居を、場當り專門の下手な役者がやつて居るのを感心して見て居る人間を見ると、寧ろ腹が立つ位である。つまらないといふたつた一言の外は、餘り芝居を論じる事もなくなつた。

それなのに、今度久保田万太郎氏の戲曲「雪」が、歌舞伎座に於て上演される事になつた時、私は近頃になく緊張した心持で、事の運んだ事をよろこび、且その舞臺をも熱心に見た。少くとも

二度見た位たから私にとつては甚だ珍しい出來事であつた。

至極大ざつぱな言葉使ひではあるが、若し、凡そ人間には意志によつて生きる人と、感情に頼つて生きる人とがあると云へるならば、久保田君は後者の代表的人物である。殆ど意志を所有しないと云つてもいゝ位、氣持に執する人である。はつきり云へばむら氣なのだ。喜ぶ、嬉しがる、氣を惡くする、怒る――毎日のお天氣よりも、もつとうつろひ易い心持に頼つたり頼り兼たりして暮してゐる詩人である。從而、その戯曲が、所謂氣分劇である事は當然の結果であらう。

此の氣分劇の作者が、喜多村伊井の一座で、今度興行毎に、開幕劇として、在來の新派の芝居よりも一段高級のものを見せるといふ企圖の第一番に自分の戯曲が擇ばれた時、即ち自分自身の氣分に動揺を起して、平靜を保つ事が出來なくなつたのは、敢て想像に難く無い。自分の戯曲が舞臺に上る、しかもそれが檜舞臺であるといふ喜びと、これに伴ふ心配が、到底かくし切れなくなつた。私はいちはやく「雪」上演の事を、作者から聞いてよろこびと心配を分つた一人である。

久保田君は小說を書く時も、その構想を組立てると同時に、誰彼の差別無く話して聞かせるのが好きである。天下御免の遲筆だから、吾々が話を聞かされた時と愈々出來上つた時との間に、

この處三四年たつてしまふ事さへ珍しく無い。その間に、機會さへあれば聞かせよう聞かせようとするので、若し座に居る者が私一人なら又かと思ふ心持を額の立皺に見せながら、些かは苦苦しいとも思つて、うはの空で聽く。若し仲よしの友達でも其場に居れば、お互に始まつたぞといふ合圖を、公然目顏で取替す。「雪」の上演についても、さまざまの疑懼——私の如き圖太い人間には問題にもならないやうな事にかゝはる懸念を、繰返し繰返し聞かされた。久保田君としては、それは單に藝術上の問題だけでは無く、家庭並びに日常生活を取巻く環境にも影響を及ぼす事だつたに違ひ無い。卽ち、ともすれば、何もしない若旦那と見られ易い生活から、立派な事をする人として見られる事に移り變る一線を劃する事に外ならなかつた。此の意味に於て、「雪」についての懸念には私と雖も同情を持つたのである。里見弴氏、岡田八千代さん、その他作者と特に親しい人々は、同じおもひであつたであらう。吾々は、他人まぜずの小人數で、久保田氏夫妻を眞中にして、「雪」を見る事にきめた。

今更云ふ迄も無く、久保田君は現代一流の小說家である。けれどもその戲曲は、これを小說と同じく、讀むものとして見る時は勝れたものに違ひ無いが、果してこれが舞臺にかける事の出來るものか如何かは疑問だつた。一昔前、土曜劇場の連中が此の作者の「暮れ方」をやつて失敗した

事がある。「雪」も一度手がけられたものであるが、殆ど問題にならない素人のなぐさみに過ぎなかつた。つまり今度の「雪」が久保田君の戯曲の舞臺効果の第一の試驗だと云つてもいいのである。久保田君の懸念を分たれた私の懸念は、徹頭徹尾その舞臺効果に係はつてゐた。

「雪」の筋書は下の通りである。

神田の商人の家に生れた清次郎は、道樂に身を持崩し、藝者上りのおよしと夫婦になつて、銀座の裏通の煙草屋の二階に住んで、糶呉服をして居る。十二になる娘は藝者屋の養女にやり、およしは人仕事をして生計を助けて居る。神田の家には出入の出來ない事になつて居るが、流石に母親は時々かくれて來る。朝から雪催ひの一月二十八日、初不動の日、清次郎は前の晩知人の妻の通夜に行つて友達と勝負事で夜を明し、寺の歸りに又誘はれて今日も亦勝負をする約束をする。けれども、その日に限つて何故か氣が進まない。連中を一足先へ支那料理にやつて、自分は湯に出かける。入れ違ひに母親が不動の歸りに立寄り、つもる話をしてゐると、毎日學校のお晝の時間に、ほんとの母親の側にお辨當を持つて來て食べる娘が來る。久し振のおばあさんの顏を見てちひさい娘は泣く。およしも、清次郎の母親も涙にくれる。暫時して、又學校へ行く孫を送りながら、おばあさんも歸つて行くと、又入違ひに清次郎が湯から歸つて來る。大分心持が引立つて、

御飯を喰べてから支那料理にゆくといふ。さかなを見におよしが出てゆく。間もなく表の方に入亂れた物音が聞える。およしがあわてゝ馳込んで來て、支那料理へ手が入つたといふ。驚いて窓をあけて往來を見ると、何時の間にか雪がしとしと降つて居た。

それでも芝居かと疑ふ人もあるであらう。普通謂ふ所の戯曲的なところがちつとも無い。且正直にいへば、此の筋書は脚本自身よりも餘程お芝居らしいのである。身を持崩した事も、娘を他人にやつてしまつた事も、すべてが人々の會話の中に織込まれてゐるばかりで、場面としては煙草屋の二階の六疊ばかりである。其處には意志の闘爭も、行爲としての活動も現れ無い。英雄も、豪傑も、義人も惡黨も、絶世の美女も貞女節婦も出て來ない。現されるものは此の世の中の諸所方々に、うようよして居る平凡な人間の平凡な生活の一斷片以外の何ものでも無い。

戯曲の要素として、何かしら驚異を要求する人から見れば、なんだ詰らないと云ふ外に言葉もあるまい。Farce では無い。Comedy とも呼び惡い。Melodrama には緣遠い。Tragedy では勿論無い。第一久保田君は決して Dramatist ではない。Playwright と呼ぶのさへ、些かは憚られる。十七字の詩を有する國にのみ生れ得る作者である。立體的な構想組織を心懸けず、つゝましい人々の生計の縮圖を描出するばかりである。換言すれば、その作品の本質は「情緒的寫實

主義」から生れた哀韻の詩に外ならない。それは人生の寫實では無い。此の世の中の解剖でもない。社會問題の提供でも解釋でもない。あるがまゝの世相の、殊に儚い「詩的畫面」である。

從つて他の作者にとつては大切で無い事が此の作者にとつては缺く可らざる事になる。たとへば幕切の窓の外に降る雪の如きは此の戯曲の命である。よくあり來りの芝居に見る事で、まんまるい月がしかけで出ると、急霰の如き拍手が起るか、しかもその月は、あつても無くてもいい月なのである。けれども久保田君の雪は、それが降らない限りは、此の一篇の戯曲を成さない程、作者にとつていとしい雪なのである。雪催ひの空でなかつたら久保田君は此の一幕の情景を想像する事が出來なかつたであらう。

それは話の筋を主としたものでも無い。性格でも無い。思想でも無い。「雪」が持つ本來の性質は、雪催ひの日の空氣である。その空氣を亂さず、その空氣と調和した身の上の人々が集まつて形造る氣分である。或はその人々の寂しい心持を亂さず、その身の上と調和して雪の降る日に限る人々の生活である。

斯ういふ味はひが、戯曲にとつて大切なものであるか如何かはしばらく預る事にして、兎に角此の味はひは、作者にとつて無上のものである事は疑ひも無い。而して、作者は、一生懸命でつ

くり上げた此の心持の中に安住を見出す事は困難でもあるまいが、作者以外の有象無象が寄集まる舞臺の、しかも晝間の雪催ひの光を出す事は殆ど不可能に思はれる脚光の中で、作者がこころざす味はひが浮ぶかどうかは疑問であつた。少くとも至難の事である。私の如きは、その舞臺効果をあやぶんだ隨一人であつた。

左團次が怒鳴れば熱狂し、喜多村、河合の藝者が醉拂へば喝采する大向ふは、あまりに靜寂な戯曲の退屈に堪へ兼て、嘲罵の限りを盡すであらう。果してさうとすれば、氣分劇の作者は忽ち怒り、忽ち悄氣、側に居るのも不愉快な程意氣地無しになるに違ひ無い。私の懸念は其處にあつた。上演のお流れになる事を望む氣持さへ密かに持つた。矢張り、久保田君の戯曲は粗漫な感じの強い劇場などには出し度くない。靜なお座敷の中で、障子を透して來る晝のあかりで、役者は聲を張らずにやつて貰ひ度い。それが出來なければ、ただ讀む戯曲として甘んじ度い。おせつかいな友達は、餘計な心配をしたのである。

舞臺監督は里見君がやる事になつた。本來ならば舞臺の表にも裏にも明るい作者自身が監督すべきで、現に私の如きは久保田君を卑怯だと詰つた。しかし一面から見れば、氣分劇の作者は、誰かを側に置いて、それに縋つて居なければ居たたまれなかつたのである。強い味方を得たつも

りで、舞臺監督は里見君がやつて呉れますと作者は逢ふ人毎に吹聽した。聽かされる方はちつとも感心しないのだが、そんな事は御當人にはわからなかつた。殊に日頃あんまり親しくなり過ぎてしまつた役者の我儘を押へるのに、里見君を引張り出す事は必要だつたらしい。作者には、自分の氣分を滅茶々々にしないで、靜に人を押へる事は出來ない藝だつた。

愈々見物の日になつた。友達のものは自分のもの、といふやうな緊張した心持で開幕を待つた。重い外套を着始める頃の、劇場の內部の寒さが、久保田君の戲曲にはふさはしいものであつた。

靜に幕があいた。思ひ切つてちひさく仕切つた舞臺は覗機關（のぞきからくり）のやうな畫面を見せた。久保田君の戲曲の如き小戲曲の舞臺は當然小さく仕切らなければならないけれども六疊の實物大にしたといふ事は惡寫實である。たつたそれ丈の廣さの中に、めまぐるしい小道具が並んでゐて、加之（しかのみならず）偉大なる體格の喜多村が夥しく場をとつて居る。卽ち實物大の六疊の舞臺は論理的にも矛盾してゐる。何故ならば、ほんものゝ女でない、男の中でも圖でかい喜多村がづつしりと坐つてゐるのではないか。帶の幅さへ六疊を壓して餘りあるのである。此の舞臺の狹さは著しく畫面を混雜させた。襖の外の、梯子段の降口を見せた廊下は不必要である。出入の多い舞臺に、上つたり下りたりする人間の首が長い間見えてゐるのはうるさかつた。少くとも、戲曲の持味の靜けさを亂し

た。光線は隨分苦心したらうとは思ふが、雪催ひの晝の光を出す事は出來なかつた。出來る相談か出來ない相談か知らないが、慾をいへば電燈の光でなく、ほんものゝ日光を誘ひ入れ度かつた。小道具の多過ぎる事もうるさい刺戟であつた。新派の芝居は道具と仕出におそろしく寫實がり、その藝風に於て歌舞伎劇と一歩も差の無いところ迄後戻りした感がある。しかし流石に「雪」を演じる役者達は、此のお芝居にならない心懸けを第一義のものとした事は疑も無い。たゞ悲しい事には、永年沁み込んだ惡い癖が、屢々此の心懸けをさへうら切つた。

お芝居に陷らない事、それが技藝に對する批判の第一の標準である。お芝居になつてしまへば、此の戯曲が尊ぶ淡い心持は害されて筋で賣るものに墮落しなければならない。その意味で、何といつても喜多村は、充分の理解を持つてゐた。お芝居にならない程度で細かい芝居をしてゐるのは、元來彼の特色である。最も舞臺監督をてこずらせたのも喜多村だらうと推測されるが、同時に喜多村が居なかつたら、舞臺の統一を保つ事は難しかつたらうと思はれる。髮結を相手に、愚痴つぽい話をしながら、それがあり來りの身の上話にならないところはうまい。「いつその事、死んでしまつた方がいゝなんて思つた時分もありましたけれど、今ぢやあもう、いくら苦勞をしても、死んぢやあ詰らないとね、つくづく思ひますわ。」と云ひながら輕く笑ふのは、作者が特に

(輕い笑)と注文してゐるには違ひないが、若し帝劇の女優にでもやらせたら、深き憂に沈んで見せたければ承知しなかつたらうと思はれる。動かないでも芝居の出來る人丈に些かの危氣も無く、常に身の上の寂しさを忘れないで舞臺を引締めたが、慾をいへば、久保田君の描く女にしては意地が強過ぎた。それは喜多村について絡る一種の力であるが、もつと弱い素直な感じが欲しかつた。村田の清次郎もうまいと思ふ。隨分しにくい役を樂に片附けた手際は、不相變村田はうまいといふ一言を月並ながらいふ外に爲方の無い程自然だつた。しかしほんとらしいといふことから見れば、料理人らしくない服裝だつたけれども南の支那人は支那人だつた。舌足らずの口のきゝ方が、支那人が日本人に化けて役者になつてゐたのではないかとさへ思はせた。藝とはいひにくい。生れつきなのであらう。をかしい事には新派の芝居に出る支那人は何時もうまい。人相應なんだと思ふ。

一番惡かつたのは福島で、此の人が出て來ると、舞臺の空氣がまるつきり一變して、在來の新派の芝居になるのは悲慘でもあり、迷惑でもあつた。花柳の髮結もよくなかつた。柄に無いから氣の毒だといへばそれ迄だが、こしらへも惡かつたし、お孃さん役ならしつとりとおちつき、髮結なら輕く浮かうといふやうな淺い考へが見え透いてゐた。石川の母親も感心出來なかつた。萬

事が久保田好みで無い。殊にあの聲が私には非道(ひど)く不愉快である。雪岡の煙草屋の主人は人相應の方で惡くなかつたが、二度目見た時には、意氣組がだらけて、芝居をしすぎる根性をさらけ出してゐた。

一人々々のうまい拙いはいゝ加減にして、扨て上演された「雪」そのものゝ出來榮は如何(どう)だつたかといへば、私は豫想外の成功だつたと云ふを憚らない。作者の久保田君は、しきりに不平を洩らしてゐたが、それは作者として自分の立場を動かさない神經質から無理も無いとは思ふが、決して大げさに人々に訴ふ可き筈のものではあるまいと思ふ。甚だ失禮な言葉ではあるが、作者は自分をいゝ子にする爲めに、不平をいふ傾向がなくもなかつた。あれまでに行けば滿足しなければ嘘である。

淡々として、殆ど小說と區別の無いものだと思つてゐた私は目が無かつた。いざ舞臺の上にそれを見ると、小憎らしい程上手に手順のついた芝居だつた。「雪」は明治四十五年の作だから、作者は漸く二十歳を越して間も無い頃である。その若さで、よくも此處迄洗練された技巧と、世間を知り盡したやうな心持を持つてゐたものだと、今更感嘆久しくした。人の出し入れのうまさ、何かしら新しい噂話で釣つてゆく猾(ずる)い程器用な會話のいきいきしてゐる事、殊にその會話の端々

に迄も、作者の人生觀から生れた寂しい氣分の沁み込んでゐる事は只管驚かれる。幕切に降る雪を見て、思ひもかけ無い色彩の美しい刺戟に感激して、見物は一齊に拍手した。私はその拍手の中に胸を躍らせながら涙を感じた。

私は自分の不明を喜ぶ。吃度あくびと嘲罵を浴せかけられるだらうと思つてゐたのが、幕開から幕切迄、話聲も聞えない靜肅な見物の間に、時に涙を拭ふ人々を見たのである。

芝居を見て容易に泣く人は、やがて最もよく笑ふ人であるかも知れないが、それにしても、斯ういふ味はひの芝居だから、別段しつつこく強要した悲しさではないに違ひ無い。いかなる種類の感動にしても、私の豫期し得なかつた効果を現したのである。私は久保田君の前に自分の不明を告白した。しかし同時に「雪」が存外お芝居だつた事は否定出來ない。あんまり際立つて使ひ過ぎた鳴物の如きは、かなり戲曲を安くした。いゝ意味も惡い意味もひつくるめて、うまいといふ一言を集つた友達は爭つて口にした。

菊池寛氏の通俗小說「眞珠夫人」を脚色したものは見るに堪へなかつた。菊池氏程の作家は、意地にも斯ういふものは書いて貰ひ度無い。吾々は中途で芝居を見捨て、あらためて久保田君の健康を祝ふ爲めに小宴を開く事にした。

私は久保田君を偉大なる戯曲作家だとは思は無い。恐らくは甚だ偉大には遠い作家であらう。乍併吾々は餘りに俗悪な芝居に難澁し過ぎて居る。如何にその味はひは淡きに過ぎるとも、かういふ上品な作品を見、かういふ上品な情緒を感じ得る事は儚いながらも慰樂である。沙翁イブセンの偉大に憧憬する熱情は持ちながら、吾々の祖先から持傳へた俳句の趣味に心を引かれる事は極めて自然である。少くとも、何等の無理な努力無しに味はひ盡す事が出來る。さういふ意味で、久保田君の戯曲は充分存在の理由を持つ。

進んで「雪」を上演した劇場も俳優も、何時ものあきつぽい根性を出さないで、續けていゝ物を見せて貰ひ度い。二度三度、同じ作者のものをやつて見るのも面白いと思ふ。何しろ、ちつとも感觸を害ふ事なく見てゐられる芝居だつた丈でも感謝の價値がある。

その晩、久保田君を正座に据ゑて、上に述べたやうな感想をしやべりながら、私は友達としての喜悅(よろこび)に醉つて甚しくはしやいだ。(大正九年十一月廿九日)

――「時事新報」大正九年自十一月三十日至十二月七日

予が本年發表せる創作に就いて

——「新潮」の質問に答ふ——

大正九年一月　友情　新小説
同　秋　三田文學
二月　泉鏡花先生と里見弴さん　人間
同　初夢　三田文學
四月　正月　改造
同　此頃の事　三田文學
五月　祭の日　人間
同　妾の子　三田文學

六月　水夫の家　三田文學
八月　札の辻——櫻田門　三田文學
九月　隣室の犬　人間
同　戲曲に對する壓迫と國民性　三田文學
十月　戲曲に對する壓迫と國民性　三田文學
十一月　戲曲に對する壓迫と國民性　三田文學

特に述ぶべき感想無之候

——「新潮」大正九年十二月號

日曜の癇癪

日曜の朝の樂しさを知らない者には、土曜の夜の酒の味は解るまい。平生つきあつて居る一群の中の、たつた一人の勤人である自分は、常にかう考へて居る。

毎朝きまつた時間に起きて、狼狽しく顔を洗ひ、身支度をして家を出る。一生の荷厄介だと思ふ人一倍濃い髯を剃る時の腹立たしい心持は、すゞつこい人達の思ひも及ば無い事であらう。えゝ面倒臭いと思ふと、手荒くあてた剃刀の刃の跡から、玉になつて血が吹いて來る。その切傷に風のあたる往來を、只管電車に急いで行く。電車の中の三十分は、隨分苦痛で、人間嫌の心持は必ずその間に醸される。ちえつ、世の中はつまらないなと苛々しながら勤務先に着くと、始終變らぬ仕事が、夕方迄机の上を襲つて來る。あゝ電車に乘らないで濟み、出勤簿に判を押さないで濟む日が戀しいと、毎日々々考へてゐる丈、やがて來る日曜の朝の樂しさは、年が年中時間の觀

念もなく暮らしてゐて、原稿の催促にあつて始めて月も半分過ぎたと知る、我が友達共の味はひ知らぬ事であらう。

友達と酒を飲む。いくらへゞれけになつても、明日の心配の無い連中の無責任な醉拂ひ方は——此邊でひとつさげすんでやらうかと思つたが、實は少々羨しい。だから、土曜の夜の酒の味が、ふだんとは比べものにならない事になるのである。土曜の夜の酒の味が、平生と違ふ事を知らない者には、日曜の朝の樂しさは解るまい。

今度の日曜はどうして暮さう。年中それを考へてゐる。毎日顏を合せてゐる勤務先の人間なんかとつきあふのは眞平だ。日曜の尊さを知らない、小說を書いたり繪を描いたりする友達なんかと遊ぶのはよさう。この日曜の値打を知らない人間と一緒になる事は、もつたいなく思はれるのだ。あゝでも無い、かうでも無いと迷つたあげくが、いつもきまつて、何もしないで暮さうと考へる。

ほんとに此の頃は、手足を動かさない時間が少い。兩手兩足を樂に延ばしてゐる悠長な心持に別れて久しくなつてしまつた。若しも日曜が天氣だつたら、椽側の日向に寢轉んで暮さう。雨だつたら、火鉢をかゝへて鐵瓶の音でも聞いて居よう。想像する丈でも、苛々した神經は靜まり、

身の丈も延びさうな氣持がする。けれども、その何もしないで暮らす日曜は、何時迄たつても實現されない。あんまり長閑な日曜を空想する爲めに、現實の日曜のまゝにならない口惜さを嘆じなければならないのである。樂しい日曜が、烈しい癇癪の大詰で、おしまひになる事も多い。玆に最近の例を擧げよう。

土曜の晩に、友達と適度に飲んだうまい酒のおかげで、ぐつすり寢込んだ翌朝のすがすがしい心持に相應した、日ざしの暖い靑空の日曜だつた。冬の日とは思へないうら藪の雜木の中で、小鳥の騷ぐのを聞きながら、自分の可愛がつてゐる十五疋の金魚の、瓢簞池に泳ぐのを、玻璃(ガラス)戸越しに見て暮らさうとおもひながら、いけづうづうしい我が頰髯を剃つてゐた。

ところへ心なき訪問者がやつて來た。名刺の名前は知らない人だつたが、取次が主人は居ると云つてしまつたので、逢はなければならなかつた。

年の頃は主人とおつつかつつの、髮の毛のおそろしく薄い、廣い額のてかてかしたのが、縞の着物、縞の羽織、セルの袴といふこしらへで、おそろしく叮嚀に頭を下げた。

「先生でいらつしやいますか。かねがねお作を拜見して居りまして、一度お目にかゝり度いと……

……」

何時迄たつても此方には口を開かせさうもない雄辯なのが、言葉の句切り句切りに揉手をしたり、頭を下げたりして、かねがね作品を愛讀し、一度あひ度いと思つたといふ心持を、極めて冗長にしやべるのであつた。

「此奴は時代錯誤の文學青年だな。」

と自分は心中もてあましながら、窓の外の日曜日和に心を誘はれてゐた。

「外の先生方にも御目にかゝつた事も御座いますし、お目にもかゝり度いとも存じて居りますのですが、先生が平生實業方面に御活動で、しかも文藝の方にも御力を御盡しになつていらつしやるところが、手前共矢張りその實業の方に携はつて居ります者には、おなつかしいと申しては失禮で御座いませうが、まづお手本になる方かと存じまして……」

「つまり意氣地が無いものですから、會社勤もして居るやうなわけなんです。」

自分は多少苦り切つて、相手の言葉を中斷した。

「いや、とんでもない。」

客は一寸碎けた調子を見せて愛嬌笑をしたが、又叮嚀に繰返して推稱して呉れるのであつた。

「お會社の方も御繁忙で御座いませう。只今は專務といふやうな事で。」

「どう致しまして。小僧です。」

自分は驚いて打消した。お世辭の積りであらう、相手は此方を重役扱ひにしておだてようといふのであつた。

何處迄行つてもほめて吳れるばかりで、何の用事も無いらしいのが、忽ち自分を苛々させた。しきりにほめる合間には、彼が文學愛好者で、商賣のひまを盜んでは、小說本を讀んでゐる事を、さも自慢さうに吹聽したが、さりとて別段文藝上の話に立入る事も無く、且それ程藝術にかゝはる知識も了解も無さゝうな人物だつた。

約一時間、彼は同じほめ言葉を繰返した擧句に、膝の側に置いてゐた風呂敷包を解いて、

「まことに厚かましいお願ひで御座いますが、是非とも先生の御染筆を願ひ度いので……」

といひながら、短冊を取出した。

「駄目です。私は極端に字が下手ですから、それ丈は許して下さい。」

「まあさうおつしやらないで、紀念の爲めに一枚でも二枚でも結構で御座いますから、一寸御認め下さいますやうに。」

「駄目です。第一私の家には硯もありません。」

「御冗談を。えへ……」

「ほんとなんです。」

自分は癇癪が起きて愈々言葉が少くなつた。ひとつには自分の最も恥ぢてゐる悪筆に対する自棄の氣持もあつた。但し硯の無いのはほんとなのだ。硯と筆を憎み且怖れる程、乍残念並びもない悪筆なのである。

「全く厚かましいお願ひでは御座いますが、枉げて御承知願ひ度いのでして……」

しつつこくせがみながら、彼は床の間の一軸に横目をつかつてゐた。

「えゝこれはあの泉鏡花先生ので御座いますか。成程、左様で御座いますな。」

わざわざゐずまゐを直して、改つた顔付で見上げた。

まな板に朝日さすなり芹薺

床の間があつてかけ物が無いので、泉先生にせがむで書いて頂いたものである。成程、自分も人様には書いて貰つたのだつたとは思つたが、字のうまい人に頼むのは、字の拙い者に頼むのとは違ふとおもひかへして、心中獨りで自分を辯護した。

「鏡花先生とは御昵懇でいらつしやいますので、はゝあ成程」

非道く感心した様子を見せて、その一軸を見上げ見下した。

「えゝ甚だ相濟みませんが、短册は大分御座いますから、先生が御認め下さいまして、餘の分には鏡花先生、その他御知合の先生方に、先生からひとつ手前の爲めに御依賴は願へませんで御座いませうか。漱石先生の物も御所持では御座いますまいか。」

自分は驚いてその男の顏を見守つた。彼は夏目漱石先生の作品の愛讀者で、是非ともその眞筆を手に入れ度い事、しかもその眞筆は値が出た事、僞筆がしきりに賣買される事を、更に一層雄辯に話した。

結局彼は、いくらいやだと斷つても、只管「御冗談で」を繰返して、短册を殘して歸る事になつた。玄關迄送つて出ると、其處で更に大きな風呂敷包を解いて、そんな物は入らないといふのに、菓子折を置いて行つた。

「馬鹿ッ。」

白茶けた二重廻しの後姿を、忌々しく見送つた。

室にかへつて、短册と菓子の箱を疊の上に落すやうに置いたが、どうにもごふはらで我慢が出來なかつた。ふとしたいたづらが手傳つて、いきなりその菓子の箱を蹴飛ばした。輕く蹴飛ばし

た積りだつたが、意外に力がこもつて、はずみをくつて横飛びになつた紙箱の蓋がはづれ、紅黄白紫とりどりに毒々しい色が塗られた、森永製の飴や砂糖をかためたやつが、疊の上に散亂してしまつたと思つて、先づ足ではき集めてゐるところに、第二の訪問者が現れた。

今度のは一見して文學書生だつた。卽ち無闇に綿の厚ぼつたい、毛絲の紐のついた羽織で、インキの沁みた小倉の袴に置いた兩手の手首迄だぶだぶ長いメリヤスのシャツの汚れたのが、長く延して後にかきあげた頭髮ばかり油光りに光り、且淫猥な感じのする近視眼なのである。あまりに類型的な文學青年であつた。

向ひ合つて坐つたが、なかなか口を開かない。何か冥想してゐるやうな風をするのが、とても馬鹿々々しかつた。

「何か御用ですか。」

自分は、既に正午近くなつて來たので、著しくやけになつてゐた。日曜は日曜でも、午後は午前程樂しくない。晝の御飯を喰べると、早くも明日の事が考へられて長閑さを失ひ易い。貴重なる朝を、かうして無益に費す事が、癇癪筋にづきんづきん觸れた。

「實は此の原稿ですが、出版し度いのです。」

二十歳前後の青年は、懐からそれを出した。
「先日××先生のところへ持つて行つたのですが、貴方は近頃續けて三册も四册も本を出したから、その本屋に頼んで貰つたらよからうと云はれて來たのです。」
第一の客の馬鹿叮嚀に引きかへて、第二の客は禮儀が無さ過ぎた。
「あゝ三田通の本屋ですね。あれは嘘つきで駄目です。」
自分は最近引つかゝつて、持前のおせつかいから力を入れ過ぎ、かへつて悪がしこい本屋に馬鹿にされた、不愉快極まる經驗から、自然と言葉も荒かつた。
「第一さう云つては變ですけれど、無名の作家の本はなかなか引きうけませんよ。」
「しかし僕にはかなり自信の持てる作なんです。」
青年は昂然としていひ放つた。
「僕は此の頃の文壇のちひさな技巧の冴えをよろこぶ傾向には不滿足です。もつと自己を生かし切らなくてはいけないと思ひます。」
こいつは難物だぞと思ひながら、自分は此のちいつぽけなドンキ・ホウテを吹出し度い氣持で眺めた。

「そりや、作者自身は苦心の作だつたにしろ、最初は本屋だつて危つかしくて手が出せませんよ。いかに傑作でも、兎に角まあ雜誌にでも出して貰ふのですね。」
「雜誌ならば僕は『文章世界』の懸賞に當選した事があります。」
彼は誰しもその作品は讀んで知つてる筈だといふやうな顔付をしてゐた。
「成程ね。」
自分は返事も出來ないで中腹（ちゆつぱら）な聲を出した。
「兎に角一度讀んでくれませんか。その上でいゝところがあつたら本屋に話してくれればいいのです。尤も僕は先生とは作風が違ふけれど。」
青年はその原稿を此方に押して寄越した。大凡三百枚もあらうと思ふ長篇で「愛と鬪爭」といふ題だつた。
「『文章世界』で當選したのなら、田山さんにでもお願ひした方がいゝぢやありませんか。私はあんまり顔が廣くないから駄目ですよ。」
「いや、先生は藝術家としては僕とは稟質（テンペラメント）が違ふので、僕には實は喰ひ足りないのですが、人として大變義俠心のある方だと聞いたものですから……」

何といふ口のきゝ方だらうとあきれたが、又お笑草でない事もなかつた。
「藝術家としての水上瀧太郎と、人としての水上瀧太郎か。」
自分は皮肉な氣持で笑つて見せたが、先方には通じなかつた。
「それに僕は先生は卑怯だと思ふのです。二重生活をしてゐるのではないのですか。」
青年は如何にも藝術家の風上には置けないぞといつた調子で詰つた。
「私は左樣は思はない。會社に勤めてゐたつて、小說ばかり書いてゐたつて、生活が二重か二重でないかは別問題でせう。人間が生一本の心持を持たない限りは、みんな二重生活といふ可きで、職業の外形は問題外ですよ。」
些か自分を辯護する氣で論じたが、あまり雜誌などには書いてない論旨だから、勿論先方は飮込まなかつた。
「兎に角一度讀んでくれませんか。僕は充分自分を出し切つてゐると思ふのですが。」
又前に戾つていひ出した。
「だけども私は忙しくて、おいそれとは拜見出來ないのです。」
自分は面倒臭くなつて、その原稿を彼の方に押返した。

「いや。別段急ぎはしません。ひまの時に見て下さい。それが先輩の義務ではないでせうか。」
「冗談いつちやあいけない。」
自分は全く癇癪を起して、それつきり默つてしまつた。
「ではお預けして行きますから、讀んでみて下さい。」
青年は未練らしい樣子ながら、取付場がなくなつたので、歸支度をはじめた。
玄關に送り出して、瘦つぽちの肩の寒さうな後姿を、蹴飛ばしてやり度い氣持で見送つた。
「馬鹿ッ。」
口に出して罵つた時、女中部屋の時計が十二時を打つた。
「ちえつ、遂々(とうとう)今日の日曜も滅茶々々にされてしまつたのか。」
とがつかりする心の底から、己れを知らない二人の訪問者の忌々しさが、むらむらとこみあげて來た。手非道(てひど)く公然とあいつらの感情を害してやらうと、惡玉の根性が、茶目と手をつないで踊つてゐた。
直に短册を油紙で包み、原稿を大きな狀袋に入れて、郵便で突返す事にした。
扨て郵便局迄持つて行かせて、少々大人氣(おとなげ)なかつたなと考へはしたものの、大事の大事の日曜

を、又しても苛々した氣分で暮さなければならなくなつた不愉快を思へば、寧ろそのけちくさい腹いせも、是認すべき事だと思つた。

日曜の朝の樂しさを知らない者には、日曜の朝の痼癪を、眞實了解する事は出來ないであらう。

さう考へながら、尙痼癪の起るまにまに、土曜の夜の酒には似もつかぬ、腸を刺すウヰスキイを戸棚から引擦り出して、なみなみとコツプの滿を引いた。

「馬鹿。馬鹿ッ。」（大正十年一月二十四日）

――「人間」大正十年二月號

「新樹」雜感

里見君が芝居を書いたら、どんな物を書くだらう――とは、人々の間に、かなり無責任な想像を、永くほしいままにさせた事であつた。

「君は芝居を書いて見ようとは思ひませんか。」

「書き度いとは思つてるんですがね。」

御當人に聞くと、それがせつぱつまつた程書き度いとは見えない様子で、書かうと思つても、芝居は難かしいものですよといふ謙讓を仄かに見せた位の態度で答へるのであつた。

自分の見る里見君は、如何なる方面に出現しても、まごまごして居る人間の間をすりぬけて、鮮かな姿を見せないでは止まない人である。嚢中の錐である。子供の時分、鎌倉の夏の海邊で、眞黑な體に赤褌を締めた小粒なのが、同年配の仲間をぬきん出て、大人に伍して負けない悧巧な

口をきき、隙の無いいたづらの技倆を振つた物だつた。その當時から、むつつりして居た自分の如きは、心中甚だ感嘆した。その印象が今もある。

自分は、度々公言するやうに、つくづく芝居にはあきてしまつた。脚本にもあきた。役者にもあきた。興行政策にもあきた。芝居小屋の内外の空氣にもあきた。わからずやの揃つてゐる見物にはあき果てた。里見君が其の他の人達と共に、十年、二十年、或はもつと――今に至る迄年中芝居に出入してゐるのを見ると、今に何か爲出かすに違ひ無いと思ふ外には是認出來無い位だつた。彼の人が、何時迄もおめおめ腕組をして芝居を見て居る筈が無い。

永年、喧嘩をしながらくつついて居た菊五郎を見捨て、市村座を去つた吉右衛門の進退は、其の動機が何であらうと、誰に理があり誰に非があらうと、そんな事には頓着無く、義理の値うちの下落と共に、著しく事を好む今の世の中では、間違ひ無く人氣を煽る事だつた。その吉右衛門の旗擧げに、當今文壇に最も花々しい活動――創作に於ても、文壇政治に於ても――をして居る里見君を引張り込んだのは賢明だつた。誰の仕事か知らないが、思はず知らず、やつたなと思つた。里見君にしても、處女戯曲の上演に、うつてつけの機會を捕へたと云つても失禮ではあるまい。

その瞬間に、自分には、此の場合里見君の擇ぶ可き二つの傾向を想像する事が出來た。人をびつくりさせる事の好きな、工風やの、いたづらつ子の里見君が飛び出すか、或は又、わけ知りの、世間馴れた、交際上手の里見君が現れるか、どつちかである。誰しもあつといふ程の、新手を見せるだらうと想像するのも極めて自然であると同時に、興行本位の芝居者から、素人ばなれがして居るとほめられさうな「お芝居」のうでを振ふだらうと考へるのも無理では無い。何れにしても、極めて常識的な、世馴れた人であり——或は世馴れた人と呼ばれ度い趣味を多分に持つ作者の事だから、見物の欠伸を恐れる事は確かである。あきさせないといふ事が、戯曲の創作の際に於て、第一に念頭に置かれたに違ひ無い。あの囊中の錐が、たとへ見物はぼんくらなりとはいへ、此の新しい腕だめしに、甘んじて彼等の嘲笑を身に浴びる事は堪へ難いであらう。其處に里見君の強味もあれば、同時に弱味もあると云へる。

さまざまの想像が、充分自分を樂しませた。見物の日の來る事が待たれた。芝居にあきたと云ひながら、流石に新しい刺戟は欲しかつたのである。

「醍醐の春」といふ月郊好みの、姫宮樣の通學して居る女學校の卒業式の餘興の活人畫と同一趣味の、あかるい電氣の光の中を、ちらちら櫻の散りかかるおきまりの幕切を持つ一幕に、退屈の

あげくの痼癪がむらむらして來た後で、待ちかまへた「新樹」の舞臺が開いた。
箱根山中見晴し茶屋の場で、鶯の聲を聞かせ、東京へ奉公に行く娘と其のおやぢ、寫眞機を持つ中學生のしだし――それ丈で、既に里見君がお芝居の道をいゝ氣持で滑走して居る事がわかつた。實に、完全に「お芝居」の手順を、平氣で踏襲した。ありきたりの機智とをかしみを取り入れ、之に多少の鋭さを加へ、且又無駄をかり込んで、小憎らしい程運びのついたものにした。徹頭徹尾、吉右衛門一派によつて上演されるものだといふ意識に執着して、他の野心には驅られなかつた。若しも其處に、何か新しい内容を求めるならば、里見君の小說の特徵の一である感覺描寫の外には無い。
里見君が覘つた通り、事件の展開の巧妙なのと、昔から見馴れた芝居の機智に追從する容易さに、所謂新しい芝居につきものの退屈を知らずに、一般の見物はわけも無く喝釆した。自分の如きも、此の一幕の見世場で、作者の創作の感興の最も強かつたらうと思はれる、盲人の感覺の喜悅を描いた場面で、その感覺の誇張がもたらす破綻を恐れて手に汗を握つたばかり、最後迄緊張した昂奮を持續して安心した一人である。
盛澤山の芝居の、なほいくつも並んで居るのを殘して劇場を出た時、一番強く自分を悅ばせ

たものは、まだ暮れ切らない初夏の空の鮮かな色彩と、爽かな水邊の空氣であつた。卽ち「新樹」に描かれた肉體の感覺が、平生よりも一層深く、健康を意識させてくれたのである。

「新樹」は作者が計畫した丈の効果を收めた。あんな筈では無かつたと悔む餘地のないものであつた。とはいへ、作者から見ても、決して無條件に誇る可き作品では無い。甚だ矛盾した言葉のやうであるが、自分の云はうとするのは、今度の場合、作者は、否でも應でも、自分の力で人を引擦つて來る努力をするよりも、受ける芝居を書かうといふ意圖——一座の役者の顏ぶれ、役者の現在及び將來の立場、就中始めて新しい試みをする役者の希望を挫かない爲めの考慮、其他々々——の方が強く、且細かく動いたといふのである。從つて、此の意味の成功を充分だと認めると同時に、量に於ても、質に於ても、喰ひ足り無い事は否定出來無い。

里見君の頭には、中村吉右衞門の爲めの芝居だといふ事が、第一の問題として根を張つて居たに違ひ無い。菊五郎のやうな、間口の廣い、あらゆる世態人情を、表面的には客觀的描寫で樂に現し得る役者と違つて、吉右衞門は寧ろ變化に乏しい方である。如何なる役柄をも、自分の主觀的熱情に融かし込んで、彼自身に特有の悲痛な色彩で塗りつぶす外には、存外動きの無い役者である。いひ得べくんば、狹くて深いといふのであらう。卽ち作者は巧みに其の柄にはめなければ

ならない。さうして此の場合、片輪の主人公を撰んだのは、稍月並ではあるけれども、流石にぬけ目の無い遣口と云はなければならない。

由來、舞臺の上に於て、易々と同情と涙を購ひ得るものは、片輪と子供に限るのである。役者もやりいゝであらう。作者も書きいゝであらう。話が横道にそれるけれど、自分の机の抽出にぎつしりたまつた書きかけの原稿の中にも、いつかは完成しようと思つてゐる戯曲の主人公として、盲目の短銃（ピストル）の名人と、跛の子供の撰ばれたものとがある。里見君が、子持のめくらで、しかも女房に逃げられた藝術家といふ、三拍子揃つた人間を引張つて來たのは、受ける要素を完備せしむる第一着手といふ可きである。

乍併、默つてゐても充分同情を引く主人公を、そのままめそめそ泣かしたのでは、作者は自己を沒却し過ぎる。脚本は讀む爲めのものではない。上演さる可きものであると里見君は說いて居るが、同時に又理想の觀客を相手にしず、現在の見物を目安に置いて、その程度の理解に苦しみのない迄通俗にはしたものゝ、むざむざ腕を組んでやに下つては居られ無い。自分自身の藝術的慾望をも滿足させ、危く甘つたるくなりさうなところに締めくゝりをつけ、清新の感を深からしめる爲めに新手を用ゐなければならない。卽ち感覺描寫である。

女房には驅落され、目は見えず、繪はかけず、暗い生涯に落ちてしまつた主人公は肚の中に壁畫を描く事と、指の尖で物を見る外に樂しみが無くなつた。櫻の若木を抱いては、滋養分を吸ひあげて、ぐんぐん發育して行く命を感じ、木の葉の柔かさに頰擦りし、菫の花の微妙なる手觸に歡喜し、草土手に全身をもたせかけて其の肌觸りを悦ぶ――盲目の人に特有の鋭い觸覺をたゝみかけて描出した處に、始めて新しい盲人の描寫が、舞臺の上に於てなされたのである。此の一點に於て、囊中の錐は、完全に頭を出して光つた。盲目の子持で、女房に驅落された三拍子揃つた陳腐な主人公が、活々として動き出した。古來盲人の執念を捕へ、寂寞を描き、をかしさを寫し、片輪根性を見せ――さまざまの型を提供したが、近代藝術的の官能を以て盲人を舞臺に適確にいかしたのは、里見君の功と云ふ可きである。「新樹」の生命は此處にあつた。あく迄も「お芝居」を見せながら、鮮明に新味を加へた事が、工風に終始する此の作者の興味であつた。殆ど後はどうでもいゝのだ。第一場なんかは無くてもいゝ。しだしなんぞは邪魔である。もとの女房がその男と一緒に、現れようが現れまいが同じ事だ。子供なんか怪我をしたつてしなくたつて構はない。櫻の幹と、菫の花と、草土手さへあれば充分である。之等の景物を除いてしまへば、たちどころに里見君得意の短篇小說が出來上る。戲曲「新樹」が、前後二場、たつぷりお芝居を見せながら、

尙且つ短篇小說の味を脫しないのは、卽ち此の故であらう。

けれども、その眼目の、盲目の畫家が、櫻の幹を抱き、木の葉を頰邊に擦りつけ、土手を撫で廻す場面は、實のところ少々やり過ぎた。それが形となつて現はれた時、些かくすぐつたかつた。覘つたなといふやうな、見透してやつた氣持を止め兼ねた。あの吉右衞門の盲畫家が、若木の幹に抱きついて歡喜し、草土手にへばりつくやうな姿をして狂喜のうなり聲を發した時は、正にこれ動植物や土に對して、怪しかる所業に及ばんとするものの如くに見えたのである。

子供の怪我をする處は全く無理だつた。恐らくは作者は無理と承知しながら、そんな事は些細な事として頓着無く運んだのであらう。さうして此處にもう一つ新しい處を見せて、きぬ子のヒステリイ性の激情の發作を隨分有效に持出した。從來の芝居で行けば、きぬ子は本心から悔悟し、全く夫と子供のそばに歸る心で謝罪する段取りになるのである。心理描寫を事とする里見君は、流石に心にくいやり口に出た。

作者としての細かい注文を、自分自身舞臺監督として、或程度迄行屆かせた。人間の出し入れ、せりふの受け渡し、何から何迄里見好みだつた。かうすれば見物は喜ぶ。かうすれば笑ふ。かうすれば驚くと、悉皆承知し切つて居るのだ。見晴しの茶屋の場が廻ると、遠く自動車の警笛と機

鬮の響を聞かせ、段々麓に近づく心持で、前の場の田舎者の親子が坂道を下りて來るところは受けた。ただし時には、あんまり樂々と見物を吞み込み過ぎて、ひとつ此處いらで笑はしてやらうかしらと云つた調子で、迷惑ないたづらを用ゐた場合もある。能世ときぬ子が、茶店を出ようとして誤つて倒した洋傘に兩方から手を出し、兩方ともに同時にひつこめるしぐさを、二度迄も繰返へさせたのなぞは、最も甚しい例である。

子供の動作と心持を、誰よりもよく知つて居る子煩惱の作者は、子役のしぐさについて、細かく敎へ込んだに違ひ無い。可愛らしく上手に出來た又五郞の子供の、ちよこちよこと驅出して來た姿にも、里見君の注意があらはれてゐた。幕切れの泣き方には敬服した。杉林をこめて夕靄の立ちかかる坂道に立ちつくす父親の腰に縋り付いて、てれかくしと、ほんものと、入りまじつた心持をはつきりさせて、作者のおもふがまゝに子役は泣いた。小面憎い作者のうでだつた。

吉右衞門は矢張りうまかつた。盲目の畫家になる役者が下手だつたら、此の芝居は到底見られない事は、誰よりも里見君が熟知してゐるであらう。持前の、親譲りのからだにこびり付いてしまつた不愉快な癖は別として、よくぞ片輪を撰びたると感服する程吉右衞門にははまつてゐた。但し肝心の感覺描寫のところよりも、しぐさの無いところの方が勝れてゐた。

要之「新樹」は、ありきたりの「お芝居」の手法を意識して踏襲し、特定の役者の特殊の場合の上演に、その特質を理解し、且つ持味をはぐくむ事を心がけ、しかも新鮮な感じを失はない戯曲として面白いものであつた。イブセン、トルストイ、ハウプトマンの偉大を說き、大なる目標を目ざして努力するのは結構だが、それと同時に、さまざまの種類の戯曲の特質を明かにして、之を味ふ事も必要である。上來述べた理由の下に、自分は「新樹」を面白く思つた。（大正十年六月十九日）

――「人間」大正十年七月號

新劇運動の回顧及び希望

——新潮の質問に答ふ——

問(一) 新劇運動の功勞者は誰か。

答(一) 小山內薰氏。

問(二) 最も印象の深かつた新劇。

答(二) 小山內薰氏の指揮監督したる自由劇場の拔群なりし事。其他の劇團のいゝ加減なりし事。

問(三) どんな俳優にどんな新劇をやらせて見たいか。

答(三) 小山內薰氏の指揮監督に絕對に服從する俳優をして小山內薰氏の選擇する戲曲をやらせて見たし。(大正十年九月十日)

——「新潮」大正十年十月號

麪麭と扇

前田正名氏が死んで男爵を授けられた。自分はあのおぢいさんに、麪麭と扇を貰つた事がある。明治四十五年の夏、時の帝が御重患で、國を擧げて御平癒を祈つてゐる頃、自分は高野山で小說を書いて居た。酒を飲み歩いて疲れた後だつたから、山上の靜かな朝夕は、涙の出る程嬉しかつた。淸々しい朝の空氣を呼吸し、更けた夜に佛法僧の聲を聽く身は、忽ちにして汚ならしい根性を洗ひ流したやうに思つた。小說はちつともはかどらなかつたが、持つて生れた感情過多症の爲めに、惱まされ續けた二十年間の、悔恨ばかりを伴ふ自分の淺ましい姿を、寂然としたお寺の一室に、明瞭に描き見る事が出來た。

何となく、自分の身内を流れる血液さへ、日に日に、澄んで來るやうな感じがあつた。しかもそれは、主として精進料理の効果のやうにも考へられた。酒のみの癖に、しつつこい物の好きな

父の嗜好から、平生肉類を多く喰べてゐたが、それが此の頃の自分を悩ます妄念を培ふものだとも思つてゐたので、山に來て、新鮮な野菜ばかりを膳の上に見る事が、甚だ有意義に考へられた。小坊主のお酌で、般若湯を頂きながら、茄子の紫を愛し、胡瓜の緑を讃美した。二日三日の間、感激癖のある自分は、一生山を下りない事さへ、見事に空想する事が出來た。

けれども、なさけない事には、あらゆる自分の行爲を滑稽化しつくさなくては止まない、あきつぽい根性が、此の感激を手ひどくうらぎり始めた。外でも無い、矢張り喰物の慾に悩まされたのだ。涎を垂らし、自分の糞尿で自分の體を汚してのそのそしてゐるけだものの肉や、煮られたり燒かれたりして皿の上に往生しながら、その肉をつつつく人間の顔を、白い眼で睨んでゐる魚が、夢に迄あらはれて來るのだつた。

二週間の後、自分は書きかけの小説を懐にして、血のしたゝるビイフ・ステエキや、天ぷら、鰻のやうな濃厚な喰物にあこがれて、逃げ出すやうに山を下つた。

行く先は、九州の戸畑にゐる姉と、長崎にゐる兄をたづね、それから五島天草に渡らうといふのだつた。大阪に着いて、下關行の汽車の出る迄に、二時間ばかり餘裕があつた。梅田の驛に鞄を預け、その近くの小料理屋に上り込んだ。何よりも先に、數日間かつゑてゐた喰意地を、滿足

させ度かつたのだ。
當時、自分は大阪の案内は皆目知らなかつたので、出たらめに飛び込んだのだが、勿論立派な料理屋ではなかつた。二室つゞきの二階のうら窓から、物干に干してある浴衣なぞが、あからさまに見えた。たぶん、曾根崎新地の近所だらうとは、只今想像するのであるが、十年たつて、大阪住居の身となつた時、心當りの町筋を歩いて見たけれど、矢張り見當はつかなかつた。
何を喰べてもうまかつた。女中の平べつたい顏に、さげすむ色が浮びはしないかと邪推しないではゐられない程、自分はがつがつ喰つた。汽車の出る時間迄、無理にも動き度くないと思つたから、酒も隨分飲んだ。耳馴れない上方辯で女中に話しかけられるのを、うるさく思ひながらも、陶然として睡くなつて來た。
突然、梯子段に亂れた足音が聞えた。――と思ふ間もなかつた。
「こらツ、干物を始末せんか。無禮者め。」
おそろしく力のある聲で怒鳴つたので、吃驚して見ると、葭戸でしきつた次の室に、新來の客が立ちはだかつてゐた。頑丈な體格の老人で、日に燒けた胸をはだけ、引擦る程袴のずるつこけた姿が、醉拂ひに違ひ無かつた。狼狽てて女中が干物を取込んでゐるのを尻目に見ながら、食臺

の側にどしんと腰を下して、葭戸越に、こつちをじつと睨んでゐた。
「貴様のふんどしだらう。けがらはしい。」
干物をかゝへて階下に逃げて行く女中の背中に、もう一度一喝して、からから笑つた。
暫時して、同じ女中が上つて來て、
「お誂は何に致しませうか。」
と叮嚀にきいたが、
「なんでもえゝ。」
と怒鳴りつけ、
「暑い、暑い。」
といひながら、袴をまくつて、團扇であぐらを煽ぎながら、矢張り此方の座敷を睨んでゐた。
「暑い。暑い。」
聞えよがしに繰返してゐたが、何とも受けてやらないので、苛々したらしく、舌打ちしながら立上ると、いきなり手荒く葭戸をあけた。
「どうだ、此の方がお互に涼しからう。」

と口を切つた。四角張つた顔に、あらい髯の生えた、鋭い眼付の老人だつた。
料理が來ると、箸で刺身をつまみ上げて鼻のさきに持つて行つたが、ふんふんとわざとらしく嗅いだ上で、
「臭い。こんなものが喰へるか。」
といひながら、皿には戻さずに、食臺の上に叩きつけた。
「まあ、新しいので御座いますが。」
女中はしかめ面をしてつぶやいたが、
「いゝや、いかん。」
と一言の下に拒けて、手酌の酒をぐぐと飲んだ。手がつけられないので、女中はお銚子のおかはりを取りに行くやうな風で、階下に下りて行つてしまつた。
「おい、貴公は何者だ。」
老人は自分の方に話を向けて來た。
「見るところ袴を穿いとるから書生だらう。わしは書生が大好きだ。一緒に飲まう。
ふらふら立上つて、やつて來た。

「酒だ、酒だ。」

手を叩いて女中を呼んで、ひつたくつて、酌いだ。半分はそこいらに溢れてしまつた。

「どうだ、ひとつ唄を聽かせてやらう。」

女中にむかつて、

指にうけたる刀傷

股にうけたる鐵砲傷

と喇叭節の節でうたひながら、指さきの刀痕と、袴をまくりあげて、太股の鐵砲傷を、自分にも見ろといふ風で、指さして見せた。

愛想のよくない自分の態度が、老人を怒らせはしないかと心配してゐる女中が、

「まあ、戰にいらつしやつたんですよ。」

と目まぜで注意するので、

「どちらの戰爭にお出になつたのです。」

ときいてやつた。

「どこもかしこもぢや。」

老人は昂然として、既にしなびた太股をさすつた。
「どうだ、盃をやらうか。」
飲干したのをぐつとさしつけて來た。
「もう頂きません。大分飲みました。その上私は盃のやりとりは好みません。」
少し反抗的の氣分になつてゐたので、自分ははつきり斷つてしまつた。
「なに、わしの盃を貰はん。」
怖ろしい顔をして睨んだが、思ひかへして、豪傑笑をした。
「貴樣は面白い奴ぢや。氣に入つた。」
ぐらぐらする首を据ゑて、又どくどく酌いで飲んだ。
ふと袂をさぐつて、
「手巾を忘れた。」
と獨語したので、女中が氣を利かして、手拭をしぼつて持つて來た。
「いかん、いかん。一度たりとも他の人間の使うた手拭が用ゐられるか。馬鹿ッ。」
「でも綺麗なんで御座いますよ。」

女中はそれを拾ひあげて、階下から十三四の小婢を呼んで使にやつた。靑しよびれた小女は、
「いかん。無禮だ。」
いきなり竹籠のまゝ蹴飛ばした。
「買うて來い。」
云ふかと思ふと、袂から蟇口を出して、五十錢銀貨を疊の上に投げた。
女中はそれを拾ひあげて、階下から十三四の小婢を呼んで使にやつた。靑しよびれた小女は、
出て行つたかと思ふと、直ぐに歸つて來た。うすつぺらな安手巾と一緒に釣錢をさし出すと、老
人は手巾で油のぎらぎら浮き出した顏を撫でながら、何時迄も釣錢を見詰めてゐた。
「五錢で御座います。」
小婢はおそるおそる、今にも叱られるのを豫期した調子で云つた。
「何、五錢？」
「はい、たしかに五錢で御座います。」
小婢は既に唇を震はしてゐた。
「五錢の手巾があるか。安い。」
と云つて、釣錢の中から白銅をひとつつまみ出して小婢の手に握らせ、十錢銀貨を年上の女中

に投げてやつた。

自分はそろそろ時間が氣になり出し、同時に此の老人のお相手がうるさくなつて來たが、先方はちつとも頓着なく、つかまへて放し度がらなかつた。

「わしは直ぐ此の近くの宿屋に居るのだが、こんなけちな料理屋などに來る人間では無い。今迄新地で飲んでゐたが、役人どものつきあひは倦きた。其處でこんなところにも來て見るのぢや。何處でも構はん。世の中の視察ぢや。」

段々舌はもつれて來た。何處に行くのかときくから、九州だと答へると、

「九州ときけばなつかしい。」

と芝居がかりで受けて、

「わしも今夜の九時半で熊本に行く。今度は東京の大隈に用事があつて出かけた歸りぢや。」

頗る得意だつたが、

「お前に伴を申しつける。今夜の汽車で連れて行つてやる。」

といひ出した。

自分は、折角だが切符ももう買つてあるし、戸畑の姉にも電報を打つたから、お伴は出來ない

と斷つた。
「お先きに失禮して出かけないと、乘遲れるかもしれませんから。」
さういつて出かける樣子を見せ、女中に勘定も頼んだ。
「左樣か。それでは強ひては勸めん。」
老人はおとなしく承知して、冷い酒をまだ飮んでゐたが、
「白扇を買うて來い。白い扇ぢや。」
急に女中を呼び上げていひつけた。何か書いて吳れる積りだな、何者だかわからないが字を書けば署名するだらうと、自分が考へてゐるうちに扇が來た。
老人は自分で墨をすりながら、
お前とわたしのそのなかは
と又しても喇叭節をうたひながら、おそろしくひねくれた字で、
相酌相親酒壹斗
と書いたが、書人不知として名前は出さなかつた。
「失禮ですがお名前を伺ひ度う御座います。」

といふと、

「何、名前？　そりやあいかん。わしは名のらん。しかし覺えて置け。わしはこんなけちな家に來る人間では無い。が書生が好きだ。壯年西鄕桐野と事を共にした男ぢやから大臣にはなられん。けれども書生を十數人も養うてやつた。その中から未來の大臣が出るのぢや。こんな家に來て見るのも、何處にどういふ見込みのある人間が居るか探してゐるのぢや。それ故一々名のつてゐては限りが無い。そちらの名もきかんから、わしの名も云はん。」

何時の間にか自分の一生を考へ併せたのであらう、言葉もしんみりして來た。

「しかし先日近江の宿で、こんな事もあつた。宿の婆さんがいふ事には、貴方様は先の知事樣ではないか、見覺えがあるといふ。わしは、いゝや違ふと答へて置いたが、あいらはよく覺えとるものぢや。だが、わしは斷じて名のらんよ。お前は雜誌の口繪か何かで、わしの寫眞を見た事はなかつたか。」

眞四角な、怖い顏を突き出して來た。

「見た覺えがありません。」

自分は正直に答へた。

「よし。今にわかる時が來る。それ迄はわしは斷じて名のらん。しかし前の字がつくかもしれんぞ。」

さういつて、これでもわからないかといふ樣に目を据ゑた。

「それでは私は失禮します。」

自分はその扇を貰つて立たうとした。

「待て待て。」

老人は手をあげて止めて、

「わしがはなむけをしよう。――おい、麪麭を一斤買うて來い。」

と女中にいひつけた。

「さ、これで道中は大丈夫ぢや。」

といひながら、その食麪麭を半紙で包んで、その上に、東京早稻田鶴巻町某と走書きした。

「これがわしの息子ぢや。此處にさへ行けばお前の一身は何時でも引受けて吳れるぞ。」

あまりの亂筆で、書いて吳れた鶴巻町の息子といふ人の姓名は讀めなかつたが、自分はそれを受取つて最後の挨拶をした。

「わしも玄關先迄見送つてやらう。」
醉拂ひの足の危つかしいのが、後からくつついて下りて來ながら、
「お前は未來の大臣ぢや。お前は未來の大臣ぢや。」
と繰返して怒鳴つた。
帳場から出て來た女將らしいのも、出番で無い女中達も、往來の人も、びつくりして老人と自分を見た。自分は麪麭と扇を抱へて、停車場迄馳け出した。
暑苦しい夏の長旅に疲れ切つて、翌朝下の關に着き、海峽を渡つて九州のとつつきの姉の家に落ついた時、先づ第一に、大阪の驛近くの小料理屋で逢つた老人の話をした。此の話は、何よりも人々を笑はせた。麪麭は汽車の中の事で、味をつけて喰べる物も無かつたから、そのまゝ三等室の網棚の上に、新聞紙に包んで殘して來たが、扇は人々の手から手に渡つて、讀みにくい字で困らせた。
一體それは誰だらうといふ事が、みんなの推測をたのしませた。西鄕桐野と事を共にしたといふから薩摩人には違ひない。近江の宿の婆さんが、前の知事さんだと云つたのを肯定したから、役人の古手であらう。それ丈は確かだつたが、それ以上には誰にも見當がつかなかつた。名前に

前の字がつくかもしれないと云はれても、おもひ浮べる人物はあらはれて來なかつた。
夕方、湯治先の別府から歸つて來た姉の家の老夫婦にも、夜の食卓でその話が傳へられた。その時はもう自分で話す必要は無くなつてゐた。姉や姉の夫が、誰よりも一番面白がつて喋つて呉れた。
「それは前田正名だよ。」
聞終つた老人は、たちどころに指名した。
「前田に違ひ無い。醉拂つて威張つとるところは見えるやうだ。」
「前田さんなら、ひよつとすると、うちにもお寄りになるかもしれない。」
老夫人が相槌を打つた。
前田正名氏に違ひ無いといふ事に一決した。しかもその當人が、姉の家に立寄るかもしれないといふのだから、一同のよろこびは限りが無かつた。殊に自分にとつては、前田氏だといふ事が特別の興味だつた。自分は小學時代に、その子供と友達だつたのである。
四人の兄弟の、三番目の三介君が、自分と同級だつた。その三介君の事を、或敎師が五二さんと呼んだ事も記憶してゐた。級中の子供には、五二さんが何の事なのかわからなかつた。

三介君にきいても、知らないと云つてゐた。知つてゐて、羞かしがつてゐる樣子だつたが、兎に角知らないと云ふのだつた。馬鹿々々しい敎師の駄洒落か、名家の子に對する阿諛に違ひ無く、恰も前田氏が農工立國を稱へ、五二會の會長として、草鞋ばきで全國を遊說して步いた時代だつたのであらう。

たつた一度だつたが、二三人の友達と、三介君の家に遊びに行つた事もあつた。今は惜氣も無く埋められてしまつたが、內幸町のお堀の側だつた。前田氏は早く佛蘭西に學んだ人で、一生の中に度々外國へ出かけ、その頃も多分洋行中だつたかと思はれる。お父さんは何時も留守だといふ事を、三介君の口からきかされた記憶がある。警視廳の禁札の立つてゐるお堀の土手に、夜中に忍んで鯉を釣るといふ三介君の話が、ひとかどの冒險のやうに羨ましかつた事も覺えてゐる。家の中にも倦きて、日比谷の原に出かけた時、

「僕は五十錢持つてる。西洋料理をおごつてやらうか。」

と三介君の云つた事も忘れ無い。その時の自分にとつて、五十錢のお金は大金だつた。靑い色の毛絲の巾着を見せられた時は、相手は自分よりも一段上の大人のやうに思はれた。

それは一昔前の話だつた。幾年にも逢つた事の無い三介君の思ひ出を、自分は又姉の一家に話

してきかせた。息子の小學友達だと知つたら、老人はどんな態度を取つたらうといふ事が、又してもみんなの想像をたくましくするところだつた。

自分は人々と共に、今日こそは前田氏が來るか、明日こそは來るだらうと、樂しみにして待つてゐたが、遂に老人は來なかつた。

「東京に歸つたら、その御子息に是非お逢ひなさいよ。」

と姉はうるさい程勸め、自分も是非三介君にあひ、機會があつたらもう一度老人にも逢ひ度いと思つたが、その時は豫定の旅を續けて、長崎に行き天草に渡り、やがて東京に歸ると間も無く、亞米利加に行つてしまつた。

それつきり、今日に至る迄三介君にも廻りあはず、老人の消息も知らずに、又十年は過ぎてしまつた。前田正名氏は死んで男爵を授けられてしまつた。

自分は大阪の小料理屋の二階であつた時に、老人が既に男爵だつたならば、更にその一場が光彩のあるものだつたらうと想像する。

「わしは男爵ぢや。」

といふせりふを、草鞋をはいて全國を經廻つた老人の口からきき度かつた。それは自分の皮肉

では無い。明治初年の國事多端の秋に、國家をしよつて立つ意氣を持つてゐた幾多の人々の如く、滿腔の熱情と滿々たる稚氣とを兼備へた一種の風格を、更に色彩を豐富にして描き見んとする思慕の情に外ならないのである。(大正十年九月十六日)

——「三田文學」大正十年十月號

「御柱」雜感

上の有島さんが吉右衛門の爲めに芝居を書き、次の有島さんがその背景を描き、弟の里見さんが舞臺監督をするといふ事は、いかにも美しい情合につゝまれた藝術的の仕事であると同時に、人氣を煽る新聞的の出來事でもある。その噂を新聞で見た時、すぐれたる藝術家を三人迄も生んだ母人の感慨に迄想像を及ぼして、羨望に堪へなかつたと同時に、吉右衛門は又當てたなと思ふ微笑を禁じる事が出來なかつた。

自分は有島さんの作物を、あまり多く讀んでゐない。小說は「カインの末裔」「曉闇」其他一二篇しか知らない。戲曲はひとつも讀まず、ひとつも見ない。割合に多く讀んだのは雜誌新聞に出た感想文で、此の感想文と、世間の評判——人として又藝術家として——によつて、有島さんの人となり並びにその作品の特質を、自分は大體想像してゐたに過ぎ無い。さうして其の想像の形造

るところに從へば、矢張り世間の評判の如く、里見さんとは全く相反する傾向の藝術家及び人格と考へるのが當然だつた。換言すれば、有島さんが道德的人道主義者であれば、里見さんは遊蕩的享樂主義者であり、有島さんが人生派ならば、里見さんは藝術派であり、有島さんが善心ならば、里見さんは惡心だといふ風な觀方である。

もうひとつ附加へれば、里見さんは有島家の變種（かはりだね）だといふ感じが、しつつこく自分にはこびりついて居た。子供の時分の印象を賴れば、有島家の多數の御兄弟は、色の白い、目の細い、優しい相貌を共通に持つてゐる中に、たつた一人里見さんは、面づれのしたやうな有島家特有の額の外は、全く違つた顏つきだつた。殊に、近頃世間で美しいといふ評判の、寧ろ凄いやうな、その癖怖ろしく愛嬌のある眼の玉が、最も著しく變種の感をいだかせた。母方の姓であらう、苗字の違つてゐる事と合せて、自分は子供心に、里見さんは妾腹の子なのでは無いかと疑つた事さへある。尤も此の頃は、年を追つて、里見さんは兄さんに似て來るやうであるが、今日迄の半生の閱歷の異色ある事と共に、どうしても變種の感じは消えないのであつた。

さう考へてゐた自分にとつて、有島さんの戲曲の上演に、里見さんが舞臺監督をつとめるといふ事は、あまり配合（うつり）がよく思はれなかつた。以前にも、「死とその前後」の時に、舞臺監督をやつ

たとも聞いてゐたし、同じく傾向の違ふ武者小路實篤氏の戯曲にも骨を折つた事も知つてゐたが、尙且甘い物で酒を飲む、そぐはない心持を振捨てる事は出來なかつた。芝居を見る前の、此の不安に似た豫感は、ひとへに自分の有島さんを知らない事に歸すべきであつた。世評並に有島さん自身の、時折の感想文などに、あざむかれてゐた結果だつた。ところが十一月十二日、新富座で「御柱」を見た時、自分は、有島さんと里見さんは、同じお腹から出て來た兄弟だといふ事を痛感した。

　平俗に解釋すれば、「御柱」は名人かたぎを描いたものだと云ふ事が出來るかも知れない。新聞の劇評などは、大概此の程度の解釋だつた。けれども、實はさうでは無い。藝術の生命の尊さを力說したものなのである。藝術の世界の奧祕に探り入る事の出來た名人と、世俗の見榮や人氣を超絕する事の出來ない、ちひさい人間とを借りて、技藝の尊さをさし示さうとしたものである。その意氣に於て、藝術至上主義の香氣の漲りわたるべきものであつた。けれども、舞臺の印象は、役者の理解の程度が奧底迄行けなかつた爲めに、今日迄にいくつもあつた「名人かたぎの芝居」だと稱しても、とがめる事の出來ないものになつた。人氣――土間棧敷を賣切れば、卽ち自分の藝道は天晴れなものだと自惚れ易い役者にとつて、藝の眞實に一切を打込んだ偉大なる工人の生涯

も、片意地の所謂名人かたぎ以上には感得する事が出來なかつた。吉右衞門の解釋は其處で止つてゐた。他の役者に至つては尙更である。さうして此の免れ難い缺點が、「御柱」の持つ新味を消し、且つその規模をちひさくした。

加之、里見さんの、實際家好みが此の傾向を著しくした。舞臺裝置も――新聞紙傳ふるところの次の有島さんの工風になつたものでは無いらしく――寫實だつた。有島さんよりも細かい感觸を持つてゐる里見さんの解釋から、原本の荒削りに手順をつけ、味を加へる場合に、それが愈々寫實の道に進んで行つたのは自然である。同時に、有島さんの「御柱」の粗雜な描寫を滑らかにした一方に、力點を失つてしまつた感があつた。

元來里見さんは、ストライキングな事の大好きな人である。作者としても、人を驚かす事が好きである。世の中に珍しい事、ありさうも無い事を描く興味の絕間無く疼いてゐる作者である。しかし其の表現の形式に於ては、徹頭徹尾寫實である。ありさうも無い事を、ありさうに描かないでは承知しない。お話にしてうつちやつて置く事は出來ないのである。卽ち、その物語の筋が、表面はいかに特異な事柄であつても、その底に橫たはる人生及び人間の見方は、全く現實主義者のそれである。さういふ傾向を持つてゐる人であるから、自分自身の頭腦が考へ出し、自分自身

で組立てたもので無いものを解釋する場合には、形式の末、小道具のひとつにさへ、寫實を好む事は當然であらう。但し里見さんの寫實は、寫景の意味よりも一段廣いものである事を注意して置き度い。更に又他の一面では、既に傳統的に、不思議の感じを伴はないで受入れられるものは、いくらそれが日常生活とかけ離れてゐても、頓着無く寫し取る事を憚ら無い。卽ち舞臺裝置は、在來の舞臺上の寫實を一歩も出なくても恐らくは平氣であらう。役者の藝は、所謂舊劇の昔からの傳統的工風に則つても構はない。所謂新劇の定規を當てて見れば、たちどころに臭いと云はれさうな事さへ、押切つてやらせようといふのである。此の點に於ては、年三十にして、早くも自分の心持にぴつたりはまつた藝術表現の形式をつかんでしまつた里見さんには自信がある。曾て、小説を書いて「うま過ぎて惡いといふ法は無い」と主張した里見さんの心持の強さは、その論旨の是非を別として、首肯する事が出來る。

けれども、此の意味の里見さんの寫實主義と、傳統主義の結び付いた心持が、役者の爲めに害をなした事は爭へない。里見さんがいくらあせつても、氣を揉んでも、叱つても、賴んでも、里見さんが悟得したところ迄役者にはついて行けないに違ひ無い。「うま過ぎて惡いといふ法は無い」といふ言葉の意味が、文壇の多くの人にさへわからなかつた位だから、「芝居をして惡いとい

ふ法はない」といふ言葉も、當然誤られる筈である。いくら芝居をしたつて、いくらうま過ぎたつて、藝の眞實に觸れる事が出來れば生きた命が動き出すといふ事は、玆に註釋を加へても、わからない人にはわかるまい。

扨て此處迄來て、自分は前に述べた、有島さんの原本の粗野な力を失つたといふところに安んじて立歸らう。

自分にいはせれば、第一に舞臺裝置の細づくり過ぎるのが氣になつた。新富座の廣過ぎる舞臺に、里見さんの寫實好みが、有島さんの荒々しいところを全く消してしまつた。都會化されてしまつたのである。其の舞臺面に現れる人物も、すべて原本の粗野に別れて、中途半端になつてしまつた。しぐさの細かさが、有島さんの持味から、里見さんの持味に移つてしまつたのである。此の事は、里見さんの細かい心理解剖を持たない有島さんの芝居だといふ事を、舞臺監督は氣が付かなかつた。里見さんは、自分の芝居を扱ふ氣持で居たに違ひ無い。その氣持に夢中になつてしまつたに違ひ無い。此の點については、自分の知る限りに於て、小山內さんは群を拔いて偉い。

戲曲の特質を理解し、それを生かす爲めの演出の工風は比ぶ可き人を見出さない。しかし又一面からいへば、里見さんが自分自身のものゝ心持になつたといふ事にも無理の無い處がある。そ

れは、有島さんと里見さんが、同じお腹から出て來た結果に外ならない。

自分は上來、有島さんと里見さんの違ふところを、甚だ不明確ながら、斷片的に記した。しかし此の兄弟は、本質に於ては、人道主義者と享樂主義者でも無く、善心と惡心でも無く、矢張り兄弟だつた。二人を相反する人格と見誤らせたものは、單にその現在の欲求が、異なる方向をさし示してゐる爲めに過ぎないのである。各々が、三人の子弟の一人である。

先づ第一に、自分が意外に思つたのは、屢々繰返して、芝居の事はわからないから弟に任せてあると云はれる有島さんが、如何にも芝居馴れてゐる事であつた。芝居を知つてゐるといふ方が適當かも知れない。兎に角、現在はいざしらず、子供の時から芝居を見た人でなければわからないと思ふ技巧を、隨處に發見する事が出來る。殆ど臭い技巧さへ、至る處に見出せる。有島さんは芝居を知らないのでは無い。里見さんが何處迄も芝居道に入つて行かうとする時に、芝居を知らない人として自分自身を描き見る事に氣安さを感じて居られるのではないだらうか。役者は自分達が、所謂新しい芝居を手がける時に、無理にも振捨てようとつとめる傳統的の技巧を、作者が要求してゐるのに驚いたであらう。しかも「芝居をして惡いといふ法はない」と舞臺監督は云ふに違ひ無いから、愈々驚き迷つた事であらう。隨分古くさいせりふと、古くさい技巧が目障りに

なる場合もあつた。大工嘉助に釿で斬りつけようとする久和藏を平四郎がたしなめる時のしぐさやせりふは、その代表的のものだつた。吾々は敵討の芝居で、屢々あゝいふ技巧を見せられて來た。總ての人間の出入も、段取りが古かつた。

さういふ風に、お芝居の道を踏む一方には、怖ろしく無精練なせりふが多かつた。田舍言葉の拙さは、やむを得ないとしても、すべて一つの話から他の話へ移る時、續合ひといふものが無い。何をいひ出すのかわからない。都合のいゝやうに、やつつけてしまふのである。子供の描く自由畫の、胴體の無い人間に手足ばかりが四方に突出してゐるやうな、嘘があつた。諏訪明神の一節の如きは、その最なるものである。一々のセンテンスにしても、全くわけのわからないのがあつた。最も力の入る可きところで、又實際作者も役者も舞臺監督も、力を入れたに違ひ無い、平四郎が嘉助をさとす處「魔性の奴の可哀さわやれ」も、甚だぶつきら棒だつた。「手前でもねえ、お前でもねえ、お前樣は矢張りお前樣だ。」の如きは、何の事だか、ちつともわからない。さういふやつつけ仕事は目にあまる。

やつつけ仕事だといふ事は、戲曲の全體についても云ふ事が出來る。題材に感激して、これを表すのに念が入らな過ぎた。既に御宮も燒けてしまつたのに、しかも一生の仕事として丹精した

作品の大部分が灰になつたほとぼりもさめないうちに、久和藏が鑿を持つて仕事場で彫刻をしてゐるといふ事は考へられない。單に見物を倦きさせない爲めの、作者の嘘と見る外は無い。その久和藏が嘉助を害さうと、幾度と無く立ちかゝるしぐさに必然性の無い事と合せて考へれば、全然見た目を賑かにする意圖に出た事は爭はれない。

芝居を知らないと云ひながら、芝居を知つてゐる作者は、更に役者も知り盡してゐる。吉右衛門の爲めに書くといふ事丈でもわかつてゐるが、舞臺で見て、一層此の感を深くした。里見さんの「新樹」の場合と同じく、いかにすれば見物に受けるかと云ふ事を、有島さんは承知し切つてゐる。滿場の子女は、まんまと涙でおしろいを汚させられたのであつた。但しさういふ技巧を樂々と用ゐ過ぎて、子役を出して嘉助を泣落させたところなどは、段取りがつき過ぎてゐて面白くなかつた。

吉右衛門は完全な出來ではなかつた。最初に云つた通り、名人かたぎを脫し切れない事がいたでだつた。里見さんもあゝいふ事は好きらしいが、不愉快な音をさせてうがひ手水をつかふところなどは堪らなかつた。けれど、名人かたぎのいたでを負ひながらも、その範圍內では、矢張り見事に持堪へた。せりふ廻しのうまさが、原本のせりふの嘘を餘程救つた。吉之丞と七三郎は言

語道斷のまづさだつた。吉之丞はまだしも許せるとしても、七三郎に至つては役者ではない。お前樣は矢張り素人である。再び素人にかへつて、友達を相手に素人藝をほこる方が、當人並びに見物の爲めである。すべて此の人々には、戯曲の精神が飲込めなかつたのである。

時藏といふ役者は、大變上手になつた。お初の如き、上出來とはいへないが、どつちかといへば柄に無い役を、兎に角左程見苦しくなくかたづけた。鶴藏の役の嘉助は、殆ど平四郎の爲めの御都合次第で、口も利けば默つてもゐなくてはならない程木偶のやうに描かれてゐるもたれ役であるが、これもまづ見逃せるものと云つてゐゝ。要之、芝居は誰が見ても、一應面白いものに相違無く、有島さんも亦實際家である事を明かにした。

扨て芝居を見て、自分は役者の演技や、その出來榮には大した興味を感じなかつたが、今迄知らなかつた有島さんを、自分自身の解釋で、或點迄知る事が出來たやうな氣がして、其處に感興の大部分を見出した。臆測は屢々途方も無い間違に陷るが、自分の感想として述べる事が許されるならば、有島さんと里見さんは、本文の冒頭に述べたやうな世評の如く、相反したるひとゝなりでは無く、同一の發足點から、全然反對の東と西に馳け出して、ひた走りに走つてゐるうちに、何時の間にか同じ目的地に顔を合せたものゝ如く思はれる。「御柱」の命である、藝術の尊さ、達

人の心境は、豫々里見さんの說いて止まないところのものと別のものでは無い。たゞ里見さんが、藝に執して他を顧みない時に、有島さんは道德的欲求の強さに惱みながら、人類の愛についての信仰と疑を叫んで居られるのではないだらうか。一面から見れば、里見さんは旣に安住の地を見出した人で、有島さんは心的活動の多方面な丈、心の迷ひも多いのではないだらうか。何れにしても世間の女學生輩にはわからない、魔性のものゝ可哀さを知る人には違ひ無い。ほんものゝ里見さんが、善心でもあり惡心でもあるやうに、ほんものゝ有島さんも、亦善心でもあり惡心でもあるであらう。それが「御柱」の物語る、有島さんの印象である。――（大正十年十月二十九日）

「三田文學」大正十年十一月號

「第一の世界」雜感

英京倫敦のさかり場ピカデリ街を一寸入(はい)つた處に本屋の店の澤山並んで居る通がある。その中の一軒ヘンダアソンと云ふのは、所謂危險思想とか、新思想とか呼ばれる本專門の店であつた。――但し、玆に危險思想とは、主として社會主義、共產主義、虛無主義等を謂ひ、新思想とは目今、日本に於ける同一の言葉が、單に社會問題のみを意味する傾向のあるのに反して、近代藝術の作品をも含む廣い正しい意味に用ゐるのである。乍餘事記して置く――

外の店よりも澤山本があると云ふわけでも無く、いゝ本があると云ふ次第でも無い。たゞ其の類の本ばかりなのが特色で、目移りがしず、手輕に用事の濟む便利があつた。おやぢは、そんな風の本ばかりを賣るのを自慢にして居るやうな安つぽい男だつた。此の頃日本で流行(はや)るやつで、むやみに新思想の味方がつて喜ぶ輩なのである。

其處に一人の息子があつた。弱々しい、氣力の無い若者だつたが、彼は新しい藝術の憧憬者で、且つ戯曲の創作を志すものであつた。或時一緒に往來を散歩してゐたら、ふいに、

「貴方は小山内さんを知つて居ますか。」

と彼が云つた。知つてゐると答へると、若者は口を極めて小山内さんの偉大なる人物である所以を說き始めた。

第一、小山内さんは小說家で、詩人で、戯曲家で、評論家で、舞臺監督で、且つ日本自由劇場の創立者で、又泰西戯曲の飜譯者である。日本に、イブセンを紹介し、ウエデキンドを紹介し、チエホフを紹介し、ハウプトマンを紹介し、ゴルキイを紹介した、其の功績は、我が英吉利のグランビル・バアカアに比すべく、之に比して遙に偉いと云ふのが、此の邪氣の無い若者の言葉であつた。戯曲の創作に腐心しながら、どうしても中途で筆を捨てなければならなくなる非力病弱の彼は、何の疑ふところも無く、彼が崇拜するバアカアの今日迄に爲た仕事に比べて、小山内さんのした仕事に驚嘆したのであつた。誰に聞いた話か、ヘンダアソンのお得意の小泉信三君にでも聞いたのか、或は小山内さん自身に聞いたのか、彼は其の小山内さんの仕事の目錄を知つて、東方の島國に新しい藝術上の運動の華々しく起つて居る事を想像し、異國憧憬の念をもまじへて、

曾て小山內さんに逢つた日の事を感激の言葉で話した。

一人でいろんな仕事をすると云ふ事は、必ずしも其の人の偉いといふ證據にはならない。小山內さんの方がバアカアより偉いか、バアカアの方が小山內さんより偉いか、そんな事はどうでもいゝ。たゞ、小山內さんがいろんな仕事をしたと云ふ一事に至ては、ヘンダアソンの息子の如くわけもわかりもしない癖に驚嘆してゐるのは別として、誰人も否定する事は出來ないであらう。

まことに、小山內さんは詩人で、小說家で、戲曲家で、評論家で、舞臺監督で、日本自由劇場創設者で、飜譯家で、紹介者である。非常なる讀書家で、記憶力が強く、理解が早く細かく鋭い。森鷗外先生に次ぐ泰西藝術紹介事業の功勞者である。何時でも新しいものに憧れる若々しい熱情を持ち、かけつこをする子供の一本氣で眞直に驅け出す。吾々後輩の文學書生は、小山內さんの爲めに、どの位深く、よき藝術を見る目を開かれたかわからない。小山內さんの自由劇場が無かつたら、所謂新しい芝居の領土は、今日程開拓されなかつたに違ひ無い。坪內博士の指導された文藝協會が、新派劇の踏んだ道と平行して進み、その亞流が夥しく跋扈したに違ひない。自由劇場の仕事は、後世の藝術史家にとつて、最も意義あり興味ある問題であらう。

小山內さんが、現在の所謂新劇運動の第一の功勞者だといふ事は、爭ふ餘地の無い事である。

詳しくいへば、正しい意味に於ける舞臺監督は小山内さん以前には無かつた。小山内さんより廣く深い理解を持ち且つ實際のうでを持つてゐる演出指導者は、今日に至つても未だ外には一人も現れ無い。泰西戲曲の飜譯者としても、小山内さんの右に出る人はゐない。ゴルキイの「夜の宿」の飜譯の如きは戲曲飜譯の絶品である。戲曲、演技に對する批評――といふよりも、もつと一般的に、劇に關するあらゆる方面の知識の開拓に於ても、小山内さんは拔群である。劇壇の教育家である。要之劇界第一の功勞者は小山内さんだといふ事を繰返す外に言葉が無い。ヘンダアソンの息子の讃辭は嘘では無い。

けれども、戲曲作家としての小山内さんは、今日迄、曾て目覺しい作品を公にしなかつた。二三の飜案と、一二の書直し物の外には殆ど何も無いと言つてもいゝ位で、或は小山内さんを戲曲作家だと呼ぶ事は、當を失してゐるのかもしれない。前に並べた小山内さんの仕事の中から、此の一つ丈は捨てるのが、小山内さんに對する禮儀であるかもしれない。

然るに、その小山内さんが、自分の創作戲曲の第一のものとして「第一の世界」を發表した。之を讀み、之を舞臺の上に見た感想を、些か述べて見ようと思ふ。

何よりも先に、自分の自惚を白狀すれば、自分は戲曲を讀んで、その舞臺効果を判斷する鑑賞

力に於ては、かなり人に勝れてゐると一人できめて居た。さうして、「第一の世界」を「新演藝」で讀んだ時、戯曲的の材料として面白いものだと思ひながら、その書方に不滿を感じて、上演される場合にはさぞかしつまらないだらうと考へた。考へたばかりでは無い、おほつぴらに口に出して誰彼に話した。失敗の作だと云つた。流石の小山内さんも、矢張り戯曲家では無かつたなどゝきめ込んでしまつた。

ところが、十二月十二日萍會見物の日舞臺で之を見ると、自分の想像しなかつた面白さに感激し、自分の不明を恥ぢなければならなかつた。明白に云へば、自分がつまらないと思ひ、且つ人々にその事を公言した「第一の世界」が、實は、最近自分の見た芝居の中で、一番面白いものだつたのである。自分の第六感も餘程あやしい。

現在の世界を第一の世界とすれば、普通人の眼に見えない、此の世を離れた第二の世界に生きようとしてゐる學者の、二十年間閉ぢ籠つた城廓に、たまたま第一の世界の姿が侵入して來た或る時間の出來事を描いたのが此の戯曲である。讀んだ時には、その一定時間の出來事が、極めて表面的に描寫されてゐるばかりで、筋書を讀む氣持がした。タクシイ自動車で市中を見物して居る感じだつた。

由來小山内さんは勝れたるスタイリストである。短篇集「窓」「蝶」「笛」其他を讀めば、多種多様の小說の形式が、模範的に示されてゐる。里見好みもあれば、芥川好みもある。菊池式もあれば、久米式もある。平俗無器用鈍感を極めた作家の輩出した自然派全盛時代、平面描寫流行の第一の世界に於て、小山内さんが繼子扱ひされたのは寧ろ當然だつた。小山内さんにとつては、例之小說の材料甲乙丙は、各々その特殊の內容に從つて、何れも異なる形式を自ら持つてゐるのだ。その形式を適確に見出した時、「十三年」「ジブラルタルの貝」の如き名作が生れ、その形式を見誤つた時、作品の出來榮は面白くない事になる。小山内さんの小說の様式については、他日詳しく論じて見度いと思つてゐるが、戯曲「第一の世界」は、その形式が內容にそぐはない場合の一例として、最初自分を失望させたのであつた。

主人公の學者は、曾て、熱烈なる戀愛詩人だつたが、戀愛に失敗して、急に世間と隔絶した世界に住む事になつた。母親に死なれた最愛の娘と、孤兒院から拾つて來た透視の出來る書生と寢食を共にし、鷄の卵を生計の爲めに市に賣る外には、現世と交渉の無い人である。しかも第一の世界は、此のちいつぽけな家の周圍にひしひしと迫つて來る。娘の心は愛人の胸に抱かれようとして、父を離れて行く。娘がゐなくなると、その娘を戀してゐる書生も、先生を捨てて立去つて

了ふ。たゞ一人、自分の信じる本當の世界に取殘された學者の姿は寂寞でなければならない。

然るに讀後の感想は、その寂しさがなかつた。讀本としての戲曲には、通俗な世間的騷擾が著しく現はれて、學者のひととなり、その生涯を強く深く浮ばせる力を缺いてゐるやうに思はれた。小山内さんの短篇小說の或ものに屢々見る、都合のいゝやうに勝手に人間を動かし、便利な言葉文を喋らせる手法が、その內容をうら切つたのであつた。書生と娘の對話、新聞記者の會話などに、あまりに多く挿入されたをかしみの如き、昔の女とその夫の現れて來てからの萬事の唐突に狼狽しく運ばれる事の如き、何れも讀者の情緒を、なだらかに導いては吳れないのである。少くとも自分は、「第一の世界」の第一頁から最後迄、日の前に展開される世界を日光の光り輝く大空の下、大地の上の生ける出來事として受入れる事は出來なかつた。紙上の遊戲としか考へられなかつたのである。

それなのに、舞臺の上で見た時は、幕が上つた瞬間から、再びそれが下りる迄、自分は舞臺の上の人々――主人公の學者、その娘、書生、新聞記者、友人夫妻――と共に、同じ世界に呼吸する事が出來た。概念としてではなく、テエマとしてではなく、あの學者とその周圍を、自分の心を動かして感じる事が出來た。

簡素な舞臺の壁の色も氣持がよかつた。をかしい筈の新聞記者に對する作者の揶揄も、鋒鋩を現さない程度に響いた。便利專一で只管筋を運ぶ丈のやうに思はれた會話は、巧妙なる間(ま)をさしはさんで、至極自然に聞えた。一切の唐突な感じがすべて消えてしまつた。わざとらしく想像された學者の生活にも必然性があつた。不思議な感覺を持つ孤兒の書生にも同情する事が出來た。要するに、役々は、何れも人間として存在し、且つ各々が、自分の立場を主張し、肯定し得る程度迄、獨立した個性を有してゐた。從つてその人々の形造る人生は、充分此の世の中のものであつた。驚いた事には、筋書に過ぎないと考へた戲曲に、奪ふ可からざる現實性と、覆ふ可からざる詩情の豊かな事が、ハウプトマンの「寂しき人々」を想ひ出させたのである。

斯の如き氣持のいい芝居を見ようとは、幕あきの鈴(ベル)の音を聞く時迄、おもひも及ばなかつた。自分の豫想の全く當らなかつた不明を恥ぢると同時に、演出の成功に歡喜した。しかもなほ、如何(どう)にかして自分のめくらを辯護し度い負惜みも加つて、本で讀んだ時と、劇場で見た時の格段の相違を、適當の理由を見出して、都合よく是認し度いと思つた。結局、舞臺監督の秀拔なる技能に其の功を歸した。番組に書いてある通り小山內薰土方與志兩氏監督のものとすれば、御兩所の功勞である。小山內さんが十分の七監督し、土方さんが十分の三監督したとすれば七分三分だと

考へても差支へ無いやうにさへ思はれた。その逆に、土方さんが七分で、小山内さんが三分を事實とすれば、それでも差支へないやうに思はれた。要之、舞臺監督の功勞を、充分に認め、殆ど共の功勞にばかり稱讚を與へようとさへ自分の心持は傾いたのである。勿論小山内さんも稽古を指導監督されたであらうが、萬一土方さんに任せ切りにしてあつたとしても、任された方は、小山内さんの平生を尊重し、小山内さん自身も斯うするだらうと思はれる遣口を擇んだに違ひ無い。卽ち舞臺は完全に小山内さんの物であつた。

動作と會話の自然は、此の異常なる主題を持つ戯曲に現實性を與へた。どの人間も吾々が日常見る世の中から選ばれた人であつた。時にはそれがわざはひになりさうな、作者の冷嘲や諧謔も、非常な努力で柔げられてゐる。透視をする書生や、無智をさらけ出して本來は滑稽化されてゐる新聞記者さへ、兎角無意味に笑ひ度がる觀客を、笑はさなかつたのは適例である。會話のやりとりの端々にさへ、各々の注意と熱心がうかゞはれた。誰一人、役者は自分一人をいゝ子にはしなかつた。共處に、緊張とおちつきとが、同時に現れたのである。

あの、ぽきぽきした感じのする原本の會話が、柔軟に響いたのは、主として一句と一句のつゞき合を、自然に自然にと心がけた結果であらう。あの、人間の出入の唐突すぎる感じのする原本

のあわたゞしさは、適度の時間に對する考慮によつて救はれた。ト書の簡略な此の作を讀んで、あわたゞしく感じたのはぼんくらだと云はれゝばそれ迄であるが、試みに小山内さんの目の屆かない遠方で、誰かに舞臺監督をさせて見たら、必ずや今度の帝國劇場のものとは、一變した印象を與へるであらう。

役者もうまかつた。最も難役だと思はれる書生は、宗之助によつて非常な成功を納めた。誰よりも一番うまかつた。鋭過ぎる感覺を持つて生れたおびえ易さうな若者の、暗い陰影の絡はる顏つきもよかつた。此の人特有の、せりふ廻しのうまさは無類だつた。殆んど片輪に近い變てこに彎曲した生れつきの足さへお役に立つた。影のやうな足取りで、誰の足にも眞似の出來ない病的な線を描いて歩く姿は、後々迄忘れる事が出來ないであらう。意氣と景氣と演說と怒聲で人氣を煽る役者の多い時、此の人はほんたうの味を持つて居る。不思議な神經のうまさを持つてゐる。透視で手紙の内容を讀まうと身構へる處なぞは、外の者ならば吃度觀客を笑はせてしまふに違ひ無い。例之一座の猿之助にやらせて見るといゝ。大切(おほぎり)の馬鹿々々しい、あさはかな喜劇の秀吉の如く、觀客に媚びて、その安價に樂しい笑聲を湧立たせるにきまつてゐる。谷村夫婦が訪ねて來た事を主人に取次ぐ時の書生の神經の不安は、氣の毒な程感じられた。自分は突然涙ぐましくな

つた程だ。

新聞記者のうまいのにも敬服した。ふだんは餘りいゝ役者だとは思はない八百藏の、生れ變つたやうな出來榮には驚いた。生地のまゝだからうまい筈だと云ふ人もあるが、生地のまゝでゐるといふ事さへ、舞臺の上では難かしいのだ、まして、あの材料取りの質問の調子には、おろそかならぬ氣がこもつてゐた。八百藏に比して一層難有くなく、積極的に迷惑な役者の長十郎さへ見劣のしないうまさを見せた。荒次郎もうまかつた。寫眞班の桔梗もうまかつた。玆にも亦舞臺監督の指導の勝れてゐる事を明かに證明して呉れた。

此の人達に比べると、左團次は既に時代錯誤の感がある。自由劇場創立當時、あれ程新鮮に響いたせりふ廻しが、今日はもう通用しにくゝなつてゐる。詠嘆的な、句切の少い、息忙しい所は、矢張り、岡本綺堂氏の戯曲の人らしく思はれた。何といつていゝか——舞臺の上の英雄主義が、他の役者の民主々義と、水に油の感がある。その癖左團次でなかつたら、戯曲全體が、あれ程力強く、面白くは見られなかつたに違ひ無い。此處で思ひ合せるのは、自分は藝術の本道は現實主義にあると思ひながら、しかも寫實の平調に不滿を感じて、浪漫的の要素に憧憬する事が多いやうに、極めて自然な役者の藝風に安易を感じる一方、多少の誇張は伴つても、もつと手強く心を

動かすものを欲求する。左團次の芝居を見る時の心持が、即ちこれに似てゐるのである。

猿之助も惡くなかつた。隨分ばつの惡さうな役柄を、餘り氣取らずに、ずばずばとやつてのけた。新規募集の女優も、帝國劇場の女優のやうに、惡くすれた藝をしない丈助かつた。谷村の妻になつた人の、日本人には比類の無ささうな見事な體格、殊にその體格に比して、顏のちひさいのが立派な彫刻を見てゐるやうな快感を起させた。さぞかし美術家は裸にし度がるであらうと、餘計な事迄も考へた。同時に又、よくあるやつで、口をきかせると非道い訛があるのでは無いかといふ心配もあつた。此の心配が不幸にして的中すれば、今度の芝居で一言も物を云はせない事は、人の惡い作者のいたづらと見ても差支へあるまい。

何といつても、「第一の世界」は面白かつた。一面頗る弱氣で、他面甚だ強氣の小山内さんは、現在の世の中の紛糾に、ずるずる引擦られ捲き込まれて行く傾向を持ちながら、昔ながらに信仰の安住を求める心を失はない人である。その小山内さんの心のあらはれも、勿論「第一の世界」の中に見る事が出來る。小山内さんは、主人公の學者に充分同情する性行を持つてゐる。其處に此の戯曲の生命を見出し度い。何等かのテエマを持つてゐるらしい「第一の世界」といふ題よりも、もつと無意味らしい題をつけ度い程の心持もする。その味は寂しかつた。寂しい味をくみとる事

の出來なかつたのが、最初自分に不滿を起させた原因でなければならない。其の意味に於て、自分は甚だだらしの無い讀者だつた。けれども、此の寂しい味を充分に出した功勞は、矢張り舞臺監督に持つて行き度い。試みに再び三度戲曲を讀返し、舞臺で受けたなつかしい印象の助けをかりても、どうも、自分の最初の不滿にも、多少無理の無い氣持がする。言葉を換へていへば、戲曲そのものも、今にして思へば、本來いゝ物には違ひ無いのだが、若し演出の方法が一寸でも間違つたら、とり返しのつかないものになり易い程度の不用意な點を有してゐる事は爭へない。書上げをせかれて、あわてたやうな缺點がある。此の不備を完全に補充したのが、即ち舞臺監督の功だといふのである。

心強い事には、「第一の世界」を見ると、作者のうでに充分餘裕のある事が感じられる。戲曲構成の手法のいろんな樣式を學び盡してゐる小山内さんに、更に力強い制作衝動の起る事は、最も望ましい事である。其の時こそ、小山内さんは詩人で、小說家で、評論家で、舞臺監督で、日本自由劇場創設者で、劇壇の敎育者で、飜譯家で、且つ――誰に遠慮も無く――すぐれたる戲曲家だと呼ばる可きである。「第一の世界」はその第一步でなければならない。(大正十年十二月二十日)

――「三田文學」大正十一年一月號

鎌田榮吉先生

——讀賣新聞の質問に答ふ——

問（一）文相としての鎌田榮吉氏を如何に觀らるゝか。

答（一）現在の新聞、現在の政黨、現在の民衆を有する日本には立派過ぎると思ひます。

問（二）文相としての鎌田榮吉氏に何を求めらるゝか。

答（二）絶對に信頼す。特別に何も望むことはありません。（大正十一年六月十二日）

——「讀賣新聞」大正十一年六月十四日

赤坂の家

これも亦何時の間にか、記憶をたどる話になつてしまつた。勤務先の都合で、足掛三年居た大阪から、又東京に呼戻された當時の事である。

東京に歸れば、旅先で、乏しい月給と、たまに原稿を賣つて衣食の資とし、何時も小遣の豐富ならん事に想を廻らしながら、しかも年中懷寒く、時には義理を缺く事さへ止むを得なかつたのとはうつて變つて、當然父母の家に起臥し、何不自由なく暮らせるに違ひ無い。少くとも宿料を拂ふ心配は無いから、それ丈でも小遣は潤澤になる――さう考へる事が、東上の汽車の中迄も、大なる樂しみとして、それからそれと脈を引く想像の源となつた。

ところが、東京に歸ると直ぐに、母親に申渡されたのは、なるべく速かに親の家を立退く事であつた。部屋が無いといふ事と、三十を越した男は家には置かないといふのが理由だつた。

父は明治の世の中で働いた人間の一人で、人に勝れた人格も、識見も、實行力も持つて居た。巨富を獲ようとすれば樂々と得たであらう。大臣にならうとすれば存外譯無くなれたであらう。實際家で且つ學者だつた。誤算の無い生涯の終に近く、身後の心配――不肖の子供の事は別として――の無い生活を送つて居る事はいふ迄も無かつたが、その年の春、不慮の災難で大怪我をし、危く命丈は取止めたものの、其後本復のあても無く病臥して居る一方には、ありあまる子供の半分は、未だ學校に通つてゐるばかりでなく、先年妻に死なれた兄は、澤山の子供を引つれて同居してゐる。空部屋の無いといふのにも無理はなかつた。しかし割込んで割込め無い筈は無いのだが、第二の理由の、三十を越した男は家には置かないといふ、何時出來たのか知らない家憲の方が、より強き理由である事は、どうにも否定出來なかつた。正當ならば、嫁を貰つてから家を持たせるのが世間の順序らしいが、既に婚期を過ぎんとする迄獨身生活をして居る息子には、先づ家を持たせ、女房の必要缺く可からざる事を思ひ知らせてやらなくてはならないのである。子供を可愛がる親にとつて、男の子に嫁を迎へる事は、絶ち難き願望であり、同時に又愛情の發露の一例示であらう。母親が嫁を探す時の樂しみは、その點に於て甚しく受身の息子にも、想像に餘りある事であつた。

但しその際特定の女房の候補者も無く、一刻も早く家を持てといふ丈で、別段その費用を出して吳れるのでもなく、又今後の生計を補助して吳れるのでもないのだから、當時殊の外窮迫してゐた懐では、進んで借家を探す勇氣は、ちよつとは起きなかつた。止むを得なければ、再び下宿住居をする外に爲方がないとも思つてゐた。

然るに其の下宿住居も、母親の同じないところだつた。三十を越した男の子は家に置けないのと同じ理由で、三十を越した男の下宿住居は、許し難き事に屬したのである。

此の期に及んでは覺悟を極める外に爲方が無い。自分は人の顔を見る度に借家の世話を頼んだ。每日の勤に便利で、日當りがよくて、安い事――此の三箇條を別段の考慮も無く並べ立ててゐたが、前の二箇條が揃つてゐると、當然第三箇條ははづれるのであつた。結局は前の二つを犧牲にしても、後の一つを固守しなければならない運命だつた。

實をいふと、適當の家の見當らないのを口實にして、愚圖々々して居るうちには、母も我慢してうちに置いて吳れるだらうといふ腹もあつたが、事實は之をうら切つて、のべつに立退を強要する。如何しても年内には出なければいけないといふ申渡しを、十二月の初めに受けた。

たまたま或人の持つて來た話で、場所は赤坂の氷川神社の近所で、便利で、日當りがよくて――

——但しあんまり安くないが、目下新築中の貸家がある、暮の二十日頃には出來上る豫定だといふので、もう此の上は延ばせない氣もして來たし、目の前に年末賞與の入るあてもあるので、たちどころにそれときめてしまつた。

兎に角一應御覽なさいと云ふのを、何見ないでもよござんすと、眞實心底から思ふまゝを答へたが、如何しても見て貰はなくては氣が濟まないと、口を利いた人が承知しないので、惜しい日曜の朝をつぶして出かけた。

氷川神社を目あてにして行くと直ぐにわかつた。神社の鳥居を斜に見る、だらだら坂の中途の露地の角で、生新しい松や杉の、見て居るうちにやにやにを吹き出しさうな家が、今將に出來上らんとして、裏口の方から鉋や鋸の木肌に觸れる音が聞えて來た。形ばかりの門構で、それを入つて二三歩歩くと、玄關の格子戸に突當る程度だが、近所が立腐れのやうな長屋なので、おかげで目立たない事も無い二階家だつた。

暫時ぼんやり立つてゐると、内から若い夫婦が、セツタア種の犬の毛のやうに長く縮れた毛皮の厚ぼつたいのを猩々緋に染めたマントを着せた五才か六才の女の子を眞中に、兩方から手を引張つて出て來た。服裝人品から想像して、これが家主に違ひなかつた。帽子をとつて挨拶して、

知人の紹介で此の家を借り度いと申込んだのは自分だといふと、構はず庭口から入つて見て呉れといふのであつた。それには及びませんと云つたけれど、見て呉れないでは困るといふので、引連れられて、鉋屑のうづ高い庭に廻つた。四坪か五坪の赤土の庭に、山茶花と檜葉が三四本宛植ゑてあつて、その根方には熊笹が干乾びてつくばつて居た。二階二間の下が三間といふ、自分には充分な間數だつたが、それにしても家賃は法外に高かつた。えゝ爲方が無いと云つた形で、兎に角立退き場所を見付けた安心に、お禮を述べて大家さんに別れた。

愈々家がきまつたとなると、母の督促は益々嚴しくなつて來たが、三十にして家を成さない息子には、如何いふ風に事を運んでいゝか見當もつかない。

「どうも實に弱りました。」

と飛車取王手をくつたやうに參つて嘆息すると、

「それはお困りでせう。」

と、泉鏡花先生の奥さんが、買物にも一緒に行つてやらう、引越の手傳もしてやらうと同情し下さつた。元來ひとさまの御世話になる事を人一倍心苦しく思ふ性分——言葉を換へれば、自分の事は自分でするといふ強突張で、あまりお願事はしない方だが、此の時は手のつけやうがな

くて、只管有難かつた。

二十日頃には出來上るといふ家の方は、生憎雨が續いたので、壁が乾かない、職人の手が忙しくて、建具が間に合はないと云ふ。そんなら何時迄待つのだときくと年內にはどうだらうといふ返事だつた。病人をかゝへて、多忙を極めて居る母は、そんな事に耳を傾ける暇もないので、一刻も早く立退けと、言ひ出した事を繰返して止まない。たまたま二十一日が日曜日なので、意を決して引越ときめ、大家さんの方であやぶむのも構はず、永年旅から旅へ持つて廻つた二個のトランクと、夜具蒲團と、これが一番嵩高で厄介な夥しい本を荷造りした。その外には兄が九州の小島の造船所に居た時、その島で買つたらしい解體しさうな長火鉢と、東京では場末の緣日でも賣りさうもない瀨戶物類を、物置のがらくたの中から引擦り出した。

女中は二人雇つた。一人で澤山なのだが、年中留守勝の家では、女一人では寂しがつて居つかないといふ理由で、止むを得なかつたのである。一人は、先頃死んだ有名な女の教育家で、宮家に出入したやかましい婆さんの家に居たのが、婆さんの死後、婆さんの生前の友達だつた自分の母に縋つて働いてゐたもので、何處か地方の漢學者の娘だといふ事だつたが、おそろしく兩鬢の張つた銀杏返しが、平べつたくしやくれた受口の顏としつくりはまつて、どう見ても田舍の酌婦

だつた。漢學者の娘で、やかましい刀自につかへた者とは見えなかつた。もう一人は新しく雇入れたのだつた。

家は、壁も乾かず、障子の硝子もはまらず、縁側には左官の落した泥のかたまりが其儘こびりついて居たが、そんな事には頓着なく、引越は女中に一任して、自分は泉先生の奥さんに隨つて、下町に買物に出かけた。

何も無い家の事たから、あれも入るこれも入ると、數へれば限りがないのに、懷の方には限りがあるので、一體何と何を買ふのだと奥さんにきかれても返事に困るばかりだつたが、先づ第一に欲しいのは鏡臺で、これ丈は是非とも必要だが、その外の物は、あつても無くても、我慢すれば我慢出來さうな氣がした。

その道の學者の說に聽けば、總じて口の廻りを絶間無く取卷いて髯の密生して居るのはアイヌの裔だといふ事だが、自分もその一人である。毎朝、此の髯の爲めに、どの位難儀するかわからない。不性に髯の生えてゐるのは、髯の尖から脂が出て、妙に粘つて不愉快だ。きれいに剃るといふ事は、單にお洒落の仕事では無く、心氣を爽快にする爲めである。人一倍硬い自分の如きは、血を吹く事は毎朝だし、ともすると切傷をこしらへる。へまをやるまいとする苦心、へまをやつ

た後から丹毒にでもなられては堪らないと思ふ心配は一通りの事では無い。妙にてかてかすべつこいのも御免だが、さりとて此の髯は、自分一生の負擔である。

「鏡臺丈は奮發していゝ奴を買ひませう。」

自分は幾度となく奥さんの耳にさゝやいた。

或店で、その鏡臺と、前桐の簞笥と、茶簞笥を買つて、あらゆる物の高いのに驚き、これでは此の先折角の新所帯も、張つて行けるかどうかと心配になり、甚だ浮かない顔付で歸ると、途中で飲んだ酒も忽ち醒める程、身に沁みて寒い我家だつた。

たつた一つの解體しかけた長火鉢の外には火の氣も無く、四方の壁は塗つたばかりの濡々とした沈痛な色で、清水が湧きさうな氣持がする。緣側の障子には硝子が未だはまらないので、其處から風が吹込む。最もうらやましく思つたのは、これも骨ばかりで硝子の無い厠の窓から、うらの長屋の臺所に、釜の下の火の燃えるのを見た事であつた。いかにその景色の溫情に滿ちたる事よ。

しんしんと水つぽい寒さは骨身に沁みて來るので、縕袍を出して着込んでも防ぎはつかない。こんな時には寢る事だと、悄氣(しよげ)た考になづんで居る折柄、門口に車が止つた。

「番町の泉様です。」

と、女中が取次ぐので、泉先生が新所帯の苦難の見舞に來て下すつたのに違ひ無いと思つて、玄關に驅出すと、車の中から出て來たのは大きな火鉢だつた。

「お寒いだらうから御貸し申しますつていふ御言傳です。」

若衆は抱下して、あるじの目の前に置いて、歸つて行つた。何時の間にか細々と雨が降つて居た。

新所帯は、何時迄も他人の家の氣持がして、おちつかなかつた。硝子丈は二三日たつて職人が來て呉れたが、壁はなかなか乾かず、大分乾いたなと思ふ頃一雨來ると、又濡色が深くなつて、やがてその年も暮れてしまつた。

拜借の火鉢に替る可き新しいのを買はなければならないのだが、買へないので、正月になつても拜借してゐた。火の氣もじゆうつゝいゝと消えてしまひさうに、夜は殊更寒く、曉方は實に又寒く、冷たい自分の足に、もう一つの冷たい自分の足が觸る度に目が覺めた。東南向の二階の雨戸に日の當る頃迄、無理にも床の中に潛つてゐて、階下の女中達の起きるのを待ちあぐむ事もあつた。

起きると直ぐに雨戸をあけて、朝の光を見るのはいゝ氣持だが、寒さをまぎらす爲めにも手荒

になり勝なので、二階の緣側の建附の惡い溝をはづれて、霜柱の立つ庭に、雨戶を落した事も度々あつた。何處から移し植ゑたのか、まだ新土に根を張らない山茶花の、腐つたやうにいたんだ花が、その庭に散つてゐた。

塀の外の長屋は、早晚取拂はれる事にきまつて居るとかで、廂の傾いたのも、壁の崩れたのも、うつちやりつぱなしにしてあつた。角の駄菓子屋の店頭（みせさき）には、霜やけの頰ぺたを眞赤にした子供が、年中群つて居た。

駄菓子屋と我家の塀の間の露地の奥に、水道共用栓があつて、おかみさん達が手桶やバケツを提げて集つて來た。生憎うちの厠の裏の空地なので、おつかあの尻にくつついて跳廻る近所の子供がうぢやうぢや居て、そいつらの惡戲であらう、厠の窓や掃出口から、石つころ、土塊、古草鞋、時には蟲けらの死骸なども投込んであつた。

氷川神社の境内は、春にでもなれば、いゝ遊場所でもあり、不良少年も出沒し、又逢引の背景にもなりさうだが、冬の間は非道い霜どけで、鳥居をくぐる人の影も少かつた。それでも、うちから見る景色では、神社の森の向ふに沈む、冬の落日がすぐれた風情だつた。

坂の上から鳥居の前を通つて、我家の方にだらだら下りて來る途中――もつと明瞭にいへば、

うちの筋向に、山の手では名代の上方風の鮨、並びに御料理仕出しをする伊勢忠といふうちがあつた。最初、自分の食卓に並ぶ下物を、女中の手料理にしては體裁がよすぎると思つて感心もし、疑ひもしたが、それはみんな伊勢忠の仕出しだつた。漢學者の娘は、煮炊の面倒をなるべく避ける爲めに、自ら勞せざる方法を選んだものらしいが、何時も何時も極りきつた仕出屋の料理では、あんまり人情が無さ過ぎて堪らなかつた。殊に、伊勢忠は贅澤屋だと聞いてゐるので、月末の心配もあつて、折角の御馳走も安らかには咽喉を通らない。自分は、女中と口を利く事が——敢て女中に限らない、身内の者や友達の外は大概——嫌ひなので、注意をする氣にもならず、自然と他所で食事を濟ませて歸る事になつた。

銀座の加六は、その頃殆ど毎日立寄る場所になつた。酒を飲んで、屋臺の鮨をつまんで、さうしてうちに歸るのが順序になつた。あまり經濟的ではなかつたらしいが、少くとも、仕出屋の煮魚などを喰はされるよりは幸福だつた。しまひには、殆ど自分の家で飯を喰ふ事は無くなつた。

たまに早目に歸る時など、漢學者の娘の姿を見ない事があつた。どうしたのだと訊くと、

「日本橋迄髮を結ひに參りました。」

といふのが、もう一人の女中の、何時も同じ答だつた。叔父が日本橋にゐて、曾て其處に暫時厄介になつてゐた當時の馴染の髮結に通ふのだといふ事だつた。山の手の髮結は氣に入らないのださうだ。何を畜生とも思つたが、狆のやうな顔をして、兩鬢の張つた銀杏返を頂いて得々たる姿を見ると、遙々日本橋迄通ふ心根は、愉快なる滑稽味を多量に持つてゐた。その女中を知る程の人は、何れも此の話を聞くと、おのづからなる諧謔に、樂しい笑聲を立てるのであつた。

學校時代の友達は、大概夙に妻を持ち、家を持ち、おやぢになつてゐる中で、自分丈が永々の下宿住居は、隨分目立つたものらしく、新所帶を見に來る物數奇もあつたが、兎角想像をたくましくする連中は、それが妻帶の前提だと考へ、中には、既に女房を迎へての新所帶だと、勝手に臆測した者もあつた。

一月の末だつたが、朝鮮にゐる友達が所用で歸還して、日本橋の灘屋で、鮟鱇鍋を突つき合つたが、彼も亦臆測派に屬して、お目出度話ばかり聞き度がるのだつた。やうやくの事で、父母の家から追出されて、止むを得ざるに出た新所帶だといふ事を了解せしめると、今度は、そんなら女房を世話してやらうと云ひ出し、氣の早い男で、卽座に候補者の名迄擧げて見せた。いゝ加減な返事をしても承知せず、醉が廻るに從つて聲高になり、女房といふものゝ便利で調法で難有い

事を、極力説明讃美して止まなかつた。そんな話のもつれから、兎に角男やもめの家の有様を一見するといふので、夜も更けてゐたが連立つて我家に歸る途中で、どうしたはずみかで、その男をうちに泊める事になつてしまつた。

「しかし、夜具も蒲團も一人分きり無いんだからその積りでゐてくれ。」

「よし、夜具も蒲團も入らない。今晩は語り明かさう。」

そんな機嫌だつた。

ところが、うちに着いた頃は、飲んだ酒の疲れが出て、矢張り眠らなくてはゐられなくなつた。二枚のものを一枚宛わけ、座蒲團や外套をあらん限り上に乘せて、ぐつすり寢た。

翌朝目が覺めて見ると、自分は客の外套を着て、皺だらけにして寢てゐた。

もう一人の友達は、中學時分からの仲好しだが、自分がうちを持つたといふ事に殊の外興味を持つて尋ねて來た。たまたま大阪から到來の上酒があつたので、仕出屋の料理を並べて飲み始めた。相手は名だたる後引きで、此の數年の間數奇な運命に惱まされ通した心身の疲れを、醉つても忘れ兼る程の身の上だつたが、身の上話を繰返すうちに、やがて十二時も過ぎて、底冷えのする家のなかは、寂然と冴え返つてしまつた。

「おいおい、誰だい白い手を引込めたのは。」
突然傍をかへりみて、舌にもつれた聲で友達が叫んだ。ぎよつとして四邊を見たが、林立してゐる酒の空瓶と殘肴の外には何の影もなかつた。
「なんだい、薄氣味の悪い事をいふぢやないか。」
醉拂つたなと思つて、意識をはつきりさせる積りで聲をかけた。
「どうも變だ。其處いらでわやわや話をしてゐやあがる。」
彼は凝と目を据ゑて、何も無い疊の上を見詰めてゐる。自分は聲が出なかつた。
「あはゝゝゝ何んだい。何もゐやあしないぢやないか。」
友達は稍暫時して、空虚な聲で笑つて立上つた。
「左様なら。」
そのまゝ深更の町に出て行つてしまつた。角を曲る下駄の音が聞えて、それつきりしんとした。
その晩はもとより、その後も、八疊の座敷の夜更には、安からぬ心地を打消す事が出來なくなつた。
二月初めの頃であつた。例の通り加六で酒を飲んで、ぶらぶら銀座を歩いてゐると、尾張町の

角で、小山内吉井久米三氏にでつくはした。ライオンで休んで話をしてゐるうちに、みんなのお腹が空いてゐる事がわかつた。それでは何か喰べようといふので外に出て、蕎麥屋の二階で又飮む事になつた。さかんに喋つた中で、鷗外先生と漱石先生を對立させて、みんなで話しあつた事の外は、今記憶に殘る何物もない。何にしても、夜が更けて、電車の無くなる迄喋つたのである。
數寄屋橋迄歩いて、本鄕に歸る久米さんと、四谷赤坂の方に歸る三人は別れなければならなかつたが、タキシイ自動車會社の向側に、天幕張の飮屋が出てゐるので、別れる前にお喋りの後の乾いた咽喉を麥酒で濡らし、其處で飯を喰つてゐた運轉手をつかまへて送つて貰ふ事にした。
たうとう久米さんと別れて、三人を乘せた自動車は暗い堀端をかけ出した。
四谷見附の近所で小山内さんは下り、大木戸の近所で吉井さんも下りて、人子一人通らない眞夜中を、がらくたのタキシイはがむしやらに走るのだつた。靑山の原を通つて、一丁目の交叉點にかゝると、物に閊へたやうに車が止つた。がたがた搖振るやうにあせつても動かないので、運轉手も舌打しながら下りた。あつちこつちと機械をいぢくり廻してゐたが、
「濟みません、パンクしちまひまして。」
寒い時なのに、額の汗を拭く格好をして帽子を取つた。

「困つたなあ、こんな所で下ろされては。」
自分は外套の襟を立てて、稍々醉醒の心細さを感じながら、どうしたつて下りるものかと考へてゐた。
「濟みません。」
行儀のいゝ、心の正しさうな青年は、心底から恐縮した樣子で身を倒すと、車體の下に潜り込んだ。
ぶぶぶぶう……物凄い音を立てて、車が動き出したので目が覺めた。何の位止つてゐたのかわからないが、車内は一層冷くなつてゐた。急な坂を下りて行く車は、前にも增して動搖が非道くなつたが、下り切つたと思ふと又止つた。
「濟みません、又パンクしちまひました。」
運轉手は今度は些かの躊躇も無く、車の下に身を入れた。自分は又寢てしまつた。
「旦那々々。」
呼ばれて氣の付いた時は、自動車は山王下を進んでゐた。
「そつちぢやあない、通り過ぎちやつた。」

狼狽てて引つかへさして、我家の坂下の、市川中車の家の前で、いんぎんなる靑年運轉手に別れを告げた。

「左樣なら、御苦勞さま。」

「難有う御座います。事故が多くて濟みませんでした。」

いふかと思ふと、狹い通りを巧みに一廻轉して、自動車は忽ち闇に消えてしまつた。

うちの門は固くしまつて居た。叩いても叩いても起きて來ない。叩いても叩いても返事が無い。初のうちこそ四邊に氣をつかつて遠慮してゐたが、何時迄たつても埒があかないので、段々激しく叩いてやつた。

「オイ、起きんか。起きないか。」

漢學者の娘のいぎたなく眠つてゐる姿を想像して怒鳴り立てた。怒鳴つても叩いても起きない。門扉に兩手で鐵砲突をかませても見た。乘越える外は爲方がない——と思つて身構へをした時、五六軒先の雨戸があいて、うさん臭さうに覗く人間があるのに氣が付いた。

「畜生ッ。」

身體全體を一團にして、門扉の眞中に力任せにぶつかつた。しまつたと口に出していひ度い程

手堤へがあつて、門柱がぐらぐら傾いたが、門扉は柱から離れて内側に倒れかゝつた。
「ざまあ見やがれ。」
やけになつて踏込んで、玄關の戸を激しく叩いた。
「どなたです。」
女中の聲が震へて聞えた。
「僕だ。」
いひながら、靴をあげて雨戸を蹴つた。
「只今。」
ぱつとあかりがついて、格子戸がからから開いた。
水瓶の水を飲んで、着たまゝで床の中に倒れ込んだ時、柱時計は四時を打つた。
それから間もなく、これらの思ひ出を殘して、我が赤坂の家に別れ、昔馴染の三田に引越した。
今もありあり目に浮ぶのは、松脂の吹出してゐる、節の多い門の扉と、それを蹴飛したり、なぐつたりしてゐる自分自身の姿である。（大正十一年六月二十三日）

――「三田文學」大正十一年七月號

先驅者

與謝野寛氏の歌集「相聞」には、森鷗外先生の序文がある。その首に

一體今新派の歌と稱してゐるものは誰が興して誰が育てたものであるか。此問に己だと答へることの出來る人は與謝野君を除けて外にはない。

といふ一節がある。

試に問へ。一體今大正の文學と稱して居るものは誰が興して誰が育てたものであるか。此問に己だと答へることの出來る人は森鷗外先生を除けて外にはない。すくなくとも、先生が居られなかつたら、今日の日本の文學を育てるには、なほ多くの歲月を要したであらう。その先生がおかくれになつた。

言葉を換へていへば、明治大正に亙つて、今日迄筆執る程の者は、假令直接先生の門に出入し

て教を受けなかつたとしても、其の影響を受け無い者は殆ど無いと云つても差支へ無い。非凡なる頭腦と、比類無き精力を以て、あらゆる方面の先驅をなした先生の拓いた道を、遙かに遲れて多數の者が、とぼとぼ辿つて來たのである。

まことに先生は先驅者だつた。先驅者としての誇と、先驅者としての寂しさを、生涯身に沁々と味はれたであらう。先生を想ふ時、常に孤獨の姿を胸に描く。

先生が初めて筆を執られたのは、明治十四年の頃だと聞く。自分などが、多少なりとも理解をもつて先生の文章を讀む事の出來るやうになつたのは、明治三十年代の事だから、先生が若々しい情熱を以て、頭の惡い世間の所論に、容赦なく痛擊を加へられた時代の事は明白には知るよしもないが、察するに、知識慾に燃え、學問の硏究に心を盡くし、且つ藝術家としては鋭敏なる神經に觸るゝ一切の物に活々した感應を持てあます程持つて居た先生にとつて、論ずる者自身の頭の中でさへはつきりしない思想と、その發表されたる論理的形式の不備は、見るに見兼ね、許すに許し難きものだつたに違ひ無い。有名なる坪內逍遙博士との沒理想論爭の如きも、今日之を見る時は、如何に兩者の所論の態度と內容が懸絕して居るか、餘りに明白過ぎる位である。

先生のお書きになつたものを、自分が初めて讀んだのは、幾歳の年かわからないが、兄の本箱

の「めざまし草」を竊み見た記憶は明かである。子供の時から穎才を以て稱された兄は、藝術に對する強い憧憬と、正しい理解とを持つて居た。七才違ひの弟に生れた自分は、此の兄のおかげで、「少年世界」の興味を失ふ頃、一足飛びに一流の作品に接する事が出來た。

兄の本箱には、紅葉露伴鷗外二葉亭柳浪鏡花其他勝れたる當時の諸家の作品と共に、その頃文壇の權威だつた「新小說」「文藝俱樂部」「新著月刊」等がいつぱい詰つてゐた。自分の茶碗や箸は、庭の清水で手づから洗はなければ承知しなかつた程潔癖の兄が、これらの本を大切にする事は一通りでなかつた。折目もつかず、汚れ目も見えない本が、文學好の少年にとつては淚ぐましい程なつかしい紙の匂をこめて、兄の勉強部屋の押入の中の本箱に、整然と納まつてゐた。餓鬼大將になつて、近所の子供を集めて、角力を取り、陣取りをして、一日中あばれ廻る自分だつたが、時に屢々人目を避けて、大人の讀む本を竊み見る興味は早くから持つてゐた。他人が手をつけて汚す事を怖れる兄の留守をねらつて、自分は其の本箱の本を殆ど悉皆讀んだ。「めざまし草」の如きは、難かしくてわからなかつたが、それでも「雲中語」などを愛讀したのを見ると、一面甚だ子供らしかつた自分も、一面甚だ早熟だつたものらしい。

「舞姬」も讀み、「文づかひ」も讀んだが、紅葉先生の偉さはわかつても、鷗外先生の偉さはわか

らなかつた。何かの折に、兄が紙片に書いた小說家番附といふものを見ると、鷗外先生が横綱か張出大關になつてゐたので、そんなに偉いのかと驚いて、「舞姬」か何かを繰返して讀んだけれど、あの文體が邪魔になつて、矢張りわからなかつた事を覺えてゐる。まだ小學時代の事だつた。

今考へても其の時の歡喜がまざまざと蘇つて、胸はをどり、涙をさへ催しかねないのは、「卽興詩人」を讀んだ時の事である。その時は既に中學に入つてゐた。所々讀めない字はあつたが、曾て一度も見た事のない淸新な文體を、幾度朗誦したかわからない。好きな所は暗記した。

それから約二十年、幾度も讀み、最近も亦讀んだが、今では感受性が鈍つて、以前のやうに感激に我を忘れる程の事はなくなつたが、同時に又その昔、此の一篇に涙をそそいだ當時の心持の、既に二度とは返らぬ事をはかなむ念もまじつて、更に複雜な感慨があつた。恐らくは吾々と時代を同じくする詩人小說家、その他文藝の愛好者にして、曾て「卽興詩人」を讀んだ事のない人は極めて稀で、又一度たりとも讀んだ人は、その若かりし日の追憶の中に、歡喜に胸を波打たせた事を止むるであらう。

葡萄のみのる南歐の古都、火山の麓、海の岸邊を背景として、感傷深い少年の女藝人に對する思慕の情を描いた甘美なる物語の世界に、吾々の魂は完全に奪ひ去られた。自分の知る限りに於

て、現在文壇の聲名ある作家は、何れも「即興詩人」の洗禮を受けた人々である。先輩泉鏡花先生の傑作「照葉狂言」も、作者が「即興詩人」に感激した時代の記念だといふ事である。

「即興詩人」の飜譯は原作以上と稱されて居る。へんちき論を好む者は、飜譯は原作をあるがまゝに傳ふ可きで、原作以上と云はれる飜譯の如きは忠實なる飜譯でもなく、名飜譯でもないと云ふであらう。現にそんな事を悧巧ぶつて云つた者もあつた。そんな事を云ふ者にはいはして置け。吾々は原作の內容を盛るに、更に適切なる文體を以てせられた鷗外先生の一事業として、又吾々の文學的生涯に於て、二なき歡喜に打たれた記念として、永久に「即興詩人」を讚美しよう。

ハルトマンの審美學說を紹介し、洒落と機智と漫罵の外には批評の言葉を知らなかつた人々に、嚴正なる批評の據處(よりどころ)を與へた先生は、一方に於ては自ら新體の創作を發表し、世界各國の小說戲曲詩歌を飜譯して文學の範を示した。「水沫集」「つき草」「かげ草」の如きは、何れも文學に志す者に深い感動を與へ、又彼等の行くべき道をさし示した偉大なる記念塔である。

今更茲に先生の吾々に殘された功績を、事細かに述べる必要はないが、もう一度、吾々の今日の文學は先生に育てられたものだといふ事を、繰返して言はして貰はう。

若し明治文學史から、先生の存在を完全に消す事が出來るならば、その文學史の殆ど全部が書

直されなければならない。即ち今日の創作評論の形式は、餘程違つたものとなつてゐたであらう。違ふといふよりも、發達の初期をさまよふものと云つた方が適切かもしれない。

德川期の文脈を完全に振捨て、新しい思想を盛るに新しい形式を以てした功績も、紅葉二葉亭其他と共に、先生の力に歸すべきである。先生がゐなかつたら、坪內博士の「文學その折々」に見るが如き、淨瑠璃もどきの文體に、吾々はなほ絡みつかれてゐなければならなかつたかもしれない。殊にそれが戯曲に於ては、七五調を脫却し切れず、或は「おじやる」調の跋扈に、今もなほ惱まされたかもしれないのである。斯う數へたてゝ來る時、最も明かに吾々の前に現れるものは、所謂新しい戯曲の存在である。「歌舞伎」「昴」「三田文學」などに發表された先生の戯曲、就中一幕物は、此の國の今日の謂ふ所の新しき戯曲の父であり、母である。餘りにお手輕な戯曲が現れ過ぎた程、先生の示したお手本に倣ふ者が續出し、しかも他人様(ひとさま)のおかげを想ふ事も無く、我が物顏にのさばつてゐる。

先生の多方面の活動には、勿論多少デイレツタンテイズムの色調を帶びてゐる。それは時代と境遇の影響でもあり、又先生の性格と才能の自らなる發露の結果だつたとも見られる。今度は一つ斯ういふ手本を見せてやらう。人がやるなら俺も一つ、もつと立派にやつて見せてやらうと云

ふやうな、例之學校の運動場や公園の衆人環視の中で、機械體操の巧者が、あらん限りの型を見せる、無邪氣な得意が歴然たると同時に、あまりに先生の目から見て進歩の遲々たる、頭腦の惡い物識らずを、善導しなければならない時代でもあつた。ハルトマンの審美學說を紹介し、幾多の飜譯事業に生涯を盡くし、學說の考證に晩年を送られた如きも、先生の此の傾向を物語るもので、「水沫集」中の「おもかげ」も、そのおもかげを傳ふるものであらう。

吾々の時代が、先生のおかげをかうむつた事は前にも述べた。それにも拘らず、先生に對する世間は、眞情を籠めて感謝の意を表したであらうか。先生の著作が專門家に與へた偉大なる影響にひきかへて、一般受のしなかつた事を以てすれば、否と答へる方が適當である。文壇の者さへ、先生に追隨する事は難かしかつた。所謂民衆には、先生を理解し味得する事は出來なかつた。之やがて先驅者の、免る可からざる運命であつた。

加ふるに鷗外先生の著作の如き、論說に於ては科學的表現を用ゐ、創作に於ては彫刻的描寫に據り、之を理解するには少からぬ知的教養を必要とする作家は、到底多數者の喝采を浴びる事は出來ない。紅葉先生の諧謔は婦女子をほゝ笑ませ、漱石先生の洒落は腰辨をもよろこばせたが、鷗外先生のそれは、選ばれたる少數者にしか理解されなかつた。但し上記の特色が過ぎて、先生

の作品に、外光派の持つてゐるやうな色彩の乏しかつた事は否定出來ない。

文壇の人々さへも、先生の作品を正當には理解出來なかつたらしい。屢々先生の獨創を疑ふやうな口吻を漏らしたものもあつた。しかし、その言葉の誤つてゐる事は、先生の著作を精讀すれば直ちに了解出來る。たゞ玆に否み難きは、先生の力が、創作よりも飜譯紹介に多く盡くされた爲め、その光に覆はれた形がなくもない事である。だが、先生をして泰西藝術の移植に生涯の大半を費させたのは、此の過渡期の要求だつた。しかもその飜譯にも、紹介にも、尋常上面のものとは違つて、正しい獨自の批判と深い理解の伴つてゐる事は、先生が單なる語學の達者でなく、眞の藝術家であり、又學者だつた事を證するものである。

それにしても先生は、餘りに同時代の人間に勝れ過ぎてゐた。殊にその學殖と世界智に於て懸絕しすぎてゐた。千朶山房に筆陣を張つて、八方に斬りまくつた時代の先生に對しては、時の文人の多くが反感を持ち、小面憎く思つたものらしい。その後に於ても、他の文壇の大家に比して、先生に親しく昵む者の少かつたのは事實である。誰しも近づき難い感じを、如何する事も出來なかつた。あまりに弱味の無い先生の前に出ると、只管窮屈に惱むばかりだつたのだ。さうして心なき徒輩は、遠卷きにして衆を賴み、卑しい敵意をさへ示したのである。先生は遂に創作と飜譯

の筆を捨てた。飜譯集「蛙」の序に、かう書いて居られる。

機會はわたくしに此書を公にせしめた。書中の收むる所は皆譯文である。わたくしは老いた。飜譯文藝を提げて人に見ゆるも恐らくは此書を以て終とするであらう。書は何故に蛙と題するか。プロワンスの詩人ミストラルの作ナルボンヌの蛙が偶然巻頭に蹲つたがためである。

しかし偶然は必ずしも偶然でない。文壇がトロヤの陣なら、わたくしもいつの間にかネストルの位置に押し進められた。其位置は久戀の地ではない。わたくしは蛙の兩棲生活を繼續することが今既に長きに過ぎた。歸りなむいざ。歸りなむいざ。氣みじかな青年の鐵椎の頭の上にうちおろされぬ間に。

皮肉も嘲笑も厭味も苦笑も、憤りも涙も、此の短い序文の中に籠つてはゐないだらうか。先生程の人が、若い者のはしたなさをそれ迄に氣にしないでもよささうに思ひ、これこそ先生の弱味だとも考へるが、又一面から見れば、理智の人としてのみ論じられた先生が、如何に藝術家特有の氣の弱さと感情の強さを、まぜこぜに持つて居られたかもうかゞひ知られる。加之（くはふるに）先生の時代に生れ、先生の踏まれた道を辿れば、その仕事に反響の無い張合ひなさは、おもひやられ

るのである。自分の如きは、あの序文を見て、初めて先生の人間らしい弱味を明確に知つて、寧ろ涙を催した程親しさを感じた。先生を生み育てた此の過渡時代の明闇の中に、複雑なる思想と感情の渦巻を背景にして、軍服を着、洋刀を帯びた偉大なる文人の孤獨の姿を想ふ時、一種悲壯の感慨に打たれざるを得ない。まことに森鷗外先生は、過渡時代に生れたる先驅者であつた。

自分は生來の不精と偏屈から、文壇の人々にも甚だおちかづきが少く、さまざまの會合にも殆ど顔を出した事がない。平生崇拜する鷗外先生にも、親しく御教示を受けた事が無い。よそながら先生のお姿をお見かけしたのは、自由劇場の試演が有樂座で行はれた時で、たしか先生の一幕物「生田川」の上演された時である。先生は棧敷に母堂と令夫人とを伴つて來られた。夏の事で、麻の衣服に大きな紋が目立つてゐた。多勢の知名の文人が挨拶をしに行くと、軍人らしい簡短なおじぎをされたのを、遙かに胸をとゞろかして見た。

その後自分が「三田文學」に小説を發表し始めて間もなくだつたが、誰から聞いたのか忘れたけれど、鷗外先生が、水上といふ人は、一切のものを無抵抗に否定しようとする始末の惡い思想を持つてゐると、トルストイを例に出して語られたといふ事を聞いた。その時自分は、先生に認められたものと信じて、密かに喜んだものであつた。

僅かに一度先生の謦咳に接したのは、忘れもしない明治四十五年の六月で、自分は徴兵検査の心配にわくわくしてゐた時であつた。三田の文學科の教授が主人役で、先生を築地の精養軒に招待した時、若い教師や學生にまじつて、自分も末席に列つた。定刻を過ぎてもかんじんの先生がお見えにならないので、几帳面な方だと知つてゐる丈みんなが氣を揉んだ。やがて軍服でかけつけた先生は、汽車の衝突の爲めに多數の兵士が死傷したので意外に遲くなつたのだと云はれた。冴えない聲ではあつたが軍人らしかつた。相手の顏を見ないで、心持からだを搖動かしながら話されるのが、非道く羞しさうに見え、やがて臆病らしくさへ思はれた。自分は、たつた一言位は先生と口をきいたであらうか。それつきり先生にお目にかゝる時もなく、矢張り近づき難い感じを消す事が出來ないで今日に及び、先生は突然おかくれになつてしまつた。浮薄なる世の中は益益惡くなるであらう。(大正十一年七月二十日)

編輯者七尾嘉太郎氏から鷗外先生と漱石先生の比較論を求められたが研究の時間がないので固辭した。他日その機會を得れば幸である。

――「三田文學」大正十一年八月號

素人芝居

研究座第七回公演――チエホフ研究劇といふものゝ切符を貰つた。研究座といふのは、如何いふ劇團であるか自分は知らない。或人にきいてみたら、それは下町の金持の若旦那の芝居狂の寄集りだといふ事だつた。

何にしても、チエホフ研究劇は可笑しい。近頃のいやな言葉で、戯曲の內容に從ふ分類によつて、悲劇喜劇稍品下つて笑劇などはまだまだ許せるが、時には作者の名を借りて、近松劇トルストイ劇などともいひ、更に又出場する役者の名を冠して、五九郎劇澤正劇などゝいふ迷惑なのもある。その例によれば、此の場合チエホフ劇研究といふ筈だつたであらう。それを研究劇とやつたのは頭腦が惡いばかりでなく、乍遺憾チエホフの研究者として、餘りに無神經過ぎる。敢て研究座ばかりではない、世間一般に不愉快な稱呼を排して、例へば「チェホフ氏の戯曲研究」といふ

やうに、素直になだらかに且つ間違ひの無い呼び方をし度いものである。チエホフ研究劇では、文字通りに解釋して、チエホフの作を研究的に上演するのだと考へられない事もないが、チエホフ自身が研究的に書いた戲曲といふ意味にも取れるやうである。

それはそれとして、アントン・チエホフは大好きな作者である。最もなつかしみのある作者である。飽迄も近代的な感じのする作者である。研究座が「路を辿りて」と「かもめ」を撰んだのは難有かつた。

一口に近代劇といふと、イブセンの出現以來、必ず何等かの社會問題を取扱つたものと解され易いが、單に概念化された社會問題を戲曲の主題としたからとて、之を包むに近代人の感覺情緒を以てしなければ、それは近代的假面をかぶつてゐるのに過ぎない。チエホフには、或る特殊の流行問題に關する新しい思想も解釋も、又その問題の提供も無い。けれども其の神經に於て、全然近代人である。勉强してなつた近代人ではない。悟つてなつた近代人ではない。生まれたる近代人である。此の息苦しい時代に生み落された近代人である。チエホフばかりではない、シユニツツレル、久保田万太郎氏の如き、此の意味に於て、たとへ其の藝術が近代的政治問題經濟問題婦人問題に無關心でも、一字一句にも近代人の神經のゆき亙つてゐる點に於て、諸共に近代的作家

である。吾々の心に、直ちに親しさを以て迫るのはその爲めである。

チエホフも、シユニッツレルも、久保田万太郎氏も、何れも或特別の階級を中心とした、比較的狹い世の中を、深く細かく觀察し、味ひ盡してゐる。チエホフの露西亞知識階級、シユニッツレルの維納の遊民階級、久保田万太郎氏の東京淺草の職人階級は、麪麭であり、葡萄酒であり、米の飯である。同時に、その何れもが、現在の過激派の天下、勞働者の天下、田舍者の天下に於ては、極めて影の薄い、片隅に憂世をかこつ人々である。三氏の作品に、現代の動搖せる思想の反映が現れず、まゝならぬ世界苦や、病的な戀愛耽美の憂鬱や、なるやうにしかならない世の中の遺瀨無さに、感じ易い詩人の優婉な情緒を湛へたものとなる事は寧ろ當然の事であらう。彼等は時代の先驅者ではない。寧ろ時代の繼子である。新時代の社會的衝動に驅られて、聲を張上げて主張し、或は直接行動に出る事などは思ひも及ばない。寧ろ古き形式に昵んで、しかも其處に湧く汲んでも盡きない情趣に溺れんとするばかりである。危く踏み止つて世の中を靜に見ながら泣笑ひをする事も、書齋に閉籠つて世の中と隔絶する事も、あればあるべき事であらう。人を導く藝術ではない。その中に魂を打込んで、先づ自分自身が三昧境に入らうといふ藝術である。

露西亞人は、人生とは何ぞやといふ解き難い謎に生涯苦しみ惱む人種である。チエホフの描く

人々も亦、勿論此の魂の疾患に惱まされてゐる。しかし、トルストイの人々のやうに、勇敢に思索と論理の道を辿つて、その解決を死ぬ迄求める事はしない。チエホフの人々は、人生の無意味な事をいちはやく知つて、人の世の渦卷にまき込まれ、見る見る押流されてしまふのである。

チエホフには、トルストイのやうな蠻的の力が無い。飽迄も意志の否定者であり、人生の悲觀者である。生れて來た此の世の幻滅の悲哀は、屢々彼の作品の基調を成し、且つ又作中の人々は、何れも自己の弱點を、知り過ぎる程知つてゐる。しかも之を描くのに、纖細無比な神經を以てするのであるから、その與へる印象は、稍病的なる靜寂である。騷然たる雜音のまじる事は許されない。

些か大ざつぱな言ひ分ではあるが、吾々が問題劇を見る時には、作者の意志、傾向に、觀者は全然反對の立場に立つても、其の主題に關する論爭は別として、作品が藝術的の價値あるものであれば、これを藝術として或程度迄は觀賞出來るが、作者の氣分を主とした戲曲に於ては、觀者も亦同じ氣分を持たなければ、到底見るに堪へ難い事である。問題劇が氣分劇よりも、廣く一般の喝采を博するのは、問題そのものゝ力もある事ではあるが、一面斯かる消息を傳ふるものであらう。

チエホフの戯曲は所謂氣分劇ではないが、作者の冷やかなる寫實主義と融和して、全體を貫く寂しい情趣は極めて重大なる特點である。戯曲に對する役者の理解も、茲では單なる主題の了解では役に立たない。その心持を充分に感じ切らなくてはならない。例之イブセンの芝居の如く、最初の幕から事件の頂點を見せ、ひたむきに本論に入つて、眞赤になつて論じ合ふのではない。お天氣の話もすれば、お茶の味も話題に上る。小鳥の聲も雲のゆききも、犬の病氣も話される。或は又、結局は逃避的な心的傾向を示すに過ぎない人生觀さへ、かりそめの散歩の機會にも語られるのである。從而、之を上演する時、會話の勤める役目は、筋を徹底させるよりも、心持を出す爲めに効果を擧げなければ何にもならない。之等の點に於て、チエホフの戯曲は、最も演じ惡い戯曲の一つであらう。

「路を辿りて」は、チエホフの戯曲としては、恐らく最も初期のものだらうと想像されてゐる。時の檢稿官は、陰鬱汚穢の作品として之を許さず、空しく役人の机の中に埃と共に埋れて居たのを、作者の死後に至つて發見したのであつた。珍しくも此の戯曲は、作者特有の知識階級に材料を取らず、一群の浮浪徒の中に材を得た。街頭の居酒屋の風雨の一夜を背景として、多くの人間の個性と、各々異なる閲歴を、鮮明に描きわけた。ゴルキイの「夜の宿」に似て、しかもその持味

に於て、全くかけ離れたものである。

素人役者にとつては、或る主要の人間が一人で活躍するやうな戯曲は難かしく、此の戯曲の如く群集の各々が相當の役を振られて居るのは、一見樂らしく思はれるが、かへつて事實はさういかないらしい。群集の間に、お互を結びつける心の上、動作の上の連鎖がなく、てんでんばらばらになるのである。此の一事で、此の戯曲の上演は、早くも既に失敗した。てんでんばらばらなら、その一人々々は、自己の役廻を明確に意識し、強く感得して居るかと云ふと、それも無かつた。役々の個性は全く沒却されて、その大切な會話の如きは、誰の口から出ても大した違ひはないだらうと思はれる程平調一律だつた。戯曲の上演といふよりも、學校の卒業式の餘興などに出る暗誦のやうな氣がした。

早くも自分は、周圍に頼りの無い世界に來たやうな、此の頃到る處で感じる一種の焦躁をまじへた哀感に襲はれた。

此の頃の時世の推移は實に目まぐるしく、自分の如きは、既に時好に伴ふ事は不可能になつた。しかし飽迄も自分の方が正しく、世間の方が間違つてゐると信じてゐる。例之今日大多數にもてはやされる藝術作家の如きも、本來尊敬に價ひしないものが、屢々過重の褒辭を受け、ほんとに

いゝものが全く顧みられない。世を擧げて正當なる批判を失つた氣がする。所謂新しい戯曲の上演される場合にも、玉も瓦も區別が無い。例を最近の帝國劇場にとれば、谷崎潤一郎氏の傑作「お國と五平」も、小寺某の「眞間の手兒奈」も、其間何等の藝術批判に據る差別無く、單にひつくるめて、守田勘彌其他の俳優の新しき試みに選ばれたる戯曲として受入れられたに過ぎない。

事のついでに記せば、帝國劇場に於ては、お馴染の勘彌菊枝壽三郎の友之丞お國五平が、見馴れた背景の前に見馴れた扮裝で現れた爲め、安逸な心持で見て居た見物は、昔からの芝居とはまるつきり變つたやり方で、何時迄たつても動きが無く、戯曲の內容は露骨な反習俗的で、ちやんちやんばらばら斬(きり)あつて、散際をいさぎよくする武士道に反し、おまけに戀もきれい事で無く、執拗な變態性慾を基調とし、作者一流の反逆的主張を繰返して聞かされたので、曾て習俗的精神に一度も反省を試みた事さへない無批判性から、手痛い所に主題が觸れて來ると同時に、その形式のお芝居でない事にも堪へられなくなつて、四階から平土間(オーケストラ・ストール)迄湧返つた。その嘲笑と嘲罵の眞中に坐して、自分は「お國と五平」を近頃見た芝居の中で一番面白いものと思ひ、自己の藝術を守り育てる事に十年不斷の精進をしてゐる谷崎氏に、多大の尊敬を拂つたが、その時滿場の見物は、降(ふ)るが如き嘲罵を小氣味よしとして、敢て制止しようともしなかつた。

これにひきかへて、有樂座に於ける研究座のチェホフ研究劇では――他の所謂新劇團の公演の場合にも屢々同じ經驗をしたが――自ら笑を誘ふ場面があつて、假令莫斯科の藝術座がやつたとしても樂しい笑聲の起る事は想像され、又役者の藝の拙なさが失笑を招く場合もあつたのに、僅かにあちこちにつつましい、邪魔にならない程度の笑聲が聞えても、忽ち四方八方から、殆ど場内を壓倒するばかり、力強い叱聲が湧起るのであつた。笑聲よりも遙かに騷々しく、戲曲の進行を邪魔するものだつた。

勿論見物の種も違ふであらう、谷崎潤一郎氏の何人なるを知らず、芝居は單なる目の保養と思つて居る人間と、チェホフが近代露西亞の生んだ傑出した作家なる事を知り、或は有名なる作家だと云ふ事の爲めに、試驗場に臨むやうな意氣組で見る人間との違ひはあらうが、しかし其の何れもが、盲目的に無批判な事には何の變りもないやうに思はれる。

ニルマン、ヂンバリストに熱狂するのもいいが、やがてそれは同じく無批判の態度を以て、今や將に世界一の無批判國亞米利加の寄席藝人とならんとしてゐる三浦環に殺倒する事になるのである。珍しいもの好きの亞米利加人が、たまたま便利に使用したからとて、忽ち世界的人物だと、して、殆ど人としても藝人としても尊敬すべき點を見出さない早川雪洲なるものに對し、歡迎會

を開くとか、非歡迎團を組織するとかいふやうな無批判も、やがて現在の人の特質であらう。

それはそれとして、「路を辿りて」が終つた時、自分は既に平靜な心持を失ひかけてゐた。流石に原作者の巧緻なる人物の出し入れを以て一幕を運んでゆく細かなる戲曲構成の面白さはあつた。さういふものを見せて呉れようと志した研究座同人の意圖も察しるが、同時に又餘りにも平調な暗誦(レシテーション)以上に出ない演技は、果して公演さる可きものであるか如何(どう)か疑問である。チエホフの心持も氣稟もなかつた。しかしそれは未(ま)だ忍べる。自分の神經を苛立たせたのは、幕間の廊下を泳ぐ見物の群であつた。

近時我國の劇場の特殊相として、幕間の廊下は、代表的のものである。如何に若き男女は幕間の廊下を享樂するであらうか、到底年寄には合點のゆかぬ事であらう。就中少しでも美々しいみなりの女か、又は近頃の捨鉢な思想の自然の現れとも見る可き頓狂な風をした女は、寧ろ戲曲を見るよりも、幕間の廊下をより多く樂しむ樣子である。

人もなげに放談する文士新聞記者の連中の間を縫つて、肩と肩とをくつつけ、手と手をつなぎあつた若い女が、幾組となく、何處に行くのか、右往左往する。勿論芝居と喰物とはくつつけて考へる慣はしになつて居るから、食堂に夕食を喰べに行き、次の幕間には紅茶を飲みに行くとい

ふ事にもなるのであらうし、如何に西洋風の束髪を競ひ持前の素直に長い黒髪を故意と擦毛にし、或は進んで洋服を一着すると雖も、はゞかりの近い習慣は昔のままだから、大多數の女は厠に急ぐのでもあらうが、同じ顔が幾度となく往復するのを見ると、あながち差迫つたお小用の爲めではないらしい。どう考へても、幕間の廊下を練歩く興味と見なければならないやうである。

中にも、洋服を着た女は、最も自分の姿に滿足した様子で、人前では愼む可き高聲を出して他人の注意を引き、得々として練歩くのは、苦々しくも可笑しい現象であつた。洋服といへば、何でも彼でも和服よりは一段立勝つたものゝやうに考へるのは、幼い者の常であるが、妙齡の女さへ、此の頃は其の傾向がある。有樂座の廊下で見た幾人が、殆どすべて十二三才迄の女の子の着る可き型の服を着てゐた。稀にさうでないのは、どう考へても新嘉坡の日本町に見る姿であつた。しかも其の洋裝に對し、誰一人あやしみいぶかる者もなく、かへつて易々と牽引されて、見迎へ見送るのは、無神經の強味に壓倒されたのか、無神經に對する無神經のぽちぽちなのか。茲にも亦無批判の群が、最も横行濶歩してゐるのだつた。

暗誦(レシテーション)の寂しさは忍べるが、此の聲も色彩も動作も著しく強烈な幕間の廊下の生ける景色は、さういふものを素直に、あたりまへの世相として認容出事ない自分の存在を堪へ難いものにする

のだつた。これがチエホフの戲曲を見る人々であらうか。
「かもめ」は同じ作者の「叔父ワニヤ」「イワノフ」などゝ共に、曾て自分が讀んだ諸國の作者の幾多の戲曲の中で、最も好きなものゝ一つである。「かもめ」に描かれた人々の、どの人の心にも喰ひ入つてゐる寂しさに觸れては、沁々と涙を誘はれさうになる。
けれども又暗誦(レシテーション)が始まつた。恐らくは素人の芝居には免れ難い事であらう。それは我慢が出來たかもしれない。形のつかない服を着たニーナ、マアシヤ、ポーリナ達、谷中か溜池か或は有樂座の舞臺裏にでもゐさうなトリゴリンやドルンの出てゐるのは構はない。たつた一人、さも舞臺馴れたやうな樣子をして、賣女のなりをした、猫族の顏附の女優が出現した時、自分は全く堪へ切れなくなつた。それでも自分の持つてゐる妙な禮儀心が、直ぐには腰をあげさせなかつた。誰の厚意か知らないが、當夜の切符を貰つた事に對して、中座しては濟まない氣がしたのである。
その上、何時の間にか降り出した雨が、先刻から土砂降になつたので、小降りになつたら出かけようとも思つてゐた。たうとう、二幕目のしまひになる迄辛棒して、その幕が閉ぢると直ぐに、なほも降りまさる雨の往來に出た。
水溜りをよけて、ぬかるみをぴしやぴしや歩いて行くと、忽ち膝から下は吹降りにぐしよ濡れ

になり、白い洋袴の裾の方には泥土のはねが上り、靴の底からは水が浸み入り、洋傘の柄からは雫が滴り始めた。暗い夜の町に、浮かない心持で濡れてゆく自分は、チェホフの短篇小説に出て來る人物の一人のやうな氣持がした。(大正十一年七月三十日)

——「三田文學」大正十一年十月號

世界的

此の頃の流行語に世界的といふのがある。世界的人物、世界的出來事、世界的發見、世界的驚異、世界的流行、世界的宣傳、世界的名譽、世界的映畫其他數ふるにいとまが無い。此の間往來で見かけたのには、世界的驚異大廉賣といふのがあつた。內容の伴はない流行語のならひとして、これも亦新聞語の普及したものに違ひないが、驚く可きは、あらゆる事物に冠せらるゝ事ではなく、あらゆる人間に使はれる事である。

何事に限らず誇大な物の言ひ方の好きな文筆の士は勿論の事、男女の學生、會社員、役人、軍人、商人、職人、職工、看護婦、其他職業的差別が無いばかりでなく、年齡の差別さへ無い。新しい事は認容しない筈の老人迄、口を突いて世界的を連發してゐる。此の點に於て、「とても」や「まるで」や、「出齒る」「さぼる」、「なんて間がいゝんでせう」の如きは到底其の敵で無い。

此の流行語が、例之左團次に對して「大統領」と叫び、吉右衛門に向つて「役者の神様！」と怒鳴る大向の聲援の如く、無責任に景氣のいゝものならば差支へは無いが、萬一それが價値批判の意味を含むものとすれば甚だ寒心に堪へない。些か近時の浮薄なる風潮に平かならず、敢て十數枚の原稿紙を費す所以である。

現在の日本には世界的人物が甚だ乏しいと、繰返して嘆くものは新聞である。さうして其の新聞が僅かなる世界的人物として數へるのは庭球の熊谷清水、撞球の山田、作曲の山田、歌劇の三浦、活動寫眞の早川夫妻、アルプス登山の槇某位のものである。之等の諸氏は、まことに多くの記事を新聞に供給した。話せよ然らば讃へんといふ標語を頂く新聞が、最大級の讃辭を惜まないのは當然である。

乍然世界的といふ言葉は、單に外國で知られて居ると云ふ丈の意味には用ゐられてゐない。國の差別を撤廢しても、尚且つ第一流の達人であると云ふ程押切つた意味に用ゐられて居る。無責任極まる話である。

槇某がアルプスの高峯を極めたといふのは、單に人のしない事をしたといふ丈なのか、或は何か學術的効果を齎らして歸つたのか、今之を審かにしないが、熊谷清水の二氏が千九百二十一年

國際庭球競技の最後の一戰迄殘つて、その前年に優勝した米國の選手と覇を爭つたのは確かに世界的出來事であつた。少くとも此の二人の勇者は、拔群なる其の技倆成績に於て、まぎれもなく世界の一流たる事を證明した。

撞球の山田氏も亦世界的選手たる技倆を持つてゐるらしい。約十年前、自分が亞米利加に行つた頃は、恰も氏が賣出の頃で、紐育の或る球戲場の建築前面に、プロフエツサア・ヤマダ出場と仰々しく揭げてあるのを見た。

由來亞米利加は世界一の惠まれたる天然を持つ樂土であるが、其の國民は新しく發達した殖民地の例に漏れず、頭腦の訓練に於て傳統的教養を缺いてゐる。一から二、二から三と順を追つて考へて行く頭腦で無く、甚だ突飛に働くのである。その爲めに、かへつて或る方面の天才者を多く生む事も事實であるが、多分の傳統的教養がなくては正當の理解に達する事の出來ない藝術の鑑賞に於ては、少くとも僅かなる例外を除いて、國民を一團として見る時、甚だ出鱈目である事は否めない。目新しい事を求めて血を湧かし、無闇にセンセエショナルな事が好きである。各種のけれんを競ふ寄席や見世物は、亞米利加に於て最も著しい發達を遂げた。紐育のヒポドロムを見れば、如何にそれが亞米利加の百貨商店に類する大仕掛で行はれるか驚くの外は無い。コオニ

イ・アイランドやアトランテイツク・シテイの如き海水浴場の見世物の大がかりな事も、寧ろ馬鹿々々しい位である。やたらに膽を冷す出來事の連續する亞米利加物と呼ばれる活動寫眞は、最も明確に彼等の國民性を示して居る。

彼等は其の本質の如何よりも、外觀甚だ崇高なものを好む性癖を持つてゐる。いとよくちひさき物は、彼等の目には觸れない。なんでもかんでも大きい物が好きなのである。一度足を紐育に踏み入れた者は、その町のウルワアス・ビルデイングは世界一の高く聳ゆる建物であるといふ事を、到る處で聞かされるに違ひ無い。日常の會話にも最大級の言葉を使はなければ承知しない。Largest, Biggest, Greatest といふやうな形容詞を矢つぎばやに並べたて、兎もすると其の後に in the world と力を籠めて駄目を押す。Fine weather と同じ意味で Great weather といふ人間である。

扨て今日我國に於て、世界的といふ流行語を冠せられて呼ばれる人は、殆どすべてが亞米利加で有名になつた。亞米利加は世界第一の新聞國である。其の新聞の傳ふるところを、世界第二の新聞國日本に於て、其儘受入れるのであるから、其の結果は察しる迄も無い。玆に於て、日本人が世界的と呼ばれるには、少くとも下の如き條件が必要であるらしい。外でもない、先づ亞米利

加で珍しがられる事、扨て亞米利加の新聞記事となつた曉には機を見て日本へ歸る事である。すべての女の變死者を美人とする新聞は、忽ち彼等を世界的と呼ぶであらう。

歐羅巴の大戰が始つて間も無くであつた。大陸から海峽を越えて英吉利に難を避けた多數の日本人の中に、三浦環女史及び其の夫なる人物もまじつて居た。今日日本に於て世界的歌者と呼ばれる女史も、當時倫敦では全く名も知られない落人（おちうど）に過ぎなかつた。自分などが住んで居た貧乏下宿から餘り遠くない所に住んでゐた。たまたま劇場などで見かける時は、一昔前に流行つた小豆色の、既に色の褪めた羽織をひつかけて、たゞさへ小粒なのが氣の毒な程みすぼらしく、日本最初のソプラノの爲めに、密かに同情の念を催したのであつた。恰もロオヤル・アルバアト・ホオルの音樂會で、マダム・パツテイの前座をつとめ、間もなく倫敦歌劇場（ロンドン・オペラハウス）で露西亞歌劇のあつた時、之に加はつて「マダム・バタフライ」の主役をつとめたのが、此の人の國外に於ける最初の冒險ではなかつたらうか。其の時の倫敦の新聞雜誌に出た批評は、女史自身の手によつて切抜かれ、女史に關する批評の部分は日本語に直されて、故國の知己に配られたといふ事を聞いたが、事の眞僞はいざしらず、其後女史自らが當時の模樣を話して、英吉利の音樂批評家は何れも言葉を盡くしてほめたと宣傳した。

自分は、同胞の一人が、此の緊張した戰時の異國に於て「マダム・バタフライ」を歌ふと云ふ事に感激し、倫敦歌劇場の天井に近い一席に、異常の昂奮をもつて耳を傾けた一人であつた。その時、女史が切抜き且飜譯したといふ諸新聞の批評が、一齊に好意の言葉をつらねたのは事實であるが、それは戰時に於ける聯合國同志の禮儀でもあつた。どの批評も、どの批評も、日本に於ては餘り知られてゐないが、倫敦では、これこそ日本の世界的畫家だと思はれてゐる Yoshio Markino の舞臺裝置と、西洋人の目には眞の日本の娘の代表的のものと見えた女史の姿と劇的動作をほめて、これこそ未だ曾て見ざりし日本の眞の寫實的舞臺であつて、タマキ（中にはタマリなどゝ書いたのもあつたと記憶する）さんの蝶々さんは、「將に女とならんとする少女」の姿であるなどゝ云つた。しかしそのほめられたアクティングは、日本の歌舞伎芝居の花魁が揚幕を出て花道にかゝるそれに類し、歌劇のアクティングとしてはわづらはしかつた。

扨て肝心の歌者としての女史については、批評家は一齊に聲量の不足を物足らずとし、デュエットに於て、ピンカアトン役のテノル歌ひの力ある聲に壓倒された事を認めた。女史が如何に之等の批評を按配して飜譯したかは知らないが、事實評者が多くの文字を費したのは其の日本人であるが故に面白しとし、又目新しきアクティングにかゝはるので、その歌については、甚だ筆を

さしひかへた傾きがあつた。

其後女史が亞米利加へ渡つてからの事は、新聞及び女史自身の談話以外何も知らないが、珍しいもの嫌ひの英吉利人と違つて、珍しいもの好きの亞米利加人が、箱庭の如き國だと考へてゐる日本のキモノを着たムスメを目の當りに見、その想像以上にもちんちくりんの歌ひ手を舞臺の上に發見した喜びは想像する事が出來る。殊にカルウソオの如き彼等の崇拜する英雄と並べて、メトロポリタン・オペラ・ハウスに女性の矮人を見る事は、曲馬の庭に於て大象に乘る小猿を見るが如き無邪氣な喜びであつたであらう。勿論女史の技倆は今も尙日本に於ては比ぶ可きものもないらしいが、さりとて如何な亞米利加人と雖も、うたひ手としての女史を、直ちにメルバ、テトラツチニと同列に置いて、世界的歌者だと讃美したわけではあるまい。

若し又或る人々が、眞にその技能に感服したとしても、外國人の批評には珍しいものに驚いた錯誤が多い。好例として見る可きは、矢張り戰亂を避けて倫敦にゐた巨匠ロダンが、恰もアルハンブラ劇場で、日本の女花子一座が生田葵山氏の作と稱する番町皿屋敷に似た芝居を演じたのを見て、これこそ眞の藝術であると叫び、昂奮の極花子を抱締めて接吻した事がある。ロダンと花子の間には特別の關係があつた事もあつたといふ噂もあるが、ヂャバの踊に美を發見したと同じ

く、あの貧しい演技にも、ロダンは自身の知らぬ技藝の世界を見出して驚いたのかもしれない。しかしその爲めに、旅藝人花子を世界的名女優であるとは云へない。

今は何處に居るか知らないが、これもその頃倫敦で喰ふや喰はずの生活をしてゐた某は、自己流の舞踊を以て其地の藝術家を烟に卷いた。それは全く衣食の爲めにも必要だつたらしいが、一夕或る美術家の畫室を借りて、彼は自作の舞踊を見せた。集る者は何れも選ばれたる藝術家で、彫刻家エプスタインの姿も見えた。舞踊の多くは露西亞バレを模したものだつたから、左迄の稱讚は得なかつたが、番組の中に日本舞踊狐踊といふのがあつて、花道を使ひ、狐の面をかぶつた舞踊者は、猫ぢや猫ぢやの手つきで踊つた。大喝采で、二度三度幕外に呼出された。見物は、それこそ日本の純粹の踊だと思つて感服してゐたが、當人の話では、動物園に出かけて覺えた、檻の中の狐の身振りを眞似したのだといふ事だつた。彼も其後亞米利加に行つて、方々の寄席で舞踊を賣り、傍ら藝術家仲間を烟に卷いて、天才呼ばはりをされ、氣の早い日本の新聞にも、一頃舞踊の天才などゝうたはれたが、惜むべしそのほとぼりのさめないうちに日本に歸つて來なかつたばかりで、未だ世界的人物とは祭り上げられないのである。

上記の如き間違ひは、外國人にとつては免れ難いところであらうが、その上に、外國でもては

やされる場合の多くは、日本人にしてはと云ふ條件附である事を忘れてはならない。

三浦環女史の場合の如きは卽ちその一例である。若し女史が日本人でなく、若しプッチニに「マダム・バタフライ」の作曲が無かつたならば、彼女は百人の數を數ふる合唱團の一員たるに止まつたであらう。

それにも拘らず最近日本に錦を飾り、右に夫をひかへ、左に伴奏者を携へ、一切の習俗を踏破つて、世界的歌者の名をほしいまゝにしたのは、向ふ見ずの強味と云はうか、お人よしの幸福と云はうか、世が世ならば重ねて置いて眞二つにさる可き身が、無批判國の無批判時代に其の運の旺んにして天に勝つたものであらう。

女史は自身の藝術の優秀を說いたばかりでなく、その容姿の美をさへ口づから宣傳した。自轉車に乘つて上野の學校に通つた柴田時代の女史は、持つて生れた浮氣らしさを加へて、人の目を引く可愛らしさを持つてゐたかもしれないが、今日のあの四十女の淫蕩なる肉附に、目も鼻も口も見えない程まるまるとした肉團子は、積極的に醜惡である。久米正雄氏が評して、マザア・ダウスと呼んだのは適評であつた。由來女は己れを知らないものであるが、それにしても餘りに厚かましかつた。

最後に最も滑稽を極めたのは、女史が知名の人を招いて一夕の宴を張つた事である。鳩山といふ女、澁澤大倉などゝいふ亂倫悖德兎れて恥なき男が、交々立つて喋つた。幾多の處女を犯した老人達は、論語を忘れて、此の歌者の夫を捨てゝ藝に走る事を稱揚し、世界的々々々を連發したのである。

それと相前後して、排日の映畫によつて名を成した早川雪洲夫妻が、同じく亞米利加から歸つて來た。自分は亞米利加にゐる間に、幾度此の連中の映畫を見て、國を愛する心から憤りに堪へなかつたかわからない。しかし彼等も亦世界的の折紙をつけられて、無批判に氣の早い連中によつて早川雪洲歡迎會さへ設けられた。すると又これに反對して、雪洲問責の會が組織され、船が横濱に着く時は、流血の慘事をさへ引起さうとした位である。

早川雪洲は何であるか。まぐれ當りに當りを取つた活動寫眞の役者に過ぎない。彼の技倆に至つては決して優秀なるものではない。日本人としての條件附で、珍しがられた事を忘れてはならない。

しかも此の世界的人物は、歸來甚しく芝居がかりの行動を取つたが、忽ち尻尾を出して、先の日には無責任に歡迎會を組織した人々に、今や糺問されんとしてゐるのである。彼が此の度の歸

朝を、一巻の映畫に納めたならば、好個の喜劇を成したであらう。

かくの如き滑稽はすべて無批判に起因する。僅かに外國の新聞に名をうたはれるや、直ちに世界的呼ばはりをする愚を愼み、眞に世界的と稱する價値あるものを生む爲めに努力しなければならない。現在に於ても、本質的に見て世界的人物は我國にも決して乏しくない。手近い例を文藝の方面にとれば、野口米次郎氏の如きは第一に此の稱呼を冠すべきである。若し、國語の障壁を除く事が出來るならば、明治大正に亙つて、世界の何處に出しても羞しくない作家は十指に餘る。紅葉一葉漱石鷗外獨歩の如きも勿論の事、現在に於ても泉鏡花永井荷風島崎藤村德田秋聲正宗白鳥の諸氏は、恐らくは世界的驚異を以て迎へられるであらう。徒らに世界的人物を製造する事勿れ。徒らに世界的人物の乏しき事を嘆く勿れ。靑い鳥は我家の籠に、靜かに韻律正しい歌をうたつてゐる。（大正十一年八月二十二日）

——「三田文學」大正十一年九月號

撒水車

生れたのは麻布の飯倉だけれど、五歳の年に芝に越して、三田で育つた自分である。慶應義塾を中心にして、次第に發展した附近の町々、田圃や空地が年毎に住宅地に變つて、やがて隙間も無い人口稠密の、繁昌の町になつた三十年間の變遷は、その間、健康な肉體の成長を制御しきれないで、飛廻り、あばれ廻つた自分の姿と共に、歴然として眼前に展開される。

明治の最後の年から數年間を海外に暮らし、歸つて來て一年たつかたたないうちに大阪にやられ、足掛三年の下宿住居の後で、再び東京におちつく事になると同時に、獨身者の新所帶を、赤坂氷川町に構へたのであつたが、其處には二月も居ないで、住み馴れた三田に引越した時、故郷に歸つたやうな氣のしたのは、あながち無理では無いのである。

家は、自分が長年お世話になつた慶應義塾の地續で、俗に稻荷山といふ大銀杏のそゝり立つ學

校の庭の眞下にあたる二階家で、家主は三田の福澤さんだつた。三田の大通から綱町、豐岡町へつながる一筋の、かなり繁昌する町筋で、小賣店が軒を並べた中に、三軒並んだ二階家が、三軒揃つてやもめだつた。右隣は小泉さん、左隣は小山さん、まん中に稍々見劣りのする自分が住んだのである。

小泉さんは、當主の信三君は結婚以來鎌倉に住んでゐるので、三田の本宅には女中相手にお母さんが住まつてゐた。頭腦明敏眉目秀麗を以て聞えた先代の小泉先生は、壯年にして世を去られたので、いふ迄も無くお母さんは、長の年月のやもめである。

小山さんは、福澤先生のお孫さんにあたる美しい夫人が、二人のちひさいお孃さんを殘してなくなつてから、數年間のやもめである。

その兩隣に挾まれて、既に婚期を過ぎんとしつゝある男やもめの自分が、二階四室、階下四室半の外に玄關の二疊を數へる、身分不相應な家に納まつた。傳へ聞くところに據れば、福澤先生の嫡男、卽ち現在の慶應義塾社頭の福澤さんが、新婚當時建てられた家で、その後自分の知る限りに於ても、正金銀行の鈴木島吉さんも住み、小山さんも新婚當時は此處に住んだ筈である。

「名士の住む家だなあ。」

と自分をからかふものが五指を越えた。

往來から見ると、亞鉛の塀で圍まれてゐて、三段になつた石段を上つて、格子戸の玄關にかゝる事になるのだが、間口の割に奥行は無い地勢だつた。稲荷山の崖が裏手に迫つてゐて、知らない者が見ると、その崖上の有名なる大銀杏さへ、此の家の構内のものゝやうに見えるのであつた。

本箱と自分は二階に住む事にきめ、玄關から右手の二室は、本來主婦が長火鉢でも据ゑ込んで、女中に小言をいひながらお茶でも飲んで居る室らしかつたが、其處は二人の女中の自由に任せた。日當りもよく、僅かながらも緣先に空地があつて、前住者が緣日で買つた草花を移したらしい花壇さへあつた。

玄關を上つて左側にも二室あつたが、裏手の方は日光が入らない上に、稲荷山の崖がのぞき込むやうに迫つてゐるので、水はけが惡く、濕氣る爲めか、根太が腐つてゐて、物の役には立ちさうもなかつた。おもてに向いてゐる八疊は、自分の食事をする室にした。緣先には一本の碧梧桐と、三本の瘦せた八手と、外に名の知れない樟科の樹が一本あつて、其の根方に、疊一枚に少し足りない位の瓢簞池があつた。と書くと相當の廣さらしく思はれるかもしれないが、決してさうでは無く、瓢簞池の廻りには散歩する餘地も無いのである。亞鉛の塀の外は直ぐに往來で、年を

經た此の家は、自動車や荷車が通ると、地震のやうに揺れた。

兎や角いふものゝ、馴染の深い三田で、身分不相應に廣い家に住んだのだから、その當座の喜びは大したものだつた。

ところが間も無く不愉快な事件が持上つた。それは塀の外の往來を泥海のやうにする撒水車にかゝはる事である。恰度引越してから二月ばかりたつた或日、留守中に、その撒水車を引張つて水を撒く人足が來て、撒水費は今迄貳圓だつたが、物價騰貴の今日それではやりきれないから、今後貳圓五拾錢にする、町内の他の家も承知したから、此の家も承知して呉れと云ひ殘して歸つたさうだ。

月給を貰ふと直ぐに女中に渡して、家計の事には一切かゝはらない自分は、それ迄毎月貳圓の撒水費を拂つて居たのを知らなかつた。毎朝勤務先に行く時も、毎夕勤務先から歸る時も、雨上りの泥濘と同程度に水を撒き、草履では歩けない程にする撒水車の暴虐を呪つて居た。天下の公道の事だから斯ういふ仕事はおかみの仕事であらうが、綺麗に手際よく撒いたのでは乾きが早く、又撒き直さなければならないので、横着をきめて居るのだらうと思つて居た。他所行のとりすました奥さんやお孃さんが、空氣草履では歩けないで、ところどころ水氣の少い所を拾つて、あら

れも無くふと股を出して跨ぎ跨ぎ歩いて行くのもみつとも無かつたが、芝浦邊の工場へ通ふ女工達の五人十人かたまつて、歩き悩んで居るのを見ると、聖坂の下の三叉路に立つて威張りちらして居る交通巡査は、何故に此の暴虐を許して置くのかと、義憤を發した事もあつた。それなのに、意外にもおかみの仕事では無く、吾々町内の者が金を出しあつてやつて居るのだと知つた時は、迂濶を恥ぢて呆然とした。

第一、東京市内で、今でも町内でそんな事をする所があるだらうか。隨分高い税金を拂つてゐるのだから、市の仕事として、當然水位は撒いて呉れる筈である。又、町内でやるにしても、月貳圓は法外であらう。しかも其の貳圓では足りないと云つて、更に五十錢增さうと云ふのだ。自分は此の町内の數十軒が、軒並に貳圓五拾錢とられるものと思つて、あさましい話だが、人足の收入を胸算用であたつて、その莫大なのを密かに羨んだ。雨の多い東京の事だから、撒かないで濟む日もあらう。さういふ時には家に寢轉んでゐて、小說でも書く事にして、いつそ月給取をやめて撒水人足になつた方がましだなどゝ、その時ふと空想した位である。

法外だ、確かに法外だと思ひはしたが、さういふ事に拘泥するのは嫌ひだから、爲方が無いと思つてうつちやつて置いた。然るに、誰しも法外だと認めるのであらう、御近所の親切な方が値

上の不當を論じ、一致して撒水拒絕をしようと申入れられた。其の人は此の撒水に就いて相當の研究を積まれたと見えて、町内の撒水史に通じ、且つ現在の撒水制度も細々と教へて呉れた。その話に據ると、むかしおかみが撒水の世話をやかなかつた時代には、此の町内の世話人が組合をこしらへ、各戸の間口に應じて每月の負擔額を定め、人足を雇つて一日三回宛撒水車を引張らせる事にした。ところが、月日の小車は小止みなく、追々おかみの手が行屆くやうになつて、區役所名入りの撒水車が市中をうるほして廻る事になつたので、町内で撒く必要はなくなつた。其處で世話人も相談して、撒水組合を廢止し、一切おかみにお任せする事になつた。驚いたのは人足で、明日から飯が喰へなくなる。彼は世話人に泣きついて、組合は解散しても、個人の商賣として續けて行く事を、大目に見て貰ふ事になつた。其の時から、甚だ變則なる撒水制度が、此の町内に殘つたのである。

萬事お任せして置けば間違ひ無くおかみで撒いて呉れるものを、人足が勝手に撒いてゐるので、いゝしあはせにしてか、又は人足の飯粒を取上げるのを氣の毒に思つてか、區役所名入りの撒水車は、此の町内の入口迄來て引返して行く。

町内の人の多くは、以前からの惰性で、詳しい事は何も知らずに撒水費を拂つてゐる。尤も組

合が解散したのだから、一理窟こねて、雨後まるまる拂はない者もあるかはりに、ちよいちよい目立たないやうに値上げして、澤山拂はせられてゐるのもある。最初自分が軒並に貳圓五拾錢だと思つて羨んだ程の事は無いのだが、小山さんや小泉さんは今迄が既に貳圓五拾錢で、今後は參圓に値上げされる運命が迫つてゐた。

御近所の親切な方の御話は右の通りで、又下の通りなのである。卽ち今度の値上げも、町內全體のあづかり知る所では無く、人足が自分勝手の目分量で、文句を云ひさうもないしもたやから增徵し、常日頃顏馴染の家には觸れないのださうである。

「實に怪しからん。第一、貳圓參圓の撒水費なんて法外です。府市稅よりも高いんですからね。何處に行つたつてそんな馬鹿な話はありません。」

と御近所の親切な方は話を結んだ。

「全くです。そんな事を見のがして置くおかみも怪しかりません。」

自分も悉く贊成した。あの撒水車がなくなれば、每朝每夕穿物を泥だらけにする事もなくなるであらう。他所行の奧さんお孃さんが、あられも無くふと股をあらはす事も免かれるであらう。芝浦通ひの女工さんは、草履の持ちがよくなつて喜ぶであらう。つまり此の機會に撒水拒絕同盟

に加入する事は、町民の責任であり、公衆に對する義務であると考へた。自分は一も二も無く、御近所の親切な方の御勸めに應じて同盟の一人に加はつた。

早速撒水拒絕を人足に通告したばかりで無く、たまたまお隣に遊びに行つた時は、小泉母堂にも此の話をし、此處でも贊成加盟を得て、よせばいゝのに代筆で、撒水拒絕通知を人足に發した。同盟が日增しに勢力を得て來る事は、甚だ喜ぶ可き現象であつた。

泡を喰つたのは人足である。文句を云ひさうもない甘口の連中だと見くびつて、値上げを申入れたところ、一齊に拒絕して來たので、元々必要に迫られた要求ではなく、横着根性から晚酌の量をふやさうと考へた仕事だから、ひとたまりも無く降參して、自分よりも口先の達者な女房を力にして、一軒々々謝まつて步いた。

女房の言葉によると、亭主は生來馬鹿野郞で、今度の事も他人におだてられて、默つて出しさうなところに無心をふつかけたのだと云ふ事だつた。

「決して値上げなんか申上げられた義理ぢや御座いません。」

と繰返してあやまつたさうである。

さういふ事は留守番の女中に聞いたけれども、何分撒水拒絕は單獨行爲では無いのだから、馬

鹿な亭主を持つた女房に免じて許してやつてもいゝとは思ひつゝ、同盟の義理合上今更拒絶取消は出來なかつた。

「何と云つて來ても、おかみさんが泣いて來ても構はない。水撒きはお斷りだと云へばいゝ。」

さう女中にいひつけて、自分は矢張り泥濘に毎朝毎夕悩みながら、月末になつて料金を取りに來たつて、いつたん斷つた以上はやるものかと、腹の中で考へてゐた。

すると、或日撒水人から手紙が來た。其の文に曰く、

拜呈撒水の事に付貴殿は從前の事を御存じの事に候か但し存じなきか存じなくばお話致さん此の撒水は大正四年七月十五日△△△△、××××、○○○○、□□□□、右四名の皆様が先に立ち町内皆々様に話しを致して今日に到る迄繼續仕る次第故左様御承知被下度就ては小生も只今は日に三回づゝ撒水仕る故貴殿方でも向の店にほこりのたゝざる様日に三回づゝ撒くよにして下されぱそれでよいのである故それに貴殿方を撒水致さぬからと云ふて今日に困る次第にはこれ無く故あへて撒水費を申受けたき事はこれ無き故小生撒水致す時は貴殿方にても水を表に撒き町内のめいわくに成らぬ様すべしそれに此後も有る事故貴殿の身分にかゝわる故右の様なる事は御面を願ひます

破格の文章の面白さ、たとへば宇野浩二氏の文章を讀む時のやうな氣持で讀了した。
「こんな手紙を寄越しました。」
自分は其の翌日顏を合せた御近所の親切な方に見せて笑つた。
「ふうむ、お宅には女房がお詫びには行きませんでしたか。私共ではあんまりうるさく泣言を並べるので元通りやらしてやる事にしましたが。」
事もなく先方は云つたけれども、自分は全く意外だつた。
「あたしとこでも女中がいやがるので、元の値段で承知してやりましたよ。」
味方に思ふ小泉さんでも、何時の間にか折合つてゐたのだ。さうとは知らないで、同盟の強固な事を信じ、手強くはねつけて通してゐたのは自分一人だつたのだ。人足が目の敵にして、手紙を寄越したのも無理は無い。しまつたなと思つたが、今更退くにひかれなくなつたのは、人足はこつちに手紙を出すと同時に、自分の本家――兩親の家に宛てても一通を出した事だ。その文句は、あなたのところの息子が近頃こつちの町内に引越して來たが、町内の迷惑をかへりみず、撒水費を出さない、甚だ不都合だから叱つて吳れと云ふ意味だつた。
「たかゞ僅かばかりのお金の事で、人足と喧嘩をしなくてもいゝではありませんか。」

と母は小言を云つた後で、それがお前の惡い癖ですよと云ふやうな、心もとない色を見せた。屢々人と爭ふ息子の身の上は、親心の心配の種に違ひ無い。

「畜生、やりやあがつたな。」

自分は本當に腹が立つた。自分に對して兎や角云つて來るのは差支へないが、年とつた父母に迄、つまらないいひがかりをつけた人足は許せなかつた。どんな事があつたつて、撤水拒絕だ、自分一人義理堅く拒絕してゐるうちに、何時の間にかみんな軟化してしまつたのも不愉快だつた。かうなつてはもう引かれない。母の云ふ通り、惡い癖には違ひないが、惡い精神では無いと思つた。

ゆくりなくも其時思ひ出したのは、これと同じはめに陷つた事が、今日迄に幾度あるかわからない事だつた。慶應義塾にゐた頃、簿記の教師が氣に喰は無いと云つて、級中がストライキをやる決議をした事があつた。當時全く人づきあひを避けてゐた自分は、その教師の何處が惡いのかちつとも知らなかつたが、見たところ虫の好かない事は疑も無いと思つてゐた。しかしストライキの面白さも中學時代に過ぎてしまひ、そんなお祭騷ぎはふつつり嫌ひになつてゐたから、なかなか相談には乘らなかつた。しかし大勢は決行に傾いて、最後に發起人が自分の贊成を求めに來

た。飽迄も排斥し、一學期、二學期、三學期――つまり一年間ぶつ通しのストライキだと云ふのだつた。簿記なんてものを大學校で教へなくてもいゝと自分は思つてゐたから、別段異を立てるまでもあるまいと思つて加盟した。但し全生徒が、きつと休みつゞけるのかと、幾度も念を押した。それつきり自分は簿記の時間は出席しなかつた。級中殘らず休みつゞけてゐるものと信じてゐた。ところが、何時の間にか、一人出、二人出、十人出、二十人出て、たつた一人の自分を殘して、みんな出席してゐたのである。しかし自分は一年間ぶつ通して休んでしまつた。

「又あの手にかゝつたかな。」

世渡りには第一に損な手を繰返す自分をかへりみて、心寂しくも感じたのである。しかし今更如何とも爲方が無い。自分は最後の通牒を人足に發して、飽迄も撒水を拒絶した。

その日から、自分の家の前丈は水を撒かなくなつた。一筋の往來を、東から西に、西から東に、ゆきかへりして日に三度撒水車を引張るのが、我家の前に來るとわざわざ遠廻りして向側に道をよけ、一滴もこぼすまいとするのであつた。花時から初夏へかけて、晴れても曇つても風の吹く日が多く、だぶだぶに水を撒いた部分には波が立ち、我家の前の乾き切つた部分は、渦を巻いて埃が舞ひ立つのであつた。

どろどろにこねかへす道に、たつた一箇所眞白な土の色は著しく目立つた。二階の窓からみると、東から來る人も西から來る人も、ぬかるみに難澁してゐるのが、その乾いたところにわざわざ迂廻して來て、氣安さうに穿物の泥を振ひ落して行つた。砂漠の中の綠地の如く、行人は喜んだらうと、自分は勝手な想像をほしいまゝにした。

人足はたまに往來で擦れ違つても敵意を見せて、故意に撒水栓を拔いて、水をはねかさうとする事も度々あつた。さうされゝばされる程、自分は彼の出やうによつては、往來でステッキを振ふ事さへ避け度くない氣持になつた。

或時は警察からさし紙が來た。朝早く呼出されて行つて見ると、道路法違反の件だと云ふ。外でも無い撒水の事で、水を撒かなければいけないと說諭するのだつた。そんな馬鹿な事は無い。元來撒水は市でやる可きで、吾々が人夫をやとつてゐるのなんか變則だと、むかつ腹を立てゝ辯じたら、係のおまはりさんはよくわかつた人で、成程々々と感服し、

「いや、わざわざお呼び出しして濟ませんでした。全くそれは市でやる可き事業でせうな。全く。」

あまたゝび頷いて釋放して呉れた。撒水人足が近所の交番の巡査をおだててやつた仕事だつた

さうである。

たゞ困つたのは、たつた一軒撒かない丈でも、矢張り向ふ側の店家には埃が多く舞ひ込むのか、今川燒屋の足の惡いおぢいさんが、跛を引きながら、大柄杓で溝の水をしやくつては、此方の前迄來て撒いてゐる事だつた。これにはつくづく弱つて、ほんとに町內の迷惑になつては申譯ないと思ふと、その町內にはゐたゝまれない氣がした。安樂な、我家に歸るやうな氣持で引越して來た三田なのに、又何處か外に移り度い心さへ動いた。それでも、此處迄爭つた以上は、どうしても撒水人足に凱歌はあげさせられなかつた。

えゝ爲方が無い、女中の苦痛にならないで、時間さへあれば自分自身でも取扱へる物を買つて來ようと心にきめて、臺所の水道栓から往來迄とゞく長い長い護謨の管を仕入れた。ぬるぬる蛇のやうに地面に這はせて、門の石段に立つて水を出すと勢よく噴き出して忽ち適度に往來を濡らした。決して撒水車のやうなぬかるみにはしなかつた。名案々々と悅喜したが、これは直ぐに巡查に差止められた。水道の水を往來に撒いてはいけないと云ふのである。

撒かないで居ると、幾度も幾度も巡查が來て、撒かなければいけないと云ふ。撒けば又水道の水ではいけないと云ふ。市で撒くのが當然だと云つても承知しない。要之、これも亦撒水人足の

入智惠か、勝手にしろと思つて突放した。それで自分は濟んだが、可哀さうなのは女中で、尚幾度も巡査の小言を聞かされたらしい。さぞかしわからずやの主人だと思つて自分を恨んだであらう。

春夏秋冬、春夏秋冬——二年二ケ月の間、一筋の往來にたゞ一ケ所の白い土を殘して、撒水車は東から西に西から東にゆきかへり泥濘をこねかへし、奥さんお孃さん女工さんその他いろんな人を惱まし、又その一點の白い土は、風の吹く度に埃をあげて、附近の家を惱ました。自分の心も亦、たつたその一點の白い土の爲めに、絶えず惱まされたと云つてもいゝ。平氣でその往來を通る事は無かつたのである。

今年の春青山に引越す事になつた時、自分が一番嬉しく思つたのは、その往來に別れる事であつた。引越した後で、たまたま舊居の前を通つた事があつたが、今度の主人は金貳圓也、毎月おとなしく納めてゐるのだらう、一筋の道は見る限りの泥の海で、折惡しく草履を穿いてゐた自分はすつかり惱まされたが、久しく氣にかけた一點の白い土を見ない事は、何となく大きな安心だつた。

しかし自分の本當の心は、今もなほ自分の取つた態度を是認してゐる。それは世の中を渡るに

は損かも知れない。損は損でも、此の世の中に無くてならない精神ではないだらうか。すべてが泥濘にまみれて、まみるゝに任せる時、御都合をしりぞけ、妥協を廢し、たとへ自分の心は寂しくとも、乾いた土として殘り度いのである。（大正十一年十月二十四日）

――「三田文學」大正十年十一月號

「明窓集」の序

明窓の下淨机にむかひて筆執る事を得ば心最も樂しからん　しかも塵勞多忙にして平日机にむかひて書を讀み筆を執るは多くは夜半人の寢靜まりし後なり　この集をさむるところの諸篇いづれも我が好まざる電燈の光の下に成りしもののみ　題して明窓集といふは願ひて及ばざる境涯をせめては偲ばんとする心のあらはれに過ぎず　はかなき駄洒落といふべきなり

大人の眼と子供の眼

あらゆる物を珍しく見、一切の物事に驚く子供の心はしあはせであると、何時始まつたのかはわからないが、自分は永年さう思つて居た。すべてほんとに在る物よりも、大きく、立派に、美しく見る子供の眼を、一昔もふた昔も前に失つてしまつた事が殘念だつた。

禽獸蟲魚草木天文時候——何から何迄日毎に新しく眼に觸れ、耳に聽く事が、未だ色情の惱ましさを知らぬ水々しい肉體の發育を刺戟するものゝやうに、全身に喜びを傳へたのである。春になつて木の芽が萌え、蒲公英、菫、茅花、土筆、五形花、蘩蔞、春菊その外さまざまの名前を覺えるだけでもひとゝほりで無い草むらに、蛇も蛙も蝶も地蟲も天道蟲も、いろいろの光り輝き或は又澁くゝすんだ背中の色をあからさまに、踊り、飛び、のたうつ姿の面白さ、百鳥は空に交り、けだものは地に孕む目のあたりの自然の姿を、人一倍大きい眼をみはつて驚き眺めたのは誰だつ

たか。行く春の物の哀れを知るよしもなく、夏は又池の金魚の浮藻に腹をこすりつけ、夕焼の空の軒端に蜘蛛の巣を營む事を只管不思議に思ふばかりであつた。秋、天の川の遠く迄心を誘ふ夜、蜻蛉、松蟲、竈馬、鈴蟲、蟋蟀、がちやがちや、すいつちよの啼きかはす聲に耳を傾け、更に又目に觸るゝすべての物のすがれ行く冬が來て、やがて樂しい正月を迎へる事を何よりも待遠しがつたものである。すべてが單純に樂しかつた、笑ふ事も、泣く事も、怒る事も、山清水の湧くやうにせきとめられずにほとばしり出た。

しかし、そんな事よりも、もつと深く心を動かしたのは、矢張り人間である。小説家になる下地は充分あつたのであらう。しかも其の人間をつくづく感心して見たのは、生きた實物によるよりも、幼い自分が好んで集めた錦繪の影響の方が先だつた。繪草紙屋の前では自分の足は動かなくなつた。駄々をこねて、どうしても購はなければ承知しなかつたものである。剛健なる明治初年の人々の觀賞に適した筆力餘りある月岡芳年の畫風には男性美を感じ、新時代の文明漸く根ざし深くなつた時代の好尙にかなふ優婉なる水野年方の三十六佳選に女性の美しさを知つたのは、たゞに審美眼の芽生ばかりでなく、同時に英雄崇拜女性讃美の第一步であつた。

〔三十二字略〕金毛九尾の狐が美女とあらはれて宮殿にかしづく事も、凄艶極りなき事として、眞

僞を疑ふ心などは起さうとさへしなかつた。〔八字略〕太閤樣はその次に偉く、武將は強く、學者は知らざる事なく、女は誰しもやさしき心を持ち、大人は誰でも子供より偉いのだと確信して居た。

さうして、その美しいと思ひ、又偉いと思ふ事は、批判を超越した絕對のものであつた。曾て「貝殼追放」のひとつとして「女人崇拜」と題する一文を公にしたが、それは自分の幼い時、世に女程やさしく美しく、一切の邪惡な心に遠いものは無いと思つた儚い夢想の回顧である。

家の前の原つぱは、築山や泉水のある我家の庭よりも廣々として面白く、町つ子と遊んではいけないと嚴しく云はれながら、每日々々拔け出しては、その町つ子と遊ぶのだつたが、何事にもませて居る町つ子の一人が、女性に對して侮蔑の言葉を用ゐた時、自分は心の底から憤つて相手にむしやぶりつき、遂々泣かしてしまつた事さへあつた。それ程女を尊びなつかしんだ。

あまりに尊びなつかしみ過ぎた反動として、夙に幻滅の悲哀を感じ、大人になつた今日此頃は、女の淺はかな事がはつきりとわかり過ぎて來た。但し自分の女性觀は、他の機會に披瀝する事にして、玆には全然除く事にする。

これも町つ子に教へられたのだつたが、往來を通る見ず知らずの馬車の上の人や車の上の人に

おじぎをして、先方がうつかり禮をかへすと、手をうつて喜ぶいたづらがあつた。日清戰爭の頃で、且つ陸海軍の軍人の澤山住んで居た土地柄、勳章をぶらさげて意氣揚々として通る將校が多かつた。向ふの方から、金モオルを光らせて來る姿を見ると、車の前につかつかと進んで、帽子をとつたりして得意がるのであつた。子供のいたづらと知つて、すまして通り過ぎるのもあり、笑つて行くのもあるが、中にはおあいそに禮をかへすのも、又うつかり誘はれて本氣で手をこめかみに上げる人もあつた。偉い大人が自分達の相手になつて呉れた嬉しさと、偉い大人を相手にさせてやつたといふ力量をほこる心持が、ちやんぽんに心の中で躍つた。たつた一人、幾度繰返しても、うかとは手に乘らない苦手があつた。其の頃は少佐か中佐か、いくらよくても大佐だつたらうが、後の海軍大將伯爵山本權兵衛である。毎日馬車に乘つて、參謀の徽章を胸にかけて通つた。不思議に子供も名前を知つて居て、權兵衛が來た來たと口々にしめしあはせながら、先を爭つて帽子をとつて頭をさげた。しかし權兵衛さんは、頰髯に埋まつた青白い顏に、陰性の凄い眼を光らせて睨みつけるばかりで、微笑を浮べた事さへなかつた。

「權兵衛が種蒔きや鴉がほじくる………」

と子供達は口惜しがつて、馬車のうしろから追つかけながら、はやし立てるのがおきまりだつた。

斯う書いて來て、話が甚だ横道にそれた事に氣が付いた。自分が茲に記さうとするのは、權兵衞さんの面影では無く、同じく其の往來の出來事で、永く心に殘つて忘れられない白馬に乘つた人の事なのである。それを、子供の眼が、如何に實際在るよりも美しく見たかといふ例證のひとつにしたいのである。

夏の日の事である。門前で遊んで居ると、遠くから埃をあげて、まつしぐらに白馬をかけさせて來る人があつた。西洋の狩獵の繪に見るやうな黑い鳥打帽子をかぶり、霜降の乘馬服に足ごしらへもすつかり本式なのが、鞭は手綱と共に手に持つて、心持前屈みの姿勢を崩さず、振向きもしずに通り過ぎた。僅かに一瞬間の事であつたが、子供の眼には仰ぎ見る馬上の姿が、天(あま)かけるやうに聳えて高く見えたのである。

「いゝなあ。」

子供は一齊に感心して、見る見る町角に消えて行く白馬の行方を見送つた。

「おいらも今にあんな馬に乘つかるんだ。」

一番頓狂な乾物屋の子は、ありあはせの竹の棒にまたがつて、其處いら中をかけずり廻つた。

「馬鹿、てめえみたいな鼻つたらしが馬になんか乘れるもんかい。あの人なんて百圓の月給取な

んだぞ。」

年かさの車屋の子は、はしやぎ切つて汗を流して居る奴を叱りつけた。

「百圓？　おつかねえ、おつかねえ。」

乾物屋の子は目をまあるくして、おどけた顏を突出した。

「百圓の月給だつさ。」

周圍の者も口々に驚嘆の聲を發した。驚く外に何等の考も浮ばない程、當時の子供の頭には、百圓と云ふ金が大金だつた。口でこそ百圓と一口にいふけれど、其の分量も値うちも、到底想像出來なかつた。

その連中にまじつて、自分は聲こそ出さなかつたが、心密かに驚嘆して居た。自分も大きくなつたら、あんな立派な馬に乘り度いが、百圓の月給取にならなければ駄目かと思ふとがつかりした。いつたい世の中に、どういふ人が百圓なんていふ莫大も無い月給をとるのだらう、大將かしら、大臣かしら、いろいろ考へたがわからなかつた。話に聞けば自分の父も、自分が生れない先に役人をして居た頃は、馬に乘つて役所へ通つたさうだが、どうも百圓の月給取ではなさゝうに思はれる。しかし、萬一父が百圓の月給取だつたら、どんなに嬉しい事だらうと、その事ばかり

考へて居た。

夕方になつて。

「蛙が鳴いたからかへろ。」

と吾勝ちにいひながら、お腹を空かしてうちに歸つたが、自分は直ぐに母の所へ飛んで行つて、父の月給がいくらであるかを訊いた。

「何故そんな事を訊くのです。」

「何故でもないけれど、百圓?」

母は默つて自分の顔を見てゐたが、

「そんな事を訊くものではありません。」

と云つたばかりで取合はなかつた。金錢の事を口にするのは卑しい事だと、おちぶれ士族の娘である母は確く信じて居て、平生から子供達にいひきかせてあつた。

それつきり自分は口をつぐんでしまつたが、たつた一瞬間にして通り過ぎた丈の白馬鞍上の紳士の姿は、一生涯忘れない程爽かに眼に殘つた。どうかして、自分も大人になつたら、偉い人になつて百圓の月給取にならうと、恰も天下を望むやうな大きな事として考へてゐた。百圓の金高

は、廣大無邊に思はれたのである。
或時母方の叔父が來て、自分は其の膝の間で遊んで居たが、ふと思ひ出して訊いて見た。
「叔父さんはうちのお父さんの月給いくらだか知つてる？」
叔父は不思議さうな顏をして見下して居たが、目尻に微笑が浮んだので、自分は安心して重ねて訊いた。
「百圓よりも多い？　少い？」
「多いとも、倍も三倍も多いだらう。」
自分は嬉しさに顏が紅くなる位だつたが、あまり無雜作に、且つ意外な返事だつたので、半信半疑だつた。
「それぢあ叔父さんは？」
「叔父さんか。叔父さんは百圓の半分の又半分位かな。」
さう云つて太い聲で笑つた。
父の月給が百圓より多いらしく思はれて來た事は、やがて自分も白い馬に乘る事が出來さうな氣持を起させた。嬉しくて堪らなかつた。さうして、さういふいゝ返事をして呉れた叔父が、矢

張り偉い人に思はれた。叔父さんの月給が、百圓の半分の又半分なんていふのは嘘に違ひ無い。嘘だからこそ後で笑つたのだと思つた。

その馬上の紳士の姿は二度と見た事が無いが、それから三十年たつて、自分は百圓の月給取になつた。その時自分は馬に乘るどころでなく、一家を構へる力も無く、下宿屋の二階にくすぶつて、常に懷中の乏しさに難澁し、朝夕滿員の電車に鰯の鑵詰の姿をして乘らねばならぬ身の上だつた。勿論物價の驚くべき騰貴と、貨幣の購賣力の變化は計算外に置く事は出來ないが、しかし子供の時に考へた百圓は、今日の壹萬圓よりも拾萬圓よりも百萬圓よりも莫大なものであつた。

上に引合に出した叔父についても、英雄崇拜の思ひ出がある。叔父は慶應義塾を出て、郵船會社に勤めて居た。海上勤務の頃は、事務長をしてゐたのか、或はその下役の事務員かは知らないが、歐洲航路の船に乘つて、屢々珍しいお土産を持つて來て呉れた。六尺近い大男で、日本人には類の無い白皙の面に、稍赤味を帶びた口髭をはやして居た。それが金筋の入つた正服を着て、當時はまだ珍しかつたバナナだのパイン・アップルだのの籠を提げて歸つて來る姿は、自分の異國趣味を充分滿足させた。文明開化といふ言葉が流行し、何品でも質のいゝ物は上等舶來と唱へた時代だから、西洋といへば何よりも美しい國に想はれた。自分は叔父にせびつては、歐羅巴の

港々の話を聽かして貰つた。
しかし叔父を崇拜するのは、單にそればかりでは無かつた。それよりも、叔父の投げる小石が子供の眼には判然と距離のはかれない程遠く迄飛んで行く事に敬服して居たのだ。
叔父の家は木挽町の田川といふ待合の隣にあつた。二階一室に階下が三室位の小家で、自分から見れば祖母に當る母親と、自分から見れば矢張り叔父でまた高等小學校に通ふ位の年配だつたから亘叔父さんと呼んで居た叔父の弟と、臺所を働く婆やとで暮らしてゐた。涙脆く、金錢にしまりの無い、お調子に乘り易い性質を多分にうけついだ自分は、まぎれも無く母方の血を引いてゐるので、子供の時から此の祖母の御贔負だつた。悧巧な兄は父方の祖母のほめ者だつたが、母方の祖母は自分をつかまへて、お前は兄さんよりも吃度偉くなるよと、無責任な事を云つて可愛がつて呉れた。時々そのお祖母さんの寢顏が狸に見えて、夜中に泣き出す事もあつたけれど、年中泊りがけで遊びに行つてゐた。二階の緣側に置いてある籐椅子の上に足を投出して、目の前の川を漕下る端艇を見るのが樂しみだつた。夕方叔父が會社から歸つて來る頃は、祖母に手を引かれて河岸に出て待つて居た。大男の叔父の姿が見えると、自分は祖母の手を振切つて、半町ばかり先の或金持のお妾の家の門前迄かけて行つて、叔父の手に縋りつくのであつた。

此の甥を喜ばせる爲めに、叔父は小石を拾つて川水の上に遠く投げて見せた。眞似をして投げる豆叔父さんの石は川の眞中位で水に落ち、更にその眞似をする自分のは足下の淺瀨に水音を立てるのであつたが、叔父のは向ふの海軍大學の石垣にぶつかるのであつた。その向岸は幼い者には非道(ひど)く遠方に見えた。早く叔父さんのやうに大きくなりたいなあと、つくづく感じたものであつた。川を越えて石を投げ得る人は、あらゆる事の勇者であるやうな氣がしたのである。

叔父は其後友人の爲めに連帶債務をしよつて東京にはゐられなくなり、各地を流轉したあげくに、殆んど誰も知らないやうな狀態で、北海道で死んでしまつた。

つい近頃往年の木挽町の河岸をぶらついた事があつた。聖人ぶつて得意になり、平民がつた自慢をしながら、死ぬ間際には爵位を貰つて大往生を遂げた心卑しき金持の妾宅はなくなつたが、田川は愈々商賣繁昌らしく、向岸の海軍大學の景色も昔通りだつた。だが甚しく意外に思つたのは、川幅の至つて狹い事だつた。子供の時に見た大人の偉さと同じく、大人になつて見ると大したものではなかつたのである。

祖母も叔父も豆叔父も今は世になき人であるが、叔父の住んでゐた家は以前のまゝに殘つてゐて、知らない人の表札がかゝつて居た。低徊去るに忍びない心持もあつたが、幸ひ附近に人影も

見えないので、足下の小石を拾つて向岸迄投げて見た。別段力を入れないでも、無雑作に石垣に屆くばかりでなく、樹木の繁つた校庭にも樂々と投込む事が出來た。二つ三つ投げ、最後のひとつをもう一度石垣に叩きつけた時、

「誰だッ。」

と校庭から怒鳴つて、灌木のしげみを押分けて顔を出した人があつた。自分ははしたない所爲を恥ぢて一散に逃出した。

遂に自分も大人になつた。しかし、あれ程迄に崇拜した大人が、いかに馬鹿々々しいものであるかを夙に知つてしまつた。あらゆるものに驚嘆し、すべてほんとに在る物よりも、大きく、立派に美しく見る子供の眼を失つた事を悲しみ、永い間その子供の頃の回顧以外に、心から自分を喜ばせる事が無かつた位落膽した。

言葉を換ていへば、盲目的な憧憬の甘美に醉つた自分をなつかしみ、實際の世の中の美しくない事に悲觀し、著しく懷疑的になつたのであつた。

ところが最近になつて、自分には更に新しい眼が開かれて來た。それは完全に發達した大人の眼である。徒らに物事に驚かず、よきものと惡き物の區別を知り、あらゆる物の價値を正當に批

判し、しかも尙熱情をもつてよき物を喜ぶ大人の眼が、無批判の憧憬讃美を事としてゐた單純極まる子供の眼に勝る喜びを持つ事を悟つて來た。

それは物の本體を見極める眼である。價値批判の眼である。單に生々しい色彩に眩惑されるのではなく、光と共に陰影を見る眼である。單に事物の分量に驚くのではなく、その質を吟味する眼である。子供の眼が夢を見る眼ならば、これは實在を見る眼である。それが幻影を見る眼ならば、これは現實を見る眼である。深く、鋭く、冷靜に、世態人情の一切に迄視線の及ぶ眼である。

確かに線香花火のやうに容易に熱し、忽ち火花を散らす感激はなくなつたが、同時に又贋物にのぼせ上り、くはせ物にだまされる事のなくなつたのが、大人の眼の効果である。凡て今日の世の中の如く、不正直なる自己宣傳の流行する時、その聲の大なる事に驚いて、批判の心を忘れる傾向のあるのは否み難い。

たとへば普通選擧を叫ぶ政治家の多くが、必ずしも眞に普通選擧の實施を希望してゐるのでは無く、單に反對黨を苦しめる爲めの手段であるとしても、その聲の大なる時、人は何等の疑を起さない。プロレタリアの藝術を說く者の中にも、必ずしもプロレタリアの藝術とかいふものに信仰を持つ者ばかりでなく、中にはどうにかして文壇の地步を占め度いが、さりとて順當に勉強し

てもとても見込みが無いから、變つた旗印でしかも存外現在の人氣にかなひさうな此派に屬して、新聞の文藝欄を賑はしてゐる者があるであらうが、そのがむしやらの暴言に釣込まれて、これこそ新時代の藝術であると悅喜するものが無くもない。新聞一面をつぶして忠義孝行を說く有田ドラッグは、矢張り梅毒淋病の藥を賣廣めるのが目的で、忠孝はその馬鹿々々しく且つ巧妙なる手段であると氣のつかない人も澤山ある。

これらは皆永久に子供の眼を持ち、遂に大人の眼の開かれぬ人々ではないだらうか。宜なるかな、在野黨は常に憲政の神樣と思はれ、原稿の押賣をする者は新進作家と思はれ、有田ドラッグは國民道德の師表と思はれるのである。近頃の言葉でいへば、宣傳の力に壓倒されて目のくらんだ狀態である。本體を見極める大人の眼を持つてゐないのである。例を手近なところにとれば、作品の眞の價値如何に拘らず、改造社新潮社越山堂の大がかりな廣告に引かれて、下らない小說や誤譯だらけの飜譯に殺倒するたぐひである。往年德富蘆花の「不如歸」は、上流家庭の祕事に材料をとつて安價なる女學生の涙をしぼつたが、今日かへりみて其の作者、その作品が明治の文壇に與へた影響と價値を考へて見ると、殆ど何も無いと云つて差支へない。近年「死線を越えて」の作者賀川某は、貧民の友達として一身をさゝげ盡くす熱情愛すべき人ださうである。しかし其の

人の藝術の作品は蕪雜冗長衒氣稚氣滿々たるもので、失笑を禁じ得ざるものである。しかも勿驚數百版を重ぬる所以は、その題材が南瓜、燒芋、紅、白粉の如く女好きのするものだからには違ひないが、大部分の力は、萬事今日を目安に置く商買主義の雜誌社の大廣告に釣られる無批判人の罪と云はなければならない。此の類の事は擧げて數ふるいとまなく、今日作家の名聲は雜誌社によつて作られ、眞の批評家によつては形成されぬ事實がある。

いゝ年をして子供の眼を持つ人間は、其人間自身にとつては幸か不幸かしらないが、少くともよりよき世の中へ進む爲めには、斯かる存在はわざはひである。

自分はおもふ、今日の世の中に何が一番はびこり過ぎてゐるかと云へば、女と子供を相手にする新聞雜誌と、子供の眼しか持たない人間である。大人は早く目覺めなければならない。物事の本體を見極め、價値判斷を明確になし得る大人の眼を持たなければ、此の國は救はれない。（大正十二年六月四日）

――「改造」大正十二年七月號

「含羞」の作者

「含羞」(がんしう)は小島政二郎(せいじらう)氏の處女作集である。「オオソグラフイイ」と題する一文によつて名を知られてから、既に六七年を經過して、始めて第一集を公にするに至つたのは、近頃の事にしては極めて珍しい。二つか三つ小說を發表すると、忽ち新進作家とそやされて、商賣上手の本屋から出る叢書の一冊に組入れられ、いゝ氣になつて納まつて居るうちに、勉強心は失ひ盡し、何等の進步成長も無く、いつの間にか頭腦(あたま)も心も腐つて、やがて存在を忘れられてしまふ例が多いのに、これは餘りに遲過ぎる感がある。作者が自重して居た爲めであらうか、作品が左程勝れてゐない爲めであらうか、それも確かにあるには違ひ無いが、それよりも、作者に人氣の無い事が第一の理由らしい。

評者が小島氏の名前を知り、同時に書いたものを始めて讀んだのは、大正五年十一月發行の「三

田文學」に出た、前掲「オオソグラフイイ」である。鷗外、漱石、荷風、藤村、花袋、秋聲、白鳥其他當代の大家を例にとつて、現代の作家の誤字、當字、假名ちがひを指摘したもので、多少の憤慨と、幾分の揶揄嘲笑と、更に些少ながら得意さうな調子を含んだ文章であつた。誤字當字假名ちがひを、年が年中やつて居て、正に内心不愉快に思ひながら、今更勉強して直さうとする心懸も無い自分の如きは、此の正字法を讀んだ時、うるさいぢゞいが出て來たなと、ひそかに眉をひそめた一人である。ひまな隱居が文學者をいやがらせ、得意になつて居るのだらうと想像して居た。ところが、それが未だ若い學生だと聞知つた時は、甚だ意外に思つた。果して眞面目ならば、近來稀なる篤志家である。からかつて得意になつて居るのなら、此の上も無く氣障な奴である。自分はさう云ふ氣持を起した。

　然るに其の次の號の同じ雜誌を見ると、「森先生の手紙」といふ題で、前號に於て假名づかひの誤謬を指摘した鷗外先生から「教示を煩し度」云々といふ頗る眞面目な手紙を貰つて、恐縮し又感激した事を書いて居る。意外な手ごたへと、相手が一代の碩學なので、自分の所論が正しいか如何かを考へるよりも先に、まづ恐縮した樣子が、ありありとうかゞはれた。「かへすがへすも身の程知らぬ御無禮申上候事空恐しく重々お詫び仕候」といふのが、決して形式的な禮儀の言葉で

は無く、其の時の小島氏の心持を、ほんとに正直にあらはして居るやうである。
「森先生の手紙」を讀んだ時、これは存外感心な人かもしれないぞと、自分は思ひ直した。彼は其の文章の中で、森先生の手紙に接し、一層正字法に身を委ね度いと、十分熱のある言葉で繰返して居る。恐らくは鷗外先生の手紙は、彼の勉強心を刺戟した事尠くなかつたのであらう。
此のいきさつは、自分の見る小島氏を最もよく物語るものである。彼には多分の茶目氣分もあり、おつちよこちよいの所もないとは云へないが、同時に又純なる感激と、熱心な研究心を以て、事に當らうとするいゝ精神もある。その後の氏の文人としての爲る事の上にも、此の點は明かに現れて居る。面倒臭い正字法に熱心になり得るのと同じ精神で、糞眞面目にねつい研究もするかと思ふと、時々は雜兵葉武者と身をおとして、下らない機智を振廻して喜ぶ事もある。いゝ半面と惡い半面を持つてゐて、惜むらくは兩者がまるつきり別々に、勝手氣儘に活躍する場合が多いのである。どちらの途にもおいそれと方向を轉じ、どつちに行つても相當の喝采を博しさうな危險性を帶びて居て、根強い持續性を缺いてゐる。おもふに、將來此の作者が深く廣く大きい藝術境を開拓して行く爲めには、當分の間、かなりの辛抱と、手痛い刺戟が必要らしい。さうでないと、徒らに仕出しに使はれる憂がある。捕吏の役をうけたまはつて、身輕にとんぼを切らない

とも限らないのである。

小島氏は東京下谷に幾代か續いた商家に生れたのださうである。その土地のさういふ家のあらゆる傳統が、生れない前からの魂に宿つてゐる。生れてから、主として學校で受けた教育と、自身志して勵んだ學問とは、氏の生れない前から持つてゐるものとはまるつきり反對の方向にむかつて居るらしい。渾然として融合されて居ないやうである。此の點に於て、同じ下町の作者でもお隣の淺草の詩人久保田万太郎氏とは全く趣を異にしてゐる。

久保田氏は、生れない前から魂に宿つてゐる傳統を愈々はぐくみ、自分自身の氣分に執着し、その氣分に少しでもそぐはないものには、一切目をつぶつてしまつて、柄にない事には手を出さない。其處に獨特の藝術境を展開するが、一面から見れば、描かれる世界は極めて狹いのである。たまたま埒外に出ようとした事も無くは無かつたが、忽ち失敗した。聰明なる作者は、爾來自分の持味に對して、全く貞節を盡す人になつた。言葉を換へて言へば、破綻を招くおそれの無い道を固守して居るともいへる。夙に完成した作家として推稱される所以である。

然るに小島氏は生れたる環境に眤み、其處に安住の地を見出す事の出來ない人である。寧ろ自分の持つて居ない物に憧れる傾向を帶びて居る。従而、絕間の無い不安動搖焦躁が、弱い心を苦

しめて居るに違ひ無い。これを乘切らなければ、進歩の道は開かれないのである。
自分の生れた環境に眤んでゐられない人の眼は、常に自分以外の世の中に向けられる筈である。小島氏にとつては、何よりも先に、未だ知らざる事を學び知る事が興味であるらしい。知識が第一のものであつた。

知識慾の強い事、それは正字法に興味を持つ事にもあらはれて居る。從つて氏の作風は、描かれる世界の情趣に溺れるのでは無く、描かれる世界を物語るのである。常に讀者の存在を忘れないで、如何にすれば話の筋が、最も明白に傳へられるかを氣にしてゐる。氏自身は立派な描寫を試みてゐる積りでも、說明に傾き度がる結果になる。

僞善か、僞惡か、何れにしても自分の事を題材にして、肯定したり否定したりする事の好きな現代には珍しく、小島氏には自傳風の作品が殆んど無い。此の知識慾の強い作家には、よく承知してゐる自分自身の事などは、左程興味が無いのであらう。斯ういふ傾向は、鷗外先生にも芥川龍之介氏にも見る事が出來る。

自分以外の未知の世界に興味をあさる當然の結果として、小島氏の作風は客觀的である。殊に初期の作品は、全然作者の批判を挿(さし)はさまない寫生文の脈を引いてゐる。氏の書いた物を見ると、

子規、虚子、節、三重吉など「ホトトギス」の連中又はその連中の親類のやうな連中に敬服して居た時代の、かなり長かつた事は明白であるし、處女作「睨み合」には、寫生文を手本にした厭味が多分にある。

「睨み合」は、流石に幼稚なところは免れないが、氏の作中勝れた物の一つである。稍型に入り過ぎた感はあるけれど、隨分澤山の人間が手堅く描き分けられて居る。就中加藤屋といふ店の娘がいゝ。喧嘩する二人の女房の、條理の立たないいひ分なども、小商人の軒を並べる下町に特有の地方色が出てゐて面白い。若し久保田氏ならば、その地方色に終始し、その情趣に溺れんとして危く踏止まるところ迄入つて行くであらうが、小島氏は全然離れて書いて居る。向河岸の火事を、無責任に見てゐる態度である。そのかはり、此の小説に描かれた町内一體に作者の觀察は行きわたり、たゞ些か知的に滑稽化した。

觀察——詳くいへば、作者の心を少しも動かす事なき觀察は、最初小島氏のとつた態度である。主情派の作者に見るが如き、作品全體の布置結構を考へる暇も無く、先づほとばしり出る情熱を、片端から文字にして行くと云ふやうな態度は、年少にして筆を執つた人にも似ず、最初から持合せて居なかつた。評者は自分自身のむかしと想ひ比べて、斯う迄違ふものかと驚くばかりである。

どつちがいゝか、一口には云へない事だけれど、あんまり若い時分から危氣の無さ過ぎるのも羨しくないと思ふ。小島氏の作品に若い讀者を引つける所が無く、從つて人氣の無いのも此の故であらう。

いづれにしても、觀察の行届いた「睨み合」は冗漫とたどたどしさの目立つにも拘らず、よく描き、よく纏めた作品として推稱し度い。

「法隆寺のかへり」になると、文體の上では、かなり寫生文脈を振捨て、當代の小説の型にはまつて來てゐる。しかし觀察の問題になると、矢張り寫生の域を脱し無い。或は此の人生に對する作者の態度が、寫生的だといふ可きであらうか。

奈良へ行つた「わたし」が、法隆寺のかへりの汽車の中で、人も無げな小生意氣な中學生と乘合せ、不愉快なおもひをさせられて腹を立てゝゐるうちに、その憎らしい中學生は、車から落ちて轢殺されるといふ事件である。とつてつけたやうな「わたし」の哲學をどければ、上手に出來た短篇である。しかし、生意氣に車內を飛廻る中學生に對し、又死體となつた中學生に對し、「わたし」は立腹したり、苛々したり、憎んだり、腹癒せをしたやうな氣持になつたりして居るが、意外な珍事の突發した際にも、決して吾を忘れはしない「わたし」が主になつて、附近の光景が從に

なる事は無く、あく迄も「わたし」は觀察者であり、寫生家である。

凡そ大體論として、藝術家は燃ゆるが如き熱情を、持てば持つ程結構であるが、同時にその作品には、或點迄の客觀化が大切である。同じく客觀描寫を事とする作家の中にも、大略二種の型が想像される。甲は、熱し易い自分自身を無理に抑へて置かなければ、自己の感激に作品全體を押流されてしまふ傾向を持ち、乙は最初から冷靜に、別段の無理も無く、おのれが顏を出さずに、見る儘に描き得る人である。小島氏が第二の型に屬する事はいふ迄も無く、あく迄も氏は見て描く人なのである。其處に此の作者の特徴があると同時に、作品の底力の無い短所がある。何處迄も寫生の域を脫し切れない齒がゆさがある。

もう一つ例を擧れば、明治大正の文學を見ても、自然主義勃興以前の作品と、以後の作品とを比べると、各々の主義傾向の如何に拘らず、前者に比して後者が、此の人生を深く銳く細かく觀察してゐる事は爭ふ餘地がない。それと同じく、一個人の場合にも、或る關門を通過して來る事が必要である。最初からちひさく冷かに固まつてゐるのは好ましい事で無い。小島氏の作品に熱情の無い事が、永年評者のあき足らず思ふ所であつた。

記憶のよくない評者は、只今その典據を擧げる事は出來ないが、曾て小島氏が「どんな事でも

內容などは構はない。たゞそれがよく描けて居ればいゝのだ」といふ程つきつめた言葉を發表した事があつたと思ふ。それがほんたうの信念であるか或は一時性の感激から出たものか、多少の疑はあるけれど、兎に角或る時代の小島氏は、さういふ考を持つてゐたやうである。餘り分析をせず、漠然と、極めて通俗に、藝術の要素を內容と形式とに區別すると假定して、此の作者は明白に形式を重しとし、內容を輕んじた。

果して、內容なんか何でも構はない、よく描けてゐればいゝであらうか。否々、よき內容とよき表現とが結びつかないでよき藝術が生れる筈はない。此の誤れる考をいだいてゐた間の小島氏の作品に見る可きものゝ極めて少いのは當然である。

知識慾の強い、感じるよりも知る事の好きな、內容よりも形式を重んじ、オオソグラフイイにこだはり、寫生文畑に育つた觀察者こそ、第一期の小島氏で、此の時期に出た十數篇の小說は、何れもその果實である。

「一枚繪」は相當苦心したらしく、或は所謂自信の持てる作品かもしれないが、かなり熱心に繰返してゐる說明的描寫も、効果はちつともあがつてゐない。殊に此の作にあらはれる艶めかしい筈の場面が、些かたりとも艶めかしくない。儒者に好色本の講釋をさせてゐるやうな窮屈を感じ

る。又此の一篇の骨子ともいふ可き、人間の心の奥底に潛んで居る「不思議な力」、それによつて主人公徳さんは、一時は此の世の中の迷子になりかけてゐたのが、ほんとの徳さんにかへるのであるが、讀者が其の力を感じて頷くには餘りに弱い。恐らくは作者は描く事に急にして、此の大切な力を痛感しなかつたのであらう。結局上（うは）つらの筋を賣るお話以上に出なかつた。

お話といへば、講釋種の「森の石松」でも、同じく石松の心に起る「或る力」について「もう身を全うする氣は毛頭なかつた。いや、毛頭なかつたといふよりも、彼には分らない或る心持が、彼をこゝにじつと隱れ通す事をさせなかつた。彼の敵の前へ無理にも押し出させるやうな或る力が彼のうちに潛んでゐた。」と説明してゐる。しかし其の「或る力」は、作者の説明解釋としてはうけとれても、主人公石松自身の心の中に起つた力であるとは感じられない。作者の技倆の問題かも知れないが、一面から見れば、之を説明するばかりに骨を折つて、先づ痛感した後の説明でない爲めに、人を感動させる力を缺いたのであらう。

小島氏が表現を重んじ、描寫を尊ぶ事は上にも述べた。しかし、人は必ずしもその志す事を得意とはしない。作者は「森の石松」を、新講談並には考へて居ないのに違ひない。少くとも、「よく描けばそれでいゝのだ」といふ意味で、描寫に價値を置いたに違ひない。だが、その描寫は、色

彩に乏しく、力が弱い。殊に此種の作品には是非とも欲しい新味が無い。形容詞さへ古めかしいものばかりである。

「萬引」も話の筋はよくあるやつで、これを藝術として活かすには、描寫の力にまつ外はない。少くとも、人間の助平根性を利用して、赤い蹴出の下の白脛を見せ、目尻の下つた隙に乘じて仕事をする手段を、昔のむかし考へ出し、且實行した開祖は非凡である。又その話を當時始めて聞いた人々は、くすぐつたい面白みを感じたのであらうが、今日となつては既に話が古過ぎる。誰しもきゝあきてしまつた。それなのに、小島氏の如き話好きが、今更こんなねたを持出したのは、ひとつの不思議と云つてもいゝ。多分これも、話なんか何んでもいゝ、うまく描けばいゝのだといふ議論から出立したものであらう。

其處で問題は再び描寫の出來榮になるのだが、不幸にして此の作も、如何にして萬引が行はれたかといふ型の說明以上に出なかつた。裾が開けて、長襦袢がちらちらして、やがて眞白な肉體が見える。その景色は誰にでも容易に想像出來るし、又誰にでも樂に描けさうである。さうして小島氏も誰にも出來る事を誰にでもやれさうな程度で描いた丈である。最も肝心な中番頭の姿は極めて影が薄く、又更に肝心な官能描寫は、あんまりありふれて居て利目がなかつた。

曾て小島氏は「官能描寫の才」と題する隨筆で、川柳子の手腕に敬服し、川柳の生命を說いて、「品のないところ、異端的なところ、インモオラルなところ」「はじめから品位を捨てゝかゝつてゐればこそ、遠慮勝な俳句では一指をも染めることを許されない特殊の世界へ、フランクな觀察の眼を向け、思ひも寄らない多面的なユニイクな世界を展開し得るのだ」としたが、氏の作「萬引」の官能描寫に於ては、あまり品がよく、あまりにモオラリステイツクで、又遠慮勝で且つ思ひ當る事ばかりを展開した。色氣の無い事と、堅苦しい事は、敢て此の一篇のみならず、その爲めにも氏には人氣がないのであらう。

話好きの一面を見せて、世の中には斯ういふ話もあるとか、又は或話をきいて面白がつた作者の心持のうかゞはれるものには、「大風の夜」「車掌」「醉つぱらひと犬の舌」などがある。いづれも其の話の持味が出てゐない。「大風の夜」の話をする酒のみの畫家の風格も、物凄い嵐の夜の光景も、あまりに雜報並である。「車掌」といふものは斯ういふ毎日を送つてゐるのだといふあら筋丈は飲込めるが、其處に當然なくてはならない話手卽ち車掌の人となりも、その車掌の生活してゐる人生の退屈も、作品の中に根を張つて居ない。「醉つぱらひと犬の舌」にしても、犬になめられた醉つぱらひが「俺は蒟蒻は嫌ひだよ」と云つたといふ話丈の興味で、「自己に強く執してゐる此

の醉どれの姿」など丶、香のぬけた七色唐辛のやうな哲學をとつてつけたのなどは、全然話の持味を知らない遣口である。

前にも述べた通り、小島氏には、生れながら東京の下町の傳統でみがゝれた肌合がある。機智に富み、警句に長じて居るのも都の人の特質である。しかし其の作品には、つとめて是等の長所と見れば見られるものを、かくさうとし、避けようと努力してゐる。小才を振廻すのは、藝術上大の禁物だと考へてゐるらしい。日常會話に於ては、隨分辛辣な口もきゝ、冷嘲熱罵もほとばしり出るが、藝事にかけては野暮堅く、寧ろ融通の利かない方である。尤も氏の活動の範圍は廣く、小説隨筆批評飜譯は勿論、歌も句もつくり、又小料理の庖丁さへ冴えてゐるさうであるが、最も力を盡くす小説の創作に於ては、眞面目過ぎて手も足も出ない形である。

少しく根本に遡れば、評者は「藝術は人にある」と確信し、よき作品をうむ爲めには、先づ自分といふ人間を磨きあげなければならない。作者卽作品となつて始めて藝術家は完成されるのだと考へて居る。自分以外の何處に自分の藝術があるものか。

ところが小島氏には、藝術は自分の外にあつて、これをつかむ爲めに努力し勉強しなければならないのだと思はれたらしい。それと云ふのも都の人の謙遜な心から、藝術を尊しとし、おのれ

を卑しとする結果、その至高の藝術に向つて精進はするけれど、そんなに尊い藝術が自分自身のうちに在るとは考へられないのである。がむしやらに名告をあげ、自分で天才だと宣言するやうな田舍者の強味を持つてゐないのである。

それかあらぬか小島氏には、藝術家らしい心持の動く事は感じられるが、全身を擧げて藝術家だといふ感じが無い。頭の先から足の尖迄藝術家だといふ感じが無い。換言すれば人としての力が甚しく不足なのだ。性格の強味が無い。それが其の作品にあらはれて、あらゆる點に於て力の弱い、色彩に乏しい遺憾が絡みついて來るのである。

扨て此の手も足も出ない迄堅くなり過ぎた作家は、處女作を發表してから數年ならずして、次第に行詰つて來た事を、自分自分でも知つたらしい。其間比較的に樂な氣持で書いたらしい「うらおもて」の如き作品もあるが、これにも矢張り、ひとつ面白い話をきかせようと云ふやうな態度が面白くない。折角世の中のうらおもてに皮肉な觀察を向けながら、眞心から僞りを憎む心持ではなく、面白がつていひつけ口をしてゐる様子である。

それに比べると、講釋師の大立物を主人公にして、實在の人の名前をその儘に用ゐた「世話物」には、もつと大きい社會批評が含まれてゐる。人の世の出來事の説明者として、話手としての小

島氏の傾向は、此の作では行く處迄行つた氣がする。氏が始めから追及して來た說明的描寫法は、その長所と短所とを、作中に明瞭に示して居る。段取が都合よくつき過ぎてゐる程とんとんたゝみかけて筋を運ぶ技倆は、氏の作中「世話物」を以て第一とする。講釋師の心の中も、なる程からもあらうかと頷かれるが、同時に又、何といふ堅苦しい、色氣も情合も無い手法であらう。恰もそれは、年號の正確のみを主として時の社會相を無視した歷史讀本の如きものである。恰もそれは、人口と土地の面積のみを主として、氣候風土人情を度外視した地理書の如きものである。氏の作中有數の物で、評者も堅苦しい說明的描寫を極度迄運んだ特殊の味を認める事は認めるが、同時に小島氏の作風は遂に二進三進も行かない處迄行詰つた事を說明するものと見る可きであらう。

小島氏は、他の多くの初心者とは違つて、最初からスタイルを第一に考へたらしい。多數の者は、先づ第一の作品の筆を執る時には、無闇に書き度くて堪らず、其の樣式を如何するか見當もつかないで、只管おもひ浮ぶがまゝに書きつけて行く。必ず陷る冗漫の弊さへ、他人に指摘されるか、或は時を經て漸く自得する位なものである。評者の如きも、此の部類に屬する事を自分で認めて居る。

又他の多くの初心者は、自分々々の柄も考へずに、徹頭徹尾先輩の模倣をする。二者何れも、自分自身の認めのつくスタイルを持つてゐない事になる。

それで、素質のいゝ勉強心のある者は、時を經、年を經て、修業努力の結果、次第々々に自分自身の様式を發見し、自得して行くのであるが、小島氏は稍撰を異にしてゐる。氏は最初から現代小説の各様式を一通りは承知し、冷靜に比較したあげく、自ら信ずる物を用ゐた。上來屢々いふ如く知的説明に據る描法で、語格の正しき事を尊び、文字は簡單明確なる事を專一とした。自分ではデスクリプテイブであると信じてゐたが、實はナレェテイブな書方である。

氏は此の形式には久しい間疑を抱かなかつたらしい、「内容なんか何でも構はない。よく描けばいゝのだ。」といふ言葉も、此の確信の一端をもらしたものであらう。

乍然その作品の効果については、物のわかりのいゝ人に似氣なく、最近迄自省が足りなかつたらしい。あまりに形式の正しさをのみ念じて、その味はひを忘れてゐたのである。書き度いが先に立つのでは無く、自分の形式にもとらない事ばかり考へ、結局のんびりとしたところが無く、ちいつぽけなものになつて了つた。氣魄人に迫る趣を全然缺いてゐた。餘情とか餘韻とかいふものは、まるつきりない。書かれた文字が一千字ならば、一千字丈の意味と効果しかない。その文

字に伴ふバツクが無い。抑へても抑へても漲りあふれる感激が無い。作者其人の風格が無い。作品の中に作者の姿をあからさまにあらはす事は、或場合には避く可きである。しかし、一字一句にも陰影の伴ふ事は必要である。其處に作者の氣稟がある。作者の呼吸がかゝつてゐるのだ。小島氏にはさう云ふ缺點があつた。師範學校の優等生の如く、模範兵の如く、その形は一見整へるやうに見えて、その心の貧しさを忘れんとしたのである。氏は自ら志す所に熱心のあまり、わけもなく係蹄に落ちてしまつた。あんまり早く大人にならうとして、本來生長して止まない若者の心を失はんとしたのである。

くどいやうだが「よく描けばいゝ」のではない。「よき内容をよく描かなくてはいけない」のである。文字遣の正しい事が第一ではない。その文字の與へる効果が第一である。殊に自分自身は涼しい顔をして、お話をする態度の寫生主義では、動いて止まない人生は描けない。お話の世界に假定される靜止的な場面しか浮ばない。こしらへ物の感じを振捨てる事が出來ない。多面的でなく、一面的だから、作品に彫刻的なところが無い。內から湧起る韻律がないから音樂的でない。平面の寫生だから色彩と陰影に乏しくて繪畫的で無い。熱が無く、血が無く、聲が無く、情が無い。むかしからいひ古されてゐて、しかも何時迄も命のある藝術批評の寶語を用ゐれば、氣稟が

無いのである。これなくして、何時の世に勝れたる藝術があつたか。

小島氏自身も、隨筆「あつめ汁」のひとつ「泉鏡花の新講談」の中で、泉鏡花先生の「湯女の魂」と改造社企つる所の社會主義者等の新講談とを比較し、「あの『湯女の魂』は口演が生んだ代物で、しかも立派に藝術品になり得て居る。それに引かへて、『改造』に載つてゐる新講談は、元の講釋にさへ遠く及ばない」「氣稟々々、しみじみ氣稟の尊さを感じた」と云つてゐる。

評者は前に小島氏は行詰つたと云つた。行詰つた小島氏は愈々寡作になつた。若し周圍に彼を勵ますいゝ友達が無かつたならば、心弱く筆を捨てはしまいかと、あやぶまれる程寡作になつた。しかし、本文の冒頭に一言した通り、一面には極めてねつい所のある人だから、他の一面の下町子の弱蟲を鞭撻しながら、如何にすれば新しい道が開けるか、隨分長い間苦しんで居たらしい。

苦しんでゐたらしいと云ふよりも、今尙苦しんで居るらしいのである。さしたる破綻も無いかはりに、何の魅力もなく、極めて上つらばかりの、いはゞちひさく纏つた作風を捨てゝ、あらためて新しい第一歩を踏出さなくてはならない。その冒險を試みなければならない。恰も手馴れた手工業を捨てゝ、近世の大仕掛な機械工業に轉じなければならなくなつた工人の身の上にも似て居る。

即ち積極的に新しい作風を確立する迄に、折角自分のものにした過去の勉強の果實を、踏みつぶす必要がある。その苦難の時代に、現在此の作者は骨を削つてゐるのである。
恐らくは小島氏の最後の到達點は遙かの遠くにあるのであらう。氏の今後の作風が何處迄變化し、如何いふ處に落つくかは、勿論評者には豫斷出來ない。小島氏自身にもわからないであらう。しかし、その努力の結果は、既に着實に世の中に現れて來つゝある。大正十年の下半年以來、二月に一つ、三月に一つ、發表される作品がそれである。
それ等の作品には、以前には無かつたものが澤山含まれて來た。勿論小島氏は人氣取を專一とする作家ではないから、行詰つた苦しまぎれに、赤から綠に變るやうな、根柢のない變化は見せなかつた。昨日は享樂主義の詠嘆に耽り、今日は忽ち階級藝術に血を沸かせて漫罵を事とするが如き態度には出なかつた。本來の面目たる觀察者としての自己に別るゝ事なく、客觀描寫の筆を捨てず、しかも極めて自然に、進歩の跡を明かにした。
先づ完全に寫生文脈から筆癖を解放し、物語の世界から實人生に轉じ、人間が從で話が主たつた昔と違つて、人間が主で話が從になり、靜止的な作風は際立つて動的に創造的に變り、人の姿形を描く事から其の心を汲む事に及び、その他數へれば數ふ可き事がすくなくない。要之、冷然

たる觀察者としての作者に、對人生の熱情が燃えて來たのである。その變化の原因が何であるかは知らない。幾代か續いた「家」を失つた事も、自ら選んだ妻を得た事も、都の人、殊に下町の商家の生れの人にとつては、大なる刺戟であつたであらう。讀書人としての生活から、おもてだつた世間へ踏出した形がある。氏の觀察する世の中は廣くなり、人生は深くなつた。少くとも讀書人が、知識として持つて居た世間を、より切實に體得した事を示すものである。二十代では味はへない此の複雜な世の中が、氏の眼前に漸く展開されて來た。

作品に之が例をとれば、前に擧げた「世話物」にも既に以前の諸作に比べて、遙かに深味を加へて來たが、大正十年七月の「三田文學」に出た「喉の筋肉」に至つて、作者は始めて完全に其の力量を示したのである。

主人公は給仕上りの若い會社員で、生れつきの吃音(どもり)である。その爲めにあらゆるひけめが彼を苦める。それが會社の新年宴會で、生れて始めて酒を飲み、醉ふと吃らず口のきける事を發見した。吃らないと云ふ事は、即ち常にひけめを感じていぢけてゐる心の釋放である。それ以來酒を飲み、飲めば泥醉する。遂に母親から、平生恩を受けて居る課長に賴んで意見して貰ふ事となつたが、酒はうまくて飲むのでなく、「喉の筋肉」のゆるむ嬉しさに醉ふのだときいて、課長も涙を

感じ、意見をする役目なのに、手を叩いて若者の爲めに酒を命じるといふ筋である。
筋であると云ふけれど、從來の小島氏が筋の說明者だつたのに比べて、此の一篇はいきいきと描かれて居る。あゝさういふお話かと、僅かに耳を傾けるばかりでは濟まない。先づ吃音の主人公の哀れな身の上にも心を動かされ、又さまざまの場面が、現實性を多量に帶びて居る。それよりもなほ悅ぶ可きは、曾て小島氏の作品に缺除して居た人間臭さが、始めてまざまざと感じられる事である。

小島氏の作品で、讀者の心に觸れ、その同情をそゝるものは此の作を以て嚆矢とする。結構の大きさも曾てない所であり、文章に力のある事も前例が無い。主人公平太郞は醉ふ事によつて、「かたくなゝ」喉の筋肉の自由になる事を知つた。小島氏は先づ自分の情熱を以て人間に親む事によつて、かたくなゝマンネリズムから、彼自身の藝術を自由にした。

評者は永年の間此の作者の態度にも作品にもあき足らず、又近年の此の作者の煩悶と努力には他人事ならず同情してゐたので、此の作を讀んだ時は、主人公吃音者に對する課長の如く淚を感じた。吾々藝術のよき作家たらん事を志し、不斷の勉強に惱める者にとつては、他人の事でも我事の如く、感激なきを得ないのである。正直のところ評者は、作家としての小島氏には殆ど絕望

してゐたのであるが、此の作品の出るに逢ひ、始めて氏の將來に期待を持つに至つた。

傑作「一枚看板」は、約半年たつた大正十二年二月の「表現」に出た。

講釋師伯龍は、女房のある身なのに大阪へ興行に行つた時出來た帽子屋の娘の婿に入つてしまふ。けれども一度志した藝が忘れられないで、又東京に逃げかへる。さうして師匠に詫を入れ、再び高座に上る身となり、遂に眞打となる迄の、藝人の身の上と、藝道の勉強悟得とが描かれて居る。兎角ちひさく纒らうとする傾向のあつた小島氏としては、處女作「睨み合」以來の長篇で、「喉の筋肉」に遙かに勝る大作である。規模の大きい事、人間の心の奥底に入つて行つた事に於て喉の筋肉よりも更に徹底してゐる。寫生文や皮相寫實では無く、深味のある構想に對して、正統リアリズムの正攻法を用ゐた描寫が作者の力量にあまる事を示すやうな、筋立の冗漫に先づ非難の第一矢を向けられさうだが、藝術創造に對する作者の澎湃たる意力は、其の冗漫を冗漫と思はせず、筋立の破綻なんか如何でもいゝと思はせる。どつちかと云へば弱蟲の小島氏に、此の意志の力のある事を見せつけられて、時にものうからんとする評者の如きも、感激に身内が震へるのを覺えた。

いふ迄も無く此の一篇は、主人公伯龍の口づから聞いた身の上話を小島氏が書いたものに違ひ

無いが、それは以前の作品の如き筋書やお話ではなく、完全に小島氏のものとなり切つてゐる。生きた人間そのものが、あるがまゝに描かれて居る。書齋の机の上から生れた人間でなく、正に母胎内から出て來て、七千萬同胞と共に社會を形造つて居る人間である。

伯龍が、昨日の自分と今日の自分との相違を識つたところで、作者は斯う云つてゐる。「自信と云ふものが、これ程人の心を變化させるものかと驚かずには居られなかつた。高座の上で云ふこと爲すことに安心があつた。混沌として居た彼の世界に、一條の道が附き始めたやうな氣がした。若しこの前後に仔細に彼の高座を聞いた人があつたら、彼の藝に柔軟性（フレキシビリチイ）の生じたことを見逃すことは出來なかつたらう。」―「要するに、藝の根本義を把握することが出來たのだつた。講釋そのものは死物だ。それを生かすのが藝だ。では藝とは何か、彼はそれを自己だと悟つた。高座に上つて一席よむ、その時の藝術家彼は、その瞬間までに於る生活全體の堆積だ。――彼はさう觀じたのだつた。藝といふものを、自己以外に存在する『型』か何かのやうに思つてゐた不明を彼の心の底から恥ぢることが出來た。」

此の言葉は直ちに小島氏の上にうつす事が出來る。小島氏の藝術には、著しく柔軟性が增した。藝術は卽ちおのれに在る。自己の生活である。一作を爲す事は卽ち藝術家の生活全體の堆積だ。

自己以外に藝術が存在すると思つて居た不明を、小島氏も痛切に悟つたのであらう。若しこれを深く悟つたならば、やがて文壇の一枚看板たる事は疑も無い。

此の悟が出來てから、最早小島氏は、お話を弄ぶ旦那藝を離れて玄人になつた。「新聞廣告」「兄弟」の如き作品は、「喉の筋肉」や「一枚看板」の如きすぐれたものではないが、これとても以前のものに比べて、いかに玄人らしくなつたか、又いかに作者の世界が廣く深くなつたかを示してゐる。

それよりも面白いのは、藝術が自己にある事を悟つてから、此の作者も初めて自傳體の小説を書いた。最近の傑作「家」がそれである。續いて出た「住」がそれである。これらの作品を讀むと、曾て此の作者には全く無かつた哀切な感情に誘はれる。作者が心の底から動かされた事件の記録として、立派な藝術品であると同時に一字一句の文字のうちに、作者の憤りと涙が宿つてゐる。曾て拮屈といふ外に適評を見出さなかつた此の作者の文章に、惻々として人に迫る情熱の生じて來た事は何よりも悦ばしい。此の力を失はない限り、永く迷路に難澁し、修業の苦勞に惱んだ小島氏も、やがて動かす可らざる自己の藝術境に押も押されもしない自信を持ち得る日が來るであらう。(大正十二年八月十五日)

——「新潮」大正十二年九月號

所感

大正十二年九月一日地震の時、自分は鎌倉に居た。家は倒れ、危く身を以て逃れたが、十數人の同勢の中で、親類の十八になる娘が一人逃遲れて下敷になつた。それが不思議に微傷も負はずに這ひ出して、芝生に集まつた一同が互の無事を祝しあふ間も無く、再び海嘯に脅され、女子供を勵まして裏山の松林に避難し、一息ついたと殆ど同時に、東西に起つた火事の煙は、松林にもかゝつて來るのであつた。賴みにする者よりも賴みにならない者の方が多く、底冷のする土に敷いた荒筵の上に二夜三日露に濡れ雨に打たれ、山崩れの音を聞きながら、食糧の乏しさと、鮮人襲來の流言に心を寒くし、其後は又病人の續出に、如何なる身の末かと心細く、由井が濱一帶の慘澹たる光景を山の上から見下して、人間の意氣地なさを歎いたのであつた。

地震國に生れて、安政の大地震の話、濃尾の震災の繪畫も記事も幼い心に深く印象され、其慘

害の酷(むごたら)しさを知識としては充分知つて居たが、のべつに起る小地震にづうづうしくなつたのと、これ無くしては一日たりとも安閑としては居られない人間の樂天的な心持から、自分自身がさういふ目に遭はうとは、思ひ及んだ事も無かつた。然るに今度は、聞いたよりも想像したよりも殘酷に襲來し、何等抵抗する術(すべ)も無くやつつけられた後でも、餘(あまり)の事のはげしさに、現實の事とは思はれず、夢では無いかと疑ふ事が度々あつた。又、不思議にも、地震以後、自分は夜中に樂しい夢を見た。覺めた曉、雨戸も無く壁も落ちた他人(ひと)の家に、左右に病人を抱へて轉がつて居る自分を見出した時は、沁々なさけなく思つた。

それでも未だ、斯ういふ不運に遭遇したのは自分達及附近の人達ばかりで、一足此地を離れると、安穩な場所が待構へて居て、溫い懷に抱いて呉れるやうな氣持がして居た。横濱は全滅し、東京も下町は焦土に歸したと聞きながら、一望の下に在る鎌倉以外は現實の事として腦裡に描く事極めて明確でなかつた。

けれども、東京に歸つて、九段の上や上野の山から、見る限りの燒跡を望み、日本橋や京橋の眞中に立つて、四方八方何處にひとつ昨日の面影を止めて居る所の無いのを見た時は、幸ひに命を保ち、住居も燒殘つた自分さへ、身の置所の無い、生甲斐の無い心持にうちのめされてしまつ

た。天變地異の暴威の前に、小賢しい人間の力は、在つて無きが如きものに感じられた。

けれども、此の意氣地の無い心持は、存外長くは續かず、日を經るに從つて、人間の力が蘇生して來た。恰も病人が回復期に向ふと忽ち昨日迄の苦痛を忘れてしまふやうに、地震海嘯火事に脅された時の驚愕よりも其の暴力に對抗して、人間力のあらん限り戰つて見ようとする意志の方が自分を支配し始めたものである。殊に事變後旬日を經たか經ないうちに、到る所にバラック建築が始まり、天幕の假住居をしながらも、互に商賣を營み始めた避難者の活動を見た時、自分は痛烈に人としての生甲斐を感じた。けなげなる掘立小屋の居住者は、帝都の復興に希望を持つて、昔日にも增した生活力を發揮して來たのである。家を燒いた者、財產を失つた者、最愛の者に死別れた者、すべてが悲嘆のどん底から復活して來た。未だ衣食は足らざるも、折柄の滿月の下にバラックの內で笛を吹く者さへあつた。

日本を愛し、日本で死んだ詩人ラフカディオ・ハアンは、日本人の生活樣式の一切が、持續性を缺いて居る事にさへ親切なる解釋と懇篤なる說明を惜まなかつた。朝出がけに通り過ぎる空地に數人の人の立働く姿を見ると、夕方には早くも家の形をしたものゝ建てられる御手輕な生活に深い興味を感じ「時は一切を滅す」といふ思想が、如何に根强く國民の魂に浸み込んでゐるかを說

いた。ハアンをして今も尙世に在らしめば、バラツクの窓に秋草の鉢を置き、天幕の內に芒を立てゝ月を觀る人々の生活を、どんなに深い感激を以て見るであらう。

乍然漂泊の詩人ハアンが愛した日本は、ひと昔もふた昔も前の日本である。地震直前の日本は、生れたる國の文明に慊らずして異鄕に安住の地を求めた詩人の異國趣味を滿足させるやうな箱庭ではなくなつて居た。山河の外の一切の人爲は、はかなく消ゆるものとあきらめて、竹と紙の家に滿足する國民ではなかつたのである。現在到る處に見るバラツクは、簡素なる生活を營む事の天才を示すものではない。やがて吾々の努力を以て築く可き、地震にも火事にも堪へ得る大都の礎に外ならないのである。

自分は「方丈記」を古今の名文として愛誦するものであるが、「行く川の流れは絕えずして、しかももとの水にあらず、よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとゞまることなし。世の中にある人と住家(すみか)と、またかくの如し」と徹底的厭世觀をもつて世にのぞむのは堪へ難い。堪へ難いばかりでは無く、凡そ此の人の世の生を絕たんと思はない限りは、假令(たとへ)行く川はもとの水で無く、うたかたは消えてはかなくとも、人のつくる世の中は、祖先以來の人間の動かし難く消え難き努力の堆積であると觀じ度い。

今回の災害に面して、自然力を絶大と見、人力を在つて無きが如くに考へる人も、さぞかし多い事であらう。鐵筋コンクリートや煉瓦の四層五層の近代建築が、見る影も無く焦土の中に姿をけしたのを見て、文明の頼む可からざるを嘆じ、いち早く自然にかへれとさけんで竹の柱にかやの屋根の生活を讃美した人もあつた。ましてや既に人生の春も幾むかしか前に過ぎて、心身の活力も慾望もおとろへた老人達が、得たりかしこしと近代文明の弊を論じて、徒らにむかしをなつかしむのは云ふ迄も無く、狒々の如き慾情を以て幾多の婦女を犯し、口に公徳を唱へて實は私利私慾を營み、富と位とあはせ得たる老爺が、口幅つたくも此の災害を呼んで天譴となすが如き、思想貧弱にして他に言葉を知らざるに出るものかもしれないが、ともに復興を語るに足らず、此の人々を頭にして、よく災害の善後策を講じ得るや否や、疑はしさの極みである。

なる程、明治以來日も足らず、あくせくと輸入した西洋文化の一面を代表する極めて皮相なる模倣建築物はひとたまりも無く倒潰した。しかし、倒れたり崩れたりした物は全部では無い。僅少ながらも、堅固な手法を以て築いた建築物は、壁にひゞさへ入らず、硝子一枚砕けず、びくともしずに残つてゐる。彼と是とを比べれば、外觀のみをごまかした物は瓦礫に等しく、材料と勞力とをおしまず勤勉正直にたてたものは何時迄もそびえてゐる。此の事は我々に尊い教訓を與へ

た。日本の一部東京附近の慘狀は見るに忍びないものであるが、これがすべての終では無い。東京は今も尙いきてゐる。今度こそは、どんな地震にもどんな火事にも平然として堪へ得る大都となる可きである。自然力は偉大である。しかし人間力も亦決して之におとるものでは無い。旣に吾々の祖先の世から今日迄の人文發達の歷史は、自然の征服の記錄だと云つてもいゝ。幾多の失敗を繰返し繰返して、兎に角今日に至つた。日本近代の模倣文化の外觀は無殘に倒潰燒失したが、それを以て今日迄の人文發達の道程が止んだのでは無い。此失敗の後に更に進步が來るのである。竹の柱や茅の屋根にかへる可きでは無い。もう一度四層五層にして且地震にも火事にもびくともしないものが出現しなければならない。卽ち現在のバラツクに住む人々は、ラフカディオ・ハアンが愛したる小國民の如く一夜造の家に安住してゐるわけでは無いのである。

同じ事が、あらゆる他の方面の人間の仕事にもあてはまる。例之地震以後の文壇は如何なるかといふ問題に對して、矢張り「竹の柱に茅の屋根說」を臆面も無く說いた人もあり、地震によつて文藝が人生の贅物であると觀じた人もあり、更に又雜誌新聞の文藝欄必ず亡ぶ可しと臆斷して、筆を捨て鋤鍬を執らんと叫んだ人もある。勿論炎々たる猛火に追はれて、行衞も知らず逃げた時に、人はたゞ命の全き事のみを念じて、文藝を思ふ遑は無かつたであらう。住むに家無く、喰ふ

に食なき避難者の多くが、衣食住の心配の外に何も考へる餘裕を持たなかつたのも事實であらう。然しながらその爲めに、文藝亡ぶ可しと考へるのは、あまりに膽がちひさ過ぎる。空腹の場合のすゐとんの味に感激して、人はすゐとんあれば他に食物の必要を感じないと說くのと同一である。けれども、人は決してバラツクですゐとんを喰べて滿足はしてゐない。雜誌新聞の文藝欄は、一時は縮少されるかもしれないが、藝術は決して亡び無い。或は文筆の士が恐るゝ如く、原稿料の下る事はあるかもしれないが、制作慾の燃ゆる眞の藝術家は何時迄も制作に力の限りを盡くすであらう。崩れ易い化粧煉瓦の建築と諸共に、あんまり商業主義に支配され過ぎた文壇は潰滅しても構は無い。藝術の價値は、地震の前なると後なるとによつて、輕薄なるヂヤアナリストの頭腦の如くに變りはしないのである。

おもへば、我國の近代文藝の發達は、その外觀的文化と同一步調を以て進んだのである。年が年中呼吸切れのした驅足で、西洋近代のあらゆる思想を、何の疑ひもなく選擇も無く受入れ、更に新しく輸入されゝば、前のものは弊履の如く捨てゝ振向もしない。恰もデパアトメント・ストアで賣られる商品の如く、徒らに色彩のみけばけばしく、昨日と今日の流行は移り變つたのである。寫實主義、自然主義、享樂主義、人道主義、未來派、表現派、さては歐羅巴の珈琲店に生れ

たやうな出まかせのダダイズムや渦巻派、又プロレタリアの藝術に至る迄、かへりみて餘りに浮足だつた事を恥ぢなければならない。おのれを空くして世間の目の色によつて態度を變へるやり方は、化粧煉瓦の建築と擇ぶ所が無い。若し今度の災害によつて人が學ぶ可き事があれば、それは赤から黑に變る事では無く、もう一度やり直して、力のある一歩一歩を進むばかりである。久しく輕んじられた自分自身の練磨と、反省と、鞭撻とを以て、今度こそは顧みて恥ぢない道を歩むべきである。斷じて竹の柱に茅の屋根に復歸してはならないのである。

これは私の希望であり、覺悟である。實際の世の中がよくなるか惡くなるか一に私と同じ希望と覺悟を有する人の多いか否かによつて分れるであらう。光明と共に不安がある。大なる人間の努力がなければ「神光あれといへば光ありき」といふ創世記の第一行の如き、壯大なる景色を見る事は出來ない。(大正十二年十月二十一日)

——「時事新報」大正十二年自十月二十五日至十月三十一日

友人久保田万太郎氏

久保田万太郎氏はわたくしの友人で、且つ現代第一流の藝術家です。
年少にして夙に自分の藝術境を發見開拓し、聰明に之を守り、情緒的寫實主義作家の第一人者として動かす可らざる地位を確立し、徽塵子の如く浮んでは沈む文學青年の追隨を許しません。
尤も下手に眞似をする亞流者があらはれると、そいつは鼻持ならぬ程度に甘く、且つ臭い藝風に陥る事受あひです。
久保田氏としても、現在の藝術境から一歩でも踏出せば、とりかへしのつかない事になるでせう。
間口を擴げたが最後、奥行もなくなつてしまふに違ひありません。
斯う迄も自分にぴつたりはまつた藝術境を見出した事は、すぐれた藝術家としては當然の事だ

と云つてしまへばそれつきりですが、一面から考へると、何よりの幸だつたと云ふ可きです。はつきりいへば、たつた一筋しか道が無く、しかも其の一筋を迷はずに歩んだ人なのです。即ち久保田万太郎氏は、現在あるがまゝの久保田氏として尊く、若し少しでもわき道へそれて居たら、それ程偉くならなかつた人だと思ひます。

萬一此の人が作家にならなかつた場合を想像して見て下さい。たとへば官吏になり、軍人になり、會社員になり、商人になり、筋肉勞働者になり――其の外あらゆる他の職業の何にでも携つたとしたら、やくざな人間だつたに違ひありません。（大正十三年五月二日）

――「新潮」大正十三年六月號

帝國劇場の質問に答ふ

問

拜啓初夏之候益々御清榮の段欣賀の至に御座候偖而暫く休刊致し居候雜誌「帝劇」も目下工事進捗中の帝國劇場復興竣成に先立ち復活仕り茲に臨時號を發刊致す運びに相成候就いては此機會に臨み別項の如く貴下の御希望或は御趣味の程御伺ひ申し同號を有意義に發揮仕度存候何卒御多用中の處恐れ入候得共折返し御返事賜はり度伏而御願申上候　敬具

一、復興する帝劇に對しての御希望

一、舊劇、新派劇、新劇、飜譯劇、舞踊劇の中貴下は何れを好ませらるゝや

大正十三年五月二十一日

丸の內　帝　國　劇　場

答

一、女優を欲しがる華族や金持の息子、金を欲しがる文士などにくちばしを容れしめず帝國劇場は帝國劇場の所信を斷行すべし

但し助平と藝術を理解せざる事に於て並びなき大株主を隱居せしむる事

附卑猥と慾張の象徵の如き老爺の胸像を再び玄關に並べざる事

一、是を是とし非を非とす

大正十三年五月二十二日

水上瀧太郎

——「三田文學」大正十三年七月號

都新聞讃美論

或俱樂部の一室で、現在日本の新聞では何が一番いゝかと云ふ質問をした人があつた。そんな事は問題にならないと云ひ度さうな顔付で「大阪毎日」と「大阪朝日」だと答へる者もあり、東京贔負の連中には、「時事」がいゝと云ふのもあり、「日日」がいゝと云ふのもあり、「朝日」がいゝと云ふのもあつて夫々相當の贊成者があつた。

「水上さんは何新聞がいゝと思ひます。」

新聞嫌ひで、今日の世の中から新聞が全然なくなつて了つたら、さぞかし人の心はおだやかになり人の世は住みよくなるであらうと常に思つて居る自分は、一隅に腕を組んで口を緘して居たが、此の質問に接して、

「都新聞が一番いゝと思ひます。」

と言下に答へた。

「あれは床屋と藝妓屋で讀まれる新聞だ。」

と、さも輕蔑した口吻で笑つた人がある。他の多くも同意見らしく、「それは論外だ。」と云ひ度さうな顔付をして居た。

「しかし、あの新聞は面白いね、まさか自宅では取れないから、往來で買つて自動車の中で讀む。實は僕も愛讀者の一人なんだ。」

第一流の銀行家で、典型的の紳士だと稱されて居る人が、一大告白をするやうな態度で云ふと、一座も亦非常に意外な事を聽いたと云ふ風な様子で、俄に相槌を打つ者も續出し、つい今迄は問題外だつた「都新聞」が、斯ういふ種類の人間の間に、特別の興味をもつて讀まれて居る事が明かになつた。

けれども、誰一人「都新聞」が一番いゝ新聞だと云ふ自分の說には贊成せず、面白いには面白いが、紳士としておほつぴらに人前で讀む事は出來ないと異口同音に云ふのであつた。

度し難い連中に對して無用の辯を弄さず、自分は再び口を緘したのであつたが、今日尙「都新聞」を目し最も下等な新聞として、善良なる家庭に入れる事は出來ないと誤信して居る所謂紳士

が多いやうであるから、敢て此の愛讀紙の爲めに、我一票の貝殼を投ぜんとするのである。

さうは云ふものゝ、自分が「都新聞」を購讀するやうになつたのは、實に地震以後の事である。それ迄は昔からの惰性で「時事」を取つて居たが、其社が九月一日に燒けて暫時休刊して居る間に、出入の新聞取次店が、勝手に「都」を配達して來たのである。うちの女中の話によると、

「當分時事は出ませんから、新聞界の女王といはれる都をかはりに持つて來ます。」

と配達子が斷つて行つたさうである。

取次店は麹町の通にあるのだがひどく〱實體な店と見えて、やがて「時事新報」が貧弱ながら復活して來ると、直ぐに「都」をやめて「時事」丈を配つて來た。外の店でよくやるやうな押賣をしないのが氣に入り、且又「都新聞」そのものが一番いゝ新聞だといふ見極めがついたので、爾來此の二新聞を購讀する事にしたのである。其の時の自分の心持は、切れようと思つても切れられなかつたとでも云ふべきであらうか。將來若し二新聞のどつちか一つをやめるやうな事があるとすれば、自分は、必ず「時事」をやめて「都」を每朝手にするであらう。

その「都」ではあるが、曾ては出鱈目の記事を書かれて、夢中になつて怒つた事もあつた。もう一昔になるが、大正二年二月一日から同三日に亙つて「親と子」と題する無責任な讀物が寫眞入で

出た。今の事にして見ると、醉拂ひの三味線彈の逸話だとか、淪落の女の身の上話だとか、強盜殺人犯の生立の記だとか云ふやうな、此の新聞得意の讀物と列を同じくするものであらうか、「都」にしては文章の極端に拙いのが不思議な位だつた。ちよいちよい消息通らしい文句のあるところから察すると、當時慶應義塾を出たばかりの半熟記者が私の著書を讀んで、その中の小說全部を作者の自傳と解釋し、勝手氣儘に書換へたものであらうか、馬鹿々々しいものには違ひないのだが、未だ血氣旺だつた自分は、友達の送つて寄越した切拔きを、亞米利加の下宿の一室に讀んで、口惜涙を流したのであつた。當時若し東京に居たとしたら、恐らく自分は新聞社に怒鳴り込んだであらうが、海を距てた遠方の事とて如何とも爲方が無く、折柄出來あがつた小說「世の中」を「三田文學」に掲載するにあたつて、左の如き斷り書を附記し、僅かに鬱憤を漏らしたに過ぎなかつた。

此の一篇は全然つくりものがたりなり。

かゝる事をわざわざお斷りするは小生の頗る不快に思ふところなれど、世の中には思ひのほかそゝつかしき人のありて、その人々に小生の作品を小生の自傳なりと思ひ込まれて飛んだ迷惑をしたる事一再ならず、近くは大正二年二月一日より同三日に至る都新聞の小生に關す

る記事の如き、書かれたる當人の身に覺えなき事のみなりき。想ふに彼の鐵面皮にして禮儀をわきまへざる記者は、拙作「ものゝ哀れ」「途すがら」「噂」等を讀みて粗忽千萬にも、小生の半生をそのまゝ描きしものなりと速斷して、常に彼等が貴重なりと稱する紙面にまことしやかに大噓を書きつらぬる結果に陷りしものならん。かゝる誤解を招く事も世間樣のいやしみ給ふ小說など書きし罰にほかならずと思ひて一度はあきらめもしつれ、小生の爲めに引合ひに出されし人の迷惑を思へば心苦しさに堪へざるものあり。卽ち玆に此の一篇のつくりものがたりなる事を附記して、たとへば彼の都新聞記者の如きぼんくらの誤解豫防に備ふるものなり。

此の「都新聞」の記事の出鱈目は斯程迄に當時の自分を怒らせたが、たつた一つ出鱈目にも愛嬌があると思つたのは、出鱈目物語の最後に、主人公水上瀧太郎は、「今では英國のケンブリツヂに居る。」と書いて、わざわざケンブリツヂ大學の寫眞を揭げた事であつた。前にも書いた通り、自分は其の時北米合衆國マサチユセツ州ケンブリツヂ町のハアヴアアド大學に在學して居たのであつて、ケンブリツヂはケンブリツヂでも、これは大學の名前では無く地名なのである。出鱈目記者は、何處からか生噛りに聞いて來て、さも得意さうに新聞社に有合せの英吉利の有名な大學の

寫眞を出したのであらう。此の笑ふ可きとんちんかんは、當の記事の出鱈目である事を證明すると共に、當代の新聞氣質を最も適確に示すものであつた。

爾來數年間、自分は「都新聞」に對し平かならぬ心持をいだいて居た。ところが大正五年恰も海外の旅を終つて歸朝する事になつた時、「東京朝日」を筆頭に、東京大阪の新聞の多くが、更に一層ひどい出鱈目を、臆面も無く大標題をつけて書き立てた。それは、私の父が一生の事業とした仕事の後を繼がせようとするのに、私はどうしても肯じないで小説家になるといひ張るので、父は怒つて此の私を廢嫡するといふ内容の記事である。新舊思想の衝突といふやうな事が、雜誌や新聞の問題になつて居た當時の事であるから、隨分人の噂を煽り立てる事柄だつたに違ひない。長途の航海を終つて、なつかしい故國の土を踏むと同時に、さういふ出鱈目の新聞記事の主人公となつて居ると知るよしもなかつた自分は、忽ち新聞記者の襲撃を受けて、まるつきり要領を得ない質問に惱まされ、しかも其の日の夕刊には、早くも寫眞入で、自分が一言も言及した覺えの無い廢嫡問題について、自ら洒々として喋つて居るのであつた。

自分には立派な兄が二人あつて、新聞が書立てたやうに嫡男では無い。いくら望んでもあとゝりにはなれないのである。殊に父はいろいろの事業にも關係したが、いづれも株式會社で一家の

商賣では無く、又他の株主を壓倒する程の金力も無く、且つさういふ野望は父の性格としては寧ろいやしむところであつた。息子が後を繼がなければならないと云ふ筋合のものでは無い。ましてや父は、決して無理強ひに子供を勤人にしようとは云はなかつた。親の情愛から將來を氣づかつて、文人となる事は好まなかつたかも知れないが、新聞が傳へたやうなはしたない壓迫を加ふるが如き事は、父の爲さんとしても爲し得ざる事である。今日自分が勤人となつて、生活の資を得て居るのは、全然自身の考へで、これをつまんで云へば、第一には文筆をもつて衣食する事は到底出來ないと考へた事、第二は自分の藝術の清純を保つ爲めに、或は衣食の資を得る手段としての藝術とならないやうにする爲めに、かへつて全く無關係な仕事をして月給を貰ふ事を擇んだからである。

無責任極まる新聞記事に、自分はすつかり怒つてしまつた。なさけない事には、新聞は噓吐きだと知らない人々、或は新聞は噓吐きだと知りながら、それが自分に關係の無い他人の身の上の事だと、兎角ほんとにしたがる人々は、其の記事の出た日以來廢嫡問題の主人公として自分を記憶するやうになつてしまつた。そんな古い事を今更いひ立てないでもいゝではないかと、新聞社の人間はいふだらうが、驚く可し約十年の歲月の過ぎた今日もなほ、自分の寃罪は晴れない。到

る處で廢嫡問題の主人公として見られ、又中には、完全に廢嫡されたのだと思ひ込んで居る人さへあるのである。

慶應義塾教授小泉信三氏は、曾て「財政經濟時報」に「新聞紙と個人の名譽」と題する一文を投じた。氏は當代稀に見る溫厚なる紳士であるが、正しい事を愛する熱情から個人の名譽を毀傷蹂躪してしかも謝罪しない新聞紙の横暴を許し難しとし、適切なる實例を擧げて之を責めた。その文中の數節を左に摘錄する。

「所謂官僚軍閥財閥又は政黨の横暴、みな何れも許すべからざるものである。併し幸にして是等諸勢力の横暴に對しては、之に對抗し、又は之を牽制すべき何等かの反對勢力があり而して其の勢力の對抗牽制は多かれ少かれ事實上其の効果を現して居るが、所謂輿論の時代の今日に於て、新聞紙の横暴に至つては殆ど之を制すべき方法がないのである。

「事實上幾多の人は、何の理由もなく、公衆の面前で面に泥を塗られて居る。面に泥を塗られながら泣寢入に濟ましてゐるのである。

「構へて嘘を吐くものがあれば固より許すことは出來ぬが、過つて不實の記事を掲げた場合とても、必しも其責なしとは云はれない。間違は誰にも免れぬ事ではあるが當然糺し得べき

事實を糺さず、當然取るべき手續を怠つて誤つた事實を報道し、而してそれが爲め無辜の良民に苦痛を與へた場合には、たゞ間違であつたと許りでは濟まされない。

「動物園の虎が死んだと云ふやうな記事ならば、間違があつて人が迷惑するといつても知れたものであらうけれども、事一個人の名譽に關する場合には誤報の害の恐るべきは殆ど想像の外にある。何故に一個人の名譽に關する場合と云ふか、公共問題に關する場合にも誤報の害の恐るべきことは言を俟たぬけれども、幸ひにして此に對しては多少の矯正作用がある。政治上の事實に就て一新聞に誤報が掲載されゝば、自らにして反對黨の新聞紙が之を匡す、經濟界に關する記事に謬りがあればその影響するところが廣いから、其記事を攻擊するものが自らにして現れよう。たゞ一個人の名譽の誤報に依つて傷けられた場合には、其人一人一家族を除いた外の世間は、よし面白半分の見物人でないまでも、極めて冷淡なる傍觀者であつて、加害者に制裁を加へて被害者の恥辱を雪ぐと云ふやうな事は、殆ど之あることが、望まれない。名譽を傷けられた人は新聞紙と云ふ強大なる機關と、其讀者たる廣い世間とを相手にして、孤立單獨に戰はなければならぬのである。今日無辜の民と云ふ言葉の適合するやうな場合を求めるならば、先づ第一に此を擧げなければならぬ。

「固より新聞紙の誤報に由て人を傷けた場合に、之に對する制裁の途が全然備はつてゐないのではない。併し此制裁は今日の日本で果して有効に行はれてゐるであらうか。勿論新聞紙上に正誤の掲げられる事は屢々ある。併し取消さるべき記事と、取消とが同じ程度に人の注目を惹くと云ふことは殆ど考へられない。私は無根の記事に依て或公人を傷けた新聞記者が過を覺り其人を訪ふて罪を謝した事實を知つてゐる。併し其新聞には攻撃の文章は掲げながら記者が謝罪の爲めに訪問した記事は掲げられなかつたのである。又我邦の法律慣習は人の名譽を保護することが甚だ不充分ではあるが併し猶ほ現行法規によつても、新聞記事に由る名譽毀損に對して制裁を求める法は備はつてゐるのである。然るに我々は新聞紙に於て某新聞が何某から訴へられて何々の制裁を受けたと云ふ事實の特筆大書せられるのを見たことがない。これは日本人が訴訟を好まぬところから、名譽は傷けられても泣寢入に濟ませて救濟を法廷に求めると云ふことをせぬからでもあらうが、また聞くところによれば、稀に新聞社を告訴して勝訴したものがあつた場合にも、諸新聞は同業者間の德義として口を噤んで其事を默殺するのだと云ふ事である。卽ち個人の名譽は白晝公然蹂躙せられ、偶々雪がれた恥辱は全く顧みられずに終るのである。

平生うるさい程正義を旗印にする新聞が、果して斯ういふものだとすると、ごろつきよりも始末が悪い。誹謗脅迫はほしいまゝにして、且つ何等の制裁を受けない。個人としては名譽を傷つけられても有効に寃を雪ぐ途が無いとすると、泣寢入の外はない。自分が所謂廢嫡問題の記事に激怒して新聞の責任を問はうとした時、殆どすべての人が、其の甲斐の無い事と後日の報復の怖しさを説いて止まなかつた所以もこゝにあるのであつた。

その時、一代の碩學森鷗外先生の小説「灰燼」の中の「新聞國」と稱する一節を讀んで、到底手のつけやうのない相手だと思ひ知つてあきらめろと、親切に勸告して呉れた友達もあつた。「新聞國」の如何なるものかを示す爲めに、その數節を記す。

「此國は新聞の外に何物をも有しない。此國の人民は新聞の種を作る人と、その種を拾つて書く人と、その書いたものを買つて讀む人と三種類に區別することが出來る。

「種を拾つて書くのを職業にしてゐる人が、種を作ることもある。否、書く方から作る方へ廻りたいのが、總ての書く人の希望だといつても好からう。所がさうはならないので、いよいよ焦けになつて書いてゐる。

「種を作る人の大多數は全力を三面を作ることに傾注してゐる。新聞國の中で一番活氣があ

つて、そして一番馬鹿を見てゐる連中である。此連中は物の一面しか見ることが出來ないから、どこを押へれば、どこが持ち上がると云ふやうな事は考へない。欲しければ人の物を取る。可哀ければ人の女房に手を出す。憎ければ誰でも打ちもし殺しもする。

これでは堪まつたものではない。

乍併自分は、如何に相手が横暴を極める新聞でも、あんまりひどい出鱈目を書くがまゝに書かせて、默つて置くのはよくないと思つた。

そこで、大正七年一月の「三田文學」に「新聞記者を憎むの記」と題する一文を發表して廢娼問題の出鱈目である事を明かにし、併せて新聞の無責任を痛罵して、おのれの寃を雪ぐと共に、新聞の反省をも求めたのであるが、それは僅かに自分自身溜飲をさげたに過ぎなくて、殆ど何の効果もなかつた。幾百萬の新聞は津々浦々迄ゆき渡り、「三田文學」は一千數百部しか賣れないのである。加之嘘吐きの新聞記事は、間違ひの無い釋明よりも、事を好む彌次馬にとつては遙かに面白い。これ卽ち十年たつた今日もなほ自分が勘當された息子だと思はれて居る所以である。

「新聞記者を憎むの記」を發表した頃、自分はよく銀座の路地の奥の居酒屋に通つた。其處には新聞記者の客が多かつた。或晩、見も知らない人が、

「君は水上君ですか。」
と突然向きあつた卓の向ひ側から聲をかけた。
「『新聞記者を憎むの記』なんてあんまり大人氣ないぢやありませんか。あんな事を書くと君のためになりませんぜ。」
薄氣味の悪い微笑を口邊に浮かべて、蟷螂の斧を振ふといふ譬へを引出して說いた。それはまだしもよかつたが、其後間も無く同じ場所で、又一人別の新聞記者が眞正面から喧嘩を吹きかけて來た。
「なんだ天下の新聞記者に對して失敬ぢやないか。生意氣な事をいふとためにならんぞ。」
ためにならないと云ふ脅文句を此の連中は常に用ゐて居るものと見えて、前の記者も後の記者もしきりに繰返した。ごろつきや不良少年が、覺えてゐるといふのと同じ意味であらう。
あんまり先方が高壓的なので、自分もむつとして、
「人の迷惑もかへりみず、何等の責任も負はずに出鱈目の記事を書く新聞に對して、自分のいひ分を公にしたばかりの話です。誤を誤とし、非を非として謝まればまだしも、一切無責任だから許せないんです。」

生眞面目に返答すると、先方は益々憤慨して、

「いやしくも新聞記者に向つて出鱈目とはなんだ。無責任とはなんだ。怪しからんぢやないか。」

と泡を吹いて怒鳴り出した。あたりの客は盃を下に置いて目をみはり、おかみさんは帳場から飛んで來て仲裁に入らなければならない光景となつた。成る程、打ちもし殺しもし、欲しければ人の女房にも手を出し兼ない人間だと、鷗外先生の「新聞國」を想起してつくづく嘆息したのであつた。

新聞は恰も封建時代の殿様の如き特權階級である。殿様は、一個の人間としては値打がなくとも威張つて居られる。腰元なんかは幾人犯しても差支へないが、萬一近習の者との色模樣でも見とがめようものなら、不義はお家の御法度と稱して、並べて置いて手打にしてしまふ。得手勝手、且つ何等の責任を負はないところが特權階級の特點である。他人の事ならあくまでも責とがめるが、自分の事になると知らん面をして平然と濟して居る。新聞は此の特權を最も露骨に振廻す。他人に迷惑のかゝるかゝらないなんか頓着する處で無い。嘘でもなんでも構はない。その癖にたまたま自分の事になると忽ち名譽を云々して居丈高に怒り出す。

曾て某新聞に自分の拙い小説を連載した時、その一節に新聞の商業主義を難じたところがあつ

たら、新聞社は作者に無斷で之を抹消してしまつた。

又數年前帝國劇場で上演した永井荷風先生の社會劇「煙」の園遊會の場に新聞記者が出て接待煙草を懷に入れようとするとたんに、打上げた花火に驚いて尻もちをつくところがあつたが、新聞記者を侮辱するものだといふ記者團の抗議にあつて、之を小説家に改めた事がある。試みに「煙」第一幕々切のト書を記す。

以前の新聞記者再び左手木蔭より出て、取り殘したる皿の上の卷煙草を盜まうとする、突然花火の響轟く。新聞記者驚いて椅子の上に尻餅をつく、同時に上の方より花火に仕かけたる風船の達磨ふわふわと落て來る可笑味よろしく左右の木蔭より園遊會の來客男女大勢出で、空を仰ぎながら拍手する。この模樣よろしく幕。

「煙」は社會劇であるが、永井荷風先生の戲曲の常として、北歐風のせつぱ詰つた書方では無く、うつかりすると新派の芝居になり兼ない稍古めかしい手法、例へば佛蘭西の戲曲家の作によくある傳統的の可笑味を取入れたもので、此の場合最も通俗にお芝居らしく、觀客の笑を誘ふのが作者の意圖である。その目的の爲めには、無遠慮とがさつの代表的タイプでなくては適切でないのに、こはもてのする階級意識から強ひてこれを小説家に改めさせた横暴を、特權階級と呼ぶのは當然

である。新聞記者が煙草を懐に入れようとして花火に驚き尻餅をつくのは、一般の人から見れば、道行の御兩人にからむ捕手がとんぼを切るのと同じく極めて自然なのである。無理に小説家にして納まるが如きは餘りに馬鹿々々しい。何故に新聞記者では侮辱になり、小説家なら侮辱でないのか。警視廳が新派の芝居に巡査の出るのをいやがつて干渉すると無理解だと云つて攻撃するのは誰であるか。貴族の横暴、資本家の横暴を口癖のやうに絶叫するものが、斯の如き横暴を繰返しつゝ恥ぢもせず、悔もせず、昂然として益々横暴ならんとするは如何したものであらう。自分は此の特權階級の全然存在しない世の中の氣安さを、痛切に想ふに至つたのである。

何故に新聞が噓を吐くかといへば、各社が血眼になつて競爭する速報主義が第一の原因であらう。新聞に同情のある人は、此速報主義を肯定して、多少の噓は止むを得ないではないかといふ。自分と雖も速報主義を頭からけなすものではないが、過ちである事が判明した場合に、効果ある取消をなし、萬一他人に迷惑をかけた時は、潔よく謝罪しなければならないと主張するのである。中には故らに人の名譽を傷つけんとする記事を揭げて、ゆすりに出る者もあるさうだが、多くは他人の迷惑になんか頓着しない無神經無良心から、ふと往來で聽き込んだ種を、惡達者な筆で勝手に揑ちあげるのである。挑發的な大標題と、他の新聞よりも早いと云ふ事丈が重じられて記事

の眞僞などは問ふところでない。先手を打つといふ事ばかりに苦しみ、ぺてん立ちであらうとも相手が待つたをしようとも構はない。

これは或新聞社の人から聞いた話だが、昨秋の地震の時、丸の內に對立して居る二新聞は共に附近迄火の舌が來て將に燒けんとし、先づ甲社の危急を救ふ爲めに乙社の者も手を貸して防禦に奮鬪した。勿論甲が燒ければ、次には乙が燒ける順序だから、是非とも喰ひ止めなくてはならないのではあつたが、兎に角必死の援助を盡し、惡運強く火の手を免れた。其の時速報主義に更に惡意を裏打ちして先を打つたのは甲で、直ちに地方へ號外を發し、東都の新聞社は自分の所丈が助かつたばかりで、他は總て燒失したと報じ、自分を助けた乙社の名前をも燒失社中に加へたと云ふ事である。商賣敵に對する競爭心の極端なあらはれであるが、平素は互に祕密をかばふ無言の同盟をしながら、危急の際になると共喰ひを演じるのである。しかしこれが新聞國では不思議でないのかも知れない。此の甲社こそ最も新聞主義に成功して、發行部數は日々に增加しつゝあると云ふ事である。

さういふ特權階級の中で、たつた一つ最も平民的なのは「都新聞」である。自分が此の新聞を最もいゝ新聞だといふ所以は、特權階級意識の少い點にある。

勿論どの新聞も自分の事は棚にあげて、貴族や政府筋の人間を、特權階級として攻撃し、その一方では例の民衆に阿る調子を濃厚に見せて居るが、しかし心底から民衆的ではなく、實は極めて官僚的で特權階級の最大のものなのだから、平民がつても民衆がつても、それになり切る事は出來ない。此間の消息は、恰も若手の華族が公園の草刈に出動したり、女房に毛絲屋をさせて儲けたりする心持と頗る似て居る。由來迎合と煽動に最も適するものは新聞國の民衆であるから、總ての新聞は、民衆の味方であると呼號してゐるが、しかし若し其の民衆の一人或は少數があやまつて集團の外に迷ひ出た時、新聞は決して之を憐れみいたはり友達となり指導者となる事をしない。忽ち聲を揃へて罵り嘲り笑ひものにする。

都會の交通機關の不備が人心に惡影響を與へ、苛々させ、殺伐にし、きちがひ染みさせると新聞はしきりに攻撃するけれど、それよりももつと騷々しく、もつと不整頓な新聞の論調は、遙かに有効に人心を惡化させ、とげとげしくし殺伐にする。斯ういふ惡影響の最も少いのが新聞界の女王「都新聞」である。

成程「都新聞」には海外電報のはしりなどは無い。二段三段を費した大論説も無い。速報主義では平均以下かも知れない。しかしさういふ他の競つて力を盡し、且益よりも害の多いやうな特徴

には無關心で、全く方面の違ふ編輯振を示してゐるところは、寧ろ一見識あるものと推稱すべきである。

此の新聞の外に秀でてゐる點は全紙面に統一のある事、文章のうまい事、讀者に親切な事、とげとげしさが無くて溫かみのある事等細かく數へると切りが無い。

現在多くの新聞に統一の缺けてゐる事は驚くばかりで、社說と社會面とが同一の問題を取扱ひながら、全く反對の論調を帶びて居る事は屢々ある。或は社說は新聞社の意見で、三面記事は世相の報告だから、矛盾して居ても差支へ無いと云ふかも知れないが、三面記事とは云ふものゝ、近頃のは多く單なる報道で無く、主觀的色彩の濃いものが多い。これは新聞の得意とする喧嘩面と、多數に阿る根性のどちらかゞ自らあらはれる結果なのである。

然るに「都新聞」は一矢亂れざる訓練をもつて、全紙面が統一され、三面記事と雖も煽動的氣勢を伴はず、穩かな筆致で報道の使命を果してゐる。

統一は文章にも現れて居る。自分の如きも羞しい事には誤字や假名違ひや格はづれの文章を書いて冷汗を流す方では人後に落ちないものだが、凡そ此頃の新聞紙程此點に於て手ぬかりのひどいものは無い。就中粗製濫造早いもの勝で、後の責任なんか考へない社會面と來ては、種々雜多

の破格の文體がづらりと並び、同時に表現と內容とちぐはぐな、所謂新聞語を作り出す。殊に好んで用ゐる片假名と來ては、何とも評する言葉もない珍妙なのが出現する。「女のボオイ」「女のウヱイタア」などはまだしもとして、先年佛蘭西の将軍デョッフルが來た時の群衆の歡呼が「ビッグ・ラ・フランス」を繰返してゐたのなどは、珍中の珍である。

「都新聞」は假名垣魯文、條野採菊時代の文脈を未だに失ひ切らない、多少古くはあるが育ちのいゝ文章で全紙面を覆つて居る。此の新聞獨特の「新道新聞」や演藝だよりなどの活殺自在の筆はいふ迄もない事だが、人殺しや泥棒の記事でも他の新聞のやうな誇張の無い、比較的上品な描法を以て一貫して居る。婦人凌辱の記事の如きさへ、下品な新聞がと云はれ勝の此の新聞は、意外につゝましく報じてゐる。さも面白さうに書立てる新聞とは人柄が違ふやうである。一言にしていへばよく事理をわきまへてゐて、脫線する事の少いのが特徵である。

讀者に親切といふ看板は、通俗には「讀者と記者」及「相談」などにあらはれる叮嚀懇切な態度に明かであり、上に述べた統一も文章のとゝのつてゐる事も、考へて見れば讀者に親切だからである。誤植の少いのも附加へて美點とし度い。

右の「讀者と記者」及「相談」の二欄は、自分の最も愛讀するところである。讀者側の主張も、他

の新聞の讀者投書欄のやうに揚足取や喧嘩腰でなく、懇談的の物言ひなのが嬉しい。徒らに「都新聞」を下品なりとなす人は、此の欄を讀んで如何に上品な讀者を有して居るかを發見するがいゝ。心持のねれた雅(みやび)やかな人々の面影は、他の新聞には見られないところである。又之に應ずる記者の答も決して御無理御尤もとおだて上げず、是を是とし、非を非とし、諄々と說いて倦まない態度で、甚だ奥床しい。「相談」に至つては、法律や世事にうとい人々の爲めに、どの位力を與へて居るかはかられない。相談をする人の心持や境遇を想像すると、複雜極まり無い世態人情もうかゞはれ、乘る可き相談には、智惠を貸し、我儘な者はさとし戒め、時には叱責する事さへある回答者の懇切は、自分の尊敬して止まないところである。

此新聞の温かみは、決して享樂氣分が多いからばかりではない。無責任な誇張を事としたり、結果を想はない煽動的態度に出る事が無く、行儀よく分を守つてゐる爲めと、讀者に親切である爲めのものであらう。他の新聞を讀むと苛々するが「都新聞」だと平靜な心持を失はずに社會の出來事を知る事が出來る。

意餘りあつて言葉は未だ不足であるが、新聞界の女王「都新聞」の健全なる發達を祈りつゝ一先づ筆を擱く。(大正十三年五月二十五日)

――「都新聞」大正十三年五月二十八日・二十九日・三十日・三十一日・六月一日・三日・四日・五日

畫家仙波均平氏

仙波均平（せんばきんぺい）さんと自分とは、ふた昔半ばかり前慶應義塾の普通部で机を並べて居た友達である。當時は未だ生家の岡見姓を名告つて居たが、級中で少し年齢が上の方だつたからか、或は茶目氣の全く無い性質だからか、吾々よりは遙かに大人に見え、且行儀もよく、端麗な風采なので、誰しもさん附で呼び、惡童どもも一種尊敬の念をもつてつきあつて居た。

なまけ者の多い學校で、殊に自分の如きは、教場と先生と教科書といふものが性分に合はない爲め、落第しても落第しても懲性も無く、授業時間の半分は年中休み、たまに教場に顏を出しても、返事をして置いて窓から飛び出して運動場に逃げて行つてしまふと云ふ始末で、學業といへば何ひとつ出來なかつたが、人にすぐれておとなしい均平さんも、決して出來のいゝ方では無かつた。

しかし均平さんのは、吾々のやうに悪戯をしたりエスケープをしたりするやうな目立つた怠け方で無く、勉強して居るのか怠けて居るのかわからないやうな怠け方だつた。今になつて考へて見ると、均平さんにも學校で教へる總ての科目が何の興味も與へないので、本來あり來たりのいたづらつ子型でない人の事だから、陰性に怠けて居たのだと思はれる。田舎から出て來る子供の多くは、東京に行つて學問をして、偉くならうといふはつきりした目的を持つて居るやうだが、東京の子供は、學校で教へる事を覺えれば偉くなれるといふやうな簡單な考へは持つてゐないらしい。從つて學校に興味も權威も感じないらしい。學問の興味を起させる丈學問に興味を持つてゐる教師のゐないのも一原因だが、ひとつには各方面に頭がつかへて居る事を不知不識意識してゐて、青雲の志などゝ云ふやうな漠然とした書生さんの理想は、神經過敏で物事に倦き易い都會の子供には湧いて來ないであらう。

兎に角均平さんは、學校にはおとなしく出席して居たから、吾々のやうに先生に叱られるやうな場面は見せなかつたが、人並以上に眞面目な心の中では、その日その日の自分に滿足しないが、さりとて斯うとつかめないもやもやした煩惱を持つて居たものらしい。それは後日になつてわかつた。

均平さんも野球や庭球の仲間には折々加つた。本家の岡見さんが頌榮女學校を經營して居られるので、廣い地面内には運動場もあつたから、子供の時から戸外遊技には馴染んで居たものと見え、練習なんかしないでも、試合になるとなかなかうまかつた。野球をやると一壘を守り、少し高いそれ球が來ると片手でつかむのが得意だつた。今でこそ片手で球をつかむ位の事は誰にでも出來る藝當であるが、其の頃は未だバウンドを目をつぶらずに取るなどゝいふ事で有名になつた選手さへある位幼稚な時代だから、まして中學二年生位で、此のはなれわざを演じるのは珍しかつた。大きい聲では物も言はない人が、何の怖氣も無く猛球を片手でつかむといふ事は、其處に何か均平さんの人並でないところを示すものがあるやうに自分には思はれた。

なまけ者の自分にとつて何よりもいやだつたのは體操だつた。他人に號令をかけられて動くといふやうな事は、子供の時から嫌だつた。自由にやらして呉れたら、器械體操なんか存外うまくなつたらうと思はれるが、おいち、にい、さんと聲をかけて、〔十一字略〕やらされる爲め、全然忌む可きものとなり、遂に自分は鐵の棒にぶらさがる事を極端に嫌ふやうになつた。今でもたぶんさうだらうが、普通部の體操は古手の〔九字略〕下士官あがりの有泉義理作といふ人が萬事を司り、あとは生徒の中から大隊長だとか分隊長だとか云ふのが、〔十四字略〕長劍をつるし、赤い紐で出來

たしるしを胸につけ、鐵砲をかついでゐる雜兵を指揮する仕組だつた。今でこそ洋服を着るといへば新聞種になり、ライスカレーが好物だといへば驚嘆される位變に賣込んでしまつた久保田万太郎さんなどは優等生で、小隊長だか中隊長だかを立派に勤めあげたものださうである。しかし自分の如きには〔二十二字略〕出來なかつた。其處で、器械體操と鐵砲かつぎを免れる爲めに、相棒のぶうさんといふ惡童と共に、自分は喇叭卒になつてしまつた。鐵砲をかつぐ代りに、稻荷山の大銀杏の下でチテチテタと喇叭の稽古をするのである。ぶうさんの方は後年喇叭隊の親玉になつた位だから、存外眞面目にやつたのだらうが、自分は元々好きでなつたわけでは無く、喇叭の方は下士官先生の目がとゞかず、いくら怠けて居ても構はないと聞いて飛込んだに過ぎないし、且生れつき齒が惡くて到底資格は無いのだから、稽古の時も列の最末端に並んでゐる丈で、結局ドトタテチの五音さへ滿足には出せないで終つた。然るに此の喇叭隊に均平さんも入つて來た。鐵砲には餘程參つたものと見える。頰邊(ほつぺた)をふくらまして、眞赤になつて喇叭を吹く均平さんの姿は、如何にも似合はしくない丈印銘が深かつたと見えて、今でも明瞭に想起(おもひおこ)す事が出來る。但し自分は間もなくまるつきり捨鉢になつて體操は全休と決心し、試驗も受けずに押通してしまつた。

　のらくらした日を送りながら、自分には何時の間にか藝術に對する憧憬の念がめきめき強くな

つて來た。何かしら自分もやつて見度くて堪らなかつた。その慾望の適當なるはけ口が見付からないまゝに、いろんな事に手を出して見た。

今はなかなか盛んになつて居るさうだが、慶應義塾の音樂會ワグネル・ソサイエテイの創立當時の會員にもなつた。大學生ばかりの中に、ぶうさんと自分丈が普通部の一年生だか二年生であつた。ゆくゆくはヴアイオリンをやり度いと思つて居たのだが、創立當時は聲樂部丈で、山の下の幼稚舍の二階で練習をし、音聲がいゝとおだてられて密かに得意だつたが、間も無くその團體の氣障なのがいやになつて止めてしまつた。

又三宅克己さんが色鉛筆や水彩畫の普及をはかり、中學生の美術愛好熱を高めた時代だつたから、幼少の頃から好きな道で、矢張り同校の同好者のつくつて居たパレツト倶樂部にも名前丈は入會してゐた。

四五人の仲間を集めて謄寫版刷の雜誌を出したのも其の頃であつた。運動場で土まみれになつてあばれる時もあり、感傷的な詩歌を愛誦して、何とも知れない涙ぐましい心持になる事もあつた。

さういふ仲間から見て、均平さんは別の世界の人のやうに思はれた。吾々がしたい三昧放縱勝

手な日々を送つてゐる丈強く、きちんとしたみなりをして言葉使ひも身のこなしも上品な、恐らく芝居なんか見た事もなさゝうだし、小説なんか讀んだ事もなさゝうな均平さんは、一家一族熱心な基督教信者だといふ事に結びつけて、一切の快樂を否定する禁慾主義者のやうに思はれた。いつたいならば、日本の耶蘇教信者について廻るいやみは堪らないものなのだが、何處かに封建武士の血を持つてゐるやうな均平さんの基督教は、あく迄もほんものに思はれて、ちつともいやで無かつた。いやしい慾念のあらはれてゐない其の顏は、西洋の繪で見る基督のやうな面影さへあつた。何といふ取り止めた理由はないのだが、大人になりかゝる頃の鬱憂に惱まされ勝な心から、散歩の途すがら、均平さんの信仰について質問をした事もあつた。つまり自分の如きは、だらしの無い自身にあきたらず、堅固な信仰をもつて安らかな心持でゐるらしく見える均平さんを尊敬もし、うらやみもしてゐたのであつた。

均平さんが藝術を熱愛するといふ事は、久しい間自分も知らなかつた。基督教を通して西洋の文物に親しみ、音樂美術文學を一通り尊敬する心持を持つてゐる事は承知してゐたが、それに生涯を捧げる程の熱情を胸底にしまつてゐた事には氣が付かなかつた。

學校の圖畫の先生は能勢鶴二郎さんといふ人で、後に肺を病んで死んだが、又とないおだやか

な人であつた。外の學科は面白くなかつたが、圖畫は嫌ひでないので、自分もいゝ點を貰つてゐた。流石に均平さんは人一倍綿密な描法で最高點をとつてゐた。しかしそれ丈では、一人前の畫家になれる程の天分があらうとは考へられなかつた。白馬會や太平洋畫會、銀座の勸工場や芝山内の彌生館で催される展覽會に均平さんと一緒に行くと、ためつすがめつ一生懸命で見てゐる樣子は知つてゐたが、それは何事にも叮嚀な人だから丹念に見てゐるのだと思ふばかりで、畫家にならうとする心を抱いてゐるなどとは夢にも思はなかつた。

此の事は均平さんの特徴で、吾々ならば昂奮し、自分の氣持を誇張して發表し度くなるところを、ぢいつと抑へて肚の奧底にしまつて置き、誰人にも賴らず誰人にもほこらず、愈々最後におもひ極めた時は、靜かながらも確實に力の籠つた一歩々々を運んで行くのである。

均平さんの口から、繪かきにならうと思ふといふ事を聞かされたのは、均平さんが普通部を卒業する間際だつた。自分の方も、もう運動場をかけ廻る生徒ではなくなつて居た。學校はつくづくいやだし、うちの首尾はよくないし、いつそ亞米利加にでも出かけて、商店の小僧か馬鈴薯畑の勞働者になつてやらうかなどゝ考へる事もあつた。一身の處置にも困り、心の不滿と寂しさに惱みもして、何時の間にか友達の數もへり、一人ぼつちになりかけて居た頃で、均平さんに逢ふ

事は、とげとげしい心を和げ、正道に立かへるよすがとなりさうな氣もした。

殊に芝白金猿町の均平さんの家を訪れる事は、救の庭に赴くやうな感さへあつた。均平さんの叔父さんに當る本家の御主人は、島崎藤村先生の「櫻の實の熟する時」にも出てゐる人で、その宏大な地面の中には女學校もあり幼稚園もあり、幼稚園の側には分家の均平さんの家もあつた。學校の門を入り、校舍の横手に廻ると、武藏野の郊外の景色そのまゝの栗や櫟の林の中に小徑があり、崖の下にはあやめや葦の茂る大きな池の水の光るのが見え、どんどん進んで行くと均平さんの住居の裏手に出る。此の小徑を歩いて行く時間は、短いながらもなつかしいものであつた。かなめ垣で圍まれた田舍風の質素な家で、人の足音をきくとポインタア種の雌犬が馳けて來る。庭の芝生には蜜蜂の箱が並び、幾百の蜂が日光に羽を輝かして飛んでゐた。花壇には春秋の草花が手入よく植ゑてあり、均平さんの室の窓には桃色の鸚鵡が終日奇聲を張上げてゐた。子供の頃の自分の夢をはぐくんだナショナル・リイダアの中の繪のやうな景色だつた。殊に春の四月頃、垣根の外の空地に立つ一本の白木蓮の花の盛は、其後時々夢に見る程美しいものであつた。眞青に晴れた大空の下に、純白の大輪の花の群つて咲くのが、清淨なる一家の象徴のやうに思はれた。

御兩親でも、兄さん達でも、きれいな妹さんでも、誰もが此の家の外の世俗人とはまるつきり

違ふ型だつた。自分の家のやうな新興階級ではなく、舊家の古めかしい傳統の中に、つゝましやかに、ひたぶるに、信仰にいきる人々だと思はれた。清教徒の家といふ感じであつた。

清教徒か禁慾主義者として見てゐた均平さんが、感覺を主とする異端者の道に踏入らうと決心したのだから、自分は全く驚いてしまつた。自分とても、なれるものなら小說家になり度いと考へる事もあつたが、紅葉先生とか鏡花先生とかいふやうな偉い作家の作品を見ると、到底自分のやうなやくざな人間では一人前にはなれないと思はれ、殆ど實際問題として追及する事などは頭に上らなかつたのに、自分よりも一層藝術家としての天分は惠まれてゐないときめてゐた均平さんが、敢然として畫家にならうといふのだから、寧ろ第一番に其の前途をあやぶんだ。とても物にはなるまいと思つたのである。

普通部卒業と同時に學校をやめてしまつた均平さんは、どういふつてがあつたのか、太平洋畫會の研究所に通ひ出した。わざと異樣な風にして得意がり、ふしだらを自由と心得勝の畫學生にまじつて、ストイック派の學徒の如き均平さんは頗る眞面目に勉強を續けた。

或時自分は均平さんにくつついて、上野の山のうらの方にある其の研究所に行つて見た。生きたモデルを使つて寫生をするのだといふ話を聽いて、そのモデルが女で且裸體であつてくれゝば

い丶と思ひながら、強い好奇心をもつて行つた。がらんとした室内のあちらこちらに陣取つてゐる學生の間に、たつた一人向ふむきの銀杏返の女がゐたが、間もなくそれが中央のモデル臺へ上つたと思ふと、正面を向いて、はおつてゐた單衣を脱ぎ、全身裸體で椅子に腰かけた、平顔(ひらがほ)の、目鼻立の哀れつぽい女で、榮養も皮膚の色も惡かつた。一絲もつけない女の姿は決してみだりがましいものでは無かつたが、何となく可哀さうな感じのする其の女の顔は今でもよく覺えてゐる。

當時均平さんは主として靜物を描いてゐた。庭に咲くダリヤ、薔薇、シネラリヤ、バナナ、オレンヂ、林檎、葡萄、トマト、玉葱、馬鈴薯、人參、コツプ、西洋皿、フライパン、古瓶といふやうなものである。稀には風景もあつたけれど、自然の觀方が定らない爲めか、見て感じるものを其儘畫布に盛上(もりあげ)る把握力が伴はない爲めか、靜物に比して著しく見劣りがした。尤も其の靜物も、自分などには餘りに生眞面目な密畫で、且色彩に新鮮の感がなく、一口にいへば「古い」といふ日本の洋畫壇流行の評語によつて手輕に片づけられさうなものに見えた。

ほんとに繪畫を鑑賞する眼が開かれず、單に新しい刺戟ばかり求め、雜誌や新聞の上で文學的に紹介される近代的畫風に憧れてゐた自分などには、こつこつと自己にのみ忠實に勉強してゐる

均平さんの靜物畫の如きは、心を引く事が少かつた。今は大阪の生絲會社に勤めてゐる岡田四郎君などゝ、內々均平さんの將來をあやぶみ、且其の畫をけなしたものであつた。

「又均平さんの古瓶か。」

「どうも感覺が眠つてゐるよ。」

などゝ生意氣をいひ合つたものである。がむしやらに知識慾に燃え、無制限に新しい感覺の世界を求める年少者の心には、沈靜なる畫風は訴へるところが少かつたのだ。

ところが其の均平さんの靜物が、間もなく文部省美術展覽會に出品された。つい此間迄學校で顏を合せてゐた均平さんの繪が、玄人の中にまじつて公開の場所に出たといふ事丈で充分驚異だつた。しかも鑑別の結果褒狀を貰つたので、吾々は又更に驚きを增した。さうして均平さんの繪に相當の値打のある事を知つたのだが、しかもなほ自分の眼を以てしては、それ丈の價値を認める事は出來なかつた。

つゞいて又他の展覽會で、均平さんの靜物は再び褒狀を受けた。

其後均平さんは暫時の間靜岡縣下の中學校の畫學の教師となつてゐて、やがて東京に歸つて來ると、今度は自分が外國へ勉強に出かけたので、爾來均平さんの作品に接する機會が無くなつて

しまつた。そればかりで無く、字が下手で、文章が下手で、おまけに筆不精の均平さんからは、何時の間にか消息が途絶え勝になり、自分が倫敦にゐる頃、均平さんが紐育へ渡つた事は聞いたけれど、何處にゐるのか何をしてゐるのかも知らなかつた。

大正五年に先づ自分が歸朝すると直ぐ、猿町の均平さんの家をたづね、母人と、出立前に結婚した夫人とに御目にかかつたが、留守宅の方にもちつとも便りが無くて困るといふ話だつた。それつきり、今年の此の頃迄、自分と均平さんの間には、一通の手紙さへ往復しなかつた。誰に聞いたのだか忘れてしまつたが、あんまり長く均平さんが歸つて來ないのみならず、手紙の上ではどういふ積りでゐるのかもわからないので、母人の勸めで夫人が乳呑兒をつれて亞米利加迄御迎へに行つたといふ事だつたが、その話のあつたのも今から既に五六年前になるであらう。

此の四月、突然均平さんがたづねて來た。十三年目の對面で、お互に年齢(とし)はとつたけれど、逢つて話をして見ると、むかしのまゝの均平さんだつた。

「君は變らないねえ。」

「君だつてちつとも變らないよ。」

と雙方同じ事を云ひ合つた。噂の通り、あんまり消息が無い爲め、夫人は後を追かけて行つた

さうだが、健康を害して引かへし、均平さんは一人で佛蘭西に渡つて、巴里はモンマルトル邊の畫室に閉籠つて勉強して來たのであつた。

均平さんは矢張り均平さんで、全く自分一人の道を歩いて來た。隨分地道に眞正直に勉強して來たにも拘らず、

「ようやく調子がわかりかけたばかりだ。」

と云つてゐる。それでも太平洋畫會時代の友達に勸められて、携へかへつた數十枚の繪を、近日中に世間の人に見て貰ふ積りだと云ふ。其の畫に就いては、中村彜さんが批評されるさうであるから、自分の如き素人が口を出す可きではないが、最もよく制作者の人となりを知つてゐる強味で、些かその畫に現れたる人格の片影を記して見度い。

均平さんの巴里土産を見ると、その根本に於ては十數年前とちつとも變つてゐない。その人がむかしのまゝに延びて來たので、繪も亦これに伴つて發達した。しかし昔の作品と今の作品との間には、非常な相違がある。著しい進歩である。それは何であるかと云へば、制作者の人間が力強く畫面に現はれて來た事である。自分の見た繪の多くは、靜物と人物で、風景は僅かに四五枚に過ぎなかつた。矢張り靜物と人物が一番面白いと均平さんも云つてゐるが、風景畫は畫品が著

しく劣つて居る。しかし各々の繪の出來榮には優劣があるけれども、どの繪をとつて見ても、均平さん其人と面接してゐる感がする。一時の流行を追はず、一人で道を拓いて行く人の藝術の強味は其處にある。

均平さんは流行に支配されない人である。自分の信念を曲げない人である。印象派がはやると無闇に畫面が明くなり、草土社があらはれると忽ち畫風が暗くなるといふやうな、カメレオンの如きうつりかはりは、良心が許さない人である。だから巴里で勉強して來たには來たが、近頃の多くの巴里歸りの畫家のやうに、現在の彼地のはやりの畫風を模して來たといふやうな事はしない。どつちかと云ふと古典的の趣味を持つてゐる人だから、近代的の感覺的な畫風ではない。筆數を省いて、對象の生命を暗示しようとするのでは無く、どこ迄も綿密に描いて、自分の心にしつかりと感得してゐるものをあく迄も描き出さうとする。一時代の鑑賞に樂々と迎合するものでは無く、時代意識を離れたところ、古の工人の心持にも似てゐる。先人の作を見ても、均平さんは現代の大家の作品よりも、文藝復興期時代のものに感激したらしい。

均平さんが昔のまゝの宗教的信仰を持つてゐるかどうかは知らないが、少くとも畫面を統一してゐるものは信仰か、或は淸淨を尊ぶ倫理觀であらう。一目見て、晴れやかに胸の躍るやうな輕

快な筆觸や色彩はないが、默つて暫時見詰めてゐるうちに、襟を正さなければならない心が起る。此の淸教徒の家の子には、浮調子(うはつてうし)な世俗の騷々しさを避けて、寺院の靜寂のうちに一人端坐する事を喜ぶ血が傳つてゐる。裸體の女を描いても、恰も懺悔する者の告白の如く、意味深く聞かれはするけれど、まざまざと肉の香はしない。誰人にでも身を任せるであらう巴里の安モデルを描いても、その女のよき心ばかりを均平さんは見てゐるやうである。描かれた女の顏に、邪惡の陰影がない。

この色彩に於ては殊に獨特のものを示してゐる。古池の水銹の浮いた水の如き靑、藍瓶にさす曉の光の如きインデイゴオ、尼僧の身につける衣の色のセピア――それらを主色とする物の陰影は、重く靜かに稍冷く人々の心に沁みる。たとへばカトリツク敎會の內部の如き感じである。恐らくは此の色調は均平さん以外に、古今東西に一人もないのではないだらうか。空のあかるい佛蘭西や白耳義の風景を描いても、暗いかげは消えない。その爲めに多くの人には、最初見馴れないうち、親しみ難く思はれるかもしれない。

しかし均平さんの畫は決して冷いものでは無い。色こそ寒色が多いけれども、つゝましやかな柔かい溫かさが、畫面に浮んでゐる。育のいゝ娘の微笑の如く、かすかながらも美しい優しさが、

花にも人にも馬鈴薯にも絡つてゐる。巴里でサロンに出品した繪の如きは、ラファエル前派の詩情に似た感じを漂はせてゐる。

舊家の正しい傳統をうけつぎ、深い愛の宗教を心とし、清淨に身心を持して來た人の求むる美は、極めて內面的のものであらう。はなやかな色彩にも、陽氣な音樂にも緣は遠いが、しかも描かれた植物も人間も、此の世に存在する一切のものが、此の畫家の目には平等に尊ぶ可く愛すべきものと見えるらしい。さうしてその描かれたあらゆるものは、古瓶もフライパンもトマトも玉葱も、すべてが正しい倫理觀を持つものゝ如く端然と、すべてが神の惠に安んじてゐるやうに靜かに滿足の微笑を浮べてゐる。（大正十三年五月二十七日）

——「三田文學」大正十三年六月號

紙屑

題して「紙屑」と云ふ。大正十年五月、雜誌「文章倶樂部」の質問に答へたものであるが、編輯者の御意に適はなかつたのか、何時迄經つても揭載されないので、一先づ取戾さうと思ひ、再三手紙を以て申入れたれど何等の挨拶に接せず、平生新潮社に好意を有する久保田万太郎氏に談判を依賴したれど要領を得ず、荏苒今日に及んだ。たまたま「新潮」の爲めに小說一篇を寄稿すべきやう勸說せられたので、來訪の記者に三年前の原稿の行衞を詰問したが更に要領を得ず、たぶん編輯者の手によつて破棄されたのであらうと推察し、果して然らば大いに其の不都合を責むる必要があると思つたが、なほ念の爲め文壇の大久保彥左衞門と稱する中村武羅夫氏に事の顚末を申送つたところ、意外にも原稿は新潮社の何處からか發見されたと見えて、やつとの事で返戾を受けたのである。自分にとつては捨て難いものであるが、「文章倶樂部」の編輯者から見れば「紙屑」で

なくてなんであらう。（大正十三年六月二十四日）

文章倶樂部の問に答ふ

問の一　創作氣分の湧く時、湧かない時。

答の一　△一日のうち、一年のうち。

朝が一番なれど勤人の身の是非もなし。嫌な夏の過ぎたる秋最もよろし。

問の二　よく書ける場所。

答の二　△旅、書齋、書齋の光線、其他。

あかるき書齋と思へど借家人の身のおもふに任せず。

問の三　原稿紙。

答の三　△色合、大きさ、紙質、其他。

無類の惡筆なればぜいたくは申さず春陽堂製十行二十字の粗惡なるものにて滿足す。

問の四　ヒントの來る時、場所。

△夢、見たもの、聞いたもの、空想したもの。

答の四　愚問なり、ついでに剽竊したものと加へては如何。

問の五　書齋の置物。

△机、本箱、彫刻、繪畫、卓子掛、寫眞。

答の五　机の外は何も無いに限る。

問の六　創作氣分が作られるまで。

答の六　愈々愚問なり、答ふるところを知らず。

問の七　執筆中氣になる事。

△書齋の戶の開くこと、人の入つて來ること、訪問者。

答の七　何れも不愉快なり、殊に雜誌記者にやつて來られる事最も堪へ難し。

問の八　執筆中の癖。

△煙草、茶、菓子、酒。

答の八　何も欲しくなし。

追而煙草、茶、菓子、酒等を嗜む事を癖とはいひ難きやう思はる、嗜好とでも改めて頂き度し。

問の九　途中で書けなくなつた時どうするか。
　△讀書、散歩、入浴、友人を訪ねる、活動、芝居。
答の九　やめてしまふまでのことなり。
問の十　どういふところで一番書けなくなるか。
答の十　一概には答へ難けれど自分の下手に愛想の盡きる時書けなくなる事確實なり。
問の十一　作品中で苦心する點。
答の十一　徹頭徹尾。
問の十二　好み。
　△女、花、酒。
答の十二　乍遺憾女は好きになれず、これ一生の不幸ならん、花はいかなる花にてもよし、殊に日本の秋草を好む、酒は甚だ好めども忽ち醉拂つて氣焔をあげる相手など眞平たり、獨酌に限る。（大正十年五月二十九日）

——「三田文學」大正十三年七月號

友はえらぶ可し

妻をめとらば才たけて
顔うるはしくなさけある
友をえらばば書を讀んで
六分の俠氣四分の熱

戀のいのちをたづぬれば
名を惜むかなをとこゆゑ
友のなさけをたづぬれば
義のあるところ火をも踏む

これは、明治三十年代の文學書生が、もだもだした胸の血汐の高鳴りといふのに惱みながらうたつた與謝野寛氏の詩である。

友に親友と益友とありといふやうな事を、小學時代に教はつた記憶があるが、人の世の複雜極まり無いことをつくづく思ふ此の頃、殊更友達はえらぶ可きであると考へる。學校時代からの友達、文學を楔として結ばれた友達、勤先の友達——いろんな種類いろいろの型の友達のどれもこれも、自分の友達はいゝ友達である。先方はどう思つて居るか知らないが、現在つきあつて居る友達は、みんな親友だと思つてゐる。道學者が見たら、果して益友であるかどうか知らないが、自分は益友だと思つて居る。癇癪持の小人の悲しさには、時には其の友達に對しても、むかつ腹を立てて怒る事もあらうが、さういふ行違ひは一時の事で、矢張り友達はなつかしい。

一體に氣が重く、誰とでも面白く話の出來る方では無いから、一面識の人と直ぐに打解けて談笑するといふ氣分にはなれず、從て友達の數は極めて少いが、そのかはりに何たる幸運であらう、粒撰の友達ばかりである。

茲に自慢らしく公言する所以は、たまたま雜誌「女性改造」に、故人有島武郎氏の友達——有島

氏の好みから察すれば、恐らく氏はお友達と呼んだであらう――大橋房子といふ人の「テマの解けた氣持」といふ一文を讀んで、如何に有島氏が惡友――といふと何となくすつきりした感じが伴ふが、いひ得べくんば賤友と呼び度い――に取卷かれて居たかを、殆ど公憤に似た心持を以て痛嘆したからである。

自分は有島氏とは一二度多數會合の席上で挨拶した事があるばかりで、親しく逢つて話をした事は一度も無い。有島母堂と自分の母がおつきあひが有つた關係か、母は武郎氏を知つて居て、先方からも折々著書を贈つて呉れて居た。母は頻に武郎氏の人となりをほめ、殊に夫人に先立たれた事に對し、ひどく同情し、從て其の作品中妻や子の事を書いたのだと思はれるやうなものは、涙を流して讀んで居たやうである。婦人を取扱ふ事に強い興味を持つて居たらしい有島氏は、六十を越したお婆さんに對しても、自ら物腰柔かに接したものと見えて、平生我が子の強情とぶつきら棒を心配して居る母は、武郎氏を見習へといふやうな事さへ口にしたものである。亡き妻に對する愛を失はず、獨身で子供達の世話をし、品行方正で、年寄にも親切だといふやうな事を數へて、我子の手本と考へたのであらう。但し生涯の終に、人妻と心中をした事については「困つた事をして呉れた」といふ一言で、目はしの利かなかつた事を悔いるのか、又は母堂や子供の事

を想ふのか、涙ぐんで居た。矢張り女にもてない我が子の方が無事でいゝと考へ直したかも知れない。

有島氏とは一二度同席したばかりで、親しく話をした事が無いと書いたが、是非一度は逢ひ度いと思つて居た。それは下の如き理由の爲めである。

或時、自分のところに、全く見も知らぬ若者が金を貰ひに來た。其のいふ所によると、彼は私がどんな人間であるかも知らず、私の著作などはひとつも讀んだ事も無く、單に金をねだる爲めに來た。どういふわけでねらひをつけたかと云ふと、有島氏に教へられて來たのだと云ふのである。彼は私を非常な金持だと思つて來たらしく、貧弱な借家住居(すまひ)で、家具調度も滿足には揃つて居ない有樣を見て、意外のおもひをした事を正直に告白した。此の若者は所謂文學青年では無く、直接行動を是認する一派の主義者であつた。知識を輕蔑し、讀書人を罵倒し、彼自身が信ずる主義さへ、理論的に主張する事を知らなかつた。そんな事を知つて居る奴は、彼の罵る無用の讀書人なのである。さう云ふ傾向の人間だつたから、有島氏の書く物なども讀んだ事は無いと云つた。しかも有島氏を讚美する「偉い」といふ言葉を、幾十度繰返したかわから無い。その「偉い」といふのは、何時行つても多少の金を呉れるといふ事に主として係るものらしかつた。

又その當時新聞種になつてゐた有島氏の財産擲棄問題も、彼の激稱する所だつた。彼の言葉を信ずれば、有島氏は此の連中に對しても、母堂が財産投出しに反對するのを歎いて居たさうである。「あのばゞあがよくないのです」と、失禮な言辭を以て若者は憤慨した。

自分は此の話を聞いて、むらむらと不愉快になつた。母堂が、妻や子の爲めに亡夫が殘した財産を守らうとするのは當前(あたりまへ)である。勿論ありあまる財産を持つて居る者が、これを投出さうとする心持も充分了解出來る。しかし、假に有島氏一人が親讓の財産を投出したところで、それは人心に或刺戟を與へる効果はあるだらうが、何等直接社會の幸福を增すものでは無い。若し有島氏が斷行したら、忽ち自分達の懷も溫まるかの如くに考へてゐる此の若者のやうな連中には、惡影響さへ及ぼすであらう。結局自分一人の心持をさつぱりさせる爲めの投出しならば、年老いた母堂の心を亂し悲しませる事無く、寧ろ其の親讓の財産全部を母堂に返戻し、自分は希望する如く無資産者となつて隱居し、且住心地の惡い大いなる邸宅を去る可きである。自分は眞顏になつて、有島母堂の爲めに辯じたが、勿論若者は肯定しなかつた。社會の爲めに財産を投出すのだから、一人の年老いた母親の悲歎などは問題では無いと云ふのであつた。

人に金を與へる快感を味ふ丈の餘裕の無い自分は、此の若者に酒手をやる事を斷つたが、果し

て有島氏が自分を投錢をする人間として紹介したかどうか、一度親しく紹し度いと思ひながら、その機會を得ないうちに、氏は輕井澤で人妻と共に縊れて死んでしまつた。

自分は有島氏の心中を讚美するものでは無い。殊にあの遺書に對しては、深い疑をいだいて居る。英雄人をあざむくといふか、人は死に臨んでも自分勝手な事ばかり考へ、且眞に言ふ可き事を云はないものだと思ふのである。しかし、あれ丈の人が、相手の女に積極的に誘はれて死に到る迄の苦悶を想ひやると、同情の念に堪へない。正直の處、自分は有島氏を藝術家としては相當の人だつたと思ふが、其名聲程の値打を認め兼るのである。又、あの人の對世間の態度に對しては、不尠不滿に思つて居た。それにも拘らず、其の死を悼むのは、自分の如き煩惱になやまされる者が、身にひきくらべての同情である。痴人の死として同情するのである。自分は有島氏の心中に就いて、人と異る解釋を有して居るが、玆に之を論じる事は差控へて、急いで本筋に入る事にする。

扨て「テマの解けた氣持」の筆者大橋房子といふ人とは、幸にしておつきあひが無い。元來、自分自身にしても、他人の事にしても、餘りみなりに新奇の趣向を凝らすのを嫌ふ傾向があるので、斷髮で賣込むが如きは好まない。時々雑誌新聞に發表された意味ありさうな發想法で、しかも何

ものをも暗示しない内容の空漠な文章を見るとなさけなくなる。女だからこそ文壇の色どりとして存在し得るのであらうが、これが男だつたら、斷髪のかはりに長髪をなびかして練廻つても、到底かへりみられはしないであらう。何時も口癖にいふ事だが、何處迄女は得なんだらうと思ふばかりである。

尨大な地球の、打ち貫き得やうもない太鼓腹を中に、故國に殘して來た愛するものたちとの交信の久しく打ち絶えた不安と焦慮との極みに在つた時、ゆくりなくもふと耳にした親しい友の死ほど、切實に、私に死そのものゝ臭氣を嗅がせ、狂ほしい昂奮の渦巻の只中に容赦なく私を捲き込んだものが、今までに嘗てあつたとは、思ふことが出來ません。

これは「テマの解けた氣持」の冒頭の一句であるが、何といふこけおどかしな書方であらう。文章道の第一義は正確明快なる事である。斯う迄不正確不明快なのは意味の無い事を意味あり氣に裝ふものといふ可きである。此の調子で、長々と書いてあるのを讀むには非常な努力が必要である。すらすらと讀流しては、何の事だかわからない箇所が澤山あつた。白狀すれば、自分は正しく理解する爲めに、不愉快を忍んで二度讀んだ。

何故に自分が腹の立つ程不愉快に思つたかといへば、此の廻りくどい、時代遲れの感傷的な一

文中に、何ともはつきり現してはないが、何かしら意味ありさうな自身の苦悶に惱んでゐる事を書いて、自分の輪郭を大きく滲ませようとしながら、當の有島氏がひどく下らない人間に描かれて居る事である。死んだ友達に對して、形式的の讃辭や弔辭を贈る事をいゝ事だとは思はないが、少くとも親しい友達の追憶を描くにあたつては、その人間をいやな奴にはし度くない。稍古めかしい心持かも知れないが、それが親友の間の純粹の友情であらう。

勿論有島氏の如き文學史に殘る公人の人となりは、成る可く正確に傳へるのが本當で、「テマの解けた氣持」に描かれてゐるやうな一面を眞實持つてゐたとすれば、つゝみかくさず書傳へるのも惡くない。いゝ心を多分に持ちながら、隨分いやな心も働いたらしい有島氏の事だから、簡單にいゝ人だ、正直な人だ、親切な人だ、偉い人だ――と片づけるのはよくないに違ひない。

けれども、「テマの解けた氣持」の筆者のやうに、有島氏のいゝところを描いて居るつもりで、最もいやな一面を示したのはなさけない。眞に親しき友達であるならば、さう云ふ見當違ひはある可きでない。此の文題して「友はえらぶ可し」といふのは、趣旨とする所こゝに在るのであつて、多少嘆息の調子を帶びてゐる事は申す迄もない。

有島氏は非常に女好きだつたさうである。女好きと云ふと語弊があるが、たとへば里見弴氏が

玄人との情合に身を盡す遊興がるのと同じ程度で、素人との「御交際」を熱心に求めたといふ事である。有島氏と親交のあつた或る女の人の話によると、しつつこい程親切で、且その女の人を介して更に他の女との交際を欲する事極めて切なるものがあつたさうである。彼の女の人を紹介して下さい、此の女の人を紹介して下さいと云ふやうに、それからそれと交際する事を求めたさうである。勿論それが、女學生の理想とする「清き交際」であつた事は疑ふ餘地が無い。

婦人に同情のある人で、且婦人に人氣のあつた人であるから、進んで自分の方から交際を求める際の人は別として、先方からせつついて來るのも極めて多く、恐らくは應接にいとま無き程であつたらう。由來婦人から交際を求められるのは文人の役得である。求める方から見れは、役者は綺麗だけれど怖しいし、文人は手間暇いらずに應じさうだと云ふやうな心持も働くのであらう。曾て文壇の流行兒となつた事の無い自分の如きものにさへ、屢々手紙を寄せて交を求めた婦人が十指に餘る。未だ御目にかゝつた事は無いが夢に見ましたと云ふのがある。御兄様と呼ぶ事を御許し下さいませと云ふのがある。寫眞を呉れと云ふのがある。何か肌に着けた物を呉れと云ふのがある。使ひ古した半巾を呉れゝば處女として最も清く尊きものを差上げますと云ふのもあつた。何たる清き交際であらう。

旋毛曲（つむじまがり）の自分は、返事をした事が無い。さあ、うむと御いひなさい、うむといへばいゝ物をやるぞと云ふやうな、人をみくびつた先方の態度が我慢が出來ないのである。但し內實かゝる根性を持つてゐる事を思ふ位だから、決して自慢してゐるのでは無く、寧ろさばけ無い心を悲んでゐるのである。

有島氏は博い愛を誰人に對しても持つて居た人ださうだから、あれ丈ぴりぴりした神經を他面には持ちながら、來るものは決して拒まなかつたのであらう。「テマの解けた氣持」の筆者の如きも、その博き愛に甘つたれてゐた一人らしく、自身いふ所によれば「パパサマと手紙の上でお呼び申してゐた」さうである。お兄様と呼ぶ事を御許し下さいませと云ふ類であらう。

さうかと思ふと、遂に有島氏を引擦つて心中してしまつた波多野某女は、有島氏の事を「ブロウが、ブロウが」と呼び棄てにしてゐたと云ふ。而して「パパサマ」と呼んでゐた人も、流石に此の「ブロウが、ブロウが」はいさゝか耳觸りだつたと書いて居る。腐つた金魚の雌雄を判別する事は自分には不可能である。

「パパサマ」と呼ばれ、「ブロウが、ブロウが」と云はれて喜んでゐた有島氏の愛は何處迄博いのか、はかり知り難い。あんまり博過ぎて、相手をおもひあがらせた嫌ひがある位である。「テマ

の解けた氣持」の筆者の如きは、有島氏に對しては「パパサマ」と呼びながら、其の文中にあらはれてゐる態度を見ると全然對等のものと考へてゐるらしい。「筆の先でこそ隨分思ひ切つたいたづらも爲合つたものゝ、武郎氏の私生活には何らの交渉も持つてゐなかつた」といひ、「武郎氏の異常な直觀力には敬服させられてゐましたし、お互ひの神經の尖端をいやが上にもとがらせて、ずゐぶん突つ込んだ筆の上の勝負を爭つたこともあるのでした」といひ、「その日の武郎氏は、私が氏の面に漂うてゐるかすかなその憔悴の影を見逃し得なかつたのと同じ高調した心の敏感さから、知らぬ間に經て來た私の内的苦悶のあとを、(透き通つた蒼白さ)の中に見出されたのでありませう」と云つて居る。如何におのれを高く評價し、如何に相手を低く見てゐるのであらう。若しそれでも相手を低く見てゐないと云ふならば、それは無神經である。いやが上にも尖端をとがらせた神經などゝ云ふものは見當らず、高調した心の敏感さとか云ふものも持合せてゐようとは思へない。

殊に當人が海外へ行くのを東京驛に見送る有島氏と、その相手の人妻を「實際此の二人ほど私の眼を、心を惹いたものはありませんでした――慰め、ほゝゑませてあげたいと思つたくらゐでした」と記してゐるが、此の場合當人も共に悲しみ泣く可きで、涼しい顔をして、ほゝゑませて

あげ度いと思つたとは、何たるいゝ氣なものであらう。

乍然、斯う扱はれて居る有島氏は如何なる態度で接してゐたのであらうか。「テマの解けた氣持」の筆者の描き出したところによると、「パパサマ」と呼ばれて、にやにやして居る姿しか想像出來ない。未だ御目にかゝつた事は無いが夢に見たといひ、御兄様と呼ぶ事を許してくれといひ、寫眞をくれといひ、肌につけた物をくれといひ、使ひ古した半巾をくれゝば處女として最も清く尊きものを差上るといふ不見轉と同じ程度迄、自分自身を甘くして相手を喜ばせたとしか思はれない。

「テマの解けた氣持」の筆者は、有島氏から、「此の間波多野さんから小い御書齋の中の御様子など詳しく伺つて……」といふ手紙を貰つたといひ、「澤山お友達がお出來だから……」と冗談半分皮肉な言葉を投げかけられたといひ、更に「マシマロなどと御自分でも言つていらしつた一頃に比べて見違へる程深みを増されたのをうれしくお見かけしました。そしてあの透き通つた頰の蒼白さ！」といふ手紙を貰つたと書いてゐるが、心ある人が讀むと、恐らくは冷汗を覺えざる事を得ないであらう。まるで同性の愛を弄ぶ女學生の手紙では無いか。

最後にもう一つ適切なる冷汗の例を引くと、「テマの解けた氣持」の筆者が、途上有島氏とすれ

ちがつた後から直ぐに貰つた手紙には、「はづれかけた幌の上の眼が泣いてゐたが」云々と書いてあつたさうである。これ以上の殺文句があるだらうか。

非常に不愉快な事ではあるが、多分有島氏には、「テマの解けた氣持」の筆者が傳へるやうな、氣障なところも、いやなところもあつたのであらう。しかし、斯うたてつゞけにいやなところばかり見せられる事は、有島氏に、もつといゝところが澤山あつたらうと思ふ人間には堪へ難い。しかし前にも云つたやうに、筆者は決して有島氏のいやなところを世の中にさらけ出さうとしてゐるのでは無く、否其の反對に、いゝ人として描いてゐるのに違ひ無い。正にそれに違ひ無い。其處が即ち下らない御交際を求め、ほんたうでない友達と甘え合つてゐた有島氏のふしあはせで、又自分が死屍に鞭打つが如き「テマの解けた氣持」に公憤を感じて、「友はえらぶ可し」と痛嘆する所以である。（大正十三年六月二十四日）

——「三田文學」大正十三年七月號

はじめて泉鏡花先生に見ゆるの記

十一月二十七日は記念日である。大正五年の其の月其の日、はじめて泉鏡花先生に御目にかゝつた。

小學時代に「誓之卷」を讀んで以來、先生の作品によつて、自分は此の世に生れて來た甲斐のある事を痛感した。其處に描かれたる純情の世界は、屢々暗い心持に囚はれて、捨鉢にならうとする自分を救つてくれた。その感謝の意を表する爲めにも、一生に一度は御目にかゝり度いと思つて居たが、心置なくおつきあひ願へようなどとは空想した事も無い。其の後自分が下手な小説を書くやうになつてからは、かへつて自分の鈍根を恥ぢて、此の願望を押へる心持が強くなつてしまつた。未見の人、殊に先方が自分の尊敬する人だと、一層おたづねしにくいのである。田舍から出て來る所謂文學青年などが、何處にでも大きな顏をして押かけて行くのを見ると、自分など

には到底及び難い生存力を持つて居るやうに思はれて不愉快になる。

なまじ小說なんか書かなかつたら、存外氣安く御目にかゝる氣になれたかも知れないが、紅葉先生時代の作家のやうな苦心も爲ず、それ丈の腕まへも無いのに、雜誌濫發時代の餘澤か、何時の間にか一人前の小說家らしく扱はれるやうになつたのは、かへりみて冷汗を覺える事である。冷靜に考へてみて、自分の作品の中にひとつたりとも後世に殘る可きものがあるか。どうせ一生の修行には違ひ無いが、それにしても餘りに前途が遠過ぎる。處女作を發表してから足かけ十四年になる此の頃でも、自分は人前で自作の小說の話をされると、不覺にも顏が赤くなる。幾年の間、泉先生に御目にかゝる事を恥ぢ怖れて居たのも、斯ういふ心持が密かに潛在して居た爲めでもあつた。大正五年の秋十一月、外國から歸つて來て間も無くの事、「三田文學」の產婆役の一人だつた慶應義塾幹事石田新太郎氏に對する謝恩會といふものが、丸の內の中央亭で開かれた。自分は旅疲をやすめる爲めに湯河原に行つて居たのだつたが、澤木梢氏から是非出席して貰ひ度いと云ふ手紙を受取つて、其の日あわたゞしく歸京した。集つたのは籾山庭後、澤木梢、小泉信三、井川滋、小澤愛圀、久保田万太郎、久米秀治、山崎俊夫の諸氏で、主として「三田文學」をどうするかといふ問題について相談した。

その晩、久保田さんから、近いうちに泉先生を訪問しないかと云ふ誘を受けた。その時の會話は今でもよく記憶して居る。

「だつて變ぢやありませんか。僕なんかまるつきり御存じないんだから。」

「いゝえ、泉さんはあなたを知つてるんです。」

久保田さんは自分の方が先達である場合に必ず示す子供らしい嬉しさを顔にも聲にもあらはした。自分の留守中、泉先生の作品が出ると、漏れなく求めて送つて呉れるのが久保田さんの引受けてくれた役目だつた。久保田さんは手落の無いやうにと常々心配してゐたので、何かの席で泉先生に御目にかゝつた時、その事を御話して、萬一漏れた物がありはしないかたゞしたさうである。其の時自分の事を泉先生に事細かに御聞きに入れたらしい。

「泉さんはあなたの歸つて來るのを待つてゐたんですよ。」

と久保田さんは繰返して云つた。まさかにそんな事があらうとも思はれなかつたが、久保田さんの、ちつともわだかまりの無い意氣込んだ話振に、自分もすつかり嬉しくなつてしまつた。少し厚かましい氣もするけれど、では思ひ切つて連れて行つて貰はうかといふ氣になつて、萬事を久保田さんに御任せした。

それから二十日ばかりたつた二十七日に、久保田さんをたよりにして下六番町の先生の御宅へ推參した。途中で久保田さんと待合せて電車に乘つてからも、麴町の大通で電車を降りて中六番町の方へ曲つてからも、自分の胸は平靜で無かつた。自分のやうな愛想氣の無い書生つぽは、一度で落第してしまひはしないだらうかといふ不安があつた。一藝に秀でた人の前に出る自分の、人間の出來てゐない事はなさけないものであつた。

遠くから見える大銀杏をゆびさして、

「あの樹の下なんです。」

と久保田さんに云はれると、愈々動悸が高くなつた。

久保田さんの開けた格子の中について入ると、玄關の障子をあけて取次に出たのは、銀杏返に結つたちひさい女中で、それが引込むと直ぐに、先生が御自分で出ていらつしやつた。

「水上君を連れて來ました。」

と久保田さんが云つてくれたが、先生は吾々のやうにぬうつと一箇所に足をおちつけて立はだかるやうな恰好はなさらない方で、おそろしく小刻の足取りで、絶えず動きながら、

「さあ、まあお上り下さい、さあ。」

とこれも稍早目に云はれて、吾々が御免かうむつて上ると、今度は又非常なる勢で、とんとんとーんと二階に驅上つてしまつた。決して廣くない、隨分急な梯子段なのだが、その速い事、非凡なものであつた。

長火鉢をはさんで、先生と奥さんが差向でいらつしやる景色の想像される茶の間を通つて、二人も二階へ上つた。

二間つゞきの三疊の方には、籐の寢椅子があつて、その上に搔卷と枕が、今迄人のゐた溫みの殘つてゐる形のまゝであつた。あとで知つたのだが、これは萬年床で、先生が毎日日課のやうに晝寢をし、又樂々と體を延ばして——讀書もなさる場所なのである。

池田輝方氏と蕉園さんの筆になる、桃の枝をつつこんだ塗手桶を提げた若衆と、男人形を膝にのせて物思ふ娘の——たぶんお七吉三たらうといふ——對幅のかゝつてゐる床の間には、籠花いけに投入れの秋草がさしてあつた。

違棚には紅葉先生の御寫眞と全集が飾つてあつて、お供物（そなへもの）がしてあつたが、その中の盃にたゝへてあるのはお酒かと思つたら、さうではなくて、紅葉先生の御好きだつた綠のお茶だといふ事であつた。

あらためて久保田さんに紹介されて御挨拶をしたが、その時不思議に思つたのは、泉先生のおじぎをなさる時の手つきだつた。兩手とも母指と他の指で輕い輪をこしらへ、甲の方を疊につけて頭をさげるのである。これも後で知つたのだが、極端なきれい好きで且つもろもろの黴菌を誰にも增してこはがる先生は、疊の上に手をつく事を避けて居られるのであつた。

光琳風の楓の葉が、朱や群青や萌黄の漆で描いてある大きな桐の火桶をはさんで、口不調法な自分は、先生が誘ひをかけて下さる御話に持前の切口上を氣にしながら、氣の利かない事を云つてゐた。けれども自分が怖れてゐたやうな窮屈なおもひや、身を恥ぢる心持なんか起させないやうに、先生の御話は面白く練れたものであつた。

東向の二階の緣側に近く、硝子のはまつた障子にぴつたり寄せた小机に、裸のままの硯と、筆が一本のつてゐた。それが先生の御仕事をなさるところで、ちひさい机は紅葉先生の遺品だとうかがつた。

驚いたのは此の室の兎だつた。違棚にも、本箱の上にも、小机の上にも、數限りなく、耳をつつたて、眼をくるくるさせてかしこまつて居る。手焙がある、狀さしがある、文鎭がある、香水の瓶がある、勿論おもちやは多勢(おほぜい)である。陶器のもある、木彫のもある、土細工もある、紙細工

もある、水晶のもある、硝子のもある、あらゆる種類の兎公だ。「女仙前記」や「後朝川」のやうな兎の働く小說のあるのも無理は無い。先生はステツキの頭にさへ、小村雪岱さんの圖案にもとづく銀の兎をつけて散步の御伴を仰せつける。

先生は話上手だ。少しかすれた聲が座談には持つて來いで、紅葉先生御在世の頃の事をおたづねすると、當時の文壇の有樣や、作者の話をして下さる。水府の箱を膝のところに引つけて、合間々に吸はれるが、とんと吸殼を灰に落して煙管を手から放す時は、必ずその吸口に千代紙でこしらへた赤坊の小指程の筒をかぶせる。これも矢張り黴菌よけで、敢て煙管と限らず、鐵瓶の口にもかぶせてある。もとより奥さんの御細工である。

お茶を飲む分量にも驚いた。焙じた番茶の色も香も冴えたのを、幾度となく女中が運んで來る。少しおかはりの時がたつと、先生は大きい聲で催促なさる。尤も此の番茶の焙じ方は、奥さんが自得なすつた祕訣があるらしく、先生の御自慢である。誰が眞似をしても、その色と香を出す事は出來ない。

久保田さんは前に一度伺つた事があつて、その時は此の江戸つ子の口に合ふやうにと、鮪のいゝやつを刺身にし、外にも酒客の好物が數々並んださうだが、あにはからんや久保田さんはなま

物を喰べない人だつたには驚いたと先生の御話たつた。しかし久保田さんは大變酔つて折柄の大雪に俥(くるま)を頂いて歸つたと云つてゐた。

二時頃から伺つて、餘り長座は失禮だと思ひながら、殘り惜くて立てなかつたが、國貞描くところの田舍源氏の本の表紙の貼まぜの屏風も暗くなつたので、そろそろ御いとましなくてはならなくなつた。けれども矢張り歸り度くない。其處で先生が御用で階下(した)へ行かれた隙に、先生を何處かに御誘ひして、一緒に御飯を頂く事は出來ないだらうかと二人は相談した。

切出して見ると、先生はひどく困つた樣子で、實は今年は虎列剌が流行(はや)るので百日ばかりも外には出た事がなく、殊に喰べ物がこはいからうちでお豆腐と煮豆ばかり喰べて閉口してゐるのだ。こんな場合でなければ勿論同行するけれど、若し差支がなければうちで何か差上げませうと先生は云ふ。無理に御勸めしても惡いと思つたが、さう云ふ先生の樣子に、誘はれたのをきつかけに思ひ切つて外に出て見ようかしらといふ滿更(まんざら)でも無いらしいところが見えるので、黴菌の恐れの無い鳥でも煮て喰べるのなら間違ひはないのではないでせうかと思ひ切り惡く口說きたてゝ、たうとう御一緒に出かける事になつた。玄關で奥さんに御挨拶して、格子の外に出た。

何處に行かうといふあても無いので、先生の御馴染のところに連れて行つて下さいといふと、

「ほんとに鳥屋でよござんすか。」

と念を押して、昔から御贔負だといふ大根河岸の初音といふうちに行く事にきまつた。その頃の初音は座數の數も少く、女中もさつぱりしたみなりで、物靜かに、客あつかひの親切なのが揃つて居て、大變氣持のいゝうちだつた。胴の太い德利の首のところの青いやつを、その後吾々は青首と稱して名物の一つに數へて居たが、そのはかりのいゝのには誰しも感歎したものだつた。さもしい話だが、或時盃ではかつて見たら、よその待合や料理屋などの一本半に匹敵した。

かねがね久保田さんは熱燗好きで、ぬるいのを好む自分はそれを「久保田燗」と稱してゐたが、泉先生のは熱燗を通り越した煮燗(にえかん)だつた。ぐらぐら泡を吹く青首の、とても素人には持てないやつを、指尖でつまむやうにして、

「なあに熱い方ならいくら熱くたつて平氣です。」

と云ひながら、お酌して下さるのであつた。

お鍋も強い火で煮詰めて、佃煮のやうになつたのに、多分に藥味をかけて、ふうふういひながら喰べる。煮燗も佃煮も、案ずるに黴菌を怖れる結果らしい。一體に生煮(なまにえ)が好きで、葱なんか未だ眞白いのに小口ばかりわりしたの滲んだ位のが一番うまいと思ふ爲め、ついつい箸の動きの早

くなる自分などゝ鍋をさしはさむと、先生は屢々、
「こいつは僕のにして下さい。」
と一區劃しきつて、やうやく思ふ存分煮くたらかしたのにありつく仕儀である。
誰に聞いたとも無く、先生は非常な豪酒だときめて居たところ、量は割合に少く、ほんのり御酒が色に出ると、先生の御話は愈々面白くなり、自分は益々氣が置けなくなつて、何時迄もお別れしたくなくなつた。
それで初音を出てから、もう一度何處かで飲まないでは納まらなくなつた。
「弱つたな、又鳥屋なんだが、よござんすか。」
とその時往來のまん中で、少しふらふらしながら先生は立止つた。此の界隈なら何處でも御存じなのだらうと思つて居たので、實は意外だつた。先生の小說で自分の閉口するのは、江戸趣味といふのか江戸崇拜といふのか、不尠氣障なところであるが、目のあたり御目にかゝつて見ると、先生御自身には何の氣取氣も無い、あけつぱなしの所が難有かつた。鳥屋で飲んで、又鳥屋に行くといふのも、つまらない事のやうだが殊の外嬉しかつた。
今度の鳥屋は金喜亭といふのだつた。後藤宙外氏が「新小說」の主幹をして居た頃の御連中の舞

臺だつたさうである。

又お鍋がぐつぐつ煮詰り、熱燗の御酒の盃の數は愈々しげくなつたが、先生があの人とあの人と二人名ざした藝者はなかなか來なかつた。それでは爲方が無いから、その一人のうちのちひさい子を呼んでくれと頻に寂しがる。玄人讃美者として並ぶ者なき泉先生の御贔負はどんな人だらうといふ好奇心で、自分も少なからぬ期待を持つてゐた。「湯島詣」の蝶吉「起誓文」のお靜「婦系圖」のお蔦「白鷺」の小篠のやうな人でなければそぐはないと思ふと、幾度となく繰返して讀んで、その人達は生きて世の中に居るのと同じやうに親しくなつて居るのだから、今晩こそめぐりあへるのではないかといふやうな氣もするのである。殊に「日本橋」と眞正面から看板をあげた大作は、舞臺が舞臺なので、清葉もお孝もお千世も、其處いらの路地の奥から、駒下駄を鳴らして、先生の御座敷と聞いて馳けつけて來るのではないだらうかと想像して居た。

とんとんと梯子段を少しせき心で上つて來る氣配がしたと思ふと、すうつと襖があいて、若い藝者が廊下に膝をついて行儀よく頭をさげた。

「しまつた、こいつは勘定が違つて來たぞ。」

裾を引いて座敷にはいつて來たのを見て、先生は仰山に驚いて見せた。お酌時分から刺身のつ

まのやうにはゞつたのが、何時の間にかいつぽんになつて居たのである。地藏眉の福德圓滿な相で、口數の少いおとなしさうなひとだつた。年恰好から押して行つて、無理にもこの人をお千世にしてしまひ度かつた。

間も無く、前後して二人のひとが來た。年は自分などよりも二つ三つ上らしく、一切のとりなりが一見して此土地切つての大姐さんに違ひ無かつた。一人はすぐれて脊の高い、裾を引いた姿の素晴らしくいゝ人で、目にしほのある、鼻筋のいかつくなく涼しい線を見せた上品な人だつた。

細りした頰に靨を見せる、笑顔の其さへ、おつとりして品の可い。此の姉さんは、渾名を令夫人と云ふ……十六七、二十の頃までは、同じ心で、令孃と云つた。敢て極つた旦那が一人、おとつさんが附いて居る。その意味を諷するのでは無い。其間のせうそくは別として、爾き風采を稱へたのである。

優しいながら、口を締めて——透つた鼻筋は氣質に似ないと人の云ふ——若衆質の細面の眉を拂つて……

と描かれてゐる「日本橋」の淸葉に違ひ無いと思つた。

それは果してさうだつたが、もう一人を同じ作中のお孝に比べて見度い興味から、そつと先生

に聞いて見たら、いゝえ違ひますといふ返事だつた。此の方は新橋とか赤坂とかいふ官員や軍人や成金の贔屓してゐる土地にはゐさうもない。一口に藝者らしい藝者といふやうな型の人だつた。話上手で、陽氣で、目はしはきゝながら邪氣の無い。これは名だる腕つこきに違ひ無いと思つた。前のは先生が十三年間變らずつきあつてゐる人で、後のはそれよりもつと古く、むかし吉原にゐた十七八の頃からの友達だと紹介して下さつた。

「その頃此の人が登張に岡惚れしましてね――」

などと先生はからかつて居た。はつきりいへば此の二人は、日本橋の名妓壽々江とお千代である。

その晩先生はすつかり醉つてしまつた。

「一寸でいゝから鳴らして下さいな。」

これも後で知つたのだが、先生は餘程醉が廻つて來ないと、さういふ註文はなさらない。そのかはり醉つて來ると、どうしても音樂がほしくなるらしい。

坐り直して、眞白ですべつこさうな膝子僧のはみ出すのを、そばの人がかくしてあげる位いゝ御機嫌で、

「横寺町の先生は、何が悲しいと云つて、しののめのストライキ程悲しいものはないつていひましたよ。」

などゝいひながら、意外にも極めて通俗な、一時代前の流行唄を、乍失禮全くの無技巧で一つ二つおやりになる。筆をとつては目もあやなる技巧派の本尊の、その無技巧がひどく嬉しかつた。先生にもかうした所があるのかと思つたら、自分は尊敬の外に、限りない懐しさを身に沁みて思つたのである。(大正十三年七月四日)

――「隨筆」大正十三年八月號

永井荷風先生招待會

永井荷風先生が三田の文科の教授となられたのは明治四十三年の四月で、「三田文學」の創刊號はその五月に出た。自分は其の時慶應義塾の理財科の二年になつたばかりだつた。

子供の時分から文學美術に對して異常な憧憬の念を抱いては居たが、自分が作家にならうとは思はなかつた。否、なれようとは考へられなかつたのである。若し其の時永井先生が學校に御出でにならなかつたら、若し「三田文學」が創刊されなかつたら、自分は結局小説作家にはならなかつたであらう。或は「三田文學」の發刊以前に學校を卒業してゐたら、矢張り創作の筆を試る機會は無くて終つたらう。人の一生を支配するさまざまの機緣の不可思議を、自分は度々おもふのである。

それ迄、慶應義塾には、作家にならうと志す生徒などは殆ど一人も居なかつた。夥しい數の生

徒の大部分が、月給取になつて、後々重役になる事を夢見て居た。四圍の空氣が、藝術を娯樂として享樂する紳士を育てるには差支へなかつたらうが、藝術家をはぐゝむものでは無かつたのである。從而手近に先達を持たない自分の如きは、輕々しく文學の制作に從ふ事を只管もつたいない事のやうに思ふばかりで、手の出しやうも無かつたのである。其處に突然永井先生がお出でになり、續いて「三田文學」が生れたのであるから、全く新しい世界が開かれた喜びであつた。此の時分の事は、曾て拙作「ものゝ哀れ」の中に書いた事があり、久保田万太郎氏も「半生」といふ隨筆の中で細かく述べて居る。

ですが其時分の塾の文科といつたら、それはお話しにならない位悲慘なものでした。本科と豫科とを合して學生の數がやうやく七人か八人——屋根裏の物置みたやうなところが教室で、其處に三四人の本科の學生が始終薄暗い顏をあつめてゐたのでございます。

すると豫科の二年生になつたとき、忽ち世の中がかはつて、文科に大きな改革がありました。とにかく森先生と上田先生とが顧問といふことになり、永井先生の主宰で「三田文學」といふ雜誌が出るといふことになつたのです。

眞實に、私どもはそのときなんだか夢のやうな氣がいたしました。——世間でもあんまり思

ひがけないのに驚いたやうでしたが、内部のものでさへ、さういつても隨分一時は驚きました。

「半生」の一節に斯う書いてある。多くをつけ加へる必要は無い、全く夢のやうな氣がしたのである。さうして、自分は理財科の教場を抜けて、文科へ傍聽に出かけるやうになつた。久保田さんのいふ「屋根裏の物置みたやうなところ」で「始終薄暗い顏をあつめてゐる」數人の學生にまじつて、自分の崇拜する永井先生の講義を聽き、小山内先生の講義を聽いた。久しく鬱屈して居た自分の胸に、何かしら明るい希望が芽を吹いて來た。

忘れもしない四十三年四月十八日の始業日に、始めて目のあたり永井先生を見た。教室は「紅茶の後」の巻頭を飾る「三田文學の發刊」の中に、

自分はまた誠に適度な高さから曇つたり晴たりする品川の海を眺望する機會を得た。房州の山脈は春になるに從つて次第に鮮に見えて來た。品川灣はいくら狹くても矢張り海である。滿潮の夕暮、廣く連なる水のはづれに浮ぶ白い雲の列は、自分をして突然遠い處へ行つて仕舞ひたいなと思はせる事があつた。Chateaubriand が小説 René の篇中に「去ると云ふ堪へがたき羨望を抱く事なくして行く舟を眺むる能はず」と云つた一句を思ひ出す。

とあるその海を見晴らす位置にあつた。數人の見知らぬ文科の學生の後に、自分は畏怖と喜悦と羞恥にかたくなつて居た。次の時間からアルフオンス・ドオデエの小說を教科書に使ふと云ふ事だつた。

愈々「三田文學」が市に出た日の事もはつきり覺えて居る。同じ文科の教場で「薄暗い顏」の數人が、塾監局から貰つて來た一冊を開いて、頭をつき合せて居た。驚いた事には、その生徒達がまるつきり純文學に對する興味も知識も持つて居ない事だつた。

表紙を描いた藤島武二氏について、

「藤島つていふのは名の聞えてゐる畫かきかしら。」

と質問したものがあつた。

「さあ下手ぢあないんだらう。」

といふのが他の一人の答だつた。執筆者吉井勇、北原白秋、高村光太郎、長田秀雄、三木露風、吉江孤雁、小島烏水諸氏の名を知つて居る者はたつた一人しか居なかつた。此の一人は他の者に一々說明を與へて居たが、それが其の後「三田文學」の編輯者として、親切叮嚀な月評を試みた井川滋氏であつた。此の人の月評は、近頃新聞の文藝欄を賑はす數多い月評の如く不用意亂暴見當

違ひのものとは雲泥の相違で、集めて一巻とする價値のあるものであつた。惜い事には、氏は一切の筆を絕つて既に久しい。

けれども「三田文學」の出現は、吾々の心の底に潛んで居た藝術制作の欲求を力強く動かした。めいめいが密かに野心を胸にいだき、やがて名のりをあげる機會の到來するのを待つやうになつて來た。「薄暗い顏をあつめてゐる」連中の中に、もつといきのいゝ新顏が少しづゝ殖えて來た。三田の生徒で、先づ「三田文學」にものを書いたのは、その頃既に卒業して普通部の先生になつて居た澤木梢氏で、第一巻四號に「ニイチェの超人と囘歸說」が載つた。次は澤木氏より一年後に卒業して同じく先生になつてゐた小林乳木氏のツルゲネフの散文詩の譯である。顏だけはお互に知つてゐたけれども、口をきいた事の無かつた之等の人達との交りも始つた。誰の心にも創作熱が泉の如く湧いて來た。しかし「三田文學」のやうな立派な雜誌に出すのは羞しいし、又出してもくれまいから、自分達は手習の積りで、もう一つ別の同人雜誌を出さうといふ相談が起きて來た。主として松本泰氏と其の仲間の發起で、田町の鹽湯の二階に集つた。その時金釦の制服を着て、最も穩健着實な說を成したのが、當時未だ豫科の生徒だつた久保田万太郎氏である。幸か不幸か此の同人雜誌の計畫は流產したけれど、その席に列してから、自分の心の中には小說を書いて見

たいといふ心持がはつきりして來た。
久しい間友達とのつきあひも絕え、一人で本ばかり讀んで居た自分を、突然澤木氏がたづねて來たのが口火となり、小泉信三、岡田四郞、松本泰三氏を加へて每月一回宛會合する事になつた。別段名前をつけて置かなかつたので、例の會をやらうぢやないかと云ふ外に適當な表現が無く、誰からともなく「例の會」と呼ぶ事になつてしまつた。
「例の會」の第一回は四十三年十二月十八日、その頃三田松坂町に住んで居た自分の家で開いた。小泉岡田兩氏は子供の時から知つてゐたが、他の二人との馴染は淺かつた。けれども最初から遠慮の無い話で、大變面白かつた。小泉氏を除く他の四人は、何れも創作の野心を漏らした。松本氏はその頃既にいくつかの短篇の習作を持つて居るといふ事だつた。自分は鹽湯の二階の同人雜誌相談會以後うづうづして居るところだつたから、まだ一つも書いて見もしないのに、持つてゐる材料をみんなに話し、みんなは是非書いて見ろと勸めてくれた。一同若者らしい感激で夢中になつてしまつた。
どうかして吾々の會合の場合に、永井先生にも出席して頂く事は出來ないだらうかと誰かがいひ出した。折角文科の敎場に傍聽に行つてゐても、尊敬に伴なふ多分の遠慮から、親しく先生と

話をした事は殆ど無い。永井先生のやうな方に、吾々のやうな粗野な書生の會に來て頂くのは失禮だと云ふやうな氣持があつた。なんだか先生の御機嫌を損じてしまひさうな氣ばかりして、
「來て下さいと云つたつて來て下さりはしないだらう。」
といふやうな事を自分は口にした。殊に、來て頂けるにしても場所が無い。生じつかな料理屋なんかには御招き出來ない。召上る物も氣をつけなければならないが、そんな氣の利いた事は吾々には出來ないと思つた。正式に永井先生の教を受けてゐる松本氏は、左程心配する事は無い、喜んで來て下さるだらうと云つたが、結局其の晩はうやむやのうちに話題が外に移つてしまつた。
其の日から吾々の心持は一層緊張して、何かしでかさないでは居られないやうな調子を帶びて來た。よく顏を合せた。逢はない時は頻に手紙を書いた。既にいつたん過ぎてしまつたやうに思つて居た若々しい心持が完全によみがへり、以前よりも遙かに力強く活躍し始めた。
約一週間たつた頃、小泉氏からの手紙の中に斯ういふ一節があつた。
今日塾の忘年會があつていろいろの人が演說をやつたり隱藝をやつたりした。しかし僕の隣には永井荷風さんが居たので僕は之等に注意する事なしに濟んだ。（永井さんが僕の隣に居たのではなくて實は澤木君と僕とが永井さんの隣に坐つたのだ）僕は永井さんが僕に話し又

僕が永井さんに話した片言隻語も鮮かに記憶して居る。しかし今は其の中の二つ三つ丈を書く。

來年正月の「三田文學」には「秋の別れ」が出る。籾山氏に聞くと小說みたいな詩みたいなものださうだが永井さんの口をかりれば「脚本の出來損ひ」だと云ふ。二月號には「下谷の家」が出る。これは永井さんの子供の時分――記憶といふものが始つた時分――の事を書いたものでる。これは永井さんの子供の時分――記憶といふものが始つた時分――の事を書いたものです。(永井さんのうちは旗本で幼年の永井壯吉さんがうちにある鎧冑などを見て驚いた事を書かれたのです)それから三月號には「芝山內の御靈屋の中を夜歩いて大變いゝと思つた事を書くつもりでもう半分位出來ました」さうです。

僕は「見果てぬ夢」「隅田川」「狐」が好きだと云つた。「見果てぬ夢」は餘り幼稚で少しいや味だと永井さんは云ふ。しかし僕らには未だ大變結構ですと重ねて云つたら笑つて居られた。「隅田川」と「狐」は作者自身でいゝと思つて居られるさうだ。「殊に隅田川は叮嚀に書きました」との事。永井さんは今日羽織袴で麥酒の少許と人いきれで蒼白い顏が微紅を呈して見えた。

來年は是非吾々の會へ來て貰はう。永井さんは決してよくしやべる人ではないが、なつかし

い話し振りだ。あの人の話なら僕は何時間でも聞いて居る。永井さんと三四人の友達と一緒に休暇を何處かの海岸か溫泉で送つたらどんなに嬉しいだらうなどゝ思つて見る。

その日の、小泉氏の喜びは目に見える如くあらはれて居る。甚だ羨しかつた。翌年の「三田文學」に出る先生の作品について聞いた知識を、友達に分つ時のいゝ氣持は想像にあまる位である。永井先生が少しの麥酒で紅くなつた事、ふだん洋服の方が羽織袴だつた事なども、まださういふところを知らない友達に知らせたかつたに違ひ無い。

これは小泉氏ばかりでは無く、澤木氏でも、自分でも、永井先生の御話を一人で聞いた時などは、どうしてもそれを手紙で他の連中に知らせないでは氣が濟まないのであつた。知らされる時は何となく嫉妬を感じ、知らせる時は限り無く得意だつた。

「例の會」の第二回目は年があけた四十四年の一月三日に開いた。澤木氏は旣に「夏より秋へ」といふ小說を書始めて居た。三田四國町の下宿の二階で、訪れる度に枚數の殖えて行くのを讀ませて貰つて非常に感心し、とても自分などの及ぶところでないと思つて落膽した。聖坂の上の下宿に居た岡田氏のところに行つて見ても出來上つた作品を机の抽出から取出して見せてくれた。「品川の海」「保田のゴリラ」などといふ短篇で、餘り感心しなかつたが、どう書き始めていゝか見

當もつかない自分には、苦も無く書上げてしまつた手際が羨しかつた。松本氏の如きは數十篇を自宅に持つて居ると云ふ話だつた。それで、「例の會」の席上では頻に創作の話が出て、自分も是非とも書いて見度いと更に強く思つた。

その翌日、一人で湯河原に出かけた。湯河原は澤木氏の「夏より秋へ」の舞臺なので、それに誘はれて撰んだのだ。宿に着くと直ぐに机にむかつて第一の習作の筆を執つた。「火事」と云ふ題だつた。朝から晩迄夢中になつて書いて居たが、ちつともこつが解らないので、書いては破り書いては破りしながら、一週間かゝつて約二十枚の小說を書上げた。讀返す度にあらがわかり、殊に澤木氏の「夏より秋へ」の原稿を見て敬服して居たので、それと比べてひどく悲觀した。しかし、兎に角書上げたといふ事は嬉しかつた。書上げたのだと思ふと俄に友達が戀しくなつて、その次の日に東京に歸つた。續いて又「浴泉記」といふのを書いて、兩方とも「例の會」の人に見て貰つたが、餘り好評ではなかつた。自分でもつくづく拙いと思つて居たので、此の二つの習作は破いて捨ててしまつた。

「夏より秋へ」が完成したのは一月の末で、作者は直ぐに永井先生に見て貰ふのだと云つてゐた。自分の友達の中に、これ程うまい作品の書ける人間がゐようとは思つて居なかつたので、心底か

ら感心した。

永井先生は「夏より秋へ」を讀んで、人物は餘り上出來でないが自然描寫は大變いゝとほめて居られた。此の小說は「三田文學」第二卷四號に出たが、これよりさきに、三月號には井川滋氏の小品「逢魔時」が出た。恐らくこれが、學生の原稿で「三田文學」に採用された最初のものであらう。

何にしても「例の會」の同人澤木氏が「夏より秋へ」を發表したのは、一層吾々を夢中にした。氏は引續いて「春のおとづれ」といふ短いものを書上げ、更に又他の小說に筆をつけて居た。「春のおとづれ」は作者自身氣に入らないと云つて發表しなかつた。もう一つの方は——何といふ題だつたか思ひ出せない——休暇を利用して湯河原に行つて書くといふので、自分も今度こそ少しは羞しくないものを書き度いと思つて同行する事になつた。

自分は「山の手の子」を書始めた。澤木氏も書きかけのものを續ける積りでゐた。同じ室に寢起きしながら、食事の時の外は一切てんでん勝手の行動を取つた。自分は氣の向いた時に行き度い處に行く。澤木氏は澤木氏で氣の向いた時に行き度い處に行く。雙方から誘ふといふ事が無かつた。九日間、朝から晚迄「山の手の子」にばかりかゝり切りで、四月十二日に脫稿した。あんまり一生懸命で書いて居たので、誰とも口をきく氣にもならなかつた。宿の女中は、

「水上さんて方は始終何か書いてばかりゐて、口もきかない氣味の惡い方だ。」

と云つた。

澤木氏の小說も少しづゝ進行して居たが、「夏より秋へ」に比べるとひどく見劣がして、結局いやになつて止めてしまつた。

「山の手の子」は東京に歸つて清書して、先づ「例の會」の人達に讀んで貰つた。全く傾向の違つて居た松本氏は、恐らく甘いもんだと思つたらうが、外の連中は大變ほめて、是非永井先生に見て頂けとおだてゝ吳れた。しかし自分では、日が經つにつれてへまな箇所ばかりが目につき、折角張りつめて居た氣持が又なさけなく滅入りさうになつて來た。

「例の會」は時々開かれ、その度每に永井先生を招待しようと云ひながら、矢張り先生と吾々の間に餘り人間の値うちが違ひ過ぎるといふやうなおもわくが邪魔になつて事はすらすらと運ばなかつた。

五月もなかばを過ぎた或日、永井先生の時間に傍聽に行くと、文科の生徒は怠けて出て來ないので、折柄同じく傍聽に來てゐた小泉氏と二人で、先生にいろいろの質問をした。その時の御話によると、先生の第一試作は中學五年頃に「梅曆」を眞似して書いた七五調の「春の恨」といふので、

第二の習作は外國語學校時代に近所の西洋料理屋に娘が居て、それを生徒がはりに行く事實を書いた「夢日記」である。兩方とも手箱の中に納められたきりで、世の中には出なかつた。それから一年ばかり森槐南先生の門に漢詩を學び、それもいやになつて又創作を始め、廣津柳浪先生の門下生となり、柳浪先生校訂の名の下に「文藝倶樂部」に「うす衣」を出して貰つた。その前に二箇月ばかり「大和新聞」の三面記者になつた事もあつた。當時其の新聞には櫻痴、魯文、採菊、破笠、綺堂諸氏が居たさうである。

それから翌月の「三田文學」の話になると先生御自身は「浮世繪の夢」を書き、外には鷗外先生の「藤巴」馬場先生の「屈辱」小林乳木氏の小說「上京」文科一年の生徒久保田万太郎氏の「朝顏」などが出ると云ふ事であつた。その時吾々は未だ久保田氏をよくは知らなかつた。

その時小泉氏が、

「水上君も小說を書きました。」

と云つて「山の手の子」を紹介してくれた。

「持つていらつしやい。拜見しませう。」

と先生は云つて下さつたが、自分は顏が赤くなつた。既に全く自信を失つて、先生に見て頂い

て落第するのを怖れるばかりだつた。とても自分なんか一人前の作家にはなれないのだと氣を腐らして、「山の手の子」以後「湯の宿より」「女」「裾野」などゝいふ題で書きかけたものもあつたが、みんな破いて捨てゝしまつた位だつた。——但し「女」といふのは、後に又書直して「うすごほり」と題し「スバル」に載せて貰つた。

五月二十四日の「例の會」に愈々永井先生を御招きして、先生の快諾を得たと松本氏から報告のあつた時の、みんなの喜びと云ふものは無かつた。しかし、其の場所と御馳走には全く弱つてしまつた。下手な料理屋なんかに持つて行くと、先生に笑はれるであらう、佛蘭西歸りの先生に、日本の西洋料理なんか差上げられないと心配する一方に、吾々の懷中も頗る豐かで無かつたのである。どうせ先生を滿足させる事は出來ないのだから、いつそふだんの生地で行かうといふ事になつて、結局場所は三田の山の上でヴイツカース・ホールときまつた。ヴイツカース・ホールというのは、昔から慶應義塾の外人教師の住む家で、近くは十數年經濟學の教授だつたヴイツカース先生の住宅となつて居た爲めに、先生の名を冠して呼んで居たのである。先生が亞米利加に歸られた後は、階上は文科の教場にあてられ、階下は教職員の食堂に用ゐられ、時々は學生の會の會場に用ゐられて居た。平生は學生の食事をする所では無いのだが、二階の教室の裏手の、賣殘

つた「三田文學」などの積んである物置のやうなところで、文科の生徒の中の不良分子は、ライスカレイやハムエッグスに飯を添へて喰べて居た。極端に下等な料理ではあつたが、誰に遠慮も無く夜更迄喋つて居られるのが取柄だつた。安油の臭の強い料理は如何とも爲方が無いとして、特に先生の爲めに葡萄酒を買つて來る事にしたが、さて何といふ葡萄酒がいゝかといふ相談迄隨分頭を惱ましたのであつた。

當日は眞晝間はげしい雷鳴がして、時々雹のやうな雨が降つた。自分は眞先に會場に行つて居た。間も無く松本氏小泉氏の順序で集つて來た。四時頃永井先生が御出になつた。先生の佛蘭西好みの地味な洋裝は、當時の吾々が夢中になつて讃美したものであつた。茂る青葉の爲めに暗く見える一室で、豫々願にかけて居た通り先生を圍んで話の出來る喜びはいつぱいだつたが、變に堅くなつて樂には口がきけなかつた。誰も何時ものお喋りにはなりにくかつた。會社勤をして居る岡田氏が遲れ馳せにやつて來て、がらがらした調子で話し出したのを、先生に對して愼んでくれればいゝとはらはらして居たが、先生は何とも思つては居られないで、かへつて一座は賑やかになつた。

給仕が食堂の用意の出來た事を知らせに來た頃は、風も無くしつとりおちついた青葉の木立に、

靜かに雨の降りそゝぐ夕暮となつた。永井先生の蒼白い額が一層美しく見えた。

心にかけた葡萄酒の外に、岡田氏が持參したアプサンがあつた。先生は葡萄酒の外は飮まないと云つて、それさへ少し口をつけたばかりだつた。しかし吾々の方は葡萄酒もアプサンも麥酒もさかんに飮んで、漸く樂に口がきけるやうになつた。うつかりした事を喋つて嫌はれはしないかとびくびくして居たけれど、先生は距てなくいろんな話をして下さつた。

「泉さんの『照葉狂言』は何時の世に出してもいゝものでせう。」

とも云はれた。

「自分のものでは『狐』がいゝと思ふばかりです。」

といふ事だつた。文學美術音樂演劇――あらゆる事について自分達の感激を述べ、先生の敎を受けた。粗末な料理も、先生は平氣であがつて下さつた。

食事が濟んで、又元の室に戻り、愈々さかんに喋つた。先生の御話は何から何迄面白く、吾々は下らない事迄質問に及んだ。たとへば先生はその頭髮を長くして居られたが、その型は佛蘭西のものですかといふやうな事迄訊いたものだ。驚いたのはその髮を、近頃は先生御自身でぢよきぢよき鋏を入れて居るのだといふ事だつた。

先生は十一時頃迄つきあつて下さつた。御歸りになる時、「山の手の子」を見て頂く爲めに、勇を鼓して御手渡しした。

先生の御歸りになつた後で、吾々は一層昂奮して、夜の更けるのも構はずに話合つた。天下をうかゞふ事のやうに考へて居た事が、存外失禮もなく濟んだといふ喜悅で、聲は自ら高くなつた。此の次には小山內先生を御招きしようと申合せた。(大正十三年七月十日)

——「隨筆」大正十三年八月號

或日の小山内先生

一番はじめに讀んだのは「夢見草」かと思ふが、ほんとに小山内先生の作品に熱心になつたのは、明治四十年一月の「新小說」に出た「病友」を讀んでからだ。小說集「窓」「蝶」「笛」などに收められた短篇の、各々の內容の持つ韻律に從つて異なる形式の多種多樣なのには驚いてしまつた。しかし其の頃は自然派にあらざれば人にあらずといふ時代だつたから、ほんとに藝術を理解する力の無い月評家連には、淺薄皮相の小手先の藝として、輕蔑虐待されて居た。斯ういふ事は現在でもある事で、作者自身さへしつかりとつかんだ思想でなく、漠然と感じた事をこけおどかしの廻りくどい文字で書くとさも意味深いものゝ如く考へ、すらすらと飾らずに書いてあると淺薄だと思ふ連中が少くない。小山內先生のやうに、はつきりとつかんだ內容に、最も適當な形式を與へて、簡潔明瞭に描く作家が、その當時味方を見出さなかつたのは無理も無い。あんまり評判がよくな

いので、自分自身の批判に信用を持つて居ない自分は、手筐に祕めたる寳玉の如く、ひそかに取出して一人で樂しんで居た。
明治四十二年の暮には自由劇場の運動が起つて、小山内先生は勝れたる短篇小說家としてよりも、我國の新しい演劇運動の第一人者として世の崇敬の的となつた。
數箇月後、永井荷風先生と共に三田の文科の教授として、近代劇に關する講義を受持たれた。永井先生の教室に傍聽に行く事と、小山內先生の教室に傍聽に行く事は、當時の自分には何よりの感激だつた。
度々劇場で遠見に見たよりも一層近まさりする秀麗な先生の顏を見ながら、自分は變な事を考へて居た。それはついその頃、赤坂の若い藝者が、先生の下宿して居られる佃島に、渡船で通ふといふ艶種を新聞で見た爲めである。我が小山內先生を、むざむざ藝者にとられてしまつたやうなやきもちと、斯う迄眉目秀麗では、渡船で通ふのも尤もだといふ同情とがこんがらかつて居た。
最初の講義はイブセンだつた。英譯本を用ゐて、先生が朗讀し、且飜譯して聞かせ、その間に批評に及ぶといふやり方で、第一には Ghosts が選定された。小泉信三氏と共に、自分は缺かさず出席した。

此の教室で顏を合はせる松本泰氏が、小山内先生の小說の愛讀者だといふ事を發見した。後に久保田万太郞氏が、松本氏に勝る熱心家である事を知つて、力强い味方を得た事を喜んだ。

先生は鼻が惡いので、大きい聲で本を讀んで居るうちに、聲を出すのが樂で無いやうに見える事があつた。鼻が詰つて居るので、發音にも著しい癖があるやうに聞えた。その鼻の詰つて居るといふ事か、先生のきれいな容貌に對して如何にも似合はしからぬ事に思はれたのだ。しかし其の飜譯は實にうまかつた。筆記すれば、そのまま印刷に廻しても差支へ無ささうなものであつた。今になつて愈々さう思ふのだが、外國の戲曲の飜譯では、小山内先生の右に出る者は一人も無い。「夜の宿」の如きは、名譯中の名譯である。

それにも拘らず、當時の文科の學生といふものは實に怠け者ばかりだつた。傍聽生の小泉氏や自分の方が、どの位熱心だつたかわからない。

此の講義に出席したゝめに、自分の芝居を見る眼は正しい方向に向けられるやうになつた。東西の戲曲を讀んでも、その眞の價値が稍わかるやうになつた。

第二學期が始つた。その年は九月から十月にかけて雨が多かつた。十月のなかばの或日、降續いた雨が止んで、ちぎれ雲の間からひそかに靑空の見える日であつた。例の通り文科の敎場に行

くと、生徒は誰も居ないで小山内先生が一人で窓の硝子に額をつけるやうにして運動場の方を見て居た。外では、稲荷山の下に澤山の生徒が勢揃ひして、手に手に紫の小旗を振りながら、これから行はれる市俄古大學との野球試合の應援の練習をしてゐるところだつた。

「今日はベース・ボールがあるんですか。」

自分の足音に振返つて、太い稍かれた聲で聞かれた。豫々先生には、芝居についていろいろ敎を受け度いと思ひながら、引込思案ばかりして、つひぞその機會を得なかつたので、これが直接先生から頂いた第一の言葉だつた。

綱町の運動場で、市俄古大學との野球試合があるのだと答へると、

「私も一高時代にはよく見たものです。守山がピツチヤアをやつて居た黃金時代です。」

といひながら窓際を離れて教壇に上られたが、外の生徒の顏が見えないので、

「今日は貴方一人ですか。」

と訊かれた。その調子には、自分を先生の課目を正當に學んでゐる文科の生徒だと思つて居られるところがあつた。何時の時間にも缺かさず出席して居るので、さう思はれたのも無理は無い。

「先生の時間には何時も出て居ますが、私は文科の生徒ではありません。理財科の生徒なので

す。」

「あゝさうですか、あの何時も來るもう一人の人は先生なんださうですねえ。」

と云ふのは自分と並んで傍聽して居る小泉氏の事であつた。どうしたのか、その小泉氏も其の日はやつて來なかつた。

「私も實は醫者にされそこなつたのですが、たうとうこんなものになつてしまひました。おかげで親類にはみんな見放されてしまひました。」

何時もの鼻の詰つた聲で云はれるのが、ひどく感傷的に聞えた。自分にはそれがひどくなつかしかつた。

その後知つたのだが、先生は時々對談中に、ひどく感傷的な調子になつたり、時にはさほどに思はれない事にも激越な口調で話される事がある。

「しかし今では醫者になればよかつたと思ひます。一種の反抗心もありませうが、文學者と云はれるのがいやです。けれども今更何になる事も出來ません。」

それは先生の心に浮んだ其の時限りの感慨であつたらうが、當時の自分はひどく悲痛な言葉として聞いた。「笛」の序文を讀んだ時の心持などを想ひ合せてみた。さういふ先生の心の中の事を

打あけられたのは、自分が信頼されて居るのだと云ふやうな、まるつきり根據の無い喜びに感激した。

遂に生徒は誰も出て來なかつた。自分は始めて先生と口をきゝ、しかもたつた一人で先生を占領してしまつた喜びで胸がわくわくして居た。外の生徒なんか一人も來ない方がいゝと思つて居た。

自分は一生懸命で、一言でも多く先生の言葉を聞き度いと思つて、自由劇場の事を訊いたり、先生の短篇小說を愛讀して居る事などを話した。「ヂブラルタルの貝」「十三年」などの名をあげて、就中愛誦するものであるとも云つた。ずつと以前「夢見草」を始めて手にした時は、先生の名前をコヤマウチと讀んでゐた事なども白狀した。

「東京では珍しい名前ですが、青森の方に行くと澤山あるんです。」

と云つて、先生が其地方に身よりの人をたづねて行かれた時の御話があつた。それは小說の中にも出て居たが、言葉の通じなかつた事を面白く話して下さつた。

フレー　フレー　フレー　ケーオー

と應援隊はしきりに聲を張上げてゐた。

「お氣の毒ですが今日はやめにします。」
と云つて遂に先生は教室を出て行かれた。少し猫背で、著しい歩き癖のある先生の後から、自分も直ぐにくつついて行つた。うちに歸るには反對の裏門の方に行く可きであるが、くつついて行けるところ迄行きたかつたのだ。
品川の海を見晴らす坂道を下りながら、先生は今日これから横濱に外國人の旅役者の芝居を見に行くのだと云つて居られた。バアナアド・ショオやオスカア・ワイルドの戯曲もレパアトリイの中にある。昨日も、一昨日も行つたといふ話をされた。
「私もおともしてよござんすか。」
といひたくて堪らなかつたが差控へた。さぞかしうるさい奴だと思はれるだらうと考へたのだ。
三田の通で先生に別れた。薄色の背廣の背中をまあるくして、小脇に本とステッキを抱へて行く天鵞絨の帽子の見えなくなる迄見送つた。(大正十三年七月十一日)

――「隨筆」大正十三年八月號

築地小劇場に就いて

今でも芝居を見る興味を持つて居るのか、或は失つてしまつたのか、久しい間自分は考へ迷つて居た。やがて十年、進んで劇場に足を踏入れた事は殆ど無い。年に幾度と數へる位、それも誰かに誘はれて行くだけの事で、劇場の入口にかゝり、座席におちつく迄、まるつきり氣が進まない。よせばよかつたと思ふのである。その癖幕があくと、存外面白く思ふ事もある。

長つたらしい通俗小説を無理に脚色し、役者はすつかり型に墮した所謂新派の芝居や、いくら脚本は目新しくても、あんまり下手な素人役者が粗末に取扱つて滅茶々々にしてしまふ所謂新劇團丈は、つひぞ面白いと思つた事も無いが、歌舞伎の面白さは、ひと頃のべつに芝居通ひをして居た時代よりも、深く正しくわかるやうになつたらしく、これを亡びるものと惜氣も無くあきらめたり、亡びさせてしまはうとする人間を見ると腹立しく感じる位である。但し今日の如く、歌

舞伎を味ふ丈の修行を積まない人間が多くては、年殘念やがて亡びる運命は免れないとは自分も考へて居る。それで一層愛着が深いのかもしれないが、それとてもこつちから進んで見に行く氣にはならない。見て面白いと思ふ事と、せつつくやうに見度いと思ふものとは自ら異なるのである。

自由な時間の持合せの少いといふ事も、芝居に遠ざからせる有力な原因である。毎朝九時から四時半か五時迄は、相當勤勉なる勤人として働いて居るので、外の事に費し得る時間は、日曜祭日の外には夜分の數時間しかない。此の少い時間を無駄に使ひ度くないと思ふ結果、成る可くいろんな事に手を出さず、いろんな場所に顏を出さないやうに用心する事になる。平生勤先から歸ると、犬と金魚の世話をしてから湯に入り、少量の晩酌で食事を濟ませると、あとは本を讀み物を書く事を第一とし、徹夜をする事もあれば、二時三時迄机にむかつて居る事もある。しかも翌日は又會社に出て、人一倍忙しい目を見なければならない。

不斷の努力をして居るので、たまには完全なる休息を求める。さういふ時には酒を飲む。時としては話の面白い友達と一緒も望ましいが、堂々たる料理屋や待合の酒はちつともうまくない。バアやカフエと稱するところは、客も給仕も行儀が惡く、騷々しくて休息にならないし、且飲食

物が亂暴粗雜なので行く氣にならない。多くは小料理屋の緣臺に腰かけて、酒樽と相對しつゝ、自分でも氣がとがめる程の長尻で、手酌の盃を樂しむのである。つまり、机にむかつて本を讀むか筆を執るか、飲屋で盃をふくんで一人でとろんとして居るか、此のふた道以外には成る可く時間を割き度くないのだ。芝居を見る氣にならないのもこの爲めであらう。机を離れさせ、盃を捨てさせるだけの誘引力を、芝居が持つて居ないとも云へるであらう。

ところが最近になつて、出物の變るのが待遠しく思はれる程、芝居に行くのが樂しみになつた。いふ迄もなく、築地小劇場である。

雜誌「築地小劇場」の創刊號を見ると、小山内さんが「築地小劇場建設まで」といふものを書いて居られる。それによると、小山内土方兩氏が小劇場を建てる相談をしたのは今年の正月の三日だと云ふ事である。恰も暮から京都へ遊びに行つてゐた自分は、その日偶然大阪天王寺の小山内さんの御宅を訪問して、此の計畫のある事を知つた。勿論詳しい事は聞いたわけでは無く、未だ發表されない事を立入つて訊く可きでも無いと考へたのであるが、その時自分は、何時迄もさかんなる熱情をもつて、常に新しい何事かに熱中する小山内さんの若々しさに驚いた。

今更いふ迄も無く、劇文學者として、演出者として、小山内さんは第一人者である。其の經歴

からいつても、地位からいつても、年配からいつても、大概の人の根性ならば、今迄の自分の爲した仕事を守る地位にこびりついて、危險を冒してまでも新しい途に進まうとはしないであらう。なかには、新しいものをうけ入れるだけの心の柔軟性を失ひ切つてしまふ者も少くないであらう。自分の如く、未だ一人前の仕事は何も爲て居ない者さへ、ともすればさういふ傾向を免れないのだ。それなのに小山内さんは、子供の如き生一本の感激をもつて、自分自身眞先に新しい仕事に打込んでしまふ。これあるが爲めに自由劇場の大業を成し遂げたのであらう。これあるが爲めに活動寫眞の改革と映畫劇の俳優の養成に全力を盡す氣になつて、幻滅の苦さを味はひもしたのであらう。これあるが爲めに昔は基督教に熱烈なる信仰を持ち中途は何處かの行者に歸依したり、後には大本教に凝つたりしたのであらう。それはいゝ時もあれば、惡い時もある。しかし常に一生懸命である。さうしてこれあるが爲めに今度は築地小劇場に一切を捧げんとするのであらう。

いざ一つの事を始めようといふ時の小山内さんの意氣込は、はたで見て居る者がはらはらする程、昨日迄のすべてを振捨てて、まつしぐらに突進する。その上に、今度は斯ういふ事に全力を盡すといふ事を、自分自身にも強く思ひ知らせ、又世間にもはつきりと知らせなくては氣が濟まないらしい。たとへば松竹と絶縁するとすれば、今後再び營利的の劇場には斷然關係しないと宣

言しなくては納まらない。大概の人なら、營利的の劇場でも、何時か又氣に入つたのがあれば手をつなぐ事もあるだらうと考へるところを、恰も子供が新しく玩具を貰つた時のやうな熱情をもつて、古い方は紙屑の如く捨てて、新しい方をしつかりと兩手でつかんでしまふ。さうして、その態度を宣言する事によつて、ぬきさしならぬ地位に自分を置き、それが爲めに愈々昂奮して、益々覺悟を定める事になるのである。小山内さんの秀麗なる面上に感激の血の色の浮ぶのはさういふ時である。今度も、或る講演會の壇上で宣言された時、小劇場は當分外國の物ばかりを上演して日本の物はやらない積りである、日本の物を演出する興味を持たないといふ意味の事を云はれて、職業的意識の強い人々を怒らせたといふ噂がある。その結果が小劇場に對する批評に祟りをなして居るといふ噂もある。自分は其の席に居なかつたので、果して其の宣言が腹の立つやうな調子のものであつたかどうか知らないが、此の我劇文學界の大先達の苦言として、現在の戯曲作家は甘受してもよささうに思はれるのである。いづれにしても吾々のやうな坐つたらば坐つたきりで動かないやうな態度の人間には思ひも及ばない。あぶなつかしくて冷々するが、危いとか危くないとか云ふ引込思案に眠まずに、熱情の燃ゆるがまゝに燃えしめる生一本の心は、尊ぶ可く羨む可きである。小山内さんこそは、此國には珍しい永久の子供であらう。東方のピイタア・

パンであらう。

扨て、築地小劇場の事業は想像したよりも速かに運んだ。時々上京される小山内さんや、たまに逢ふ淺利鶴雄さんから、敷地が定まり、建築が始まり、俳優が集まり、稽古に着手した事を聞く度に、其の計畫の勢のいゝ遂行力に感心し、又成功を祈るのであつたが、同時に又多大の心配をいだいて居た。それは小劇場の同人諸氏が、あまりに昂奮し過ぎて居る事を第一に懸念するのであつた。

今でも自分は築地小劇場の財政組織を知らないのだが、此の劇場の將來について、何よりも心配なのは經濟問題だと思つて居る。たぶん同人の一個人の家産を資源として居るのであらうと想像するが、個人の財力には限りがある。萬一その爲めにつまづくとすれば甚だ口惜しい。考へ方によつては、たとへ間も無く亡びても、その時迄に殘した効績だけでも充分意義があると云へるであらうが、自分は築地小劇場をさういふものとは考へて居ない。築地小劇場は、自由劇場とは違ふのである。自由劇場は、我國に於ける新劇運動の中で、いゝ影響を殘したたつた一つのものだと云つてもいい。外のものは演劇を素人わかりのいゝものにし、やがては澤正に迄も墮落して行つた位で、演劇運動といふよりも、素人が興行界に割つてはいる興行運動に過ぎなかつた感が

ある。小山内氏と傳統的修練のある既成俳優との協力になる自由劇場の効績の最も大なるものは、新しい戯曲上演の正確なる手本を示したところにある。

しかし、築地小劇場は、今直ちに手本を見せるのを目的とはしてゐないだらうと思ふ。或は想像に過ぎないかもしれないが、此の劇場は藝術としての演劇に關する一切の事を、努力によつて新しく生んで行く事業だと考へる。役者も其處で生み育てゝ行かなければならない。見物も其處で教育して行かなければならない。營利を離れ、又低級なる娯樂としての演劇とは全然立場を異にする純藝術的の芝居の存在を要求するのだと考へる。手本を見せるのでもない、自己滿足の研究でもない、當然今日迄にあるべくして未だ無い劇場藝術の創設を目的とするものであらう。從而其の存續が短かければ、此の劇場の發生の意義は少いのである。長い年月を費して、始めて目的を達す可き性質のものである。どんな事があつても、此の劇場をつぶしてはならないのである。

今日迄の新劇運動は、何れも自分達の劇場を持つてゐないのが弱味だつたと云はれて居る。しかし、一面から考へると、劇場を持つて居る事が弱味になる場合もあり得る。鞏固なる財政の基礎がなければ、劇場を持つて居る爲めに却つて共倒れとなる事もあるであらう。劇場を持つてゐる以上は、その劇場が經濟上獨立して行く事が出來なければ駄目だ。自分は決して儲ける事を主

義として貰ひ度くない。けれども、損をしつゞけては立行かない事は明白である。小山内さんにしても、經營部主任の淺利さんにしても、藝術的熱情にかられて他を顧みないやうな口吻を漏らされるので、眞正直に心配してゐるのである。小山内さん　影響を多分に受けて居る若き好男子の經營部主任に對して、自分は言葉を強くする爲めに、寧ろ儲ける積りで經營するのがほんたうだと云つた事もある。

それは第三者の老婆心で、恐らくは小劇場の經營には何の差支も無い資源があるのであらう。別段何の心配もないらしく、計畫はぐんぐんと進んで行つた。舞臺の諸設備に新規のものがあると聞いて、一度見學し度いと思ひながら、つい機會が無くて過ぎた。

たぶん五月の末だつたと思ふ。原稿を書上げた疲勞休めに、銀座の岡田で一人盃を愛して居るところに、淺利さんと築地小劇場の印刷を引受けて居る名鹽さんがやつて來た。淺利さんの話で小山内さんの上京して居られる事を知つた。逢ひ度かつた。何處に行けば逢へるかと訊くと、小石川の土方さんのところに泊つて居ると云ふ事だつた。さういふ淺利さんも月を越えて土方邸に寢泊りしてゐて、自宅に歸る暇も無い程忙しく、二週日の後には開場の運びとなる可き小劇場の事務に沒頭して居るのだといふ事であつた。自分は其の話を聞いて、すべての人が餘りに昂奮し

過ぎてゐはしないかを愈々あやぶんだ。

此の種の眞面目な運動は、今日の我國の荒んだ人心にはうけ入れられないものである。その人々は無闇に殺伐な芝居や、惡どい滑稽か卑猥な筋立のものを喜ぶばかりであらう。又多くの芝居好は、演劇其のものよりも役者其の人を見に行くのだから、無名の俳優でやつて行く外に無い小劇場は、何處から考へても、當分不入を覺悟しなければならない。持久戰の苦痛に堪へなければならないのである。開場の差迫つてゐる場合、深更迄事務をとらなければ間に合はないのではあらうけれど、少くともさう云ふ例外の事が、いかにも愉快な事であるらしい口吻を聞いては心もとなく思はれるのであつた。小山內さんが九等俳優とかの鑑札を受け、萬一仕出の足りない時は自ら舞臺を踏む覺悟だといふ事も、土方夫人が衣裳方で、これ亦深更迄受持に忙殺されて居るといふ事も、すべてが餘りに「面白さう」で賴りなく考へられた。

淺利さんは食事を濟ませて、これから土方さんのところへ行くと云ふので、自分も同行する事になつた。

土方さんのところでは、應接間を小劇場創立事務所として、若い書生さんが數人働いて居た。二階では稽古が始まるところだつた。その稽古を見てもいゝと云はれたけれど、突然の侵入者が

道場の空氣を亂す事を恐れて、一先づ階下に下りて事務所の一隅で待つ事にした。

稽古の濟んだのは十二時近かつた。めいめいはげしい稽古の後で、動作は活潑に、聲音は一段高く、まだ呼吸のはずむやうな樣子で、階段を踏鳴らして歸つて行つた。自分は、小山内土方兩氏と、午前一時頃迄話して、自分も昂奮しさうな氣持になつた。兩氏とも、如何にも生甲斐を感じて居るらしく、活氣が漲つてゐた。隣室では、土方夫人が衣裳の作製にいそしんで居る。いかにも面白さうであつた。

その當座、自分は約十年前に見たボストンの Toy Theatre の事を頻に聯想した。未だ小劇場の建築も見ず、どういふ風に經營されるのか、如何いふ演出を見せて吳れるのかも知らず、殊に兩劇場の成立ちも目的も全く違ふのに、それを聯想したのは、兩方が小劇場だからといふのでは無く、土方邸の一夜の光景の中に、全員がいかにも面白さうに活動してゐた事に原因すると思ふ。

自分の記憶は既に賴りにならないが、トイ・セアタアはボストンのチアルス・リヴアを距る事餘り遠くないところにあつた。倉庫のやうな煉瓦造の一棟をいくつかにしきつた中の一つで、全く物置か小賣店の爲めに建てられたものゝやうであつた。劇場らしい裝飾も無く、客席は土間ばかりで、椅子の數も百五十とは無かつたであらう。ボストンの有志によつて維持されてゐるもの

で、其の頃たしか創立後三年目位だつた。もつと大きい小屋を建てると云ふ噂だつたから、今ではもつと立派なものになつて居るか、或はもう存在してゐないか、知らない。自分が其處で見たのは Bernard Shaw の Getting Married であつた。ボオドヴィルと喜歌劇に惱まされ切つて居た自分は大變面白かつたが、演出にも特別の苦心が拂はれてゐるとも見えず、登場者は素人ばかりで、嚴格にいへば餘興以上のものでは無かつた。それでも稽古は積んでゐると見えて、ショオ一流の饒舌芝居を、誰しも正確に暗誦し、且全員の統一がよく保たれて居た。

一致團結して芝居をして居るといふあたりまへのことさへ營利主義の芝居には望み難いのだから、かういふ素人の團體も、これを特徴として存在の價値があるわけだ。みんなが一致して誰一人ぬきんでゝ頭を出さうとしずに、樂しみいそしむところが、土方邸で感じた小劇場同人の働き振と聯想の鎖がつながつた所以であらう。トイ・セアタアを見た時の心地よさと同じく、土方邸の光景は羨しい程面白さうに思はれた。其處に集つてゐた人々が、芝居をすると云ふ事丈にはり切つた精神を凝らし、感激に昂奮してゐる有様は、傍觀者の自分をも感動させた。

乍然、築地小劇場は、金持が寄集つて、氣の向いた時に芝居をするトイ・セアタアとは違ふ。充分の維持費を持つてゐて、時たま公演を催すのでは無い。多くの營利芝居と並行して、一週間

に五日づゝ殆ど休み無くやつて行くのである。人々の感激が同じ強度を持つて年を越え、又年を越えて行く事は望む可くして行はれ難い事であらう。役者を見るのが目的の見物は、恐らくは小劇場を顧みないであらう。眞白く塗つたいゝ男の役者でなければ滿足しない女の見物――それが芝居の最も有力なる後援者か――も集まるまい。たぶん定連として通し切符の割引を喜ぶ者は小數の專門的研究家と、心掛のいゝ學生に過ぎまい。小山内さんが夢みて居る民衆は、役者の神樣や大統領に隨喜し、又一刀の下に五人十人ばつたばつた斬倒される途方もない立廻に安直なる聲援を與ふるに忙しいであらう。さういふ實際にぶつかつた時、果して此の純粹なる歡喜と感激を持續けて行く事が出來るかどうか、非常なる覺悟がなければ、異常なる意力が無ければ、それは不可能である。遊戲は遊戲である限り緊張した心持で遂行する事が出來るが、それが勞働となつた曉には苦痛を伴ふ。藝術の痲醉の覺め際に、あらゆる不愉快な實際問題がひしひしと迫つて來るであらう。

トイ・セアタアの出資者の大立物某夫人は肥大過ぎる體軀の持主で、最も拙劣でありながら、しかも人は、名だたる金滿家の夫人が舞臺に立つといふ事丈で滿足し、社交界のよき話材となつたと云ふ事である。土方夫人が手づから衣裳を作ると云ふ事も、今では未だ社交界の噂としては

絕好のものであらうし、夫人自身にも遊戲に近い興味であらうと思ふが、やがてそれは苦痛を伴ふ時が來るものと覺悟しなければならない。小山內さんでも土方さんでも、その他同人の人達も、永續とともに勞苦の增す事は逃れられない。その勞苦の時代が來て、始めて此の事業は深く根を下す事が出來るのだ。その時になつて、一層力を出す事が出來れば、吾々見物の喜びは之に過ぎるものがない。決して、築地小劇場をして、單に營利主義の劇場に對する淸涼劑で終らせてはならないのである。若しそんな事ならば、常設の劇場を設立する必要が失はれてしまふ。

愈々築地小劇場が開場してから、自分はその公演を缺かさず見てゐる。茲では劇評には及ばない積りであるが、第一回よりも第二回がよく、第二回よりも第三回がよかつた。今後自分の好みとしては、近代劇の古典イプセンに始まつて、ストリンドベルヒ、ハウプトマンの如き、既に記念塔を建設した作家のものをやつて貰ひ度い。大物に手をかける事を先にして貰ひ度いといふのは變かもしれないが、此の小劇場に集まる若い熱心なる見物に、近代劇を正解せしむる爲めには、どうしてもイプセンから出發しなければならない。實際問題としては役者が足りないだらうし、又他面には最新歸朝者の土方さんが歐羅巴で見て來た物の印象のうすらがないうちに次々上演しようといふ事もあるであらうが、少くとも劃期的の戲曲の演出を試み、小山內さんが演出の興味

無しと宣言した此の頃の我國の戯曲が、いたづらに樂な仕事を求めて、西洋の小説戯曲を日本化したものや、昔の物語や語物や、さては謡曲や小話に材料をとつて、容易に戯曲を組立てるバラツク時代に、莊嚴なる大殿堂を舞臺の上に築いて貰ひ度い。

不幸にして、一回は一回と、自分は見物の數が減つて行くやうに思ふ。自分の心配した事が早くも小劇場の内外に迫つて來たのではないのであらうか。ロオマン・ロオランの「狼」、カレル・チヤペツクの「人造人間」の如き勝れたる演出にもかゝはらず、之を味はひ見る人の數は多くない。それが自分の杞憂に過ぎない事を祈りながら、自分が上に述べたやうな心配は、どうしても胸を去らない。

さもあらばあれ、自分一個としては、築地小劇場の出現によつて、芝居研究の熱が再燃し、豫々計畫を立て、又試作もしてみた戯曲創作の野望も一層強くなつて來た。築地小劇場へ行く事は、本を讀み、書きものをし、盃を手にする事の外に、惜みなく尊い時間を奪ふものとなつた。（大正十三年七月二十三日）

――「三田文學」大正十三年八月號

青山の家

足掛三年、大阪で下宿住居(すまひ)をして居たが、大正八年の暮に東京へ歸ると同時に、赤坂氷川町にひとりものゝ新居を構へた。それが自分の初めて持つた所帶だつた。

間も無く三田の福澤さんの持家を拜借して引越し、其處にはまる二年居た。慶應義塾の稻荷山の有名な大銀杏の下で、家は自分などには過ぎて居たし、御大家(ごたいけ)の大家(おほや)さんなので何の面倒も無く、充分滿足すべきであつたが、致命的の缺點は、往來のやかましい事だつた。又その一條の往來程、車馬の交通の頻繁なところも少いであらう。南の方には聖坂があり、北の方には綱坂があり、何れもかなりの坂だから、安きを擇ぶものは、少々遠廻りしても我家の前の一條を利用するのであつた。荷馬車や自動車が通ると、家は土臺からぐらぐらし、戸障子はがたがた鳴るのであつた。殊に閉口したのは、目黒から出て來るこえたごやが、まだ暗いうちから重たい車を曳いて

通るのだつた。書き物をして夜を更かし、やうやく熟睡したと思ふと、枕の下にごとんごとんと荷馬車の重たさが震動して來るのはやりきれなかつた。

何處か靜かなところに引越し度いといふ願は、一日一日强くなつたが、それでも思ふに任せないで、二年二箇月動かなかつた。

たまたま岡田三郎助先生から、靑山南町二丁目に住んで居るおしりあひの方が引越す事になつたから、その後にはいつてはどうだと云ふ御話があつた。あんないゝ借家はありませんといふ先生の折紙つきだつた。

先方の御都合をきいて下さつて、岡田夫人と大隅爲三さんが案内役で、その又と無いと云ふ家を見に行つた。靑山一丁目と三丁目の電車停留場の恰度間にある細い道を、墓地の近く迄入つた靜かなところで、垣根の中の庭も廣く、春先の樹木の綠が明るく柔かに輝いて居るのが、先づ心を引いた。玄關と應接間は洋風になつて居て、其の外に六室あるから、自分のやうな小さい所帶には充分だつた。家を取卷いてかなり廣い庭もあり、庭木の數も種類も多く、それで家賃も意外に安かつたので、自分は心から感謝した。確かに又とない借家だと思つた。

家主は陸軍の退役將校で、今は鄕里——關西の某市の市長をして居る。差配人は昔馬丁をして

ゐた男で、現在は此の近くで米屋をしてゐるといふ話だつた。
　岡田さんのおしりあひで、大隅さんの友達なる此の家の借主は病氣入院中で、その爲めに此處を引拂ふのだといふ事だつた。病氣は腦病で、時々狂暴になると、奥さんの身持を疑つて折檻し、時には全く靜穩になつて、太陽崇拜の長論文を書く。年中狂つて居るわけでは無く、常態を永く續けて、關係して居る會社の事務も間違無く見る事も出來るし、つい先頃株主總會を召集して、滯り無く重役の責任を果した。病院に入つて居ても、極めておとなしい時もあるが、留守宅の奥さんの行狀が氣になつて、屢々逃走を企てる。平生は嫉妬も起さず、太陽を崇拜する事も無いが、いつたん狂ひ出すと、必ず奥さんの貞節を疑ひ、日輪宗に心を凝らす。そして、奥さんの不行跡の相手だと想像するのは、幼少の時からの親友である。しかし、如何に氣が狂つて居ても、其の友達が見舞に來れば心から喜んで歡迎し、決してまをとこだと疑ふやうなけぶりは見せ無い。たゞ奥さんにむかつてだけ、あくまでも不義を働いて居るに相違ないと云つて、殺してしまふとか、髮を切つてしまふとかたけりたつのださうである。ほんとに殺されるかと思つた事も御座いましたといふ奥さん御自身の話だつた。
　いづれ引越がきまつたら知らせて貰ふ事にして、おいとました。玄關のところで、尻尾を切ら

れた茶色のセツタアが遊んでゐた。

その年は事の多い年だつた。家内の里の母親と妹が正月からチブスに罹つて慶應病院に入院し、一時はどうかと心配する程の容體だつた。いくらか病氣が輕かつたのか、若い者は回復力が旺盛なのか、娘の方は三月の初めに退院したが、母親の方はなかなか先が見えない。そのうちに家内も病氣で入院する事になり、くさくさする事が重なつて來た。

家庭といふものに深い愛着を持たず、宿屋住居を理想とする自分は、所帶の面倒に閉口した。若しも充分に金を持つ身になつたら、帝國ホテルを永住の場所にし度いと、到底實現不可能な事を夢想しながら、月末の心配になる其日々々を送つて居た。其處に病院といふ少なからぬ出費を要するものが現れたので、何とかして收入の途を開かなければならなくなつた。しかし自分には、文を賣つて錢に替へる外には方法が無いので、豫々勸說を受けて居た大阪每日新聞に、長篇小說を寄せる事に決心した。それには一日も早く閑靜な家に引越し度いと願つてゐた。

青山の家を見に行つてから三週間ばかりたつて、愈々その家があくといふ知らせを受取つた。直ぐに出かけて行つたが、もう引越は濟んだ後で、門の潛(くゞり)もあかなかつた。御用の方は左記へと書いてある差配人のところへ行くと、亭主は留守だつたが、かみさんと娘が店先で働いてゐた。

前の借主から紹介して置いて貰つたので、話はわけ無くきまつた。たゞ先方が條件としていひ出したのは、家賃を今迄よりも十圓上げる事と、家主の市長さんの任期が來年でおしまひになり、再選されゝば結構だけれど、萬一落選する場合には歸京して此の家に住む筈だから、その時はたちどころにあけ渡す事と、主人が住むとすればすつかり手を入れる積りだから、それ迄一時的の修繕だの、疊替だのは一切しない事の三つだつた。自分は市長さんの再選を祈りながら、それらの條件を承諾した。

既に一度拜見したから、又見る必要は無いと云つたけれど、隨分古い家で、いざ住んで見てからこんな筈では無かつたと思ふ事も多からうから、もう一ぺん篤と檢分して呉れといふ筋の通つた申分なので、娘に案内して貰ふ事にした。二十五六にもならうかと思はれる銀杏返の娘は、大層言葉が叮嚀で、家の古い事を繰返し、決して滿足を與へる値うちの無いものだといふのが、甚だ謙遜で、母親といひ娘といひ、至極く物のわかつた人間に見えた。もう御亭主があるかもしれないが、あるにしても無いにしても、おとなしい男を連合ひにしてやり度い氣がした。

庭の櫻の盛は過ぎて、家の屋根にも、往來にも、眞白に花が散つてゐた。門をあけて、臺所口から中に入(はい)ると、閉ぢ込めた空家の蒸れた空氣が氣持惡く、浮蕩な重味を含んで顔を打つた。里

見窮さんの「彼と小娘」といふ小説に、かういふ場面の肉慾的な心持が巧妙に描かれてあつたが、たつた一枚あけた雨戸のところから入つて來る光線で、異常な感覺的な景色が展開されるものであつた。自分は變に不機嫌になつて、薄暗い古家の中を、慇懃な言葉でよく喋る女の後から、默々として歩いて廻つた。

四月十七日に引越す事になつた。氷川町以來忠勤をつくし、家事一切の切盛をする感謝すべき女中が采配を振り、出入の米屋や酒屋が手傳つて呉れて、騷々しい三田から靜かな青山に移つた。殊に米屋は、どんなに遠方に越しても、必ず今迄通り出入りさせてくれと云つて、一倍熱心に助勢した。

引越したての落つかない心持ではあつたが、家の外の物音に煩はされない靜けさが、心を豐かにしてくれさうに思はれた。かういふところでなら長篇小説は忽ち出來上るだらうと考へながら、第一の夜を勝手な想像に任せて、樂しみが多かつた。

曉方、家内の兄が、未だ開けない門扉を叩いて、家内の様子が變だといふ知らせを持つて來た。直ぐに病院にかけつけると、その時はそれ程でも無かつたが、間も無く容體が變つて、苦痛の外には何事も辨へない狀態に陷つてしまつた。一時間、二時間――何時迄も險惡な容體のつゞくの

を、たゞ醫者頼みにして見守つて居る自分の苦痛といふものは無かつた。恐らくもう助かるまいと思つた。何等の表情もあらはさず、平然として人間の生命を取扱ふ醫者を憎んだ。此の日は今日迄の最大悪日だつた。かういふ事が起るとも知らずに、昨日引越を行つたといふ事が、ひどく間抜に感じられた。

幸にして家内は命をとりとめたが、五月の中旬迄病院の御厄介になり、漸く退院して、當人の留守中に引越した家に歸つて來たが、その月のうちに又入院し夏のさかり迄ひつかゝつてしまつた。長篇小説執筆の必要に迫られながら、あんまり事が多いので、おちついて筆を執る事はなかなか許されなかつた。

家内の命が大丈夫だと見極めがついて、初めて新しい住居を、ゆつくりと認める事が出來るやうになつた。新しい住居といふけれども、それは自分にとつて新しいので、家そのものは非常に古いものだつた。木造の西洋間は疊を敷けば十二枚は確かに入る廣さで、此處に自分の財産——と云つても決して珍しいものも高價なものも無いのだが、數だけは夥しい本を納めた。次の八疊は食事をするところにした。緣傳ひに離室があつて、其處で勉強する積りでゐたが、いざ机を据ゑて見ると、西日が強くて到底辛抱出來なかつた。庭には櫻の大樹が二本あつて、落花は土にへ

ばりついて、永い間殘つて居た。枇杷、百日紅、松、檜葉、楓、合歡木、海棠、八手、山茶花、どうだん、躑躅などのかなり立派なものがあつた。その外に、花壇には見事な薔薇が匂ひ、緣先には睡蓮の鉢の沈んで居る大きな瓶が四個並んで居た。月のいゝ晩にその水に影の碎けるのがいゝ氣持だつた。

しかし、此の薔薇と睡蓮は、借家についたものでは無く、先のあるじの苦心して育てたもので、引越先に空地が無いから、暫時預つて貰ひ度いと、奥さんから依賴を受けた並ならぬ物であつた。岡田先生の鑑定では、三株の薔薇の中で、一株は餘程勝れたもので、睡蓮の方は花が咲いてみなければわからないけれども、多分優良品だらうといふ事だつた。

さう聞くと、それを預つて居るのが心配になつて來た。何時引取つて吳れるかわからないのだから、それ迄に枯れるやうな事があると申譯が無い。虫のつき易い薔薇の手入などは、自分のやうに忙しい人間には到底出來ない。殊に此花を愛した人は、今氣が狂つて腦病院に入れられながら、隙をねらつては逃亡しようとして居るのだ。狂人の一圖におもひつめた熱愛は、その妻と同じ程にも此の花に執着を持つて居るかもしれない。枯れる枯れないは別として、單に預つてゐる丈でも不氣味に思はれる。創作家の想像は、美しい妻に絕間無く嫉妬し、又睡蓮に異常の愛着を

持つ狂人と、その妻と、睡蓮の鉢を偶然預かつた爲めに狂人の刄に命を落す男を生み出した。自分はそれを戯曲の形式で描いて見ようと思つた。

豫々、少しでも住居に空所があつたら、犬と金魚を飼はうと願つて居たので、犬きちがひの弟に頼んで、獨逸ポインタアの子供を手に入れて、ウイスキイと名づけたが、貰つて來た時旣に病氣で、翌日は入院させたけれど藥石効無く死んでしまつた。

金魚の方は、三田の緣日で十ばかり買つたちひさいのが、たつた一つ生殘つてゐたのと、家內が病氣見舞に貰つたのを一緒にして、お預りの睡蓮の大瓶に入れ、每日朝と晚と、近所の溝から糸目をとつて來て餌とした。駄金魚には違ひ無かつたが、あるじの足音がすると、餌をくれるものと知つて寄つて來る姿は可愛らしかつた。やがて、あだごゝろが萌し始め、瓶の周圍を追ひつ追はれつするのを見すまして藻を入れてやつたら、恰も淡紅色の睡蓮の花の咲いた日に產卵し、間も無く健全な子供が澤山かへつた。

睡蓮は白いのも、薄紫のも、玉子色のも咲いた。儚い命の花の色は又なく美しかつたけれど、段々花がちひさくなるのを見たり、水面に浮かぶ葉に枯色が見えたりすると、預品の心配が愈々深くなるのであつた。どうかして讓つて頂けるものなら幸ひだと思つて、大隅さんを介して申入

れ、遂に目的を達する事が出來た。たが其の頃は、金魚の數が殖えて、四個の大瓶を全部その方に用ゐる必要が起つてゐたので、たうとう睡蓮は他所に引受人を探して處分してしまつた。自分にとつては、植物よりも動物の方が面白いのである。

北隣は株屋さんで、かういふ人が山の手に建てさうな洋館つきの立派な家だ。たとへば一坪あたりいくらかゝつたと云ふ事がほこりとなり、招かれた客も亦其の點をほめなければならないやうな家だ。年中蓄音機の長唄が聞え、男衆はのべつに敷石に水を打つて居た。

南隣は玉窓寺といふ有名な御寺で、竹垣をへだてゝ見える境内には、參詣の人が絶えなかつた。朝早くから勤行の太鼓が、未だうつらうつらうつらして居る枕に響いて來た。その音は、

ぶんめらがつた、ぶんめらがつた

どーんどんぶんめらがつた

と聞えた。

我家の前を通り、玉窓寺の門前を過ぎると、直ぐ青山の墓地になる。乃木大將の墓參道で、町角には建札さへ立てゝある位だから、天氣のいゝ日には澤山の人が通つた。門前の溝で、一生懸命になつて糸目をとつてゐるのを、

「何すんだい。」

「金魚の餌だらう。」

「汚ないなあ。」

などゝ口々にいひながら、先生に引率されて行く小學校の生徒もあつた。

車馬の往來がすくないので、墓參の人は多くても、ちつとも騷々しくは無かつた。佛に捧げる花の枝を手にした人の姿は、吾々の心をも靜寂にした。血のつながるおもひでの人を弔ふ心は、一圖に悲しいばかりではないであらう。墓參の人の顏には溫い情愛があふれて居た。

墓地は散歩の場所であつた。晝間は兵隊が喇叭の稽古をするのを、近所の子守が熱心に取卷いて見てゐる。高臺の靑空に響き渡る單純な男性的な音樂は、一人前になりかけの女の心を容易に捉へ、並ならぬ關係を結ぶ者も多いといふ事だつた。

玉窓寺と墓地の間の道は、殊に自分の好む散步道だつた。薔薇の花の眞白に咲く垣根に添つて、夕雲のうつろふ色を屢々見た。その道だけは、ふるひをかけたやうな細かい土で、踏心地が柔かだつた。

家といひ周圍といひ、申分は無かつたが、差配人にはつくづく弱らされた。先づ第一に商賣柄、

米を買つてくれといふのだが、三田以來の馴染で、何處に引越しても必ず出入りさせて呉れと切望し、現に引越の時には一番働いた米屋がある。小人數の所帶で、自分は晝間は留守、夜も他所で食事を濟ませる事が多く、家内は病氣勝で長い間病院に厄介になつてゐたし、二軒から買ふ程の必要は無い。其處で、以前から出入りして居て、何の落度も無く、寧ろ感謝すべき米屋を斷る事は出來ないから、不惡思つて貰ひ度いと差配の方へは辭を低くして斷つた。しかし差配の方ではなかなか承知して呉れない。おやぢは來なかつたが、かみさんと娘がかはるがはるやつて來て、我が忠實なる女中を口說き立て、しまひには口汚なく罵つて止まないのであつた。自分が最初逢つた時、行儀のよさゝうな親切さうな母娘だと思つたのが、一通りならぬえらものだつた。店子として、差配人の賣る米を買は無いといふ法は無い。今迄居た代々の店子はみんな買つてゐたのだから、是非ともさうして貰はなくてはならないと強硬にいひ張るのださうだ。

ところが、外の出入の商人——酒屋、魚屋、八百屋などは、彼の家は親子揃つて因業な奴等で、近所でも鼻つまみなのだから、うつちやつて置くがいゝ、あんなうちから買ふのはおよしなさいと、女中に加勢して入智慧する。女中にして見ても、斷るのは辛いのだが、さりとて先から出入の方に對する義理も考へ、又あんまりひどい權幕でかみさんや娘にがなり立てられるのに憤慨し、

進んで差配人の要求に應じようとはしないのであつた。

そこへ持つて來て、こつちがうつかりしてしまつたのは、お盆のつけとゞけを忘れた事だつた。家内は入院してゐて留守だし、今迄は相手が福澤家なので、つまらない物を差上げてはかへつて御迷惑だらうと一切廢止ときめてゐたので、自分は全く氣がつかなかつたのだ。此の氣の利かなさを、差配の母娘（おやこ）は眞向から攻撃し、けちだ、間抜けだ、禮儀知らずだと怒鳴るのだ。但し此事は餘程たつて、家内が病院から歸つてから、女中が密かに報告したのであつた。癇癪持の主人が、むきになつて怒るだらうと恐れてゐたものらしい。

「しまつたなあ、しかし今更お盆のおつかひ物も持つて行かれないから、暮迄我慢してその時大奮發で荒膽をひしいでやらう。」

どうしませう、どうしませうとばかり云つてゐる家内に話して、一日も早く暮の近づくのを待つた。差配の方は根氣よく、米を買はない不都合と、お盆のつけとゞけをしない吝嗇を、口を極めて罵つた。

引越して來て間も無く蒔いた草の花が、不出來ながらも咲き始めた。向日葵、撫子、サルビヤ、矢車草、鳳仙花などで、自分の手がけたものだと思ふと、高價なる薔薇よりもいとしかつた。朝

晩それに水をやる事と、金魚の餌取りは暑い盛りにも忘れなかつた。

蚊のゐる事は覺悟をしてゐたが、意外に風通しのよく無い家だつた。六月から引續いて、大阪毎日新聞に連載してゐる長篇「大阪」が、年中追はれ勝で、屢々電報で催促を喰ふ有様だつた。夕方勤先から歸つて、湯に入り、飯を濟ませると、直ぐに机にむかつて十二時頃迄執筆する。汗は額からしたゝり、机に突いた肱の所や、洋筆を固く握つて絶間無く動かしてゐる右の手は、殆ど乾く間も無く、折角書いた原稿を濡らして、インキの滲み流れる事が屢々あつた。一回分を書上げて、ほつと一息つくと、あけ放しの縁に近く、螢の飛んでゐるのを見る事もあつた。虫の音も繁げかつた。

近所の家で、毎晩鼓の稽古をするのが、呑氣な時には面白かつたが、ちつとも筆のはかどらない時には、忌々しくて堪らなかつた。あゝいふ風にして稽古するものなのか、力強い大人の聲で、謡曲の節だけを、

うーらうらア、うーらうらア

うーらうらア、うーらうらア

と幾度となく繰返すのに連れて、少年の一生懸命のかけ聲をしながら打つ鼓が、遠く迄聞えた。

親類の娘の稽古してゐるのを見た事があるが、決して「うーらうらア」では無かつた。
「ちえッ、又うーらうらアを始めやあがつた。」
新聞社からの電報を前にして、自分は耳に入る鼓の音を呪つた。夜が更けて「うーらうらア」が止むと、玉窓寺の森に梟の啼くのが、はつきり聞える。此の孤獨なる鳥の雌を呼ぶ寂しい聲は、聽く者の心を誘つた。高い月を仰いで自分は永い間庭に佇む事があつた。
樹木の多い庭には秋の訪れが早かつた。玉窓寺の小僧達は、ぶんめらがつたの勤行が濟むと、朝寒の庭の落葉を掃く。掃いても掃いても、銀杏、櫻、榎、柏、楓、白楊などの葉が、入りまじつて落ちて、土を埋める。かさこそと風に舞ふ木の葉の音は、ふと遠い昔の日の記憶をよび起す事があつた。
天氣のいゝ日曜に、大瓶の傍にしやがんで、金魚の餌をえり分けてゐると、垣根の向側では二三人の若い坊さんが、しきりに落葉を掃いてゐた。
「なあ、おい。こないな唄を知つとるか。」
一人の坊さんが、箒の手を止めて仲間に聲をかけた。さうして、風邪を引いてゐるやうな冴えない聲で、流行唄をうたつた。

殘念な事に、自分は其の唄の文句を忘れてしまつたが、あなたの方から切出してくれゝば何時でもいふ事をきゝます、といふ意味の事を、女學生の言葉でいひあらはしたものだつた。

「どうだ面白いちやろ。」

さう云つて、もう一度唄つて聞かせた。

「女學生といふものは、不思議なものぢやのう。」

暫時してから嘆息するやうにつぶやいて、又落葉を掃き出した。仲間の者は、最初からしまひ迄一言も口をきかなかつた。これが、おなじ年配の中學生でゞもあらうものなら、互に氣障な言葉を投合つたらうが、若い僧侶は笑聲さへ立てなかつた。自分は胸を壓されるやうに感じた。御佛につかへながら、煩惱に苦められてゐる人間の姿を想ふ事が出來た。その後笑話にして人にも聞かせたが、何故か心から笑ふ事は出來なかつた。

落葉を焚く煙は、玉窓寺の庭にも、青山墓地にも、薄紫に立上つた。晝間でもこほろぎの啼く時分になつた。

一晩野分のひどい事があつた。我家の古い竹垣は倒れ、コスモスや向日葵は地上にひれ伏してしまつた。金魚の瓶の中は、折れた枝とちぎれて飛んだ樹木の葉でいつぱいだつた。赤蜻蛉の

潦（にはたづみ）に尻をつけては飛廻る庭に出てゐるところに、差配のぢいさんが、植木屋をつれて見廻りに來た。人のよさゝうな植木屋は、竹垣根を引起して、手早く荒繩で細工をして行つた。その時差配は、來年の市長選擧で旦那が再選されゝば、その時になつて完全に直すけれど、それ迄は此のまゝ手をつけないと云つた。しかし、若し借家人の方で植木屋の手間賃を出すなら、直ぐに修復してもいゝとつけ足した。自分は返事をしなかつた。そして其の垣根は、翌年の夏迄半倒れのまゝだつた。

十一月の十九日に「大阪」は完結した。拙いものではあつたが、自分の作品の中で、一番長いもので、窮迫した生計を、どうにか斯うにか救つて呉れた。少しでも金を持つと、直ぐに氣が大きくなつて、使ひみちばかり考へる性分だから、暮から正月へかけて何處かに旅をしようなどゝ樂しみ數へる中に、差配の米屋が驚く程のお歳暮を、叩きつけてやり度いと云ふ馬鹿々々しい願望もあつた。

いざとなると、あまり子供らしいやり方だと躊躇されて、多少控目にはしたけれど、兎に角差配が豫期しない金一封を屆けてやつた。お盆のつけとゞけを忘れたからつてあんまりがみがみいふものでは無いぞと云ふ心持を封じてやつたのだ。果して差配は大喜びだつたが、その後も矢張

り米を買つてくれといふ要求は引込めなかつた。

年が變つて、霜どけの庭に水仙の芽の萌出る頃になると、その年中の樂しみをいろいろ計畫してみた。先づ第一に、春になつたら庭に池をつくらう。今迄のやうな駄金魚でなく、蘭虫を飼ひませう。花壇も充分土をふるつて、春秋の草花の種を蒔かう。自分が草花の中で一番好きな、秋の七草も植ゑませう。それよりも、ポインタアかセツタアの相當なやつを手に入れ度い。牡の方は第二世ウイスキイとし、牝の方はヂンと名づけよう。子供が生れたら、シエリイ、ワイン、キユンメルなどゝいふ酒の名をつけて、青山墓地を引張り廻さう。――それからそれと考へて、嬉しくて堪らなかつたが、いざ春の彌生の頃となつても、例の懐の都合で何一つ實現出來ず、折角買込んだ素晴らしい蓄音機も、音譜を買ふ迄に到らないで、又手放す事の餘儀ないやうな羽目になつた。

その間に最も困つたのは、氷川町以來の名女中が、嫁に行く事になつて暇をとつた事である。惜みてもなほあまりある人物だつたが、御目出度だから爲方が無い。きりやうよしでおとなしく、行儀がよくて親切だつたから、うちに來る御客でもほめない人は無かつた。出入の商人の御用聞などで、ひそかにおもひを焦したり、小當りに當つたのもあつたらしいが、浮いた氣のちつとも

ない人間だつたから無事だつた。私經濟に於ては、まるつきり理財の觀念の無い自分は、此の人がゐなかつたら、到底所帶を張つてはゐられなかつたらう。滿腔の感謝を表白する爲めに、ひとつ出來る丈の祝物をしようと、又しても大きな事を考へたが、結局小說を書く外には收入の道は無いので、思ふまゝにはならなかつた。此の女の家の者は病弱で、姉も妹も相次いで死んだので、萬一嫁にいつて大病にでもならなければいゝがと、吾々は始終心配してゐた。幸に今は子供も出來て、立派なおかみさんになつてゐるが、此の人去つて後の我家は、果して慘澹たるものとなつた。

後に殘つたちひさい女中は、氣ばかり強くていふ事をきかず、只管念じる事は繼母に對する報復だつた。

庭の櫻の大樹は見事なもので、滿開から落花の風情は素晴らしかつた。櫻といふと花見の景色が直ぐに連想されるが、自分には此の花は限り無く寂しい。殊に薄い花片が風も無いのに先を爭つて散り、うすしめりのした土にへばりついてゐる姿ははかな過ぎる。何もかも、おもふに任せない世の態(さま)が思はれるのである。

おもふに任せないといへば、池も出來ず、花壇の擴張もお流れとなつたが、勤先の同僚が、ア

イリツシユ・セツタアの子を二疋呉れた。豫定の通りウイスキイ及びデンと名づけて、その成長を樂しんだが、薄茶色の愛す可き小犬は、長雨の頃に腸を患つて、久しく病院の手當をうけたあげく、大丈夫助かるといふ院長の保證を裏切つて、共に死んでしまつた。

「此の家は生物の育たないうちではないでせうか。」

と犬きちがひの家内は怨めしがつた。

梅雨あけの日ざしも強く、金魚の期節はたけなはとなつた。今年も亦産卵し、餌取りの忙しさは非常なものだつた。青山一帶の溝は、隈無く求めた。しかし、睡蓮の鉢のはいつてゐた瓶の中では、折角かへつた子金魚の運動が不充分で、且水溫が熱し易く冷め易く、到底滿足には發育しなかつた。どうしても池だけは作らなくてはならないと思つてゐるところに、突然家主の市長さんが落選して歸京するといふ報知を、差配の米屋が持つて來た。

夏になると任期が切れるとは聞いてゐたが、久しく天下を我もの丶如く心得てゐる政友會系統だといふから、たぶん再選されるのだらうと多寡をく丶つてゐたところ、落選したといふのは意外だつた。差配人は主人から來た「キンジツキキヤウスル」といふ電報を見せて、最初の約定通り成る可く早くあけ渡して貰ひ度いと云つた。

自分は政友會の勢力の傾き始めた大原因、原敬氏の死を今更ながら惜しみ、此の政治家を刺した不良少年を憎んだ。生半熟の政治狂か、賣名の徒か、いづれにしても東京驛頭に閃いた匕首が、やがて自分が滿足してゐる住居をうばふ結果となつたのだと考へた。(大正十三年八月二十六日)

——「三田文學」大正十三年九月號

我家の犬

自分の記憶によれば、自分の父母の家には、三十餘年間殆ど始終犬が居た。それ等の犬の姿態、毛色、音聲、性質、殊に限つきは、生涯忘れる事が無いであらう。

自分の生れる前から居たのかも知れないが、物心ついた時、うちに居たのはポチと云ふセツタアの特徴をかすかにとどめる雜種の牡犬だつた。黒斑の額と胸と腹と四肢の白い、少しばかり波を打つて毛の縮れて居る、中位の大きさの犬であつた。まさかに、それ程幼い時の記憶がある筈は無いと思ふのだが、誰かの手に兩足をつかまれて、緣側から庭へしいしいこする自分を見上げて居るポチの姿を、今でも明瞭に想ひ描く事が出來る。恐らくは自分の勝手にこしらへた想像が、年を經てほんとの事のやうに考へられるのであらうが、しかし二歳や三歳の幼兒にも、ほんとに心に殘る印象は、やきつけられるものでは無いだらうか。

そんな風に、ほんとにあつた事なのか、自分でこしらへた事なのかわからなくなつて、しかも自分に丈ははつきりと、その時の景色から人の聲迄想ひ出せる事が外にもある。多分これも三歳位の事だらうと思ふが、父と母が旅行をした留守、自分は母方の祖母に抱かれて寢て居た。癇の強い子供だつたから、その晩もむづかつて、人々を困らせたのであらう。夜更に祖母の背におぶはれて、なほ眠られずに母親を戀しがつて居たものらしい。それが冬の夜に違ひないと思ふのは、確かに自分は綿の厚いねんねこの中に居た記憶がある。家は飯倉の坂の上の、天文臺の近くだつたが、寂しい屋敷町の夜半に、

「人殺しい、人殺しい。」

と切迫して叫ぶ聲を聞いた。女の聲だと景色は一層はつきりするのだが、確かにそれは男の聲だつた。祖母がきつとなつて聞耳を立てた顔に頰を擦りつけてしがみついた。それつきり何の事も無く、おびえた犬の遠吠が聞えた。その犬の聲が、うちのポチだつたか、他所の犬だつたか、自分は知ら無い。

此の事については、其後十數年たつてから、祖母に眞僞を訊いて見た事がある。祖母も曾て「人殺しい」といふ叫聲を聞いた事はあるが、それが私を背におぶつて居たやうな比較的新しい昔の

事では無く、もつともつと前の事のやうに思ふ、第一その頃の私のやうなちひさなものが、そんな事を覺えて居る筈が無いと云つて笑つた。しかし自分は、矢張り自分の記憶の方が確かだと今も信じて居る。

飯倉の家には五歳の春迄居て、次には三田松坂町に住んだ。引越の日には、父、母、祖母、兄、姉、自分、女中達の乘る人力車が一列に驅けて行くのにくつついて、ポチもあへぎながら走つた。

新しい家の前は廣い原で、久しい間子供の自由な遊場になつて居た。いけないいけないと云はれながら、家の中で遊ぶのが嫌ひで、野放しにあばれ廻つて居る町つ子の仲間入がしたくて堪らなかつた自分は、年中其の原つぱに出かけて行つた。何時の間にか世間智の發達してしまふ町つ子は、いろんな事を教へてくれた。若い娘でも通ると、「あの姐さんいい姐さん」などゝ一齊にはやし立てる事も教はつた。男女のまじはりについて說明し、坊ちやんも其の結果生れたのだとからかはれた時は、自分は火のやうに怒つて其の町つ子にむしやぶりつき、必死になつて格鬪した。又、「ちやんこ何處へ行く」といふ卑猥極まる唄を教はつて、全く何の意味だかわからずに、うちに歸つて大きな聲でうたつて居た事もあつた。頭髮の縮れた、頰邊の眞赤な守女（もりつこ）の手を放れた頃

だつたから、往來に遊びに行く時は、大概ポチがついて來た。

　ポチよ來い來い、團子もやるぞ麪麭もやるぞ

とその當時の讀本の文句をきゝ嚙つて、町つ子と共に聲を揃へて叫んだ。

近所には澤山犬が居た。その犬どもをけしかけて喧嘩をさせるのが、子供の遊戲のひとつだつた。生憎ポチは強くなかつた。年もとつて居たのだらうが、性質も穩和で、鬪爭を好まなかつたらしい。ちいつぽけな痩犬にも、尻尾を卷いて逃げてしまつた。ポチは弱いと、一口に町つ子にけなされるのが口惜しかつた。

「駄目だよ、こいつは一もくだから。」

ポチの顎を上に向かせて、咽喉に生えて居る一本の白い毛を引張つて見せる惡童もあつた。昔からのいひ傳へか、三もくの犬が強いのだと子供達は云つた。

ポチの死んだのは何時だか知らないが、その次には黑といふ眞黑な、何處にも取得の無い駄犬が居た。誰が貰つて來たのか覺えてゐないが日本犬の姿を多分に殘してゐる痩つぽちの、貧弱極まる犬だつた。あんまりきりやうがよくないので、うちの者も可愛がつて居なかつたやうに記憶する。ところが此の黑が、喧嘩になると強かつた。いざと云ふ時は骨張つた四肢に力がみちて、

きちがひのやうに相手の咽喉笛に嚙みつくのである。その喧嘩のしぶりも、決して立派な型を備へて居ないのだが無闇に氣が強くて、死身になつてぶつかるのである。相撲でいへば、大關相撲の貫祿は無いのだが、小兵ながらも諸手突の鐵砲と咽喉輪で攻めぬかうと云ふ奴だつた。退却の戰法を知らない日本の兵士のやうだつた。たぶん、それは日本犬の特徴であらう。或は日本人の特徴でもあらうか。但し黑が三もくだつたか一もくだつたか、今之を審かにしない。

　黑はあまり長く居なかつた。ポチと同じく、此の犬も何時の間にか居なくなつた。犬殺のさかんに橫行した時代だから、殺されたのかも知れないが、犬は主人に死骸を見せないものだと、うちの車夫や女中は云つて居た。久しい間自分も此の說を信じて居た。たぶん、人智の限りを盡して飼育する近代的のやり方で無く、單に首輪と食物を與へる以外には何の面倒も見てやらない野放しの飼ひ方をして居ると、人目にかゝらない緣の下か何かで、最後の呼吸を引取るのかもしれない。或はこれも、日本犬の血の多分にあるものに限る道德であるかも知れない。何れにしても、自分はポチと黑の死顏を知らないで濟んだ。

　その頃芝の山內に住んで居た末延道成さんの所には、何時もすぐれた犬が居た。御子さんが無いので、奥さんが我子のやうに可愛がつて居ると云ふ話をよく聞いた。公園の松林の中を、二疋

の洋犬を引つれて散歩していらつしやる奥さんの姿を、羨しく思つた事もある。うちでも後から後から生れる妹や弟のかはりに、あゝいふいゝ犬が欲しいと思つた事もある。

子供達の心にひかれて、母が御願ひして呉れたのであらう。末延さんで生れた英吉利ポインタアの子を、牝牡二疋貰ふ事になつた時の喜びといふものは無かつた。乳母車を持つて頂戴に行つた車夫の歸る迄に犬小舍の藁をかへて、自分達兄弟は待兼て居た。やがて歸つて來た車夫も大得意だつた。乳母車の上にひつつきあつて眠つてゐる茶斑の二疋は、吾々がそれ迄に見た事も無い綺麗な犬だつた。だらりと長く垂れた耳、すんなりと平になびく尻尾、龍の髯の果のやうな碧く澄んだ眼、短く柔かい毛の手觸り――自分達は夢中になつて、爭つて抱いたり頰擦りしたりした。

うちに居る時は本を讀んで居るばかりで、つひぞ外の事には興味を持たず、決して口出しをしない父も、これはいゝ犬だとほめたゝへ、あまつさへ自分から進んで名前をつけた。牡の方が Hero で牝の方が Lily である。自分の子供には、誰にも分り易い小僧名前をつけ、是非ともお祖父樣に命名して頂き度いといふ孫の名に平俗なのを撰んでお嫁さんを失望させるやうな父であつたが、これは餘程世間並の凝りかたを見せたもので、或は父から見たら、一段格を落したやり方であつたかも知れない。子供の相手になんかならない筈の父が、ポチとか黑とかいふありふれ

たのでない、すつきりした名をつけてくれたのだから、吾々は一層嬉しがつた。片方が勇士で、片方が百合といふ英語なのだときかされて、それを又外の者に說明してやるので大得意だつた。呼ぶ時にはヒロとリリだつた。しかし、ヒとシとの區別のつかない連中は、折角の名前なのに、シロシロと呼んでゐた。

けれども、すべて美しいもの、純粹のものは弱いのか、此の二疋の仔犬は永く我家に育たず、癲癇を起し、あわてゝ病院に入れたけれど、藥石効なく前後して死んでしまつた。

ヒロとリリが一家の寵を集めて居た時期は短かつたけれど、それ以來犬を見る眼がぜいたくになつて、今更黑のやうな姿態のいやしい犬を飼ふ氣にはなれなくなつた。何時迄も死んだ二疋の美しく、可愛らしかつた事ばかり家人は話合つた。

それかあらぬか、一寸の間我家に犬のゐない事があつた。そのかはりに山羊を飼つて居た事もあり、鳶を飼つて居た事もある。山羊は顏つきは可愛らしかつたけれど、庭を荒して爲方が無かつた。鳶は丁字形の棲木(とまりぎ)に綱で縛つて置いた。日清戰爭の後で、高千穗艦の帆柱に鷹のとまつた話が廣く傳へられて居た時代だから、それと結びつけて、子供心に強い興味をいだかせたが、その實決して面白いものでは無かつた。矢張り犬が一番いゝと思つたが、ヒロとリリが何時迄も忘

れられ無い爲め、思ふやうな犬にはなかなか出あはなかつた。
もう自分も、十一二にはなつてゐたらう。五月雨の頃であつた。傘をさして足駄穿で、綱坂を越えて、中之橋迄何か買物に行つた日の事である。慶應義塾の幼稚舍の裏手の塀にそつて、綱坂の上迄、兩側の大きな邸宅の暗く茂つた大樹の枝から、雨の雫のしたたり落ちるのが、土を打つてはねをあげてゐたが、それにまじつて數限りも無く、蛙の子が飛んで居た。ぴよんぴよん飛上る眞黒な踊子は、自分の足にも飛びついた。一歩々々に幾疋と無く踏みつぶしさうなので、注意深く歩いて行くと、坂を上り切つた所の溝から這上つたちひさい犬が、きゆんきゆん泣いて往來をさまよつて居た。ポインタア種の七八分は殘つて居る濃い茶斑で、眼つきの優しい牝犬である。誰かが溝に捨てたのであらう、母犬の乳房を無理に引離されて、寂しがり、途方にくれてゐたところだから、人の姿を見てなつかしがつて、よたよたよろけながら寄つて來た。手を出すと、眼を細くして頭を擦りつけて來る。咽喉のところを靜に撫てやると、すつかり疲れて居るのであらう、いゝ心持さうに眼をつぶつて、手の平の上に首をのせたまゝ居睡を始めた。
拾つてうちに連れて行き度いなあと、堪らなく可愛くなつたが、牝だといふ事が邪魔になつて決しかねた。牝犬はさかりのつく頃うるさくて爲方が無いし、惡い牡とでもつがふと、始末のつ

かない仔犬を生むし、どんな犬でもいゝから牡でなければいけないと、始終うちで云はれて居るので、若しもこれを連れて歸つて、萬一うちで飼つてもいゝといふ御許しが出ないと、又何處かに捨てに行かなければならない。こんな可愛らしいものを、自分の手でむざんに捨てる事は出來ないと思つて、充分未練のあるのを自ら振切つて立上つた。いゝ氣持で眠つてゐた犬は、びつくりして眼を開いたが、又ひとりぼつちになるとさとつたのであらう、一二歩あるき出した自分の踵を追かけて、きゆんきゆん泣きながらついて來る。おもはず知らず足をとめると、水たまりも構はずにかけて來て、しきりに尻尾を振り立てるのであつた。さうされると又愛着が深くなつて、直ぐにも抱上げて連れて歸りたくなる。又しばらく仔犬の頭を撫てゐたが、折柄坂の下の方から二三人學生らしい姿が見えたので、その中の誰かゞ拾つてくれればいゝと云ふ期待を殘して、思ひ切つて歩き出した。仔犬は一段高く悲氣な泣聲をふりしぼつて追かけて來ようとしたが、自分の體の中心さへ支へ切れないで、つまづいてぬかるみに倒れた。自分は逃げるやうに横町に曲つてしまつた。

中之橋の用事を濟ませて歸る時、さつきの仔犬の事ばかり氣になつて、又同じ道を逆に引返した。誰かなさけ深い人が拾つてくれゝばいゝが、未だ雨に濡れて泣いてゐるのだらうか、それよ

りもいたづらつこに見つかつて、首に荒繩でも巻きつけられ、ひどいめにあはされては居ないだらうかと考へると、心配で堪らなくなつて、足駄の足も早くなつた。

　もとの所に來て見ると、仔犬はまだ雨に濡れながらうろうろして居たが、通りかゝりの車やが、一足をとめて見て居るところだつた。

「坊ちやん、拾つてつておやんなさいな。いゝカメ犬ですよ。」

　人のよさゝうな老車夫は、自分を見ると直ぐに聲をかけた。犬好きらしい善良な眼尻に皺を寄せて、足下(あしもと)に尾をふつてゐる仔犬を、さも可愛らしさうに見て居た。

「可愛さうに、こんな所に捨てやがつて、うつちやつとけば死んじまひますよ。」

　さう云はれると、自分の心は又動いた。兎も角もうち迄連れて行かうかと思つて、しやがんで手を出すと、仔犬は先刻(さつき)の馴染だと知つた様子で、車やの足下を離れてよろけながら驅けて來た。雨に濡れた冷たさにぶるぶる震へてゐるのが、ひとしほ哀れだつた。

「ね、いゝ犬でしよ、こんなのは狩につれてつたつて働きますぜ。」

　車やも梶棒をおろして、しやがんだ。

「けど牝なんだもの。」

自分は車やがあんまり熱心に勸めるので、のつぴきならないはめに陷りさうなのを恐れてゐた。
「なあに牝の方が狩犬にも番犬にもいゝんですよ。おまけに此の位の犬なら、いゝ牡をかけて御覽なさい。素晴らしい子供が生れますぜ。ね、此の耳がいゝや。」
仔犬を兩手で抱上げて、柔かい耳を手の平にのせて見た。自分にはその耳の根元の少し持上り氣味なのがいけない、純粹のポインタアなら、もつとぴつたりと兩頬に垂れ下つて居る筈だと思はれた。とはいへ柔和な仔犬の顏を見てゐると、欲しくて堪らなかつた。
「坊ちやん、拾つておやんなさいよ。」
充分未練があると見てとつて、車やは又勸めるのであつた。
「だけど牝なんだもの。」
自分は同じ事を繰返して立上つた。自分が拾つてやらないと、車やはさぞかし無慈悲な奴だと思ふだらうとは考へたが、愚圖々々して居ると如何しても車やに口說き落されてしまひさうなので、さげすんだ車やの眼つきを背中に感じながら、見切をつけて步き出した。逃げるやうに足早に坂の下口で一度振返つて見たら、車やも進んで如何するといふ氣も起さなかつたと見えて、人力車をひきながら、自分とは反對の方に遠ざかつて行つた。仔犬は途方に暮れた姿で、溝のふち

をうろついて居た。

うちに歸りつく迄、自分は犬の子を見捨てゝ來た事で氣が咎めて爲方が無かつた。母の顏を見ると直ぐに、いかに其の仔犬が可愛らしく、いかに捨てられて泣いて居る姿が哀れであるかを話し、若し牝犬でもいゝと許してくれるなら、これからもう一度綱坂の上まで行つて拾つて來ると云つた。最初は母も牝では後々子供を生んで處分に困るからいけないと云つて居たが、あんまり自分が熱心にせがむので、遂には拾つて來てもいいと許してくれた。

「けれども、もう誰か拾つて行つたかもしれないよ。」

と、何とかして思ひ止まらせようとする口ぶりを殘して居たが、自分はそんな事ではひるまなかつた。直ぐに又傘をさして、愈々降りまさる雨の往來に出た。

綱坂の下迄來ると、相變らず數限りも無い子蛙が、豆を撒くやうに飛んで居た。急な坂を上り切ると、或はもう誰かの手に救はれたか、それでないにしても何處か外の場所に迷つて行つたらうと思つて居た仔犬は、矢張り同じ所に、雨に濡れてきゆんきゆん泣いてゐた。東に行かうか西に行かうかと迷ひながら決しかねて居る姿で、往來をうろうろして居た。夕暮近くなつて、一層木立の蔭の暗くなつた中を、ちひさいものはわなわな震へながら、自分の姿を認めて、訴へるや

うな聲を張上げて泣く。自分はいきなり抱上げたが、なま溫かく柔かい體から水がしたゝり落ちる位じつとり濡れて居た。それでも構はずに片手で胸の處へ抱き、片手で傘をさして歩き出した。犬の體を汚してゐた泥土は、自分の胸をよごした。仔犬は人間の手に抱かれてすつかり安心したと見え、間も無く眼を閉ぢて眠つた。體の重みが片手にかゝるので、時々左から右へ、右から左へと替へて見たけれど、しまひにはやり切れなくなつて、傘をつぼめて腋の下にかゝへ、兩手で犬を抱いて、自分も頭から濡れて歸つた。哀れなものを救つたといふ喜びでいつぱいだつた。どうかしてあの老車夫にめぐりあひ、此の犬をつれて歩くところを見せてやり度かつた。

母を始めとしてうちの者も、牝犬だと云ふ事を恐れて居たが、仔犬を見るとみんな氣に入つてしまつた。乾いた布で濡れた體を拭き、柔かい敷藁の犬小舍に入れ、牛乳を飲ませてやると、一切の事を忘れて食器の中に體に比して大きい顏を突込んで、雫も餘さずなめてしまつたが、御腹がはるといゝ氣持になつて寢てしまつた。名前は此前のすぐれた犬の名をとつて二代目ヒロとした。ヒロは男の名だとは知つて居たけれど、ひたすら名犬にあやかれと念じてつけた。左程まさり劣りは無かつたが、リリよりもヒロの方が人氣があつたのである。

二代目ヒロは健康で、溫順だつた。大人になつてからは、子供時代よりも少々きりやうは落ち

たけれど、捨犬とは思はれない風姿を備へて居た。此の犬程いたづらをしず、又おちついた態度の犬を曾て見た事が無い。たゞ不思議にお産が下手だつた。

牝犬一疋しか居ないのだから、近所の首輪もはめて居ないやうなのら犬迄が、年中張りに來た。男親は知らないが、翌年姙娠して無事に四五疋生みはしたけれど、どうしたものか二三日目にみんな死んでしまつた。たぶん添乳の時に窒息させてしまつたものらしい。その翌年はどうしたものか、平生馴れてゐる小舍に生まず、緣の下の奥深くに生んだ。今度も相手はわからないが、生れたのは雜交の特徵であらう、種々雜多の奴がゐた。漸くいたづら氣が出て來る頃、母親の後にくつついて、ちよろちよろ庭に這ひ出しては、人を見ると素早く又緣の下に逃げ込んでしまふのが五疋ゐた。その中で、二疋はまるつきり取得が無かつたが、後の三疋の二つは、兎も角も母親の血統だとうなづけるもので、但し母親よりもつと雜種の度を強めたものだつた。もう一つ一番太くたくましいのは、母親とはまるつきり似もつかず、長い毛の縮れたセツタアと土佐犬の雜種のやうな、白に黑斑のものであつた。きりやうのよくない二疋は出入の商人が貰つて行き、一疋は自分の學校友達にやり、セツタアまがひのたくましいのは鎌倉の別莊の番犬とした。もう一疋黑斑の母親に似て稍細長く、胴のあたりはグレイハウンドの出來そこなひのやうなのをうちに殘

した。

つまりこれが後日ヒロの夫となり、十餘年偕老同穴の契を結んだのである。此の方の名も亦父にせがんでつけて貰つた。ヒロとリリ以來、吾々は父のさういふ方面の才能に信頼と尊敬を持つて居た。父も子供達が自分のつけた名前を無上に喜んだ事を知つて、今度も上機嫌で引受けてPine と命名した。松坂町の松からとつた洒落である。吾々は又感心して、得意になつてパインと呼んだ。父は少年時に學者たらんと志し、齋藤拙堂先生の門に入り、後には小野湖山先生について漢詩を學んだ事があつて、文學的素養は充分に持つて居た。實業家としてよりも、その肌合ひからいふと學者風だつた。犬の名を撰ぶ場合にも、文學的機智がひらめいたやうに思はれる。

父は自分の仕事と讀書以外には甚だ不精だつた。人と無駄口をきく事などは面倒で堪らないらしかつた。それよりも好きな西洋煙草をふかして、默然と端坐して居る方が心自ら樂しむ事だつた。さういふ性分だつたから、たまたま庭を散歩して居る時などに、ヒロやパインが踵にくつついて來ても、決して手を延ばして頭を撫でるやうな事はしなかつた。ひとつには持前の極端な潔癖が、獣に手を觸れる事を心地よしとさせなかつたのかもしれない。後年病氣をして、大好物の

酒を醫者に禁じられ、且運動を勸められた時、草花の種を買はせて自分で蒔く積りだつたが、どうしても素手で泥土をいぢる事が出來なかつたと見えて、ステツキの先で土をほじくりかへし、その上に種子を蒔きちらし、庭下駄を穿いたまゝの足で土をかぶせたばかりだつた。それ丈の事さへ長續きはしなかつた。

母はあらゆるものを無闇に愛した。人間禽獸虫魚草木、何に對してもおのれを空しくして可愛がつた。どんな犬でも、一番母の愛撫の手に眼を細くした。たまたま狂暴な犬があつても、母は平氣で手の平に食物をのせて與へた。こつちが心から可愛がつてやれば、狂犬でも喰ひつく筈が無いと確く信じてゐた。父には犬の良否はわかつたやうだが、母は絶對無差別だつた。どんなむく犬でも可愛がつた。殊にヒロのやうな、十數年ゐついた犬の如きは、我子のやうに可愛がつた。晩年愈々穩かになつたヒロが、老齢の爲めに體が重くなり、柔和な眼の光が佛のやうな姿に見せるのを、吾々は母に比べて、ヒロはお母さんによく似てゐるとからかつた。

ヒロは十數年番犬の役目を完全につとめて、明治四十三年老病を以て歿した。遺骸は芝白金志田町の松秀寺に葬られた。

ヒロが死んだ時は、パインも既に年をとつて居た。此の犬は母に似ず、おちつきの無いきゝわ

けの悪い犬だつた。とぼけたところは有つたが、人なつつこいところの無い、可愛氣の無い犬だつた。従而、母を除いては、誰も餘り可愛がらなかつた。もう一疋いゝ犬が欲しいとみんなが願つてゐた。

ところへ友人仙波均平さん（その當時は岡見均平さん）のうちのポインタアが子供を生んだから、一疋分けてもいゝと云ふので、早速貰ふ事にした。白金の仙波さんのうちに遊びに行くと、茶斑の牝のポインタアが、蜜蜂の箱の置いてある芝生に優美な姿を見せてゐたが、どうかあれに似たのであつてくれゝばいゝと念じてゐた。恰度七月の學期試驗の始まる頃、末の弟二人が、犬を包む爲めに風呂敷を持つて一緒に行つた。雨あがりの空氣の重たい日で、仙波さんの庭はしつとり濡れ、蜜蜂の巣を取巻いて、夏の花が咲揃つてゐた。

四疋生れた中で、牡はたつたこれひとつと云ふ母親似の濃くくすんだ茶の斑點のある可愛らしいのを貰つた。耳の長く垂れた、頭の重さうな仔犬を風呂敷にくるんで、弟二人がかはるがはる抱いて、町を歩くのが自慢になる程きりやうよしだつた。二代目のヒロなどよりは遙かに優良だつた。

幼稚舎に入つたばかりの弟の手には、仔犬でも重みがかかり過ぎる。命がけといふ形で胸にし

つかり抱いて行くと、もう一人も抱いて見度くて堪らなくなる。みちみち其處いらの犬と比較して充分得意だつた。うちの近く迄來ると、一番末の弟は、うちの者に注進する積りで、いつさんにかけ出した。

かねて綺麗に掃除してあつた大きな犬小舍に、仔犬は見知らぬ國に來た怖れで震へてゐたが、集つて來たうち中の者は、いゝ犬だいゝ犬だと口々にほめたゝへ、御使に行つた二人の弟は、自分達の手柄のやうに鼻を高くした。パインは年をとつてゐる癖に、新來の仔犬がちやほやされるのを見て嫉妬を起し、頻に鼻を鳴らして威嚇した。

ほの青き桐の反射の漂へる皿のミルクを飲める犬の子

貰はれし仔犬はあはれ身に廣き小舍の寢藁によもすがら啼く

老犬が鼻を鳴らしていさゝかの食を爭ふ事のあはれさ

その頃の自分の手帳にはこんな歌が書きとめてある。

仔犬の名前を何としようかといふのが一家の問題になつた。ちひさい弟は幼稚舍で習つたのか、英語かるたで覺えたのか、岡見さんから貰つたのだからウルフ(狼)がいゝと主張したが、折角の洒落も呼びにくいと云ふ理由で否決された。岡見の岡をとつてヒルがいゝといふ者もあつたが、

蛭を連想するからいけないと云ふ反對が出た。結局三代目のヒロを名のる事になつた。

心配したのは夜だつた。母の乳房に別れた仔犬は夜一夜泣く事だらうと思つた。兎に角犬小舎から出られないやうに板で圍つて自分も寢たが、折々二聲三聲悲し氣に泣いたばかりで存外おとなしかつたが、何の物音もしないと、若しか逃げ出したのではあるまいかと心配になつて、手燭を持つて庭に出た事も數度に及んだ。

曉方床の中で目が覺めると、犬の事が心配なので直ぐ起きてしまつた。未だ誰も起きない時刻だつた。小雨の降る庭に出て、犬小舍に行つて見ると、どうしたのか仔犬の姿が見えない。どうしてこんな隙間から逃げたらうかと思ひながら、家の廻を幾度も探し廻つたが見つからない。門前に出ても影も見えない。名を呼んだり、口笛を吹いたり小一時間もかゝつて愈々遠くに逃げてしまつたか、又はむく犬に殺されたかとがつかりして佇んでゐると、思ひもかけない緣の下からちよろちよろかけ出して來た。

しかし此の犬は約一箇月後、自分が鎌倉へ行つてゐる留守に行衞不明になつて、それつきり再び姿を見せなかつた。きりやうがよかつたから、誘拐されたものであらう。

その後自分は長い間父母の家を離れた。その間にパインは死んだが、犬きちがひの弟は次から

次といろんな犬を飼つた。飼育の方法も上手になり、昔は他所から拾つて來たり、くれる人があれば貰ふといふ態度だつたのが、進んで獵犬商會から買求めて來るやうにもなつた。土佐犬もゐた。四肢の短い鼬のやうな格好のダツチスハンドもゐた。耳の長いビイグルもゐた。北京犬もゐた。神經質なフオツクステリアもゐた。今はブルドツクとグリフオンとコリイが居る。

自分も家を持つたら、いゝ犬を飼ひませうと常々思つてゐたので、大正十一年に青山南町二丁目に住んでゐる時、弟の世話で、慶應義塾の柔道師範飯塚先生のところで生れた獨逸ポインタアを貰つてウイスキイと名づけたが、うちに連れて來た時既に病氣で、青山七丁目の犬猫病院でみまかつた。

翌年勤先の同僚岩本さんといふ動物きちがひで、且其道の達人が、愛蘭セツタアを牝牡くれた。少し外の種類の血もまじつてゐるといふ事だつたが、吾々の家にはもつたいない位の犬だつた。二疋とも飴色で、牡のウイスキイは稍毛深く、牝のデンは御腹の邊が少し白かつた。長い間病氣で家内は寢てゐたので、毎朝毎夕の散歩には自分が連れて出た。二條の鎖を引張つて、沼澤地方の銃獵に適するといふ此種の犬の特徴か、匍匐するやうな形で土の匂を嗅ぎながら、青山墓地で遊んだ。近所の子供は、まさかにウイスキイといふ名だとは思ひもかけないので、吾々がウイス

と略して呼ぶのをきゝ囓り、エスエスと呼んでゐた。しかし此の二疋も、長雨の頃に腸を患ひ、近所の病院に入院し、院長は大丈夫受合つたと云つたが、次第々々に痩衰へて死んでしまつた。

あんまり度々の失敗で、他所から貰ふと申譯の無い心持に惱まされるから、少し財政にゆとりが出來たら、手頃の奴を買ひませうと思つてゐた。恰度大地震の後で、世の中は物騒になり、人の心は荒み、吾々の心持には寂寞の陰影が深くなつたのをまぎらす爲め、夜番の爲めに毎晩泊りに來て吳れた犬きちがひの弟を顧問として、英吉利ポインタアの綺麗なのを買ひ、三代目ウイスキイを名のらせた。その時は旣に麴町に越してゐて、荒れてはゐても廣い庭があつたから、犬の運動には都合がよかつた。妙に片意地な、人になつかない性質ではあつたが、何しろきりやうには素晴らしくいゝので、時には革紐をつけて往來にも引張つて出たが、道ゆく人は足をとめてほめた。それですつかりいゝ氣持になり、同じ時に同じ腹から生れた、誰が見ても同じ形と色を備へた牝を、餘裕のない癖に又買つて、これを二代目のヂンにした。

だが何といふなさけない事であらう、弟の外に勤先の同僚で、どんな犬とも親類づきあひをして居るやうな高倉さんの懇切叮嚀な注意を受けてゐたにも拘らず、おしつまつた年の暮に、ディステンパアにかゝつて、市ケ谷の犬猫病院で二疋とも死んでしまつた。院長さんの妹だといふ美

しい方が、只今危篤ですから死目に逢ふやうにと驅けて知らせに來て下さつたので、あわてゝ後からついて行つたが、哀れなる仔犬は既に事切れてつめたくなつてゐた。家内は唇の色も失つて、泣き出しさうな顏をしてゐた。

「しかたがないよ、しかたがないよ。」

院長さんや御令妹になぐさめられて、自分達は暗い氣持で家に歸つた。

人間の根性のとげとげしさに、世の中の寂寞を深く想ふ自分は、眞心を以て主人につかへる犬の心を愛する。恐らく犬は動物の中で、最もデリケエトな心を持ち、喜怒哀樂を純情をもつて表すものであらう。怒る時は勇敢に咆哮し、喜ぶ時は尻尾の先迄表情を示して僞り無き眞情をあらはし、あやまちを犯して叱咤されゝば、忽ち悔いて地に匍匐する。人間に親昵する情の深い事は、一他の動物中比ぶ可きものを見出さない。己を愛する主人の命に従ふ事を最上の幸福とし、主人の爲めには全身を捧げて顧みず、假令(たとひ)讎怨は忘るゝ事あるも恩愛は決して忘れない。正直で且責任觀念が強く、苟(かりそめ)にも卑劣な根性を持つてゐない。

犬よ犬よ、健かに我家に育ち、自分達と生涯を共にしておくれ。(大正十三年九月二十四日)

——「三田文學」大正十三年十月號

倫敦時代の郡虎彦君

郡虎彦君が死んだ。詳しい事はわからないが、以前から惡かつた胸の病氣を養つてゐた瑞西で死んだらしい。年は未だ若く、大きな野心を持つて居た人である。

私が郡君と親しくつきあつたのは、大正三年の秋から四年の年(とし)の暮迄で、卽ち彼が認められる前の倫敦時代である。勿論其前から、互に顏は見知つて居たが、口をきいた事は一度も無かつた。寧ろ御互に、いやな奴だと思ひ合つてゐたかもしれない。

それが果して郡君の公にした第一作かどうかは知らないが、たしか明治四十四年頃であらう、「太陽」の懸賞に萱野二十一といふ筆名で應募して、內田魯庵氏に選ばれた「松山一家」と云ふ小説があつた。その小說を、私は今朧氣にしか記憶してゐないが、當時としては著しく外國かぶれのしたものだつたと思ふ。作品の出來榮(できばえ)よりも、作者の年齡が僅かに二十一才だといふ事で、驚き

もし、羨みもした。恰も久保田万太郎氏の「朝顔」につゞいて、私の處女作「山の手の子」が「三田文學」に出た時代だつた。吾々の連中も、御手々を膝に置いて澄ましては居られない心持に驅られて居た。自分の前途に不安と希望を持ちながら、仲間を集めて歩き廻つた。カフエ・プランタンだとか鴻の巣だとかいふうちの出來たてゞ、藝術家や藝術家がつたのが年中とぐろを巻いて居たが、吾々も怖々ながら、そんなところに足を踏入れるのを得意にして居た。行くと必ず萱野二十一を見出した。まるまると肥つた小男で、頭髪をてかてか光らせ、桃色のクリームで頬邊を染め、ボンボンのやうな顔つきで、新型の派手な好みの洋服に山高帽子といふ姿が、今になつて考へると滑稽だが、當時は眞當面に氣障だと思つた。一體に芝居氣に乏しく、人目に立つ事をいやがる三田の氣風から、吾々はそゞろに輕蔑の念を催したものであつた。

あんまり度々顔が合ふので、吾々の仲間の中からも口をきく者も出て來た。わざと醉拂つたふりをして、貴公子然と氣取つて居る相手を、困らせた者もあつたやうだ。しかし、氣心の知れない人と氣輕に話の出來ない私は、その頃は遂に一度も口をきかなかつた。

當時吾々は、慶應義塾で永年教授を勤めたヴイツカース先生の住宅の後の文科教室の二階を、倶樂部のやうにして集まつて居た。階下の教員食堂の賄をしてゐる大和軒といふ西洋料理屋が、

こつそり融通をきかしてくれる一品辨當や、ライスカレーを喰べて、朝から晩迄無駄に時間を費して居た。
或時カフヱで郡君にあつた吾々の連中の一人が、右の倶樂部に遊びに來ないかと誘つて、
「ハム・エッグスと紅茶位はありますよ。」
と云つたところ、
「まるで朝飯のやうですねえ。」
と向うは笑つたといふ。此の話は、如何に郡君が世間並の書生と違つたハイカラで、且氣障であるかといふ例證として、當分の間度々話材となつた。
四十四年八月の「三田文學」には「父と母」といふ一幕物を發表し、四十五年の四月號には「道成寺」が出た。これが自由劇場第六回試演の際舞臺に上つたので、萱野二十一の名は一層廣く文壇に知られるやうになつた。郡君の最も得意の時代だつたであらう。間も無く彼は歐羅巴に行つた。
私が亞米利加に行つたのも同じ頃である。二年間其處で暮らして、愈々英吉利へ渡らうとする時に戰爭が始まつた。獨逸にゐた澤木梢君小泉信三君などが無事に海峽を越えて倫敦に着いたといふ報知を受けたので、飛行船襲撃の危險と、海上の危險とをおもひやつて人々が引止めたにも

拘らず、大正三年の秋九月紐育を立つた。

倫敦では、澤木小泉兩君が萬事案内役だつた。みんな方角の違ふところに住んでゐたので、時間と場所を極めては落合つた。澤木君と二人の時は、オスカア・ワイルドが胸に向日葵の花をさし、異様な服装で、大きな腹の中に無量にウイスキイ・ソウダを流し込んだといふカフエ・ロオヤルが選ばれ、小泉君の時は、烏龍茶を賣る茶店が多く選ばれた。倫敦に着いて三日目に、初めて其の茶店に連れて行かれた時、偶然郡君と生田葵山氏と山本鼎氏とにあつた。澤木君の紹介で、久しくお互に顔は知りながら口をきかなかつた郡君と、初對面の挨拶をした。

その後、烏龍茶店に行くと、何時も必ず郡君が來て居た。大概一人の事は少く、誰かしら連があつたが、多くはダンスを研究してゐると稱する伊藤道郎が一緒だつた。伊藤は子供の頃慶應義塾の普通部にゐて、極めて臆面の無い少年だつたから、上級生の私も知つてゐた。その伊藤を郡君は道具にして居た。

烏龍茶店には、日本娘が五人ばかりゐた。最初、その監督としてついて居たのは三木竹二氏の未亡人眞如女史だつたさうだが、永續きしないで歸つてしまつたとかいふ事で、吾々の時代には、別の年增がゐた。此の人の事を、吾々は蔭で監督々々と呼んでゐた。

不愉快なのは、その日本娘はお茶のお給仕をする役目なのだが、決して日本人の卓子（テーブル）には近寄らせない店則で、西洋人のお客だと、紫矢がすりの着物に唐縮緬の紅い帯を御太鼓に結んだのが、草履をぱたぱたいはせて働く。日本人のお客には、英吉利娘がお給仕をする仕組なのだ。いふ迄も無く、日本人同志だと、間違が起り易いといふ支配人の意見なのである。人を馬鹿にするなといひ度いところだが、我が郡虎彦君は、此の日本娘の一人におもひを寄せて、毎日々々通つて居たのである。しかし、何分日本人の御給仕はしない定めなのだから、口をきく機會が無い。從て、一人で行つた場合には、到底所在無さに堪へられなくなる。是非とも相手が欲しいわけで、即ち伊藤道郎が其選に當つたのである。

最初はめいめい別の方角に住んでゐたが、大正四年の春には、三邊金藏君の見附けた市中の下宿屋に、澤木君も私も、後には小泉君も小林澄兄君も宿をとつた。圖書館へ通ふのに五分とかゝらない位置なのがたゞ一つの取得で、外には何もほめる點の無い冷酷な下宿屋だつた。此處には郡君もよく遊びに來た。澤木君と三人で、骨牌（トランプ）をするのである。

此の頃の郡君は、全く一日を暮し兼ねてゐたやうである。夏になつて、澤木君が伊太利の旅に立つてしまふと、外には話相手が無いので、のべつに私の下宿をたづねて來た。二人とも段々氣

心がわかつたので、互の我儘を許してつきあへるやうになつた。ひたぶるに氣障な奴だと思つてゐたけれど、話して見ると、存外無邪氣だつた。私は明らさまに、その事を彼に話した。郡君は、多くの人がさう思ふやうに、私をひどくつきあひにくい人間と考へて居たさうである。

彼は引續いて烏龍茶店に通つて、まゝならぬ戀に惱んでゐた。伊藤道郎のかはりに、私を誘ふ事もあつたが、酒の飲めないうちなので、私はなかなか道具には使はれなかつた。

「烏龍茶だけは御免だぜ。」

散歩して少し疲れを感じながら、どつちかゞ休息しようと切出すならひを、先づ先手を打つてやると、彼は獨特のほがらかな聲で笑つて、默つてカフヱ・ロオヤルについて來た。しかしいつたん腰を下すと、話は必ず烏龍茶の日本娘の事だつた。

その娘さんは、ほんとに綺麗な、可愛らしい人だつた。顏色が蒼白く冴えないのと、眼がうるんでゐるので、どつちかといへば寂しい方だつた。そんな可愛らしい人を、日本、獨逸、佛蘭西――到る所であらゆる戀愛をもてあそんで來た、維納の詩人の作中にでも出て來さうな男の手に渡すのは無慚過ぎると、私は屢々彼にからかつたが、心の中でも、眞實その娘さんの無事を祈つてゐた。

郡君の話では、自分はその清淨な少女によつて救はれ、淸められた魂をもつて、豫々自分がこころざすところの、世界の文學史上に一大記念塔を建設する仕事にとりかゝるのだと云ふのであつた。詩人の爲めに處女を犧牲に捧げなければならないやうな話である。非常に獨斷的で、氣の弱い相手だと、どうしてもうなづかないではゐられない情熱をもつた郡君の話振ではあるが、どうも根ざすところは利己的な詩人の空想としか思はれなかつた。

其の頃、殆ど每日郡君は私の顏を見に來た。下宿に來る事もある。私が圖書館の歸りに必ず立寄るカフヱ・ロオヤルに來る事もある。電報を打つて來て、さも急用がありさうなので行つて見ると、何の用事も無く、寂しさに堪へられずに呼んだのだと云ふやうな事もあつた。しめつぽい英吉利の秋の郊外の、落葉のかさこそ風に舞ふ、しき石の上を踏んで行つた心持は、今でもなつかしく思ひ出す事がある。郡君は、見かけに寄らない寂しがりやだつた。

玄關の呼鈴を押すと、獨特の大きな足音をさせて出て來て、大變なつかしさうに握手する。性分として、私は日本人同志握手するのは氣羞しかつた。最初は遠慮して握りかへしてゐたが、しまひにはとても我慢が出來なくなつて、握手はよさうと申出た。郡君は私のそんな性分を、腹をかゝへて笑つた。

郡君は語學の天才で、ろくに習ひもしないらしい獨逸語も佛蘭西語も、日常の會話位は器用に喋るらしく、殊に英語には大分自信を持つて居た。それにひきかへ、私は語學の面白味を感ぜず、又面白いと思はない事にはちつとも精を出さない性質なので、郡君の宿の主婦などゝ話をするのは眞平だつた。それで、郡君の宿の客間の扉を閉ぢて、二人きりで骨牌（トランプ）をした。プラス・マイナスといふ最も通俗なやつだ。一體私は勝負事には相當強い方で、就中骨牌には自信があつた。プラス・マイナスを二人差向ひでやるのなら、大概の人に負けた事が無い。

「僕はこいつなら誰にも負けないんだ。」

といふと、

「僕もこいつ丈は負けた事が無いんだ。」

と郡君も云つた。晝飯を喰べて直ぐ出かけて、夜の更ける迄二人つきりで勝敗を爭ふのだつた。五時の御茶を晩飯のかはりにする事もあつた。

「少し休まう。」

と云つて私が長椅子に寝ころがると、郡君は洋琴（ピヤノ）にむかつて、唱ひながら弾いた。何事にも自信の強い人だつたが、聲樂にも充分自信を持つてゐた。

その家には子供が無くて、愛耳蘭テリアの年をとつたのと、純白の猫が居た。私は生れつき何よりも猫が嫌ひなので、こいつは絶對に室に侵入する事を禁じた。たまたま扉をあけたてする時に忍込んだのを見て血相變へる私の極度の敵意を、郡君はひどく面白がつてゐたが、眞劍にいやがるのだとわかつたので、しまひには私が遊びに行く時は、此の猫を小部屋に監禁してくれた。犬は私も好きだつたけれど、郡君も餘程好きらしかつた。膝の上に乘せて頰邊を擦りつけたり、自分の飲みかけの紅茶をそのまゝ飲ませたりした。私はそれにも屢々抗議を申込んだ。いくら犬が好きでも、私の潔癖は、ひとつ皿の物をわけて喰ふ事を許さなかつたのである。

潔癖といへば、郡君は頗つきの御洒落だつたけれど、一面には甚だ潔癖でなかつた。頭の髪に油をこつてり塗つて叮嚀に分け、頰邊には桃色のクリームを塗り、着物も相當氣をつけて居たが、入浴嫌で一箇月も體を洗はず、從而黒羅紗の背廣の背中や肩に、夥しく雲脂をくつつけてゐるやうな事が多かつた。事毎にあらはれる私の潔癖も、彼のほがらかな笑の種となつた。

圖書館に通ふ外に、私は芝居と音樂會にせつせと通つた。郡君は烏龍茶店いつてんばりだつたが、しまひには寂しくて堪らないものだから、私にくつついて方々歩くやうになつた。九月八日の夜も、二人は音樂會に出かけた。第一部の演奏會が濟んで、暫時休憩の後、第二部に移る番組

だつたが、どうしたのかその日はひどく疲れてゐて、靜かに音樂を聽いてゐる心持になれなかつた。私は郡君を促して場外に出て、近くのカフエで休息した。例によつて文學を談じ、又郡君の烏龍茶店の戀をきかされて長々と其處に停滯してゐた。

恰度十時半頃であつたらう、俄に砲聲が聞えた。獨逸のツエペリンが來るといふ噂のしきりだつた頃だから、

「愈々來たかな。」

などゝ冗談を云つてゐたが、次第に砲聲は高く、且連續して聞え、間もなくカフエの階上階下、一齊に騷然として、その中に鋭い女の叫聲がまじつた。窓かけを押分けて、冷い硝子に額をつけて見ると、降るやうな星空に探海燈の光が未來派の畫のやうに交錯してゐた。客の中には、その光に照らされた敵の飛行船を認めたといひ出す者もあつた。

爆彈が落ちたといふ噂が忽ち廣まつた。同時に町の眞中に火の手が上つた。恐怖と昂奮で泣出した客もあつた。いくさだといふのに、呑氣らしく音樂會に行つたり、カフエに入込んだりしてゐるだらけた氣分が緊張して、痛烈な光景は寧ろ氣持がよかつた。二人はカフエの戸のしまる迄、其處の二階で、物凄い有樣を見てゐた。

爆弾の爲めに火事となつた場所は、私の宿の近くだつた。ただ一人歸りの遲い私を、人々は心配してゐた。

その緊張した心持は決して惡いもので無かつた。郡君は、もう一度あゝいふ事があつて、しかも未だ烏龍茶店の店をしまはない時間だと、地震加藤のやうに馳けつけてやるのだがなあと、屢々繰返してゐた。

十月のなかばには小泉氏も巴里に行つてしまつて、私も寂しくなつた。恰も風邪で寢込んだ郡君から、毎日電報を打つて寄越すので、遙々ウイレスデン・グリーン迄見舞に行つた。床の中に寢て居る彼を相手に、矢張り骨牌をして暮らした。

これよりさき、いろんな身の上話も聞いた。烏龍茶店の娘の事も聞いた。矢張りその娘の事はおもひつゞけてゐて、正式に結婚をするのだと云つてゐた。郡君のおとつさんといふ人は、ほんとは養父なのださうだが、歐洲航路の初めて開けた時代の船長として有名な人で、昔かたぎの一徹者だといふ事だつた。須磨だか明石だかに住んでゐて、天子樣が御通過になる時は、それが夜中だらうが、寒中だらうが、風雨の日であらうが頓着無く、禮服を身につけて沿道に出て奉迎し、息子の虎彦君が家にゐる時なら、無理にも引連れて共々頭を下げさせるといふ質(たち)の人ださうであ

る。いかにして此のおとつさんに結婚の許可を得る事が出來るかといふ難問題も、久しく郡君を惱ましたらしい。

ところが、郡君の爲めに大變都合のいゝ人があらはれた。それはその時の歐洲航路の船長である。此の人の船で、烏龍茶店の日本娘達は、遙々運ばれて來たので、船長さん船長さんと叔父さんのやうになついて居る。一方には郡君のおとつさんに賴まれた品などを持つて、船長さんは郡君をもたづねて來る。遂に此の人をくさびとして、長い間口をきく機會もなく、たゞお茶を飮んで辛抱して居た郡君も、日本娘と言葉をかはす幸ひを得たのであつた。先づ船長さんの紹介で、日本娘を監督してゐる年增とちかづきになり、船長さんにつれられて、娘達の寄宿してゐる家にも押かけた。もともと何事にも自信が強く、殊に自分の容貌には特別に信賴してゐたから、事が此處迄來ると、あとは存外押の一手で、土俵際迄詰めたらしい。

彼は有頂天だつた。當の娘に手紙を渡し、やがて先方から返事を得た事、監督が氣の利いたをばさんの役を買つて出た事、外の娘達が燒餠を起して大騷ぎだといふ事などを、目藥をさしながら幾度繰返したかわからない。

玆に目藥といふのは、郡君は常にポケツトに目藥を持つてゐて、人と話をしながら、頻りに之

を目にさすのである。

「ほんとに目が悪いのかしら、それもお洒落の一手に過ぎないのぢやないか。」

と私がいふと、

「さうかもしれないなあ。」

と答へて笑つた。

島崎藤村先生の「新生」の中に、斯ういふ一節がある、

……きまりで岸本の胸に浮んで來る年若な留學生があつた。ギヤランといふ言葉をそのまゝ宛嵌め得るやうな、巴里に滯在中も黄色い皮の手套を集めて居たことがまだ岸本には忘れられずにある青年の紳士らしい風采をしたその留學生……

これを郡君だと云つても差支へないであらう。

……況してその年若な留學生が自己の美貌と才能とを飾るかのやうにその話を始めた時には、彼は獨りで激しい心の苦痛を感ぜずには居られなかつた。何故、不德はある人に取つて寧ろ私かなる誇りであつて、自分に取つて斯樣な苦惱の種であるのたらう、と嘆いたことさへあつた。

流石に島崎先生の觀察の鋭さと、省察の深さがうかゞはれる。

それとは勿論場合が違ふのだけれど、鳥龍茶店の娘の話をする時の郡君は、正に自己の美貌と才能とを飾るかのやうにその話をした。しまひには、監督の年增も亦、自分に御意があるのだときめて居た。

すつかり昂奮しきつた郡君は、引つゞいて私の宿をおとづれて來ては、それからそれと自分の戀の經路と、將來の方針を話した。その外には、矢張り文學を論じあつた。ひと頃はダヌンチオを好み、「道成寺」を書いた頃は、その影響をうけてレトリツクの面白さに凝つたが、今はもうそんな事には興味が無い、あらゆる人事を眞正面から觀、且大なる構想、精緻なる布置に於て並ぶ者のない沙翁こそ、吾々が曾て有した第一の人間であると云つてゐた。小悧巧に月々幾つとなく小說をつくる日本の文人を罵る事も、極めて雄大な言葉を盡くして繰返した。彼の口からほめ言葉を貰つたのは、戲曲演出者としての小山內先生、獨創的ヒユモリストとしての武者小路實篤氏位のものであつた。その外には、その頃の「中央公論」に出た野上彌生女史の「二頭の子馬」――此の題は少々違ふかもしれません。違つて居ましたら後日訂正致します。――といふ小說を激稱してゐた。此の作は、私も大變感心して讀んだ。その他の人はみんないけないといつて差支ないで

あらう。私の如きは、殆ど文筆の人間としては、郡君の眼中に無かつたやうである。
ミケランヂエロ、シエクスピアと共に、郡君が口を極めて讃美したのは、常陸山谷右衛門である。雄大無比の彼の取口に感心してゐたばかりで無く、その人物に敬服するのだと云つて居た。政治家にも藝術家にも、我國には未だ常陸山程の人間は無いと云つた。自分の話に愈々昂奮して、
「藝術の野に常陸山出でよ。」
などと叫んで、大いに笑つた。
郡君は女性的の感じもする、まるみのあるちひさい體だつたが、自分では角力が強いと云つてゐた。
「一番勝負なら大概の奴に負けない自信がある。」
と云つた。いくら手取にしても、あんな貧弱な體格では、唯一突きだらうと思つて、
「ようし、それぢやあ一番やつて見ようか。」
と私も郡君なら必ず勝てるといふ確信をもつて應戰しようとしたが、結局之は冗談でおしまひになつて、遂に彼が果して角力が強かつたかどうかは知らずに濟んだ。
私は元來金にしまりが無く、月の初めにまとまつて學資が屆くと、最初の二週間位に豪遊して

しまつて下半月にひつぱくするやうな遣方だつた。まるつきり金がなくなつて、食事をする事が出來なくなり、小泉君の行くところにくつついて行つて、喰べさして貰つた事もあつた。郡君も亦まるつきりだらしが無かつた。よく私に借りに來た。こつちも困つてゐるので斷る事もあつたが、たまたま貸してやると、どういふ風にして手に入れるものか、久しからずして返しに來る。さうかと思ふと又數日たつて借りに來るといふ有樣だつた。

テームス河の向岸のヴイクトリア・ホオルといふので沙翁物をしきりにやつてゐたが、「夏の夜の夢」を二人で見に行つた時、踊子の一人の未だ十三四らしいのが、すぐれて可愛らしく、手足の一擧一動に何ともいへない柔かいしなのあるのに感心して、チヨコレエトの大箱を買つて贈り度いと云つたが、二人とも懷中無一物で、ひどく殘念がつた事もあつた。此の踊子は良家の御孃さんで、後日郡君が倫敦で名前を知られるやうになつてから、ちかづきになつて一緒にチヨコレエトを喰べたさうである。私を羨しがらせようとする郡君の手紙は、大層面白いものだつた。

十二月の中旬に、私は巴里へ向けて倫敦を去る事になつた。郡君はしきりに引止めてくれたけれど、私としては歸國の日も迫つて來たので、いくら引止められても止つてはゐられなかつた。

その頃は郡君は既に健康を害してゐたし、又金が無くて困つてゐた。寄席に出て、でたらめの

踊をおどる伊藤道郎の收入を羨んでゐた事もあつた位である。しかし、どういふ傳手を求めたのか、或る金持の女とちかづきになつて、その家に置いて貰つて、專心戲曲制作に努める事が出來るやうになるかもしれないといふ希望ももつてゐた。

又一方には、一時全く夢中になつてゐた烏龍茶店の娘を戀する心持に、たるみが來てゐた。郡君の解釋では、監督の自分に對する戀がつのつて來たので、その年增は娘に近づくのを邪魔するやうになり、又烏龍茶店の支配人も氣がついて水をさしたので、當の娘もいつたん此方に心が向きさうになつたのに、些か樣子が變つたといふのであつた。しかし私の見るところでは、何かしら自分の心に詩を描き、それを極度迄緊張させて、その緊張の中に日を送つてゐたのが、たまたま藝術愛護者の金持の婦人があらはれ、又倫敦の藝術家達とつきあふ機會が惠まれ始めたので、元來こゝろざしてゐた藝術慾が燃えると同時に、戀愛遊戲にあきて來たのだと思ふのである。私は彼の心に秋風の立つたのを祝した。

「來年中には吃度君を喜ばせるよ。」

と郡君は只管戲曲制作の希望ばかりを口にした。

さうして、ほんとにその金持の女の人の愛護の下に、彼は「王爭曲」を完成したのである。

翌年の夏迄巴里にゐて、私は八月のなかばに倫敦から出る船に乘つて日本へ歸つた。その時は是非とも倫敦であひ度いと云つて置いたのだつたが、郡君はパトロンの婦人と共に或海岸に行つてゐて歸つて來なかつた。金持の婦人はあらゆる藝術の愛好者で、その家には若い女の詩人もゐれば畫家もゐる。その女詩人が郡君の戲曲の英語を直してくれるのだといふ話だつた。

愈々私が出立する日に、郡君は又葉書を寄越した。

葉書有り難う。

實はやりかけて居た仕事ともかくも君が立たれるまでに一通はすまして謄寫版にした一つを御送りしようと思つて隨分急いだのですが一日ばかりのことで間に合はなくなりました。出來ただけとも思つたのですがやつぱりまとめてから上海あてゞ送りませう。船中で讀んで下さい。いろんな事をいふやうですが僕もやつぱり來年早々歸る事になるやうです。ともかく御機嫌よう。

なんだ、一度別れに倫敦迄出て來たつていゝぢやないかと、私は少なからず不平だつた。しかし、いろんな女の人に取卷かれて、日本の若き天才藝術家としてちやほやされてゐる郡君の事を考へると、そのすべての樣子が想像の繪となつて浮んで來た。何となく微笑を禁じ得ないものが

あつた。

「王爭曲」は上海では受取らなかつた。ずつと後に謄寫版刷のものを送られ、それを何處かの雜誌に出し、且市川左團次一座で上演してくれるやうに骨折つてくれといふ依頼をうけたが、私の力では如何とも出來なかつた。

大正九年に郡君が一寸歸國した時、東京で一番屡々あつたのは私だつたらう。倫敦で大いに認められて、空想好きの郡君は故國へ歸つた日の盛大なる歡迎をひどく期待してゐたらしかつたが、事實はそれに反したので、すつかり憤慨してしまつた。それに對して腹藏の無い意見を述べ、又「王爭曲」の出來榮にも忌憚の無い批評をした私も、たしかに彼を喜ばせなかつた。二日ばかりつづけて夜遲く迄つきあひ、更に日を期して逢ふ約束をしたにも拘らず、郡君はふと東京を去つて、やがて又倫敦に行つてしまつた。

それつきり私とは文通も無くなつた。今此の追憶の文を草しつゝ、私が最も明かにおもひ出すのは、郡虎彦君のほがらかな笑聲である。(大正十三年十一月二十七日)

――「三田文學」大正十三年十二月號

人眞似

ほんとの話か嘘の話か知らないが、はなした人はほんとだと云つた。

或人が並ならぬ苦心をして育てた九官鳥を、差迫る入用の爲めに人手に渡してしまつた。よくしこんだ鳥だつたから、多くの人間の言葉を、正しい發音で囀つたさうである。殊に飼主は江戸がつた人だつたので、「そいつあいけねえ」とか、「おらあ知らねえよ」とかいふやうな言葉をわざと覺えさせて、それが殊の外御愛嬌になつた。手放した人は、いつくしんだ鳥を忘れ無かつた。約一年たつて、九官鳥の品評會に行つて見た。自分のしこんだ奴ならば、一等賞は間違ひ無いのだがと、かへらぬ事を心に繰返して居たが、はからずも其處で曾て自分の育てた鳥にめぐりあつた。流石に此の鳥の言葉數の豐富なのには、集まつた愛鳥家も驚嘆したさうで、例の巻舌の「おらあしらねえよ」などは、滿場の樂しい笑聲の中に、幾度と無く繰返された。ところが此の鳥は、

むかしの主人の手を放れてから覺えた、更に手の込んだ藝當を、何よりも得意にしてゐるのであつた。それは流行唄のひとくさりをうたふのであるが、折角の藝ではあつたけれど、すつかり東北訛なのださうである。どんなうたをうたふのか聞漏したが、「さんざすぐれか、かや野の雨か」とか、「君と別れて、まちばら行けば」とか、「花の咲かない枯しゝき」とか、「シトトンシトトン」といふたぐひであらう。滿場の愛鳥家は、ひとしくこれを惜しんで、此の訛が無ければ、天下の名鳥だと異口同音に嘆じた。投票の結果、僅かにサシスセソの發音が正しくない爲め、第一席を他の鳥に讓つたのである。むかしの主人は腹立たしい程なさけなかつた。我慢が出來なくなつて、若しも自分に此の鳥を貸してくれたら、屹度サシスセソの發音を正しく直して見せると申出た。現在の持主は洒脱な人で、何のこだはりも無く、自分の失敗を笑つてのけて、ものはためしだから、むかしの主人の申出を承知した。十分自信を持つむかしの主人は、久しく行方の知れなかつた、我子にめぐりあつたやうな喜びで、九官鳥をあづかつて歸つた其日から、夢中になつて訛の匡正にとりかゝつた。しかし、いつたん覺え込んだものを忘れるのは難しいものと見えて、流石の名鳥も如何してもいふ事をきかない。全く新しい外の言葉ならば、いくらでも覺えるけれど、一度沁み込んだ訛の匡正は遂に成功しなかつた。

此の話をきいた時、座に居るものは一齊に九官鳥の間抜を笑つた。

「いくら悧巧でも鳥は鳥かな。」

などゝすまして葉巻の煙を吹く人の言葉にも、歴然たる九州訛はあつたが……

私は、この話をきいた時、ゆくりなくも、前夜讀んだ雜誌「文藝春秋」に載つてゐた一文のほんの僅かなる文句を思ひ出した。

赤門は友情、三田は師弟、早稻田は數で押す

といふのである。九官鳥の話とは、少々趣は違ふけれど、人眞似の哀れと可笑しさに於ては全く同一なので、はからず思ひ出したものであらう。

赤門は友情、三田は師弟云々といふ言葉は、「文藝春秋」の寄稿家の文中に見出すよりも、數箇月前に報知新聞の文藝欄に、加藤武雄氏の寄せた感想文中にあつた。それは、私が雜誌「隨筆」の大正十三年八月號に書いた「はじめて泉鏡花先生に見ゆるの記」「永井荷風先生招待會」「或日の小山内先生」を讀んだ事を最初に記し、三田は金力を背後にしよつてゐる爲めか、師弟卽ち縱の關係で、赤門は友情卽ち橫の關係だが、ひとり早稻田は數ばかり多くて、一致團結してゐないといふやうな意味のものであつた。加藤氏の用ゐた言葉をそのまゝに記憶して居ないが、大體間違ひ

はあるまいと思ふ。それを讀んだ時は、「何を出鱈目を云つてるんだ」と一笑に附したが、驚いた事には其後何かの新聞か雜誌で、赤門は友情、三田は師弟云々といふ文句を發見し、更に「文藝春秋」で、三度目の驚きを重ねたのである。

「隨筆」に寄せた私の文章は三つとも獨立のものであるが、何れも平生尊敬する文壇の先輩に對する思慕の一端を書きとめたものである。

未だ小學校に通つて居る頃から、私は泉先生の作品を愛誦した。著しく暗い心持に惱まされた時代にも、人間の情熱の詩を描く天才の藝術によつて生甲斐を感じ、救ひの道をひらかれた。從つて先生に對する私の尊敬と感謝とは、筆にも言葉にも盡くせないものである。殊に最近十年間、親しく先生の御宅にも出入し、日常生活に於ては、始めて所帶を持つた時にも並ならぬ御世話を頂き、毎度御菜の御裾分にもあづかつて居る。

けれども、先生と私との關係は、果して師弟の關係であらうか。尾崎紅葉先生と泉先生、或は小栗風葉、柳川春葉諸氏の關係は、まさしく師弟の關係である。幸田露伴先生と、米光關月、田村松魚諸氏の關係は、確かに師弟の關係であつた。けれども、泉先生と私との關係は、全然それとは違ふ。私が先生に教を受ける事は頗る多いが、それは日常おつきあひを願つて居るうちに自

ら學ぶところのもので、先生も亦取るに足りない私如きをさへ、友達としてつきあつて下さるので、決して弟子にのぞむ師匠の態度ではない。心持の上から、私は先生の弟子であると名のりをあげても差支ないが、それは餘りに芝居がかつた見榮に過ぎないであらう。

又、泉先生が三田の人で無い事は今更申すまでもないが、私以外の三田の人も、決して私と同じ態度をもつて先生を見ては居ない。もとより一切の偏見を捨てゝかゝれば、誰しも泉先生を吾々の時代の巨匠として尊敬しないでは居られないはずだから、所謂三田派の久保田君も宇野君も南部君も小島君も井汲君も水木君も其他の諸君も、先生の藝術を尊敬するには違ひ無いが、その中の多くの人は――もつとはつきりいへば久保田君以外の人は――平素親しいおつきあひの無い人ばかりである。どうしてそれが師弟の關係といへるだらう。

それならば永井荷風先生はどうであらう。明治大正文學史を胸に描く時、最も華々しい活動をした人の一人として、明瞭に先生の姿を思ひ浮べる。小島政二郎君の所謂自然派横紊時代に敢然として他になほ廣き藝術境のある事を力說し、豐麗極まり無き作品のうちに、犀利透徹せる社會批評を盛つて、吾々の生活を豐かにした功績は、他に比ぶ可き人を見出さない。文學史上の運動としては、外にも特筆すべきものは澤山あるが、永井先生の場合は、徹頭徹尾、集團の力を借り

ない一騎うちだつた點に於て類が無い。私は先生の作品に感服すると同時に、その人格を限り無く尊敬するものである。幸にも先生は、三田の文科の教授として數年間居られたので、當時理財科の生徒だつた私は、傍聽生として親しく先生の講義を拜聽した。「永井荷風先生招待會」の中に書いてある通り、私が小說を書く樣になつたのは、全く永井先生が三田に御出でになり、「三田文學」が日の前に出現したからである。此の意味に於て、私は先生の弟子だと云ふを憚らない。若しそれが師弟の關係と言ふ可きならば、夏目漱石先生とその敎を受けた赤門の人々、島村抱月氏と共の講義を聽いた早稻田の人々との間にも、師弟の關係はある。否々、關係はもつと深いものであらう。とりわけて三田は師弟といはる可き筋合では無い。殊に私よりも後に學校に學んだ人の多くは、不幸にして永井先生に親しく敎を受ける機會さへ持たなかつた。若しもほんとに永井先生が、師の弟子にのぞむ態度をもつて吾々を導いて下さつたなら、吾々の幸之に越した事は無かつたらうが、遺憾ながら先生は永く三田の山の上に止まらなかつた。

三田は師弟の關係だといふ言葉、文壇に於ける處世の型として見ても、永井先生と私並びに他の三田の諸君との間には、殆ど脈を引いて居ない。永井先生は黨同伐異を極端に嫌ふ方である。

小山内先生に對しても、私は限り無き感謝の念をいだいて居る。先生は我が劇壇の先驅者で、

所謂新しい芝居の運動は、先生の力によつて始めて實際上の効果を擧げたといふ可きで、今日いつぱし劇を論じ、脚本の制作に從ふ人の多くは、小山內先生の呼吸（いき）のかゝつた人間ばかりだと云つても差支ない。

先生も暫く三田の山の上で近代劇の講座を擔當された。久保田君も水木君も宇野君も三宅君も、其の他多くの人が直接教を受けた。併しながら先生は、決して三田派の統領では無い。「三田文學」との關係も、永井先生のやうに密接ではない。教授としても、外樣たる事を免れなかつた。何事にも拘泥しない先生の性質は、三田とか赤門とかいふ、狹い意味の言葉で呼ばる可き立場にはゐないのである。久保田君や私は、久保田君の所謂小山內黨の有力なるものであるかもしれないが、それでも師弟の關係と特に呼ぶ可き間柄であるかどうかは疑はしい。若し吾々が小山內先生の御弟子ならば、吉井勇氏も、長田秀雄氏も、久米正雄氏も、あまり違はない程度に於て、師弟の關係のある人と云はなければなるまい。ましてや吾々より若い三田の人々は、遙かに先生とは緣が遠くなつて居る。そこ迄ひつくるめて、師弟の關係を押廣めて行くならば、「新思潮」の人々も、師弟の關係にありと云はなければならない。早稻田の島村、相馬、中村の諸氏と、後進の人々の關係の如きは、更に遙かに密度の濃い師弟の關係にあるものと云はなければならない。

若しも三田は師弟の關係云々といふ言葉が、「隨筆」に載せた拙文を讀んでの思ひつきならば甚しい間違ひである。他に三田は師弟の關係といふ言葉のあてはまる事實があるだらうか。世間で所謂三田派といへば、久保田君と私を古參として、あとは南部、小島、宇野、三宅、井汲、水木其他の諸氏であるが、此の顏觸を見渡して誰が師匠で誰が弟子であるか、みんな一列に並んで勉強してゐるので、寧ろ加藤氏が謂ふ所の横の關係に在りどいはなければ當らない。

もつとはつきりといへば、私の如きは、友達同志集つて互に硏究しあふ事は別として、文壇處世術として、縱だらうが、横だらうが、政黨屋の心懸けるやうな關係などは大嫌ひだ。藝術に志す者は、只管忠實におのれ一個の道を拓いて進む可きだと思つて居る。

何時迄もくどくどとこんな事を云ふのも面白くない。加藤氏の不圖思ひ浮ぶがまゝに用ゐた言葉が當を得てゐなかつたとて、さしたる問題では無い。三田は師弟の關係だとさと笑つて濟む事である。

併し、此の不用意の言葉が、忽ち人眞似をする連中によつて、廣められるのは寒心に堪へ無い。平生、雜誌や新聞を餘り澤山は讀まない私の目にも、旣に上記の如く、一度ならず發見されたのだから、或はまだ外にも斯かる言葉を何等の反省も無く用ゐて居る人があるかもしれない。そし

て、東化訛を覺え込んだ九官鳥が、遂に正しからぬ發音を忘れる事が出來なかつたやうに、一度誤り傳へられた言葉が、存外根強く廣まつて、遂に消し難きに至らないとも限らないのである。些細な事のやうではあるが、後日の爲めに一言辯じて置き度い。（大正十三年十二月二十一日）

――「三田文學」大正十四年一月號

廉賣

世の中が不景氣で、品物が捌けないと、安樂隊入りの廉賣がさかんになる。文壇も亦行詰つたのであらうか、近頃頻りに廉賣的言説を聽く。

少くとも短篇小說では、歐羅巴の作家に比べて決して劣らないといふ、半分はびくついて居るやうな壯語は、屢々聽くところである。長篇小說ではとてもかなは無いと、最初から思ひ極めて居るところは殊勝だが、ほんとに心から、短篇ならば遜色は無いと確信して居るのであらうか。成る程、明治大正にわだつての勝れたる作家、例へば、一葉、鏡花、荷風、獨歩、藤村、秋聲、白鳥といふやうな人の作品ならば、何處の國に持つた行つても、第一流のものであらうが、さういふ擇ばれたる僅かの作家をとりたてゝ云ふので無く、漫然とひつくるめて、我國の短篇小說が歐羅巴の作家のそれた比して劣らないと云ふのは、果して正直な言葉であらうか。同じ重量の金

と銀との値打のやうにはつきりして居ない藝術批判の問題ではあるし、かういふ場合には幸な國語の相違をいゝことにして、家の中の蛤になつて居るのでは無いだらうか。乍殘念私は首肯出來ないのである。

一々これを比較する事を避けて、先づ第一に、彼の地の作家に比して、我國の作家の著しく劣るのは、社會を觀る眼、人生を批判する頭腦の働きの弱い事である。おしなべて、視野が狹い。知識は淺く、思考力は根強くない。

短篇小說では負けないと豪語する作家、批評家は、果して歐羅巴の作家の短篇小說の數々を讀んで、すぐれた作品を見出さなかつたのであらうか。私も拙いながらに小說作家として、不斷の勉強を續けて居るものである。西洋風の小說作法が我國に移植されて、未だ半世紀にもならないのに、上記の如き立派な作家の出現を見、又吾々と同年配の人々の中にも潤一郎、直哉、實篤、万太郎、惇、寬、龍之介、正雄、春夫の諸氏の如きを有する事を誇り度いのであるが、然りとて根柢の無い壯語を弄んで、安價なる滿足に醉つてはならないと思ふのである。無批判無反省なる野黨の陣笠代議士の如き、或は緣日のバナナ屋の如き言葉は愼しむ可きである。

イブセンは古い、チエホフも古い、ハウプトマンやシユニツツレルは二流作家だ、といふ樣な

勇ましい言葉が飛びちがふ眞中を突きぬけて、そんなのよりも、我が菊池寛氏や、山本有三氏の方か新しいとか、勝れてゐるとかいふやうな言葉——多少いひ廻しは違ふかもしれないが、少くとも之に類する言葉——も通用するやうである。

菊池山本兩氏は、小山内薫、吉井勇、久保田万太郎、岡鬼太郎、岡本綺堂の諸氏と共に、疑ひも無く當今有數の戲曲作家に違ひ無いが、それはそれとして、イブセン、チエホフ、ハウプトマン、シユニツツレルなどを束にして、思想的にも技巧的にも、古いとか、つまらないとか云ひ切つて、涼しい顏をしてゐるのは不心得である。此の場合に、恐らくは下の如き間違があるのではないだらうか。

泰西諸國の近代劇が紹介されて以來、既に相當の年月がたつた。最初の中こそ、一作に觸れる毎に驚嘆してゐた者も、大體其の手法を會得してしまつたので、今日では左程珍奇には思はなくなつた。器用な人間ならば、イブセン張でも、メエテルリンク型でも、ショオ式でも、御望に任せて作り上げて見せ得るやうになつた。和洋折衷は最も樂な仕事である。恰も豚カツと米の飯を一皿に盛つたあいのこ辨當が、容易に世人の嗜好にかなつたやうな次第である。つまり、最初の驚嘆が度を外づれてゐて、まるで魔法の如くに考へてゐたものが、存外人間界の事だとわかつた

安心で氣がゆるみ、今度は品の良否を判別する氣力も失つてしまつた形である。總米松造りの文化住宅をもつて、西洋建築の範とするが如き心得である。

乍然、イブセン以來の近代劇の骨法を學び終つたといふ丈で安心したり、威張つたりしてはゐられない。ほんとに學び盡くしたかどうかも甚だ疑はしいが、先づ假にそれ丈は許すとしても、上記泰西の大戲曲家の如きを、我國に見る事が出來るだらうか。イブセンの思想は、概念としては既に古いかもしれない。然しイブセンの尊いのは、その思想に眞劍の熱情を持ち、その技巧に內部から必然的に生れて來た、ぬきさしならぬ力強さのあるところである。その他の大戲曲家に於ても、程度の差こそあれ、何れも動かし難き量と質の結合を持ち、內容と技巧の一致を持つてゐる。人生をそのまゝに見せる大きさと深さがある。此の點に於て、吾々は到底及ばない。舞臺の上のからくりに於て、如何に器用になつても、それは眞に新しいとはいへない。先人の開拓した藝術境を、知識として學んでも、それを以て彼等を古いとは言へない。萬葉集の秀歌は、現代の摸倣の歌よりも新しいのである。

同じやうな事だが、もう一つ加へ度いのは、近頃小說の技巧の上手になつた事をしきりにほめ讚へる批評家がある。千葉龜雄氏の如きは、泉鏡花、永井荷風兩先生の名を擧げて、曾ては、勝

れたる技巧家と稱された兩氏の如きも、尙今の若い作家の進んだ技巧に比べると、比べ物にならないといふ意味の事さへ書いて居る。

近頃の小説家の技巧の上手になつた事は、私も認めるものであるが、それは一時代の多くの作家を一團として見る時の話で、現在の作家の誰が、泉永井兩先生をしのぐ程の勝れた技巧の持主であらう。泉永井兩先生の如きは、旣に一代の巨匠として、動かす可からざる地位をつくつて久しい方々である。著しい特色のある其の技巧も、吾々には永年の御馴染となつた。從つて近作を讀んでも、刺戟の強くない事は免れ無い。これは如何なる大作家にあつても當然の事で、例之(たとへば)モオパツサンの如き多種多様の技巧を盡した短篇小説を書いた作家と雖も、次々にその作品を讀む事五十六十、八十、百となれば、目新しさは自ら減少して來る。然し、それだからと云つて、直ちにその技巧を古いと云つて捨てる事は出來ない。

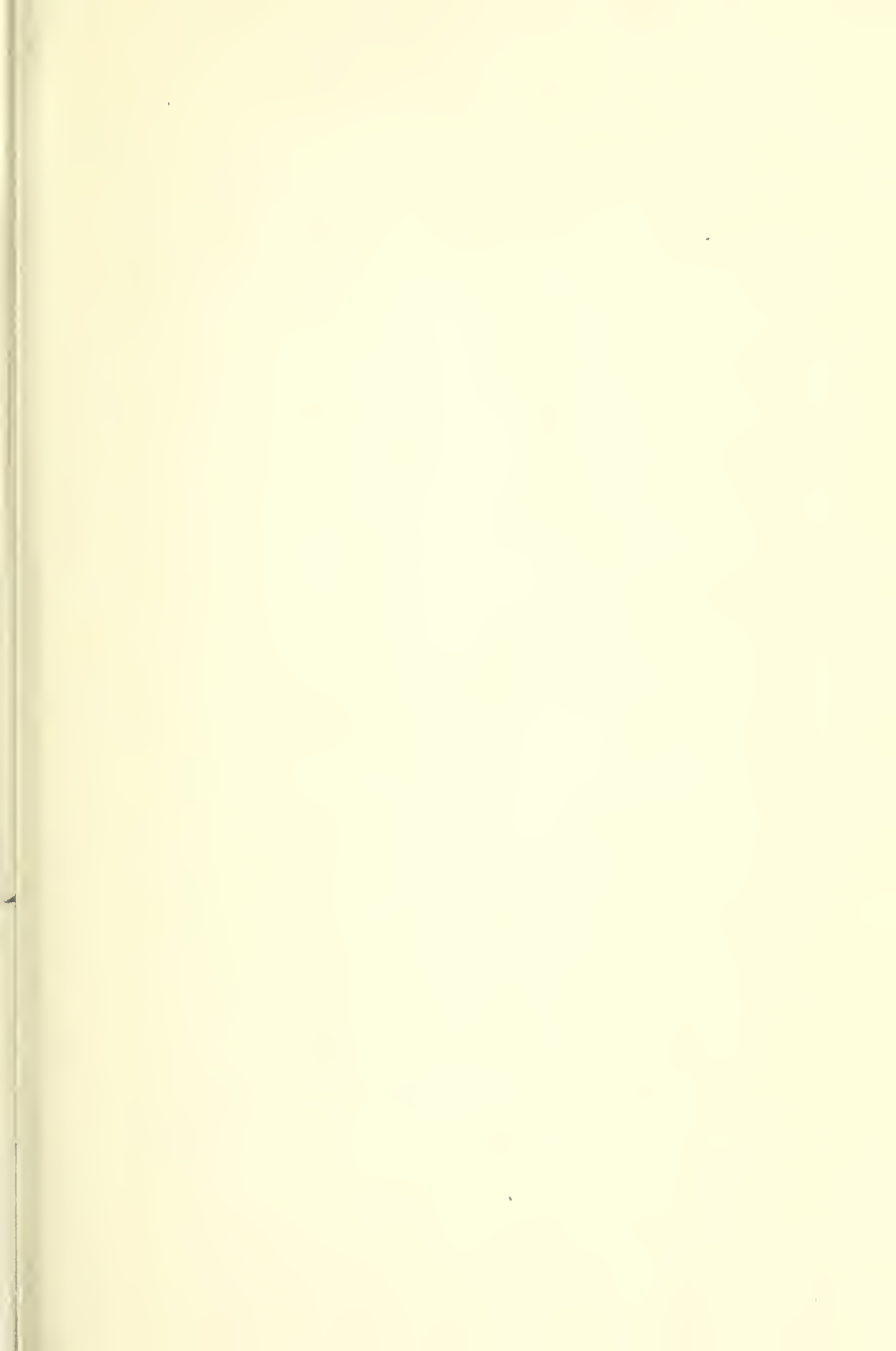
泉先生にしても、永井先生にしても、誰人の追隨をも許さない技巧を持つて居られる。假に今日吾々が其の技巧に驚かなくなつたとしても、それは兩作家の御蔭でさういふ技巧に馴れたからで、假に其の技巧をつまらないもの丶やうにいふのは、三面記事の特種を喜ぶ根性に等しい。殊に此の兩先生の如きは、ぴつたりと身についた技巧の持主で、人眞似でさまざまの技巧の流行を

追ふ亞流の徒と同一視す可きでは無い。

小說の形式は千態萬様になり、技巧の綾も愈々しげくなるであらうが、現在のところ、泉鏡花、永井荷風兩先生の如き、大きな技巧を完全に所有してゐる者は、殆ど無いと云ひ切つても差支ないであらう。殘念ながらなささうである。

一人が押切つた物言ひをすると、忽ち九官鳥の如く人眞似をする者の、續出する惡傾向の著しい時、粗惡なる批評の廉賣は、誰人も心して愼しむ可き事である。（大正十三年十二月二十一日）

「三田文學」大正十四年一月號

後記

「貝殼追放」所載第一篇の最初の句は、「大正五年秋十月」である。それはこの著者が歸朝した時である。歐米滯在中の經驗と考察に據つて祖國日本を新しい眼――筆者謂ふ所の大人の眼――を以て眺め得られるやうになつて、この筆者は、「貝殼追放」といふジャンルを創始したのだつた。

歸朝の翌年の冬、「はしがき」と「新聞記者を憎むの記」を書いて、「三田文學」大正七年新年號で發表した。それから昭和十五年二月に至るまで、いつでも感想・批評・隨筆等を「貝殼追放」の題下で書いてゐた。本全集では、この「はしがき」から、岩波書店刊行の「圖書」に載つた最後の批評文「覺書」に至るまでのものを收錄する。

これらの感想・批評・隨筆が、單行本として刊行されたものには、先づ大正九年九月國文堂から刊行された「貝殼追放」がある。次に東光閣から刊行された「第二貝殼追放」（大正十二年七月）と、「第三貝殼追放」（大正十四年五月）がある。大岡山書店版「第四貝殼追放」（昭和四年七月）と日本評論社版「第五貝殼追放」（昭和八年八月）がある。また改造社版の「親馬鹿の記」（昭和九年五月）も亦この中に數へるべきものである。題して

「親馬鹿の記」と云ふものの、收錄されてゐるのは殆ど總て既に「貝殼追放」の題下で、雜誌や新聞に發表されたものばかりである。昭和九年以後のものは、まだ單行本にはなつてゐない。

本全集の「貝殼追放（一）」に收錄したものは、主として大正七年一月から大正十四年一月に至る七年間に發表された感想・批評・隨筆であつて、「『心づくし』の序」・「『海上日記』の序」・「本年發表せる創作に就いて」「予が本年發表せる創作に就いて」・「『明窓集』の序」を除けば、いづれも既刊單行本から再錄したもので、即ち「第一」（「はしがき」より「妾の子」まで）・「第二」（「札の辻――櫻田門」より「撒水車」まで）・「第三」（「大人の眼と子供の眼」より「倫敦時代の郡虎彦君」まで）の全部と、「第四」の最初の二篇「人眞似」と「廉賣」を載せた。（但し「第一」の「兵隊ごつこ」だけは載せることができなかつた。）

「貝殼追放」以外にも筆者は、隨筆や批評文を書いてゐる。即ち國文堂版短篇集「亞米利加紀念帖」の後半の數篇と、大岡山書店版「月光集」中の「食卓の人々」である。これ等を「貝殼追放」に收めようとすれば、本全集は元則として年代順に編錄しようとしてゐるので、どうしても「新聞記者を憎むの記」の前に置くべきものが多くなる。さうすれば「はしがき」で示されてゐる筆者の心意氣とは異なる出發點を與へるやうになる。それにこれらの隨筆や批評文は歐米滯在中の名殘の雰圍氣を多分に有してゐるものばかりであるのみならず、短篇小說と一緒に並べられてゐるのであるから、英京を舞臺としてゐる長篇「倫敦の宿」と合せて、第六卷に收

め、「貝殼追放」はやはり歸朝後の感想・批評・隨筆を以て始めることにした。
制作の年代を追つて、本全集を十二卷に纏めようとすれば、當然短篇小說集はもとの姿を失つてしまふ。從つて「心づくし」・「海上日記」・「明窓集」の序は、短篇集の序文だつたので、もとの場所を失つてしまつた。既に筆者が、「『その春の頃』の序」を、「貝殼追放」に入れてゐるのに倣つて、茲に收錄したのである。
筆者は、小說でも感想文でも、その終りに擱筆の日附を記入してゐる。この「貝殼追放」に於ても、この日附までを本文として、その次に掲載の雜誌名や新聞名をあげて置いた。掲載誌の大部分は「三田文學」である。「三田文學」の編輯係だつた故南部修太郎、水木京太、平松幹夫、和木清三郎の諸君の手許に筆者の原稿の大部分が保存されてゐるので、この「貝殼追放」(一)の校合をするに當つても、既刊本とこれ等の原稿とを比較したのである。
筆者の文體には主として泉鏡花を通して影響を受けたものと思はれる硯友社張りの用語例が見られ、殊に小說ではその初め漢字にルビを附けて使用してゐた。この調子は次第に變つて來るが、「貝殼追放」でも、ルビを豫想した用語例はいつまでも殘續してゐるので、本全集に於ては所謂パラルビの體裁を採用した。そして用字用語假名遣に不統一が見られるのは、著者自身も認めてゐた。それを氣にしたり、辯解したりしてゐたのは、この「貝殼追放」(一)を讀んで見れば分る所である。本全集に於ても敢へて訂正し以て用字用語假名

遣に統一を與へようとはしなかつた。

改造文庫に「貝殼追放」上下兩卷があるが、他の單行本と共に校合の參考に供した。校合校正に際しては、水木京太、荻野忠治郎、平松幹夫、佐藤信彦の諸君の助力を得た。茲に附記して置く。（井汲淸治記）

昭和十五年十二月十日印刷
昭和十五年十二月十五日發行

水上瀧太郎全集　九卷

著者　阿部章藏
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行者　岩波茂雄
東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷者　白井赫太郎
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行所　岩波書店

精興社印刷　長澤製本